

鷺沢さんがオタク化したのは俺の所為じゃない。

バナハロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この物語は、オリ主とふみふみの日常を淡々と描くものです。過度な期待はしないでください。

## 目次

### プロローグ

本の似合う女性は大体美人。 | 1

純粋な人程、染まりやすい。 | 6

電話番号を知っててメールアドレスを知らない。 | 11

この時の俺は彼女の職を知らなかった。 | 19

事務所では(1) | 26

ラノベ仲間ができた。

ムツツリはエロを回避した後に後悔する。 | 33

電話相手の友達に通話を邪魔されると腹立つ。 | 42

風邪は人の心も理性も弱らせる。 | 52

事務所では(2) | 62

夏になってもオタクのすることは変わらない。

大人しい奴ほど怒ると怖い。 | 68

携帯以上の文明の利器は存在しない。 | 79

祭とは祭を楽しむのではなく、祭の雰囲気を楽しむものである。

90

戦線離脱。 | 104

奏さんがオタク化したのは私の所為じゃない。(1) | 114

同士の、意外と何処にでもいるもんだ。 | 121

ガノタだけオタク扱いされないのはおかしいと思う。 | 131

嘘が下手な奴は全て嘘で包もうとする。 | 146

二度あることは三度ある。 | 161

ふみふみの撮影日(1) | 176

自分の感情に気付くコツは、自分のプライドというプライドを全て

捨てる事だと思う。

盗み聞き程、人の本性を探るのに適した行為はない。

ふみふみの撮影日(2)

一着で良いから、女と遊ぶ時の服は買ってあげ。

トラウマは簡単に乗り越えられないからトラウマなのである。

232

ムードやシチュエーションよりも、まずは思い出から。

事務所では(3)

彼女が出来ました。

一番タチの悪いバカカップルは自分達がバカカップルと自覚してないバカカップルだ。

誰にでも得意不得意あるもんだ。

夏の終わりとは、秋の始まりでもある。

事務所では(4)

秋、それは文化祭でも体育祭でも修学旅行でもなく、ふみふみの誕生日の季節である。

オタクは知らない間に感染している。

趣味思考フェティシズムは人それぞれ。

スキル：フラグメーカー

ムツツリという枷を外すと性欲は暴れだす。

奏さん改め、アイドルがオタク化したのは私の所為じゃない(2)

338

プレゼント選びは慎重に。

パクリはどこまでいってもパクリ。

誕生日って何すりや良いのか分かんねえ。

190

203

210

220

242

252

260

270

282

289

296

305

319

329

346

355

363

アイドル達がオタク化したのは私の所為じゃない(3) | 372  
物事を隠す時は徹底的にやれ。半端ならやらない方が良い。

382

風邪引くふみふみ(1) | 390

風邪引くふみふみ(2) | 398

テンションが高いと、服装だけでなく中身も小悪魔。 | 406

異性の介護は大変。 | 415

速水奏相談室(1) | 426

寂しさと性別は関係ない。 | 434

出鼻を挫かれた旅行は嫌な思い出になる。 | 444

どんな曲でもダンスがあれば盛り上がる。 | 451

気を抜くと非常事態になる。 | 459

一難去つてまた一難。 | 468

ふみふみの修学旅行(1・2日目) | 481

おとなしい奴ほどリアットが鋭い。 | 493

どんな状況でも、事故なら裸を見てしまった方が悪くなる。

501

ロリコンは悪いことでも犯罪でもない、むしろ聖職者だ。 | 512

人を見た目で判断するな。女性も胸で判断するな。 | 520

旅の終わりは呆気ない。 | 528

ふみふみの修学旅行(3・4日目) | 534

インターバル回という奴です。 | 542

テンションが上がると隙ができる。 | 552

冬休みって割と2週間はある。

気遣いは大切だが、気を遣い過ぎるのも良くない。ちょうど良くや

ろう。

スキーの時は人の言う事は聞きましょう。

クリスマスの特異性はカップルになれば理解できる。

才能ある者ほど狂ってる。

事務所では(4)

どんなに気を付けていても、事前に蒔いた種はどうしようもない。

どんな時でも冷静さは失わず、自分を客観的に見る術を身につけよう。

最終章前の振り返り(1)

最終章前の振り返り(2)

成人してすぐに酒やタバコを乱用する奴は新しいおもちゃを買ってもらってはしゃぐ小学生と変わらない。

初詣行くと出てる出店って何なんだろうな。

潜入捜査。

我慢すればするほど、解放した時の爽快感は格別。

我慢しようと思った日に限って誘惑が来る。

どんなイベントでも前日はワクワクする。

私達の恋愛はこれからだ！(最終)

番外編が本編になる可能性も捨てきれない。

自撮り(1)

自撮り(2)

メンズ服(1)

メンズ服(2)

バレンタイン(1)

561

571

580

591

599

606

615

622

630

639

647

656

666

673

681

696

705

714

721

728

バレンタイン(2)

総選挙ふみふみに投票しました。

ご褒美

旅行の打ち合わせ。

旅行(1)

旅行(2)

旅行(3)

ふみふみ5位おめでとう！(1)

ふみふみ5位おめでとう！(2)

ダイエット(1)

ダイエット(2)

ダイエット(3)

ダイエット(4)

ダイエット(5)

誕生日(1)

誕生日(2)

ワンピース。

表情。

短パン。

ホラー。

ドライブ(1)

ドライブ(2)

ドライブ(3)

そろそろふみふみ一位で。

はい、勢いでやっちゃいましたー。

やるなら今しかないと思った。

嫁には勝てない。

蛙の子は蛙。



## プロローグ

### 本の似合う女性は大体美人。

学校からの帰り道。俺はいつものように、本を読みながら帰宅していた。本、といつても別に文学的な本ではなく、ライトノベルとかだ。俺はそういう本の方が読みやすく好きだし。まあ、ライトノベルにハマったのは高校に入ってからだから、あまりたくさん読んでるわけじゃないんだけどね。

ラノベとかを読みながら歩いてると、他人から見たらオタクのように見られてしまうかもしれないが、そもそも他人と話す機会なんて無いので問題ない。人は関わらなければどんな悪人でも無害なものだ。ちなみに、今読んでるのは「やはり俺の青春ラブコメはまちがっている」の5巻。もうすぐ読み終わるので、古本屋に向かっていた。ちなみに、一番好きなキャラは材木座義輝。こいつ、面白過ぎるだろ。読み終わり、本を鞆の中にしまった。最後の方のページのヒツキーとゆきのんがすれ違うページは少しドキツとしました。ちょうど、古本屋に着いたので、早速続きの六巻を探し始めた。

行き慣れたラノベコーナーに真っ直ぐ向かい、真っ青な背表紙を探した。えつと……「や」行……「や」行……。

「あ、あれ……っ？」

お、おかしいな……。「やはり」の頭文字が見えない。見間違いか？探し直そう。やはり俺の……やはり俺の……。ああ、あったあつた。えーつと、一巻、二巻、三巻、四巻、五巻、七巻ドラマCD付き……。

「あれ？」

おかしいな。六の文字が見えないぞ。見間違いか？もっかい探すか……。一巻、二巻、三巻、四巻、五巻、七巻ドラマCD付き……。いや、無いわけ無いやろ。だって、え？ドラマCD付属版があるのに六巻がないわけないでしょ。探し方に問題があるのか？

一巻、二巻、三巻、四巻、五巻、いま何時でえ？へえ、六時でさあ。

七巻ドラマCD付き、八巻、九巻、十巻……………。

時そばの数え方をしても、六巻は無かった。ていうか、時そばはダメだろ。飛ばしてんじゃん。

「……………マジ、かよ」

え、どうしよう。古本屋は他の本屋と違って必ず入荷するわけじゃない。誰かが売るまで俺は待てるのか？無理だな。

と、なると新品で買うしかないわけだが……………ま、たまには新品もいいか。中古と比べてかなり高くなるけど、背に腹はかえられぬ。

俺は古本屋を出て、本屋に向かった。どうせ新品で買うなら、保存状態とかを気にしたい。よって、駅の中の本屋はアウト。そうなる、うちの近くの本屋しかなくなるわけだが、あまりあそこ入ったことないんだよなあ。まあ良いか。

若干、早歩き気味になりながらも本屋に向かい、店の扉を開けた。未だに自動ドアじゃない辺り、年季を感じる。

「……………」

店に入っても「いらつしやいませ」の声もない。まあ、本屋なんてそんなもんかもしれないが、少し気になった。ていうか、客一人もないし。店の中を見回って、ラノベコーナーを探す。だが、何処を探し回っても文学書みたいな本しか見当たらなかった。……………おい、ここいつの時代の本屋だよ。ラノベどころか雑誌も見当たらねえぞ。

……………一応、店員に聞いてみるか。つーか、店員いるのか？や、流石にレジにはいるか。

もはや、迷路と言っても過言ではない本棚を抜け、レジの前に移動すると、女性がレジの前に座って本を読んでいた。

かなり美人な女性。なんというか、「美人」を絵に描いたようなお嬢様のような女性だった。……………けど、お前なんで本読んでんの？仕事しろよ。

「……………あの」

声を掛けると、その女性はこっちをハツと見た。慌てて本に葉を挟んでその辺に置くと、こっちに向き直りながら挨拶した。

「あつ、い、いらつしやいませ」

「あ、す、すみません」

なんで謝ってんの俺。

「え、えと……何か？」

「あ、いや……ライトノベルってありますか？」

「……………らいとのべる？」

おい、マジかよこの人。今、発音が完全にお婆ちゃん発音だったぞ。若く見えるのに40過ぎてんのか？……………いや、それはないな。いいところ、17とか18くらいだろう。

「あーいや……なんていうかー」

参ったな。実の所、俺も「ライトノベルって何？」と質問されて答えられる気がしない。

考えるのも説明するのも面倒だったし、何より続きをさっさと読みたいので、鞆からさっきの五巻を取り出した。

「あ、あの、このシリーズありますか？」

「……………あ、も、申し訳ありません。……………当店でのお取り扱いはしていません」

即答かよ。せめて探すフリとかしろよ。

「……………は、はあ。分かりました」

しかし、そうなると面倒だぞ。駅の本屋は嫌だし、それ以外はショッピングモールとかになるけど、あの辺はクラスメイトが多いから行きたくないんだよなあ。……………ふむ、どうしようか。いっそ、ネットショッピングでも……………。

考えてると、女性の方が声を掛けてくれた。

「……………あの、よろしければ、お取り寄せも出来ます、ですけど」

「取り寄せ？」

「……………はい。……………その場合は数日かかってしまいますが……………」

……………どうしようか。まあ、取り寄せてもらえるということは、少なくとも保存状態は良いはずだし、他の本屋で買うよりはマシだ。頼んでみるか。

「あ、じゃあお願いします」

毎回思うんだけど、この「あ、」から始めちゃうのって何なんなの？  
冠詞なの？

女性の方は紙とペンを取り出すと、俺の顔を見た。

「……それでは、商品名を教えてくださいいただけますか？」

「あ、はい」

また、言っちゃったよ。

「やはり俺の青春ラブコメはまちがっている」

「………は、はあ。………そう、なんですか」

「え？はい。その六巻です」

「………あ、言葉足らずで申し訳ありません。………その、巻数だけでなく、本のタイトルも教えていただけませんか？」

「や、ですから『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている』」

「………？………？」

アレ、なんか通じてない。もしかして、日本人じゃないのかな……。

「………あ、あの、ですから本のタイトルを……」

………ああ、もしかして「やはり俺の青春ラブコメはまちがっている」をタイトルとして認識出来てないのか？そりやそうか、長文タイトルなんてラノベくらいだもんね（多分）。

「す、すみません。そういうタイトルなんです」

「………へ？」

『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている』というタイトルなんです。紛らわしくてすみません……」

「………あ、ああ。そういう事、でしたか。すみません、聞いたことない本だったので………！」

「い、いえ。その六巻です」

すごく恥ずかしかったのか、顔を赤くして縮こまりながらタイトルをメモし始めた。

「………あ、あの、お客様のお電話番号は」

「あー、080—X—XXXX—XXXXです」

「………080、と×××。それと、お名前を教えてくださいてもよろしいですか？」

「鷹宮千秋です」

「…………あの、苗字だけで大丈夫ですので…………」

「あつ、す、すみません！」

「…………いい、いえ、こちらこそ説明が足りなくてすみません…………」

タカミヤ、とカタカナでメモる店員さん。なんか今、痛烈に恥ずかしい思いをしてしまった…………。

メモを終えて、店員さんはメモを注文票に書き写すと、その控えを破って俺に渡した。

「…………では、届いたらお電話を差し上げますので、その日以降にまたお越し下さい」

「分かりました」

「では、お待ちしておりますね」

ニコリと微笑まれ、俺は思わずドキツとしてしまった。元々、美人なだけあって、この店員さんの笑顔は綺麗だ。

「じゃ、その…………失礼します」

俺は何故か礼儀正しく挨拶をして、レジから離れた。うん、良い店を知ったな。まさか、あんな綺麗な人が店員さんだったなんて。いや、バイトの可能性もあるけど、もう少し早く来ておけば良かった。

そんな事を思いながら店を出て、受け取った控えを見下ろした。伝票には「担当者：鷺沢文香」と書かれていた。

……………そっか、鷺沢さんって言うのか。まあ、名前なんて覚えたところで、進展することは無いだろうけど。さて、電話が来るまでの間は「ソードアート・オンライン」でも読んでるか。

そう決めて、俺は鞆からラノベを取り出した。

純粹な人程、染まりやすい。

うちの学校はスポーツ校だ。サッカー部、野球部、バスケット部、ソフト部、どの部活も過去に二回はインターハイやら甲子園やらに出ている。

従って、俺みたいにオタクみたいな奴に友達は出来ない。みんながみんな、イケイケリアリアなりア充だ。あ、別に俺はリア充爆発しろ、なんて言わないよ？ただ、思うだけで。

まあ、友達が出来ない事に不満はない。ラノベにのめり込んだ俺が悪いから。ただ、一つだけ悩みがあるとすれば、せつかくラノベや漫画やアニメが趣味になったのに、語り合う仲間がいない。やっぱり好きなものは誰か共通の仲間と話をしたいものだ。

しかし、これは仕方ないと思う。ラノベにハマったのは高校からで、高校選びは中学の時にするものだ。初めから詰んでいる。その手の仲間は大学で見つければ良さ。それまでは精々、自分の興味出たラノベを読んでよう。

そんな事を考えながら、ぼーっと授業を聞いていた。現在は現代文の授業。正直に言って、この科目は勉強する意味が分からない。だって答えなんて全部、文に載ってるじゃない。勉強しなくても80点は硬い。

そんなわけで、俺はライトノベルを読みふける。今はソードアーク・オンラインの二巻。出会ったその日に添い寝とか、キリトさんホントリア充な、死ぬば良いのに。まあ、一巻でゲームクリアしちゃってるから死なないけど。

「ふわあ……………」

やべっ、欠伸出た。結構眠たいんだ俺。もういいや、寝ちやおう。机の上に伏せて、目を閉じた直後だった。

ピリリリリリリッと大音量が流れた。俺のスマホからだ。

「……………」

スマホを見下ろすと、知らない番号からの電話。……………ああ、鷺沢さんの本屋からかな……………。にしても、こんな時間に電話してくんな

よ……昼間の2時過ぎだぞ……。

「鷹宮、携帯を出せ」

ほら、先生に没収された。すでに目立ってるけど、これ以上目立つのはごめんなので、素直に渡した。さて、放課後は生徒指導のお時間だ。とにかく謝ろう。

××  
××  
放課後になり「電源を切るのを忘れてしまいました。以後、気をつ  
けます。すみません」とテンプレとも言える謝罪文を述べてスマホを  
返してもらった。

学校を出て、とりあえず本屋さんに連絡を取る事にした。履歴から  
電話番号を探し、発信……しようと思っただけど、手が止まった。なん  
で携帯の電話番号なんだ……？普通、店の電話から掛けるだろ。こ  
れ、もしかしてアレなんじゃないの？なんか、こう、ヤバイ奴。留守  
電も入ってないみたいだし。

……一応、後で本屋に行ってみるか。違ったらすごく恥ずかしい  
けど、連絡をくれてたんだとしたら失礼だもんな。

もし、本が届いてたら、これはもうピョンピョンだわ。六巻はどう  
なってんだろうなあ。ヒッキーとゆきのんの関係は修復されるのだ  
ろうか。いや、別に喧嘩してたわけじゃないけど。あと表紙、誰だろ。  
この作品の絵師、ガハマさんが好きだからなあ。一回でいいから、  
材木座を表紙にして欲しいぜ。

胸を躍らせながら本屋に到着した。……改めて見るとボロい本  
屋だなー。よく見ると、三階より上はマンションになってるし。  
まあ、俺はジブリ作品の家みたく、年季の入った建物は嫌いじゃない  
けどね。住むのはゴメンだけど。

店の中に入り、真っ直ぐとレジに向かった。鷺沢さんは相変わらず  
サボって本を読んでいる。

「……あの、どうも」

「……あ、お、一昨日の」

驚き過ぎでしょ。どんだけ読書に没頭してんの？

つと、そんなことより用を済ませないと。

「もしかして、なんですけど……電話くれました?」

「……あつ、は、はい。……ご注文の本が、届きましたので」

「やつぱり。すみません、授業中だったもので」

「……あつ、そ、そうですね!あの時間は、普通授業中ですよね!……す、すみません」

「いえ、全然。俺も、そういうの全然言わなかった、ですし」  
「……………」

うおお、かなり気にしてんな。そんなシヨボンとしなくても良いから。俺あんま気にしてないし。ていうか、いいから早く本をくれ。

「あ、あの……本を」

「……あ、ああ。そ、そうですね!すみません……!」

「や、そんな謝らなくても……。なんか、すみません」

「……………いい、いえ!別にそんな……………!」

慌てて俺ガイルの本を取り出す鷺沢さん。

ちよつと落ち着けよ。慌ててる姿可愛いだろうが。もしかして、注文とか初めてだったのか?それなら、少し申し訳ないが。いやでも、俺は客なんだし向こうは働いてるわけだし、申し訳ないとか思わなくて良いのか?

もういいや、早急に読むことは諦めよう。店員さんのペースに任せることにした。

と、言ってもここから先は向こうは慣れたものだろう。本をバーコードで読み取り、袋に入れて金払ってもらっただけだから。

会計を済ませ、さっさと帰ろうとすると「あの……」と鷺沢さんが声をかけて来た。

「はい?」

「……その、本。面白い、んですか?」

「えっ?」

鷺沢さんが指差す先には、俺の手元の俺ガイルがあった。

「ええ、まあ面白いですけど」

「……………」

な、なんだ?「そんなもんで楽しめるなんて、流石キモヲタね。ク



スクス」的な事か？何それ死にたい。

「……………どんな、内容なんですか……………」

「えー……………友達のいない目と性根の腐った男子生徒が人格矯正のために人助けの部活に入れられる話、ですかね」

まあ、正確には人助けじゃないらしいが。鷺沢さんは顎に手を当てて少し考え込んだ後、「ふむ……………」と息を漏らしてから続けて質問して来た。

「……………何巻まで、出てるんですか……………」

「えー……………11、かな？多分。あと6. 5、7. 5、10. 5巻があったと思いますよ」

「……………0. 5?」

「あー……………まあ、番外編みたいなものですよ」

「……………なるほど」

また考え込む鷺沢さん。考え事をしてる表情も、それはもう美しい。もしかしたら、商品として使えるかどうか考えてるのかもしれない。けどね、売上げを伸ばしたいなら、レジの後ろに座ってる時くらい本読むのやめようね。

……………そして、俺はどうすれば良いんだろう。もう帰っても良いかなあ。でも、少し話をした後なのに、黙って立ち去るのは何となく悪い気もする。

とりあえず、しばらくその場で待機していると、鷺沢さんがハツとした感じで俺に気付いた。

「……………ハツ、も、申し訳ありませんっ。私ったら、つい考え込んでしまっ……………」

「あ、いえ。もう大丈夫なんですか?」

「……………は、はい。またのご利用をお待ちしています」

「はあ。どうも」

顔を赤くして頭を下げる鷺沢さんに、軽く会釈して店を出た。

基本的には良い店だったな。オーラが頭良さそうな本屋だし、うちの学校の連中なんか絶対来ない。まあ、俺も基本的にはラノベしか読まないから、古本屋で売り切れの時以外は来なさそうだけど。

……それに、その、何？店員さん美人だったし。また来るか。

この時、俺は知らなかった。一昨日から本が届くまでの三日間の俺のこの行動が、鷺沢さんの人生を大きく変えてしまっているなんて。

電話番号を知っててメールアドレスを知らない。

アレから三日程経過した。俺ガイルを6、7、8巻と番外編の6・5と7・5も読み終え、今日は俺ガイルの9巻を買うために古本屋に来た。ライトノベルコーナーに向かうと、鷺沢さんがラノベコーナーで本を眺めていた。

「ツッ!?」

え?なんで?なんでいんの?ビックリして思わず隠れちゃったんだけど。もう一度、ラノベコーナーを覗いてみると、難しい顔で電○文庫の辺りを眺めていた。すると、俺の横を通って店員さんが数冊の本を持って、鷺沢さんの横に座り、本棚に入れ始めた。

それを見て、鷺沢さんは「あつ、あの……」と超小声で声を掛けようとしたが、店員さんには気付いてもらえず、黙り込んでしまう。

「……………」

…………ああああ!!?見てられないよう!!?ていうか何?一人で買い物も出来ないのかよ!!?

本当は、こういう恩着せがましい事は嫌だし、そもそも友達というわけでもないし嫌なんだけど、あまりにも可哀想に見えたので、助ける事にした。

「…………わつ、あによ、あのつ……鷺沢さん?」

「っ?……………」

声を掛けると、こつちを見る鷺沢さん。すると、すごい嬉しそうな顔を浮かべた。どんだけ安心してんの。そして俺、どんだけ噛んでんの。

「…………た、鷹宮さん……………」

「どうも。何か探してるんですか?」

「……は、はい。実は、この前鷹宮さんが注文した『やはり俺の聖獣ラブコメはまちがっている』というのを探しに来まして……」

うん、それは間違ってるわ。聖なる獣とどうやってラブコメすんの。そこから間違ってるからな。あ、でも星晶獣とならラブコメできそう。

………つーかこの人、もしかしてラノベに興味持ったのか？意外と影響されやすい人なのか？

「……………あれ？というか、どうして私の名前を…………？」

「え？あ、あー……………注文書の控えに名前が書いてあったんで」

「……………そ、そうですか……………良かった」

……………何が良かったんだらうか。もしかして、ストーリーカードと思われたの？何それ死にたい。

「……………それより、『俺ガイル』でしたっけ？」

「……………う？居ますけど？」

「違くて。『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている』略して俺ガイルです」

「……………あつ、な、なるほど。そうです」

「それなら、ここにはありませんよ。俺が一週間くらい前に買ったんで」

「……………そ、そうだったんですか」

「まあ、他に誰か売ってる可能性もありますけど……………。一応、探してみますか」

「……………一緒に、探してくれるんですか？」

「俺も同じもの買いに来ましたから」

「……………でしたら、お譲りします、けど」

「や、俺は9巻なんで」

「……………あ、そ、そうですよね。シリーズ物でしたもんね」

……………この人との会話は疲れる。や、別に悪いわけじゃないんだけどね。一々、顔を赤くするの可愛いし。

「俺ガイルは『ガ○ガ文庫』ですから、背表紙の青いこっちにあると思いますよ」

「……………ガ……………？」

「そういう文庫なんです。今見てた所は電○文庫なんで」

「……………あ、な、なるほど」

なんなのこの人。お婆ちゃんなの？

鷺沢さんをガ○ガ文庫の前に連れて来ると、俺ガイルを探し始め

た。だが、1巻は見当たらない。やっぱ、一週間じゃ品揃えは変わるんか。

「ない、ですね……」

「……そうですか……」

シヨボンと肩を落とす鷺沢さん。そんな落ち込むほど読みたかったのか。あれ、何この罪悪感。俺が買ったから？俺が悪いのこれ？

なんか変な罪悪感が芽生えて来たので、俺は平塚先生が表紙の9巻を手に取りながら言った。

「……あの、もし良かったら、うちにある奴貸しますよ」

「……へっ?」

「どうせ、俺は9巻買ってこっち読みますし」

「……良いんですか?」

「はい」

「……」

俯いて少し考える鷺沢さん。……ちよつと恩着せがましかったか?というか、よくよく考えたらすごい高度なストーリーカー行為みたいだな。俺がラノベを買い占め、俺がそのラノベに興味を持たせて、俺が本を貸すとか。……っていうか、そう思われてもおかしくないんじゃないやねえの?ヤバイ、弁明しておかないと訴えられる。

「……あ、あのっ」

「……なんですか?」

「アレですからね。決して鷺沢さんの気を引こうと思ってやってるわけじゃありませんから。偶々ですからねマジで」

「……」

キョトン顔で首を捻られてしまった。うん、言わない方が良かったパターンだな。

やがて、俺の言った意味を理解したのか、鷺沢さんはクスクスと微笑みながら言った。

「……分かってますよ。……そんな事、疑ってませんから……安心して下さい」

「……」

なんか猛烈に恥ずかしい思いしてしまった……。何を言ってるんだよ俺は。もういいや、さっさと買って来ちまおう。

「じゃ、買って来ますね」

「……………はい」

×レジに本を持っていった。

×

×一度、俺は家に戻って本を取りに行った。しかし、まあなんつーのかな、なんでこんな事になったんだろうな。同じ学校でもなく、同じ学年かも分からない本屋の女性店員さんにラノベを貸す事になっちゃった。や、マジなんでこうなった？

まあ、言ってしまった以上は仕方ないけど。とりあえず「全巻持ってきてください」と言われてしまったので、1〜8巻を紙袋に入れた。移動は歩くのは嫌なので、原チャリで本屋まで向かった。

店の前に原チャリを止めてご入店。相変わらず自動ドアじゃない扉を開けて、レジに向かった。

「鷺沢さん、俺ガイル持って来ま……………あれ、いない」

……………ていうか、本屋にいるわけないじゃん。あの時間に古本屋にいた時点で勤務時間外だ。ていうか、暗黙の了解みたくなくてたけど、何処に集合するか、全く決めてなかった。

いや待て。お互いに暗黙の了解だとしたら、鷺沢さんは何処にいる？

「まさか、古本屋にいるんじゃない……………」

原チャリに跨って、急いで古本屋に向かった。店の外と中を一周したが、見当たらない。

何だよ、もうどこにいいのか皆目見当もつかねーよ。もう帰っちゃおうかなーなんて考えた時、俺はスマホを取り出した。そういえば、この前電話がかかって来た時の向こうの番号は、080から始まる携帯電話の番号だったはずだ。

スマホの着信履歴の番号をタップし、電話を掛けた。1コール、2コール、3コール……………出ねえ。おい、これ俺遊ばれただけだったんじゃないねえの？もしくは、「貸そうか？」って聞かれちゃったから、向こ

うも断りづらくて、つい「お願いします」って言っちゃっただけで……。

うん、その可能性はあるな。ていうか、それしかないまである。留守番電話サービスに繋がり、もはや確信した。通話を切つて、スマホをポケットにしまおうとした時、ピリリリリッつと鳴り響いた。

「ッ！ も、もしもし？」

『……私です。驚沢です』

「ああ、どうも」

『……すみません、シャワーを浴びておきたくて……。……電話が聞こえて、慌てて体を拭いて出たんですけど……。』

「………てことは、今は裸ですか？」

『……そうですけど……。う……。…つて、いきなり何を聞くんですか？！』

ハッ、しまった。つい口に出してしまった。と、いうことは、俺は今裸の女の人と話をしているわけか。あのやわらか戦車みたいな、たわなおっぱいを晒したまま俺と会話を……。…。

つて、イカンイカンイカン！これでは男子高校生と同じだ！理性よ仕事しろ！

「すみません。いや、風邪を引かれると困るので、服を着てからでつて言おうとして……。…」

我ながら上手い言い訳をしたもんだ。もはや巧みな技術なまである。

『………あ、そ、そういう事でしたか。…すみません、大きな声を出してしまって……。でも、少しなら大丈夫ですから……。』

「いえ、俺もセクハラまがいなこと聞いてしまいましたから。それより、シャワーつて事は家ですか？」

「さつさと話題を打ち切ることにより、「あまり意識してませんよっ。」とアピールしておいた。

『………はい。もしかして、もう本屋に着いちやってます……。う？』

「あー、いや本……。…」

……本屋まで来たけどいかなかったから古本屋に来ました、なんて

言ったら、また申し訳なさそうに謝られるだろうなあ……。

「……を持ってこれから家出るとこなんですけど、そういうえは待ち合わせしてなかったなあって」

『……あ、そ、そうでしたね。すみません』

結局謝られました☆

「そんな謝らなくていいですよ。それより、何処に持って行けば良いですか?」

『……では、私の家までお願いできますか……?』

「家?どこにあるか知りませんが……」

『……あ、本屋の上です』

「……はっ?」

『……本屋さんの上のマンションです。……裏の建物に自動ドアがある……着いたらまた連絡下さい……』

しかも部屋に入って良いのか!??貞操観念はガバガバかよ?

「わ、分かりました」

分かりました、じゃねえよ。そこはツツコめよ俺。

『……では、また後で』

そのまま通話は途切れた。これ、どうすりゃ良いんだろう。まあ、とにかく行くしかないか。

×

×マンションの前に到着し、原チャリを止めると自動ドアを開けても

らった。階段で4階まで上がり、鷺沢と書かれた部屋のインターホンを押した。

『……はい』

「あ、俺です。どうも」

すると、カチャツと鍵の空いた音がした。ギイツと控えめに扉が開かれ、隙間から、鷺沢さんが顔を出した。

よし、ラノベだけ渡してさっさと帰ろう。流星に部屋の中に上がるのはマズイだろ。

「これ、どうぞ」

「……ありがとうございます」



「では、俺はこれで」

「……………どうぞ、上がって下さい」

「……………」

この人、本当に大丈夫か？もしくは、清楚系ビッチなのか？いや、誘われたら断れない人だから上がるけど。

「……………お、お邪魔します」

玄関をくぐり、靴を揃えた。女の子の部屋に入るのは初めてだ。嫌に緊張するな……………。

深呼吸してから、鷺沢さんの後に続いて部屋の奥に進む。何というか、想像通り部屋は綺麗に片付いていて、本棚が多かった。本棚が多いということは、当然本も多いわけで。本屋も開けそうなレベルだった。

「……………」

「……………今、お茶淹れますね」

「あ、いやそんな」

断ろうとしたが、断れなかった。だって言葉が浮かばないんだもん。いらないです、とは言えないでしょ。

台所に行って、鷺沢さんはお茶を淹れ始めてしまった。どうしよう、気まずい……………。

「……………お待たせしました」

「あ、どうも」

お茶を淹れるって冷やした麦茶淹れただけかよ……………。急須で緑茶はアニメや漫画の見過ぎということか。

お茶の入ったコップをちやぶ台の上に置き、俺と向かい合うように座った。お茶を一口飲んでから、改めてと言った感じで紙袋を渡した。

「では、これ」

「……………ありがとうございます」

紙袋の中を見ると、鷺沢さんの表情は曇った。

「……………あの、これ……………何か違いますか？」

「何か？」

「……はい。なんか、絵が……違う、気が……」

あー……1巻と6巻じゃ、描いた人は同じなのに、なんか全然違うもんな。気持ちは分かるよ。

「大丈夫ですよ。これが1巻ですから」

「……あ、ほんとだ。タイトルが、同じですね……」

ホツとしながら、チラチラとラノベの方を見る鷺沢さん。どうやら、早く読みたいようだ。なら、なんで俺をここに呼んだし。自分の家まで来させたなら何か招いたりしないと悪いとか思ったのかな。気にしなくても良いのに。

ここは、俺が空気を読んだ方が良いか。俺はお茶を飲み干して立ち上がった。

「じゃ、俺帰りますね」

「……も、もうですか?」

「はい。明日も学校なんで。読み終わったら連絡下さい。店まで取りに行きますから」

「……わ、分かりました」

軽く伸びをしながら、玄関に向かった。鷺沢さんは俺を見送るために、後ろをついて来た。

靴を履き、俺は扉を開けて鷺沢さんに会釈した。

「じゃ、お邪魔しました。あ、お茶ご馳走様です」

「……い、いえ。それでは、また……」

「ういっす」

さて、帰るか。

………これ、俺本当に何しに来たんだろ。お茶飲んだだけなんだが。まあ良いか。

この時の俺は彼女の職を知らなかった。

翌日、5時間目の数学の授業中。俺は俺ガイルの9巻を読み終えた。いやー、良かった良かった。三人の仲が戻って。これは10巻から新展開かな？今日も古本屋に通いそうだ。

本を机の中に置いて、大きく欠伸をした。しかし、なんつーかアレだ。ここ最近は何んなことがあったなあ。まさか、本屋の店員さんに本を貸した上、部屋に上がらせてもらえるとは。俺の人生でトツプクラスに濃い日々だった。

まあ、俺ガイルを返却してもらえば、それも終わるだろうな。この世はライトノベルとは違う。女性と話す機会があっても、そこから進展する事はない。その辺を勘違いすると、すごく恥ずかしい思いをすることになる。あくまで他人だ。俺と鷺沢さんは。でも、鷺沢さん可愛かったな。

いや、でも俺は彼女なんて出来たことないし、欲しいなんて思ったこともない。そんな奴が少し縁があった程度の女の子が気に入ったからって手を出した所で付き合えるわけがない。…………でも、鷺沢さん可愛かったな。

いやいやいや、でも仮に付き合えたとして、俺に彼氏としての立ち回りができるのか？いや、できるわけがない。だって知らないもの。ありのままの自分を見せる？それは振られるって言うってんのと同じだろ。だって、俺の人間性が良かったら、今頃モテモテだぜ？昔はよくジャニーズ受けろって言われてたほどイケメンだし。…………でも、鷺沢さん可愛かったな。

「ッー」

俺は机にオデコを当てた。ああもう認めるわ。鷺沢さんは可愛いです。でもね、それが付き合う付き合わないとは別だろ。好きか？と聞かれたらそういうわけでもないし。ていうか、さっきから何を悩んでんだよ俺は。もう良いだろ。考えるな。FGOでもやって忘れよう。

ポケットからスマホを取り出し、金髪の女の子のアイコンを押そう

とした直後だった。

ピリリリリリリツとスマホが鳴り響いた。鷺沢文香の文字がある。

「……………」

この人はこの前散々謝って来ただろ…………。そして俺も。学習しねえなあ…………。

先生が真顔でこっちに向かって歩いて来た。その歩幅が、まるで処刑までの時間を刻む秒針のようだった。そして、その最後の一步を先生は踏み出した。俺に向けて手を差し出した。俺はそれに合わせて、両手を握り締めて手首を内側に合わせ、差し出した。

「……………いや、逮捕じゃなくて。携帯を差し出しなさい」

「はい。すみませんでした」

俺は素直にスマホを差し出した。周りから「またかよ…………」みたいな声が聞こえる。学習しなかった俺が悪いから、何も言い返せない。

さて、放課後はまた生活指導だ。

×

× 説教が終わり、俺は帰り道に鷺沢さんに電話をかけた。

「もしもし?」

「……………は、はい。あの…………申し訳ありません。今、バイト中でして…………」

お前は授業中に電話かけて来たただけどな、とは言わないでおう。

「じゃあ、直接行くんで」

『……………分かりました。では、失礼します』

電話は切れた。まあ、とりあえず、行くか。にしても、鷺沢さんは何の用だったんだ?まさか、もう読み終わったとか、ないよね?なんか嫌な予感がしながらも、俺は本屋に向かった。

到着し、レジに歩いた先での鷺沢さんの第一声。

「……………す、すっごく面白かったです!続き、続きはないんですか?」

お、おう……………。

「……………あの、まさか、全部…………?」

「……はい。読み終わりましたけど……?」

マジかよこの人。読書好きにもほどがあんだろ。正直引くわ。

……でも、そうか。面白かったのか……。

「……ちなみに、どの辺が?」

「……色々ありますけど……。比企谷さんが平塚さんからの電話を無視しようとして妹に連行された所ですね」

「わかる!」

「……ですよね!」

「あとあれ、戸塚と出掛けていつの間にか材木座が増えてたところ」

「……あ、それも分かります!急に現れましたよね!挿絵では映画館の時点で後ろにいましたけど……」

「まあ、感想言い合ってましたからね」

「……ちなみに、好きなキャラは誰ですか?」

「材木座」

「……あー、そういうキャラが好きなんですね。私はですね……」

いつになくハキハキ喋るな……。どんだけ面白かったんだよ。ガハマさんが気に入ったようで、目の前ですごく語っている。うん、分かる。すごく気持ちわかる。語りたいたいよなあ……。

「……あの、でも少しなんですけど」

「?」

「……たまに、比企谷さんの語りの所で分からない言葉がありました……」

「と、言いますと?」

「……例えばですね……」

鷺沢さんは1巻を紙袋から出して、ページをパラパラと捲る。そして、一箇所を指さした。

「……ここです」

「……あー、俺ガイルはたまに他の作品とかの言葉も使ったりするんですよ」

「……他?芥川龍之介とか、ですか?」

「いやそういうんじゃないよ。他のライトノベルですよ」

「……………他の、ライトノベル？」

……………あ、余計なこと言ったかも。

「……………他にもこういう面白い作品があるんですか？」

「あ、あります、けど……………」

「…読みたいです！」

レジの置いてある机に手を置いて、グイツと身を乗り出してくる鷺沢さん。ちよっ、近い近い。でもいい匂い。

「お、落ち着いてください……………。まずは俺ガイルを読まない……………」

「……………あ、そ、そうですね……………11巻まで、でしたっけ？」

「あ、はい。俺もさつき9巻読み終わったんで、これから10巻買いに行くところですけど……………」

「……………」

そんな強請るような目で見なくても分かっているよ。俺は鞆から9巻を取り出した。

「……………読まま」

「…ありがとうございます！！？」

最後まで言わせる。手渡すと、鼻歌を歌いながらご機嫌に読み始めた。俺はとりあえず1〜8巻の入った紙袋を手にとった。

……………えーっと、どうしよう。帰って良いのかな？

「……………じゃ、俺はこれで」

「……………またのご利用をお待ちしております」

何も買っていないどころか本を貸しに来ただけだな。もう読書に集中しちやつてるよ……………。さて、とりあえず10巻買いに行かないと。

××

それから二日後。俺も鷺沢さんも俺ガイルを全巻読み終え、本屋で感想を語り合った。もう、鷺沢さんはハマるにハマっちゃって、今度全巻まとめ買いするそうです。

「……………すごい、ですね。俺ガイルって」

鷺沢さんがパラパラと俺ガイルの10・5巻を捲りながらつぶやいた。

「……私、こんな種類の本があるって、知りませんでした……」

うん、知ってた。ラノベという単語も知らないし、この本屋の品揃え見れば、誰だってそうなんだろうと思うわ。

「ちなみに、俺ガイルはアニメ化もされてますからね。ヒッキーやゆきのんがヌルヌルと動きますよ」

「……アニメ、ですか……。レンタルビデオ屋さんにありますか……？」

「あると思いますよ。人気でしたし」

「……………」

見る気か？ いや、別にそれは個人の自由だが。

「まあ、俺ガイル以外にも面白い作品はたくさんありますよ。こういう青春ラブコメ以外にも、異能バトル系とか異世界転生ものとか」

「……………伊能バトル……………？ 伊能忠敬、ですか……………？」

「いや、異なる能で異能です。簡単に言うと、能力を持った人達がそれを使って戦ったりするんです」

「……………すみません。イマイチ、ピンと来ません」

「とある魔術の禁書目録とか勧めたいんですけど、あれ多いんですよ……………。全部で30巻くらいありますから」

もしかしたら、もっとあんなのかもな。まあ、10冊分を1日で読み切るこの人なら4日くらいで終わるだろうけど。

「……………分かりました。とある魔術のインデックスですね」

「え？ よ、読むんですか？」

「……………はい。そのくらいなら3日で読んじゃいます」

想像以上だこれ。まあ、本人が言うなら止めないけど。

「じゃあ、うちにあるの明日持って来ますね」

「……………あ、明日は……………」

「？ 何か予定あるんですか？」

「……………いいえ、その……………明日でしたら、夜の9:30頃に来ていただいた方が……………」

なんだろう、何か授業でもあるのかな。俺の見立てだと高校生くらいのこの人が……………？ あれ？ そういや、この前も今日も俺が授業中の時に電話かけて来たよな……………。高校の時間割りなんて大した時間差

ないだろうに。

「さ、鷺沢さんつてもしかして……………」

「……………」

「大学生ですか？」

「……………はい？」

「いえ、なんか電話かけて来た時間帯とか考えると、大学生しか思いつかなくて……………」

「……………そう、ですけど」

歳上だったのか……………」

「すみません、高校生だとばかり思っていました」

「……………い、いえ……………」

あれ、なんか元気なくなつたな……………。子供っぽく見られたと思われたのかな。これはフォローしとかないと。

「べ、別に子供っぽく見えたって意味じゃないですからねっ？女子高生なんて、ていうか男子高校生もですけど、キャーキャー騒いでる猿と変わりませんから。鷺沢さんは、こう……………そう、若く見えるって意味で……………」

「……………」

キョトンと可愛らしく首を捻る鷺沢さん。俺は何を言ってるんだ……………口説いてんのかよ。

俺の意図を理解したから知らないが、何かを思った鷺沢さんは突然、頬を赤く染めた。

「……………そ、そんな……………！と、年相応です……………!!？」

あ、褒められたと思つて普通に照れただけか。かわいい。まあ、褒めたわけじゃねえんだけどな。結果的に褒めに繋がっただけで。

俺も鷺沢さんも、目を逸らして黙り込んでしまった。え、何これ。どうすんの？この空気。どうしたら良いの？どうしたら許してくれるの？

ていうか、少し外見の話をしただけでなんで顔赤くしてんだよ。

……………俺もだが。

純情にも程があんだろ。……………俺もだが。



「ま、まあ、そういうことなんでっ。すいませんなんか」

「……いえ、別に。こちらこそ、すいません……」

しかし、子供っぽく見られたところが関係ないとなると、なんで落ち込んだんだ？なんかやらかしたのかな。でも、心当たりがまるでない。やっぱ、子供っぽいつて思ったつて思われたのかなあ。

……つと、もう良い時間だし、そろそろ帰るか。俺は立ち上がりながら言った。

「ま、分かりました。明日の9：30くらいに伺いますね」

「……はい。すみません、私の都合で……」

「や、いいですよ。俺は別に普通に暇人なんで」

「……そ、そうですか……」

あ、少し引かれた。

苦笑いを浮かべた後、鷺沢さんは微笑みながら、帰ろうとする俺に声を掛けた。

「………た、鷹宮さん」

「？」

「……他にも、面白い本を教えてくださいね」

「………いいですよ」

まあ、人によって好みのジャンルとかあるだろうし、俺にとっての「面白い」が鷺沢さんに合うかは分からんけどな。

俺は軽く会釈をしてから、本屋を後にした。

## 事務所では（1）

レッスンが終わり、鷺沢文香は汗だくの身体をタオルで拭き、着替えてから事務所の椅子に座って鞆から本を取り出して、鼻歌を歌いながら読み始めた。読んでるのは、なんか最近知り合った子が、「とある魔術の禁書目録」を明日持つてくるまでの繋ぎで貸してくれた「ソードアート・オンライン」という本だ。もう、3巻まで読んだ。

その様子を、速水奏と橘ありすは遠目から眺めていた。

「……………」

「……………」

「ありす、どう思う？」

「明らかに上機嫌、ですね」

「……………最近、いつもアレよね」

「……………なんだと思いますか」

「……………分からないわ」

「……………」

二人は顔を見合わせた。そして、頷き合うと、小走りでも文香の方へ走った。

「文香ー。また本読んでるの?」

まずは奏が切り開いた。二人に気付いた文香は、本に指を挟んで閉じて、二人を見上げた。

「……………あ、奏さんと……………ありすちゃん。はい♪とっても面白いですよ?」

「なんて本なの?見せてくれない?」

「……………どうぞ」

差し出すと、二人は物珍しそうな顔でライトノベルを眺めた。

「……………これ、ライトノベル?」

「…奏さん、知ってるんですか!?!?」

「え、ええ。名前だけは」

「あ、私も知ってます。学校の図書室にありました」

「! ホントですか!?!?」



「私はそう思います。奏さんはどう思います?」

「あー……そうね。オタクっぽいわね確かに。なんていうか、男の人が好きそうな……。ていうか、文香はどうやって知ったのよ。私はそっちに驚いてるわよ」

「……え? えーつと……」

文香は言おうか迷った。オタクっぽい本、と言われた本を勧めてくれた人の事を二人に言えば、間違いなく千秋もオタク扱いされるだろう。いや、アイドルである奏とありすと、一高校生の千秋が知り合う事なんてまず無いと思うから問題はないのだが、文香はなんかテンパっていた。

「………な、なんか、落ちてたので拾いました……なんて……」

「嘘ね(ですね)」

「……はあ……」

ばれた。ノータイムで。文香が冷や汗を流しながら目を二人から逸らすと、二人はジト目になって文香を睨んだ。

「何があつたんですか文香さん!」

「そうよ、嘘ついたって事は隠すような事って事なんですよ!?!?」

「………い、いえ……特に、何も……」

問い詰められ、目を逸らしたまましばらく止まった。5秒くらい止まった後、ふと二人を見た。ジツと自分を見つめていた。

それを見て、諦めたようにため息をつくど、心の中で千秋に謝って言った。

「………本屋のお客さんに教えてもらったんです。面白いつて言われて」

「本屋が、本を教えてもらったの……?」

「……そこは良いんです。その……その、お客さんの男の子に教えていただいたんです。本を貸してくれただけじゃなく、オススメの本とか教えてくれて……」

「男!?!?」

奏とありすの音が1オクターブ跳ね上がり、ビクツと肩を震わせる文香。それに構わず、ありすが文香に問い詰めた。

「文香さん恋人が出来たんですか!?!」

「!?!?こ、恋人!?!?ち、違います違います! お店のお客さんです!」  
「嘘です! 文香さんにお店のお客さんと仲良くなれる社交性はないです!」

「……………」

あんまりな言い方に、思わず黙り込む文香。すると、まあまあと奏が二人の間に入った。それに、助かった、と文香が息をつくのと、奏が聞いた。

「で、その男の子とはどんな関係なの?」

「……………」 か、奏さん!?!?裏切りましたね!?!?」

「あらあ? 私がいつ文香の味方になったのかしら?」

微笑んでいるが、目が笑っていない。本気で追い詰めるつもりなんだろう。だが、本当に何でもない関係の文香は、どう言い逃れるべきかを考えるのでいっぱいだった。まあ、焦れば焦るほど人の思考は残念になるわけで。

「……………」 た、鷹宮さんはっ、こ…………恋人とかじゃなくて…………!」

「へー鷹宮さんって言うんだ」

「……………」 ほ、ほんの一週間くらい前に会ったばかりの人でっ、ちよっと数回会って本の感想を語り合っただけで…………!」

「一週間のうちに数回って、結構会ってますよね」

「……………」 た、確かに過去に会った男性の中ではプロデューサーさんの次にお話ししてますけど…………!!?!」

「出会って一週間しか経ってないのに? それはそれで問題な気がするけど……………」

「……………」

一々、茶々を入れてくる二人に、最早諦めとも言えるため息をつきながらも、めげずに説明を続けた。

「……………」 と、とにかくそんなじゃないんですってばあ……………」

「……………」

「……………」

泣きそうにも見える文香の表情を見て、少し悪いと思った奏とあり

すは、お互いに顔を見合わせた。この辺にしておこつか？みたいな感じのやり取りを視線でした後、奏が口を開いた。

「分かったわよ……。何でもないのね？その子とは」

「…はい……」

「すみません、文香さん……」

ありすも素直に謝り、文香は顔を横に振ってありすの頭を撫でた。

「……いえ、大丈夫ですよ」

「あ、あのっ……子供扱いされてるみたいなので、頭は撫でないで下さい」

「……あつ、すみません……」

「あつ……」

文香が手を離すと、切なそうな声を上げるありす。それに全く気付かず、文香は奏に言った。

「……それに、鷹宮さんは確かに良い人だと思えますし」

「あら、どんな子なの？」

「………なんていうか、優しい人です。純粹というんでしょうか……初対面の私のために、本を貸してくれたり……古本屋ではお目当ての本が見つからない私に声を掛けてくれたり……」

「確かに優しい子ね」

「………でも、たまに顔を赤くしたりするのは可愛いです。この前、私の部屋に来た時なんか、来ただけで顔を赤らめてたんですよ？何でか分かりませんが……」

「待ちなさい」

「………な、なんですか？」

突然、ピリツとした声を出されて、文香は少しビビってしまった。

「あなた、付き合ってもない男の子を自分の部屋に入れたの？」

「………え、はい」

「だめよ、そんな事したら！誰だって、そんな事されたら少しは照れるわよ」

「…………なんですか？」

「なんですって……！あのね、もしその場であなたが、その鷹宮君に襲わ

れたとしても、文句は言えないのよ?」

「……お、襲……………!?」

「そうよ!普通は付き合ってもない異性を自分と二人きりのプライベート空間に入れちゃダメ!アイドルなら尚更だからね!?」

「……………ぐ、ごめんなさい……………」

まあ、しゅんつ…………と肩を落として反省する文香を見れば、奏はそれ以上は強く言えなかった。呆れたようにため息をついてから、改めて聞いた。

「で、部屋に呼んでどうだったの?」

「……………あ、はい。本を返すついでに、その続きを借りる為に来ていただいたんですけど、お茶を淹れてあげて、飲んだ後にすぐに帰っちゃいました……………」

「なら良かったわ…………。まったく、そういう所は疎いんだから…………。ていうか、その子が良い子で良かったわ」

「……………けど、ちよつと…………その…………」

「どうかしたの?」

文香は俯いて、ボソツと呟いた。

「…………私の事、知らないみたいで」

「……………へっ?」

「……………いえ、そんな自惚れてるつもりはないんですが…………。最初に会ったときから、私の事をアイドルとも思ってくれてないみたいで…………。少しシヨックでした」

「ああ、そういう意味ね…………。まあ、最近の子はあまりテレビ見ないみたいだからね」

「確かに、あまり私も見ませんが…………。でも、やっぱりすこしシヨックでした……………」

「仕方ないわよ。興味ない子は興味ないんでしょうし。それに、アイドルだって知られて気を使われるよりマシじゃない?」

「……………そう言われれば、そうですね」

「なら、良いじゃない別に」

結論めいた事を奏が言った時だった。ありすが自分のスマホの画

面を見た。

「……………あつ、もう9時です。お二人共、お先に失礼しますね」

「……………えつ、もうそんな時間ですか？か、帰らなきゃ……………！」

ありすから時間を聞いた直後、本に栞を挟んで鞆を持って立ち上がる文香を見て、ありすがジト目で聞いた。

「……………何か予定があるんですか？」

「……………えつ？」

鷹宮さんに本を借りる予定があるんです、とは言えなかった。ありすはともかく、奏は絶対付いてくるから。何とか言い訳しないといけない。だが、慌てればさっきの二の舞だ。何と言おうか悩んだ挙句、誤魔化すようにつぶやいた。

「……………じ、実はこのあと……………ば、バイトが……………」

バイト、というのは本屋である。嘘は言っていない、バイト先で本を借りるのだから。

すると、奏は暫く考えた後、ため息をついて言った。

「鷹宮君に会いに行くのね……………」

「……………なつ……………!!?ち、違いま」

「違わないから。別について行かないわよ。じゃ、私も帰るわ。またね、二人とも」

奏はそう言うと、鞆を持って出て行った。その後、ありすも文香に挨拶してから帰宅していった。その背中を見て、ホツと息をつく、と、文香も帰宅した。



ラノベ仲間ができた。  
ムツツリはエロを回避した後に後悔する。

二次元は三次元と違う、と大体の人は言うだろう。それは当然だ、二次元とはあくまで人によって作られた物だからだ。何故、その二次元作品が出来たのかは、作者によって違う。読者に読ませたいものがあるから、作者の言いたい事が含まれているから、こんな世界があったら面白そう、金になるから、作者自身の願望、色々あるだろう。が、それはあくまで作者の様々な思いを乗せたものであつて、三次元に大きく影響したりする事はない。

だから、我々読者もそこら辺を弁えなければならない。この世には学園都市も学戦都市もアルザーノ帝国魔術学院も国立魔法大学付属第一高校もナーヴギアもニューロリンカーもなければ、死後の異世界転生の特典をくれる駄女神も天才ゲーマーを異世界に引き摺り込む唯一神もこんなに可愛いわけではない妹もエロマンガ先生な妹もない。また、主人公の思考回路がすごく自分と似ているからつて、その主人公が自分であるわけでもない。目が腐った捻くれボツチでも、宇宙人や未来人や超能力者に囲まれてる人でも、吸血鬼に襲われてとんでも再生能力を持った人でもない。

その辺を弁えなければ、とても恥ずかしい思いをする事になる。……最近知り合い、俺が二週間ほど本を貸し続けている本屋の店員さんのように。

「……………じゃ、じゃおう、しんがんはつ……………さ、さいきよう……………」

何故か右目に眼帯をした鷺沢さんは、全力で恥ずかしがりながら、途切れ途切れに呟いた。眼帯逆だよそれ。

まあ、眼帯以外にも色々とツツコム所はあるが、その直後に俺の口からぼろーんと自転車の鍵のように落ちた言葉は一つだった。

「……………痛え」

「ツ…………ツ…………ツ…………」

思わず出た本音に、かなりショックを受けたのか、ガビーン！とい

う効果音が出そうなほどに体を震わせた鷺沢さんは、目尻に大粒の涙を溜めた。あつ、ヤバイ。

「い、いや冗談です！いや、本音だけど……！か、可愛かったですよ!??そ、その……照れてる辺りが。あつ、いや可愛いってのも別にナンパ目的じゃなくて……！」

「……い、痛い、ですか……?？」

「あ、それは………はい」

こういう事は本人にちゃんと伝えた方が良いでしょう。じゃないと、恥をかくのは本人だ。やはり、厨二病でも恋がしたい、はまだ早かったか……。

まあ、でも落ち込ませてしまった以上は元気付けてあげないとな。何か励ませるような言葉を考えてると、眼帯を取り、目についてるカラコンも取りながら、鷺沢さんはポツリポツリと呟いた。カラコンまでするか普通……?？」

「………おかしいとは思っていたんです。お客さんからは不思議なものを見る目で見られるし……常連さんからは、『目、怪我したの？大丈夫?』って心配されるし」

俺は「頭大丈夫?」って心配になったけどな。その常連さんも酷いことするなあ。厨二病は素で返されると本気で死にたくなるんだぞ。

「………それで、なんて答えたんですか」

「け、結膜炎って………」

素で返しちやったのかよ………。まあ、普通に妥当だが、キャラを捨てるくらいならそんな真似すんなや。そして、よくそこで恥ずかしい思いをしたのに俺に台詞付きでトライしたな。

「………鷺沢さん」

「………はい」

「恥ずかしいと思ってる間は大丈夫です。そういうのはやめた方が良いでしょう。二次元に共感にしても同一化はしちゃダメです」

「………はい」

まあ、身に染みて反省したようだし、これ以上は言わないでおくが。しかし、鷺沢さんはなんとというか、割と天然さんなのかもしれない。

あと、影響されやすい。だから、こんな風になっちゃったんだろうなあ。本当に可愛い人だ。

「ま、まあ、それはそれとして、どうですか？なんか気に入った作品とかジャンルはありますか？」

「……………そうですね。あまり、異能バトルというのはよく分からないです。いえ、理解は出来るんですが……………どちらかというと、普通の……………現実世界？というか……………そう、俺ガイルみたいなのが好きです」「なるほど……………」

それで、邪王真眼か……………。まあ、確かにそういうのが好きそうだなあ。と、なると次からは貸す本を考えないとな……………。

「……………あ、でも異能バトル系や異世界転生も好きですよ？ただ、主人公一人が強いというのは余り……………」

まあ、それも分かる。それで主人公が女にモテまくるのは尚、腹立つんだよね。あーでも、異世界転生で主人公最強系ではなく、女性キャラにもモテまくってるわけじゃない主人公がいたな。……………ただ、その……………何。男に変な偏見を持たれそうなんだよなあ。

「……………教えて下さい」

「えっ？」

「……………今、良いラノベを教えてくださいれる直前の顔してました」

「どんな顔だよ……………」

俺の事に関して詳しくなり過ぎでしょ……………。うちの親よりも俺のこと詳しいまである。

「……………や、でも俺まだそのラノベ買ってないんですよ。先にアニメ見ちゃったんで。アニメのBlue-rayならありますけど……………」

たまたま夜遅くまで起きてて、ふとテレビ見たらやってたんだよな。面白くてBlue-ray全部買った。

「……………じゃあ、アニメでお願いします」

「え、でもアニメは……………」

ヤバイだろ……………。特に9話とか。

「……………何ですか？」

キョトンと可愛らしく首を捻る鷺沢さん。その顔を見て、思わず俺

の中に悪戯心が芽生えた。

「……よし、じゃあ見ましようか。今日、これから見ますか？」

「……はい。もう少しで勤務時間終わりですし」

「じゃあ、その間に家からBlue-ray持って来ますね」

「……分かりました。ここで待つてますね」

「はっ」

俺は本屋を出て原チャリを走らせた。

禁書を貸してから一週間ほど経過した。なんか最近、鷺沢さんの部屋にお邪魔することが多くなった。

と、いうのも、鷺沢さんが勤務時間外の時に、何処でラノベやアニメの感想を語り合うかを決める事になった。で、最初はどっかの喫茶店とかで良いんじゃないかね？って話だったのだが「カップルに見られたら困ります！」とか言われ軽く心を傷つけられ、何処にしようか迷った挙句、鷺沢さんの部屋になった。なんか小声で「バレたら奏さんやありすちゃんに怒られる……」とか言ってたけど、知らない人だし俺には関係ないから、気にしない事にした。

まあ、そんなわけで俺は家までBlue-rayと念の為、プレ4を取りに行った。「この素晴らしい世界に祝福を！」のBlue-rayを。

×

×

×  
鷺沢さんの部屋に入るのも、もう慣れたものだ。最初はドキドキして胸の鼓動が収まらなかったというのに。俺もリア充の仲間入りした、ということか？うん、それはないな。

「お邪魔します」

「………は、はい」

部屋の奥に進み、俺はテレビにプレ4を繋げ、中にディスクを入れて、ソファアの上に座った。

「……あ、あの、お茶どうぞ」

「あ、どうも」

麦茶が机の上に置き、鷺沢さんは俺の隣に座った。肩と肩がくっ付き、俺は内心どきつとした。なんでそんな近くに来るの……肩、柔ら

かい……。

気を紛らわすように、お茶に手を伸ばし、一口飲んだ。……ん、甘い？麦茶に砂糖を入れたのか……？いや、ちょうど良いし、普通に美味いけど。ふと横を見ると、鷺沢さんが俺の方を見ていた。

「……………」

「……………」

「……………あ、美味しいですよ。砂糖入れたんですか？」

「…ほ、ほんとですかっ？」

パアツと一面に向日葵が咲きそうな程の嬉しそうな顔をする鷺沢さん。ああ、可愛いなあ……。こういう笑顔、無邪気過ぎてとても歳上とは思えない。うちのクラスの下品な笑い方をする女子達にも見習ってほしい。

すると、このすばの一話が始まった。カズマが夜中に出掛け、初回限定版の何らかのゲームを買いに行った所だ。

「…………ゲームといえば、鷹宮さんが教えてくれたゲーム、やってますよ」

「どこまで行きました？」

「……………えっと、北方海域？までです」

「あー、あそこ駆逐艦六隻編成の海域あるから、気を付けてくださいね」

「…………大丈夫です。朝潮ちゃんはそのエースですから」

「……………ロリコンなんですか？」

「…………ち、違います！ただ、その…………お友達に似てるので…………雰囲気」

え、二次元キャラに似てるって厨二病って事？いや、まあ朝潮ならまだ平気だと思うが…………。でも、クソ真面目って事だろ？会うことはないだろうけど、俺とは会わないほうがよさそうだ。

そうこうしてるうちに、カズマがショック死（笑）した。で、アクアが登場。異世界転生について解説してる辺りで、横からツンツンと肩を突かれた。振り向くと、ヒソヒソ話をするように手を口元にかざした鷺沢さんが、頬を赤く染めたまま聞いて来た。二人しかいないの

になんで耳貸さないといけないんですかね。

「なんすか？」

「……あの女神さん、もしかして、その………」  
「？」

「……………は、穿いてません、よね……？」

カアアツと顔を赤くして、若干俯いて聞いて来た。……………これは、何と答えるべきなのか。でも、その、なんだ。そんな顔見せられると、すぐくからかいたくなって来るんだよな。

「うええ？ そうなんですか？ ……あ、本当だ！ 気付きましたね！」  
俺、何度も見てるのに。よく一回目で気付きましたね！」

「……………ッ！」

俺の言ってる意味が分かったのか、さらに頬を染める鷺沢さん。まあ、ムツツリですわねって言ってるわけだ。ちなみに、俺は一目見た時から気付いてました。でも、調べると原作はパンツ履いてるらしいんだよな。不思議。

「……………う、うるさいです！ 少し気になっただけなんですから！」

「はいはい。じゃ、続き見ましようねー」

「……………あ、後で覚えてて下さいね……………」

え、お仕置きしてくれるの？ ありがとうございます！ 鷺沢さんのお仕置きなら何回でもいけます。

×俺は、その「後で」に期待しつつ、アニメの視聴を続けた。

×時刻は18時30分。14時30分くらいから見始めてるので、すでに4時間程経過した。俺も鷺沢さんも、時折感想を挟みながら視聴し、一期は残り2話となった。で、問題の9話である。

「じゃ、9話流しますね」

「……………は、はい」

「……………どうかしました？」

「……………いえ、その……アニメのキャラはすごいなあ、と思ひまして」  
「何故？」

「……………もし、近くにカズマさんみたいな人がいたら、私多分軽蔑すると

思うんです……。だけど、アニメで見ると、別に不快感はないなあ、  
と思ひまして」

「あー……まあ、それがアニメの良い所でもありますから」  
夜神月とか絶対友達になりたくないもん。でも、別に嫌いなキャラ  
ではない。要はそういう事だろう。

でも、その、なんだ……。カズマの真骨頂は次の9話なんだけどな  
……。俺が若干不安になってる間に、9話は始まった。

オープニングが終わり、物語は進む。屋敷を手に入れたカズマ達が  
屋敷でダラダラし、カズマが表に出掛ける。知り合いの冒険者達と路  
地裏の店へ……。

……。ああ、ここからだ……。メチャクチャエロい格好のサキユバ  
スのお姉さんが接客し始めた。

「っ!?」

案の定、鷺沢さんが顔を真っ赤にしている。うん、知ってた。

「……………っ!?っ!?っ!?」

赤くなつた顔を両手で覆つて、チラチラと俺を見ている。俺はそれ  
に全く気付かないふりをして、真顔でアニメを見続けた。

「……………あ、あのっ、鷹宮さん……………?」

「? なんですか?」

「……………な、なんでも…ない、です……………」

ああ、可愛い……。とても現実の女の子とは思えない……。こん  
なピュアな人間性を持つ人がこの世に存在するなんて……。この  
人はどうやって育つて来たんだろうか。きっと、悪意も何も存在しな  
い夢の世界に違いない。

サキユバスの説明を聞いて、鷺沢さんはさらに顔を赤くしていっ  
た。ちなみに、この店が実在したら俺は一回は行くね。

「……………あ、あのっ」

「はい」

鷺沢さんがまたまた声をかけて来た。今度は何だい?

「……………た、鷹宮さんもっ、こういうお店は……き、きよっ、興味あ  
る、んですか……………」

え、それはなんて答えたら良いの？正直に答えれば引かれそうだし、カッコつけて「ありませんよ？」と答えれば、それはそれでホモ扱いされるかもしれない。

「……………ここは、当たり障りのない回答をすべきだな。」

「……………ま、まあ、無いとは言い切れませんが、でもお金払ってまでは……………」

「……………そ、そうですよねっ。良かったあ……………」

それは、何に対しての「よかった」なのか。いや、考えても無駄だろうしやめておこう。

さて、カズマが契約してサキュバスの店を出た。ダクネスの実家のカニを食べるシーン。そのシーンで鷺沢さんは何とか落ち着いたのか、頬の赤みが引いて来た。

しかし、これで終わりじゃないんだよなあ。むしろ、ここからなまである。カズマが眠れなくて風呂に向かった。ここから、ダクネスが来るんだよな。はてさて、鷺沢さんはどんな反応をするのか、ワクワク。

「ツ!?？」

「え、今っ?」

カズマの入浴シーンで、既に顔を赤くしていた。あーそういえば鷺沢さん女子だし、確かに男の裸とか照れるかもなあ。まあ、ここから先はさらに酷いんだけどね。

とうとう、ダクネスが入って来た。

「ひよあつ!?？」

隣から可愛らしいけどよう分からん悲鳴が聞こえた。

「っ!??! い、異性で一緒にお風呂なんて……………!??! ふ、不純異性交遊は犯罪です!」

「は、犯罪!??!」

とんでもないことを言い出したぞこいつ!??!

さらに、カズマはダクネスに背中を流してもらい始めた。それを見て「は、はわわわ……………」と暁型四番艦のような声を漏らす鷺沢さん。すると、テレビの中のカズマがいい笑顔で言った。



『さ、次はタオルを使わずに……』

「ーッ!?!?」

直後、鷺沢さんはテレビを消した。

「え、ちよっ」

「……わ、私にこれはまだ早いです!もう飛ばしましょう!」

と、顔を真っ赤にして言われたので、俺は心底ほっこりしながらも従っておいた。可愛いところはたくさん見れたし、何より嫌われたくないしな。

××) モコンを操作して、10話に入った。最終話である。

××) 一期が終わり、続いて二期の視聴を始めた。……のだが、

「……すう、すう……」

「……………」

鷺沢さんがいつの間にか、俺の肩に頭を乗せて眠ってしまっていた。

電話相手の友達に通話を邪魔されると腹立つ。

えーつと、なにこれ。なんだこれ？どうすりゃ良いんだ？肩の上に頭を置いてる鷺沢さんが、静かな寝息を立てているんだが。可愛い。いや、可愛いじゃなくて。

「……さ、鷺沢さん？」

「……………すぴー」

すぴーじゃねえよ。てか、マジで寝てんのか。無防備過ぎんだろ。この人は男をなんだと思ってるんだ。間違い無く、俺じゃなかったら襲われてる。

「……………マジでどうしようかな」

「……………すう、すう……………」

困った。これじゃ、動けないんだけど……。どうしようこれ。とりあえず、写メでも撮るか。俺の人生にこんな事があるとは思わなかったわ。

写真にこの思い出を収めると、本格的にどうするか考えた。動けないから、どうするもないんだけど。まあ、せっかくだからこの状況を堪能しよう。しかし、女の子の身体は柔らかいなあ。ぷにぷにというか、サラサラというか……。本当に筋肉ついてんの？みたいな。

「……………んっ」

「っ」

起きたか？いや、吐息が漏れただけか。こうして鷺沢さんの寝顔を見ていると、色々と思うことがある。

俺は今まで、一目惚れする男はカスとか馬鹿だとか、随分とボロクソに思っていたが、横の鷺沢さんを見ると、一目惚れの気持ちがよく分かる。いや、好きになったという意味じゃないが、去年の俺なら5回惚れてる。それくらい良い子だ。

まあ、向こうは俺の事をラノベ仲間程度にしか思っていないだろうけど。俺の隣で平気で寝られちゃうんだもんなあ。寝られるということは、嫌われているということもないと思うけど。

「……………あ、終わった」

このすばが。ディスクを入れ換えなきやいけないんだが、隣のべつぴんさんが眠っててそれは叶わない。

「……………」

どうしよう。暇になってしまった。いや、鷺沢さんの寝顔見てれば暇ではなくなるけど。ていうか、女の子の寝顔ってなんで唇を少し尖らせるんだろうな。夢の中でキスでもしてんの？

しかし、寝てる女の子の寝顔見てるのは変態だよなあ。

「……………俺も寝ちゃおうかな（錯乱）」

うん、それがベスト。意識しなくて済むし、退屈にもならない。俺は目を閉じた。さて、上手く眠れると良いな。

×この時の俺は忘れていた、俺は寝相が悪いということ。

×「んっ… ………………」

目が覚めた。どうやら、マジで眠ってしまったようだ。とりあえず、俺は横になつてる体を起こそうと……………あれ？横になつてる？

俺は確か、座ったまま寝てたはずだ。それが何故、横になつて寝ていた？それに、俺の頭の下の子の柔らかい感覚はなんだ……………？

「……………鷹宮、さん？」

「っ？」

頭上から声をかけられた。ふと上を見ると、鷺沢さんが俺を優しい目で見下ろしていた。……………なんで、鷺沢さんの顔が俺の上にあんの？なんで俺の顔と鷺沢さんの顔の間にオツパイに良く似た膨らみを持つオツパイがあんの？なんで、頭の下が柔らかいの？

……………っーかこれ……………膝枕じゃね？

「っ……………」

慌てて起き上がると、俺の頭の側面と鷺沢さんのおでこがぶつかった。俺は膝の上に頭が戻り、おでこを抑えて悶える。

「いつ……………」

「ぎゃっ……………」

「ぐおっ……………かはっ……………！」

「…だ、大丈夫ですか……………？」

い、痛え……！頭が割れるかと思った……。てか、鷺沢さんはなんで平気そうなんだよ……。つて、そうじゃねえよ！俺は慌てて膝の上から退いた。

「す、すみません！俺、寝てる間に姿勢崩しちゃったみたいで……！」  
「……大丈夫ですよ。私の方こそすみません。寝てしまったみたいで……」

「や、でも膝枕なんて……!!?」

「……大丈夫です。寝顔、可愛かったですよ？」

ニツコリと微笑まれ、俺は自分の頬が熱くなるのを感じた。そういう問題じゃねえんだよ……。なんかすごい恥ずかしいぞ、なんだこれ。

すると、鷺沢さんは両足をもじもじと動かし始めた。

「……………」

「……………どうしました？」

「……あつ、あのっ……それより、御手洗に……………」

「え？あ、ああ！どうぞどうぞ！」

鷺沢さんは早足でトイレに向かった。……………ふむ、大きい方だか小さい方だか知らないが、便意を我慢しながら膝枕してたと思うと少し興奮するな……………。

いやだからそうじゃなくて。ああ……ほんと、何してんだよ俺。俺ってマジの方で寝相悪かったんだな……………いや、ある意味では寝相良いんだけど。

時計を見ると、午後8時を回っていた。もう夜じゃねえか……。随分寝てたんだな俺。

顔を片手で覆ってショックを受けてると、鷺沢さんが戻って来た。

「……………ふう」

「本当、すみません……………」

「……いえいえ、大丈夫です。私の方も、せつかくBlurayを持って来ていただいたのに寝てしまってすみません」

「続き、いつ見ます？」

「……………そうですね。今日はもう疲れましたし、明日にしましょうか」

「分かりました。あ、じゃあプレ4とか置いてっても良いですか？」  
「…良いですよ」

俺は伸びをしながら立ち上がり、欠伸まじりに言った。

「……………じゃ、俺帰りますね」

「……………帰る、んですか？」

「はい。もう夜遅いですし」

このすばを見ないなら、ここにいる理由もないだろう。そう思って玄関に向かおうとすると、鷺沢さんは「で、でも……………」と呟きながら俺の後ろを指差した。

後ろを見ると、窓の外は超雨が降っていた。

「……………マジ？」

「……………どうします？」

「帰りますよ。原チャリなんでそんな時間掛かりませんし」

「……………え、でも危ないですよ。それに、風邪引いちやいますし……………」

「大丈夫ですよ。てか、帰る以外に他ないですよ」

「…泊まって行っても、良いですよ？」

「はっ？」

「……………え、ですから泊まって行っても……………」

この人はアホなのか？流石にそれはマジだろ。ていうか、少し言っておいた方が良くももしれない。

「あのですね、鷺沢さん」

「……………は、はい」

「簡単に男を泊まらせるなんて言っちゃダメです。本来なら、男を家に入れるのも良くないのに。もう少し貞操観念を考えた方が良いでしょうよ」

「……………そ、そう、ですか……………」

鷺沢さんは肩を落としながらも、俺の顔を覗き込むようにして聞いて来た。

「でも、鷹宮さんが風邪でも引いたら……………」

「大丈夫です。俺、バカなので風邪引きませんから」

「……………バカは風邪引かないっていうのは、バカは風邪を引いてること

に気付かないって意味ですよ？」

真面目に返されてしまった……。流石、ラノベにハマる前はガチの文学少女だ。お陰で痛烈に恥ずかしい思いをってしまったぜ……。

俺は誤魔化すように言った。

「と、とにかく、俺は帰ります。鷺沢さんも、他の男の人とかをそんな風に誘っちゃダメですからね」

「……………は、はい」

……………なんか説教しちゃったな。俺なんかが説教なんて偉そうな真似して良かったのだろうか。逆に今度は俺が肩を落としてると、鷺沢さんは微笑みながら言った。

「……………鷹宮さん。ありがとうございます。私を心配してくれて」

「ツ……………。お、おやすみっス」

「……………おやすみなさい」

その顔は反則だろ……。俺は赤くなった顔を隠すように俯き、玄関を出て雨の中をバイクに跨って帰宅した。

翌日。風邪を引きました。

「……………」

やらかした。プレ4どうしよう……。いや、それは後日取りに行けば良い。それより問題なのは、鷺沢さんとの約束だ。午後から鷺沢さんの家に行くと言ってしまった……。どうしようか、無理に行っても向こうに風邪を移すことになるかもしれない……。

……………午前中に風邪を治すしかねえな（錯乱↑2回目）。とりあえず、冷えピタでも貼るか。

〜3時間後〜

13時27分。待ち合わせはあと33分後で、熱は下がるところか上がっている。これはもう無理だな……。申し訳ないけど、電話して来週に変わってもらうか。

俺はスマホを手にとって、鷺沢さんに電話を掛けた。

『……………も、もしもっ〜』

「あ、鷺沢さんで」

『文香ー、誰から電話？例の彼氏かしら？』

『……ち、違います！彼氏じゃないです！』

『ということは、例の鷹宮さんなんですね!!?』

『……そ、それはそうですけど……ちよつ、携帯取ろうとしないで下さいー!』

……友達と一緒なのか？楽しそーだなー。で、俺はいつまで待つてれば良いの？

耳にスマホを当てたまま、俺は待機した。ギャーギャーと騒ぎまくった挙句、ようやくハッキリした声が聞こえて来た。

『もしもし、鷹宮さんですか?』

『……ちよつ、奏さん離して……ありすちゃん！携帯返してください!!?』

……誰だか知らないけど、鷺沢さんではないようだ。

「鷹宮ですけど……」

『文香さんです』

なりすます気なのかよ！ていうか自分の事をさん付けする奴がいるか!!? 擬態する気ゼロだろ。

……ていうか、もう面倒臭いから言いたい事伝わればそれで良いや。

『……まあ、誰でも良いですけど鷺沢さんに伝えてくれますか？風邪引いたから今日行けないって』

『……今日行かない?どういう意味ですか?』

「あー……」

……友達に付き合ってもないのに部屋に友達呼んでる、なんて知られたくないだろうなあ。いや、本人は気にしないかもしれないけど、周りの友達には気にするだろうし、誤魔化すか。

「や、今日は鷺沢さんがラノベ欲しいって言うから買いに行く約束してるんですよ」

『……そうなんですか?』

『……いえ?そんな約束してませんよ?』

……あの馬鹿。ホンツツツト馬鹿。本当にウマシカ。こんな馬

鹿な女の子初めて見た。

『……じゃあ、何の用なのよ?』

『……何って、私の部屋でアニメを………あっ』

『アニメ!?』

『文香さんの部屋ですか!?』

……あーあ、俺知らね。

『あなた前に言ったでしょう?そんな簡単に男の子を自分の部屋に入れちゃダメって』

『そ、そうですよ!ていうか、プロデューサーさんに怒られますよ!』

『……わ、分かってますけど……アニメ見るのは他の場所じゃ出来ない、じゃないですか………』

『なら、アニメのDVDだけ借りれば良いじゃない』

『……た、鷹宮さんが持つてるのはBlu-rayなんです!』

『それならレンタルビデオ屋さんに行けばいいじゃないですか』

『……そ、それは………!そ、その通りなんです………』

……なんか、マジで説教されてるし。特に、声の雰囲気的に歳下だろ?少なくとも敬語の方は。いや、歳下に説教される鷺沢さんは、それはそれで可愛いけど。

『……す、すみません……二人とも………。実は、昨日も鷹宮さんに怒られて………』

『鷹宮さんに、ですか?』

『なんて?』

『いえ、今と同じような内容の事を』

『………』

『………』

……静かになったな。つーか、早く電話切りたいんだけど。通話料バカにならんし。

そんな事を思っていると、別の声が聞こえて来た。

『………もしもし?』

「あ、はい」

『文香の保護者の速水奏です。よろしくね?』



「ど、どうも。え、苗字違うのに保護者？」

『気にしないで。貞操観念ガバガバの子には、少なくとも保護者は五人は必要でしょう?』

『……奏さんっ。それどういう意味で……』

『文香さん、静かに』

『……ご、ごめんなさい……?』

あ、確かに。鷺沢さん、落ち着いた人なのに色んな人に世話かけてるなあ。

『まあ、そういうわけで、プライベートでの保護者はあなたに任せるわね?』

「や、どういうわけか全然わからないんですけど」

ん? プライベート? ということは、速水さんともう一人はプライベートの付き合いじゃないのか? というか、学生にプライベートもクソもあるのか?

『いいじゃない。キスしてあげるから、お願い。ね?』

……何言ってるんだこいつ。

心底、ドン引きしていると大音量が聞こえて来た。

『っ!?? な、何言ってるんですか奏さんツツ!!?!!?』

『ち、ちよつと文香。落ち着きなさい、冗談よ。冗談』

お、おう……なんで鷺沢さんが怒つとんの。お陰でビックリしちゃったじゃねえか……。

『それで、風邪引いてるんですって?』

「あーはい。だから、今日は行けないって伝えて……」

『大丈夫よ。これから、文香があなたの看病に行くわ』

『……はっ?』

俺と鷺沢さんの声がハモツた。

『……ちよつ、奏さんっ。何勝手に』

『良いでしょう鷹宮くん?』

「や、まあ助かりますけど」

『なら、住所を教えてあげてくれる? 文香に代わるから』  
「了解です」

電話の向こうから『はい』『ここで代わるんですか?』『当たり前じゃない。あなたはともかく、見ず知らずの私に住所なんて彼も知られたくないでしょう?』『……………』という、やりとりの後、鷺沢さんの声が聞こえた。

『……………もしもし?』

「ああ、鷺沢さん?」

『……………は、はい。それで、住所は……………』

「や、別に速水さんに言われたからって来なくても大丈夫ですよ?風邪、移しちゃうとアレですし」

『……………そ、そうですか?』

「はい。微熱ですし、大したことないですから」

『……………わ、分かりました。じゃあ別に』

『文香?あなたのスマホの待ち受け、彼の寝顔にしてるこ』

『……………わ、ワー!ワー!やっぱいきます!一人じゃ鷹宮さん大変ですすしね!?』

「は、はあ」

彼?誰だ?男……………ヒツキーかビーターかカミヤんか……………まさか、彼氏じゃねえだろうか。彼氏ならそいつ殺す。

『じゃあ、住所教えて下さい』

「あ、はい。えーつと……………」

住所を教えながら、俺は少し複雑な感情になっていた。速水さんの言う「彼」がもしリアルな男だったら、何故か嫌な気分になる。別に鷺沢さんの事が好きというわけでもないのに。何でだろうな。リアルな男と決まったわけでもないのに、いやむしろラノベキャラの可能性の方が高いのに、何故かイライラしている。

これはいかんな。このままだと、イライラしたまま看病してもらおう事になっちゃう。俺は心を落ち着かせるために、とりあえず昨日の鷺沢さんの寝顔を眺める事にした。

『……………わかりました。ありがとうございます』

「いえ、すみません。お手数をおかけして」

『……………大丈夫ですよ。では、後程』

『さて、文香。何を持って行く?』

『私も買い物手伝いま』

そこで通話は切れた。さて、とりあえず落ち着こう。

風邪は人の心も理性も弱らせる。

人には必ず「夢シチュエーション」というものがあるはずだ。例えば、幼馴染に朝起こしてもらうとか、小学生の少女の小さなお手で握ってもらったおにぎりとか、歳上のお姉さんの後ろからのあすなろ抱きとか。

レベルアップすると、突然の土砂降りや屋根のある所に退避してふと一緒にいる女の子を見るとブラ透けしているとか、普段はそうでもないのにエプロンを付けると急にエロくなる幼馴染とか。

限界突破で、着替え中の部屋の中に入ったり、膝枕とオツパイに挟まれたり、スカートの中に迷い込んだり。

最終上限解放で、生の太ももに顔を挟まれたり、幼女とお風呂に入ったたり、巨乳に挟まれたり(何処をととは言わない)、と言ったところか？俺が今まで聞いた事あるので一番酷いのは、少年になってハタチ超えてるお姉さんに全裸で両手両足を縛られたいそうです。

そして、俺にとつての夢シチュエーションは、熱が出た時に女の子に看病してもらうことだ。詳しく言うと、汗だくの体を拭いてもらったりしたい。歳上だと尚良し。いや、もつと言うと添い寝とかしてくれると言うことない。まあ、流石にそれは無理なのは分かっているけど。

だが、人はお目当てのものを手に入れると意外と無力なものだった。

「……………き、気分はどうですか……………？」

鷺沢さんが俺の横で体調を5回ほど尋ねて来ている。その度に俺は「や、その……………スゴイツす」って答えている。情けないったらない。

「……………や、その……………スゴイツす」

「……………そ、そうです、か……………」

はい、これ6回目な。お陰で鷺沢さんも困らせてしまっている。すみませんね、情けなくて。

自分のヘタレさ加減に自己嫌悪していると、鷺沢さんが俯きながらポツリと呟いた。

「……………すみません、鷹宮さん」

「? な、何がですか?」

「……………私、やっぱり昨日は…その、鷹宮さんを泊めてあげるべき、でした……。それなのに、帰らせてしまって……。風邪、引かせてしまつて……………」

「い、いやいやいや! 違いますから! 全然、鷺沢さんの所為なんかじゃありませんから!」

「……………その上、まともな会話もできなくさせてしまつてすみませんでした……………」

あれ? 今、俺貶された?

「や、違いますって……………。俺が勝手に風邪引いただけですから。だから、そんな謝らないで下さい」

「……………でも」

「や、本当に。それよりほら、俺風邪引きましたよ? つて事は、バカじゃないって事ですすよね?」

「……………」

誤魔化すように言葉を繋げた。謝られるのは本当にお門違いだし。

鷺沢さんはしばらく俺を見た後に、クスツと手元に手を当てて微笑んだ。

「……………そうですね」

良かった。変な責任は持たれなかったようだ。

しかし、鷺沢さんは意外と自分の所為にしたがるタイプだったのか。いや、鷺沢さんの場合は「したがる」というより「そう感じてしまふ」と言つた方が正しいだろう。それなら、こっちはもう少し責任を感じないように行動した方が良いな。

「……………それより、何かして欲しいことはありませんか?」

「体を拭……………」

つと、あぶねえ! 反射的に欲望を表に出す所だったぜ……。そんな事、女の子に頼めるかよ。いや、しかし何を頼めば良いんだ? 何を頼んでも下心があるような感じしない? 男つて性別は意外と損するように出来てるんだな……………。

「いえ、特には……。それより、本棚にラノベとか漫画とか色々あるんで、見て良いですよ」

「……………結果、なんか格好付けたような事を返してしまった……。いや、して欲しいことはたくさんあるんですけどね。今日まだ食欲無くて飯も食べてないし。」

すると、鷺沢さんがじとーつと俺を睨んでいる事に気付いた。

「……………な、なんです、か……………?」

「……………本当に何も無いんですか?」

「えっ」

「……………枕元に漫画の山や空のコップはあるのにお椀はない、朝からまだ何も食べてませんね?それから、パジャマがすごい湿ってて若干、匂います。着替えもしてませんね?いや、タオルもない辺り、体を拭くこともしてないでしょう?」

「……………」

何この子。名探偵なの?いや、前までバリバリの読書家だし、推理小説を読んでもおかしくはないが。

「……………せっかく来たんですから、お世話くらいさせて下さい」

「す、すみません……………」

「……………何なら喉を通りそうですか?」

「……………作つてくれるんですか?」

「……………本当はご家族の方がいらつしやれば良いんですけど、いないみたいですし」

そりや、俺一人暮らしだからな。でも、その、なんだ。

「……………料理できるんですか?」

「っ、で、できます!私だつて一応、一人暮らしなんですから!」

メシマズでトドメ刺されるのはごめんだぜ。

鷺沢さんは俺をジト目で睨みながら、不満そうに言った。

「……………鷹宮さん、私のことバカにしてませんか?」

「し、してませんよ?」

「……………大丈夫です。奏さんに風邪引いた時にしてあげる事をまとめてもらったメモがあるんですから」

人任せなんじゃねえか……。

「わ、分かりましたよ……。うどんでもお願いします。冷蔵庫に入ってるんで」

「……………わかりました。待ってて下さい」

鷺沢さんは台所に向かった。俺はその背中を眺めながら、とりあえず着替える事にした。匂うって言われた時は死を覚悟したので。

起き上がり、布団から出てタンスを開けた。

「……………鷹宮さん。何か苦手な食べ物とか……………何してるんですか？」

後ろから声をかけられた。台所に行ったんじゃないのかよ…………。

「あ、いえ、匂うとか言われちゃったので、待ってる間に着替えようかになって……………」

「……………ダメです」

「はっ？」

「……………奏さんに『風邪引いてるときはなるべく大人しくさせておくこと』って言われてます。私が手伝います」

「え、いやそんな子供じゃないんだから……………っーか、あいつ何を教えてんだよマジで」

「……………とにかく、先に着替えるなら私も手伝いますっ」

「……………ああもう、よろしくお願いします」

なんか譲りそうにないし。もういいや、その代わりどうなっても知らねーからな。それに、それはそれで面白そうな反応見れそうだし。

俺はタンスからタオルを取り出して鷺沢さんに渡すと、上半身の服を脱いだ。

「では、お願いしますッ」

アニメの男の裸を見ただけで顔を赤くするような奴が、リアルな男の裸を見てまともでいられるはずがない。これは反応が楽しみだ、と下衆にも程があることを考えながら鷺沢さんを見た。

「……………は、はいっ」

だが、鷺沢さんは意外にも覚悟を決めていたようで、顔は赤らめているものの、なんか気合いを入れたような表情でタオルを握った。いや、そんな気合い入れるような事じゃねえんだけどな。そもそも、男

の上半身で顔赤らめるのがまずおかしいし。

俺は鷺沢さんに背中を向けて布団の上に座った。鷺沢さんも俺の後ろに座り、タオルで背中を拭き始めた。

「……………すごい汗、ですわね……………」

「まあ、もう暑くなってきましたから。ほぼ、夏ですよわね」

「……………六月、ですから」

六月なんだよなあ。髪の毛の青い睦月型のような季節になった。いや、名前だけでどんな季節か全然わかんないけど。

「六月は鬱ですよわね……………」

「……………わかります。湿気で本が湿ってくっついたりして……………」

「や、祝日がないからなんですけど……………」

「……………そつちですか」

「そりやもう。鷺沢さんは学校休みみたいとか思わないんですか？」

「……………いえ、私はあまりそういうのは……………」

クソ真面目かよ……………。まあ、大学なんて勉強したい奴が行くところだしね。俺は勉強したくないから高卒で働く。

そんな事を思っていると、鷺沢さんの手が俺の前に伸びて来た。こいつ何してんの？と、思う間もなく、後ろから俺の体の正面を拭き始めた。

「つー！ さ、鷺沢さん!?？」

「……………?なんですか……………?」

「ちよつ……………何して……………!」

「……………体を拭いてるだけ、ですけど……………」

「や、でもつ……………!正面に回って拭けば良いのでは……………?」

「……………お、男の人の裸を……………正面から見るのは、恥ずかしいです……………」

いや、今の方が恥ずかしいだらわおおお!天然可愛いなああああもおおおおお!!?

あすなろ抱きされてるみたいで、なんつーかももう可愛く焦る鷺沢さんを見るつもりが、こつちの方が焦るわ!!?いかんいかん!からかうつもりがからかわれました、みたいな感じですよわいぞ俺



！まずは落ち着け！煩惱退散！

「…………あの、鷹宮さん。あまり、動かないでいただけると…………」

「あつ、す、すみません……………」

「…………う？どうしたんですか？顔、赤いですけど…………体調が優れないのですか？」

誰の所為だと思ってるんだよ！

「…………ひっ…………いつ、いえ、大丈夫です……………」

「…………辛かったら、いつでも言ってくさいね」

その優しさが辛いんだよ…………。

上から垂れて来る鷺沢さんの髪が頬に当たってくすぐつたい、時々漏れる鷺沢さんの吐息がくすぐつたい、右手で身体を拭き、反対側の左手で固定されてる部分がくすぐつたい。なんかもう全部くすぐつたい。

すると、鷺沢さんの手が伸びて、俺の腹筋の辺りまで降りて来た。その直後、柔らかくも固い感触が後頭部に当たった。

…………まさか、この感触…………！鷺沢さんの、オツパイか!?!?

「っ!?!?」

自覚した直後、ビクツとして身体が前のめりに倒れそうになった。だが、鷺沢さんの両手に力が入り、俺を逃がそうとしない。

「…………ダメです。まだ拭き終わってません」

「いや、そういう問題じゃ……………」

「…………いいから大人しくしなさい!」

「っ……………」

は、はわわわわ！オツパイが、オツパイが頭に当たって…………オツパイが柔らかくて…………オツパイに頭が挟まれたみたいで……………!

「…………ふう、終わりましたよ。鷹宮さ…………鷹宮さん？」

「……………」

「…………た、鷹宮さん!?!?なんか、顔がすごく赤いんですけど…………大丈夫なんでしょうか!?!?」

「……………」

「っ！た、鷹宮さん！鼻血が…………鷹宮さーん!?!?」

××気が付けば、俺は鼻血を噴射して後ろに倒れていた。

「んっ………」

目を開けると、鷺沢さんが心配そうな表情で俺を見ていた。なんか、息がしづらいな……あ、鼻にティッシュか。

「……良かったあ、心配しましたよ」

「……俺、寝ちゃってました？」

「………はい。突然、鼻血出して倒れたんです………」

……は、鼻血出して？それ俺、大丈夫だったのか？

「………そ、そうですか。すみません、お手数をおかけして」

「……大丈夫ですよ」

………何があったか、イマイチ記憶がない。なんかとてもいい思いをしてたと思うんだけど………。

頭に手を当てて起き上がると、おでこから何かが落ちた。

「？」

濡れたタオルだった。ふと横を見ると、布団の横にバケツが置かれていて、その中にはタオルが5く6枚入っていた。かなり心配を掛けてしまったようだ。

「………鷺沢さん、すみません。本当に」

「………いえ。大丈夫ですよ。それより、そろそろ食事にしましょう？」

「………そうですね」

鷺沢さんは今度こそ、うどんを作り台所に向かった。あー、なんでもか覚えてないけど、余計な手間を取らせちゃったなあ。随分と一生懸命看病してくれたみたいで、ありがたい反面申し訳ない。

「………何か、お礼しないとなあ」

布団の横にちやぶ台を置いて、うどんを待った。

数十分後。うどんが完成し、鷺沢さんが持って来た。

「………お待たせしました」

「あ、どうも」

鷺沢さんはちやぶ台の上にうどんを置いた。箸をもらい、うどんを

摘んだ。

「いただきます」

「……はい、召し上がれ」

一々、言うことが可愛いんだよ、あんたは。

ゾボツ、ゾボボツとうどんを啜る。あ、普通に美味いわ。ネギしか入ってないけど、風邪引いてるし天かすとか肉とか入れられてもこっちが困る。

「……………」

「……あ、美味しいですよ？」

答えると、また嬉しそうな顔になる鷺沢さん。ああ、本当可愛いなあこの子。正直、食欲はないけど、全部食べないとなんか悪いので無理矢理食った。

「……………」

「……お粗末様です」

鷺沢さんはうどんのお椀と箸を流しに出しに行くと、戻って来た。あらかた、看病といえる作業もやり終え、気が付けば時間も16時を回っている。鷺沢さんはそろそろ帰ってしまうかもしれない。

「……………」

……あれ、なんだこれ。何この感じ。まさか、寂しいとか思ってる？ いやいやいや、それはないだろ。高校ではいつも一人なんだぞ？ そんな奴が何を今更寂しがって……………。……ありえねーからマジで。

「……………鷹宮さん」

「は、はいっ」

「……………どうぞ、寝て下さい。何かあったら、私は横にいますから」

「……………あ、はい」

……………横にいてくれるのか。なんか安心した。いや、だから安心してなんだよ。アホか俺は。おかしい、絶対俺の様子おかしいから。

「……………鷹宮さん？」

「……………あつ、はい」

「……………どうかしたんですか？ 何か様子が……………」

「いえ、なんでもありません。暇だったら、ラノベ読んでて良いですよ」

「……あ、はい。ありがとうございます……」

鷺沢さんはさつそく、本棚で本を探し始めた。俺は目を閉じて、と  
りあえず眠る事にした。

××  
目が覚めた。つーか俺、最近寝てばつかだな……。いや、まあ風邪  
引いてんだから仕方ないけど。

けど、なんだ？なんか左手が重い。痺れたのかな……。そう思って  
左を見ると、鷺沢さんがこつちを向いて眠っていた。身体ごと横を向  
いていて、左手にはラノベ、そして右手は俺の左手を握って眠ってい  
た。

「……恋人ですか、あんたは」

本当に勘違いするからやめて欲しい……。いや、別に悪い気はしな  
いんだけどさ。鷺沢さんの周りには、色んなラノベが散乱していた。  
俺妹、はがない、化物語……。あ、化物語はラノベじゃねーや。しかし、  
何というか恋愛小説ばかり読んでんな。本当、女子って恋愛モノの話  
好きな。

「………さん」

「っ？」

「……たか、みや………さん………」

「っ！」

お、おい。なんで俺の名前を呼んでんだよ。どんな夢見てんの？  
ま、まさか……。まさか、俺と恋愛的な夢を……。!??

「………すてぃーるは、やめてください……。ぱんつ、かえしてください  
………」

「………」

……。…なんの夢を見てんだよこの野郎。大体、俺がスタイルやる  
なら背後を取って物陰に隠れてパンツ奪うわ。いや、そもそもパンツ  
引けるか分からんし。

「………この野郎」

俺も体を横にして、鷺沢さんの頬を突いた。……。や、突いたじや  
ねえよ。何してんだ俺。これ、セクハラだろが。ああもうっ、今日の

俺マジでおかしいぞ。何考えてんだよ。……いや、何も考えてないのか。いつもは考えてから行動してんのに。

「……………ま、バレなきやいつか」

風邪だ。風邪の所為だ。全部、風邪が悪い。俺は鷺沢さんの頬をそのまま突き続けた。そう油断した直後だった。

「んうっ……………？」

「あっ」

鷺沢さんが目を覚ました。俺の人差し指は鷺沢さんの頬に触れている。

「……………」

「……………」

ガツツリ鷺沢さんと目が合い、目をパチパチすること数秒、鷺沢さんの顔が急に赤くなった。

「っ!?？」 ↑俺の手を握って、俺に頬を突かれてる女子大生。

「あっ?？違っ、これは……………」 ↑鷺沢さんに手を握られ、鷺沢さんの頬を突いてる男子高校生。

直後、鷺沢さんは頬を突いてる俺の手を見た後、俺の手を握ってる自分の手を見て、慌てて手を引っ込めながら立ち上がった。

「っ! ち、ちがっ……………これはっ……………!?？」

「す、すみません鷺沢さんっ。ちよつと魔が差して……………」

「……………ッ!」

突かれた左頬を摩りながら、鷺沢さんは慌てて俺の部屋を出て行ってしまった。何やってんだ俺……………。

とりあえず深く反省し、後日、お互いに誤解を解いた。

## 事務所では（2）

文香が千秋の部屋を飛び出した翌日、事務所のレッスン終了後、沈む顔でラノベを読む文香の姿があった。それを見て、一発で様子がおかしいと見抜いた奏は、声を掛けてみた。

「文香、何かあったの？」

「……………奏さん」

「確か、昨日は鷹宮くんのお見舞いに行っていたんじゃないかかしら？」

「……………鷹宮さん……………」

名前を復唱すると、顔を赤くして俯く文香。一発で「あ、これ何か面白いことあったな」と見抜いた奏は聞いてみた。

「何、どうしたの？好きになっちゃったのかしら？」

「つ……………ち、違います！……………少し失礼な態度をとってしまって……………」

「失礼な態度、ですか？」

「……………はい……………つて、ありすちゃんいつの間に」

「詳しく話してください」

いつの間にか現れたありすに言われるがまま、文香は説明した。昨日、あったことを丸々。すると、奏もありすもジト目で文香を睨んだ。

「……………あんたら、付き合っていないでそれやってるのよね？」

「……………付き合う？……………いえ、昨日ずっと私、鷹宮さんに付き合ってたけど」

「そういう意味じゃなくて……………いや、今の反応で分かったけれど」

そこを指摘しても無駄なような気がしたので、奏もありすも敢えて黙ってる事にした。

「……………まあ、ようは恥ずかしかったってことよね？」

「……………はい」

「お互い様なんだし、気にしなくて良いんじゃない？」

「……………だ、ダメです！手を握ったまま寝るなんて……………恥ずかしすぎます……………！」

「いや、頬をツンツンの方が恥ずかしいと思うけれど……………」

「っ……………！っんっん……………」

「あ、そっちでも照れてるのね……………」

奏は困ったようにありすを見た。ありすは顎に手を当てて目を閉じて考えた後、結論を出した。

「……………わかりました。つまり、鷹宮さんをとつちめれば良いんですね?」

「……………な、なんでそうなるんですか!?!?」

「文香さん、鷹宮さんの番号を教えてください。私から言わせてもらいます」

「……………だ、ダメですよ！何を勝手に……………!?!?」

「いいじゃない。言っちゃいなさい。番号は……………」

「…ちよつ、奏さん!?!?ていうか、なんで番号知ってるんですか!?!?」

「昨日暗記した」

奏に番号を教わり、ありすはスマホを耳に当てた。

『……………もしもし?』

「鷹宮さんの携帯でしょうか?私、橘あり」

ぶつと切られた。ありすは真顔になった後、もう一度電話をかけた。

『……………もしもし?』

「鷹宮さんの携帯でしょうか?私、橘」

また通話は切れた。泣きそうになるありすに奏が言った。

「……………あのね、ありす。知らない人からいきなり電話かかって来たら誰でも切るわよ」

「かけろって言ったのは奏さんじゃないですか!」

「まずは文香の友達とか言わないと」

「……………そ、そうですね」

納得したありすは、再び電話をかけた。

『お掛けになった電話番号は、現在電源が入っていないか、電波の届かないところに……………』

それを聞いて、涙目になりながら文香を見上げるありす。それを見て怯んだ文香は、ため息をついて項垂れた。

「……諦めて下さい。電源を切られてしまっただけです。どうしようもありません……」

「……分かりました」

涙目のありすは頷くと、文香を見上げた。

「文香さんに言いたい事を言います」

「……はえっ?」

「恥ずかしかったのは分かりますが、その場で逃げちゃダメです。そもそも、先に手を握っていたのは文香さんなんですから」

「……へっ?は、はい……」

「文香さんはその人の事、好きなんじゃない?」

「ふえっ!??だ、だから別に好きってわけじゃ……!!?」

「……嫌いなんですか?」

「……あ、ああ……そういう意味、ですか。はい、好きです……」

「あら?どういう意味だと思ったのかしら?」

「……うっ、うるさいです奏さん!」

「文香さん、真面目に聞いてください」

茶々を入れる奏を黙らせると、小学生に黙らされる文香。

「とにかく、看病すると言ったのに途中で逃げてしまったんですから、謝った方が良いと思います」

「……はい。分かりました」

小学生のマジ説教を本気で受け止めてる大学生という、シニカルな絵面を見ながら奏は若干呆れつつも、心の中ではかなり爆笑していた。

凹んでる文香を見て、ありすは十分反省したと見て、別の話題を持ち出した。

「……それで、鷹宮さんってどんな人なんですか?」

それを聞いて、文香は困ったように首をかしげた。

「……どんな人、ですか……?」

「はい。奏さんから、文香さんのプライベートを任せられた男性ですから、気になります」

「……と、言われましても……」



文香は顎に人差し指を当てて考えた。だが、中々口から何も発せられないので、焦れつつなくなった奏が聞いた。

「何よ、何も浮かばないの?」

「……いえ、優しい方というのは上がるんですけど……他に、ですか?」

「そうよ。昨日、一昨日と半日連続で一緒にいたんだから分かるでしょ?何かないの?」

「……………」

文香は腕を組んで答えた。

「……………そう言われましても……原付の免許を持ってて、時には私の事を叱ってくれて、でも優しく、その割に風邪引くと弱々しくなつて、寝顔が可愛くて、意外とすぐ照れる……という事以外はあまり浮かびませんね」

「……………」

「……………」

それを聞いて、奏もありすもジト目になった。で、お互いにヒソヒソと話し始めた。

「……………まるで彼氏の惚気話を聞かされた気分ね」

「……………普通の友達同士ではあり得ない情報を知ってる事に気付いてるんでしょうか」

「……………ねえ、これ付き合っていないの?少なくともどっちか恋愛感情持っていないの?」

「……………でも、文香さんそういう話は疎そうだし、鷹宮さんに惚れてたとしても気付きそうにないですよ」

「……………カマかけてみる?」

「……………任せてください」

「あ、あなたがやるのね」

「あの、なんか失礼な話してませんか?」

文香の質問を無視して二人は離れると、ありすが咳払いをして切り出した。

「文香さんは鷹宮さんのこと、好きではないんですか?」

「直球じゃない！カマかけるの意味知ってるの!?!?」

思わず奏は大声でツツコンでしまった。

「…………カマですよ。付き合ってる、とは聞いてませんから」

「むしろ鎌よ！それも死神の!」

よくよく考えれば、ありすは小学生。カマかけるなんて出来るはずがなかった。自分のミスに奏が後悔していると、文香は割と冷静に答えた。

「…………ご友人、としては好きですが…………恋愛的な意味では普通？ですよ。私、あまり恋愛というのはよく分かりませんし」

「……………」

少し頬は赤いが、本日二度目の質問だからか、ほとんどノーマルな返答。ここまで直球で聞いてしまったら、もう変化球は効かない。なら、ボール球を空振りさせようと奏は考え、ありすと交代してピッチャーマウンドに上がった。

「なら、鷹宮くんを見てドキドキしたりは?」

「…………しません、けど」

「鷹宮くんと触れ合いたい、とは思ったりは?」

「…………鷹宮さんが寝てる時なら、頭撫でてあげたりしたいです。でも、起きてる時は、その…………は、恥ずかしいので余り…………」

「鷹宮くんがお店に来ると嬉しい?」

「…………いえ、基本的に会う時はラノベを返す時だけです。前もって連絡してあるので嬉しいも何もないです」

これは違うか…………と、奏は諦めかけたが、念のために4球目を投げた。

「鷹宮くんが他の女の子と付き合ったりしたらどう思う?」

「つ…………そ、それは……………」

ようやく、当たりのような反応をした。文香はボール球に手を出し、大きく引つ張られた打球はファールボール。

「どうなの?例えば…………私と鷹宮くんがキスしたら」

全く同じところに投げると、文香は少し不機嫌そうな表情になった。

「…………嫌です。少し…………」

「…………ふーん？」

「…………でも、鷹宮さんは別に私の所有物ではありませんし、もしそう  
なったら…………またお店のお客様として来ていただければそれで良い  
です。ラノベの感想は…………他の方と話すしかありませんね…………」

そう言う割に、辛そうな表情を浮かべる文香。これは正直、判断に  
迷った。もしかしたら、ラノベの感想を言い合える仲間は千秋しかい  
ないから、それを無くしたくないだけかもしれない。

まだ、判断するのは難しいか…………と、奏は判断した。無理に「好き  
なんでしょー？はつきり言いなよー」なんて言えば、文香を不愉快に  
させるかもしれない。ていうか、不愉快にさせると確信があった。

「そう…………。悪かったわね、変な事聞いて」

「…………いえ。大丈夫ですよ」

「晩御飯食べに行きましょう？お詫びに奢るわよ」

「…………本当ですか？」

「ええ。ありすも来る？」

「行きます！」

即答され、奏は財布の中を確認した。場所によるけど、多分大丈夫  
かしら…………？なんて思った時、文香が奏の制服の裾を引っ張った。頭  
上に「？」を浮かせながら振り返ると、不安そうな顔で聞いてきた。

「…………鷹宮さんのこと、取りませんよね？」

「大丈夫よ、取らないわ。安心しなさい」

あまりにも不安そうな表情だったので、奏は文香に優しく微笑ん  
だ。とりあえず、この手の話で文香をからかうのはやめよう、と決め  
た。

夏になつてもオタクのすることは変わらない。  
大人しい奴ほど怒ると怖い。

七月、それは火炙りの季節である。太陽は全力で自己主張をして地球を照らし、七月に入ってから熱中症というマップ兵器でぶつ倒れた人は400を超える。空からの灼熱光線と、地面の反射熱の相乗効果で発生する、灼熱反射ダブルバーガーで400人もの人が焼かれたのだ。

そんな石川五右衛門を讃えよう、みたいな季節の中、俺は期末テストを終えてようやく夏休みである。いや、正確にはテスト返却期間があるため、それを超えて夏休みだ。

こう見えてこのスポーツ高校に俺が入ったのは、剣道部に入るためであり、高一でやめたとはいえ、そのための体作りもしていたため、熱中症などで倒れることはなかった。それでも、暑いものは暑い。汗だくの身体を引き摺って、俺は本屋に入った。ひゃー、涼しいぜー。

「……いらつしやいませ。鷹宮くん」

品出しをしていた鷺沢さんが挨拶してくれた。まあ、品出しと言っても本棚に入荷した本を詰めるだけなんだけどね。

「手伝いますよ。ジャンプコミックはあつちで良かったですよね？」

「……あ、すみません。ありがとうございます。大丈夫ですよ」

最近、この本屋に漫画コーナーが出来た。それによって客層の範囲が広くなり、そこそこ客も来るようになった。お陰で、俺もずっと鷺沢さんと話してる時間はなくなってしまった。

さらに、それによって鷺沢さんの二次元の範囲にもコミックは追加され、最近はワンピースやナルト、ドラゴンボールといった王道ジャンプ作品に熱中している。アスマ隊長が死んだ時、ガチ泣きして慰めるのが大変でした。

本棚に本を並べ終え、鷺沢さんはレジに戻り、俺もそつちに戻った。

「……………ふう」

一息ついて座る鷺沢さんに、俺は鞆の中から缶コーヒーを取り出し

て渡した。

「差し入れです」

「……あ、すみません。わざわざ」

「いえ、今日も暑いですし」

「………お店の中はクーラー入ってるので、あまり苦ではありませんけどね」

「や、ほら………脱水症状とか怖いでしょ」

「………でも、汗とかあまりかきませんし、体外に水分が流れることもあまりなくて……」

「………何も言わずに受け取って下さい」

「………ふふ、冗談です」

からかわれたのかよ……。最近、鷺沢さんも冗談を言うようになった。まあ、真顔だからすぐわかりにくいんだけどね。それでも、俺に少し心を開いてくれたようで嬉しい。

ナルトの単行本を読みながら、鷺沢さんは呟いた。

「………それにしても、ナルトの世界は戦ってばかりですね」

「? そりゃ、バトル漫画ですから。戦わないと売れないでしょ」

「………でも、なんて言いますか………少しは日常パートがあっても良いと思うんです」

あー、そういう意味か。まあ、気持ちは分かるがな。アニメではそういうのあったかもしれないけど、漫画では厳しいだろうなあ。……いやそうでもないか?

「………ないこともないかも」

「………えっ? あるんですか!?!」

「はい。いや、原作じゃないんですけどね。俺も詳しいわけじゃないからよく知らないんですけど………夏コミ?とかいうのならあるかも……」

「………夏コミ、ですか?アメコミみたいなの?」

「いや、コミックの名前じゃなくて夏のコミックマーケットって奴です。正式名称は俺も知りませんが、好きなアニメの二次創作をファンの人達が漫画で描くんですよ。同人誌って奴」

「……………二次創作、ですか……………？あつ、俺妹とかメイドラゴンとかに載ってた？」

「はい。あれ」

「……………いつですか？」

聞かれて、俺はスマホを取り出した。

「つと……………8月11日から3日間ですね」

「……………少し待っててください」

鷺沢さんは真面目な顔で手帳を取り出した。おい、待てまさか行く気か？行く気なのか？

「……………三日連続とも空いてますね」

「あの、鷺沢さん？」

「……………なんですか？」

「行きたいんですか？」

「……………行きたい、です」

「同人誌くらい、ネットとか秋葉原でも買えますよ？」

「……………いえ、でもその『なつこみ』というの気になりますし……………」

「……………」

マジか……………大丈夫かな。中学の時のクラスメイトは「ヤバイ、とにかくヤバイ」とか言ってたけど……………。その「ヤバイ」が「楽し過ぎてヤバイ」なら良いんだが……………嫌な予感しかしねえんだよなあ。

「……………俺も一緒に行っても良いですかね」

「……………鷹宮くんも、ですか……………？」

「あー……………俺も欲しい本があるんで」

嘘です。俺は原作やアニメで満足するタイプの人なので、二次創作まで金払って読もうとは思わない。ただ、鷺沢さんが心配なだけだ。

「……………良いですよ。私も、鷹宮くんと一緒に行くつもりでしたから」  
「っ」

……………それは、どういう意味なのだろうか。いや、深い意味はないんだろうけどさ。あークソっ、一々意識すんなよ俺。

「……………鷹宮くん？」

「いえ、なんでもありません」

×とりあえず、うち帰ったら全力で夏コミについて調べなければ。

×テストが返却された。相変わらずの真夏の中、俺の中の体温は急激に冷え込んだ。……………これは、ヤバイ。中間良かったからって油断し過ぎた……………!

中間と期末の合計が60点いってない科目は再試だ。しかも、実施日は8月11日。

「……………」

さぼろう。鷺沢さんとの夏コミの方が大事だ。

俺はそう決意すると、返却されたテスト用紙を半分の半分の半分の半分の半分に折り畳み、ジャスタウェイの形をしたペンケースの中に入れた。よし、今日はデスノートの一卷を持ってホームセンターに行かないと。ボールペン以外で引き出しの底から開けようとする引火する仕組みを実行する時が来た。

学校が終わり、ロッカーの中の教科書を持って帰るために鞆に入れて帰宅した。幸い、ラノベやマンガ以外で金は使っていないので、あの仕組みを作れるほどの金はある。確か、引き出しを二重底にして、一番下の底に小さな穴を空けるんだったよな。後はガソリンとビニール、だっけ?ボールペンの芯以外で開ければ静電気で引火するような仕組みを作るんだ。まあ、詳細は1巻に書いてあるし、大丈夫だろう。そんな事を考えながら、自宅に到着。すると、玄関の前で誰かが座り込んでるのが見えた。誰かがつつーか、鷺沢さんだった。

「つて、鷺沢さん!?何してるんですか!?」

「……………あつ、鷹宮くん。こん、にちは……………」

「いや、こんにちはじゃなくて……………!げっ、汗止まってるし!」

「……………少し、お話が……………ありまして……………」

「いやお話後でいいですから!」

俺は玄関の鍵を開けて、鷺沢さんに肩を貸すと部屋の中に入った。速攻でクーラーをつけると、鷺沢さんにポカリを渡した。それを鷺沢さんは一口で飲み干した。

「んっ……………くっ……………ふう……………。生き返りました……………」

「…………ふう」

良かった、復帰したみたいだ。けど、その……なんだ。目のやり場に困るな……。汗ばんでてブラジャー透けてて……いや、悪くないけど、ここで黙ってるか言うかで人としてが別れるよね。

「…………鷺沢さん」

「…………？　なんですか…………？」

「その…………風呂貸すから、シャワー浴びた方が……………」

「…………？」

「ほ、ほら、汗すごいですし。バスルームあそこなんで」

「……………あ、そうですね。分かりました」

「…………ふう」

鷺沢さんは俺の指差す先のバスルームに入った。俺は何となくホツとしつつ、タンスを開けた。もう一度、汗だくの服を着せるわけにはいかないの、替えのジャージを出した。

シャワーの流れる音が聞こえたので、俺は洗面所に入ってジャージとバスタオルを揃えて置くと共に、鷺沢さんの服を回収した。……………薄いピンク色の下着は見なかったことにしよう。

鷺沢さんの服をハンガーに干して、窓際にぶら下げると、リセットシュを二発ぶつ放した。何時に帰るか知らんけど、これで大丈夫だろう。

続いて、冷蔵庫を開けて氷をコップの中に入れ、麦茶を注いだ。ちやぶ台を出して上に乗せると、皿を出してポテチ、ポツキー、カール（買いだめしといた）を盛り付け、ちやぶ台の下に「人をダメにするクツション」と普通の座布団を設置。

最後にテレビをつけてプレ4の中に「涼宮ハルヒの消失」をセットした。これぞ「鷺沢フォーメーション」である。梅雨だった季節に、万が一、雨に降られた鷺沢さんがうちに来た時に備えて、想定しておいた。なにやっつてんだよだから俺は。

すると、鷺沢さんが洗面所から顔を出した。何故か顔が赤い。

「……………あ、鷺沢さん……………」

「……………」



鷺沢さんは何故か不機嫌そうな顔で俺を睨んでいる。え、俺なんかした？むしろ、家主としては完璧だったと思うんだけど……。内心、だらだらと汗をかいて焦っていると、鷺沢さんはボソリと呟いた。

「……………えっち」

「えっ!? な、なんで!?」

ちよつと罵り方可愛い! いやそうじゃなくて!

「……………私の服、返して下さい」

「……………? ……あつ」

そういう事か! ジャージ置いてくって言い忘れた!

「いや、違います! そんなセクハラ紛いな悪戯じゃなくて……………! 俺のジャージ置いておいたから、着て欲しかったんですけど……………。ほら、汗で濡れた服着てたら風邪引いちゃいますし……………」

「…あつ、そういう……………! す、すみません! 早とちりで……………!」

「い、いえ、俺も言葉足りなかったですし……………」

もしかして、ジャージ置いてある場所わかんなかったのかな。俺は立ち上がって洗面所に向かって歩いた。

「あ、ジャージなら洗濯機の上に……………」

「……………ふえっ? ……あつ、ま、待って! 来ないで!!?」

「……………えっ」 ↑痛く傷ついた。

「……………あ、あのつ……………今、裸なの、で……………」

「あつ……………良かった……………」 ↑ホツとした。

「……………な、何も良くありません!」

「え? あ、いや違って。嫌われたのかと……………や、風邪引くから先着替えて下さい」

「……………そ、そうですね……………。すみません」

「い、いえ……………俺の方こそ、堂々と裸見ようとしてしまいましたし……………」

「……………み、見たんですか!?」

「いや違います! いいから着替えてください!」

「……………あとでどういう意味か聞きますからね」

ああ……畜生、なんだこれ。なんでこんな恥ずかしい目に……。それにしても、さっきの「来ないで!!？」は応えたぜ……。軽く死ぬかと思いました。

……しかし、よく考えたら惜しいことしたかもしれない。あれ、あのまま進んでたらすごいものが見えたかもしれないのに。

軽く後悔してると、鷺沢さんの着替えが終わり、ようやく洗面所から出て来た。

「……鷹宮くん、もしかしてシャワー浴びてるところ覗こうとしたんですか?」

「……や、違います。さっきのはそういう意味じゃ……!」

反論しようとした直後、すごいのが出て来た。袖の辺りはブカブカの癖に、胸だけ閉まらなくて、すごい押し寄せられたはち切れんばかりの鷺沢さんのジャージ姿。何それ超エロい。

「……………」

「……鷹宮くん?」

……でかいでかいとは思ってたが……まさかあんなもんを隠して持っていたとは……。最早、兵器だよあれは。

「……………鷹宮くん?聞いてますか?」

「はっ!」

「っ?」

だ、ダメだダメだ!鷺沢さんの純粋な目を見ろ!身体はどすけべでも中身は小学生並みに純真な人なんだぞ!そんな子を性的な目で見るとるな!

俺は壁の前に立つと、思いつきり頭を打ち付けた。

「っ!? た、鷹宮くん!? 何してるんですか!?」

「……………大丈夫です。煩惱を打ち消しました」

「……も、もう……! たまによく分からないんですから! 少し待って下さい」

鷺沢さんは立ち上がって、何処からか湿布を持って来た。俺を座らせて、俺の前で膝立ちになると「動かないでくださいね……」と前置いてから俺のおでこに湿布を貼った。ありがたいけど、目の前で巨乳

がふるふると震えてっから。そっちが動かないで。

ひやつとおデコに湿布を貼ってもらい、鷺沢さんは膝立ちをやめて俺の前に座ったまま、両頬に手を当てて微笑んだ。

「……………よし、これで大丈夫です」

「……………」

「……………もう、お世話を焼かさなくてください」

頭を撫でながら言われ、なんか気恥ずかしくなった俺は小声で呟いた。

「……………鷺沢さんにだけは言われたくないし」

「っ！ それどういう意味ですかっ?」

「……………いえ、なんでもないです」

「……………なんでもなくないです!」

「……………いえ、速水さんともう一人に『保護者』とか言われちゃう鷺沢さんには言われたくないと思ひまして」

「……………カッコつけて雨の中、バイクで帰って風邪引いてた人に言われたくないですっ」

「別にカッコつけてねえし!」

「……………カッコつけてました!」

「……………」

「……………」

睨み合うこと数秒、なんかいい歳してバカバカしくなった俺は「ふはっ」と微笑んだ。鷺沢さんも同じだったのか、クスツと微笑んだ。

「……………お互い様ってことですね」

「そうですね」

それより、要件を聞こうか。

「それで、何の用だったんですか?」

「……………いえ、夏コミについて聞きたくて……………。私の部屋にはパソコンがありませんから、鷹宮くんの部屋で一緒に調べたいと思ったんです」

「わかりました。じゃ、パソコン用意するんで待ってて下さい」

「……………あの、鷹宮くん」

「? なんですか?」

「……あれ、学校の鞆、ですよね? さっき持ってましたから……」

「あ、はい。そうですけど」

「……教科書とか入ってるんですか?」

「入ってますよ」

「……現代文も?」

「はい」

「……見せてもらっても良いですか?」

「いいですよ」

ふむ、流石と表現していいののかは分からないが、やっぱラノベ以外にも興味あるんだな。鷺沢さんは俺の鞆のチャックを開けた。

「……学校専用の鞆とか懐かしいです……」

……あれ? なんか忘れてるような……。今日、確か鞆の中に隠さなきゃならないものが……。

「……えっ、と……現代文の……」

今日って学校何しに行っただっけ……。授業はなくて、一斉にテスト用紙を返す日の……。

「……あ、これか」

テストを、返す日……。確か、テストはアフターウオーの如くひさんな世界で……。

「……? 鷹宮くん、これなんですか?」

ジャスタウエイの、ペンケースの中……。!!?

声をかけられた直後、俺は横を見た。ジャスタウエイは、鷺沢さんの手の中に……!」

「そいつに触れるな! 爆発するぞ!!?」

「へっ!?? ば、爆発!??」

これで鷺沢さんは本当に手を離すんだから可愛い。まあ、本当にその場で手を離しやがったもんだから、ジャスタウエイは床に落ち、頭が取れて中身を全部ぶちまけた。つまり、俺の悲惨なテスト全部。

「……………これは?」

鷺沢さんはめちやくちや折られた紙を開いた。俺はその場で倒れ

こんで、狸寝入りを決め込んだ。

「……………」

「……………」

……………嫌に静かだな。何が起こっている……………?

鷺沢さんを確認しようと薄眼を開けると、目の前に鷺沢さんの顔があった。

「っ!?」

「……………起きましたね。ていうか、起きましたね」

「……………はい。起きてました」

ち、近いよ……………。頼むから異性としての意識をもう少し待ってくれ……………。いや、そんな場合じゃないな。鷺沢さん、すごい不機嫌そうな顔で俺を睨んでるもん。

「……………鷹宮くん」

「は、はいっ」

「……………正座しなさい」

「……………はい」

正座する俺の前に並べられるテスト用紙。俺はそれを眺めた。

現代文：96点 古典：7点

数学Ⅱ：4点 数学B：9点

生物：8点 化学：2点

日本史：5点 世界史9点

英語(W)：91点 英語(R)：93点

保健体育：6点

「……………なんですか?この点数」

「……………」

黙って目を逸らした。

「……………黙ってないで答えて下さい。この点数はなんですか?と聞いてるんです」

「……………油断しただけなんです。中間テストがまあまあ良かったから……………」

「……………そんなの言い訳になりません」

「……………はい。すみません」

俺が頭を下げると、鷺沢さんは大きくため息をついた。

「……………この点数だと、再試ありますよね」

「……………いえ、ないです」

「……………ありますよね？」

「……………あります」

「……………いつですか？」

「……………8月15日です」

「……………いつですか？」

「……………8月11日です」

「……………」

なんでこの人は俺の嘘を簡単に看破できるんだろうか……。どこまで俺のこと詳しいんだよ。

「……………鷹宮さん。再試科目は一桁の奴、全部で間違いないですか？」

「いえ、中間期末の合計60点以上ならセーフなので古典だけです」

「……………分かりました。私が面倒見ます」

「……………はっ？」

「……………再試までに、私が古典を教えてあげます。それで合格してスッキリしたら、残り2日の夏コミに行きましよう？」

「……………」

良い人だなあ、この人は本当に。なんでこんなに良い人なんだろうか。普通、こんな風に面倒見てくれる人はいない。出会ったばかりなら尚更だ。あ、いやもう一ヶ月近く経ってるから、出会ったばかりではないけど。

「……………わかりました」

「……………では、早速今日からやりましょう」

「えっ？き、今日から……………？」

「……………はい。再試まで、1日も無駄に出来ませんから」

……………あ、なんか嫌な予感がする。こう、スパルタ的な……。悪意がない分、余計に怖い。俺は引きつった笑みを浮かべながら、静かに覚悟を決めた。

携帯以上の文明の利器は存在しない。

勉強が出来るようになるには何をするか、という話はよくある。ものを覚えるために、リズムに乗せるだとか、歌に合わせてだとか、色々工夫するとも聞く。

だが、そのどれもが通用しないと俺は確信している。何故なら、物を覚えるには結局、それに対する興味があるか否か、だからだ。例えば、銀魂。面白い漫画だ。ロングフレーズ台詞が多い。でも、面白い、楽しい、興味がある、だからどんなに長い台詞でも覚えられる。俺が「寿限無寿限無うんこ投げ機おとといの新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンクⅡフェザリオン、アイザックⅡシュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二は逆剥けが気になる感情裏切りは僕の名前を知ってるようで知らないのを僕は知っている留守するめメダカ数の子肥溜めメダカ……今のメダカはさつきと違う奴だから、池乃メダカの方だから。ラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペペペペペペペ」は30分で覚えた。

だが、目の前の「祇園精舎」はどう足掻いても覚えられそうになかった。興味がないんだもん。

そして、さらに鷺沢さんの教え方。なんと、質より量だった。

「……覚えるまで、ノートに書き写してください」

まあ、控えめな言い方で良くそんな事言えるもんだ。鬼かよ本気で。

「……休憩にしませんか？」

「……まだ始めて10分です」

「……むう」

勉強嫌だ……。疲れたよ……。ていうか、鷺沢さんはさつきから本（ワールドトリガー）読んでるだけだし。……むかつく。

「あ、その後エネドラ死にますよ」

「っ！ な、なんでネタバレするんですかっ？」

「あ、いや口が滑りました」

「……むー。そういう意地悪するなら教えてあげませんよ」

「うつ……………」

それは困る。いや、正直軽く勉強すれば点が取れないこともないけど、歳上の女の人にマンツーマンで勉強教えてもらう機会なんて、多分一生ないだろうから、今のうちにあやかっておきたい。

「……………ごめんなさい」

「……………いいんです。それに…学校のテストの古典なんて、暗記で全部解けますから、漫画読みたいがためにノートに写させてるわけじゃないんですからね……………」

「……………はい」

……………やるしかないのか。俺はため息をついて、ノートに写しを始めた。

それから約一時間半、ようやく暗記出来るようになった。

「……………お、終わりました……………」

「……………ん、お疲れ様です。では、どうぞ」

「……………祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響き有り、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ」

「……………はい、よく出来ました」

ふう……………つたく、こんなもん覚えて将来なんの役に立つのか。テスト以外で役に立たねーだろ。マジで学校滅べ。

すると、鷺沢さんは俺の隣に正座して、シャーペンを持った。

「……………では、現代語訳を説明しますね」

「は、はい。鷺沢先生」

「……………せ、先生なんてそんな……………」

満更でもないのかよ……………。

「……………そ、そうですね。今日は私のこと、鷺沢先生と呼んで下さい」

「えっ……………でも、鷺沢先生って長いし言いにくいですよ。っーか『さ行』多過ぎ」

「……………い、嫌なら、その……………文香、先生でも……………」

「っ……………」

な、何を言い出すんだこの人は……………そんなん、俺に呼べるわけ



ねーだろ…………。

チラツと鷺沢さんを見ると、顔を真っ赤にしてる癖に期待したような眼差しで俺を見ていた。相変わらず、反則級に可愛い。

「…………ふ、文香、先生…………」

「……………！　じゅっ、授業始めましょうかつ……………」

鷺沢さんは照れた顔を背けるように前を向いてからノートを見下ろした。……………その、なんだ、文香先生。胸を机の上に置くなよ……………ただでさえ、俺も恥ずかしくて顔見れないのに、目のやり場がさらに困るだろうが……………。

鷺沢さんは説明を始めたのだが、俺は未だに目のやり場が決まらなくて、話が耳に入って来なかった。

……………にしても、大きいなあこの人の胸。大玉螺旋丸なまである。一回でいいから突いてみたいものだが、突いたらその時点で全部終わりだよなあ……………。俺と鷺沢さんが付き合えば良いんだけど、それは絶対あり得ないだろうし。ホント、人生ってクソゲーだわ……………。まあ、この胸を後頭部で触ることが出来ただけでも、俺は運の良い方だと思おう。柔らかかったなあ……………ぐへへ。

「…………鷹宮くん？先生の話、聞いてます？」

「はっ、き、聞いてますよっ？」

「……………なら、いま先生が説明したところを説明して下さい」  
「……………」

なんか、本当に先生みたいになって来た。本人は既に先生になり切ってるし……………。

「……………すみません、聞いてませんでした」

「……………言いますが、再試受からなかったらラノベ禁止しますからね」

「や、やります！ちゃんとやります！」

それは困る。鷺沢さんとの唯一の繋がりが切れてしまう。さて、徐々に本気で勉強するか……………!!??

気合を入れた直後、鷺沢さんは顔を赤らめて俺の耳元でつぶやいた。

「……………あ、あと……………女性は視線には敏感、ですから……………その、気を付けて、下さいね……………」

「……………バレてました?」

「聞くと、無言で頷かれた。とりあえず、本気で死にたくなくなりました。」

「×× 鷺沢さんは大学生なのに、割と忙しい人種だ。学校、バイト、それにもうひとつ何かしているらしい。ラノベ貸したり返してもらったりする時間がたまに夜の9時半になったりするし。でも、向こうから言ってこないということは、あまり知られたくない事なんだろうから、俺は触れないことにしていた。」

「で、今は鷺沢さんに出された宿題を片付けていた。うん、正直余裕だな。古典だって、別に苦手というわけではない。ただ、やる気がないだけだ。だけど、鷺沢さんによつてやらざるを得ない状況にさせられれば、点数を取るの is 容易い。」

「今日は鷺沢さんは夕方から来てくれるらしい。いや、夕方からなら来させるなよとか思うかもしれないけど、俺だって断ろうとしたんだよ? だけど「……………私が行きたいんです。鷹宮くんと勉強したいです」だそうです。どんだけ文香先生呼び気に入ってるの。最近文香先生って呼ばないと返事してくれないし。」

「そんな事を思っていると、スマホが震えた。マナーモードにすることを覚えたから、着信音は鳴ってない。でもこれ、普通に目立つよなこの音……………」

「ちなみに、電話の相手は鷺沢さん。ていうか、俺のスマホに電話してくる奴なんて鷺沢さんしかいない。」

「もしも? 文香センサーですか?」

『……………文香先生?』

……………あれ、別人の声。

『私、速水だけだ。文香先生ってどういう意味?』

「……………なんで、鷺沢さんの電話から……………」

『借りたの。文香先生って何?』

「……………」

『あ、通話切ったら今からあなたの家に三人で行くから』

「……………三人？」

『私と文香とあります』

「あります？誰ですか？」

『私と文香以外にもう一種類声聞こえた事ない？』

「あー。前にイタズラ電話して来やがったクソガキですか」

『ガキじゃないです!!？もう私は12歳です!』

ガキじゃねーか。

『あーはいはい。ありすちよつと落ち着いてねー』

「眺みたいな子ですね」

『眺？何それ?』

「一人前のレディーの象徴ですよ。気になったらググってみて下さい」

『分かったわ。後で調べてみるわ』

「じゃ、俺勉強してるんで。失礼しま」

『待ちなさい。こつちの要件が済んでないわ』

「……………」

逃げられなかったか……………。この人は電話越しの三人の中で一番の強キキャラかもしれないな。

「で、何の用ですか？」

『んー、まずは文香先生ってどういう事?』

しつつけえなこの野郎……………。まあいいや、隠すような事でもないし。

「や、俺古典だけ再試になったから鷺沢さんに教わってるんです。そしたら、なんか鷺沢さんが『文香先生と呼んで下さい』って…………。」

『あー…………うん。そういう事ね』

「まあ、それだけです」

はっ、残念だったな。想像以上に想像以下で。世の中、そんなもんなんだよ。

「で、それより何の用ですか？」

『んー、いや数日前から文香がすごい浮かれてて、私にある事をお願い

して来たから、何かあったのかしらと思って、文香がレッスンしてる間に鞆から電話を拝借したの』

「えっ、それ窃盗……」

『借りただけよ?』

それ以上聞けば殺す、というオーラをビシバシと出して言われれば、俺も従わざるを得ない。つーか、ある事ってなんだ?そこが気になるけど、伏せたってことは聞いても無駄だよなあ。

それより、話を戻そう。

「何があつたか、でしたっけ?」

『ああ、いや良いわ。さっきの話聞いて何となくわかったから』

「はい?」

『あ、そうだ。あなたのアドレス教えてくれない?』

スパツと話題をそらされた。さっきの話で何が分かったんだろうか。まあ、考えても分からないし、問い詰めたりはしないけど。で、なんだっけ?アドレス?

「なんでですか?」

『ほら、文香の話をするのに、一々、携帯を盗むのは面倒でしょ?』

「あんた、今普通に盗むって言ったか?」

『気軽に連絡取れた方が良いもの』

「……………え、でも俺速水さんの顔も知らないんですけど」

『大丈夫よ、私は鷹宮くんの顔知ってるもの』

「えっ?なんで知ってるの?ていうか、何一つ条件クリアされてませんよそれ」

『良いじゃない。文香の携帯番号知ってるだけでもかなりすごい事なのに、私のアドレスまで知れるのよ?』

「……………はっ?」

こいつ何言ってるんだ?自分にどんだけ価値があると思ってるの?アイドル気取りですかコノヤロー。まあ、鷺沢さんの番号には確かにそれだけの価値はあるけど。

『奏さん…………』

『ん?…………あらホント?鷹宮くん、ありますもアドレスだけなら教えて

くれるってよ?』

「……………あー、もしかしてアレか。オタクの癖に女の子のアドレスを三人も手に入るよ、的な意味か?どこまでこの人、オタクに偏見持つんの。」

「いや、別に同情で女子のアドレスなんてもらいたくないですよ」

『……………は?同情?』

「速水さんだって、オタクの連絡先なんていらないでしょ?」

『……………あー、鷹宮くん本当に知らないのね……………』

「? 何がですか?」

『いえ、何でもないわ。とにかく、私が鷹宮くんのアドレス知りたいし教えてくれない?』

「……………まあ、良いですけど。悪用とかしないで下さいよ」

『しないわよ。私のアドレス今から言うから、メモしてくれる?後でメールくれれば良いから』

「あ、そっちなんですわ。了解です」

二人ぶんのアドレスをノートにメモした。……………でも、確かに俺が女の子のアドレスを合計三人も手に入れるなんて……………スゲエ奇跡だわ。一人小学生だけだ。

『……………じゃ、そろそろ文香戻って来そうだから、切るわね』

「あ、はい」

『あ、その前にひとつ』

「?」

『私、あなたと同じ年だからタメ口で良いわよ』

「えっ……………そ、そうなんですか?」

『ええ。またね』

通話は切れた。ていうか、結局なんの電話だったんだ?

宿題を終わらせ、俺は寝転がった。なんだかんだ、明日は再試の日だ。夏休みは大きくスタートダッシュで躓いたが、この後は鷺沢さんと夏コミだ。なんだかんだ言っつて、楽しみである事この上ない。

「……………うっし、頑張る」

再試の再試は最悪だ。今のうちに油断なく少しでも多く勉強しよ

う。

××

翌日。再試が終わった。結果は余裕で満点で合格。先生に「なんでこれだけ出来てテストあんななの？」と怒られました。

まあ、そうなるよね。俺は次からは真面目に勉強しようとして心に決め、昇降口で靴を履き、校門を出た所で電話がかかって来た。画面には「鷺沢文香」の文字。

「……………鷺沢さん？」

『っ！ た、鷹宮くん……………！ どう、でした……………？』

「受かりましたよ。満点で」

『……………良かったあ……………！』

えっ、なんでそんな喜んでんの？

「そんな大袈裟な……………。たかが再試のテストで……………」

『……………だ、だって、心配してたんですよ？』

……………良い人だなあ。他人のためにそんな心配出来るなんて。なんでこんな良い人が俺なんかと関わりを持つてるんだろう……………。「再試？ぷっ、バカじゃん？」が普通だ。

すると、電話の向こうから『ほら、文香』『は、はい……………！』みたいな声が聞こえた。

『……………鷹宮さん』

「は、はいっ？」

『……………今日の夜、時間ありますか？』

「……………へっ？」

よ、夜……………？それって、どういう……………。ま、まさか、勉強頑張ったご褒美に夜のご褒美的な事を……………？

「空いてます！むしろ空いてしかありません！」

『……………そ、そうですか……………。では、夜の7時に……………私の部屋に来ていただいても、よろしいですか……………？』

「今から行っても大丈夫です」

『……………へっ？あ、いえっ、夜じゃないと意味が……………！』

「大丈夫です。今からでも精力は持ちます。いや、もたせてみせます」

『…………せ、勢力…………？あ、何かのゲームですか？』

「そうですね、リアル18禁ゲームと言っても良いでしょう」

『…………あの、何の話をしてるのか全然分からないんですけど…………』

『文香、代わりなさい』

『…………あつ、はい』

なんだ？速水さんの声？3Pか？

『…………鷹宮くん？違うわよ？』

「あ、ですよ。少しテンションおかしかったです」

『まったく…………男の子なんだから。それと、敬語じゃなくても良いって』

「あ、そうだったな。悪い」

少し舞い上がった。明日から夏コミ、それも鷺沢さんと二人で行くとか。そこが墓場でも本望だし。

『舞い上がるのもわかるけど、ちゃんと文香を楽しませることを忘れないようにね？』

「ああ、了解。けど、上手くいかなくても説教はやめてよ。俺、女の子と二人で出掛けるなんて事、一回も無かったんだから」

『はいはい。その代わり、反省会はするからね』

「それは尋問会の間違いだろ。拷問会でも可」

『人聞きが悪いわね。そう言うこと言う子には、キスの刑にするわよ？』

『っ！か、奏さん!?!?』

「お前さ、同い年って事は16か17だろ？そんなビッチ臭いこと言ってる恥ずかしくならないの？」

『冗談に決まってるじゃない』

「もしかしてアレだろ。実際、本当にキスしたら狼狽えるタイプだろお前」

『ッ！ち、違うわよ！』

「いや、今の反応で分かったわ。絶対そうだわ。処女ビッチだわ。鈴谷だわ」

『…………っ！あ、あなたもし顔を合わせる機会があつたら覚えてなさ

いよ？本当にシてあげるから』

「やってみろタコ。つーか、鷺沢さんと代われ。舞い上がったことは謝るから」

『……………はい』

で、鷺沢さんとチェンジした。『もしもし？』と不機嫌そうな声で鷺沢さんは尋ねて来た。

「あ、鷺沢さん？それで、今日の七時に鷺沢さんの家で……………」

『……………』

「……………鷺沢さん？」

『……………奏さんと随分仲良いんですね』

「……………はっ？」

『……………いつの間にか、タメ口で話すようになったちゃって』

「……………え、それはさつき速水さんが……………てか、なんで怒ってるんですか？」

『……………ふんだ、怒ってません』

何それ可愛い。電波に乗せて手を送信して頭撫でたい。

しかし、ここはそんな事言ってる場合じゃない。仲直りしないと、今日の夜どころか明日の夏コミも無くなってしまう。……………でもどうしよう。怒った理由を聞かないと仲直りしようにも……………。

すると、電話の向こうから『文香』と速水さんの声が出た。

『……………機嫌直しなさいよ。私も謝るから』

『……………別に機嫌悪くなんかないです』

『いいから。……………冷静になりなさい。今、不貞腐れて夜に出掛けられなくなるのと、耐えて彼と出掛けるの、どっちが良い？』

『……………』

何の話をしてるのかよく聞こえないけど、とりあえず俺はいつまで待てば良いのだろうか。

そのまましばらく二人は話し合った後、鷺沢さんの声が聞こえた。

『……………鷹宮、くん？』

「はっ」

『……………すみません。それで、今夜……………』



「はい。七時に鷺沢さんの部屋の前ですね？」

『……………はい。では、失礼します』

「あ、はい」

電話は切れた。しかし、夜の7時に何の用だ？ラノベ貸そうにも、借りたいうラノベは言われてないし……………。

ま、いつか。いずれ分かる事だしな。俺は欠伸をしながら、自宅に向かった。

祭とは祭を楽しむのではなく、祭の雰囲気を楽しむものである。

七時、俺は言われるがままマンションに来た。さっきまでバカみたいに舞い上がってて気にならなかつたけど何の用だ？こんな時間から、しかも鷺沢さんの家であって……なんつーか、どんなに現実的な思考をしてもラブコメ展開しか思いつかない。

いや、もつと現実的に考えろ。現実のもつとネガティブだ。例えば、そうだな。今度は私から本を紹介します、的なの？うん、それだ。間違いない。

鷺沢さん家の部屋番号を押してインターホンを鳴らすと「は、はい」と声がした。

「鷹宮ですけど」

『……す、少し待って下さい。今、開けますから……！』

「あ、はい」

なんか慌ててんな。ウインツと自動ドアが開き、マンションに入った。鷺沢さんの部屋の前まで移動し、インターホンを押した。

数秒後、玄関がカチャツと控えめな音を立てて開いた。そこから顔を出す鷺沢さん。いつもと違って、髪を後ろで束ねた髪型だった。

「あ、どうも」

「……あの、笑いま、せんか……？」

「？ 何をですか？」

「………わ、笑いませんか？」

や、だから何がだよ。顔を赤らめながら懇願するように下から覗き込んで来る鷺沢さん。まあ、俺は鷺沢さんを見てニヤつくことはあっても笑う事はない。

「笑いませんよ」

「………ほんとですか？」

「ほんとです」

「………ほんとのほんとに？」

「ほんとのほんとのほんとはです」

すると、鷺沢さんは覚悟を決めたように息を吐いてから玄関から姿を現した。

直後、俺は思わず目を見開いた。が、これは誰でもそうなるだろう。何故なら、目の前の鷺沢さんは浴衣姿だったからだ。

「……………」

見惚れてしまった。気が付けば、ブーツと鷺沢さんを眺めていた。薄い水色の浴衣、髪を後ろに纏めていたのはこのためか。スタイルの良さを強調したような着方といい、薄っすらと赤く染めた頬といい、なんつーのかな。もう、エロ可愛綺麗かわきれだった。やべえ、自分で何言ってるんだか全然わかんねえ。

「…………… た、鷹宮さん……………」

「つーあつ、ご、ごめんなさい……………」

「…………… い、いえ……………」

ジロジロ見過ぎていた所為か、鷺沢さんは元々赤い頬をさらに紅く染め上げて、斜め下を向いた。

あー、えつと……………なんだ。なんだこの感じ。とりあえず、何か言った方が良いよな。……………でも、なんだ。なんて褒めれば良いんだ？エロ可愛綺麗なんて言ったら、毘カード「緊急脱出装置」で帰還させられるよな……………。

考える、現代文得意だろ俺！こういう時に言葉を浮かばせろよ！や、でも可愛いとか言ったら「え？何こいつ、ナンパしてんの？死ね」とか思われるかもしれないし……………！

「……………」

ダメだ！何も浮かばねえ！……………そうだ、アニメだ。アニメのキャラなら上手い事言えるだろ。発言を抜粋するのもよし、例えるのもよし、とにかく褒めろ！

「…………… たっ」

「…………… た？」

「…………… 多摩の夏限定浴衣グラより似合っつて可愛いです……………」

…………… いや、ダメだろ。俺の中では、多摩の浴衣は艦これの浴衣グ

ラの中で一番似合っていた感じだったから、これ以上ない程の褒め言葉だけど、表現的にはこれ以上ないくらいの最低な言葉になってしまった。

鷺沢さんはしばらくキョトンとした後、ムツとした表情になった。その後、しばらくそのままになった後に、「まあ、仕方ないか。鷹宮だし」みたいな顔になって、ため息をついた。

「…………褒めるならもう少し普通に褒めてください」

「…………すみません」

「…………次からは、ちゃんと褒めてくださいね」

「は、はい。…………えっ?」

次があるのか?…………いや、明日の夏コミか。明日の私服は気合い入れて来るのか?よし、なら褒めよう。

それよりも本題に入りたい。そもそも、なんでその格好してんの?

「…………てか、なんで俺呼ばれたんですか?」

「…………見てわかりませんか?」

「…………お祭り?」

「…………はい。知らないんですか?近くの中央公園でやってるんです」

「へえ、知らなかったです」

去年の夏休みは家から出る事がほとんどなかったし、出ても同じとこしか行かないから、祭がやりそうな雰囲気を感じすることも出来なかった。

「へえ、そんなのあったんですね」

「…………それを、一緒に行きたくて…………」

「分かりました。でも、なんで急に…………。行きたいなら、前から言ってくれれば…………」

「…………いえ、その…………本来なら夏コミに行く予定だったじゃないですか。…………だけど、再試でダメになっちゃったから、それで…………」

「…………すみません、ダメ人間で」

「…………いいえっ—そういうことじゃなくてですねっ!??その、だから…………」

鷺沢さんはそこで言葉を切ると、鷺沢さんは照れたように微笑みな

がら言った。

「……夏コミ1日目の代わり、ということにしませんか？」

「……………」

この人は……。母親の才能があるな……。自業自得で潰れた  
予定の代わりを用意してくれるとか、本当に神様かよ。

こんなもん、答えは決まっている。

「……………はい。ありがとうございます」

「……………では、行きましようか」

鷺沢さんは部屋から出ると、玄関の鍵を閉めて、俺とエレベーター  
に乗った。

一回に到着し、俺はエレベーターの「ひらく」のボタンを押した。

「どーぞ」

「……………あ、す、すみません……………」

エレベーターを降りようとする鷺沢さん。が、なんかいつもより歩  
くのが遅い。エレベーターを降りるのでさえ、少し時間が掛かってい  
た。

「……………大丈夫ですか？」

「……………は、はい。すみません、ちょっと歩きにくくて……………」

……………あー、浴衣って歩きにくいのか。まあ、確かに脚の可動範囲  
狭そうだもんなあ。おまけに下駄だし。

鷺沢さんが降りたのを確認すると、俺もエレベーターから降りた。

鷺沢さんが歩くのに合わせて俺も隣を歩いてると、鷺沢さんが「あ  
のっ……………」と声をかけて来た。

「？」

「……………腕を、貸してもらっても良いですか？」

「腕？」

「……………は、はい」

腕を貸す……………？……………あつ、つまり腕を組むって事か。え、マジ？  
別に良いけど、周りに恋人同士に見られるんじゃない……………。

「……………いいですけど、いいんですか？」

「……………？ 私からお願いしたんですよ……………？」

や、そういうことじゃなくてだな……。鷺沢さんは俺と違って友達  
いるんだし、風評被害に遭ったら大変だろうに。日本の学生（特にリ  
ア充）は「祭」の付くものが好きだから、周りに見つかってもおか  
しくないんだが……。あ、もしかしてこの辺に住んでるけど、通っ  
てる大学は別に近くにあるわけじゃないのか？それなら大丈夫か。  
「……………」

俺は左腕を体から若干浮かせた。鷺沢さんはそっと、後ろから手を  
絡みつかせて来た。

「ッ」

おい、マジかよ。腕組んだだけなのにオツパイが腕に当たってるん  
だけど。この人の胸大き過ぎない？

「……………」行きましようか」

鷺沢さんは俺の腕を引いて、歩き出した。この野郎は人の気も知ら  
ないで本当に……。いや、ここは喜ぶべきだろう。俺はグツと堪え  
て、鷺沢さんと歩き始めた。

マンションを出て、お祭りの会場に向かう。言われてみれば、確か  
に中央公園に近づく度に浴衣姿の人が増えている。本当に祭なんて  
あったんだな。

「……………」去年は鷺沢さんは行ったんですか？祭」

「……………」いえ、去年はずっと本屋にいましたから……………」

「……………」お互い、暗い学生生活送ってますね」

「……………」鷹宮くんはお祭りとか行かないんですか？」

「最後に行ったのは小学生の時、ですね。……………」屋台のたこ焼き食っ  
てお腹壊して以来です」

「……………」そ、そうですね。今日は大丈夫ですよ。……………」多分」

そんな話をしながら、祭の会場に到着した。すると、鷺沢さんは俺  
と並んで歩く、というより俺の背中に隠れるように、斜め後ろになっ  
た。

「……………」鷺沢さん？」

「……………」す、すみません……。あまり、他の人に見られたくなくて  
……………」

ああ、やつぱ恋人には見られたくないのか。まあ普通はそうだろうな。何か、顔の隠せるものが必要かな。

すると、まあちようど良い事に、お面が売ってる店を見つけた。毎回思うんだけど、祭によく売ってる狐のお面ってあれ何なんだろうな。どこ発祥なの？

「鷺沢さん、ちよつと良いですか？」

「……何か、買うんですか？」

「はい」

お面の店に向かうと、俺はおっさんに声をかけた。

「すみません」

「おお、いらっしやい」

「あの仮面○イダーのお面二つ」

「800円な」

うわ高つ。引くわ。まあ、背に腹は変えられんか。お面を購入し、その場から離れた。

「……お面、ですか？」

後ろから俺の横を通って俺の顔を覗き込んでくる鷺沢さんの顔の上に、俺はお面を置いた。

「んっ」

「……う？」

「顔、見られたくない、んですよね……？」

「……」

……なんか恥ずかしくなって、俺は目を逸らした。何キザなことやってんだ俺……。

チラツと鷺沢さんの顔を見ると、お面の目の穴から見える鷺沢さんの目が、少し微笑んでるように見えた。

「……ありがとうございます」

鷺沢さんはお面を手に取り、頭に装着した。

「……どうですか？」

「……似合っていないです」

「……酷いですっ」

「似合ってるって言った方が酷いでしょ」

「……………それもそうですね」

鷺沢さんは納得したようにお面を右斜め上に被るように着け直した。で、巾着袋から財布を取り出した。

「……………あ、いくらでした?」

「え?あ、いやいいですよ別に。俺が勝手に買ったもんですし」

「……………でも、私からお誘いしたんですし」

「いいですから。俺、どうせラノベ以外であんま趣味ないから金とか困ってませんし」

「……………そうですか?それじゃあ」

財布を巾着袋に戻す鷺沢さん。

二人で祭を見回った。しかし、割とデカイ祭りだなあ。よく去年気付かなかったな俺。満員電車のように人でいっぱい中央公園を見て、つくづく思うわ。

でもなあ……………その、困った事に俺は祭での楽しみ方を知らない。どうすれば良いんだろうなこれ。鷺沢さんにお面買ってあげた辺りは、割と悪くないと思うんだが……………(恥ずかしかったけど)。

とにかく、何か提案してみるか。祭は食いもんだけじゃない、射的とか輪投げとかもあるんだ。

「……………なんかやります?」

すごい酷い聞き方してしまった。

「……………うーん、せっかく来たんですし、そうですね。射的でもやりませんか?」

「了解です。……………あ、あそこにある」

射的の屋台を見つけた。幸い、あまり並んでいなかったのですぐに入れた。一人400円との事で、俺は千円札を財布から出した。

「すみません、二人分」

「おお、いらっしやい」

「……………えっ?いい、いいですよ。私の分は私が……………」

「おう、姉ちゃん。ここは男に花持たせてやんな」

えっ……………いや、俺小銭なかったから後で払ってもらおうと思ってた



「ただけど……………」

「……………そうですか？」

「おう。男の甲斐性つてのはこれだけよ」

「……………すみません、ありがとうございます。鷹宮くん」

「あ、いえ……………全然」

「ちよつ、こんなペースで金使つてたら滅びるんだけど。明日、夏コミだぞ。でも、おっさんに先に言われたら後で「すみません、さっきの400円……………」なんて言えねえ。……………まあいいか。ここから先、全部奢るつてわけじゃないし、何とかなる。」

「……………鷹宮くん」

「何ですか？」

「……………勝負、しませんか？」

「……………は？」

「……………勝った方が、1日なんでも言うこと聞く、というのはどうでしょうか？」

「……………大覇星祭のどつかのビリビリ中学生ですか」

「……………はい。ああいうの、やってみたくて……………ダメ、ですか？」

「……………いや、ダメじゃないけど」

「……………なら、決まりです」

「……………あ、だめじゃん。「なんでも言うこと聞く」の中に100パーセント含まれるのは「奢り」だろ。下手したら、明日一日奢りとかいうふざけた事になつちまう……………!!？」

「あ、あのつ、やつぱやめ」

「……………じゃあ、スタートです」

「俺の制止を無視して、鷺沢さんは開戦の狼煙と言わんばかりにライフルを構えた。」

「……………ヒューネラルブリットつ」

「パシユツと引き金を引いた。けどね、鷺沢さん。弾を詰めないと弾は出ないんですよ。」

「??」

不思議そうな顔をしてライフルを眺める鷺沢さんに、俺は声を掛けた。

「鷺沢さん、それまず先端に弾を詰めるんですよ。それからガチャツと横の棒を引くんです」

「……す、すみませんっ……」

台詞付きでミスったのが恥ずかしかったのか、鷺沢さんは顔を赤くしながら俺の説明通りに狙撃準備を済ませ、ライフルを構えた。

が、その構えもなんつーか……「君、射的やった事ないでしょ？」みたいな構えだった。これで俺が勝って何でも言うこと聞かせるのは流石に申し訳ないな……。

「鷺沢さん、少し良いですか？」

「？」

俺は後ろから鷺沢さんの両腕を掴んだ。ちゃんと身体には密着してないので、セクハラにはならないように注意しているので大丈夫。「ここに手を添えて、ここにくぼみから先端のあの出っ張り？を覗き込むようにして、そこにターゲットが来るようにして……」

「……は、はい」

「あの、グ○コのキャラメルで良いですか？」

「……はい、大丈夫です」

「……よし、撃って」

「……ヒューネラルブリットっ……!」

あ、そこは変えないんだ。

ヒューネラルブリットは、見事にグ○コのキャラメルの箱の頭を捉え、後ろに倒した。

「おお、姉ちゃんやるねえ!」

「…………。あ、い、いえ。それほどでも」

オツさんが景品を拾って、鷺沢さんを褒めながら横に置いた。

「……す、すみません。ありがとうございます、鷹宮くん」

「いえ、全然」

返事をしながら、俺もライフルを構えて狙いを定めた。狙うは、景品の中でも特等といえるもの、30SLL!!?

狙撃した。俺の弾丸は吸い込まれるように3〇SLLの箱に向かい、中央を捉えた。が、射的というのは当てれば良いと言うものではなかった。コンツ、とはじかれ、弾丸は落下した。

「……ロックオン・ストラトスとガンダムデユナメス、目標を狙い撃つッ……！」

一方、鷺沢さんはア〇ロチヨコの箱を狙撃した。あの、ていうかアニメの台詞一々、言うのやめてくれませんか。すごく恥ずかしいです。つーか、飲み込み早いこの人。

つて、やばい。これは負けられないんだった。俺も小物狙いに専念しよう。ライフルの銃口の先にあるのは、なんかよく分からない小さい置物。つーか何あれ、ゴリラ？

「……」

狙撃した直後、ゴリラのフィギュアを倒した。よっしゃー！いや、こんなもんいらんけど。

屋台のオツさんが落としたりした景品を俺と鷺沢さんの横に置いて行く。弾丸は合計五発、このままお互いに一つずつ落として行ったら勝ち目はない。

つーか、これ勝敗はなんなの？景品の数？質？数なら勝ち目はないけど、質なら勝ち目はある。

ライフルを構えて、俺はさっきの3〇SLLに向けた。

「……ターゲット確認。これより、破壊する……!!？」

あ、俺も台詞言っちゃったよ。俺はライフルの弾丸を撃ち尽くした。

全て、弾丸は3〇SLLの箱に弾かれた。

「……」

俺の手元に残ったのは、よく分からんゴリラの置物のみ。しかもなんだよこれ……絶対チヨコエッグの中身だろ……。2000円払ってこれかよ……。

「……ふう、終わりました。どうでした？鷹宮くん」

鷺沢さんも撃ち尽くしたようだ。鷺沢さんの手元には、グ〇コとア〇ロチヨコしかなかった。

「……………普通に小物狙いで勝てたじゃん……………」

「……………え、なんですかそれ？」

鷺沢さんは困惑の表情を浮かべていた。うん、俺も困惑してる。何なのかなゴリラ？

「……………それだけ、ですか？」

「ぐはっ……………」

ヤベエ、スゲエ恥ずかしいいっ!!？余裕ぶっこいて教えた結果がこれかよ……………。笑えよ！笑ってくれよ！

「…………と、いうことは私の勝ちですね♪」

嬉しそうに言う鷺沢さんは俺の手を引いて、とりあえず屋台から離れた。

「……………じゃあ明日一日、私の言う事を聞いて……………どうしたんですか？」

顔を手で覆ってる俺に、鷺沢さんはキョトンと尋ねてきた。

「……………いや、恥ずかしくて……………。余裕ぶっこいて教えた結果負けるとか……………」

「…………し、仕方ないですよ。そういうこともありますって…………」

新たなトラウマの仲間入りだよこれ。いや、あんまトラウマとか過去にないけど。

まあ、負けは負けだ。受け入れるしかない。

「……………明日で良いんですか？言うこと聞くの」

「……………はい。明日で」

明日、お金たくさん下ろさないとな…………。額に手を当てて、鷺沢さんと次の店に向かった。

×××その後、焼きそば、たこ焼き、あんず飴、かき氷と食べ歩き、型抜き

きにくじ、金魚掬いと遊び尽くした。「三日月落とし！」だの「金魚飛ばし」だの言う度にポイに穴開ける鷺沢さん可愛かったです。で、今は祭りの会場から道路を挟んで小さな公園を見つけたので、その自販機でジュースを買った。

「……………ふう、祭りってこんな感じなのか」

「……少し、疲れましたね……」

「そうですね。休憩しましょうか」

「…はい。実は、もう少しで花火が始まるんですよ？」

「へえ、ここから見えるんですか？」

「………花火って見えないところあるんですか？」

「………はっ？」

「………あんなに高く上がるのに………？」

「あー………まあ、大丈夫でしょう」

移動するの面倒だったので、説明を破棄した。公園のベンチに腰を下ろし、飲み物を一口飲んだ。

「………ふう、初めてですよ。祭でこんな金使ったの」

「………たご焼き食べてもお腹壊しませんでしたね」

「………やめてくださいよ」

「………ふふっ」

ゲンナリした表情を見せると、鷺沢さんは楽しそうに微笑んだ。一ヶ月前なら、「す、すみません………」とかすぐ謝ってきたのに、随分と反応が変わったなあ。少しは仲良くなってる、と思っても良いのだろうか。

「………鷹宮くん」

「はい？」

「………今日は、楽しかったですか？」

「そうですね。久々にハメを外した感じですよ」

「………良かったです」

鷺沢さんにはつこりと微笑んだ。……ああ、そうか。俺、元はと言えば自分の所為で鷺沢さんとの夏コミの約束を潰しちまったんだ。鷺沢さんは、俺がその事を気にしないようにする為に、わざわざ今日誘ってくれたんだ。俺、気を使わせてばっかだな……。

「………すみません」

「? 何が、ですか？」

「………俺がちやんと勉強してれば、今日は夏コミに行けてたのに……。今日だって、鷺沢さんを心配させて……」

「……………」

「……………次からは、マジで勉強頑張ります。ホント、すいませ」

「……………えいつ」

鷺沢さんは俺の頬を抓った。

「っ?」

「……………鷹宮くん。怒りますよ?」

「えっ……………?」

「……………確かに、夏コミには行けなくなりましたが、私は別に気を  
使って鷹宮くんをお祭りに誘ったわけじゃありません」

「……………」

「……………私が、鷹宮くんとお祭りに来たかったから、誘ったんです」

「……………えっ?」

それって、どういう……。や、落ち着け。そのままの意味だ。深い意味はない。

「……………確かに夏コミの代わり、とは言いましたけど……………アレは、建前みたいな、もので……………」

が、鷺沢さんは台詞を続けて行くにつれて顔を赤くしていった。あれ?これ、深い意味ないんだよね?

「っ、と、とにかく!鷹宮くんはそんな気を使わなくて良いんです!そもそも、私の方が年上なんですから……………!」

何かを誤魔化すように勢いよくそう言うと、鷺沢さんは抓っていた手を離して、今度は俺の頭を撫でた。年上は関係無いだろ。

「……………頭撫でないでください。子供じゃないんで」

「……………ダメですつ。鷹宮くんはまだまだ子供です」

「……………」

や、そういうんじゃないやなくて。なんか恥ずかしいんだよ。客観的に自分を見ると、なんか姉に慰められてるみたいで。

「……………このくらいで照れてるうちは、まだまだ子供です」

「……………なんで心の中まで読んでんだよ……………」

エスパーかよ。そう思って、チラツと鷺沢さんを見ると、俺の頭を撫でながらそっぽを向いていた。なんで人の頭撫でながらそっぽ向

いてんの？俺の疑問は、すぐに解消された。

花火が上がり、ドオンツと宙で爆発した時、鷺沢さんの顔が真っ赤になってるのがはつきり見えた。

「……………鷺沢さんも照れてるじゃないですか」

「……………うっ、うるさいですっ。留年の癖につ」

「り、留年じゃないし！中間は全教科51点以上だったからまだ俺のバトルフェイズは終了してないし！」

「……………え？それでなんで古典は再試になったんですか？」

「中間51点で2点足らなかつたんです」

「……………」

「な、なんですかそのバカを見る目は!?？」

「……………だつて、おバカじゃないですか」

「つ……………や、もういいです。俺はバカです」

「……………はい。すぐくおバカです」

「なんで嬉しそうに言うんですか……………」

花火を見上げながら、俺も鷺沢さんも大人しくなった。そのまま、ぼんやりと花火を見上げた。

……………花火つてうるせーな。っーか、ちよつと木に隠れて欠けてるじゃねえか……………。や、まあ元々花火見ようと思ってここに来たわけじゃないんだが。

「……………やくん」

「……………」

「……………鷹宮くんっ！」

「は、はいっ？」

「……………明日、楽しみですっね」

「……………そうですっね」

明日は夏コミ、かあ。結局、前調べとか一切してないけど大丈夫なのかなあ。まあ、なるようになるか。

俺と鷺沢さんはそのままぼんやりと花火を眺めていた。

## 戦線離脱。

翌日。本屋の前で鷺沢さんを待っていた。コミケだよ、コミケ。初めてのコミケ。なんかヤバイらしいコミケ。いや、念の為昨日の夜中に調べて正解だった。なんかヤバイ、じゃなくてかなりヤバイ。正直、フリーマーケットくらいに考えてたけど、比にならんわ。調べれば調べるほど笑えなかった。まず、熱中症。暑さでぶっ倒れる人は少なくないらしい。他にも諸々と注意点はあったが、まあとにかくヤバイ。

と、いうわけで、俺は早急に集められるものを全て集めた。まず、キンキンに凍らせた水と普通の水、それから帽子、タオル、塩分チャージのラムネみたいなもの、冷却シート、うちわ……ないものは全部コンビニまで走った。鷺沢さんにも連絡したが、祭で疲れ果てていたのか、眠ってしまったているようで電話には出なかったので、それを二人分、二つの鞆にわけてねじ込んだ。

万全とは言えないかもしれないけど、やれる事はやった。これで保てば良いんだが……正直、油断は出来ない。俺は昨日までの「鷺沢さんと夏コミデートワクワク」から「灼熱火炎地獄への挑戦ドキドキ」に変わっていた。

一方の鷺沢さんは、多分何も考えてないだろう。今頃、欲しい本のこと考えてるんだろなあ。なんかナルト以外でも、欲しい本があるらしく、キリトとアスナのイチヤイチャとかの本も欲しいらしい。それはどういう種類のイチヤイチャなのだろうか。いや、考えない方が良いか。

とにかく、死なないように頑張ろう、なんて考えてると、鷺沢さんが小走りでやってきた。

「……お待たせしました」

「おはようございます」

「……は、はい。おはよう、ございます……」

あ、そういえば昨日、次からはちゃんと褒めろって言われたよな。私服を褒めないよ。まあ、今回は「褒めろ」と言われて褒めるんだし、



多少頭の緩い褒め方でもドン引きされたりはしないだろう。

俺は「ごほん」と咳払いすると、緊張気味に言った。

「……………か、可愛いですねっ」

「……………はっ?」

言うのと、キョトンとした顔で俺を見る鷺沢さん。で、カアツと顔を真っ赤に染めた。

「……………いつ、いいい、いきなりっ……………にやっ、何を……………!?」

「えっ? いや、だって昨日、次からは褒めろって……………」

「っ! そ、それは浴衣とか特別な服装の時です! し、私服まで一々褒められてたら、身がもちません、よ……………!」

「あ、あ……………そ、そういうことですか……………」

うおお……………なんかすごい恥ずかしい思いをしました……………。なんか最近、恥ずかしい思いしかしてないんだけど……………。

「……………」

「……………」

……………やばい、どうしようこの空気……………。やらかした……………。何なんだ俺は一体……………。何がしたいんだよ……………。

はっ、イカンイカン。そんな事より、まずは荷物を渡さなくては。

俺は二人ぶんの鞆の片方を鷺沢さんに渡した。

「……………これは?」

「夏コミ用の装備です」

「……………え、なんでこんなにたくさん」

「なんか、昨日気になって夜中に調べたんですよ。そしたら……………ヤバイみたいです」

「……………えっ?」

「熱中症でぶっ倒れる人は少なくないみたいです。だから、俺の方で一応、鷺沢さんの分の装備も整えておきました」

「……………あ、昨夜来てた不在着信って……………」

「はい。一応知らせとこうと思ったんですけど、なんかもう寝てたみたいなんで……………」

「……………」

俺が説明すると、鷺沢さんの顔色は段々と悪くなっていった。

「……………なんか、怖くなつてきました」

「どうしますか？やめときますか？」

「……………」

鷺沢さんは少し考え込んだあと、俺の背中の荷物を見た。で、首を横に振った。

「……………いえ、私のためにせっかく用意してくれたんですし、行きます」

「そうですか？分かりました」

「……………それより、他に何かありませんか？注意しておくこととか……………」

「あ……………小銭を多めに用意しといた方が良いみたいです。それと、定期にはちゃんとお金を入れておいた方が良いみたいです。向こうの改札出たら、即並ぶくらいの勢いみたいなので」

「……………分かりました。じゃあ、コンビニでとりあえずお金崩しに行きましょうか」

×このことで、近くのコンビニに向かった。

×

×国際展示場駅。そこから、東京ビッグサイトに移動した。ネットで調べた感じだと、11時くらいからは数十分待つ程度で入れるとあったが、割とかなり並んでんだろこれ。40分くらいは待ちそうだ。けど、入場開始の人達とかはもつと並んでるらしいんだよなあ。

まあ、嘆いても仕方ないので、待機列の後ろに並んだ。

……………なんか、話しかけた方が良いかな。何か会話をしようにも、何を話せば良いか……………いや、あるわ。

さつきまでと違って、俺の持つて来たポケ○ントレーナーの帽子を被ってる鷺沢さんに声を掛けた。

「鷺沢さん」

「……………はい」

「……………この前貸したダンまち、読みましたか？」

聞くと、鷺沢さんと俺の間に沈黙が流れた。そして……………。

「…見ました！まだ、6巻までですけど……………すごく面白かったです！」  
「ですよね!?？特に!?？」

「……私はー、そうですね。一卷のシルバーバックの所ですね」

「あーやっぱりそこ？分かります。ミノタウロスのところよりも階層主のところよりもシルバーバックですよね」

「……はい。ミノタウロスも好きですけどね。ほら、「ファイアボルト」を泥臭く連発する辺り、リアリティありませんか？」

「あー分かります。自身の武器全部使って戦ってる感じありますよね」

「……あれはカッコよかったですよねー。普段は割と弱々しい兔みたいな感じなのに、戦闘になると変わりますよね」

「鷺沢さん、ベルくんみたいなのが好きなんですか？」

「……うーん、どうでしょう。そうかもしれないですね。ほら、吉井さんとかクウエンサーさんとかー……あとはキヨンさんも好きですから」

ふむ、つまり力が無くても強敵に立ち向かえるタイプが好きなのか。

「……意外ですね。ヒツキーみたいなタイプが好きなんだと思ってました」

「……はい。比企谷さんも好きですよ。ただ、桐ヶ谷さんみたいなタイプはあまり……」

「はい。俺もキリトは好きじゃないです！羨ましいから！」

「……そ、そうですね……」

あ、やべっ。断言し過ぎた。ちよつと引いてるじゃん。

「いや、リア充でも好きなキャラはいますよ？阿良々木くんとか。でも、キリトはなんか……羨ましい……。なんであそこまでモテんだよ畜生……」

「……」

「？ なんですか？」

「……いえ、モテたいんですかと、思いました」

「いや全然。実際、モテたいとは思いませんよ？ただ、女の子に好かれてみたいとは思った事ありますけど……」

「……いや、それ同じじゃあ……」

「違います、二人も三人もなんで言いません。一人で良いからモテた

いんです」

「……………」

「な、なんですか」

「……いえ、なんでもありません。……それで、ダンまちで好きな女性キャラは？」

「ティオナ」

「……やっぱりですか……………」

「鷺沢さんは？」

「……アイズさん」

「やっぱりな……………。鷺沢さん、なんだかんだメインヒロイン好きそうですし」

「……なんで鷹宮くんはそういう、サブヒロイン？とかサブキャラが好きなんですか」

「仕方ないじゃないですか。そういう方が可愛く見えるんだもん」

「……………とあるは？」

「御坂妹かバードウエイ」

「……………このすば」

「エリス様」

「……………あんハピ」

「チモシー」

「……最後のおかしいです！っていうか、なんでみんな……………その、小さい人に偏ってるんですか？」

「小さい？何が？」

「……………で、ですから……………！その……………む、むね（↑ここだけ超小声）……………」

「えっ？なんだったって？」

「くくく！き、聞こえてるくせに！意地悪です！」

「……謝りますから大きな声出さないください。周りの視線が……………」

「……自業自得です!!？」

だよ。俺はため息をつけてから答えた。

「別に、意味はありませんよ。俺の好きになった人がたまたま胸が小さかっただけです」

これは事実だ。だから、俺は決してロリコンじゃない。銀魂はそよちゃん、オーバーロードはアウラ、バカテスは秀吉だからって、決してロリコンではない。

すると、鷺沢さんは下から覗き込むように俺を見て聞いてきた。

「……………そういう人が、好きなんですか？」

「どういう人？」

「……………」

「冗談だから睨まないで。…………別に貧乳が好きとか、そういうわけじゃないですよ。ほら、艦これだと俺は古鷹が好きですし」

「……………確かに。でも、一貫性がなさすぎです」

「それは仕方ないでしょう。好きになっちゃったんだし」

「……………恋してる、みたいに言わないで下さい」

……………なんでちよつと怒つとんの。鷺沢さんは不機嫌そうに、俺の用意した鞆の中からお茶を取り出して飲んだ。

×

×

15分ほど経過した。早くも問題が起こった。鷺沢さんの体力だ。さつきから一言も喋らないで、俺に寄つかかっている。

「……………鷺沢さん？」

「っ……………」

5分前くらいからなんか調子悪かったのか、口数が減って来てたかなあ。その少し前までは元気にダンまちについて語ってたのになあ。

「……………だ、大丈夫ですか？」

「……………だい、じよぶ…れす……………」

……………いやダメだろこれ。俺は鞆の中から凍らせた方のペットボトルを出して、鷺沢さんの首の後ろに当てた。普段なら「ひやう!!？」も、もう！何するんですかっ?」と可愛らしくぶんぶん怒るのに、今日は反応がない。俺はそのままペットボトルを押し当てた。熱冷ますにはここが良いんだよね、確か。冷気を感じるとかなんとか。

左手で押し当てたまま、鞆の中から熱さ○シートを取り出し、鷺沢さんのおデコに貼った。あとは、定期的に水と塩分チャージを口に流し込むしかない。

「……鷺沢さん、一歩歩いてください。列進んだんで」

「……………」

コクツと頷く鷺沢さん。だが、脚は踏み出せない。俺が持ち上げる形で鷺沢さんを歩かせた。おいおい、これ入場してもダメなんじゃ……。……………これは入場は諦めた方が良さそうだな。

「……………帰りましょう。これ以上はヤバイです」

「……………えっ……………」

「……………同人誌は諦めましょう。ネットや秋葉でも買えますから」

「……………はい……………」

意外と素直に頷いた。あれだけ楽しみにしてたら、もう少し何か言われると思ってたんだけど……。それとも、何か言うだけの体力が残っていないか……………。

まあ、何にせよここまでだな。まだどこまでも行つてないけど。と  
××りあえず、病院に連れていった方が良さそうだ。

××一応、病院で診てもらうと、熱中症一歩手前だったらしい。あと少しでアウトだったそうだ。

念には念を入れて、病院で休ませてもらってから、鷺沢さんと帰宅している。念のため、家まで送ることにした。

しかし、鷺沢さんがここまでなるなんて、やっぱり夏コミは危険だ。初心者や冬コミからの方が良いのかも書いてあったし、その方が良かったよなあ。でも、鷺沢さんすごい楽しみにしてたし、「夏コミは危ないからやめよう」なんて言えなかった。

「……………」

鷺沢さんはさつきから一言も話さない。いや、体調悪いんだから当たり前だが、それ以上に気が沈み込んでいた。まあ、楽しみにしてた夏コミに参加できなかったんだから、気持ちはよく分かる。

「……………鷺沢さん？」

「……………」

「……………ま、まあ、仕方ありませんよ。夏コミってこういうものみたいですから。鷺沢さんは女性ですし」

「……………」

「秋葉原とか池袋なら夏コミほど混みませんし、そこで買いましょう」

「……………」

ふええ……………何も喋ってくれないよう……………。謎のスフィックスなの？いや、そんな体力が残ってないって事は分かってるんだけどさ。

鷺沢さんの家のマンションに到着した。裏に回り、自動ドアの前に立った。

「鷺沢さん、着きましたよ？」

「……………」

「……………あの、このドアどうやって開ければ……………」

すると、鷺沢さんはポケットから鍵を取り出した。自動ドアの横の部屋番号を押すところに付いてる白い部分に鍵を当てると、自動ドアが開いた。何それすごい。センサーでもついてんのか？

自動ドアを通った。そのまま、鷺沢さんの部屋まで移動した。

「着きましたよー。鷺沢さん」

「……………すいません、ありがとうございます」

鷺沢さんはソファーに寝転がり、俺も

……………しかし、鷺沢さん落ち込んでたなあ……………。そんなに読みたかったのかなあ、同人誌。いや、まあ確かにナルトの世界はシビアだから、平和な時は何してるんだろうとか気になるのは分かるけどね。

……………何なら明日、俺一人で買いに行くのもありかもしれない。とりあえず、ナルトとSAOの同人誌を片っ端から買って変えれば……………。いや、金がいくらあっても足りないのでやめておこう。

買う商品にしても、前調べが必要みたいだ。どのサークルのどの作品が良いかも調べるべきだな。

って、そんな事どうでも良いんだよ今は。それより、鷺沢さんの体調だ。

「気分はどうですか？」

「……………大丈夫です」

「そうですか。……………なんか辛かったら言ってくださいね」

「……………」

「……………あ、喉乾いてませんか？お茶飲みます？」

「……………」

……………な、なんか言つてよう……………。気まずいんだけどなんか…………。返事がなかったが、まあ飲むかもしれないのでお茶を淹れてると、鷺沢さんが口を開いた。

「……………すみません、鷹宮くん」

「はい？」

「……………私の、所為で……………楽しみにしてた、夏コミを……………」

「鷺沢さんの所為じゃないですよ」

俺はカップに氷を入れてから、お茶を冷蔵庫から取り出した。

「あの炎天下の中じゃ仕方なかったですよ。俺だって、15分程度だったから平気でしたけど、あの調子じゃ何分保つか分かりませんでしたし」

「……………でも、鷹宮くんだって、欲しい本とかあったんじゃ……………」

「いえ、明確な目的があったわけじゃありませんから。現地で欲しいと思えるものを見つけられれば良いなあ、くらいのつもりでしたから」

むしろ、鷺沢さんと出掛けられるのならどこでも良かった。

「……………だから、鷺沢さんは気にする必要なんかありませんよ」

「……………」

「それより、冬にも『冬コミ』って奴があるみたいなんですよ。こっちはキチンと防寒してれば、夏コミに比べて楽みたいですよ？」

鷺沢さんに淹れたお茶を差し出した。

「そつちまで、我慢しませんか？」

「……………」

鷺沢さんは、しばらく俺の方を眺めた。すると、頬を染めて俯いた。……………やつぱり、まだ体調悪いのか？お茶のお代わりが必要かなと思つて、ペットボトルを持って来ようとする、鷺沢さんが顔を上げ



た。そして、最初に俺が鷺沢さんを見た時と同じような清楚さを全身から出したような微笑みを見せた。

「……………はい。ありがとうございます、鷹宮くん」

……………何これ。あー、なんだこの感じ。え、何これ。何だこの気持ち。スゲエ、心臓がバクバクいつてる。破裂すんじやねえのこれ。クツソ……………なんかすごい気恥ずかしい……………！

「……………じ、じゃあ大丈夫そうなんで俺帰りますね」

逃げるように、俺は玄関に歩き出そうとした。その俺の手を鷺沢さんは掴んだ。え、何。

「……………あのっ」

「は、はい……………」

「……………もう少し、一緒にいてくれませんか……………？」  
「えっ……………」

無理……………正直、今鷺沢さんと一緒にいるとマジで心臓飛びそう。口から胃が飛び出すレベル。

考えが顔に出ていたのか、鷺沢さんは追撃した。

「……………じゃあ、昨日の射的に勝った命令、です……………。今日1日、一緒にいて下さい」

「…………………………」

それはずるいだろう……………。けど、それは断れない。

「……………わかりましたよ」

「……………はい。じゃあ、隣に座って下さい」

俺は、鷺沢さんの隣に座った。

奏さんがオタク化したのは私の所為じゃない。(1)

文香の休日最終日。文香は昨日ぶっ倒れたので、大事をとって寝転がりながらラノベを読んでいた。読んでるのは、ガンダムSEED。砂漠の虎付近の話だ。

しばらく読み進めてるうちに「キラはフレイと寝た」という文が出てきた。

「……………っ？っ！」

その言葉を深く捉えた文香は、顔を赤くして本を閉じた。今まで、割とラノベは読んで来たが、マジでエロい事するシーンは初めてだった。まあ、文章はそこで途切れてて、詳しく書いてあるわけではないんだけどね。それでも、文香を赤面させるには十分だった。

「……………」

頬がすごく熱くなり、熱中症をぶり返すかもしれないという、よく分からない言い訳を誰に対してなのか知らないが、自分の心の中でして布団の中に潜った。

「……………」緒に寝る、か……………」

性器の中に性器を入れられるって、どんな感覚なんだろう、と想像してしまった。例えば、千秋と恋仲になったとして、部屋でガンダムSEEDのアニメを見る時に、さっきのシーンが流れて、突然自分に覆い被さって来……………」

「っ！な、何考えて……………!?？」

頭をブンブンと横に振って、枕の下に埋めた。エロい妄想をした事もそうだが、それに千秋を使ってしまったことが余計に恥ずかしくなってしまった。

パタパタと両足をベッドの上にバタつかせ、ギュウウツと頭の上に置いた枕を握りしめる手に力が入る。

「……………」

ていうか、なんで千秋を思い浮かべたのか分からない。いや今まで出会って来た男の人の中で、千秋以外で話すのはプロデューサーくらいだから、出てもおかしくはないが。そもそも、何故誰か名指しで浮

かべたのか。

頭の中でグルグルと思考が巡っていると「あつ」と声を漏らした。

「……そういえば、今日は鷹宮くん来ないのかなあ」

ラノベを貸りる約束はしてないけど、今日も文香が休みであることは知ってるはずだ。

「……どうせ暇なんだし、来てくれれば良いのに」

そんなことを呟いてると、ピンポンと音がした。

「っ！」

鷹宮くんかなつ？と意気揚々にベッドから降りて玄関を開けて顔を出すと、奏が立っていた。

「こんにちは、文香」

「……なんだ、奏さんか……」

「ちよつ、何よその反応」

「……あ、いえ。すみません。どうしたんですか？」

「鷹宮くんが、あなたが昨日倒れたから見てあげてって言ったから来てあげたのよ。ほら、スポーツドリンクとりんご」

「……鷹宮くん、が……？」

……自分で来てくれれば良いのに、と少しムツとする文香。それを察した奏は、ニヤニヤと笑いながら文香に言った。

「ごめんなさいね、鷹宮くんじゃなくて」

「っ！ な、なんですか？別に全然そんなじゃないですから……！」

「ふーん？ま、何でも良いけど。上がらせてもらうわよ」

「……あ、はい。どうぞ」

文香がスリッパを用意して揃えて置くと、奏はそれをありがたく使った後ろをついて行った。

奏はソファアに座り、文香はお茶を淹れてソファアの前の机に置くと、奏の隣に座った。

「それで、どうだったの？昨日と一昨日は」

「……楽しかった、ですけど……昨日は、迷惑を掛けてしまいましたね……」

「その話は聞いたわ。彼の方が気にするなって言ってるんだし、気に

しない方が良いわよ」

「……はい。次は冬にコミケがあるので連れて行ってくれると約束してくれました」

「良かったわね」

「……はい。冬が楽しみです」

「ご機嫌な文香の表情を見て、奏は微笑みながら聞いた。

「……で、まずは一昨日の話から聞こうかしら？どうだったの？お祭り」

「……はい。奏さんに浴衣を着せていただいたお陰で、鷹宮くんにごく喜んでいただけました」

「良かったじゃない。まあ、文香の浴衣姿はあの子なら絶対喜ぶと確信してたからね。後はメイド服とか着てあげたら喜ぶかもよ？オタクなんでしょ？」

「……いえ、鷹宮くんは『私服だからこそ、そのキャラがどんな服が好きなのか知れて萌える。メイド服みたいな衣装は好きではない』って言っていました」

「……相変わらずすごい濃い子ね、色々……」

奏は呆れたようにため息をついた。お茶を一口飲むと、文香が言った。

「……でも、その……私の浴衣姿を見て、なんか、こう……顔赤くして俯いちゃって……。あれ、もしかして」

「照れてるのよ」

「……やっぱりそうですよねっ？」

嬉しそうに微笑む文香。

「……なんか『多摩の夏限定浴衣グラより似合っくて可愛いです』なんて褒められ方、して……照れ隠しなのかよくわかりませんでしたけど、すごく可愛かったです」

どう考えても、「わ、笑いませんか？」「ほんとに？」「ほんとのほんとに？」としつこく聞いてた人の台詞ではない。

それを見越してか、奏はニヤニヤした表情で言った。

「ふうん？でも、褒められて嬉しかったんでしょ？だから、褒められた

時の台詞を細かく覚えてたのよね？」

「……………はい、はい」

バレた……………と言った感じで、文香は顔を赤くして呟いた。

「……………文香も大概可愛いわね」

「……………か、からかわないで下さい……………」

「いやいや、ほんとに。……………まあ確かに、鷹宮クンも可愛いけど」

奏はまたお茶を口に含んだ。

「で、お祭りの方はどうだったの？」

「……………あ、はい。えーつと……………最初は浴衣が予想以上に歩きづらかったので、腕を組ませて歩かせていただきました」

「あら、まるで恋人みたいね」

「……………それはもういいです。それで、お祭りの会場に到着したのですが、私って……………その、アイドル、じゃないですか」

「鷹宮くんは気づいてないみたいだけどね」

「……………それで、その……………周りに見られたらマズイと思って、鷹宮くんの身体で顔を隠すように歩いてたんです」

「……………それで？」

「……………そしたら、鷹宮くんがお面を買ってくれたんです。ほら、アレ」  
文香の指差す先には窓があり、それについてるカーテンのレールの上にお面が飾ってある。

「……………か、仮面○イダーなのね……………」

「……………はい。でも、嬉しかったです。その後には射的をしたんですけど、鷹宮くんが私の分も出してくれて……………」

「へえ、鷹宮くんってそういう所優しいわよね」

「……………それで、撃ち方を教えていただいて、対戦したんです。どちらがたたくさん落とせるか」

「どうだったの？」

「……………勝ちました」

「ブフツ」

奏は思わず吹き出してしまった。撃ち方を教えた方が負けるか？  
普通、みたいな。

「？ 何か、おかしかったですか？」

「あー、ううん。何でもないのでよ。それで、勝った方に景品とかあったの？」

「……1日、なんでも言うことを聞いてもらう権利です」

「それはまたすごいものを賭けたわね……。その権利はもう使ったの？」

「……はい。昨日……」

そこで、文香の台詞は止まった。体調悪く、一人になるのは心細かったから「もう少し、一緒にいてもらえませんか？」なんて言ったなんて言えなかった。

だが、文香の事において奏に分からないことはほとんどなかった。

「……昨日、鷹宮くんと一日一緒にいたんでしょ。体調悪くて寂しかったからかしら？で、その時に権利を使ったんでしょ」

「……え、エスパー!?？奏さん、エスパーなんですか!?？」

「……バカね、あなたの事なら何でもお見通しよ」

「……そ、そうですか……？」

その返答に軽く引く文香。それを察した奏はコホンと咳払いした。

「そ、それで？昨日は結局どうしてたの？」

「……そうですね。アニメ見たり、その感想話したり、ご飯食べに行ったり、一緒に本読んだり……それくらいですかね」

「ふーん……そういうのも素敵かもね。私は嫌だけれど」

「……奏さんはどんなのがいいんですか？」

「そうですね、私が彼氏と家デートするなら……」

「……ま、待ってください。別に鷹宮くんは私の彼氏では」

「あーうんそうねーはいはい。私が彼氏と家デートするなら、アニメじゃなくて映画が良いわね」

「……か、奏さん！真面目に聞」

「例えば、ほらこの前やってた恋愛モノの奴。ああいうの観て隣で手を握りたいわ」

「……はあ。手を、ですか……？」

諦めたため息と共に、気になった所を尋ねた。すると、奏は頷いた。

「そういうの、ロマンチックじゃない？」

「……そうですか？」

「あら、じゃあ文香はアニメを見ていた方が良いの？」

「……うーん、休日に部屋で恋人と過ごすなら……」

いつの間にか、文香も「恋人と過ごす」になっていたが、奏はニコニコしたままツツコまなかった。

文香の頭に真っ先に浮かんだのは、さっきのガンダムSEEDのキラとフレイのやり取りだった。かあつと顔が赤くなり、頭から湯気が出そうなほどに頬が熱くなった。

「……文香？」

「……か、奏さん意地悪です！」

「いや名前呼んだだけなんだけど……？」

文香が何を想像したのか分からなくて、是非ともしつこく問い詰めたかったが、なんかすごい自己嫌悪してるように肩を落としていたので、奏は話題を変える事にした。

「まあ、実際恋人とかは一緒にいいだけで良いものよね。何をすることは問題ではないと思うわ」

奏がそう言うと、文香はジト目になった。

「……奏さん、恋人いた事ない癖に」

「っ！ ど、どういう意味よ。ていうか、それ誰に聞いたのよ」

「……昨日、鷹宮くんが『速水さんは多分、一切キスとか男女間の経験とかないタイプだよなあ。じゃなきゃ、いきなりキスがどうのとか言って来ねーもん』って言ってました」

「……あの子は本気でキスしてやろうかしら」

「……そ、それはダメです！」

「冗談よ」

慌てた口調で止められても、奏はサラリと切り返した。

「所で、あなた達はもうデートの約束はしてないの？」

「……してませんよ。デートの約束なんてした事ないです」

「それなら良いけど。約束するなら、ちゃんと日にちを考えなさいよ。私に言われるまでもないかもしれないけど、もう近いうちに泊まりが

けでグラビア雑誌の撮影とかあるんだからね」

「……はい。分かってます。それまでに、たくさんラノベ借りておかないとですね」

「……そういうことを言いたいんじゃないんだけど……。まあ良いわ」

奏はため息をつきながらお茶を飲んだ。すると、机の下にBlue-rayのパッケージが落ちてるのに気付いた。

気になって、奏はそれを拾い上げた。

「……これは？」

「……あー！そこにあっただんですね」

「？」

「……鷹宮くんがこの前、うちに持って来た時の忘れ物です。昨日も少し探したりしたんですけど……」

パッケージには「Angel Beats!」と書かれていた。

「……えんじえる、びーつ……？」

「……はい。面白かったですよ？」

「……ふーん。女の子が多いのね」

「……見ますか？」

「良いわよ、別に」

「……せっかくですし見ましようよ。もしかしたら、奏さんもアニメに夢中になるかもしれませんよ？」

「ありえないわよ。……ま、見るだけなら良いけど。でも、あなたの家ってBlue-rayなんてあるの？」

「……最近、鷹宮くんに来年面白いゲームが発売されるから、一緒にやりませんか？って誘われて、買ったんです」

「……ぶ、プレ4……」

文香の指差す先にはプレ4があつて、奏はそれを軽く引きながら見ている。

文香は、プレ4にBlue-rayディスクを入れ、リモコンを持って操作しながら「Angel Beats!」を再生した。



同士は、意外と何処にでもいるもんだ。

夏コミが終わり、ようやく俺の夏休みの予定は全て消えた。いや、消えるの早過ぎるだろ、と思うかもしれないが、元々は俺に予定がある事自体が稀なのであり、ましてや女性と出掛けるなんて予定は、もはや奇跡と言っても過言ではない。

そんな予定がない俺なのだが、今月は欲しいものがたくさん売られるのだった。ラノベ、ジャンプコミック、あとこの前古本屋で見つけた「亜人」も買わなければならない。あとビルドファイターズを見てから、ガンプラも作りたくなって来ている。

それらを全て作ったり読んだりする時間のある夏休みなのに、それらを手にするための金がない。鷺沢さんと2日連続デートで金が消し飛んだのもあるが、そもそも足りない。早急に短期のバイトに応募する必要があった。

「……………」

で、バイト雑誌を漁って見ていた。とにかく、短期のバイトだ。

『引越しアシスタント』

『パチンコホールスタッフ』

『施術スタッフ』

『小中学校塾講師』

うん、無理。もつとこう、マンツーマン的な仕事じゃなくて、色んな人と最低限の会話のみで済む仕事が良い。余り人と話すのは得意じゃない俺でも、業務連絡的会話なら出来る。ゲームと一緒に会話の選択肢が決まってるからな。パチンコ屋？霧隠れの術並みに副流煙の広がってる場所でバイトするつもりはないです。……………忍法・副流煙隠れの術か……………。範囲内の敵を肺がんにするかもしれない忍法？殺すのに何年かかるんだよ。確実性もねえし誰も使わねえなこれ。

そんな意味のない事を考えながらバイト雑誌を捲っていると「急募」の文字が見えた。

『【搬入・軽作業】グラビア撮影』

論外。搬入・軽作業って何され……………いや待てよ？急募って事は、少

なくとも人手が足りないって事だよな？採用される可能性は高いし、何よりグラビア？芸能人？つまり、サイン貰えばどつかで売れるんじゃないねえの（ウルトラ短絡的思考）。

よし、応募しよう。この雑誌は今日から店頭に置かれてるものだし、ワンチャンあるな。俺はスマホを取り出し、載ってる電話番号を入力した。

××  
××  
一応、面接があるそう。俺は346事務所、だっけ？みたいな所に来ていた。

そこの客室でプロデューサーとかいう人と向かい合った。

「いやー、助かるよ。うちのスタッフの一人に突然行かないとか言われちゃってね」

「はあ」

そんな無責任な奴がいるのか。いや、もしかしたら身内が危篤になって地元に戻らざるを得ない一人暮らし人の可能性もあるし、あまり非難するのは違うか。

「けど、大丈夫？外での作業になるから大変だよ？」

「大丈夫です。暑いのは慣れてるんで」

真夏のクーラーのない室内空間で、面、手拭い、小手、胴、胴垂れ、道着、袴のフル装備で声を張り上げて竹刀を振ってた奴にとって、その程度はどうって事ない。俺の場合、手が臭くなるの嫌だったから小手下に薄い手袋付けてたし。

「そっか。当日についてはこの紙に書いてあるけど、一応今も説明しておくね。当日はうちの事務所の前に午前五時半集合、向こうに泊まりになるから、着替えとか持って来てね。なるべく動きやすい格好で。それと、熱中症対策も忘れないように」

ふむ、割としっかりしてるなあ。特に体調面の事に関して。まあ、向こうも芸能人を連れて行くわけだし、倒れられたりすると困るんだろう。

その後も、諸々の注意を軽く聞いて、ようやく話に終わりが見えて来た。

「…………まあ、そんな所かな。それと、分かっているとは思うけど、芸能人と一緒に空間に居られるからって、決して変な気は起こさないようにね」

「大丈夫です。相手にされないことは俺が一番わかっているんで」

「そ、そっか……。でも本当に気を付けてね。連絡先を交換したり、彼女達の部屋に入ったり、現地でお祭りやってるらしいんだけど、それに一緒に行くのもダメだからね」

「大丈夫ですよ。あり得ないです。もし、俺がそんな事をするようならうちにある、涼宮ハルヒの憂鬱のアニメ映画Blurry全部差上げますよ」

「うん、今ので君に害が無いことはよく分かったよ。とにかく、当日よろしくね」

「はい」

「所でそのBlurry、劇場版だけ今度貸して欲しいんだけど」  
「はい？」

その後、帰宅の時間夕方になってしまった。

×……………つーかこれ、面接つーよりただの諸注意と顔合わせだな。

×

×ど、いうわけで、バイトをする事になった。まあ、数日間の辛抱だ。乗り切れれば、莫大な金が入る(日給8千円)。今から宝くじが当たった気分だ。

当日の準備でもするか。何を持って行こうかな。とりあえず着替えだろ？ パンツ、軍手、タオル、日焼け止め、飲み物は……支給されるんだっけ？ あと涼宮ハルヒの消失、プレ4。なんか映画鑑賞会する事になっちゃったし。せっかくだから、他の映画も持って行こうかな。あ、でも他の映画は実家から持って来たコナンとかドラゴンボールとかになっちゃうな。ま、いつか。

あ、そうだ。珍しく予定が出来たんだし、その間はラノベ貸せなあって鷺沢さんに言わないと。

ポケットからスマホを取り出して電話を掛けた。1コール、2コール、3コール……………7コール、アレ？ 出ないな。どうしたんだろ。

「……掛け直すか」

なんか忙しいんだろうな。なら後で良いか。最近、アプリをインストールしたLONEで残しといても良いけど、もし忙しかったら、携帯鳴っただけでも向こうの邪魔をしてしまうかもしれない。後で言えれば良いや。

さて、ゲームでもしよう。最近ようやく、リヴァマグナ短剣6本揃ったんだよなあ。俺の水属性はここからだ。

クーラーの効いた部屋でリヴァマグナの救援に入った。救援依頼を送った所で、とりあえずトレハンを入れようとした時、通話画面に切り替わった。

「ちよっ、嘘でしょ」

救援が終わっちゃう！だが、通話の相手は鷺沢さんだ。切れない。

「もしもし?」

『……あ、鷹宮くんですか?』

「はい。何か?」

『……いえ、不在着信が入っていたので掛け直したのですが…』

「あ、すみません。えっと、今週の金曜日から、少し泊まりでバイトがあつて、しばらくラノベ貸せないんですよ。それだけ伝えとこうと思つて」

『……そうでしたか。実は私もその日から少し予定がありました…』

そうだったのか。電話かけ直すタイミングは良くないのに、そっちはタイミング良いんだな。

「分かりました。じゃ、大体次に本貸せるのは一週間後くらいですかね」

『……そうですね』

「じゃあ、また一週間後に」

『……あの』

「はい?」

『……なんか、今週はもう会わない、みたいな言い方ですね。……会つてくれないんですか?』

「え、だってラノベ貸さないなら合う必要無いじゃないですか。……」

会いに行ってもいいんですか?」

用もないのに遊びに行つて「え、何この人。なんで用もないのにうちに来てんの?」みたいに思われるの嫌だし。

『……………私が鷹宮くんを拒んだことがありますか?』

「え、だってそれはラノベ持つて来たからじゃ」

『……………違います。鷹宮くんはお友達だからです』

「……………」

『……………ライトノベルとか持つてこなくても大丈夫ですから、遊びに来てください』

マジかよ…………。天使かこの人は?そんなこと言われたら毎日行っちゃうよ。夏休み終わつても学校サボつて行っちゃうよ。

『……………学校サボつてまで来られたら流石に拒絶しますけど。むしろお説教しますけど』

「……………驚沢さんに説教されるならアリかも」

『……………何か言いました?』

「いえ、何でも」

危ね危ね。ついうっかり本音が。

けど、そうか。驚沢さんは俺の事を歓迎してくれるのか。流石に毎日行かないけど、次からは事前に連絡してたまにお邪魔させてもらおう。

とりあえず、俺は明日暇だし誘つてみるか。

「じゃあ、明日辺りにでもまたお邪魔しますね」

『……………いえ、でも今週は少し忙しいので、来週にしていだけますか?』

「……………」

×……………その流れはおかしい。絶対。

×

×木曜日の夜10時。俺はPSO2に入った。明日からしばらく会えないので、驚沢さんから「一緒にやりませんか?」とLONEで電話が来た。「恋人ですかあなたは」とツツコミを入れたら「お風呂入つて来ます」と超不機嫌そうな顔でスルーされた。

最近始めたばかりだから、まだブレイバーのレベルは60ちよつと。鷺沢さんは忙しくてソロで入る時間がないからか、俺よりもレベルは下だ。まあ、それでも48だけど。

すると、LONE電話が掛かってきた。鷺沢さんからだ。

「もしもし?」

『……こんばんは、お待たせしました』

「どうも。今、ベリハ206にいます」

『……はい、今入りますね』

ちなみに、鷺沢さんのクラスは予想を反してバウンサー。と、いうのも「黒の剣士にGNーソードビットを付けられるなんてお得じゃないですか!」と、まるで意味のわからない事を言ってた。なんか最近、邪王真眼の時ほどじゃないけど、痛々しさが出て来てる気がする。

『……あ、いました。相変わらず、女性キャラなんです』

「女侍ってカツコよくないですか?特にこの、低身長キャラが刀を振り回してる辺り。なんかやんちゃな女の子が侍ごっこしてるみたいで」

『…はいわかりました。ありがとうございます』

遮られた……。酷い。ていうか最後、何のお礼?

「それよりどうします?」

『……あ、それなんですけど。実は新しくこのゲーム始めた人がいまして、その人と一緒にやりたいのでグループ通話に切り替えていいですか?』

「いいですけど、それなら最初からグループ通話で始めれば良かったのに」

『……いえ、そういうことは鷹宮くんにも許可を取らないとダメですよ』

意外とそういうところしつかりしてるんだな。

まあ、つー事で一度通話を切った。すると、「鷺沢文香」にグループに招待されたので参加した。グループの人数は三人、もう一人が気になる所だが、グループ通話に招待されたので参加した。

「……もしもし?」

『ごんばんは、鷹宮くん』

「……………うーわ」

聞き覚えのある声。つーか間違いないく速水さんじゃん…………。

『何よ、その反応』

『何でお前いんの』

『決まってるじゃない。オペレーション・トルネードよ』

「は？」

『原生種どもから赤身肉を巻き上げる！それでフランカから経験値を無料でゲットするのよ』

『お前本当何言ってるんだ？』

『……………すみません、遅れました』

「ああ、鷺沢さん。これどうしたんですか？」

『行くわよ、フジツボ絶滅保護戦線！』

『……………その、この前鷹宮くんが私の家に置いていったAngel

Beatstを一緒に見たんです』

「ああ、あれあつたんですか？」

『……………はい。今度返しますね。それを見て、奏さん夢中になっちゃっ

て……………』

俺の所為じゃない俺の所為じゃない俺の所為じゃない絶対に俺の所為なんかじゃない!!？

『……………それで、その……………』

『ねえ「フジツボって絶滅するの？」って聞きなさいよ』

『……………こんな具合に』

……………俺が言うしかないか。とりあえず、その痛々しさはマズイ。絶対周りから浮く。

「速水さん」

『かなつぺと呼びなさい』

「……………じゃあ、かなつぺ。Angel Beatstは全部見たの？」

『見たわよ！レンタルビデオ屋で借りたわ。なんか最後よくわかんなかったけど』

「そうですか。実は他にも面白いアニメがあるんですけど、教えてや

ろうか?」

『面白い? Angel Beats!より?』

『個人的にはね』

『教えてもらおうかしら。なんてアニメ?』

『教えるのは良いんだけど、一つ注意な』

『何?』

「あまりアニメにのめり込んで、自分とアニメのキャラを同一化させてオープンにオタク趣味を出し過ぎると、世間一般の人達のオタクを見る目で周りから見られるよ」

『……………どういふことかしら?』

「シャツをジーンパンにしまったインスタイル、背中のリュックにはポスターをはみ出させ、顔は鉢巻に丸メガネのオタクと同じ目で見られるって事」

ピシツと凍りついたような気がした。

「けど、無理に隠すとバレた時に周りから引かれるから、ちょうど良くやるしかないよ。鷺沢さんみたいに。別に隠してるわけじゃないけど、表にも出さない、それを心掛けたら良いと思う」

『……………ちなみに、さっきまでの私は?』

「キモオタっぽかったです」

『……………ごめんなさい、気を付けるわ』

よし、これでOK。気を取り直して、ゲーム再開しようか。

「じゃ、やりましょうか。とりあえず、オススメクエスト流す感じで良いですか?」

『いいわよ』

『……………はい』

デイリークエストを受けた。とりあえず、パーティ申請した。承認されたのか、俺のHPゲージの上に二つ名前が出た。

ふみか：バウンサーLv. 48

Tulip：ガンナーLv10

セルスリット：ブレイバーLv. 61

「あつ、まだ始めたばかりなんですわね」



『そうよ。少し前に文香に手伝ってもらってそれ以来かしら』

しかもガンナーで……まあ良いか。遺跡探索のノーマルを受けて、三人で突入した。

……女の子二人連れてオンラインゲームとか、ホント何やってんだ俺。

1××  
時間後。

『そろそろ寝るわね』

速水さんの一言で、お開きになる所だった。

『文香なんか、もう眠いみたいだしね』

『……ふわわわあく……そう、ですわね……』

「了解です。俺はもう少しやってますわね」

『分かったわ。あまり遅くまで遊んでないようにね。おやすみなさい』

速水さんが通話とPSO2から消えた。この調子じゃ、鷺沢さんもすぐに落ちそうだな。なんかすごい眠そうだし、一応忠告しとくか。「一応言いますが、ちゃんとスマホとか充電してから寝るようにしてくださいわね。明日も何か予定あるんでしょう?」

『……ふあい、分かってまふ……』

分かってねえだろ……。けど、こればかりは俺は何もできねえしな……。

「とにかく、言いましたからね」

『……ふあい』

「じゃあ、俺も落ちます。おやすみなさい」

『……おやすみなさい』

ログアウトして、通話から抜けた。……大丈夫だろうな、鷺沢さん。まあ、アレでも俺より二つ年上なんだし、大丈夫だと思うしかないか。

テレビやプレ4の電源を落とし、スマホと携帯充電器を充電器に挿して、俺は布団の中に潜った。

「……………」

……一応、LONEでも言っといてあげよう。

ガノタだけオタク扱いされないのはおかしいと思う。

翌日、朝の四時に目を覚まし、シャワーとトイレと朝飯と歯磨きを済ませ、スマホをポケット、スマホの充電ケーブルと携帯充電器と携帯充電器の充電ケーブルとプレ4を鞆の中にしまって家を出た。

346事務所の最寄駅まで電車で移動し、そこからは徒歩。一応、集合と言われた時間の10分前に到着できるようにしている。

「おはようございます」

到着して、既に外でバスの人と話してたプロデューサーさんに挨拶した。

「ああ、おはよう。さっそくで悪いけど、機材とかの積み込みを手伝ってくれるかな？」

「はい。あ、自分の荷物どうしましょう」

「んー、大きい荷物は先に入れちゃって。小さい荷物はバスの中の自分の席に置いてくれる？」

「分かりました。……自分の席、決まってるんですか？」

「いや、好きなどで良いよ」

ふむ、じゃあ一番前の窓際だな。バスの一番後ろはリア充と相場が決まっている。いや、グラビア雑誌に出る奴なんてみんなリア充だからどこも一緒だけど。

バスの中に荷物を置いてから、事務所の中の機材をバスの中に積み込んだ。なんか照明やら何やらを運んでるけど、こういうのって事務所にあるものなのか？いや、もしかしたら前日のうちにこっちに移したのかもしれないけど。

せっせと蟻のように荷物を運び、バスに積んで行く。けど、グラビアの荷物ってこんなもんなのか？さっきから運んでるのは、写真撮影とかで使う丸くて黒い円盤みたいな奴とか、とにかく色々。なんか、こういう仕事楽しいな。グラビア雑誌に出るアイドルなんかに興味はないが、自分の知らない世界を知るという意味では勉強になる。

しばらく機材をバスに詰め込めると、ちらほらと外見は可愛い女の子達が集まって来た。多分、被写体の女の子達だろうな。どうや

ら、スタッフと被写体の子達は別々の時間のようだ。まあ、そりやそ  
うか。

「鷹宮くん、これ最後な」

「あ、はい」

最後、と言われた所には衣装箱やら小道具箱やらの山があった。

「……………最後ってそういう意味？」

「さっ、頑張ろう」

時刻は5時57分、女の子達が集まって来た時間的に逆算すると、  
おそらく6時集合だったのだろう。と、いうことは6時から何か予定  
があるんだろうな。開会式的な。

……………やるしかないか。プロデューサーさんだって頑張ってるし。

俺は息を大きく吸い込むと、ボソツと呟いた。

「EXAM SYSTEM STAND BY」

「トランザム！」

あんたガンダムも見てたのかよ……。ていうか、割とノリ良いなあ  
んだ。と、思ったらプロデューサーさんは俺をニヤニヤしながら見て  
いた。え、何その顔。もしかして、ガンダムネタで切り返せたからっ  
て勝ったと思ってるの？上等なんですけど。

「貴様には分かるまい！この僕を、通して出ている力が!!？」

「RGシステム、完全解放！」

「見えた、見えたぞ！水の一滴！」

「…おいバルバトス。いいからよこせ、お前の全部……………!!？」

やるな……………ノータイムで言い返してくるとは。だが、こっちだって  
まだ終わっちゃいねえんだよ。勝負はここからだ!!？」

「プロデューサー？早くしてくれない？」

事務所の外から声が聞こえて来て俺とプロデューサーは大人しく  
なった。

「……………続きは後で」

「良いよ、存分にやろう」

××俺とプロデューサーさんは拳を合わせると、荷物を運んだ。

××

荷物を運び終え、車に乗り込んだ。

「みんなー、聞いてくれー!」

プロデューサーさんが声を張り上げた。すると、車内の人たちは全員前を見た。

「今日、急遽代理に来てくれた鷹宮くん。なんでも言うこと聞くからよろしく頼む」

「え、ちよつ……プロデューサーさん。つーか、なんでも言うことは流石に……」

文句を言おうとした俺の台詞が止まる。ヤケにシンツ……として車内。なんか、みんなすごい俺のことを睨んでる（気がする）。いや、何人かニコニコしてる子もいるけど。

「……あの、プロデューサーさん」

「なんだ？」

「……今更ですけど、これなんの撮影ですか？」

「知らなかったのか？これは『プロジェクトクローネ』っていうアイドル達の撮影だよ」

「アイ、ドル……?」

すると、ブフツと吹き出す声が聞こえた。そつちを見ると、小学生くらいの女の子が、口を半開きにして俺を見ていて、その隣では大学生くらいの女性が目を見開いて、同じように俺を見ていた。見たことない奴らだが、何故か俺を見ていた。が、この際それは問題ではない。はい、ここからが問題。その大学生くらいの女性の肩では、鷺沢さんが寝息を立てていた。

「……」

とりあえず、顔に出ないように必死で表情筋を固めた。

その俺に、プロデューサーが声を掛けた。

「さ、鷹宮くん。自分の席に座って。出発するよ」

言われるがまま俺は席に座ったが、頭の中は「なんでいんの？」でいっぱいだった。

……え、なんで？本当に何でいんの？待て待て待て。冷静になろう俺。ここにあの人がいる理由を考えろ。

1、バイト

それはないわ。だって本屋で働いてんじゃん。バカか俺は。

2、事務所の人

それもねーよ。大学生だろうが。

……………と、なると、

3、アイドル

……………これしかないんだなあ。いや、マジで。だけど、それだとま  
ずいだろ。

確かプロデューサーは言っていた。

『でも本当に気を付けてね。連絡先を交換したり、彼女達の部屋に入ったり、現地でお祭りやってるらしいんだけど、それに一緒に行くのもダメだからね』

……………L O N Eどころか携帯番号を交換していて、出会って3日でご自宅の部屋にお邪魔し、誘われたとはいえお祭りデートで腕を組んだ。何より、鷺沢さんをアニメの道に引き込んでしまった。

ハルヒのB l u e r a yが、終わる……………。

「……………」

バレるわけにはいかない!!? 絶対に!!? 隙を出すな、ボロを出すな、ヒントを与えるな。表情、言動、態度、全てに気を使え。エージェントになったつもりになれ!

そう心の中で念じてると、スマホがヴヴツと震えた。

「つ……………」

慌ててスマホを見ると、KANADE☆の文字。速水さんからだ。

『あんだなんているのよ』

え、速水さんもいるの? 後ろに並ぶ座席を見ると、鷺沢さんに寄っ掛かられてる女性が手を振って来ていた。

「……………え」

あれが速水さん? あれが17歳? どう見てもハタチ超えてる綺麗なお姉さんだろ。俺、あんな人生経験値豊富そうな人に「処女ビッチ」とか思ってたの?

……………いや待て。つーかあの人、何で俺の顔分かったんだ? お互い初

見のはずだろ。LONEのトップ画だって、俺の奴はゼクアインだし。鷺沢さんから写メでも見せてもらったのかな？でも、鷺沢さんと写メなんて撮ったつけ……？

まあいいか。とりあえず返事しないと。

『聞いている通りバイトです。速水さんこそなんで？』

頼むからアイドルとか答えるなよ。300円あげるから。

『決まってるでしょ？アイドルだからよ』

はい、おわた。

『鷺沢さんも？』

『そうよ。悪かったわね、隠してて』

『別に良いです。俺でも隠すと思いますから』

まあ、実際仕方ないと思う。むしろ、ここからは俺の問題だ。アイドルと知ってしまった以上は、これからは付き合い方も考えないといけないかもしれない。この事務所が恋愛禁止かにもよるけど、鷺沢さんとか絶対そういうの考えないもん。

『事こうなった以上、とりあえず俺たちの関係が周りにバレないようにしましょう』

『そうね。ありすと文香には私から説明しておくわ』

『よろしくお願いします』

『そつちこそ、ボロが出ないようにね』

分かってるさ。そんなへまはしない。

そう思いながらスマホの画面を落とした直後……。

『鷹宮くん、だったつけ？』

『え？はい』

後ろの席から、突然顔を出して来たのは、茶髪の女の子だった。眉毛が若干太くて、ポニーテールに髪をまとめてる女の子。

声をかけて来たくせに何故か不機嫌そうな顔で俺を見下ろしていた。

『……………ふーん？あたしのこと、知ってる？』

『あ……………』

知ってる、と言った方が良いのか？アイドルなんて他人に知られて

なんぼだろうし……………。

「し、知ってるけど」

「！ほんとに!?？」

あ、ヤバイ。嬉しそう。心が痛い。

「じゃあ、名前当ててみて」

ほら見ろ。えー、そもそもアイドルの名前なんて鷺沢さんと速水さんと橘さんしか知らねーのに……………。

「ちよつと待ってて下さいちよつと親に連絡しなきゃいけないんで「？」」

ふっ、完璧だ。これぞ必殺「メールのふりしてググるアンバサダー」だ。要は、メールを打つ振りしてググる必殺技の事だ。この説明、丸々いらない。

調べるにしても「プロジェクトクローネ」でググれば名前と顔の一覧くらい出るだろ。

「……………よし、おk」

調べ終わると、スマホの画面を落とした。

「神谷奈緒さん、ですか？」

「そ、そう！そうだ！いやー、あたしも有名になっ……………！あ、いや、べ、別に嬉しくなんかないけどな……………!!？」

そうか、すごく嬉しそうだ。喜んでくれたなら、このカンニング行為も無駄じゃなかったな。

「完全にスマホで調べてたよね」

「なにに!?？」

神谷さんの隣から冷めた声が出た。背もたれで顔は見えないが、かなり落ち着いた声だ。

「そうなのか？凜」

「今更、鷹宮くんが親御さんに連絡する事なんてないでしょ」

「お、おい！そうなのか？」

「いやいやいや、ちゃんと知ってますって！」

「じゃあ、私が所属してるユニット言ってみろよ！」

「……………ほら、あの……………ワルキューレ、とか？」



「マクロスじやんかそれはー!」

んだよー、と後ろで手を組んで小石を蹴りそうな感じで呟く神谷さん。つーか、よく分かったなワルキューレ。

ったく、誰だか知らねーが余計なこと言いやがって。顔覚えてやるかな、と背もたれの間から後ろを見ると、黒髪の美人さんがこつちを見ていた。何となく、前髪で目の隠れてない鷺沢さんに似てる気がする。

「私は渋谷凜。よろしく、鷹宮くん」

「どうも」

いや、似てないわ。鷺沢さんの方が可愛い。何より、なんかこの人眼光すごい。怖い。

……………えっと、もう良いかな。そろそろ寝たいんだけど。

「なんであたしのこと知ってるなんて嘘ついたんだよ」

うん、君は少し察する事覚えよう。気を使ったんだよ。自分の気遣いを説明する時ほど恥ずかしいもんはねえぞ。ていうか、そっちも気を使われたって自覚したくないだろ。

「まあ、その……………見栄を張りました」

嘘をついた。

「……………でもほら、俺は知らなくて仕方ないって。あまりアイドルに興味ないし、どちらかというアニメのが好きだから」

「……………アニメ?」

あれ、なんか地雷踏んだ? 神谷さんの目が光った気がする。

「何のアニメ見てるの?」

「え? あー、色々」

「k w s k」

「……………最近ガンダムX」

ガンダムシリーズは数が多いから、まだ見てない奴多いんだよな。あ、いやそれでも、あとはゲームと漫画除いてVとSEED外伝とAGEだけか。

「ガンダム! どのシリーズが好きなんだ?」

「今の所、一部を除けば嫌いな作品はありませんけど」

「……………SEED、SEEDは!?？」

「無印なら」

「よっしゃー!ね、隣座つても良いか!?？」

「え、良いですけど」

バスの中を歩いて、俺の隣に座る神谷さん。あー、流石アイドルなだけあって顔は可愛い。少年のような目をしてはいるけど。

っーかお前、渋谷さんは良いのかよ。何か話そうと思つて隣になつてたんじゃねえの？

「オタク同士、共鳴しちゃつた……」

「あ、じゃあ私が凜の隣り座っちゃおー」

誰だか知らないけど、茶髪で髪を二つに結んでる女の子が渋谷さんの隣に座つた。条件はクリアされました。

「ね、何歳なの？」

「17ですけど」

「じゃあ高二? 同い年だな、タメ口でいいぞ」

「え、いやそんな。俺は今日はただのスタッフだし、立ち位置的には神谷さんの下ですよ」

「良いんだよ!」

ええ……。俺は困つた顔でプロデューサーの席を見た。すると、プロデューサーさんは頷いた。え、良いの? なら良いか。

「……わーつたよ。これで良いか?」

「よろしい。でも、17歳かあ……カミーユと同い年じゃん」

「そうだよ。シーブックともロランともな」

「お、良いね。でき、SEED好きなんだよね?」

「まあ、嫌いではないが」

なんつーか、続きで台無しになったよなあ。SEEDは。

「誰が好きだった? キャラ」

「イザーク」

「えー、キラのが良いだろー」

「いやあんな悟り開いた高校生は嫌だ。クルーゼがキラをプロヴィデンスでボコつてるとことか爽快だったね。ミーティア壊れてたし」

「そうかー？でも、あそこ熱かったよなー」

「それはな。一応、ラストバトルだし。ビームサーベル構えてビーム避けずに突撃してコクピットに突き刺したところはヤバかった」

「あれ激アツだよなー！前にボコボコにされてたから尚更なー！」

「ああ、ホントに熱つ……」

なんか今、寒気がした。俺の後方。後ろの座席ではない。その遙か後方。バスの一番後ろの席。俺は恐る恐る後ろを見た。いつの間にか覚醒していた鷺沢さんが、闇のオーラを纏ってこっちを見ていた。

「あら、文香起きたのね？実は、話があるんだけど」

「………奏さん、なんですかあれ？」

「あれ？………あつ、あー………実は、鷹宮くんバイトで………」

「そんな事はどうでも良いんです」

「ど、どうでも良いの？」

「何をしてるんですかあの人は」

「な、なんかガンダムの話で意気投合したみたいで………」

「武力介入して来ます」

「落ち着いて！お願いだから落ち着いて！」

………こ、怖え〜!!？怖過ぎる！あまりの恐怖に前向いちやっただよ  
！もう後ろ向けない！

「………どうかしたのか？鷹宮」

「………えつ、あつ、いやつ………」

神谷さんが隣から声をかけて来た。怖かったんだよ。泣かされるかと思った。てか何？何に怒ってんの？

「熱かったといえ、あそこも熱かったよなー！ほら、フリーダムが降ってくる所！敵のライフル撃ち落としてさー！」

「あ、あーうん。まあね………」

「あたしはSEEDの中ではやっぱキラだなー。優しくて強いとか完璧超人かよー」

「そ、そうだなー。やっぱ吉良邸の討ち取りが日本史じゃ熱いよなー」  
「………えつ、いきなり何の話？」

き、気にしない方が良いのか？って、さっき自分で決めたばかりだ

ろ。表に出すなってだから。鷺沢さんは俺と知り合っていない事にしておかないといけないんだから、向こうは速水さんに任せて俺はいつものように振る舞え。もし、なにも知らない俺がいきなり不機嫌になってる人を見たらどうする？ 関わらないようにするだろ。

それに、今は神谷さんが声をかけて来てくれてるんだ。関わらないにはもってこいの状況だろ。

「確かにキラもカッコいいけど、そもそも設定がチートの塊みたいな奴だからなあ。俺はキラよりもムウの方が好きだな。ほら、スカイグラスパーでディアツカ倒したじゃん。俺はそう言う感じの活躍の方が好きだから」

「……確かに。そういうのもカッコいいかも。じゃあアレか？ デュエルでフォビドウンとレイダー倒したイザークとかは？」

「大好きです」

直後、後ろからメキツという謎の音と「文香!?!」という速水さんの焦った声が聞こえたが、記憶から消しましたわ。

「とにかく、そういう……機体のスペックで劣ってるのに勝てたり相討ちにしたりするのが強さだと思っただよな」

「むっ……」

「キラみたいに最強の機体をもらって無双しても強いとは限らないだろ」

「でもキラの方が強いぞ」

「それはまあ、そうなんだけどな。あーいやでも、キラよりもアスランのが強くな」

「キラはスーパーコーディネイターだぞっ？」

「でもストライクとイージスは相討ちとはいえ、最後アスランの自爆で終わったんだし、アスランの勝ちだろ」

「SEED destinyのアスランはさほど強くなかったじゃないか」

「ラスト、インジャでシンをフルボッコにしてたけどな」

「キラでも出来るぞ！」

「そりゃストフリの性能がイカれてるからな。インジャだからすごい

んだよ」

まあ、インジャだつて実際すごい機体だけどな。なんで脚にサーベルついてんだよ、カッコいいだろうが。

すると、ぐぬぬつと神谷さんは唸り、背もたれの後ろに声を掛けた。

「むー、凜はどう思う?」

「知らない。何で私に振るの」

「加蓮は?」

「いや加蓮も知らないと思うけど……」

「私もサシの勝負ならアスランな気がする」

「え?知ってるの?私だけ知らないの?私が間違ってるの?」

へー、あの茶髪さんは加蓮って言うんだ。これで橘さんと速水さんと鷺沢さん以外で三人名前覚えた。

「おかしいぞそれは!キラはレイ相手に被弾ゼロで勝ったんだぞ!」

「だつてレイじゃん。あれガンダムもらつてるけどイザークとかダイアツカより弱いんじゃないの」

「デストロイ相手に無双してただろ!」

「ルナマリアちゃんでも倒せるパイロットよ?あのデストロイ」

あの、どうでも良いけど渋谷さんの周りでガンダムの話はやめてやれよ。廊下側に並んだ二人がそこで話すと、余るのは窓際の俺と渋谷さんの二人だけ。今度はレイとイザークの強さ談義始まつちまつたし……。

なんか、ナンパしてるみたいで嫌だが、ここは俺が気を使うところだろう。

「すいつ……渋谷さんは、何年生ですか?」

噛んでしまったが、声を掛けてみた。なんか後ろの席で「節操というものがないのですか……?」「文香!携帯メキメキ言ってる!」つてやり取りが見えるが、視界から消しましたわ。

渋谷さんは不機嫌そうに俺を見ると、ため息をついた。

「……はあ、別に良いよ。気を使ってくれなくて。それと、高2なんですよ?私は一個下だから敬語もいらない」

「そ、そう……?」

「普段は二人ともあまりアニメの話とかしないんだけどね。共通の趣味を持つ男の人と初めて話すから嬉しかったのかな」

「……………は？初めて？プロデューサーさんは？」

「プロデューサーは別にオタク趣味じゃないでしょ」

いやーあの人は超オタクだと思うぞ。もしかして隠してるのかな。プロデューサーさんの方を見ると、口パクで「言ったら殺す」と言っていた。

「渋谷さんも、アニメ見れば良いのでは？」

「私がいい。興味ないし。今はアイドルやってるから」

「でも、オフの日とかする事ないんじゃないのか？」

「……………いや、オフは家の花屋を手伝ってるから」

「……………えっ？は、花屋？」

「……………何？似合わないって言いたいなの？」

「正直に言おうと」

「……………じゃあ、何屋に見えるの？」

「TSUYOAYA、とか？」

「……………」

「いや、下らないギャグじゃなくて。なんかこう、『オススメの映画ありますか？』って聞いたたらミッション・イン・〇ツシブル勧めてきそうな……………」

「……………」

「ごめん、ちよつと黙るわ」

「うん」

隣で「ハイネとイザークの強さ議論」を繰り広げられる中、俺は大人数の前を向いて座り直した。

バスはいつの間にか高速道路を走っていて、パーキングエリアに入って行った。そこで、プロデューサーさんが立ち上がり、声を張り上げた。

「じゃあ、一旦休憩にするから。20分後に出発するから、みんな遅れないようにバスに乗るように。全員変装を忘れるなよ。……………鷹宮くんは最後に降りて、バスから降りた子達の人数確認。その後は、降り

た子達が変な事に巻き込まれないように見てあげてくれるか？」  
「はい」

今更だけど、それ軽作業・搬入じゃねえだろ……。完全にプロデューサーの雑用だよな。まあ、これで金もらえるなら別に良いさ。バスが駐車場に収まり、扉が開いた。神谷さんと加蓮さん、渋谷さんが降りて、続いてアイドル達がゾロゾロと降りて行く。俺の横を通る列が途切れ、後ろを確認した。なんだよ、全員降りるんじゃないか。一応、背もたれに隠れて見えない人もいるかもしれないので、後ろの座席まで回ってから、俺もバスから降りた。

ふう……。これからアイドル全員の行動の把握をしないとイケないのか。割と大変かもな、このバイト。  
そんな事を思っていると、バスの横で三人ほど女の子達が待っていた。

「……………鷹宮くん？」

「？……………あつ」

ニコニコ微笑んでるのに目が笑ってない速水さんが立っていた。

「……………私、速水奏って言うのよ」

「あ、どうも……………」

そうか、初めましての設定か。

「……………ちよつと、一緒に回らない？」

×俺は速水さんに連行された。

×

「で、どういうつもりなの？」

速水さんが俺に缶コーヒーを買ってくれて、二人でベンチに座っていた。ここなら、パーキングエリア全体が見渡せるから、俺の仕事もできる、とのことだ。

「だから、プロデューサーの言ってた通りだ。たまたま応募したバイトがここだっただけだよ」

「ふーん？まあ、それは良いのよ。……………どうして、他のアイドルと仲良くしてるの」

「こつちから仲良くなろうとした覚えはないよ。向こうから声かけて

来たんだよ」

「それも見てたから分かるわよ。ただ、文香がすごい荒れちゃってるわよ？今は、ありすに何とかしてもらってるけれど」

「……………なんで鷺沢さんが荒れてんの？」

「……………まあ、それは自分で考えなさい」

え、それは横暴。

「とにかく、一度文香のご機嫌をとって来なさい」

「え、それはマズイだろ。プロデューサーにバレたらヤバイんだよ。バイトが始まる前から約束破ってんだよこっちは」

「知らないわよ。あなたの立場と文香の心、どっちが大事なの？」

「や、鷺沢さんの立場もマズイんだが……………」

「あなたには分からないわよ。隣にいるすごい不機嫌な文香がどれだけ怖かったか。『……………後でストライクガスト零式の刑ですネ』とか言われたのよ」

「それは怖えな……………」

ていうか、速水さんも涙目になるなよ……………いや、可愛いけど。

「……………わかったよ。向こうに着いてからでも良いか？」

「今しなさい」

「……………了解」

俺は速水さんの隣から離れて、鷺沢さんを探しに行った。ついでに、全員の様子も見に行くか。

お土産コーナーを見回つてると、鷺沢さんが橘さんを連れてガチャポンコーナーを眺めていた。橘さんは年相応のものをしているが、なんか鷺沢さんは手鎖のガチャポンを見て「これでまず手足を封じましょう……………」とか言っていた。えっ、俺今からあれに話しかけんの……………？

いや、恐れるな。とりあえず、初対面のフリをしないと。

「……………あの、すみません」

声を掛けると、橘さんと鷺沢さんが顔を上げた。鷺沢さんの頬はぷくぷくと膨らみ、そっぽを向いた。

「初めまして。鷹宮といいます。実は、バスに乗ってた皆んなの名前



を把握しておきたくて、皆さんに聞いて回ってるんですけど……」

「……………」

「お名前、聞かせてもらえませんか？」

頭上に「？」を浮かべる鷺沢さん。が、やがて何か思いついたのか、手の平を打った。

「……………鷺沢文香です。こちらは、橘ありすちゃんです」

よし、通じたか。とりあえず、このままベンチにでも誘って話を……………。

「……………もしかして、鷹宮千秋くんの弟さんですか？双子の」

「……………はっ？」

「……………申し訳ありません。私、てっきり鷹宮千秋くん本人だと思っ  
てしまいました……。そっくりなんですね」

「……………え、いやっ」

「……………そうですよね。鷹宮くんが、アイドルのアルバイトなんてする  
はずありませんよね」

「……………や、あのっ」

「……………これから三日間、よろしくお願いしますね」

「……………」

俺は腕を組んでしばらく考えた後、微笑みながら言った。

「はい。よろしくお願いします」

……………ああ、やっちまった……………。

嘘が下手な奴は全て嘘で包もうとする。

『あんた何やってんのよ』

バスの中。速水さんからLONEが来た。もうバレたか……………。

『ビックリしたわよ。文香に「鷹宮くんって、弟さんがいたんですね」って言われて』

『……………面目ない』

結果オーライなんですけどね。…………いや、まあ俺が気を使うべきハードルは上がってしまったんですが。

『まあいいわよ。さつきと違って文香すごいご機嫌だし』

『…………俺がいけない方が良いつて事ですかね』

何それ泣きそう。死んじゃおつかないもーもう。

『そうじゃないけれど…………まあ良いわ。その代わりに、絶対バレないようにね』

『分かってる』

×スマホの画面を落とした。とりあえず、向こうに着くまで寝るか。

×

×目的地に着いた。どこだか知らないけど、すごい綺麗な海が広がっていた。が、そんなものに感動してる暇は俺にはなかった。到着してから、まずは忘れ物がないかバス内のチェック、その後は支給された軍手を装備して色々な機材を運ぶ。まずは衣装箱を更衣室に運び、アイドル達に先に着替えさせ、その間にスタッフで海に撮影で使う道具やテントのセット。とにかく大忙しだった。俺は蟻の観察は大好きだが、蟻の真似事は大嫌いだと気付きました。

何より、この炎天下の中で重いものを迅速に運ぶのはキツイ。小まめに水分補給しないと死ぬ。ホント、剣道やっててよかった。

「……………ふう」

テントの設営が終わり、次はビーチパラソルや椅子の設置。撮影でアイドル達がここに座るらしい。

パラソルを開いて固定していると、後ろから肩を突かれた。

「？」

「どう？鷹宮くん？」

振り向くと、速水さんが目の前で水着姿で立っていた。黒……いや、紺か？とにかく、暗くて濃い色のビキニ姿。肌の白さとのギャツプがすごかった。

「っ！」

A B バカなのと処女ビッチなので忘れてたけど、この人も美人だ。クツソ……可愛くて美しい。あとエロい。ホントに高校生？鷺沢さんレベルでオツパイあるんじゃないの？

つと、とにかく褒めない。いや、でもなんて褒めりや良いんだ？こう、下心なしで尚且つプロデューサーにも怒られない範囲の褒め方……よし、来たア！

「……いい、良い身体してるね、とか……？」

「っ！へ、ヘンタイ!!？」

変態と言われてしまった。俺もそう思う。プロデューサーが近くにいないくてよかった。いたら八つ裂きにされていたかもしれない。

「誰が体を褒めろって言ったのよ！似合ってるかを褒めなさいよ！」

「あ、ご、ごめん……」

「あんたねえ、プロデューサーに文香との関係をバラしても良いのよ？」

「すみませんでした速水さん。すごく似合ってます」

「ん、よろしい」

実際、似合ってるしな。エロい身体と色が調和してアダルトイイな感じになってる。

満足した速水さんは「じゃあ……」と続いて誰かを前に突き出した。

「ありすは？」

「ひやつ？か、奏さん!?？」

突き出されたのは橘ありすさん(12)。多分、この中で最年少の子だ。前に俺にイタズラ電話をかけて来た子。

着てる水着はワンピースのふりふりした子供らしい水着。とてもよく似合っていたが、俺の口から漏れた言葉はまったく別のものだった。

「…………スク水じゃないの?」

「どういう意味ですか!?!?」

「……事務所で用意された水着にスク水があるわけないじゃない」

速水さんに呆れられてしまった。

「いや、まあ似合ってるよ」

「っ、あ、頭を撫でないで下さい」

「あ、ごめん」

そういえば、こいつもアイドルだったな。っーか、そもそも初対面か。しかし、この子の頭を撫でたくなるこの衝動は何だろうな。朝潮と暁を足して割った感じだからか?

とにかく、頭を撫でたくなる衝動は抑えないとな。プロデューサーにバレたら朝から素晴らしいコークスクリューを喰らわせられる。

で、大体この流れは読めてる。この二人が来るということは、残り一人もだろ?

「ほら、文香。こっち来なさいよ」

速水さんが後ろに声を掛けた。すると、水着の上にパーカーを羽織った鷺沢さんが歩いて来た。

「あなた、パーカーなんて羽織ってるの?」

「…………む、無理です。こんな所で下着のような姿になるなんて……は、恥ずかし過ぎますっ!」

「大丈夫よ、よく似合ってるから」

「…………そういう問題ではありませんっ。…………男性の方もたくさんいらっしやるというのに…………。た、鷹宮くんの弟さんだっ…………いらっしやる、のに…………」

カアツと顔を真っ赤にして俯く鷺沢さん。パーカーで必死に下半身を隠そうとしている。

「大丈夫です、文香さん!」

「…………ありすちゃん…………」

「私も文香さんかわいいと思います!」

「…………だからそう言う問題ではないのですが…………」

尚更、落胆する鷺沢さん。可愛いなあ、橘さんも。

すると、今度は速水さんが鷺沢さんの耳元で何か話した。

「……………あんたねえ、そんなんじや鷹宮くん(兄)に見せられないわよ」  
「……………そ、それは分かっているのですが……………」

「彼、その弟なんだし本番の時の練習にちようど良いんじゃない?」

「……………待ってください。本番って何ですか」

「へ?彼、なんかあなたをプールに誘おっかなーとか私に相談して来たけど」

「ふえっ!??」

あれ、なんか見えないところで風評被害に遭った気が……………。

「……………ほ、本当ですか?」

「ええ。だから、今のうちに慣らしておいた方が良いんじゃない?」

「……………」

すると、鷺沢さんはパーカーのチャックを摘んだ。で、顔を赤らめたまま俯いてチャックを下ろした。速水さんより明るい色の青のビキニ。本人の元々の清楚な感じと上手く調和し、可愛さ綺麗さ美人さエロさをすべてカンストさせていた。

「……………こ、ここまでで勘弁してもらえませんか?」

「……………」

チャックを下ろした所で、速水さんの様子をチラツと伺うと、速水さんはすごい真顔になって、鷺沢さんに言った。

「文香、ばんざーい」

「……………へ?ば、ばんざーい……………」

直後、シユバツと目で追えないレベルの速さで速水さんは鷺沢さんのパーカーを脱がした。

完全に水着姿が露わになり、鷺沢さんは顔を真っ赤に染め上げる。

「……………き、きやああああつ!??ち、ちよつと奏さん!」

「鷹宮くん、はい」

「え?」

取られたパーカーは俺に向かって投げられた。俺がそれをキャッチすると、鷺沢さんは俺の方を見た。

「つ、た、鷹宮さん!パーカー返して!」

鷺沢さんは片手は自分の体を隠し、もう片方の手は俺に向かつて伸ばす鷺沢さん。その鷺沢さんの動きを、速水さんは止めた。ああ、このパーカー鷺沢さんの匂いがする……………」

「……………か、奏さん！離して下さい！」

「……………嫌よ？それより、どうせ見られたなら感想を聞いておいた方が良いんじゃない？」

「……………」

速水さんのその言い草に、鷺沢さんは納得してしまったのか「離してください」と速水さんに言って開放されると、顔を赤らめながら聞いてきた。

「……………ど、どう、ですか……………」

「……………結婚して下さい」

「はえっ!?」

「あ、間違えた。すごく似合ってますよ」

良かったー、双子の弟設定で。っていうっかり求婚してたわ。嫌われる所だった。

チラツと様子を伺うと、鷺沢さんは顔を真っ赤にして、なおかつ不満そうな顔で俺を見ていた。隣の速水さんは無言で爆笑していた。お前後で覚えてろ。

鷺沢さんが俺に声をかけた。

「……………すみません、とても勝手な事で申し訳ないのですが」

「はい？」

「……………鷹み……………千秋くんの外見で褒めていただくと、その……………心臓に悪いので、控えていただきたいのですが……………」

「……………」

……………えっと、どう言う意味なのかはあまり考えない方が良いのかな？まあ、確かに知り合いに求婚されたらドキツとするか。俺だって鷺沢さんと同じ顔の人に告白されたら心臓吐き出すと思うし。

「……………わかりました。申し訳ありません」

「……………いえ、褒めていただいたのは嬉しかったです」

「プフフツ……………ふ、文香……………っ！そろそろ、仕事の邪魔になっちゃう

から、行くわおっ……!」

笑いすぎだお前この野郎。最後の方言えてねーし。

「……はい。では、鷹宮さん。頑張つて下さいね」

三人は俺から離れていった。さて、良いもん見れたし、遅れた分は取り返すか。

×

撮影が始まったが、俺はそれを見ることは叶わなかった。アイドル

達が今の撮影をしている間、俺は次の撮影の準備をしなければならぬ。例えば、水着にしてもその上にパーカーを羽織つたり、頭に何かアクセサリーを付けたりする、そういう小道具の準備。

小道具箱を運んで来て、その中から撮影の終わったアイドルから順に指定の小道具を渡さなければならぬ。何度も思うけど、軽作業・搬入じゃない。今は、イルカの浮き輪みたいな奴を、足で踏む空気入れで膨らませていた。

すると、一人終わったのか、黒いビキニにノースリーブの上着を羽織った子がやって来た。

「スミマセン」

………独特のイントネーション。外国人か!??だが、俺は問題ない。艦これをやっているからな!!?尚、7ヶ国の模様（響含め）。

とりあえず、ヴェールヌイの国から試そうか。……あれ、いやちよつと待って。何を言えばいいんだろう。ハラショーとスパスイーバとウラーとダスビダーニヤとポルノーチとポルデーニしか分からないんだけど。挨拶がないんだけど。

「………は、はらしよー」

「……あの、日本語で大丈夫ですよ?」

「あ、そ、そうですか?」

「それで、私のなんですけど」

「えつと……失礼ですが、お名前を教えてくださいてもよろしいですか?」

「あ、ハイ。アナスタシアといいます」

「あ、アナ……?」

「アーニヤとお呼びください」

豊穰の女主人のキャットピールの茶髪の方みたいなあだ名だな。

「アーニヤさん、ですね。今、明日筋肉痛になる覚悟で膨らませてるんで、少し待ってください」

「は、はい」

シユコシユコシユコと黄色い空気入れを踏みまくる。徐々に膨らむイルカ。

完成し、空気穴を止めた。それを持って手渡した。

「はい」

「ありがとうございます」

俺は次に来る予定のアイドルの宮本フレデリカさんのピンク色のビーチボールを膨らませ始めた。なんで外国人が多いんだよ……………。

また黄色い空気入れを突き刺して踏み始めた。

「あの……………」

「？」

声を掛けられ、振り返った。アーニヤさんだった。いや、周りには一人しかいないからそりやそうなんだけどね。

「何ですか？」

「いえ、鷹宮さんの事、聞きたくて」

「……………俺？」

「はい。何歳ですか？」

「17です」

「そうですね。私の二つ上ですね。どうして、このバイトに来たんですか？」

「んー、金が欲しいからです。今、金欠なんですよね。一人暮らしって面倒でしょ」

「一人暮らしですか？それって、一人で料理とか洗濯とかしてるんですか？」

「はい。慣れれば楽ですよ。……………ただ、今月は序盤で使い過ぎてですね。死ぬかと思いました」

「それは、大変ですね。何に使ったんですか？」



「何って……アニメのDVDとかですね」

鷺沢さんのデート費用とは言えないよな。妥当な誤魔化し方をした。

「アニメ、ですか？」

「はい」

「鷹宮さんて、オタクですか？」

「オタクは悪いものではありませんよ。むしろ、ジャパニメーションの国の文化に忠実と言って欲しいですね。批判されるのはおかしい話なんですよ」

「確かにそうですね！」

「は、はい……」

そんな純粹に頷かれるとなんか罪悪感が芽生えるんですけど……。いや、外国人的には日本の文化にも興味がある感じなのか？

「アーニャさんは、どちらの国から来られたんですか？」

「私はロシア人と日本人のハーフです」

「ロシア……ヴェールヌイですか」

「はい？」

さつき、一発で当たりを引いたのか。すごいな俺。

「ロシアにはアニメとか無いんですか？」

「ないことはありませんが、私はあまり興味ないでした」

「そうですか。………そういうえば、ロシアが舞台のアニメがあるの知ってますか？」

「ホントですか？」

「はい」

ビーチボールを完成させ、その次の渋谷さんが使う、なんかグラブルに出て来そうなおもちゃの剣を用意した。これは膨らませる必要ないので、そのまま箱の中に戻した。

で、ポケットからスマホを取り出し、ググって画像をアーニャさんに見せた。

「ほらこれ」

「………あ、見たことあるです。これ何でしたか？」

「ウサ○ツチです。うちにBlue-ray全部ありますよ」

「誰かの鞄についてました。可愛いです」

「まあ、マスコットみたいな感じですからね。この緑の方がプー○ンで、赤の方がキレ○ンコっていいいます」

「……ほ、ホントにロシアですね」

「まあ、そうですね。他にもシャラ○ワとかレニ○グラードとかいいますよ」

「人ですか？」

「両方カエル」

「な、なんだかとても気になり始めました……」

「まあ、気になるなら見ると良いですよ。ようつべに全部あると思うし」

「分かりました。今度、見てみるです」

俺は紹介してから思った。

また同じ過ちを繰り返してしまった、と。すると、撮影を終えた宮本さんがやって来たので、俺は膨らませたビーチボールをいつでも渡せるよう、手元に用意した。

1×××日目の撮影が終わった。思ったより早く終わり、せっかく水着になつたので、アイドル達はビーチで遊んでいる。しかし、今日は上手くやれたなー。鷺沢さんと絡む機会がなかったのが一番でかいが、これならバレる事はないだろう。

そんな事を思いながら、キヤーキヤーと速水さんや橘さんと遊ぶ鷺沢さんの姿をパラソルの下で眺めてると、何となくそろそろかな？と予測していた。何をつて？決まってるんじゃない。

「鷹宮くん、ちよつと良いかな？」

プロデューサーからのお呼び出しに決まっているだろう？アイドルと一緒に働いてるからって、アイドルと一緒に遊べるとは限らない。

「はい。なんででしょうか？」

「今日、この後はみんなでカレーを作るんだけど」

「カレー、ですか?」

「ああ。今回は、ああして自然体のアイドル達の姿にもカメラを回してるからね。食事中もアイドルの子達に作ってもらって、その姿を撮るんだ」

「なるほど……。それで、何か?」

「カレーの準備、ジャガイモと飲み物忘れちゃったから買って来てくれないかな?」

「……………了解です」

「悪いね、こんなパシリみたいなこと」

「いや、いいです。ちょうど、暇してましたし。そもそもそういう雑用のために俺を雇ったんでしょ?」

「買ってきて欲しいものはここに書いてあるから。終わったら、浜辺で女の子達と遊んでも良いから」

「……………撮影中なのは?」

「鷹宮くんが映ってない奴を使うから大丈夫だよ」

プロデューサーからメモ帳をもらい、ポケットに突っ込んだ。軽く欠伸をしながら立ち上がると「あの」と声が聞こえた。

「それ、私も行ってもいいですか?」

あ、えーつと……………北条加蓮さんか。

「加蓮?」

「一人じゃ大変だと思うし、私は撮影で少し疲れちゃったから、涼しい所で涼みたいなって」

「うーん……………」

「ちゃんと変装するから」

「……………まあいいよ。鷹宮くんは今日頑張ってくれてたし、それくらの役得があっても良いよね」

「ありがとうございます。じゃ、行こっか?」

「あ、はい」

加蓮さんと近くのスーパーに向かった。場所はスマホのマップで調べられる。

ながらスマホをしながら歩いてると、隣からサングラスと帽子を装

備した加蓮さんが声をかけてきた。

「もう、せっかくアイドルと一緒にいるのにながらスマホ？」

「いや、場所わかんないんですよ。迷子になったら最悪でしょ」

しかし、この人は何が狙いなんだ？なんでわざわざ付いて来るんだよ。

俺の疑問は顔に出ていたのか、加蓮さんが口を開いた。

「んー、ちょっと一緒にお話ししたくて」

「俺と、ですか？ていうか、みんななんで俺に話しかけて来るんですか？」

「そりゃあ、同年代の男の子だもん。みんな話して見たいよ。中には女子校の子もいるしね」

「そういうもんですかね」

「そういうもんだよ。……それより、タメ口で構わないからね。私の方が年下だし」

「あ、そう」

「かくいう私も、鷹宮くんとお話ししたかったんだよ」

お話？わざわざ二人きりになって？まさか、鷺沢さんのことがバレたんじゃねえだろうな……。いや、でも今日は完璧にこなしてたはずだ。

内心ヒヤヒヤしてると、加蓮さんは口を開いた。

「シーブックとキラ、どっちが強いと思う？」

「知らねーよ」

「ずっと奈緒と話してたの！どっちが強いかな！」

え、まさかキラとアスランの話から発展したの？バカなのこの人達？

「ていうか、加蓮さんはアニメが好きなんですか？」

「んー、好きっていうより昔のアニメに詳しいだけ。それよりどうなの？シーブックとキラ」

どこまで気になったんだよ。アホか。

「乗る機体にもよるでしょう。F91とストフリなら間違いなくキラが勝つね」

「ふむ、やはりか……」

「ただし、シールブックがキンケドゥで、乗る機体がX1なら分からないよ」

「……………別人にしたら意味ないじゃん」

「や、キンケドゥはシールブックの三年後？だっけ？ですよ。X1にはABCマントつてのがついてて、ビーム兵器効かないんですよ」

「……………なるほど。ストフリはビーム兵器が多いからかな」

「その上、キンケドゥは近接格闘は尋常じゃないから、懐に飛び込めばワンチャンありますね」

「おおー。じゃあホントに分からないじゃん」

まあ、強さなんてお互いと同じ機体に乗せないと分からないけど。まあ、加蓮さんは納得してくれたみたいだからそれで良いか。

「いやー、鷹宮くんは良い人だねー」

「？ 何が？」

「んー、いやなんかちゃんと話に付き合ってくれてるところとか」

「いや、ガンダムは俺も好きだからな。その点、アイドルの話とか振られても、俺は答えらんないし」

「いいの。褒めてるんだからちゃんと受け取ってよ。アイドルに褒められてるんだよ？」

そりゃそうなんだが……。褒められ慣れていないもんでね。今でも正直驚いてるわ。まさか俺がアイドルの撮影に同行してんだから。一生の自慢話だよなあ。

「ちなみにさ」

「？」

「クローネの中じゃ誰が一番好き？」

「はあ？」

「結構、いろんな子と話したんでしょ？」

「まだ話してないのもいるけどな」

三人くらい。まあ、別に話さなきゃいけないわけじゃないんだけどな。

「だから、外見で」

「外見、か……」

鷺沢さんと俺の繋がりへのヒントになるような答えは避けた方が良さいだろうな。だからこそ、俺は自信を持って答えよう。

「あれなんて読むんだ？ さぎ、さわ？」

「文香ちゃんが好きなの？」

「外見はな」

中身も大好きだが。勢い余って求婚するくらい好きだし。まさか、ここで堂々と宣言した奴と俺が繋がりがあるなんて、誰も思うまい。思う奴がいたら、相当なバカだ。

「ふーん？ 意外だね」

「そうか？」

「あ、そこ右曲がって」

「はい」

交差点を右に曲がり歩く事数分、スーパーが見えた。買うものは飲み物、ジャガイモ、玉ねぎ……ほとんど買い忘れてんじやねえか。いや、憶測でものを決めるのは良くないな。多分、明日はバーベキュー大会でもやるんだろう。その時に野菜は一通り揃えておいたけど、カレーの分だけ忘れたと捉えるべきかな。

「何買うの？」

「これ」

メモを見せると「ふむふむ」と加蓮さんは唸った。

「よし、行こうか」

二人でスーパーの中を回った。お目当の野菜をカゴに入れていった。

飲み物はお茶を二本買い、あとついでにアイスの箱を買った。後は領収書を貰えば何とかなる。両手に袋を持って海に戻った。

この調子なら、鷺沢さんとの関係もバレずに何とかなるかもしれない。俺、スパイの才能あんのかもな。

そんな事を考えてると、スマホが震えた。

「ごめん、電話きた」

「あ、うん」

片方の袋を加蓮さんに持ってもらってスマホの画面を見た。

「……………げっ、鷺沢さんからだ。どうしよう……。いや、でも出ないと嫌われるよなあ……………。電話きたって加蓮さんに言っちゃったし。「もしもし?」」

『……………鷹宮千秋くんのお電話ですか?』

「あー……………はい。さ……………」

「……………なんて呼ぼうかな。鷺沢さん、とも文香さんとも呼ばないよなあ。」

「……………ふ、ふみふみ?どしたんですか?」

『ふ、ふみふみ!??どうしたんですか鷹宮くん!??』

「な、なんだよ。いつも通りですよふみふみ?それよりどうしたんですか?」

『……………あの、何か悪いものでも食べたんですか……………?』

「そんな事ないですよ。それより、ほんとに何か御用ですか?」

『……………あ、いえ。今、お友達と海に来てまして。ちよっと休憩中だったのでお話ししようと思ひまして』

「……………やっぱ、アイドルであることは隠してんなあ。まあ、当然だけど。でも、なんかこう……………釈然としない。なんでだろうな。頭では理解してるはずなのに。」

「すみませんが、俺今少し忙しくて。後で掛け直しても良いですか?」

『……………後って何分後くらいですか?』

「あーそうか。撮影は無いにしても、みんなと一緒にいる時は電話なんてできないもんな。」

「……………5分後くらいです」

『……………あ、それくらいなら、はい。分かりました』

「ふう……………あとは、向こうに着いたらトイレとか言つて加蓮さんと別れて、掛け直せばそれで良いだろう。やっぱスパイの才能あるわ。」

「そう思った直後だった。」

「鷹宮くん、私気にしないから話しながら歩いてても大丈夫だよ?」

「……………加蓮さんが声を発してしまった。その直後、電話越しでも鷺

沢さんの空気が変わったことに気付いた。

『……………鷹宮くん？今、聞き覚えのある声が』

「い、いや気の所為ですよ。……………ちよつと加蓮さん、お願いだから黙ってて」

『……………加蓮さん？』

あ、俺のバカ。墓穴マントルまで掘り進めた。

『……………加蓮さんって、北条加蓮さん？』

「いや、違いますよ。阿良々木火憐さんです。とうとう、二次元に飛べる装置の開発に成功して……………」

『……………』

ヤバイ。バレル。通話を打ち切った方が良いなこれ。

「すみません、休憩終わりみたいなんで。ちよつと」

『……………あ、待っ』

通話を切った。訂正しよう、俺にはスパイの才能なんてない。



二度あることは三度ある。

スーパーから戻り、俺は購入したものをプロデューサーに渡すため、加蓮さんと別れた。

プロデューサーさんの元へ荷物を運ぶと、冷蔵庫に入れとけとの事で、領収書を渡した後にお金をもらってから、冷蔵庫に買ってきたものをしまった。アイスは冷凍庫に。

……さて、どうしようか。海に戻らないとダメだよなあ。普通の人なら、アイドルと遊んでいいって言われたら遊びに行く、それを拒否したプロデューサーさんに「誰かとなんかあったの?」と思われるのは明白だ。言い訳はいくらでも考えられるが、少しでも疑われると、こつちがしらばつくれても鷺沢さんに問い詰められたら終わりだ。だってあの人2億%嘘下手だもん。

いや、オタクの性質を逆手に取ろう。浜辺に出てアイドル達の様子を眺めていれば良いんだ。「混ざらないの?」って言われても「なんかこつちから声掛けるのは恥ずかしくて」と言えば疑いは持たれないだろう。

そう決めて、早速浜辺に出ようとすると、電話が掛かってきた。画面には当然、鷺沢文香の文字。

「……………」

大丈夫、プロデューサー達は明日の打ち合わせ、アイドル達は浜辺。俺しかいないはずだ。いや、念の為辺りを見回して……………。よし、いない。

「もしもし?」

『……………鷹宮くん、ですか?』

「はい」

『……………あの、バイトって仰ってましたよね?何のバイトなんですか?』

「あ……………」

……………この質問が来るって事は、もうほぼほぼバレてんだろなあ。加蓮さんに聞けば何もかもバレるし、そもそもバレてはいけな

いのは、俺と鷺沢さんの関係だ。恋人じゃないが、何回か二人で出掛ける時点でアウトだろう。なら、今のうちに吐いて傷を浅くすると共に、鷺沢さんにもご協力願おう。

「……………アイドルグループの写真撮影ですよ」

『……………やっぱり』

鷺沢さんは電話の向こうでため息をついた。

『……………なんで嘘ついたんですか』

「あー……………」

あなたが怖過ぎたんです、とは言えなかった。てか、それ言ったら俺が今から怖い目に遭いそうな気がするし。

「鷺沢さんはアイドルですし、俺との関係がプロデューサーさんにバレるのはマズイと思っただんです」

『……………それでなんで私に嘘をつくんですか』

「だけど、お互いに他人のふりをするのは鷺沢さんに負担が掛かるでしょ。ただでさえ、仕事できてるのに。それなら、弟設定を作って他人のフリした方が良かなーって……………」

そこまで言って、俺の口は止まった。なんか、罪悪感がすごい。なんとというか、鷺沢さんにはあまり嘘はつきたくない。人に対してこんな感情が芽生えたのは初めてだが、芽生えちまったもんは仕方ない。

だが、アニメでもよく言ってるように、一時の感情に流されてボロを出すわけにはいかない。鷺沢さんのアイドルの道が残ってるんだ。

落ち着いて、ここで鷺沢さんに嘘をつく必要があるかを考えろ。

……………うん、無いね。あなたが怖過ぎた、ということを隠そうとしてるだけだ。なら、オブラートに包んで遠回しに正直に説明すれば良いだろう。

この嘘がプロデューサーにバレる話に繋がるとも思えないしな。

「……………すみません、嘘です」

『……………はい？』

「なんか、鷺沢さん理由はわからないけどすごく怒って……………それで、速水さんにフォローするように言われたんですけど、鷺沢さんに『弟ですか？』なんて聞かれて、つい嘘をついてしまっ……………」

『……………』

「すみませんでした」

電話越しなのに頭を下げた。…………あれ、でもこれ、よく考えたら自己満足じゃね？鷺沢さんに嫌われる可能性もあるんじゃないや…………。

と、思ったたら、電話の向こうから「くすつ」と微笑む声が聞こえた。

『…………大丈夫です。怒ってませんよ。それよりも、正直に話していただいたので、嬉しかったです』

「さ、鷺沢さん……………」

『…………私も、奏さんから説明を聞きました。プロデューサーさんに私達の事がバレルのはマズいんですよね？』

おお、ナイスかなっぺ！

『…………理由はよく分かりませんが、鷹宮くんが私と特別仲良くするわけにはいかないことは、よく分かりました』

いや理由が重要なんだけどな…………。まあ、この際良いか。

「はい。すみません……………」

『…………いえ。私の方が年上なんですから。そう気を使わないで下さい』

「分かりました。では、俺今からそっちに行きますけど」

『…………はい。分かってます』

良かった…………嫌われなくて。やはり、鷺沢さんは天使、ハッキリわかんかね。あと、速水さんにも今度、何か奢ろう。

『…………あ、その前に一つ良いですか？』

「？ なんですか？」

なんだ、まだ何かあったか？

『…………なんで、加蓮さんの事だけ下の名前で呼ぶんですか？』

ん、なんでそんな事気にするんだ？別に鷺沢さんが気にするようなことじゃ…………あつ、そっか。鷺沢さんを特別扱いしない割に、加蓮さんだけ下の名前で呼んでたら不自然って事か。

「あーいや、別に深い意味はないですよ。ただ、加蓮さんは、神谷さんが『加蓮』と呼んでるのを聞いて、下の名前から覚えたからそのまま呼んでるだけですよ」

『…………特に、深い意味はないんですか?』

「ありませんよ。そもそも、俺がアイドルに深い意味を込めて下の名前で呼んだって相手にされませんって」

『……………』

あれ、なんか鷺沢さん黙っちゃったな。

電話の向こうで、「すう、はあ……………」と小さく深呼吸する吐息が聞こえた。で、意を決したような声で鷺沢さんは言った。

『……………あのっ』

「は、はいっ」

『…………もし、よろしければ、私の事も…………「文香」と呼んでもらえませんか……………?』

『……………』

……………あーもうっ、可愛いなあこの子。理由はよく分からないけど、そういう事なら……………いや待てよ。そういうことか。

「……………分かりました」

『…ほ、ホントですか!??で、では早速、その……………呼ん』

「アイドルなんだから、みんな下の名前で呼んだ方が良いでしょうね」

『で欲し……………はっ?』

「みんな平等に扱わないと、プロデューサーさんにバレますもんね」  
『……………』

×地雷を踏み抜きました☆

×

× 浜辺に顔を出すと、まだみんな遊んでいた。鷺沢さんに無言の圧力を残したまま電話を切られた俺は、浜辺でボンヤリすることにした。実際、俺はアイドルが遊んでる中、「入れてー」とは言えないからなあ。そんな事を思いながら、遊んでる風景を眺めた。みんな水を掛けたり、浮き輪に揺られたりしている。鷺沢さんは不機嫌そうに浮き輪に乗っていて、それを速水さんと橘さんがなだめていた。お手数をおかけしています。

そんな事を思いながらボンヤリしていると、背後からゾゾッと背中をなぞられた。

「わひよっ!?」

「あははっ♪面白い反応〜!」

誰だよ殺すぞこの野郎と思いつながら振り返ると、クローネの中でラスト的存在の女の子が立っていた。カラフルなビキニに、短パンのような水着、ふわふわした金髪、俺と大して歳変わらない癖に化粧した顔、THE・ギャルって感じのする大槻唯さんだ。

「お、大つ……唯さん、ですか……。何かご用ですか?」

「んー、唯のキャンディー食べるうー?」

口に咥えてるチュッ○チャップスを俺に差し出してきた。

この手の人間が一番苦手なんだよなあ……。

「……いや、もろうなら新品がいいんですけど」

「ジョーダンに決まってんじゃない!」

口に飴を戻した。つーか何?何の用?用事それだけ?

「みんなと遊ばなくて良いのか?」

「んー、今トイレに行ってきたとこ。今からまたあそこに戻るよ?」

「そうですか」

「鷹宮クンは遊ばないの?」

この野郎はまたすごい質問を……。文香さんの件もあるし、行けるわけねーだろ。

「プロデューサーには許可ももらってますけどね。でも、アイドルの中に俺一人入って行くのは……」

「つまり、照れてるんだ?」

「……端的に言えば」

「タカちゃんかわいいなあ〜!うりうりうりい〜!」

ちよっ、頬をツンツンするな!すぐいい匂い!ていうかタカちゃんって何?なんでこんな距離近いの?俺のこと好きなの?絶対違う。

「……あの、何の用ですか?」

「んー、一緒に遊ぼうか!ビーチバレーとか!」

「えっ……」

「ほれほれ、立って立って!」

ちよっ、水着越しにおっぱいを当てるな!感触がモロだから!立つ



「じゃあ、いくよー」

「せーのっ」

『グッパージャヤす!!?』

運命のチーム決めが始まった。

〜1分後〜

Aチーム：渋谷神谷

Bチーム：宮本塩見

Cチーム：橘アーニャ

Dチーム：鷺沢速水

Eチーム：鷹宮大槻

神は死んだ、そう思うしかないね。

ひい……………文香さんがすごい睨んでる……………。怖いなあ、何怒ってんのホントに……………。

「よ、ろ、し、くータカちゃん!」

「うおっ」

唯さんが手を繋いで握手して来た。だからなんでそんな距離近いの。文香さんが写輪眼になりそうなくらい俺を見ていた。だからなんで怒ってんの。

「ひひっ、顔赤くしちゃって!かわいいなあ、ホントに」

「いや、やめてくださいホントに。プロデューサーにヒートエンドされるんで」

「優勝したチームはどうするー?」

聞けよ話。ホントに唯さんは俺苦手かもしんない。

審判の加蓮さんが、椅子の上からとんでもない事を言った。

「じゃあ、勝ったチームは鷹宮くんからアイスの奢りね?」

おい、あの女悪魔か?それともバカなのか?

「待てや。それ俺が勝ったらどうすんの?プラマイ0じゃん」

「んー…………じゃあ、女の子誰でも良いから指名してよ。その女の子から頬にキスしてOKって事で」

「……………はっ?」

この女ホント何言ってた?なんつー公開処刑を俺にさせようと

してんだよ。それにそんなもん、みんな嫌がるに決まってるだろうが。

「ええー！嫌だよふざけんな加蓮！」

「そ、そうです！破廉恥です！」

ほらな？早速、奈緒さんやありすさんが反対意見を出した。でもね、なんで俺を睨むのかな？俺何も言っていないよね？

「えー？面白そうじゃん」

「そうだね、勝てばいいだけだし」

「負けても指名されるとは限らないしね？」

「キスしても良いの？……ああ、文香冗談だから抓らないで」

周子さん、凜さん、フレデリカさん、奏さんからの倍以上の賛成意見で、反対意見は封じられた。奈緒さんもありすさんも、顔を赤くして俯いてしまっている。おい、お前らもつと頑張れ！

「あの、俺の意思は……」

「何、アイドルからのキスが嫌なの？」

「いや、そういうわけじゃ、ないが……」

「なら決定！」

こ、こいつら………基本的には無法地帯かよ……。プロデューサーいないからってやり放題やりすぎだろ。

仕方ない、こうなったらわざと負けて……。

「あはっ、わざと負けたら、プロデューサーのいる前で、タカちゃんのお部屋に入っちゃうからねー？」

それも唯さんに封じられてしまった。ていうか、あつたばかりで人の思考読みすぎでしょ。ニュータイプなの？あと人の弱点見抜くのも早すぎ。

「よーし、じゃあ始めようか」

加蓮さんが俺に向かって微笑んで言った。おい、その笑みはなんて意味なんだ？

何の間違いだろうか。俺達のチームがシードになってしましました。しかも、5チームなので強制的に決勝戦。それまで待機、かあ



……。結局座って待ってるだけになるんだよなあ。まあ良いけど。

で、1試合目。鷺沢速水チームvs渋谷神谷チーム。奏さんは運動もできそうな感じはするが、文香さんはとてもそうは見えない。大丈夫なのか？ハイキューは読んでたけど……………。

「……………か、奏さん。申し訳ありません。足を引つ張ってしまうことになりそうなのですが……………」

「大丈夫よ。遊びなんだし、楽しくやりま

「……………ですが、鷹宮くんには天誅を下したいので、勝っていただけませんか？」

「え？それ私一人で勝って言うてる？」

「……………頑張りましょうね」

「あれ？文香？文香ー？」

なんか割と楽しそうじゃん。会話の内容は聞こえないけど。

一方の、奈緒さんと凜さんチーム。

「奈緒はバレーとかやったことある？」

「体育とかではやったけど、それ以外はないなー。凜は？」

「私も同じ。まあ、他の人も同じだろうし、軽くやろう」

「そうだな。ま、やるからには勝つけどな」

「あつそう……………。頑張ってね」

「お、おい。凜は勝つつもりなのか？」

「まあ、ない事はないけど……………」

向こうは元々仲良いのかもしれない。

そういうしてるうちに、試合が始まった。まずは凜さんのサーブ。アンダーサーブで綺麗に上がった。落下点には、文香さんが待機している。

「……………えっ、えっ……………えっ？」

「文香、両手を頭の上に広げて構えて。ボールが降って来たら、指先でボールを軽く押す感じで」

「……………は、はいっ。えいっ」

速水さんのアドバイスを聞いて、両手を頭上に構えた。ボールが降って来て、文香さんは両手の指を押し出しながら上げようとした。

が、両手を広げ過ぎていたようだ。手の間をボールはすり抜け、おでこに直撃した。

「きやつ……う？」

「な、ナイス！結果オーライよ文香！」

ボールはいい感じに上がり、奏さんがボールを追って相手側のコートにいった。

……堪えろ、俺。今すぐにも救急箱を持って来て、文香さんのおでこに湿布を貼り付けたいが堪えろ……。

向こうのチームも、ボールをそこそこ上手に返した。で、また文香さんの元へ。

「文香、両手を重ねて手首で打ち上げる感じっ」

「……は、はいっ」

言われるがまま、文香さんは両手を構えた。ボールを打ち返そうとしたが、落下点の計測をミスしたのか、おっぱいで打ち返した。それに、全員から「おっっ」と感嘆の声が上がった。

「ふ、文香ナイス！」

「……う、嬉しくないですっ」

両手で胸を隠しながら俺を睨んだ。いやなんで一々俺を睨むんだよ！俺の所為じゃねーよ！

そのまま、文香さんの可愛い珍プレー且つ好プレーによって、試合は続いた。

×  
×  
決勝。時間の流れとは早いもんだ。というか、試合が思ったよりサクサク進められた所為だ。そもそも、ルール分らないから取り敢えず9点マッチというのがすでにおかしい。まあ、俺もルールわからないから仕方ないんだけどね。で、これが一番おかしい。

決勝に来たのは鷺沢速水チームだということだ。なんで？あのプレーでここまで来たの？

「よーっし、じゃあ決勝戦やろうか！」

加蓮さんの台詞で、ようやくの出番の俺は首をコキコキと鳴らしながらコートに立った。

「やる気満々じゃん、タカちゃん。そんなにキスして欲しいのー？」  
「や、そういうんじゃないよ。……プロデューサーの前で俺の部屋に入られるのは嫌なだけです」

「んふふー、照れてる？照れてるでしょ？」

「照れてないです」

ホントに嫌だ。金は絶対もらわなきゃいけないのに。今月の俺の命がかかってんだから。

「では、試合開始っ」

その一言で、向こうのチームからサーブが来た。それを唯さんが拾った。

「はい、タカちゃん」

そのタカちゃん呼びやめてくれませんか。文香さんが俺のこと超睨んでるから。

心の中で文句を言いつつ、落下点に入ってボールを打ち上げた。それに合わせて唯さんが跳んだ。

「とおおうっー！」

唯さんはスパイクを放ち、綺麗にボールは相手コートに落ちた。スゲー！乳揺れが！

「……………どこを見てるんですか」

コートの向こう側から文香さんの声が聞こえた。俺の事をすごい睨んでいる。

「……………随分と仲良いんですね。唯さんと」

「え、いやよく分かんない、ですけど……………」

「……………タカちゃん、なんて呼ばれて…鼻の下伸ばして……………」

「の、伸ばしてないですよっ」

「……………ふんっ」

な、なんでそんなトゲトゲしてるんだ……………？怖いんだけど……………。  
すると、後ろから唯さんが駆け寄って来た。

「タカちゃん、いえーい」

「あ、お、おう」

ハイタッチを決めて、文香さんの表情はさらに悪化した。なんかも

う、超サイヤ人になりそうな感じ。それも伝説の。

唯さんはボールを持ってコートの後ろに行って、サーブを打った。それを文香さんが（胸で）拾い、奏さんがこっちに返そうとした。

「あつ、足りないかも……」

ボールはネットギリギリ手前に落ちる。だが、そこに文香さんが走り込んだ。はわわ！乳揺れすごい！

「っ？文香っ？」

そのままの勢いで、文香さんはボールを引っ叩こうとする。その時の目が完全に俺をロックオンしていた。

「……………えっ」

「っー」

が、空振りし、ボールは地面に落ちる。ちよつと待って、さっきの目は何なの？何で俺を睨んでたの？

「……………文香、どんまい」

「……………奏さん、次もボールもらえますか？」

「えっ？」

「……………」

「わ、わかった…………」

嫌な予感がする。来たな、プレッシャー！

俺はボールを持って、コートの端に行った。今度は俺のサーブだ。ボールを軽く放って、上から軽く叩いて相手のコートに落とす。

「お、上手いじゃん♪」

楽しそうに唯さんが声をあげるたびに、文香さんの怒りのパラメータが上がってる気がする。もう嫌だ、誰か助けて。

それを奏さんが拾い、上がったところに文香さんが跳んだ。ふおお！乳揺れ凄まじい！

一瞬、胸に気を取られた直後、鷺沢さんのスパイクがボールの正面を捉えた。ボールは猛スピードで俺に向かったが、前のネットに引っ掛かった。

「……………」

「……………あの、文……………鷺沢さん？そのスパイク、誰狙ってるんですか？」

俺の質問は無視して、試合は続いた。唯さんのサーブが相手のコートに向かった。文香さんがそれを拾い、奏さんが上げる。

「文香っ」

「……………今度は外さない……………っ！」

バナージみたいな事を言いながら、文香さんは跳び上がった。学習しない俺が乳揺れに気を取られた直後、文香さんは上がったボールにすごい勢いで手を振り下ろした。ボールは発射され、ネットの頭を超えて俺に向かって来る。

「……………えっ」

ボールが俺の顔面に直撃した。ビーチボールなのに、バレーボール並みの威力を持ったボールは、メキリと俺の顔を軋らせた。

すごく痛い……………。俺がそう思った頃には、俺の身体は後ろに倒れ、そのまま意識は飛んで行った。

×

目を覚ますと、知らない天井だった。多分、宿の中だろう。どうやら、気絶してしまったようだ。身体を起き上がらせ、ボンヤリしながら携帯を見た。時刻は夜の8時を回っている。もう晩飯も終わって

んじゃん。ずいぶん寝てたな。

「起きた？」

ベッドの脇から声が聞こえた。そつちを見ると、奏さんが座っていた。

「おはようございます……………」

「おはよう」

心なしか、少し怒っている。その気迫に押されて、敬語を使ってしまった。

「大丈夫？」

「大丈夫……………。ダメージはない」

「知ってるわよ。鼻血出ただけなもの」

じゃあなんで聞いたんだよ……………。しかし、ビーチバレーで鼻血か……………文香さんの馬力は尋常じゃないな……………。

「一応言うけど、文香は今部屋にいるわ。ありすと一緒に」

「……………そうですか。気にしないでって言つといて下さい」  
「ん。……………ねえ」

真面目な声で奏さんが聞いてきた。

「……………なんで文香が怒ったか、分かる？」

「昨日の嘘がバレた、からですかね」

「違うわよ。そんな事じゃないわ」

……………じゃあなんだ？正直、よく分からん。

「……………じゃあ、あなたの好きなアニメ的に考えてみて？鷹宮くんが他の女の子と仲良くしてて、文香が怒る理由は？」

「……………んー、あ、アレですか？オタク趣味を語り合える仲間を取られた的な……………」

「違うわよ。小銭握り締めたグーで殴るわよ」

「えっ？」

「そんな捻らないで普通に考えるのよ」

「そう言われても……………アニメ的に考えりゃ、文香さんが俺のこと好きだから、でしょうけどまさかそんな……………」

「……………」

「……………マジ？」

「……………」

奏さんはため息をついて目を閉じた。

「本人に確認を取ったわけじゃないから分からないけどね」

「なんだよ」

この野郎、今の一瞬でかなり舞い上がった俺の喜びを返せ。

「まあ、何にしても少し行動や言動を考えなさいよ」

「そう言われてもなあ、少なくとも撮影中は他のアイドルたちと態度や対応を変えるわけにはいかないし」

「そう頭で理解してても、心はそうはならないのよ。人というのは」

この人、年幾つなんだろう。道徳の先生かよ。

「私も出来るだけの事はするけど、あなたも文香にちゃんとフォローしておきなさいよ」

「はい」

「ああ、それと……」

奏さんが、俺の部屋の机にあるカレーをもって、俺に手渡した。

「これ」

「？」

「文香が作ったカレー。あなたの分よ」

「マジでか!!？」

「じゃ、またね」

奏さんは部屋から出て行った。とりあえず、俺は全力でカレーを食べた。

## ふみふみの撮影日（1）

撮影日の朝。文香は目覚ましによって目を覚ました。昨日、結局ソファで寝てしまい、身体が痛すぎて夜中に目を覚ますハメになり、すぐく眠かった。

だが、それでも集合に遅刻するわけにはいかない。超眠そうに朝食、歯磨き、着替えを済ませ、荷物を持って家を出た。

電車に乗って数分、危うく降り過ぎそうになったものの、何とか到着した。ふらふらした足取りで事務所の前に向かう。

その文香の後ろ姿を奏は見つけた。

「あ、文香。おはよう……文香!？」

クツソ眠そうな表情を見て、思わず狼狽える奏。

「ど、どうしたのよ?すぐく眠そうだけど……あの後、ずっとレアアイテムでも探してたの?」

「……………あ、おはようございます。奏さん……………」

「おはよう（2回目）。どうしたのよ?昨日、ずっと遺跡探索してたの?」

「……………いえ、あのままソファで寝てしまって……身体痛くて途中で起きてしまって……………」

「……………それでなかなか眠れなくて今眠いのね……………」

呆れたようにため息をつく奏。

「ちよつと、ちゃんと歩きなさいよ」

「……………ふあい」

「……………まったく。こんな所、鷹宮くんに見られたら……………いや、あの子なら喜びそうね」

なんか酔っ払いみたいになっていたので、いつ文香が倒れても良いように隣を歩いた。

無事に事務所の前まで到着し、まずはプロデューサーに挨拶しに行った。

「おはよう、プロデューサー」

「……………おはようございます」



「ああ、二人とも……ふ、文香!? どうしたっ?」

「昨日、ちよつと夜更かししちやっただけで……。悪いけど、先にバスに乗ってても良い?」

「あ、ああ。分かった」

許可をもらって、大きい荷物は運転手さんに渡してしまってもらい、自分達はバスの入り口に向かった。

「おはようございます、文香さん。奏さん」

すると、ありすがちよちよこと歩いてやって来た。

「おはよう、ありす」

「あの、文香さんどうかしたんですか?」

「……ちよつと夜更かししちやっただけよ。それより、隣に座る?」

「はい」

三人でバスの中に乗り込み、文香が眠れるように一番後ろの席に座った。一番後ろは五人がけだから広いのだ。ありす、文香、奏と並んで座ると、文香が目をごすりながら言った。

「……すみません、奏さん。ちよつと、眠いです……」

「あー、はいはい。どうぞ」

「文香さん!私の方でも良いですよっ」

「……低いので無理です」

「低っ……!?」

ハッキリ言われ、凹むありすだったが、それに気を使う余裕もなく文香は奏の肩に頭を寄せた。

「……低い、私が低い……」

「あ、ありす?気にしないで。文香、眠くてちよつとホンネが出ちゃっただけなのよ」

「ほ、本音!?」

「あっ」

さらにシヨックを受けるありすを見て、奏は額に手を当てた。

早く出発しないかなーなんて思いながら「小さいってどういう事ですか!」としつこく聞いてくるありすをなだめた。

そうこうしてるうちに、プロデューサーがバスに乗って来て、いよ

いよ出発の時間。バスの中にもアイドルは全員揃っていて、それぞれお話ししていると、プロデューサーが声を張り上げた。

「みんなー、聞いてくれー!」  
「?」

その声に、とりあえずみんな前を見た。

「今日、急遽代理に来てくれた鷹宮くんだ。なんでも言うこと聞くからよろしく頼む」

鷹宮?と奏とありすは首を傾げた。まさか、と思ってプロデューサーの横にいる少年を見た。

「え、ちよつ……プロデューサーさん。つか、なんでも言うことは流石に……」

文香の画面に寝顔で写ってる少年が、目の前に立っていた。

「」  
「」

奏もありすも、口を半開きにして千秋を眺めていた。

バスは出発した。奏はすぐにLONEして、事情を聞いた。

「……バイトだって」

「な、なるほど……」

ありすも納得したように相槌を打った。

「狭い街ですね」

「あなたどこでそんな言葉知ったの」

「いえ、私だってもう大人のアイドルですから」

「そう……」

朝から割と体力を使ったので、ツツコミを入れるのも面倒臭く、なんと無くぼんやりと千秋の方を見た。

「神谷奈緒さん、ですか?」

「そ、そう! そうだ! いやー、あたしも有名になっ……! あ、いや、べ、別に嬉しくなんかないけどな……!!?」

早速、神谷奈緒と何か話していた。まあ、千秋がナンパするとは思えないので、おそらく奈緒の方から声を掛けたんだろう、と奏は予測

したが。

奈緒は何か話した後、千秋の隣に座った。

「誰が好きだった？キヤラ」

「イザーク」

「えー、キラの方が良いだろー」

「いやあんな悟り開いた高校生は嫌だ。クルーゼがキラをプロヴィデンスでボコってるとか爽快だったね。ミーティア壊れてたし」

「そうかー？でもあそこ熱かったよなー」

「それはな。一応、ラストバトルだし」

何を話してるか分からないが、仲良く話してる二人の様子を見ながら、奏はおでこに指を当ててため息をついた。

「よかったわ……。文香が寝ててくれて」

「……………何がですか？」

「っ？」

隣からヤケに冷たい声がして振り返ると、文香はバツチリ目を覚ましていた。しかも、バツチリ奈緒と千秋の方を見ていた。ヤバイ、と思った奏は話をそらすことにした。

「あら、文香起きたのね？実は、話があるんだけど」

「……………奏さん、なんですかあれ？」

「あれ？……………あつ、あー……………実は、鷹宮くんバイトで……………」

「そんな事はどうでも良いんです」

「ど、どうでも良いの？」

「何をしてるんですかあの人は」

「な、なんかガンダムの話で意気投合したみたいで……………」

「武力介入して来ます」

「落ち着いて！お願いだから落ち着いて！」

立ち上がろうとする文香を何とか抑える奏。

「落ち着きなさいってば！別にバスの中でアイドルと話してたって問題ないでしょう？」

「問題しかありません」

「い、いいから落ち着きなさい！ほら、あなた寝起きだし、疲れてるん

じゃない？幻覚でも見えてるのかも……………！」

なんとか取り繕ってわけのわからない説明をすると、文香は考えるような姿勢を取った。

「……確かに、そういう事かもしれないですね」

「そうよ」

千秋が絡むとバカで良かった、と、ホッと胸をなで下ろす奏。文香はスマホの画面をつけて時間を確認した。ずっと寝ぼけていて、記憶が曖昧だった。

「それより、大事な話があるんだけど……」

千秋から伝えてくれと頼まれたことを伝えようとした時だ。千秋の方からすごい誠実な声が聞こえて来た。

「大好きです」

直後、隣からメキツと何かを軋ませる音が聞こえた。

「文香!?!?」

文香が握っているスマホの画面にヒビが入っていた。

「ち、ちよつと落ち着きなさい。別に奈緒の事を好きと言ったわけじゃないわよ。前後の話を聞いてない私達にその辺の物事の判断はできないわよ。ね?」

「……………どうしましょうか。モーメントゲイルの刑にします?」

「話聞いている?!?というかモーメントゲイルできるの?!?」

何とか落ち着かせようとしてる間、千秋は奈緒とガンダム談義を続けてる。その様子に、奏は思わず舌打ちをした。

「人の気も知らないで……………」

すると、奈緒が後ろの席の加蓮に話を振った。お陰で、段々と話が逸れると共に、千秋からも逸れていった。それを見て、奏はホツとした。文香の様子も心なしか穏やかになって来ている。レストタイム、と言わんばかりに奏は背もたれに寄り掛かった。

「すいっ……………渋谷さんは、何年生ですか?」

「……………」

東の間のレストだった。隣の文香から震えた声が聞こえて来た。

「……………節操というものが無いのですか……………?」

「文香！携帯メキメキいってる！」

「……………これは、後でストライクガスト・零式の刑ですね」

「PP切れるまで!?!?」

すごい剣幕の文香を見て、奏はとりあえず後で千秋に文句言おうと心に決めた。

×  
×  
文香が着替えを終えて、奏とありすを外で待っていると、仕事している千秋の姿が見えた。が、千秋の嘘のおかげで、弟だと思ってるんだけど。

しかし、弟の方は途中で全教科、少なくとも50点は取れた癖に期末で一桁を連発したアホ兄貴とは比べ物にならないほど真面目だなあ、と思っていた。

そういえば、兄の方もこの三日間予定があると言ってたが、何してるんだろう、なんて考えてるとプロデューサーから千秋に声がかかった。

「鷹宮くん、テント終わったらパラソルと椅子をセットしてくれ。場所はカメラマンの人に聞けば分かるから」

「うーっす」

間延びした返事を返すと共に、千秋は仕事を進めた。

言われた通り、テントを立て終えて次の仕事に移る千秋を見て、しかし、声も顔も体型も似過ぎじゃない?と思ったりもした。まるで、本人みたいだ、とも。まあ、本人はバイトしているという、完璧なアリバイがあるのだからあり得ないが。そのアリバイは証拠なんですけどね。

そうこうしてるうちに、奏とありすがやって来た。この後、千秋に水着を披露させられたりしつつ、撮影が始まった。

まずは全員で集まって。その後に個人で何枚かと、サクサクと撮影は進められていく。個人の時、ボンヤリと自分の番になるのを待つと、千秋がアスタナシアと何か話してるのが見えた。

弟さんは割とチャライ人なのかな、なんて思っていると、後ろから声をかけられた。

「何見てるの?」

「っ!」

ビクツとしながら振り返ると、塩見周子が自分に声をかけていた。

「……………あつ、周子さん」

「……………ん? バイトの子?」

「……………あ、いえ、そういうわけでは……………」

「へえー? 文香ちゃんって、意外と男の子とか気になるん?」

「……………ち、違いますっ」

「照れなくていいよー」

「……………て、照れてません! 私には既に……………!」

そこまで言いかけたところで、文香は自分の口を押さえた。それと共に、周子どころか近くにいた唯や加蓮もニヤリと微笑み、奏とありすは額に手を当ててため息をついた。

「……………バカ」

「……………文香さん……………」

二人は早速救援しようとしたが、撮影の番になってしまったため、助けることは叶わなかった。

加蓮と唯が周子に加わって、文香と肩を組んで小声で質問した。

「えっ、なになに? 文香さん、好きな人いるの?」

「……………い、いませんっ」

「いがーい。ね、誰? 誰?」

「……………ち、違いますったら! 違いますっ」

「しっ、小声で。プロデューサーにバレたら怒られるよ?」

「っ……………」

加蓮に怒られ、文香は顔を赤くしながらコホンと咳払いし、説明した。

「……………別に、好きな人ではないです。ただ、少し前からよく話すお友達ができたっただけで……………」

「男女間の友情は成立しないよ?」

「どこまででしたの? デートとかした?」

「いやいや、唯さん。付き合ってもないのにデートはないっしょ」

加蓮が唯の台詞を否定した時だった。文香が黙り込んで顔を赤くしてるのを、周子は見逃さなかった。

「……………行ったん？デート」

「えっ」

「……………行って、ない…です……………」

「「行ったんだ」」

即ばれた。

「……………えっ、どこ行ったの？」

「いつの事？」

「夏休み？」

「……………今月の11日と12日に、その……………お祭りど、夏コミに。まあ、夏コミの方は私が倒れてしまい、すぐに帰ってしまったのですが」

「(夏コミの質問はこの際置いて) た、倒れた？」

「大丈夫だったの？」

「なんで？」

「……………はい。た……………その男の子が病院まで運んでくれて、熱中症になる前に休む事は出来たので、大丈夫でした。でも、せっかく私のために用意していただいた、熱中症対策を無駄にしまして……………少し、申し訳なかったですね……………」

「……………意外と出来る子じゃん」

「……………いえ、それが期末テストほとんど一桁の点数だったんですよ？」

「え？期末テストの点数を把握してる仲なの？」

「……………古典なんて、追試になって私が勉強見てあげたんですから」

「……………え？勉強見てあげるほどの仲なの？近所のお姉さん？」

「……………いえ、近所というほどではありませんよ。歩いて15分ほどでしようか？」

「……………お互いの自宅も把握してるの？」」

すると「鷺沢文香さん」と呼ばれたので、文香は「失礼します」と言って撮影に向かった。

残った三人は顔を見合わせた。

「……………付き合っていない、んだよね？」

「……………デートも二回、夏コミってのはよく分からないけど」

「…お互いの自宅も把握してる辺り、多分行ってる」

三人は黙り込んだ後、千秋の方を見た。

「……………さつき、『た……その男の子』って言いかけたよね」

「……………バスの中、奈緒が鷹宮くんと話していると、背後で携帯握りつぶす音が聞こえた」

「……………あたしが声をかける前、文香ちゃんあの子見てた」

三人はニヤリと微笑んだ。まずは加蓮が声を出した。

「……………とりあえず、私が最初に彼と話してみるよ」

「何、かまかけるの？」

「いや、まずは人間性の把握。人に好かれる人間かを判断してくる」

「了解。頑張ってるね」

「うん」

×すると、加蓮の撮影になったので三人は別れた。

×

×撮影が終わり、自由時間。加蓮と千秋が買い出しに行ってる間、文香はパラソルの下でのんびりしていた。

「ふーみか。何してるの？」

そこに、奏が声を掛けた。

「……………いえ、ご友人と海に来たのは初めてなものですから、どうしたら良いか、分からなくて……………」

「それなら、一緒に遊ばない？砂で砲仙花でも作ってさ」

「……………良いですね」

このことで、ありすも含めて三人で浜辺に出た。サラサラの砂をかき集め、水で湿らせながら形を作っていく。奏がググリ、その通りに形を作って行った。

「しかし、撮影に来たのに遊んでて良いんですかね？」

ありすがぼつんと言った。

「プロデューサーが良いって言ったんだから良いのよ。それに、せっかく海に来たんだし、楽しまなきゃ損じゃない。ねえ、文香？」



「……………そうですね。ですが、鷹宮さんやスタッフの皆さんが働いてるのに、私達が遊ぶのは少し気が引けますが……………」

「そういえば、鷹宮さんって人、千秋さんにそっくりでしたね」

「……………えっ?」

ありすからのその発言に、奏が眉をひそめた。

「あ、ありす? どういう意味?」

「ああ、そうでした。奏さんは知りませんでしたね。鷹宮さん、千秋さんの双子の弟さんみたいなんです」

な、なんでお前まで信じてんだ?!? とアニメ的にツツコミたくなつたが、奏は堪えた。

これを機に、話はどんどんズレていく。

「そういえば、お兄さんの方はどこで仕事してるのでしょうか?」

「……………そうですね。私も聞いてないです」

「べ、別に良いんじゃない? 言わなかったって事は、聞かれたくないことなのかも……………」

「いえ、オタク趣味を隠そうとしない人はあまりそういうの気にしないと思いませんか?」

「……………そうですね。隠そうとしてたわけではないかもしれませんが、気になりますね」

「そう? それより、砲仙花ってどんな形してたっけ?」

「そうだ、せっかくの機会ですし電話してみませんか?」

「……………そうですね。通話してみましようか」

「待つて。なんでそうなるの? 砲仙花は?」

「砲仙花は一旦いいです。ていうか砲仙花ってなんですか?」

ありすがスパッと断ると、文香はスマホを持ってパラソルの下に戻った。その様子を見て、サアーツと顔を青くする奏。

「ま、待ちなさい! 向こうにだって予定があるだろうし、急に電話するのは……………!!?」

「奏さん、先程から鷹宮さんのことやけに庇いますね。もしかして、バイト先知ってるんじゃないですか?」

ありすの質問で、奏はドキッと肩を震え上げらせ、文香の奏見る目

は細くなった。

「……………そうなんですか？」

「え？いい、いやっ……………」

なんでこうなるの…………と、奏は心の中で涙目になった。だが、いくら精神的に号泣した所で、目の前の二人は自分を逃がしてくれない。だからといって、バラすわけにもいかない。

奏は二人から目を逸らして呟いた。

「……………わ、私も知らないけど……………文香に言えないような場所なら、ホストクラブ、とか……………」

「……………ほ、ホスト!?？」

「だから、あんまり仕事の邪魔するわけには……………」

「文香さん!」

「……………はい。今すぐになでも電話しましょう」

ああああ!と頭を抑えて悶える奏。文香は千秋に電話を掛けた。

「……………」

「文香さん?どうしました?」

「……………出ません」

「……………やっぱり、忙しいんじゃない」

『もしもし?』

「……………鷹宮千秋くんのお電話ですか?」

『あ……………はい。さ……………ふ、ふみふみ?どうしたんですか?』

「ふ、ふみふみ!?？」

想定外の呼ばれ方に、思わず狼狽える文香。

「ど、どうしたんですか鷹宮くん!?？」

『な、なんだよ。いつも通りですよふみふみ?』

狼狽えた様子の文香を見て、奏もありすも怪訝そうな顔を浮かべた。が、文香が話してる間に通話を切るような話になって来ていた。『すみませんけど、俺今少し忙しくて。後で掛け直しても良いですか?』

「……………後って何分後くらいですか?」

『……………5分後くらいです』

「……あ、それくらいなら、はい。分かりました」

文香も、問い詰めるのにあと5分待つくらいなら良いと思っていた。だが、聞き捨てならない声が聞こえて来た。

『鷹宮くん、私気にしないから話しながら歩いてても大丈夫だよ?』

その直後、文香の目が攻撃的な視線に変わったのに、奏は見逃さなかった。聞き覚えのある声に、文香は問い詰めようとしたが、電話は切られてしまった。

その様子が気になったあたりすは聞いてみた。

「どうしたんですか?文香さん?」

「………加蓮さんの声が聞こえました」

「………えっ?」

「……鷹宮くん、弟じゃなくて本人かもしれない、です」

文香は携帯をパーカーのポケットにしまった。その後、当然文香が睨んだのは奏だ。さっきの態度から、奏が何か知ってるのは明白だ。その視線から堪忍したように奏は言った。

「分かっているから、そんな目で見ないでよ……。全部話すから」

「………お願いします」

「鷹宮くんはアルバイトでここに来たんだけどね。………ていうか、鷹宮くん本人に聞いたら?どうせ、後で電話出てくれるんだし。私だって、なんで彼がそんな嘘ついたのか知らないもの」

あなたが怖過ぎたのよ、とは言えないので、全部千秋に丸投げすることに決めた。が、当然二人が仲直りできるようにフォローも忘れない。

「ただ、鷹宮くんはあなたの事も考えてたわ。プロデューサーに文香と鷹宮くんの関係がバレたら、少なからず恋人だと思われるわ。それはお互いのためにならないから隠さなきゃいけないって」

「………なんでですか?」

「え、だってアイドルが恋愛はマズイでしょう?」

「………」

文香がピンと来てないのにまったく気にせず、奏は説明した。

「とにかく、彼にも理由があったと思います。それと、今回の撮影

期間はあまり鷹宮くんと仲良くしない方が良いわよ。プロデューサーに感づかれるから」

「……………鷹宮くんに、迷惑が掛かるといふ事でしょうか……………」

「まあ、そうね」

「……………わかりました。でも、とりあえず鷹宮くんに全部聞き出します」

「それは好きにしたら？」

何と無くだが、奏はこの二人は話し合えば解決すると確信していた。なんだかんだで落ち着いた性格だし、相性も良いからだ。

「じゃあ、私とありすは遊んでるから。またね」

×奏はありすをつれて、海に向かった。

×

7×分後、ありすは浮き輪の上で浮いていて、その浮き輪を奏が押しっていると、文香が二人の元に合流して来た。

「あら文香。どうだっ……………」

聞くまでもなかった。文香の表情は、激おこだった。

その後、文香の気迫に押されたのと、すぐにバレーボール大会が始まってしまったことによって、奏は何があつたのか聞くことができなかった。

が、文香の、ピッチングマシンか？つてレベルのスパイクにより、千秋は気絶。それによって自由時間が終わり、シャワーを浴びながら、奏はようやく落ち着いて話が聞けた。

「……………つまり、自分の名前を呼んでもらうつもりが、加蓮以外の全員と受け取られてしまって、それでイラッとしたのね？」

「……………はい」

明らかにやり過ぎた、とかなり凹んでいた。現在、千秋は自室で寝かされている。

「あまり気にしなくていいと思うわよ」

「……………でも、やり過ぎたのは確かです……………」

頭をお湯で流しながら、ポツリポツリと呟く文香。これは、どんなにこつちが「気にするな」と言っても無駄だろうなあ、と思った奏は、

ひとつ提案した。

「なら、晩御飯作ってあげたら？」

「……晩御飯、ですか……………」

「今日の夕食は私達がカレーを作るんだけど、鷹宮くんは気絶しちゃってるでしょ？だから、あなたが鷹宮くんの分を作ってあげるのよ」

「……………なるほど。でも、上手く作れるでしょうか」

「あなた一応、一人暮らしてしようが」

「……………ええ。ですが、男性に料理を作るのは初めてでして……」

「なら、尚更彼は喜んでくれると思うわよ」

「……………それに、鷹宮くんに合わせる顔がありませんし……」

凹んでる文香面倒臭つ、と思いつつも奏は堪えた。

「じゃあ、私が鷹宮くんのカレーを持って行ってあげるから。文香の手料理なら、鷹宮くんもきつと元気が出ると思うけど？Angel

Beat's!の運動会並みに」

「……………」

シャワーを浴びながら考えることしばらく、文香は呟いた。

「……………じゃあ、やってみます」

「頑張りましょう」

この数時間後、美味しい美味しいと言いながらカレーを口にぶち込む千秋の姿を、部屋の窓の外から見ていた文香は、嬉しそうに微笑むのだった。

自分の感情に気付くコツは、自分のプライドというプライドを全て捨てる事だと思う。

次の日も朝から仕事。昨日配られた、スタッフ用のシャツを着て、撮影の準備で俺は今日もバタバタと走り回っていた。まあ、昨日で力仕事全般は慣れた。あとはカメラマンの方との会話だが、向こうはジャンプを読んでいるので、すぐに仲良くなった。おそらく大丈夫だろう。

問題といえば、昨日奏さんが話していた内容だ。なんで他の女の子と話してて鷺沢さんが不機嫌になるか、これを考えなければならぬ。

「……………考えても分からなさそうだな」

人の気持ちなんてわかるか。精々、自分からなんでだろうと置き換えることしか出来ない。それは結局、人の気持ちではなく自分の事を考えてるだけだ。考えても無駄な事はしない。

そんな事を考えながら、力仕事を頑張っていた。……………疲れたな流石に。しばらく力仕事をし、終わったらまた次の仕事と息つく暇もなかった。まあ、たまにはこういう運動も悪くない。

で、今は一人で救急要員って事で、テントの下で救急箱を持って待機していた。

「……………」

暇だ……。つーか眠いわ。寝ようかな。昨日は割と仕事はあったけど、今日は撮影がメインだから、俺の仕事はない。軽作業・搬入ではなく雑務なので、プロデューサーに声を掛けられるまでは暇なのだ。ぼんやりと宙を見てると誰かがやって来た。確か、塩見周子さん、だったか？

「どーも、鷹宮くん」

「周子さん、でしたよね？」

「正解」

微笑みながらそう言うと、俺の隣にナチュラルに腰を下ろした。

「何かご用ですか？体調悪い？」

「いや？しばらく暇だから、遊びに来ただけ」

早く撮影が終わったのか？まあなんでも良いが。

「鷹宮くんはさ、アイドルとか興味ないん？」

「ないですけど。なんでですか？」

「いやだって、私達のことほとんど知らなかったじゃん？それに、隣に座られても普通に話してるし」

今まで文香さんとデートし、奏さんにビツチと暴言を吐き、ありすさんに至っては電話を無視したからな。話す前にアイドルだって普通の子だと分かってしまったからなあ。

「まあそうですね」

「で、好みの子は誰なの？」

「いや、なんでそうなるんですか」

こいつバカなの？興味ない言うたばかりやろ。

「いやいや。アニメオタクの子はどんな子が好みなのかなって思っただけ。他意はないよ」

「……………なんでアニオタの事知ってんですか」

「昨日部屋で他の子から聞いたん」

誰だか知らないけど奈緒さんか加蓮さんだろうな……。まあ隠してないしいいけど。

「……………まあ、鷺沢文香さんですね」

「……………へえ？そうなん？」

すごく楽しそうに微笑まれた。

「はい。まあ、別に中身とか知らないんで、あくまで外見の話ですけど」

「ふーん？なら、ここから先グッズとか買うん？」

「買いませんよ。金ねーし」

「お金あったら？」

「……………どうすかね。いやでも、金あったらここにいるメンバー全員のグッズ安いの1つずつは買いますよ」

「？　なんで？」

「まあ、お世話になりましたし」

「なったのは私達の方だと思うけど」

「良いんですよ、その辺は」

ホント、なんか知らんけど欲しくなるんだよなあ。俺って割とそういうの気にするタイプだから。

「ふーん……。ならば、カメラマンの人に頼めば良いんじゃない？」

「はあ？」

「案外もらえるかもよ？」

「……いや、でもなんかキモくないですか？ ストーカーみたいで」

「いやいや。そんなん気にしなくても大丈夫だと思うよ。男の子なら普通のことだと思うし」

「……………」

……………確かに、文香さんの水着写真欲しいなあ。

「まあ、頼んでみて損はないかもしれないですね」

「じゃ、行ってきたら？」

「いや、でもせめて撮影終わってからに」

「終わってからじゃ、写真撮れないよ」

「……………あ、確かに」

「言ってみたら？」

ちょうど、全体で休憩が入った。周子さんは俺の顔をチラツと見てきた。

「……………分かりましたよ」

「いってらっしゃーい」

周子さんに手を振られて、俺はカメラマンの方を見た。普通に頼んでは無理だ。戦略を練らないと。

「……………」

確か、ジャンプオタクだったな、あの人。いや、でも俺あんまグツズとか持ってないんだよなあ。漫画かBlu-rayしかない。流石にこれは厳しいか。仕方ない、最悪金を出そう。

そう決めた俺はプロデューサーにバレないようにカメラマンに接近して、後ろから肩を突いた。



「? ああ、鷹宮か」

「あの、お願いがあるんですけど」

「なんだ? 北斗の拳読みたいのか?」

「や、そうじゃなくて。一人、写真が欲しい子がいるんですけど」

「良いぞ」

「はっ?」

「い、良いの?」

「ああ。別に構わねえよ。ただし、バレたら怒られるから一人だけな。誰が良い?」

「……………ああ、理解した。この野郎、俺の好みを知って俺の上位に立つつもりか。」

「……………誰にも言わないで欲しいんですけど」

「分かってるよ」

「……………まあ良いか。バレてもどうせこの先会うことなんてないし、デメリットはない。今日明日耐えれば良いだけだ。」

「鷺沢文香さんのです」

その直後、後ろからガシャンという鈍い音が聞こえた。振り返ると、文香さんが手に持っていたグラスを落として、啞然として俺を見ていた。

「……………」

「……………えっ……………えっ?」

はわわわわ、と言わんばかりに顔を赤くしていく文香さん。多分、俺の顔も赤くなってる。けど、それ以上に俺の目は死んでる。一人で口を押さえて爆笑してるカメラマンさんにイラつとする余裕さえなかった。

「……………た、たかつ、みや……………くん……………?」

なんで、なんでここに、文香さんが……。ふと文香さんの右斜め後ろを見ると、周子さん、加蓮さん、唯さんがこつちを見ていた。

は、謀ったな!? シャア! いや、シャアじゃないけど。とにかく、誤解を解かなければ。

「や、あのっ……………違っ」

「っ!?」

声を掛けると、ビクツとして後ろに退がる文香さん。え、何その反応。痛く傷付いた。牙突が心の臓を貫いた時の如く、俺の胸に何か突き刺さった。

「……………」

「っ!? た、鷹宮くん!? 鷹宮くん!」

×俺はその場でガラガラっつと崩れ落ちた。

×

そのまま撮影は進んだが、俺はほぼほぼ上の空だった。仕事に支障は出していないものの、思考停止状態。プログラムを組み込まれたロボットのよう淡々と仕事をこなしていた。

なんなんだろう、あの拒絶反応は。仲良くなれたと思っていたのは俺だけで、実際は嫌われてたのかな……。あーなんかもう死んじやおっかなーもう。生きてても良いことないし。滅べよこんな世界。

「……………ボロスでも攻めて来ないかなあ」

神様なんてないさ、神様なんてウーソさ、宝くじ当てたバーカが見間違ーえたーのさ。

「おーい、鷹宮くん」

プロデューサーの声がした。

「……………はい」

「実は今日、夜に肝試しをしようと思うんだ。そのルートの下見に行っ来てくれないかな?」

「了解です」

「これ、ルートの案内図。頼むね」

「はい」

「大丈夫? 何かあった?」

「大丈夫です」

「……………」

大丈夫大丈夫。どうせ死ぬんだから、怖いものなんかあるかい。肝試し? 上等だよこの野郎。

俯いてる俺をプロデューサーはしばらく眺めると、手帳を取り出し

た。で、何かを確認すると、撮影待機中のアイドルの群れに入っていた。

数秒後、戻って来た。……文香さんを連れて。

「鷹宮くん、文香も一緒について行くから」

「……………はっ?」

「いやー、文香は撮影の順番一番早いから、間が空いてたんだよ」

「え、いや聞きたいのはそういう事じゃなくて」

「じゃ、よろしく頼むな」

それだけ言うと、プロデューサーさんは撮影に戻ってしまった。

残された俺と鷺沢さん。顔を赤くして、ただお互いに向き合つて目を逸らしていた。

やがて、鷺沢さんからポツリと呟いた。

「……………いい、行きましようか」

「は、はい」

出発した。

下見は少し離れた場所の神社でやるらしい。歩いて15分ほどの距離に、林の中に神社がある。林の入り口から神社までの道を二人で歩く、というイベントだ。

それを、今まさにやっているわけだが、全然ドキドキしない。昼間だからというのもあるが、一番でかいのは、一緒にいるのが先ほど大きく拒絶された鷺沢さんだからだ。

「……………」

「……………」

お互い無言で歩く。なんで?なんで自分からこの人は俺と行くなんて言い出した?君は俺の事を嫌いだろう。

「……………た、鷹宮くん」

「っ、は、はいっ」

緊張気味に返事をした。なんだろう、「この際だからはっきり言いますけど、アニメのこととかほんとは私全然興味ありませんから。もううちに来ないでくれますか?ついでに死んでくれますか?」的なことかなあ、ドキドキ。

「……その……申し訳ありません。先程は「？」」

「……あの、鷹宮くんが、私の写真を欲していると聞いてしまって……それで、恥ずかしくなってしまう……。だから、決して鷹宮くんが、嫌いというわけではなかったんです……」

「……」  
俯く文香さん。そうか、別に嫌われてるわけではなかったのか。良かった……。ついうっかり身投げするところだった。

「そうですか……。良かったです」

「……でも、その……どうして、私の写真を、欲しがったんですか……？」

「……えっ？」

「……も、申し訳ありません。その、どうしても気になってしまって……」

「……えー、何それー。言えつての？ いや、別に文香さんの事が好きとか、そんなんじゃないんだけどさー。ちょっと一緒にいると嬉しくて、笑顔を見るとドキドキして、他の男と話していると殺意が芽生えたりするだけで、別に好きというわけじゃないけど、でも「欲しかったから」とは言えねーよ。」

「……言わなきゃ、ダメですか？」

「……私、気になりますっ」

「……そんな古典部部长みたいに言われても……。いや、でも言った方が良いのかなあ。」

「答えるべきか悩みながら、神社の鳥居をくぐった。つーか、この神社ボロいなー。こりや夜になると怖そうだ。」

「あ、着きましたね。意外とこの神社、雰囲気あるかも」

「……誤魔化せてませんよ」

「だよね。俺はため息をついて口を開いた。」

「……わかりました。言いますよ」

「……は、はい」

覚悟を決めて、とりあえずあの時の状況を説明しようとした直後だった。雨が降って来た。

「えっ?」

「……あ、雨ですね」

「結構強くなね?」

「……そうですね」

ポツ、ポツ……という感じだったのが、徐々にザアアアアアって感じに変わっていく。おいおいおい、マジかよ。ここから宿までは少し遠いぞ。

「ふ、文香さんっ。とりあえず、屋根の下に行きましょうっ!」

「っ……ーは、はい!……えへへ、文香さん」

なんか自分の名前呼びながら嬉しそうにはにかんできたが、気にする余裕はなかった。目の前の神社の下に走って、階段の上に座った。走ったお陰で、あまり濡れなかったが、今から宿に走れば速攻で雑巾になるのは目に見えていた。

「……ふう、なんだよ。天気予報は晴れだったぞクソツタレ。もう二度と見ねえからな目覚めしテレビ」

「……どうしましょう、このままじゃ戻れません、よね……」

「連絡入れておきますよ。迎えは、少し待った方が良いかもしれませんね」

あー、まあ良いか。しばらくサボれると思えば。俺は文香さんと隣で座ったまま、ボンヤリする。

……ああ、こういう静かな時間も悪くねーな。そんな事を思いながらボンヤリとその辺を見てると、文香さんが何食わぬ顔で聞いてきた。

「……それで、何故写真を?」

「……」

うん、やっぱ逃げられんわ。仕方ない、覚悟を決めよう。俺は深呼吸をすると、ポツリと呟いた。

「……その、何。文香さんが一番、クローネの中で……好き……だからです」

「……………」

言った、言ってしまった……。どんなに遠回しに表現してもこうなってしまう。大丈夫、クローネの中とかちやんと言ったし、告白的な意味にはなっていないはずだ。

……………気になったので、チラッと文香さんの方を様子見してみた。文香さんは、キョトンとした顔で聞いてきた。

「……………はい?」

「っ」

不覚にも、少しイラつとした。聞こえていなかったようだ。

「……………もう言いません」

「……………ええっ!??き、聞こえなかったんですけど?」

「知りません」

「……………そ、そんなあ……………」

この野郎、俺がどれだけ体力使ったと思ってたんだ。今の一言を言うだけでスタミナゲージが消滅するレベルまであったんだぞ。

俺はスマホを取り出して、プロデューサーさんにメールを送った。すると、隣の文香さんが「つくち」と可愛らしくしゃみをした。

「……………文香さん、ひよっとしてその下……………水着ですか?」

「……………そう、ですよ?」

少し恥ずかしそうに顔を赤らめながらも「えっち」と言わんばかりの目線を向けてくる文香さん。いや、違うから。そんなつもりないから。

「あの、良かったら俺の上着着ますか?」

「……………えっ?」

「風邪引いたら大変ですし。羽織るだけでも効果あると思いますよ」

「……………でも、そしたら鷹宮くんは……………」

「いや、平気です。俺は普通に服着てるんで」

ていうか、スタッフ用の上着少し暑いくらいだし。俺は上着を脱ぐと、文香さんの背中から被せた。

文香さんは体育座りするように坐り直し、膝で赤くなった顔を隠しながらボソツと呟いた。

「……………ありがとうございます」

「いえ」

そんな大したことしたわけじゃないし。しかし、何かお話しした方が良いかな。暇だもんな、いつ止むか分からない雨の中で待機してんのは。何か話題を探していると、文香さんは俺に身体を預けて来た。ボスツと俺に体重を乗せ、頭を肩の上に置いた。

「……………すみません、少し……………このままで」

「寒いんですか？」

「……………それもありますけど、少し心細くて……………」

「……………」

「知らない場所で、雨の中二人きりになってしまつて……………。鷹宮君がいてくれて良かったです……………」

「っ」

この女はすぐそういうこと……………！俺の心臓のことなんか御構い無しか。

……………まあ、良いか。どうせ言つても、キョトンと可愛らしく首をひねるだけだ。この子は人の気持ちには少し疎い。

しかし、なんだ。クソ……………なんでだ。なんか、すごいドキドキする。雨の中二人きり、このシチュエーションだけでもヤバイのに、文香さんがやけに色っぽく見える。なんだこれ。

「……………」

俺、文香さんの事好きなのかな……………。これが、恋愛つてことなのだろうか。だが待て。確かに最近によく遊ぶが、俺は文香さんの何を知っている？まだ知り合つて2ヶ月くらいなのに、それで好きになるのはおかしい話だ。

俺が鷺沢文香について知つてることなんて、名前、歳、誕生日、職業、バイト先、大学の学部、読書家、割と影響されやすい、異性との耐性がなくてすぐに顔が赤くなる、好奇心旺盛、天然、おっぱいが大きい、なんか突然怒る、貞操観念皆無、勉強教える時はスパルタ、怒るとサイヤ人より怖いって事くらいだ。……………結構知つてんな。っーか、普通の友達同士より詳しいんじゃないやねえの？

……あれ、そう考えると俺これマジで文香さんの事好きなんじゃねえの？ヤバイ、なんかまた心臓の高鳴りがとんでもないことに……！

「……………鷹宮くん？」

「ツヒイイイイインツ!!?」

「つ!!? ど、どうしたんですか？」

「あ、いえ、なんでも……………」

き、急に声かけてくんなよ……………ビックリした。気持ちを落ち着かせてから、文香さんの方を見ると、文香さんも少し顔を赤くしていた。はっ、それより声を掛けてもらったんだから返事しないと。

「……………えつと、なんですか？」

「……………いえ、その……………鷹宮くんは私がアイドルだったことに関して、その……………何かないのかと、思いました……………」

「あー」

そりや驚いたけどな……………。それより、君との関係を隠すことで精一杯だったんだよ……………。

「まあ、ビビツタといえばビビりましたけど……………でも、腑に落ちてるのも確かですから」

「……………そう、ですか？」

「昼間とかは忙しそうでしたし、たまに電話の向こうで『プロデューサー』っていうワードも聞こえましたし」

それに、文香さんすごい美人だし」

「ふえつ!!?」

「えつ?」

「……………び、美人、ですか……………?」

「えつ、声に出てた?」

聞くと、文香さんは顔を赤くしてコクツと頷いた。うーわ……………マジかよ……………死にたい。顔を赤くして俯いてると、文香さんが焦ったように声をかけてきた。

「……………あのつ、そんな落ち込まないでください。……………私、お仕事柄そういう褒め言葉には慣れてますけど……………その、鷹宮くんに言われ



たのが、一番……嬉しかったです……」

「っ」

なん、だと……!?この人、今なんて……!??

「あの、もっかい言ってもらえますか?」

「……二度は言えません……」

……だよ。まあ良いさ。心の録音機に永久保存したし。

でも、なんだ。今のは……いや、まて。今の発言から文香さんが俺の事を好きだと捉えるのは飛躍のし過ぎだ。そう思いたくても抑える。

ちなみに何かの間違いで告られたら0.2秒でOKする自信がある。

いやいや、だからそういう妄想は良せ。心を無にしろ。頭の中で鉄華団団長が撃たれたシーンを思い浮かべろ。何の感情もおきなかっただろ。……あ、本当に落ち着いてきた。初めてオルガすげえって思ってたわ。

そう思った直後、ドツドツドツという心臓の高鳴りを再び何処から感じた。俺の心臓は落ち着いてるはずなのであり得ない。それに、なんか右肩の方から……。俺の右肩には、文香さんの左胸が少し当たっている。……あれ?この高鳴り、もしかして……。

隣を見ると、文香さんも恥ずかしそうに顔を赤くしていた。おい、これ、まさか……。

そう思った直後、神社の鳥居の前に車が止まった。そして、一人の男の人が傘をさして走って来た。

「おい、二人ともー!」

その声で、俺も文香さんも慌てて遠退いた。走って来たのはプロデューサーさんだった。

「迎えに来たよ。今日はもう宿に戻る事になったんだけど……何かあったの?」

「い、いえ何も!」

二人して声を揃えると、プロデューサーさんは頭上に「?」を浮かべたが、すぐに笑顔に戻った。

「ま、とにかく宿に戻ろう。ほら、行くよ」  
との事で、バスの中に入り込んだ。その間、俺も文香さんも一言も話すことはなかった。

盗み聞き程、人の本性を探るのに適した行為はない。

夜。晩飯の後の肝試しは雨のおかげで断念。スタッフ全員で今後の予定を決めている中、俺はバイトの身であるため、一人で部屋でボンヤリしていた。なんか、神社の事が頭から離れない。なんだったんだろう、あの時間は。なんとというか、すごい凄まじい時間を過ごしていた気がする。気まずくて、心臓に悪くて、いつ胃に穴が開いてもおかしくない時間だった。だけど、悪くないと思える時間だった。

初めて、俺は今「文香さんは俺のことをどう思っているんだろうか」という疑問が芽生えている。好き嫌い、ではなく、普通にどう思うのか。ただのオタク仲間なのか、それとも少なくとも異性としては見ているのか。

いやいやいやいや、待て待て待て待て。勘違いするな俺。俺の事を異性として見てくれてる奴なんているかよ。きつと、文香さんにとつて俺はオタク仲間であり、そちの道に引きずり込んだ奴、という認識でしかない。期待するような想像はするな。とりあえず、お茶飲んで落ち着け。

そんな事を考えながら頭を横に振っていると、コンコンとノックの音がした。

「はい」

顔を出すと、部屋の前で待機していたのは金髪ショートヘアの方の宮本フレデリカさんだった。

にっこにっこ微笑んだフレデリカさんは、俺に会うなり小さく手を振った。

「鷹宮くん、こんにちは」

「どうも。こんばんは」

「恋バナしよ?」

「はい?」

「こいつ今何だった? 異性だよ俺たち?」

「ほら、私達の部屋において?」

「待て待て待て待て待て待てお願い待って。そんな事したら俺、プロデュー

サーに」

「さっ、レッツゴー♪」

「誰かー、通訳呼んでくれー」

連行された。なんで？つーか、なんなのこの人？この二日間、一番会話成立しなかったんだけど。

俺の台詞などまるで無視して、俺は誰かの部屋の前に連れて来られた。

「入るよ〜♪」

「……えっ？ちよっ、待っ」

中の人の制止を無視して、フレデリカさんは部屋のドアを開けた。中では、奏さんが浴衣に着替えようとしていた。

「あっ……」

「っ！ た、鷹宮くん……っ？」

「あらっ……」

「………いっ」

悲鳴が上がりそうだったので、俺はフレデリカさんからドアノブを奪ってドアを閉めた。

「………フレデリカさん」

「………やっちゃった☆」

こいつ反省してねーな……。つーかあんた、歳いくつだよ。俺より年上だろ。☆付けんのやめろ。

「俺、部屋に戻りますね」

「それはダメ」

逃げられなかったか……。変に抜かりないなこの人。まあ、とりあえず今の映像を脳内に焼き付けておくか。

数分経過し、ようやく着替え終わったのか、扉が開いた。中から奏さんが恥ずかしそうに顔を出した。

「じゃ、頑張ってねー」

フレデリカさんは部屋の前から消えた。あの野郎、逃げやがったな……。つーか、恋バナって何。なんで呼び出されたの？

「………ど、どうぞ」

奏さんは俺を部屋の中に招き入れた。つーか、奏さんが俺に何の用なんだ？二人で恋バナしろってんじゃないだろ？分からないことだらけだ。

机の前に座ると、奏さんが部屋に備え付けのお茶を淹れて前に置いてくれた。

「……………はいっ」

「あ、どうも」

すごく俺のこと睨んでる。相当恥ずかしかつたんですね、分かりません。

「……………見た？」

顔を赤くして聞いてきた。やっぱり処女ビッチだったか…………。

「安心して下さい。俺は文香さん以外の裸では欲情しませんから」

「あんたブツ殺すわよ」

「ごめんなさい」

なんとストレートな殺意。思わずビビっちゃったよ。この人は絶対に怒らせてはならないリストに上げておこう。

「……………まあ、良いわ。今回はあなたは悪くないし、許してあげる」

「はあ、どうも」

「それよりも、よ。あなたまた文香と何かあつたの？」

「……………えっ？」

「あの子と神社で二人きりになったんですって？その事を聞いたから顔を真っ赤にされ……………なんであんたも赤くなってるのよ」

「……………」

仕方ないだろ。恥ずかしかつたんだから。マジで心臓が四散するかと思つたわ。

俺の様子を見て、奏さんは呆れたように言った。

「あんた達さ、いい加減にしてくれないかしら？今回の撮影でつくづく思つたけど、なんで一々、私を巻き込むの？」

「いや、そんなつもりは……………」

「まあ、もう二ヶ月だしいい加減慣れたけどさ。さっさとあんたらに付き合ってもらうなりなんなりして欲しいのよ。なんでいつもいつ

もノロケ話聞かされないといいけないわけ?」

「…………や、ヤバイな。この人、相当きてるぞ。いつもより毒舌だし。確かにかなり負担かけてたかもしれない…………。」

「いや、待て。でも一個おかしい。」

「や、ちよつと待った。なんで俺と文香さんが付き合うみたいなお話になつてんの?」

「はあ?」

「文香さんは別に俺のこと好きじゃないじゃん」

「あんた本気で言つてんの?」

「え?うん」

奏さんは額に手を当てた。そして、しばらく頭を抑えるようにこめかみに手を当てて、考え込んだ後に聞いてきた。

「…………じゃあ、あなたは文香のことどうなの?」

「それは一番判断できないところなんだよね…………。俺も人を好きになつたことがないから分からないのかもしれないけど」

「なら、今から質問するから正直に答えなさいよ?」

「え?うん」

「なんだ?何を聞かれるんだ?と、思う間も無く、機関銃の如く奏さんは質問攻めをしてきた。

「文香といるとドキドキしたりする?」

「する」

「文香を見てときめいたりは?」

「しよつちゆう」

「文香にお祭り誘われた時、どんな気分だった?」

「へブンリーカイトと武器アクションの連行並みに舞い上がった」

「文香に本のレンタルの要請があったらどう?」

「学校早退してでも行きたいくらい」

「今回、しばらく三日間の間会えないって聞いた時はどう思った?」

「魔人ブウにアルティメット悟飯を吸収されたときくらいの絶望感」

「文香の水着を見て?」

「等身大フィギュアが欲しいと思いました」

「大好きじゃない!!?」

突然、怒鳴られた。え、なにこの人?今なんて言ったの?

「えっ……………」

「恋どころかストーカーの気質まで兼ね備えてるわよ!? 私、少しかなり大幅にドン引きしたんですけど?」

「や、言い過ぎじゃね……………」

「あんたらはホンツツツトにもう……………。それでよく『それは一番判断できないところなんだよね…………』なんてナメくさった事言えたわね。バカにしてるの?」

おい待て。それは俺のモノマネのつもりか?死ぬほど似てねえかな?でも可愛かったから許す。

……………でも、そうか。俺って文香さんのこと好きだったのか。うわ、なんか恥ずかしくなってきた。

「……………うわあ、俺文香さんのこと好きだったのか……………」

「そうよ。とにかく、告白しなさい」

「……………いつからだ。いつから好きだったんだ……………」

「そんなのどうでも良いから告白の日程を」

「……………まさか、出会った日からはないよな……………?俺、一目惚れするようなタマじゃないし……………」

「話聞きなさいよ」

怒られたので、とりあえず告白について考えた。いや、考えるまでもねーな。そんなん、結論は一つだろ。

「……………でも、告白はできないな」

「は?何へタレてんの?殺すわよ?」

「待って。さつきから酷くない?」

どこまでイライラしてんだよ……………。俺だって傷つく事くらいあるんだぞ。

「だって冷静に考えろよ。相手はアイドルだぞ?向こうはOK出来ない。したとしても、文香さんのあの性格だ。表に出さないのは不可能に近いだろ」

「……………じゃあ、このまま行っても文香に支障は出ないと思う?」

「っ、そ、それは……………」

確かに。神社では間違いないく文香さんの鼓動が身体を通して伝わって来た。俺の事を好きだなんて言うつもりはないが、意識はしているんだろうな。そんな状態で、文香さんが仕事を続ければ必ずポロが出る。文香さんにはファンだっているだろうし、俺闇討ちとかされたくない。

「いっそ、付き合っちゃった方が良いんじゃない？あなた、割と嘘の言葉選びは上手いから、周りにはバレなさそうだし」

「や、だから向こうは俺のこと好きじゃないから」

「あーうんそうねーはいはい。とにかく、この夏休みの間に告白しちゃいなさい。付き合ったら、私が文香の方はフォローするから。良いわね？」

「いや、何も良くないんだけど。っーかなんで付き合える前提？お前バカなの？」

「……………告白しないと今からプロデューサーにあなたと文香の関係をチクるわよ？」

「よーし、とりあえず作戦会議でも始めるか」

シチュエーションが大事だよな。俺が顎に手を当てて色々とアニメの告白シーンを脳内検索していると、コンコンとノックの音がした。

「はーい？」

「奏か？鷹宮くんどこにいるか知らない？」

「っ……………」

ぶ、プロデューサーの声だ。ヤバイ、今バレたら全部おじやんだ。俺のバイト代もろとも。この部屋二階だから窓から飛び降りることもできない。

すると、奏さんは俺に向かって口パクで「何処かに隠れて」と言った。

ど、どこかと言われても……………！お、押入れの中しかないだろ……………！！  
？仕方がない、迷ってる時間はない。俺は押入れの中に入ろうと、戸を開けた。しかし、中には、文香さんが顔を赤くして入っていた。

「……………はっ？」



「っ……………」

なんでお前いんの？と、素で聞きそうになった。え、待て待て待てお前まさか今の話聞いてた？ぽかんとしてる俺の腕を、文香さんは引っ張って押入れの中に引きずり込んだ。この人、意外と力強いな。

戸を閉められる直前、奏さんの顔を見ると、めっっちゃ爆笑を堪えてた。テメエ後で覚えとけよ……………」

……………」とりあえず、ジャツジを聞いておかないとな……………」

「……………」あの、文香さん？まさか話聞いて……………」

「……………」い、今は静かにして下さい」

引っ張る力が強かった割に、言葉に覇気がねえな……………。まあ良いけど。ていうか、暗くて何も見えないけど、柔らかい感触がすごく当たってるんですけど……………」

その後、狭い押入れの中で、俺の頭では容量オーバーするような出来事や会話が起こったが、とりあえず結論を言おう。

文香さんに、告白する為にデートをする事になりました。

## ふみふみの撮影日(2)

撮影が中止になり、文香達は自室にいる事になった。が、明らかに文香の様子がおかしい事に奏は一発で気付いた。なんか神社で千秋と一緒にいたらしいが、それからぼーっと酒を飲んだ後みたいにボンヤリしていた。

また何かあったのか……と、ため息をついて、上は服を着てるが、下はパンツ一枚でリラックスモードの奏が聞こうとすると、文香が先に口を開いた。

「……………奏さん」

「なに？」

「……………私、死ぬかもしれないです」

「ふあっ!?」

急にどうした!? 的な反応である。

「な、何!? どうしたのっ?」

「……………いえ、なんか心不全、でしょうか? とにかく、その……………心臓が痛くて……………」

「心臓……………」

「……………特に、鷹宮くんとなると……………もう、心臓がトランザム状態で……………」

「あの、わかりにくいからアニメに例えるのやめてくれる?」

「……………と、とにかく、その……………鷹宮くんとなると、心臓がうるさくて……………心臓病かもしれないです」

「いや、違うから。……………ある意味では病気だけれど」

「……………やっぱり」

「大丈夫よ。死にはしないから」

奏はハッキリ言うべきか悩んだが、目の前の奴はそういうのダメダメだろうし、もう言おうと思って言った。

「あなた、鷹宮くんのこと好きなのよ」

「ふえっ!?」

「鷹宮くんというと、ドキドキするんでしょう?」

「……………違います。胸が痛くなるんです」

「それをドキドキっていうのよ……………」

「……………」

ピンときてない様子の文香に、奏は声は分かっているような顔で聞いた。

「今から、いくつか質問するから正直に答えてね」

「……………は、はあ」

「鷹宮くんというドキドキすることは？」

「……………この胸の痛みが『ドキドキ』というのでしたらありますが……………」

「鷹宮くんを見てときめいたりは？」

「……………それも多々ありました」

「鷹宮くんをお祭りに誘う時、緊張した？」

「……………しました。特に浴衣が似合ってるかどうかが……………」

「鷹宮くんに本の発注を頼まれた時、エロ本を頼まれたら？」

「……………ケストレルランペルージ・零式」

「今回、三日間鷹宮くんと会えないと分かった時どう思った？」

「……………寂しかったです。三日間が精神と時の部屋並みに長く感じていたと思います」

「今回、鷹宮くんに水着を見られて？」

「……………は、恥ずかしかったですけど、褒められたので良かったです。

……………でも、今度は鷹宮くんの水着も……………いえ、なんでもありません」

「ベタ惚れじゃない」

奏は頭を腕の中に埋めた。なんなのこいつ、みたいな感じで。

「……………で、でもっ！好きかどうかなんて……………！」

「じゃあ、私と鷹宮くんが付き合ったらどう思う？」

「ッ……………！」

「ほら見なさい」

文香はフツと俯いた。その顔が耳まで徐々に赤くなっていく。意識し始めたか……………と悟った奏は「それで？」と切り出した。

「どうするのよ。鷹宮くんのご好きなんでしょう？」

「…………ど、どうすると……言われ、ましても…………」

「あーもう、一々顔赤くしないの」

そうは言われるものの、文香は恥ずかしさで目を逸らす。それに焦ったくなつた奏は、ああもうつと言った。

「いつ告白するのよ」

「こつ、こつ、告白!?」

「なんで一回ニワトリの真似挟んだのよ」

「……ち、ちがいますっ。それより、告白なんて…………!」

「でも、あなたが告白しないと彼に彼女が出来ちやうかもしれないわよ?」

「……それは大丈夫です。鷹宮くんにご友人はいませんし、彼女が出来る可能性なんて皆無に等しいです」

「あんた、今自分が酷いこと言ってるのに気付いてる?」

まずはそこを指摘しておいてから、奏は説明した。

「でも、そんな彼を好きになっちゃったのはあなたでしよう?」

「……そ、そうですけど」

「なら、他にあなたと同じ感じに出会って、あなたと同じように彼を好きになる人がいてもおかしくないんじゃないかしら」

「…………!」

確かに、と納得した文香に、奏は畳み掛けるように言った。

「特に、アーニヤちゃんだっけ?あの子、彼にウ○ビツチ勧められて、昨日の夜にスマホで見てたわよ。あなたと同じだと思わない?」

「っーど、どうしましょう奏さん…………!」

「先に告白して取っちゃえば良いのよ」

「…………と、取っちゃうって…………」

焦ってはいるものの、冷静に目を閉じて考えてみた。しばらく思考を巡らせてみるが、すぐにショボンと肩を落とした。

「…………すみません。でも、私に告白なんて……。これから先、彼との関係が壊れると思うと、怖くて…………」

「……………」

少し共感する奏。確かに、振られる可能性があると思っっている文香

にとつては怖いのかも知れない。念のため、千秋の方も把握しておこうと思ひ、奏は質問してみた。

「……………ちなみに神社のとき、彼の方はどんな感じだったの?」

「……………鷹宮くん、ですか?可愛かったですよ?」

「や、そういうんじゃないよ。二人きりの時の様子よ」

「……………様子、ですか?えつと……………」

とりあえず、当時の千秋の様子を事細かく説明した。その様子を聴きながら、よくもまあそこまで詳しく覚えてるもんだ、と奏は感動しつつも、千秋も文香の事が好きである事を確信した。

聞き終わると、奏は真顔で結論を言った。

「まあ、とりあえず、問題ないから襲つちやいなさい」

「襲つ……………!??な、何言ひ出すんですか奏さん!??」

「もういいわ。付き合つてもないのにイチヤイチャしやがつて。さつさと二人で布団の中で」

「わつ、わーわーわー……………にやつ、にやにを言つてるんですか!??」

「大丈夫、鷹宮くん多分あなたに欲情してるまでであるし。ほら、はやくキスするなり何なりしちやいなさい」

「つーむ、無理です……………!鷹宮くんは、私の事なんて別に……………!!?」  
「……………」

過去最大規模ののろけ話を聞かされた気分になつて、なんかもう全部どうでも良くなつてきた奏は、指をパチンと鳴らした。

直後、何処からか加蓮、周子、唯、ありすと何故かフレデリカまで現れた。

「つ!?? み、皆さんどこから……………つて、今の聞いてたんですか!??」

「同盟を結んでおいて正解だったわ。今の話、聞いてたわね?」

『はいっ』

「Eトライアル【鈍感族への伝言】よ。各自、準備開始」

『御意』

加蓮、唯、周子、フレデリカは部屋から出て行き、ありすはポケットからスマホを取り出し、なにか操作した後充電器にさしてから部

屋を出て行った。

ポカーンとした表情で、その様子を文香が見ていると、奏は文香に言った。

「文香、あなたは押入れにいなさい」

「……………へっ?」

「ほら、いいから。良いって言うまで出て来ちゃダメだから」

言われるがまま、文香は押入れの中に入った。

奏は自分がパンツ一枚だった事を思い出し、着替え始めた。もうすぐ就寝時間なので、ついでに浴衣に着替えようと上の服も脱ぎ始めた。

その直後、「入るよ♪」とフレデリカの声が聞こえた。

「えっ?ちよっ、待っ」

開かれる扉。

「あっ……………」

「っ! た、鷹宮くん……………?」

「あらっ……………」

「っ!?!」

聞き捨てならない言葉に文香は押入れを出そうになったが、「良い」とは言われてないので何とか堪えた。後で、千秋にクルーシオとか考えて何とか心を落ち着けた。

奏がようやく着替え終わり、扉の方に向かうと、部屋に千秋を迎え入れた。

「……………鷹宮くん?」

奏さんはどうするつもりなの?と考えると、奏は千秋にお茶を淹れて差し出した。

流石に恥ずかしかったのか、奏は顔を赤くして聞いた。

「……………見た?」

「安心して下さい。俺は文香さん以外の裸では欲情しませんから」

奏と文香は同時に別の意味(怒りと羞恥)で顔が赤くなった。

「あんたブツ殺すわよ」

「ごめんなさい」

素直に謝る千秋。そのまま、奏は千秋に尋問を始めた。ドローフエイズで、まず話を切り出した。

「それよりも、よ。あなたまた文香と何かあったの？」

「……………えっ？」

「あの子と神社で二人きりになったんですって？その事を聞いたから顔を真っ赤にされ……………なんであんたも赤くなってるのよ」

「……………」

続いて、スタンバイフェイズをスキップしてメインフェイズに移行。奏は千秋の様子を見て、まずは文句を召喚した。

「あんた達さ、いい加減にしてくれないかしら？今回の撮影でつくづく思ったけど、なんで一々、私を巻き込むの？」

「いやそんなつもりは……………」

「まあ、もう二ヶ月だしいい加減慣れたけどさ。さっさとあんたらに付き合ってもらうなりなんなりして欲しいのよ。なんでいつもいつもノロケ話聞かされないといけないわけ？」

その言い草に、文香は少しシヨボンとした。奏に今まで無理矢理話を聞かせてしまっていたみたいで。

「……………あれ？でも、基本的に奏さんから聞いてきたような……………」

考えてる間に、奏のターンは進む。すると、千秋がリバーカードをオープンした。

「や、ちよつと待った。なんで俺と文香さんが付き合うみたいな話になってるの？」

「はあ？」

「文香さんは別に俺のこと好きじゃないじゃん」

「あんた本気で言ってるの？」

「え？うん」

それを聞いて、文香の思考は中断され、千秋にダイレクトアタックを仕掛けようかと思った。が、これは波動キャノンみたくターンを重ねるたびに威力を増させて取っておこうと思ひ、なんとか堪えた。

奏は千秋のリバーカードを逆手に取りつつ、先程召喚した文句の特殊能力を発動した。

「…………じゃあ、あなたは文香のことどうなの？」

「それは一番判断できないところなんだよね……。俺も人を好きになっただけじゃないから分からないのかもしれないけど」

「なら、今から質問するから正直に答えなさいよ？」

「え？うん」

これによつて、質問攻めを特殊召喚した。

ここから、いよいよバトルフェイズである。ただし、千秋への攻撃ではなく文香への攻撃だった。

「文香といるとドキドキしたりする？」  
「する」

文香の顔が赤くなった。

「文香を見てときめいたりは？」

「しよっちゆう」

ブハツ、と吹き出しそうになった。

「文香にお祭り誘われた時、どんな気分だった？」

「ヘブンリーカイトと武器アクションの連行並みに舞い上がった」

一瞬、ピンとこなかったが、理解した直後にまた赤くなった。

「文香に本のレンタルの要請があったらどう？」

「学校早退してでも行きたいくらい」

嬉しさと恥ずかしさで、その場で俯いた。

「今回、しばらく三日間の間会えないって聞いた時はどう思った？」

「魔人ブウにアルティメット悟飯を吸収されたときくらいの絶望感」

とうとう、耳を塞いで悶え始めた。

「文香の水着を見て？」

「等身大フィギュアが欲しいと思いました」

耳を塞いでも聞こえて来た褒め言葉によつて、押入れの中で足をバタバタとバタつかせ、押入れの中の座布団で頭を隠した。

「大好きじゃない!!？」

奏の最後の一言で、文香は一周回って大人しくなった。

【鷺沢文香 LP:0】

メインフェイズ2に行くことなく、デュエルは終了した。



そこから先の会話は、もはや頭に入って来ないほどだった。千秋が自分の事を好きである事を自覚してしまい、恥ずかしさと嬉しさと、あと謎の罪悪感が色々と混ざり合い、文香はその場でピクピクと謎の痙攣を起こした。

これから先、どんな顔して彼と話せば良いのか、これから先、どんな感じで彼とあれば良いのか、これから先、どんな名前を子供につけようか、若干一つほど間違えていたが、とにかく色々と頭の中でグルグル駆け巡った。

だが、その思考は一つのノックで遮られた。

「はい？」

「奏か？鷹宮くんどこにいるか知らない？」

「っ!?」

プロデューサーだ。千秋も慌てている。しばらく千秋は辺りを見回した後、押入れに向かってきた。

え？なんでこっちに来るの？と文香が思っていると、千秋は押入れの扉を開けた。

「……………はっ？」

盗み聞きがバレた罪悪感があったが、それ以上に文香は現状をどうにかしようと考え、とりあえず千秋の腕を引っ張って押入れの中に引きずり込んだ。

「……………あの、文香さん？まさか話聞いて…………」

「……………い、今は静かにして下さい」

誤魔化すように言うと、千秋は黙った。「プロデューサー、どうしたの？」「や、加蓮と唯に奏が用あるって言われたんだけど」「？ 私呼んでないわよ？」みたいな会話が聞こえて来る。

しばらくして、部屋のドアが閉じた音がした。千秋は押入れから出た。

「……………鷹宮くん？」

「……………やっぱり、プロデューサーどころか奏さんもいない」

またプロデューサーに入ってこられたら厄介なので、鍵をかけておいた。顎に手を当てて考え事をする千秋に、文香は声を掛けた。

「…………あの、鷹宮さん」

「待って」

千秋はそれを止めると、充電器の刺さっているスマホを見た。画面をつけると、「塩見周子」と通話中になっていたので、電源を切った。

「…………あの、それありすちゃんの…………」

「…………よし。もう大丈夫です。何ですか？」

「…あ、はい。…………その、先程の話について、なのですが…………」

「……………ですよね」

千秋は少し覚悟したように呟いた。今更、恥ずかしくなってるのか、顔を手で覆った。だが、文香はその前に聞いた。

「…………いえ、その前に奏さんの裸見たんですか？」

「……………少し」

素直に答えると、文香はジト目になった。目を逸らす千秋と睨む文香。だが、「まあいいです」と文香は呟いた。

「…………それは後で怒るとして」

「あ、怒ることは確定なんだ」

「…………その…………まずは、申し訳ありません。盗み聞きなんて、してしまつて……………」

「いや、それは大丈夫です。大体、全部分かつてるんで」

「…………それで、その…………わ、私の事…………好き、なんですか…………？」

「……………」

千秋は無言で頷いた。それを見て文香は両頬を抑えて顔を真っ赤にして俯いた。

千秋はそのままどうすれば良いのかわからず立ち尽くした。返事を聞いてダメだったら死ぬるからだ。ここは、とりあえず現状を打開すべきと考え、千秋は文香に言った。

「……………あつ、あのっ」

「……………」

「……………あの、こんな感じになっちゃいましたけど…………告白にしては、余りにも酷いと思うんですよ」

「……………は、はあ」

「だから、その……また、二人で出掛けた時に、日を改めて……ということでは、ダメですか……?」

キョトンとする文香。だが、文香にしても、こんな嵌められてなあなあな感じな告白は嫌だった。

「……分かりました。じゃあ、それまでにロマンチックな告白をお願いしますね? 『明日朝起きたら俺たちが恋人同士の関係になったとしたら面白いと思わないか?』みたいな」

「……パクリで良いんですか?」

「むっ……物の例えですっ」

「冗談ですよ」

千秋が微笑みながら返すと、文香も微笑んでクスクスと笑った。それを見て、少し安堵しながら千秋はお茶を飲み干した。

「……じゃあ、そろそろ部屋に戻りますね」

「……そうですね。プロデューサーさんに見つかったら大変ですし」

「では、おやすみなさい」

「……はいっ、おやすみなさい」

千秋は小さく胸前で手を振ると、部屋を出て行った。

この後、もちろん二人は布団に包まって悶えた。

一着で良いから、女と遊ぶ時の服は買ってあげ。

デート。これは、男と女が二人きりでプライベートで出掛ける時に使われる言葉だ。別に相思相愛でなくともこの言葉は使われるだろうが、基本的には相思相愛の男女が行うものだ。「いやこれ別にデートじゃないし」という台詞もあるからな。

そのデートを行うのに対し、気合を入れて服装や髪型に気を使う事を、俺は別に否定するつもりはない。だが、俺はそういう事をしないと断定出来る。何故なら、相思相愛のデートであるなら「悪人から助けられた」のようなよっぽどな理由でもない限り、向こうは自分の日常的生活を見て好きになったと考えるべきだからだ。それなら、デートに限ってお洒落をするのは、向こうが自分を好きになった部分を否定するのに等しい。

しかし、そうなるのであれば相思相愛に限った話ではなくなる。俺が誰かに片思いしていたとして、そいつとデートすることになった。めいっばいオシャレして、付き合う事になった。それから、その彼女とデートするとして、服装をいつもの服に戻せば、それは明確な裏切り行為であり、彼女を失望させることに値し、もはや詐欺と呼んでも過言ではない。デートでなくても、一人で出掛けてるところを彼女に見られればアウトだ。

だから、俺はオシャレはしない。自分がオシャレに目覚めるまで、絶対に自分の好きな服を着続ける。

「と、いうわけだが？」

「……………あ、妄言は終わり？じゃ、服屋行くわよ」

「おい待て、お前話聞いてた？」

撮影日が終わり、現在は次の週の土曜日。明日は鷺沢さんとデートの日だ。昨日の夜中、速水さんのレベリングを手伝っていると、突然「そういうえば、あんた明日のデートの服は何で行くの？」と聞かれた。なんでデートの事を知ってるのかは知らないが、とりあえず「この前のバイトの時と同じ感じですよ」と答えたら、呼び出しを食らい、現在、自宅に至る。

ちなみに下の名前で呼ぶのは、撮影が終わったと共に終わった。

「あんだね、この前の三日間、自分の着てた服覚えてないの？」

「DIO様とヘスティア様と『落ちろ！蚊トンボ!!?』の半袖Tシャツ一枚ずつと短パン3枚」

「自己評価何点？」

「……………92点かな」

「ごめん、聞き間違えたかも。もう一回言ってくれる？」

「93点」

「なんで増やしてんのよ。アホか」

「お前言い過ぎだろ」

「なんで『これはヤバイ』って思わないのよ」

「だからさつき説明したろ」

「あんな穴だらけの理論は不採用よ」

速水さんは俯いてため息をついた。ため息つきてーのはこっただつつの。

「……………まあ良いわ。どうせあんたの事だから、大体そういうクソみたいなトンデモ理論を話すのは分かった」

「お前今クソって言った？ホントにアイドル？」

ぷそ始めてからこいつ口悪くなったな……………。

「とにかく、強制的にあなたに色々と服を着させる事にしたわ」

「ふっ……………ナメられたものだな。貴様如き最近フォースのLv50超えた程度の者が、我がLv75ブレイバーに勝てるんでも？」

「いやぶそのレベル関係ないでしょ……………。けど、そういうと思って、ちやんとこちらも兵士を揃えておいたわ」

速水さんが指を鳴らすと、何処からか女性が三人現れた。北条さん、渋谷さん、それとなんか知らない人の三人である。

「……………なんで？何処から？」

「なんか、撮影の打ち上げの時に凜ちゃんと奈緒ちゃんも同盟に参加しちゃってね。だけど、奈緒ちゃんは予定が合わなくて来れないみたいだったから、誰か連れてきて？って凜ちゃんに頼んだら卯月ちゃん連れて来ちやっつたみたい」

「島村卯月です、よろしく願います」

「あ、どうも……鷹宮千秋です」

なんかこんな簡単にアイドルと知り合いになっても良いのだろうか。しかも自宅に来てんだよ？プライベートで。ファンにバレたらメタメタにされる気がする。

「にしても、ホントにカッコ良いですね。奏さんが言ってた通りです」

「え、あつ……」

島村さんは背伸びして、俺の顔を至近距離で見つめて来る。俺は仰け反って避けた。

「ち、ちよつと卯月……！初対面で近いから」

「あ、ああ。そうですね。すみません」

渋谷さんが注意すると、島村さんは素直に謝った。

「千秋くんって呼んでも良いですか？」

こいつ謝った意味分かってんのか。

「……や、別になんて呼んでも良いですけど」

なんか下の名前で呼ばれるの初めてで照れ臭くて、頬を掻きながら目を逸らすと、速水さんに机の下から脛を蹴られた。とりあえず、今察したのは、島村さんには俺と鷺沢さんの関係は伏せてる事、そして速水さんのキック力はキャプテン翼並みの威力を持っている事。

「……痛いんだけど」

「あんたねえ、文香がいるのになんで普通にデレデレしてんのよ……」

(小声)

「してねえよ」

「してたわよ。スケベ」

どういう意味だよ……。仕方ないだろ。俺の事、下の名前で呼ぶのなんて親含めていなかったんだから。親からはホークンと呼ばれてた。お前らもホークンだろうが。

速水さんが話を進めた。

「……まあ、そういうわけで、この子に彼女ができるかもしれないから、みんなで服を買いに行きましょうか」

「おおー！おめでどう、千秋くん！」

「卯月、彼は人と話すの苦手だから、あまりグイグイいかないであげて」

「あ、そ、そっか……。ごめんね、千秋くん」

「うん、だからね卯月？」

渋谷さんが島村さんに何か説明する中、北条さんが微笑みながら聞いてきた。

「それで、どんな服が良いの？」

「半袖短パン」

「ポケモントレーナーか。考えなさいよ少しは」

「いやマジで。夏なのにシャツとか長ズボンとか着込むの絶対嫌だもん」

「ああ、奏の言う事がよく分かった。私達で決めよっか？」

「おい、どういう意味だおい」

「じゃ、行きましようか。とりあえず、服屋に行つて決めましよう」

待てお前ら。勝手に決めんな。先に行くなおい。

「あ、渋谷さん。みんな行っちゃいましたよ」

「そう。卯月、行くよ」

渋谷さんは先に行つた二人に続いた。残つた俺と島村さん。とりあえず、俺も行かなきゃいけないので、島村さんに声を掛けた。

「し、島村さん……。みんな行っちゃつたんで、行きましようか」

「……………」

「島村さん？」

「…………ち、千秋さんって、その……芸人さんなんですか？」

「渋谷ア！お前何を言つた!?？」

×俺は慌てて後を追つた。

×

×四人のアイドルと俺は近くのアウトレットに出かけた。よくよく考えたらすごいな、この現状……。

俺はなるべく下を向いて、この前ノリで買ったメイジンカワグチのサングラスを装着して四人の後を歩いた。

「…………あの、鷹宮くん？なんで下向いてるの？」  
不審に思ったのか、北条さんが聞いてきた。

「…………周りの人に顔を覚えられないようにだよ」  
「はっ？」

「変装してるとはいえ、アイドル四人と一緒に歩いてる男ってなんだよ。もしお前らの正体バレたらヤバイだろ」

「大丈夫だよ」

渋谷さんが口を挟んで来た。

「女の子四人も連れてたら誰だつて友達だと思うでしょ」

「そうですよ。私達も友達って言いますから」

「最悪、プロデューサーの名前出せば誤魔化せるわよ」

それに続き島村さん、速水さんと言った。

「いや、俺は一時的なバイトで、今はあのプロデューサーとは何の関係もないだろ」

「プロデューサー、あなたの事かなり気に入ってるわよ？」

「はっ？」

「ほら、この前見た消失。あの件でかなり感謝してたし、アイドル達に興味バレた事によってさらに仲良くなれたみたいだから、もうプロデューサー舞い上がっちゃって」

「…………マジでか。やはりアニメは世界を救うな」

散弾銃の飛び交う戦場に支給品でテレビとごちうさのBlu-rayとか支給されたら、あらゆる戦乱は解決されそうだからな。

しみじみ感心していると、島村さんがキョトンと渋谷さんに聞いた。

「ねえ、凜ちゃん。消失って何？」

「ほら、この前カラオケ行った時に私、一曲アニメ映像の曲歌ったでしよ？あれの映画」

「あー、あの97点取ってた曲だよ。涼宮ナントカっていう奴？」

「涼宮ハルヒの憂鬱」

「う、うん…………なんで怒ってるの？」

嗚呼…………頼むから広めるのやめて渋谷さん。俺の所為になる気がしてならないから…………。つーかお前、一週間でオープニング歌える



ようになるとかイカれてんな。

渋谷さんの「涼宮ハルヒの憂鬱講座」を島村さんが真剣に聞く中、北条さんが口を挟んだ。

「でも、アレ面白かったよねー。テレビシリーズも見たいなあ」

「……北条さんはアニメ見てる人じゃないの?」

「あー私は昔のアニメだけだから、見たの」

「SEEDについて熱く語ってなかったか?」

「あれはほら、古いガンダムとかよく見てて、そのままガンダムはとりあえず全部見てるんだ」

「ふーん……」

「あ、なら面白いアニメ私知ってるわよ?」

「何?」

「Angel Beats!」

「ああ、Angel Beats!好きならオススメすべき作品たくさんありますよ。鍵作品って言うんですけど……」

「何それk w s k」

「あ、じゃあみんなでディスク屋行かない?DVDとか売ってるでしょ」

『良いね!』

北条さんの提案で、全員でディスク屋行く事になった。つーかお前ら、何しに来たんだよここに。まあ、別に良いけど。

お目当ての店に到着し、真っ先にアニメの場所に向かうこいつらをアイドルだとは、誰も思わん。こうして見ると、こいつら割と残念アイドルなんじゃねえの?

ま、この人達の気持ちは分かるけどな。アニメってのは「アニメ」という単語だけで敬遠されがちだが、基本的にはどれも面白い。偏見をなくし、素直な気持ちで見れば誰だって染まる。

しかし、今の現状をドラマ化したら超売れそうだな。

↓

「感染アイドル」

C A S T

鷺沢文香 鷹宮千秋 速水奏 橘ありす 塩見周子 大槻唯 宮本フレデリカ アナスタシア 渋谷凜 北条加蓮 神谷奈緒 プロデューサー

くあらずじく

どこにでもいる超絶美人の大学生天使巨乳アイドル「鷺沢文香」は、ひよんな事から謎のオタパイア「鷹宮千秋」と出会い、オタク化してしまう死の呪い「俺ガイル」を掛けられてしまう。

「俺ガイル」は「Angel Beats!」「涼宮ハルヒの憂鬱」などと形態を変えてその人に合うアニメの形になって感染していく呪いだつた。

そんな中鷹宮は鷺沢に恋に落ちてしまう。果たして、鷹宮の運命は!??

1

……………最後の方、雑過ぎるわ。ていうか全然オタク関係ないし。しかも俺が恋に落ちちやうのかよ。俺の運命を追ってどうすんだよ。主人公誰だよ。

そんな事を考えながら、真面目な顔でアニメを選ぶ四人を眺めてると「あつ」と速水さんが声を漏らした。

「ダメよ。私達何しにきたのよ」

「……………あつ」

お前ら素で忘れてたんかい。マジでバカなんだな。

とりあえず、アニメは後で決めようという事になり、俺は服屋に連行された。

「どんなのが合うかしら……。外見は割とジャーズ系だし、やっぱり最近の高校生に合わせた方がいいかしら?」

「でも、鷹宮くんのイメージに合ってた方が文香さんもしっくり来ると思うんだけど」

「……………となると、オタクに見えないオタクの雰囲気を残しつつのイメージか……………」

「……………それ結局、オタクじゃない普通の高校生ですよね?」

四人は服屋の中で真剣に俺に合う服を選んでくれている。どこま

で良い人達なんだよ。まあ、俺の意見を聞くつもりは一切無いみたいなんだが。

しかし、そこまで真面目に選ばれると俺も何かしなきゃって感じになるんだが……俺はマジでファッションには疎いからな。余計な口は挟まない方が良いかもしれない。特に着てみたい服とかもないしな。

「とりあえず、テキトーに選んでテキトーな服着せてみよっか」

「そうですね。案外、似合う服見つかりそうですし」

一気にぞんざいになったな。いや、でも案外服選ぶのってそんなもんなのかもしれないし、黙っておこう。

四人は散開して、各々で服を選び始めた。俺はどうしたら良いのかわからず、かといつて選んでもらってる間にスマホゲームしたり、店の前で座ってるのも申し訳ないので、とりあえず試着室を確保しておくことにした。何も持たずに試着室にいると不審に思われるかもしれないので、テキトーなTシャツを一枚持って行き、試着室の中に入った。

小声で「なるほど……」とか呟きながら、カーテンも閉めずに鏡と向かい合っている。

「……………」

なんか暇だったのので、とりあえず構えてみた。構えるといっても、構えるところから始まるのだが。

「トオウツ!!?」

周りに人がいないのを確認してから、声を裏返して両手を上にあげて跳んだ。着地すると、両手を揃えて左斜め上に向けた。

「変身ツ、グローブ!!?」

グローブを嵌める仕草をした。

「変身、マスクつ……!グエツ、グウツ……!ふう、」

続いて、マスクを装着し、紐をクビに結びつける仕草をした。終わると、両手を前に下げてからダランとした後、両手を広げた。

「ドウダイ女史、カツコ良イダロウ!!?」

そのままノリノリで12thのモノマネをした。

「上ハ混乱シテイルヨウダナ……！6thガ千ノ視覚ヲ持ツ者ナラバ、私ハ千倍ノ聴覚ヲ持ツ者！死ネ！死ネ！死ネ！邪悪ノ教団、討チ亡……」

ノリノリで片手を腰に当て、もう片手を広げて前に向けて横を見ると、すごい怯えた目で島村さんが俺を見ていた。

「あつ……………」

「あつ……………」

…………ヤベエ、見られてた。全部。見ろよあの目。不審者を見る目だぜ。…………いや待て。落ち着け。奴の口を塞いでしまえば、何事もなく全てにカタが付く(錯乱)！

俺はポーズを決めて襲い掛かった。

「正義トハ勝ツ事！例工差シ違エテモ悪ヲ倒ス!!？」

「きやああああ!!？」

悲鳴をあげて逃げ出す島村さんと、追い掛ける俺。その直後、俺は横から速水さんに蹴り飛ばされた。

「あんた何やってんのよ。ホント殺すわよ。……大丈夫？卯月ちゃん」

「……………は、はい」

「……………すみません。少しテンパってました」

「あんた、罰として今日はここに居る全員、レベル50以上になるまでPso2手伝うこと。良いわね？」

「えっ？ぜ、全員……………」

「なんかさつき、pso2の話したらみんなやる気になっちゃって」

「……………あの、明日、デート……………」

「自業自得よ」

あんた手伝いたいのか邪魔したいのかどっちだ。

「さ、服持ってきたから。着なさい」

いつの間にか全員集まって来ていて、服の枚数はザッと12枚くらいはある。

「……………これ、全部？」

「そうよ？選んでもらってるんだから文句言わない」

「……………はい」

×俺は試着室に入った。

×全部着替えたが、四人は難しい顔をしたまま何も言わなかった。なんだよ……………その顔。文句あんのか？

「……………ダメなのか？」

「いや、ダメっていうか……………」

「似合っではいるけど、どれもじっくり来ないのよね」

「まあ、告白に支障は出ないと思うけど……………」

全員、自分達の持ってきた服を戻して、頭を悩ませていた。ほんとうすいません、僕のために。

「やつぱり、千秋くんが選んだ方が良いんじゃないですか……………？」

「無理よ、卯月ちゃん。どうせ、アニメのTシャツとか言い出すわよ」

「あ、あははっ……………ん？アニメの……………？」

「卯月？」

すると、島村さんはポンスと手を打った。

「そうですよ。アニメのキャラの服です！」

「はあ？」

「ダメよ。彼女を作るデートなのに、アニメのキャラが描いてある服なんて……………」

「違いますよ。アニメのキャラクターが着てる服を着れば良いんですよー！」

「コスプレってこと？」

「いえ、ドラゴンボールみたいなコスチューム？ではなく、アニメのキャラの私服です。それなら、コスプレになりませんよね？」

「……………確かに」

「それ良いかも！」

いや、よかないだろ。なんで名案です、みたいな感じになってんの？

「でも、そんな都合よくキャラの服が見つかるかよ」

「色違いがあったりするかもよ？」

「それで良いのかよ……………」

まあ、選んでもらってる立場で文句は言えないが……………」

「じゃ、好きなキャラ見せて？」

北条さんに言われ、俺はスマホに入ってる写真を見せた。まず一枚目、羽黒改二。

「女の子じゃない」

2枚目、古鷹改二。

「だから女の子だってば。てかなんでその人達砲門持ってるの？」

3枚目、リユール・リオン。

「性別直す気はゼロなの？」

「だって仕方ねーじゃん。俺、基本的に女キャラのが好きだし」

「じゃあ、男キャラで出して」

言われて、俺はまた画像を探した。1枚目、アムロ・レイ。

「なんで宇宙服なのよ」

2枚目、キンケドゥ・ナウ。

「だーかーらー、しーふーくー」

3枚目、一色慧。

「裸エプロン……………」

「鷹宮くんって、そういう趣味なんだ……………」

「お前らが好きなキャラ出せとか言うからだろ！」

血管が遅れて切れるほどに早く鰻捌く人だぞ！カツコイイに決まってるだろー！いや、ホモじゃないけどね？

「……………やっぱりダメね、鷹宮くんじゃ……………」

「私達でなんとかしましょう」

……………なんか母ちゃんに怒られてる気分だ。四人の冷たい態度にシヨボンとしてると、渋谷さんが「んっ？」と声を漏らした。

「どうしたの？凜」

「いや、あそこに掛かってる服。誰が持って来たの？」

「さあ……………」

あ？テメエらで持ってきた服くらい覚えとけや、と思つてその服を見ると、俺が最初にテキトーに持ってきた服が下がっていた。

「……………あ、それ俺」

『えっ……………?』

おい、お前ら。なんだその反応。俺だって服くらい持って来るわ。「いやー、試着室にいるのに服持ってないと不自然かなーって思っさ、テキトーに取ってきた」

「……………じゃ、その服に合わせましょう」

「はっ?」

速水さんが言った言葉に、俺は声を漏らした。何言ってるの?俺がテキトーに選んだ服だよ?

その俺の問いに答えるように速水さんは言った。

「どんな理由があれ、あなたが選んだものなら、文香はそれを着て来て欲しいはずだわ」

「おい待て。なら服なんて買わなくていいだろ」

「あなたの買った服なんて、どうせ親御さんが選んだものでしょう?」

「……………」

仰る通り。

「あなたが人生で初めて選んだキャラ物じゃない服でデートできるのよ。良かったじゃない」

しかもお前それ煽ってるんだろ。喧嘩なら買うよ?ん?

「まあ、コーデイネートは私達に任せなさい。ちゃんとその服に合うように、選んであげるわ」

との事で、四人は張り切って服を選び、無事に明日の勝負服は決まった。ちなみに、バイト代の三分の一が吹き飛んだ。洋服って高いんだな。

トラウマは簡単に乗り越えられないからトラウマなのである。

デート当日。俺はみんなに選んでもらった服を着て、駅前で待機していた。かれこれ、もう3時間は待っている(集合時間はAM9時)。今日はいよいよ、鷺沢さんに告白する日である。俺はかなり緊張しているが、それまではせめて楽しもう。

「……お待たせ致しました」

声を掛けられた。やって来たのは、鷺沢文香大天使様。私服可愛いなあ、マジであんた二次元の人なの？

「待ってないですよ、全然」

「……あの、目の下にクマが見えますけど、寝てないのですか？」

「ちゃんと寝ましたから。大丈夫です」

「……そうですか？」

「さ、行きましようか」

「……は、はい」

俺達は駅に入り、改札を通った。行き先はデ○ズニーランド。ありきたりではあるが、やはりここだろうな。行ったことはないが、下調べも完璧だ。コミケの時のようなミスはしない。ただ、一つ問題がある。俺、デ○ズニーのジェットコースター大丈夫かな。ユニバの奴乗ってジュラ○ックで泣きそうになったんだよな。少しチビって、アトラクションが終わると共に、友達にバレないように走って誤魔化しながらパンツを買いに行った過去が……あ、無理。これ、トラウマ。トラウマを全力で打ち消しながら、俺は電車に乗った。席は幸いにも空いていたので、二人してそこに腰をかけた。

「……鷹宮くん、楽しみですね」

「……」

「……鷹宮くん？」

「……っ？は、はいっ？」

「………どうかしたんですか？」



「いえ、なんでもないです」

「……あの、眠いなら目的地に着くまで眠っていても構いませんよ。」

「いやいやいや。大丈夫ですからマジで。……ふわあ」

「……欠伸してるじゃないですか」

「いや違うんですよ。今のは『あくび』という技で、1ターン後に相手を眠りに誘う……」

「…鷹宮くん」

俺の言い訳を遮って、鷺沢さんは真面目な顔で言った。

「……デ○ズニーランドを楽しむためにも、今は寝て下さい」

「……や、でも、そしたら鷺沢さん退屈になっちゃいますよ」

「……私は鷹宮くんの寝顔を見ていれば、決して退屈はしませんから」

「……へっ?」

「……あっ」

口が滑った、みたいな感じで声を漏らした後に、顔を赤く染める鷺沢さん。おい、それどういう意味だ。

「……俺の寝顔ってそんなブスだったか……」

はあ……イケメンだと思ってたんだけどな……。地味にシヨツクを受けてると、鷺沢さんが俺の事を睨んでいるのに気付いた。

「……なんですか?」

「いえ別に」

「……怒ってます?」

「怒ってません」

「……あの、すみませ」

「いいから早く寝なさい」

この人、怒ってる時はすぐに返事して来るよな。そういうところも可愛いんだけど。

×俺は仕方なく、お言葉に甘えて目を閉じた。

×

×乗り換えては寝て、乗り換えては寝てを繰り返して、舞浜に到着した。チケットを二人分購入し、いざ入園。

「……………おお、スツゲ」

中に入ると、割と別世界だった。外国のような街並みを再現したようなお店が広がっていて、日本の要素は皆無だった。

「…ふわあ……………」

鷺沢さんも感動しているようで、目を輝かせて辺りを見回している。

「……………鷹宮さんっ、私あのお店入りたいですっ」

「……………分かりました。行きましようか」

スゲエ、はしゃいでるよ鷺沢さんが。ギャップすぎて可愛過ぎる。何この子、天使か？あ、天使か。

鷺沢さんの指差す店の中に入ると、まあ当たり前だけどお土産製品や、よくCMとかで付けられているミ〇キーの耳を剥ぎ取ったカチューシャがたくさん並べられていた。

鷺沢さんは少年の目をしたまま、店の中を見回った。けど、なんだ？異様に見回るペースが早いな……………。

「どうしたんですか？」

聞いてみると、鷺沢さんは困ったように呟いた。

「……………本が売ってないです」

そりやそうだよ君。何を期待してんだよ。

「や、ここお土産とか、園内で付けたりするものを売ってる場所なんで……………ていうか、なんで本が売ってると思ったんですか」

「……………だっってお店、ですよね？」

「はい」

「……………大体のお店なら、せめて漫画本だけでも売ってませんか？普通」

「ごめん、そこちよつと難しいです」

「……………本が無いのでしたら、用はありません。あ、でも奏さん達にお土産買いたいのので、帰りに寄っても構いませんか？」

「いいですけど……………」

この人も大概冷めてんな……………。仕方ない。こういう所の楽しみ方を教えてやるか。

「鷺沢さん、少し待っててもらえませんか？」

「……何か買うのですか？」

「まあ、一応」

「……分かりました。私は外で待機しています」

「……ただこの店に興味なくしてんだよ。まあ、別にどっちでも良いけど。」

「なんか少し待たせるのが申し訳なくなり、なるべく早めに買い物を買わせて、外で壁に寄つかかっている鷺沢さんと合流した。」

「鷺沢さん、お待たせしました」

「……あつ、はい」

「こつちに振り向いた直後、俺は鷺沢さんの頭にミ〇ーマウスの耳をもぎ取ったカチューシャをはめた。」

「きゃっ……っ？」

「頭に手を当てて、何が自分の頭部に装着されたのかを確認する鷺沢さんを、俺はスマホで写メ撮った。うわっ、我ながら完璧なチョイスをしたな。可愛過ぎて鼻血出そう。」

「で、その写真を鷺沢さんに見せた。」

「……こうやって、楽しむものらしいですよ。デ〇ズニーは」

「……わぁ」

「それを見て、鷺沢さんは一瞬嬉しそうな顔をしたが、すぐに慌てたような表情になった。」

「……って、ち、ちよつと！勝手に撮らないで下さいっ」

「撮っちゃったもんは仕方ないでしょう。さ、なんか乗りましょう」

「あつ……もうっ……」

「不満げな声を漏らした割に、楽しそうな表情で微笑んだ後、鷺沢さんは後ろから俺の手を取った。」

「っっ」

「……行きましょう」

「……可愛いなあ、この人。1400円でこの鷺沢さんが見れたなら安いものだ。……しかし本当に俺、今日この人に告白するの……。なんか緊張して来たな……。」

いかんいかんいかん、その時までは楽しむって決めたら。アホか俺は。何か乗り物に乗って気を紛らわそう。

「……………まず何乗ります?」

「……………そう聞かれましても、私はこういう場所には疎いもので……………」

「あ、そうですね」

俺もだが。

「とりあえず、有名な奴から乗っていきましようか」

「……………そうですね」

と、いうわけで、俺達は近くの有名な乗り物、ビッグサ○ダーマウンテンを目指して歩き出した。お土産屋の所を抜けると、まず見えたのはシン○レラ城だった。

「わあ……………つーた、鷹宮くん!見てください、お城ですよお城!」

いつになく興奮した様子で、鷺沢さんは小走り気味に城の方へ走った。途中で花畑みたいな場所に当たるため、そこで止まって、身を乗り出して城を眺めた。

「……………すごいですね……………」

「……………はい。ちよつと驚いてます」

「……………これなら、ジャブローのアトラクションが出来るのも時間の問題かもしれませんね……………」

「ごめん、それはちよつと意味わからないです」

どんだけ興奮してるんだよ。

「……………あの中って入れるんですか?」

「いや、前まではアトラクションだったらしいんですけど、今は運営終了したみたいです」

「……………そうでしたか。それは少し残念でしたね」

「や、でも似たようなアトラクションあるんで。そっちなら行けますよ。」

「…ホントですか?」

「後で行きます?」

「はいっ!」

よし、言質は取った。スマホの録音モードをオフにすると、俺は地

図の「ホーンテ○ドマンション」の所に丸をつけておいた。

そんな話をしながら、ビッグサ○ダーマウンテンに向かい、列に並んだ。飲み物もちやんと用意してあるため、水分の問題はない。

問題は並び時間の方だが、俺達オタクにとって、話題というのは尽きるものではない。好みのアニメが同じなら尚更だ。

「……鷺沢さん」

「……なんですか？」

「ストライク・ザ・ブラッド、見ましたか？」

「……」

会議の時間が始まった。と、思った直後、鷺沢さんは顔を赤くして俯いた。

「……えつち」

「えつ、なんでっ？」

「……あの小説は1巻まで読めなかったです」

「なんでですか。結構面白かったと思いますけど」

「……だ、だって！主人公がっ、そのっ……姫柊さんの首に噛み付いたり……姫柊さんも、服を脱いで興奮させたり……」

「そうしないといけなかったんだから仕方ないじゃないですか」

「……でも、その……恥ずかしくて、頭が真っ白になっちゃって……」

「……」

まあ、合うものと合わないものがあるよなあ、ラノベには。しかしそうになると、少し申し訳なかったかもしれん。話題を変えるか。

「じゃあアレは？けいおん！とか」

「……はい、アニメ見ました。とても面白かったですよ。ああいうアニメもあるんだなと思いました」

「ああいうっつて？」

「………なんと言いますか、ほのぼのした感じの女子高生の生活そのまんまみたいな。でも、三年生の学園祭のライブで皆さんが泣くところは、私も泣いてしまいました」

「あーそこ俺も泣きましたね。たまにああやって感動させて来るのズ

ルいですよね」

「……………ちなみに、推しキャラは？」

「唯」

「……………あずにやんですよー！」

「お、おう……………」

鷺沢さんが「にゃん」て言うときすごく可愛いな……………」

「まあ、鷺沢さんが梓の方が好きならそれで……………」

「いいえ、鷹宮くんがあずにやんの方が可愛いって言うまで許しませ  
ん」

ええ……………なんで共有したがるんだよ……………。別に人にはそれぞ  
れ好きなタイプとかあるんだから良いだろ……………。大体な、そこまで  
開戦の狼煙を焚かれるとき……………。

唯（推し）の方が可愛いって覆したくなる  
だろツ!!?」

「いや唯のが可愛いです。バカと天才は紙一重をあそこまで表現した  
可愛い子はいませんか」

「いいえ！でも少しあざといです！ああいう、真面目系歳下の女の子  
の方が可愛いんです！」

「カムバツク！私！って真面目か？」

「まっ、真面目だからこそ出ちやった言葉です！」

×この論争、乗り物に乗る直前まで続いた。

×

×ビッグサンダーマウンテンを乗り終え、論争は何処かへと消えて  
行った。現在、ベンチで休みながら、感想を言っていた。

「いやー、面白かったですね。意外と」

「……………は、はい……………」

結構、体力を使ったのか、鷺沢さんはベンチの背もたれにだるーん  
と寄っ掛かっている。

「あ、飲み物いりますか？」

「……………すみません、いただきます」

リュックから、凍らせておいたスポドリを取り出し、鷺沢さんの頬

に当たった。

「ひゃっ?」

「どーぞ」

「も、もうっ!何するんですかっ!」

文句を言った割に、素直に飲み物を受け取り、凍ったスポドリを飲み始めた。

「……………んっ、ふう。ありがとうございます」

「あ、それあげますよ。あと二本、鞆の中に入ってるんで」

「……………じゃあ、いただきます」

鷺沢さんは鞆の中に飲み物をしまった。まあ、君がぶっ倒れないようにするためのものなんだけどね。流石に3本もあれば大丈夫だろう。ここでも飲み物は買えるし。

「もう少し休んでから、次に行きますか?」

「……………いえ、時間が勿体無いので、次に行きましょう」

「そ、そうですか。でも、無理しないで下さいよ」

「……………大丈夫です」

まあ、確かにまだ顔色悪くないしな。万が一の時は、どっかの店にでも入って涼めば良いか。

「次は何乗ります?」

「……………んー……………あっ、あれ。あれが良いですっ」

鷺沢さんの指差す先には、スプ○ツシユマウンテン。おい、あれ確か最後の最後で水浸しになる奴じゃ……………いや、まあ夏には持って来いなんだらうけども。

「マジですか?」

「……………はい♪」

そんな楽しそうに答えんな。行くしかなくなるだろ。

「分かりました。行きましようか」

「あっ……………手……………」

頷いて二つ目の山に向かおうとした直後、鷺沢さんから切なそうな声が聞こえた。

「……………」

「……………」

控えめに俺に差し出された手。俺はゴクリと唾を飲み込むと、その手を取った。

「……………これで良いですか」

「……………は、はい」

恥ずかしがるくらいならそんな声上げないでお願い。

手を繋いで、二人でスプ○ツシユマウンテンに向かった。二連続絶叫系か……。気を引き締めなければ。

すると、その道中に、リスの着ぐるみの人が立っていた。

「あつ……………」

「おつ、なんだっけ？どっちだっけあれ」

「……………すみません、私もどっちがどっちなのかはイマイチ……………」

ジーツとチ○プだかデ○ルだか知らないが、それを見つめる鷺沢さん。

「……………写真撮りますか？」

「……………いえ、別に。ただ、暑そうだなーと思って見てただけですのでもこの人意外とその辺は冷めてんのかよ……………。まあ、その意見には俺も全面的に同意だが。」

着ぐるみをスルーして、俺と鷺沢さんは目的地に到着した。ここも長蛇の列なので、面白いジ○リ作品について語りながら順番を待った。

列は室内に入り、少しクーラーが効いて来た。

「……………面白い内装ですねー」

「まあ、デ○ズニーなんでね。少しでも世界観に合わせようとしてるんでしよう」

「……………鷹宮くんはそういうの嫌いなんですか？」

「大好きですよ？ただ、こういう内装はユニバのハリポタのがすごいですからね。どうしても見劣りするとかいうか」

「……………ああ、最近オープンしたあれですか？ニュースで見ました」

「最近でもないんですけどね」

もう二年くらい経ってるか。時の流れとは早いものだ。ハリポタ



ができて、速攻で行ったからなー。中学の時は剣道部に友達いたから、一人で大阪まで行くような寂しいことにならなかつた。懐かしいなあ、誰一人連絡は取ってないけど。

すると、ようやく乗り物に乗る順番がやって来た。何を血迷ったのか、俺達は一番先頭。いざ、出発進行。

ガタンツと動き出し、ゆつくりと洞窟内部を進んで行く。うさぎときつねみたいな奴の人形が置かれていて、それを見かけるたびに鷺沢さんが感情移入してる可愛い。

にしても、遅いなこの乗り物。乗り物に関しては、ランキングで軽く調べただけだが、これが上位に食い込んでた意味が分からん。

そんな事を思ってた時だ。グラツと車体が揺れた。何事かと思つて前を見ると、ジユラ○ツクの時と同じような下りレーンが目の前にあつた。

「っ!?っ!?っ!?っ!?」

トラウマ再来ッ!!?

『キヤアアアアアアアアア!!?』

「ギヤYYYYYYYYYYYY!!?」

一人だけ異質な叫び声と共に、俺は急降下した。

ムードやシチュエーションよりも、まずは思い出から。

ベンチ、俺はそこで鷺沢さんに抱きしめられながら、慰めてもらっていた。オツパイの感触が気にならないほど、俺は号泣していた。

「……………もう、落ち着きました?」

「……………はい。すみません、取り乱して」

超泣いた。我ながら情けない。鷺沢さんもかなり引いてる気がする。でも怖いものは怖いんだよなあ……………。

「……………ジェットコースターダメなら言ってくだされれば良かったのに」「や、ジェットコースターは平気なんです。ただ、途中までは普通なのに、突然下りになるジェットコースターがダメなんです」

「……………」

さすがにチビる事はなかったが。にしても、やっぱり幻滅されたよなあ……………。恐る恐る、鷺沢さんの顔を見上げると、少し嬉しそうな顔をしていた。

「……………鷺沢さん?何喜んでるんですか」

「……………へっ?あ、いや喜んでるわけじゃないですよ?ただ、その……………怖がってる鷹宮くん、少し可愛かったなって」

「……………」

カアツと頬が熱くなった。

「……………あつ、赤くなった」

「っ! も、もう大丈夫なんです。次、行きましょう」

「……………照れなくても良いんですよ?」

「い、いいから行きましょう!」

「……………ふふっ」

畜生畜生畜生!まさか、鷺沢さんにいじられるような日が来るとは……………!下調べが甘かったな。

誤魔化すように俺は先に歩き出すと、鷺沢さんが俺の後ろから手を取り、隣を歩いた。

「……今日は1日、こうしててあげましょうか？」

「……もう勘弁してくれませんか」

× 割と意地悪だなこの人……。二人で手を繋いで歩き始めた。

×

その後、ちよくちよく休みを挟みながら、イツツ・○・スモールワールド、プー○んのハニーハント、ミ○キーの家、空飛ぶ○ンボと、回りに回った。まあ、興奮した鷺沢さん可愛かったよね。結婚したい。特に、イツツ・○・スモールワールドの人形を見て、超興奮した。「ここに住む！」とか言ってた。

で、いよいよ日も落ちて来たのでホーンテ○ドマンション。到着した直後、鷺沢さんは凍り付いた。

「……………これ、もしかして……………」

「はい。ホラーだそうです」

「……………」

あれ、思ったより冷静だな……………。

「こ、怖くないんですか？」

「……………あ、それは大丈夫です。本でよく読んでますし、霊というものはあまり信じてませんから」

「……………なんかアテが外れた気分です」

「……………私を怖がらせるつもりだったんですか？残念でした」

「まあ、良いです。行きましょうか」

鷺沢さんと手を繋いで、ホーンテ○ドマンションに向かった。列に並んでぼんやりしていると、俺の手を握る力が強くなった。心なしか、手が汗ばんでて湿っている。

「……………鷺沢さん？」

「……………」

「……………」

もしかして、この人……。俺は、鷺沢さんと肩をくっつけた。

「失礼」

「っ？な、何を……………」

肩と肩がくっ付き、撮影の時にあった神社の時のように鷺沢さんか

ら鼓動が伝わって来た。この人、もしかして……………。

「緊張してますか？」

「……………」

「……………怖いんですか？」

「……………怖くはないですっ」

「……………」

怖いんだ。そう強がるなよ、からかいたくなるだろ。俺は鷺沢さんに「失礼します」と言っつて手を離すと、鞆から飲み物を取り出して一口飲んだ。

「鷺沢さん、飲み物まだありますか？」

「……………あつ、はい。まだ大丈夫だと思います」

鷺沢さんは答えながら、一応自分の飲み物を確認した。俺は、その隙に自分のペットボトルに包んであるタオルの中の保冷剤を一つ取っつて、ポケットにしまった。

そのまましばらく待機し、いよいよ室内に入った。それに伴い、霧囲気が出て来て、若干寒気すらして来た。……………良い頃合いだな。

俺はそーつと鷺沢さんの反対側に手を伸ばして、保冷剤を首筋にあてた。

「ひゃあああああつ!?？」

ビクビクンツと反応しながら、鷺沢さんは前に倒れ込みながら後ろに振り返った。お陰で、周りの人はすごいこっちを見た。

ビクビクした涙目で鷺沢さんは俺を見上げた後、俺の手元の保冷剤を見た。うん、すごくやり過ぎた。鷺沢さんはプクーツと頬を膨らませた。

「あつ……………いやつ、鷺沢さん……………。これはっ……………！」

「っ……………！」

周りの人に悲鳴を聞かれた恥ずかしさから、段々と顔を赤くしている鷺沢さん。そして、怒った口調で言った。

「……………鷹宮くんなんてもう知りませんっ！」

立ち上がろうとした直後、鷺沢さんはガクツとその場で後ろに再び尻餅を着いた。

「……………？」

「……………」

「……………ど、どうしました？」

「……………こゝ、腰がつ……………抜け、ました……………」

もはや怒る気すら無くなったのか、鷺沢さんは顔を赤くして俯いた。

×

×

乗り物には乗らず、俺は鷺沢さんをおんぶして列から外れ、出口に向かつていた。鷺沢さんの正体がバレて、帰らなければならなくなっ

てしまった。

……………なんかすごい気まずい。そして申し訳ない。だって、俺の事超怒ってる人をおんぶしてるんだぜ？しかも、俺の所為で帰宅しなければならなくなってしまった。もはや泣きそうなんだけど。

……………とりあえず、謝らないと。

「……………すみませんでした、鷺沢さん」

「嫌です」

「……………」

おぶられてるのにツンツンした様子の鷺沢さんの返事を聞いて、俺は肩を落とした。嗚呼、どうしよう……………これから告白しなければなら

ないのに、怒らせてしまった……………。変な事するんじゃないかな……………。

外では、ちょうどパレードが開催されていた。気になったので、俺は足を止めてパレードを見た。鷺沢さんもパレードに目を向けていた。

「……………」

スゲーなー。よくあんな風に着ぐるみで踊れるよなー。なんか感心するわ。まあ、今は感心するよりもどうやって鷺沢さんの機嫌を取るか、の方が大事なんだが。

しばらく、頭の中でどうするか考えてると、鷺沢さんがボソツと呟いた。

「……………綺麗、ですね」

「……………」

まあ、そうだな。クリスマスとかの頭の悪そうなイルミネーションが嫌いな俺でも、今日の前のキラキラテラテラしたパレードは嫌いじゃない。なんでだろうな。音がうるさい分、イルミネーションよりも不快なはずなのに。

いや、そんなの分かりきった事だ。そもそも、デ○ズニーすらリア充の聖地と言わんばかりで嫌いなのに、ここを選んだ。デートっぽい場所を選んだ、というのもあるが、やはりどこでも良かったんだろうな。何故なら、俺は鷺沢さんと一緒なら、何処でも楽しめる、そんな気がしていたからだ。

逆説的に言えば、俺は鷺沢さんと一緒になければ、どんな事でも楽しめないのかもしれない。あ、いやそれはないわ。この前、速水さん達と出掛けたのも、あれはあれで楽しかったし。

だが、それとは楽しさのベクトルが違う。そして、鷺沢さんと一緒にいる「楽しさ」は鷺沢さん以外とは生み出されない、そういう事なんだろう。

遠回しな言い方になってしまったが、現状の俺は、もはや鷺沢さん無しでは、この楽しみは味わえなくなってしまうているのだ。

なら、告白はその気持ちを言葉にして鷺沢さんに伝えれば良い。や、そんな簡単な話じゃねえんだけどな。まあ、その、なんだ。告白で伝えたい事は決まった。

俺は深呼吸すると、今なら謝れば許してもらえるかも、と思って背中  
中の鷺沢さんに声を掛けた。

「……………鷺沢さん」

「……………なんですか?」

少し怒った感じで聞き返して来た。まあ、そりゃ怒るのは分かるが怖いので少し抑えてくれませんかね……………。

「……………まだ、怒ってます?」

「当たり前です」

デスヨネー。いや、まあ正直あそこまでビビられると思ってなかったわけだが。俺はため息をついてから聞いた。

「……………嫌い、ですか。俺の事」

「……………そんなわけ無いじゃないですか。ただ、怒ってるだけです」  
「すみません、でした。まさか、あんな風になるとは思わなくて……………」  
「……………いえ、別に良いです。結果的にホラーのアトラクションを回避  
できましたから」

「……………やっぱ怖いんですか？」

「怖くないです」

……………まあ良いか。これ以上言ったらマジで嫌われそうだし。  
てか、今も若干俺の事睨んでるし。

「……………とにかく、次からは人前でああいう事するのはやめて下さい」

「……………はい。肝に命じます」

「……………帰りましょう。人が集まって来る前に」

「……………ホントに、すみません」

「……………もう、気にしないで下さい。あ、帰りにお土産屋さんだけ寄って  
も良いですか？」

「あ、どうぞ」

「……………鷹宮くんは外で待っていて下さいね」

「？　なんですか？　てか、腰は大丈夫なんですか？」

「……………大丈夫ですから、お願いします」

まあ、そこまで言われたら俺も頷くしかない。辺りを見回し、人が  
少ないのを確認してから言った。

「急かすわけではないのですが、早めをお願いします。鷺沢さんの正  
体はバレてしまいましたし、T w i t t e rとかで情報が出回ってて  
もおかしくないですから」

「……………わかっています」

鷺沢さんは俺の背中から降りると、店の中に入った。店の前で壁に  
寄りかかって待機していると、確かに早く戻って来た。

「速水さん達へのお土産ですか？」

「……………はい」

あ、俺もお礼に何か買っていった方が良いかな……………。や、でも鷺沢さ  
んの正体バレるし、後でデ○ズニーストアで買おう。

「……………帰りますか」

俺はそう言っていると、手を差し出した。鷺沢さんは微笑みながら「はい」と答えると、俺の手を取った。

××  
馱に到着し、俺は鷺沢さんと帰宅していた。なんだかんだ、楽しかったようで、帰り道は珍しくアニメではなくデ○ズニーの感想を言い合った。

二人で鷺沢さんの家に向かい、割と早く到着してしまった。

「……………鷺沢さん」

「? なんですか?」

「本屋に、寄って行きませんか?」

鷺沢さんの家のマンションの本屋。鷺沢さんの頭上に「?」が浮かんでいた。

「……………良い、ですけど」

「じゃあ、行きましょうか」

本屋に入った。中は随分と変わった。恐らく俺の所為だが、ラノベや漫画が随分と増えたし、ジャンプも売っている。

辺りを見回しながら、レジに向かった。レジには幸い、誰もいなかった。一度、深呼吸してから、俺は鷺沢さんと向かい合った。

「……………ふう、よし」

鷺沢さんは、未だに何も理解してないのか、困惑していた。よし、落ち着いた。俺はガラにもなく真面目な顔で口を開いた。

「……………鷺沢さん」

「……………あの、すみません。告白はいつしてくださるんですか?」

「……………」

「……………?」

……………怒るな、俺。今怒ったら全部台無しだ。

「……………あの、鷹宮くん?」

「……………」

「……………鷹宮くん?」

「少し黙ってて下さい」



「……………は、はいっ」

……………OK、落ち着いた。さっきの鷺沢さんの発言は全部無かったことにしよう。

「……………鷺沢さん。俺……………なんか、こう……………鷺沢さんがいないとなんかダメみたいです。……………まあ、つまり……………好きなんで俺と、付き合つて下さい」

「っ」

……………なんか緊張が混ざってあんまロマンチックじゃなかったな。でも、言いたい事は言えた。俺は、黙って返事を待った。鷺沢さんは、顔を赤らめたまま俺を見ていた。やがて、俯いた鷺沢さんはポツリと呟いた。

「……………よろしく、お願いします」

「よっしやああああああああ!!?」

昇竜拳バリのガッツポーズをした。マジか！俺の初彼女鷺沢さんか！マジでかああああああああああ!!?」

「嘘じゃないですよねっ?」『やっぱ嘘ー、何本気にしちゃってんの?』  
「みたいなオチないですよね!!?」

「……………ないですよ」

「ふおおおおお！俺もう死んでも良いや」

「そ、それはダメです!」

「表現ですよ」

マジかよ……………。俺の人生こんな風に転ぶなんて……………。ありがとう、俺ガイル……………。まあ、告白の出鼻は少し挫かれたけど。

もはや、ちよつと泣きそうなまである俺に、鷺沢さんが聞いて来た。

「……………あの、でも一つ聞いても良いですか?」

「? なんですか?」

「……………なぜ、ここで告白しようかと、思ったのですか?」

「?だって、ここは鷺沢さんと俺が出会った場所であり、俺達の間関係を繋ぐ大事な場所でもあるでしょう?だからですよ」

「……………」

舞い上がってるからか、少しカッコつけた表現になってしまった

が、嘘は言っていない。途中で帰ろうがどうしようが、俺はここで告白するつもりだった。

すると、鷺沢さんは微笑んで言った。

「……………そういうこと、でしたか。告白の言葉はアレでしたけど、ちやんと考えてくれていたのですね……………」

「まあ、一応ね」

「……………それでしたら、こちらからもプレゼントがあります」  
「？」

「……………左手を、出していただけますか？」

鷺沢さんは、さっきデ○ズニーで買った袋から、何かを取り出した。箱を開けると、それを俺の左手薬指にはめた。

「……………これは……………」

「……………指輪です。先程、おみやげ屋さんで購入しました」

「……………ミ○キーの、指輪？」

「…………………………」

カアツと顔を赤くしながら、鷺沢さんは俯いた。その鷺沢さんの首から、今朝まではなかったボールチェーンが掛かっているのに、俺は気付いた。

「……………まあ、まあ、流石に結婚指輪とか、そういうものではありませんが……………その、私からの記念品みたいなものでして、決して深い意味はなくて……………」

なんか言い訳する鷺沢さんの鎖骨の辺りに手を伸ばした。セクハラで殴られる覚悟はあったが、俺はどうしても気になったので、そのボールチェーンを引いた。モゾモゾと服が膨らみ、上に上がってくる。そして、出て来たのは指輪だった。ミ○ーの指輪。

見られた直後、顔を赤くする鷺沢さんだったが、抵抗はしなかった。もしかしたら、気付いて欲しかったのかもしれない。どれだけ可愛いんだよこの人。

けど、一つ気になるんだよなあ。

「……………あの、なんで、その……………ネックレスにしたんですか……………」

「……………そ、それは、その……………左手薬指に付けたままだと、周りの人に見

られてしまう気がして……」

何より、と鷺沢さんは続けた。

「……………左手薬指に付けるのは、鷹宮くんの手から、して欲しくて……………」

……………ああ、もう無理。可愛過ぎる。なんだこの子。乙女か。や、乙女だが。

そんな風に言われたら、俺も従うしかねーだろうが。

「……………すみません、鷺沢さん」

「へっ?」

俺は、鷺沢さんの首の後ろに手を回した。そして、ボールチェーンを外すと、指輪を分離させて、鷺沢さんの左手を取った。

「……………確かに普段はテレビ出たりおもて歩いたりするんで、こんな付けられないかもしれないが、今日だけでもお願いします」

俺はそう言いながら、薬指に指輪を嵌めた。まあ、俺が買ったわけじゃないんだけどな。

鷺沢さんは俺を真つ赤な顔で見上げると、ふわっと俺を抱き締めた。

「……………今日、泊まっていけませんか?」

「? 夏休みなんで暇ですけど」

「……………じゃあ、決まりですね」

×鷺沢さんにそう言われて、俺は部屋に上がった。

×夜中までずっと2人でアニメを見たりゲームをしただけで、あんな事やこんな事はしなかった。

### 事務所では（3）

事務所の自販機の前の椅子にて。

「と、いうわけで、無事にお付き合いですることになりました」

ニコニコ微笑みながら、文香は奏とありすに言った。

「そう、おめでとう（結果は知ってたけど）」

「おめでとうございます（結果は知ってたけど）」

二人は微笑みながら拍手をした。

「……………これも全部、お二人や皆さんのおかげです。ホントにありがとうございます」

「そんな事ないわよ。私達が協力しようとした頃には、あなた達はすでに相思相愛だったもの」

「むしろ、なんでお付き合いなさらないのか、不思議なくらいでした」

「……………そ、相思相愛だなんて……………えへへっ」

文香は頬をポリポリと掻いた。

「……………だけど、ホーンテ○ドマンションに乗る直前、私の正体が周りの人にバレてしまったのが、少し冷やっとなりましたね。騒がれなかったのが不思議なくらいです……………」

「あ、あら……………そうなの」

ちなみに、その時に奏達もホーンテ○ドマンションに並んでいて、乗りたくないとパワフルに駄々を捏ねたありすのお陰で、ストーカーしていたメンバー（奏、ありす、凜、加蓮、奈緒、唯、周子、フレデリカ）諸共周りにバレて、「あの男はマネージャーか何かなんだな」という話に落ち着いた事実を文香は知らない。

「でも、これで言い訳できなくなったわね」

「……………なんのことですか？」

「だって、これまでは本当に恋人ではなかったのだから、何とでも言い訳はできたけど、もう恋人になってしまったし、どうやっても言い訳はできないわね」

「……………」

文香の顔に、ドツと汗が浮かんだ。

「うちの事務所は、恋愛ダメなんですか？」

「さあ？でも、多分ダメなんじゃないかしら？」

ありすの質問を奏が首を捻って返し、さらに文香の顔色が悪くなった。

「ま、仮に禁止だとして、バレたら文香どころか私達にも飛び火するかもしれないわね」

「……………」

「あ、文香は気にすることないのよ？それを承知で私は協力していたのだし」

「……………で、ですが……………！」

「それに、鷹宮くんはその手のその場凌ぎは得意みたいだし、何とかなるわ」

「……………いや、それ全然安心できないんですけど」

「ま、どうせ彼に言われるだろうけど、一応言っておくわね。なるべく外では会わないこと。これまでと同じように本屋か家でね。それと、どちらかの家に行くときは、必ず待ち合わせしないで家集合にする事」

「……………なんでですか？」

「お互いの部屋に入るって事は、異性では普通は恋人以外ではありえないことなのよ。あなた、私があなたに黙って鷹宮くんの部屋で1日過ぐしてたらどう思うっ？」

「……………少し嫌です」

「でしよ？そういうことよ」

なるほど、と文香は顎に手を当てた。

「……………アイドルの恋愛って大変ですね」

「そうよ、あります？あなたは真似しちゃダメだからね？」

「はい。分かりました」

「……………ちよつと奏さん。どういう意味ですか」

「は？あなた本当は駄目なことしてる自覚はないの？」

「……………申し訳ありませんでした」

凄まれ、素直に肩を落として謝った。年上の威厳ゼロである。

「ま、あなたは気にしない方が良くと思うけどね」

「……………なんで、ですか？」

「だって、あなたはそういうの考えるの苦手じゃない」

「……………そう、ですか？」

「ええ。そもそも、本当はスキャンダルとかあまり理解してないんでしよう？」

「……………は、はい」

「そういうの理解出来ない子に、出来ることなんて何も無いわ。むしろ、裏目に出るのがオチね。だから、あなたはあまり気にしなくても良いと思うわよ」

「……………そうですか。分かりました」

少し考えた後、文香は頷いた。それを見て、満足そうに奏は微笑むと、話を変えた。

「……………それで、なんて告白されたの？」

聞かれて、文香は気まずそうに目を逸らした。

「……………それは、ちよつと言いたくないです」

「なんでよ。良いじゃない」

「……………いや、ホント嫌です。あまりカツコ良い台詞でもありませんでしたし」

「私も聞きたいです、文香さん！」

「……………ありすちゃん頼みでもこれはダメです」

「じゃあ、その理由だけでも教えてよ」

奏に聞かれ文香はどう答えようか迷ったものの、面倒だったので告られた台詞を答えた。

『……………鷺沢さん。俺……………なんか、こう……………鷺沢さんがいないとなんかダメみたいです。……………まあ、つまり……………好きなんで俺と、付き合ってください』って言われました」

「……………それは、告白なの？」

「……………そう言われると思ったから、言いたくなかったんです」

文香にため息をつかれ、奏は思わず「ごめん」と謝ってしまった。

「でも、文香さん告白されたって嬉しそうにさつき言っていましたよね？」

「っ……………」

「嬉しかったのって、告白以外の所にあるんじゃないですか?」

「……………流石ありすちゃんですね」

文香は頬を赤く染めながら、恥ずかしそうながらも嬉しそうに言った。

「……………その、告白の場所が嬉しくて……………」

「どこでされたの?」

「……………本屋です」

「は?」

奏が思わずイラっとした声を出したが、慌てて文香は首を横に振った。

「……………違うんです。テキストに選んだわけではなく、私のバイト先の本屋で告白していただいたんです」

「……………なんで?」

「……………その……………私と、出会った場所であり、私と鷹宮くんを繋ぐ場所だからって……………えへ……………」

幸せそうに微笑む文香を見て、奏もありすもイラリを飛び越えて微笑ましくなってしまう、その様子を見て温泉に入ってる時のようなほっこりした笑顔になった。

「……………で、どうしたの?その後」

「……………そこから先は、ちょっと言えないです……………」

「あ、文香さんが何かしてあげたんですね。是非聞かせて下さい」

一発で看破すると、ありすは奏と共に文香を逃がさないように、なんかよく分からない構えをした。心底アホな絵面に、文香は呆れそうになったが、しつこさと粘り強さは一人前な二人から逃げる事は不可能だと思い、とりあえず物理的逃亡は諦めた。

だが、文香は絶対に言いたくもなかった。恥ずかしいから。結婚指輪をみたく、ペアリングを渡してもらったなんて言えなかった。

「……………あ、そういえば、奏さんにオススメのアニメがあるんですよ。Charlotteっていう」

「いやそれは一旦良いわよ。教えてくれてありがとう。で、何をして

あげたの？キス？」

「っ！き、キスなんてそんな……！は、破廉恥です！」

「破廉恥って……。てか、キスくらいで照れないの。中学生じゃないんだから」

「でも、キス未満の事……尚且つ恋人同士がやりそうなこと……あ、手を繋いだ、とか？」

「それはデ○ズニーでもしていたでしょう？」

「ふむ、確かに……」

奏に一蹴され、ありすはまた考え始めた。この様子なら余裕そうだな、と文香が余裕綽々でコーヒーを飲んだ直後だった。ありすが嬉しそうな顔で言った。

「あつ、分かりました！セックスですね！」

「ブフーっ!!?」

奏と文香が嘔き出した。それに、ありすは大きく引いた。

「ちよつ、なんですか二人とも!!?どうかしたんですか？」

「あ、ありす！あんた何いきなり言ってるのよ!!?意味わかってて言ってる!!?」

「へっ?いえ、ただなんか聞いたことあったので……。男女の営みとということは知っています」

「それあなたに教えたのは誰？」

「荒木先生ですが」

「あの子は明日、マジで説教ね。ありす、そんな言葉は絶対気軽に使っちゃダメよ、良いわね？」

「は、はいっ……」

「文香、今のはあまり気にしないように……」

「……わ、私とっ……たっ、たたっ、たかみやくんが……セセセツ……」

「帰って来なさい文香ー！」

頭から湯気を上げてる文香に、奏は声を掛けたが戻って来ない。どうしたものか悩んだ挙句、奏は「そうだ」と手を打った。

「そ、外で鷹宮くんがベロチューしてる！」



「っ!?」

「よし、戻って来たわね」

慌てて窓の外を見る文香に、落ち着いた様子で奏は言った。だが、文香はギョロンツと目玉から順に自分の方を見た。

「……………奏さん?」

「っ!」

ビクツと肩が震え上がる奏。

「……………なんの真似ですか今のは?」

「……………ち、違うのよ?あなたが全然帰って来ないから、止むを得ずに……………」

「……………いくら奏さんでも今の冗談は許しません……………!!?」

「な、何をするつもり……………?」

「ふ、文香さん落ち着いてください!」

「……………ありすちゃん、少し待ってて下さい。奏さん、お手洗いに行きましようか」

「……………はい」

抵抗する術もなくトイレに連行され、壁ドンで超お説教された。

数分後、少し不機嫌そうな顔の文香と、涙目の奏が戻って来た。

「あ、やっと戻って来……………何かあったんですか?」

「……………なんでもないのよ、ありす。……………ぐすん」

「……………?」

「気になさらないでください、ありすちゃん」

ありすの頭を撫でると、文香は席に座り、奏も席に着いた。

「で、何をしたのですか?鷹宮さんに」

よく聞けるなあんたは、と奏は思ったが、今何か言えば涙声になってしまうので黙った。

一方、「ありすショック」とも言える激震の所為か、文香はさつきより照れが薄まったようで、普通に話し始めた。

「……………ペアリングを着けていたみたいです。私が買って、まず私が鷹宮くんに着けてあげた後、鷹宮くんの方から着けていただきました」

「……わあ、素敵ですね。文香さん」

「……ふふ、ありがとうございます。ありすちゃん」

奏も、文香の話聞いて泣きながらも少し感心した。そこまでチキ  
ンな文香が自分だけでやったのか、と思うと少し嬉しかったりもし  
た。

すると、文香が飲み物を飲み干して言った。

「……そろそろ、帰りますか」

「そうですね。あまり遅くなると、パパもママも心配しますし」

ありすも賛同し、奏も異論はないのか、自分の飲み物を飲み干した。

文香は帰ろうと立ち上がる前に、鞆から袋を取り出した。

「……その前に、私からお二人にお礼です」

「？」

「？」

渡したのは、リールグリーンメンのキーホルダーだった。それを、  
ありすと奏にひとつずつ、そして文香の鞆に同じものが付いていた。

「……お二人には、私の初恋を随分と応援していただきましたから」

「………良いんですか？」

「………はい」

ありすと奏は顔を見合わせると、嬉しそうにはにかんでから、それ  
をお互いに鞆に付けた。

×

× 文香の部屋。シャワーを浴びながら、文香はありすと奏に言われた

ことを思い出してしまった。

『セックスですね！』

『そ、外で鷹宮くんがベロチューしてる！』

それから、どうにも頭の中から、もし仮に千秋と性行為したら、の  
妄想が止まらなかった。彼はそういうことしたいのだろうか。した  
いとして、そういう空気になった時、私はどうなってしまおうのだらう  
か。考えれば考えるほど、心臓の鼓動が収まらなくなる。

ふと、秘部に手を当てると、ジトツと湿っていた。シャワーを浴び  
てるのだから、湿っててもおかしくないのだが、それでもお湯とは

ハッキリ違うと分かる液体が、確かに手に付着していた。

「……………っ、っっ……………」

息が乱れて来た。秘部に当てた手が離れない。それどころか、指が勝手に動く。

「……………く、んっ。……………たか、みやく、ん……………」

気付けば、恋人の名前を連呼していた。

——翌日の文香は、鷹宮と目を合わせて話す事が出来なかった。

彼女が出来ました。

一番タチの悪いバカツプルは自分達がバカツプルと自覚してないバカツプルだ。

鷺沢さんが俺の彼女になり、はや三日が経過した。俺は毎日のように鷺沢さんの家に足を運び、ゲームをプレイしたりアニメを見たりしている。

一昨日はなんか様子が変だったが、まあ俺も恋人になったことで変に意識してしまっていたし、お互い様だったかもしれない。まあ、今にして思えば、恋人になる前もほとんど恋人とやってる事は変わっていなかったの、あまり気にする必要はなかった。

だが、一つ別の問題が浮上していた。鷺沢さんが想像以上に甘えて来る。今、現在だって、ソファアの上で俺の肩に頭を置き、そのワガママボディを俺に超押し当てて来る。オツパイが腕に当たってすごい。何がすごいって、なんかもう色々ときゃバクラにいる気分。

「……………あの、鷺沢さん？」

「……………むー」

「あつ……………ふ、文香さん？」

「……………はい。なんですか？」

「なんでそんなくっつくんですか？」

「……………嫌ですか？」

「嫌じゃないですけど……………」

「……………なら良いじゃないですか。外では本屋以外会えないし、千秋くんの家にも行っちゃダメって言われてるんですから」

「……………」

流石に一度に色々封じ過ぎたか……。人の縁なんて割と簡単に切れるから周りに怪しまれる事は無いと判断して封じてみたが、鷺……………文香さんの方がここまで変わるとは思わなんだ。

「でも、その……………そんなにくっつかれると……………」

色々やべエんだよ。いや、でも落ち着け俺。せめて文香さんがア

アイドルをやめるまでは、不純異性交遊はしないと決めただろ。煩惱を焼き尽くせ、俺。

そうだ、文香さんが好きなもので気を紛らわせれば良い。

「文香さん、ゲームしませんか？」

「……ゲーム、ですか？」

「はい。実は俺、懐かしいもん持って来たんですよ」

そう言っただけで俺が立ち上がると、鷺沢さんも俺の腕にしがみついたまま立ち上がった。

「……………なんで？」

「……離れたくありません。一緒に行きましょう？」

「志○けんのコントですか。俺のリユックすぐそこですよ？」

「……………嫌ですか？」

「……………」

こ、この人面倒臭ええええええ!!?マジかこの人!マジか!!?あれっ、こんな人だったっけ!?!?バカップルじゃねえんだよ!

こつちだっただけ色々くっ付きたいのを我慢してんのにこいつは……………!!?いや、落ち着け。怒るな。こんな時くらい文香さんの好きにしてやれ。彼女の言う通り、文字通り俺の彼女の言う通り会えるのはこの空間だけなんだから。

リユックの中から○4を取り出し、スマブラのカセットやコントローラーを二つセットした。

「……………これ、なんですか？」

「俺が幼稚園入る前に親父が買ったゲームです。面白いですよ」

「……………へえ、やりたいですっ」

「じゃ、やりませんか」

コントローラーを伸ばし、片方を文香さんに手渡した。で、説明書を渡した。

「これ、説明書です」

「……………教えてくれないんですか？」

「それ読みながら、俺のプレイ見てください。その方がわかりやすいと思いますっ」

まあ、このゲームは説明するの難しいし。何より、応用性の高いゲームだから、説明される方がやりづらいだろ。

そんな事を思いながら、1Pプレイを始めた。とりあえず、文香さんの分かりやすいようにマ○オを使った。その間にスマッシュや復帰などや、必殺とかを見せた。

「……………なるほど」

文香さんは飲み込みは早いから操作はマスター○ハンドまで行けば分かるだろう。一周し終わって、俺は文香さんに聞いた。

「分かりました?」

「……………はい、一応」

「じゃ、やりましょうか。対戦」

文香さんは頷いてコントローラを握った。とりあえず、やりませんか。

俺は小手調べにマ○オを選んだ。文香さんはリ○クを選んだ。なんつーか、ぽいわ。あの人、剣使うキャラやけに好きだし。

そんなわけで、スマブラを始めた。

〜1時間後〜

「……………もっかい、もっかいです!」

「まだやるんですか……………」

どハマリした。さつきから俺が25連勝くらいしてるが、諦めてくれない。

「あの、リ○ク以外使ったらどうですか?」

「……………ダメです!リ○クさんが一番カッコ良いんです」

「……………」

「……………特に、ビームソードと二刀流の時とか最高ですね」

どんだけ惚れてんだよ。全ての元凶はキリトなんだよなあ。特に二刀流が大好きだ。京楽、浮竹、ビスタ、終兄さん、太刀川さん、四乃森蒼紫とか。なんで全部ジャンプなんだよ。や、キリトはジャンプじゃないけど。

ちなみに、リ○ク使っててビームソードが落ちたら、まず間違いない。拾って、そのまま手離さない。

「ならせめて途中で投げて攻撃したりすれば良いじゃないですか」

「……………それで二刀流じゃなくなったらどうするんですか」

知らねーよ。

「そもそも、リ○クの必殺技は復帰技以外剣使わないじゃないですか。Aボタンとかだとビームソードになるし、ほぼほぼ一刀ですよね」

「……………」

確かに、という顔をする文香さん。

「それなら投擲用にして、ダガーと剣の二刀みたいにした方がカッコ良いと思いますよ」

「……………確かに。少し試したいです！」

「良いですよ」

と、いうわけで、再開した。とりあえず、俺はいつまでマ○オを使えば良いんだろうか。

対戦を開始。ステージはハイラル城、鷺沢リ○クはブーメランを飛ばして来た。それをジャンプで躲しながらファイヤーボールを撃つた。ガードするリ○ク。

「……………」

← Aで回転しながら蹴りを入れると、胸ぐらを掴んで後ろに投げ飛ばし、空中に跳ねながらファイヤーボールを放った。リ○クは緊急回避で躲しながら後ろに下がって、ボムを出すと投げて来た。

「とうっ」

口で言っちやうふみふみかわいい。

ボムを俺がガードしてる隙に接近され、投げ技を仕掛けて来たので後ろに緊急回避し、スマッシュを放った。

「ちよっ……………待っ」

吹っ飛ばり○クを追撃し、メテオを放とうとしたが、回転斬りでこつちが吹っ飛ばされた。吹っ飛んだマ○オにブーメランを放たれ、さらに後ろに吹っ飛んだ。

「よっし……………！」

ようやく攻撃が決まったからか、嬉しそうに声をあげながら追ってくるリ○ク。すると、ちようど良い事に箱が落ちて来た。

「来たっ」

その箱をリ○クが嬉々として壊した直後、爆発してリ○クは吹っ飛んだ。死んで残り残機1。

「……………」

「……………何してるんですか」

「……………いい、良いんですー！ここからですー！」

なんで涙目なんだよ。ゲームになると子供っぽくなるな、この人。まあ、そういうところも可愛いんだが。

……………まあ、あまりボコボコにすると嫌われるかもしれないし、そろそろ接待モードに移行するか。リ○クが降りて来て、ブーメランを放って来た。それをジャンプで避けると、さらに空中に飛んで来て斬られた。

左の方にマ○オが吹っ飛ばされたところにボムを投げて来て、爆発した。まだステージの上だったので、空中で受け身を取りながら、ファイヤーボールを撃ちつつ着地。そのファイヤーボールをジャンプで避けながら接近すると、投げ技でステージの外に投げ出され、回転斬りで追撃を喰らった。リ○クは着地し、マリオで何とか復帰したところ、スマツシユで吹っ飛ばされた。

「よっし……………」

文香さんが嬉しそうな声を漏らした。これで、残機は1対1。ここから、うまい具合に勝たせよう。

マ○オが戻って来て、しばらく攻防を続けた後、アイテム箱が落ちて来た。文香さんはそこに一目散に向かって行った。カプセルを投げて壊し、中からビームソードが出て来た。よし、良い感じだ。

「やたっ……………」

嬉しそうに文香さんはビームソードを持つと、俺に向かって来た。いきなりビームソードを投げて先制し、俺を吹っ飛ばすと、投げたビームソードを拾いながら追撃して来た。

復帰しようとして、ギリギリ左側の屋根の上に着地した所、ビームソードを投げられてまた吹っ飛んだ。

それでも、ギリギリセーフだったので戻ろうとしたが、回転斬りを



されて吹っ飛んだ。よし、良い感じに負けた。ゲームの画面にはリ○クがポーズを取っていて、マ○オが拍手をしている。

しかし、それとは裏腹に文香さんの表情は不満げだった。アレ、なんで怒ってるの？

「……………文香、さん？」

「……………千秋くん、今手を抜きましたね？」

「えっ？」

「……………あんないきなり上手くいくはずないです。……………なんで、そんな風に気を使うんですか？」

「……………あー」

バレたか……………。いや、でも完膚無きまでに叩き潰したら、それはそれで不貞腐れるだろうに……………。

「……………交際を始めてから、ずっと千秋くんはそんな感じです。私とは、そんなに気を使わないとお付き合い出来ませんか？」

「いや、そういうわけじゃ……………」

「……………それなら、せめて二人で部屋にいる時くらい、私に気を使わないでください」

文香さんは俺の肩に頭を置いた。肩の辺りの服をキュツと掴み、顔を赤くしてボソリと呟いた。

「……………私は、鷹宮千秋くんとは、気を使わないでいられる関係で…いたい、です……………」

「……………」

何それ可愛い。

「……………いいんですか？二人の時とか、素を出しても」

「……………当たり前です。恋人というのは、お互いにそういうものではないでしょうか？」

……………マジでか。なら、遠慮なくいかせてもらうか。俺は肩に頭を置いてる文香さんの肩に手を置いて、自分から引き剥がした。

「へっ……………」

地味にシヨックを受けてる文香さんに、俺は顔を近付けた。それに合わせて、顔を赤く染め、口をパクパクと動かす文香さん。

「っーちっ、ちあきさん!?!?にやつ、なにを……………!?!?」

「……………動かないで」

「っ……………!!?!?」

目を閉じる文香さんの後頭部に手を回し、髪をかきあげて前に回し、俺の顔に近付けた。

「……………へっ?」

恐る恐る目を開けて俺を見る文香さんを見無視して、俺は髪の匂いを嗅いだ。ああ……………シャンプーの匂いがする……………。

「……………な、何をしてるんですか……………?」

「いや、一度で良いから文香さんの髪の匂いってのを嗅いでみたかったんですよ。小学生の時に仲良かった女の子の髪の匂い、好きだったんで」

「……………は?」

「文香さんの髪の匂いマジで良いです……………。後頭部に顔突っ込んでも良いですか?」

「……………」

文香さんは軽く息を吸うと、普段からは考えられないくらい口を大きく開けた。

「バカー……………!!?!?」

……………キーンと来た。今、耳がキーンと来たよ。鼓膜破れるかと思った。

音爆弾を喰らったイヤンクツクの如くクラクラしてると、文香さんはクツションで俺の頭を押し潰すかの如く押し当てて来た。息が出なかつたので、顔をなんとか横にした。

「もうっ!もうもうもう本当にもうっ!!?!?あなたと言う人は!!?!?」

「なっ、なんですかいきなり!?!?気を使わなくて良いって言うからすこし素直になつたのに……………!!?!?」

「そういう事じゃありません!!?!?わ、私はてつきり……………!!?!?」

「……………てつきり?」

「……………き、キスしていただけるもの、だと……………」

「……………」

嫌だこの子可愛いほんと。てか、何？キスしても良いの？いや、ダメだろ。遠慮してるとかじゃなくて、俺はファーストキスだぞ。聞いたところによると、キスには上手い下手があるんだろ？下手くそだもん絶対。

「…………でも、その、なんだ。その言い方をされると、一つ聞いておかなければならないんだが。」

「…………じゃあ、その、何？キスしても、良いってこと…………ですか？」

「…………今日は絶対ダメです。それより、一つ良いですか？」

「あ、はい」

今日は？という質問をさせないように、文香さんは質問して来た。まあその件は後で聞くとして、まずは質問に答えよう。

「…………その、小学生の頃に、仲良かった女の子と私の、髪…………どちらが良い匂い、でした？」

「…………へっ？」

「っ…………」

えっ、何その質問。どういう事？

「…………で、ですから、小学生の時の女の子と私の髪、どちらが良い匂いだったかって事です…………！」

「そりゃあ文香さんですけど」

「…………」

この人、なんで嬉しそうな表情を必死に隠してるんだろう。すると、文香さんから押し付けられてるクッションの力が弱まった。何事かと思つて体を起こすと、文香さんは俺に背中を向けていた。

「…………そ、そうでしたら、その…………どうぞ」

「…………へっ？」

「…………べ、別に普通に嗅がれる分には構いません。へ、減るものでもないです、し…………」

「…………」

マジかよおい。そんなこと言われたら俺、遠慮しないよ。俺は深呼吸してから、文香さんの後頭部に顔を突っ込んだ。

「ひゃんっ…………！」

「……………ああ、やっぱり良い香り……………」

「……………ち、千秋くん……………！そこで喋らないで……………いい、息が……………!!?」

「……………なんだろうな、シャンプー以外にも香ってるこの香り……………もしかして、文香さん本人の匂い?」

「じ、実況しないで下さい!!?は、恥ずかしいですよ……………!!?」

「……………んっ、ここは首筋か?」

「ツ!!?ち、ちよつと!嗅ぐのは髪だけじゃ……………!!?」

「首回りからも良い香りが……………やっぱりこれ文香さんの体臭かな」

「つ……………も、もう勘弁してください……………」

なんか気付いたら文香さんが悶えてた。俺が後頭部に顔を突っ込んでる間に何が……………いや、考えるのはよそう。

とりあえず離れると、文香さんが俺の方を睨んだ。

「……………今度は私の番です」

「あつ?」

文香さんは俺の胸に飛び付いて、押し倒して来た。そのまま、猫のように俺の胸の上で丸まった。

「……………ふふっ、私、こうやって恋人の上で眠るのとか憧れてたんです」

「そ、そうですか……………」

どうでも良いけど、女の子の体超柔らかい。プニプニしとる。何これ、カ○ビイなの?ていうか、なんか色々と変なテンションになって来てない?別に良いけど。

「……………千秋くん」

「なんですか?」

「……………恋人の夏休みって良いですね」

「なんですか急に」

「……………だって、その……………好きな人と、毎日会える、から……………」

……………ああもうっ、この人は本当に可愛い。何なの?天使なの?フルタカエルなの?いつそのこと求婚しちまおうか。いや、後悔しそうだからやめとこう。

「……………そうですね」

とりあえず肯定しておきながら、俺は何となくスマホを見た。あと何日でこの夏休みが終わってしまうかを見るためだ。

『8／30』

「……………えっ?」

「どうしました?」

「……………」

「……………千秋くん?」

「……………夏休み、あと明日で終わりです」

「……………えっ?」

俺と文香さんの世界が終わる音、確かに聞こえた。

誰にでも得意不得意あるもんだ。

夏休みは今日でラスト。明日から文香さんと会う事は出来ない……。と、いうことで、急遽泊まる事になった。外に出るのは危険なので、文香さんの服を借りることになった。

シャワーを浴びて、俺はバスルームを出て洗面所で身体を拭き終え、文香さんのジャージを借りた。俺自身、身長はそんな高くないから、パッツンパッツンになるような事はないだろう。

上半身のジャージを着ようとした時、ふわっと良い香りが漂った。何処からだ？ 辺りの匂いを嗅ぎ回ったが、答えは一つだった。ジャージからだ。

「……………」

……………文香さんの気配はない。そもそも洗面所、着替え中なら入って来る事もないだろう。俺はジャージに顔を近付けた。

「……………」

ふあっ……………ふみふみの香りがする……………。なんだこれ、なんなのこの匂い。スゲエ中毒性がある。なんだろうなあ、人を落ち着かせる香り、人をダメにする香り……………洗剤の匂いじゃないなこれは。文香さんの体臭が移ったんだろうなあ。はあ、良い香り。

ジャージを抱き締めて香りを堪能していると、なんか突き刺さるような視線に気付いた。ふと顔を上げると、文香さんが顔を赤くして俺を見下ろしていた。

「……………あっ」

「……………あの、千秋さん……………。恥ずかしいので、そういうのは……………その、家でしていただけると……………」

「……………」

俺は大人しくジャージを着て、ソファアの上で寝転がって頭を抱えた。……………死にたい。すごく死にたい。俺がどうかしてた……………。そうだよ、やるなら家でやれ俺。

「……………だ、大丈夫ですよ？ 千秋くん、私は気にしてませんから……………」

「……………死ぬ。もうすぐ死ぬ。今すぐ死ぬ……………」

「……し、死んじやダメですよ……？」

俺の頭を撫でてくれる文香さんの優しさがツライ。あと、手からすごい良い香りがする。

すると、文香さんが思い出したようにボソツと呟いた。

「……千秋くんは明日が最後、なんですね……」

「……はい。文香さんは？」

「……大学生ですから、私は9月まで夏休みです」

「……じゃあ、俺も9月まで休みます」

「……そういうのはダメですつ。ちゃんと行きなさい」

だよ。文香さん、そういう所はキツチリしてるし。

「……1日サボっちゃダメ？」

「……ダメですつ」

「1日、ホンツトに1日」

「……ダメですつ」

「休ませてくれたらキリトのフィギュアをゲーセンで取ってあげるから」

「……ダメ……ダメ……ですつ」

間があつたな。まあいいよ。どうせ初日は始業式で速攻終わるし。

「分かりましたよ。行けば良いんでしょ行けば」

「……なんでちよつと不貞腐れてるんですかつ。お姉さん、そういう

のは許しませんよ」

「お姉さんって……俺より年下っぽい癖に」

「んなつ……わ、私の方が歳上です！」

「年齢的にはね？でも、俺の方が落ち着きがありますし、頭も良いですし」

「……さ、再試の人よりは私の方が頭良いです！」

「いやいや、そういうんじゃなくてさ。学力じゃなくて他の部分で。社会で生きていく上で必要な頭の良さ」

「……意味わからないです」

「付き合ってたなかった頃に俺の事を部屋に入れちゃう時点で察しですわ」

「っ！あ、あの時は違うんです！そのっ……そういうところを理解し切れていなかったというか……！」

「大学生にもなつて理解し切れてないのがもうね」

「う、うるさいです！お互い様です！本人の家でジャージの匂いを嗅いじやう癖に！」

「えっ」

「あっ……」

クリティカルヒットした、今の。

「や、やっぱ気にしてたんですね……。死ノウ……」

「ち、違うんです！反撃の糸口を探してて、つい口に出ちゃっただけなんです！」

「……何も違くないじゃないですか。死のう」

「し、死んじやダメです!!？」

「……や、死なないけど。死にたいだけで」

「っ！と、とにかく私、千秋くんの事好きですから！全然匂い嗅がれても平気ですから！」

「……嗅いで良いの？」

「……もう、この話は終わりですっ。ご飯にしましょう」

「俺を料理するつもりですか……」

「し、しませんよ！」

まあ、文香さんに料理されるならそれも良いか。さ、抵抗はしない。一思いにやれば良い!!？」

「……ご飯、何にしますか？」

あ、ホントに料理しないんだ。

「別に良いですよ。俺作ります」

「……大丈夫です。私だつて料理くらい出来ます」

「いや誰もそんな心配してないんですけど」

料理できないことバラしたよ今。

「……とにかく、待ってて下さい」

まあ、文香さんも料理くらいできるだろう。一人暮らししてるし、食戦のソーマも幸福グラフィティも見たし。



なら、俺は待つてよう。ソファアでぼんやりしながら、トントントンと食材を刻む音を聞いていた。なんだ、本当に料理できるのか。

少し安心しながら、ソファアの前の机に目をやると、机の下に紙が落ちているのに気付いた。その紙を見ると、大学のレポート用紙の様なものが入っていた。

「……………文香さん？これレポートですか？夏休みの」

「……………あ、いえ。大学に夏休みの課題とかはありませんから」

「え、じゃあこれ……………」

「……………夏休み前ですよ」

「……………ふーん」

俺はテキストに相槌を返しながら、思わずフツと微笑んでしまった。

—— ヤツベエ、課題一つもやってねえ……………。

思い出さなきゃよかった……………。や、元からそこまで多いわけじゃないんだがな。にしても明日一日潰さないと終わらねえよ。

……………まあ、良いか。文香さんに知られなければ問題ない。宿題なんかやらなかったとしてもテストで点取れば問題ない。

「……………千秋くんは、夏休みの課題はないのですか？」

当然の如く、こちらの悩みに踏み込んで来た。流石、文香さんだ。さて、どう答えようか。シレッと「終わりました」と答えるのは簡単だが、文香さんに嘘はつきたくない……………。嘘は言わずになんとか誤魔化せないだろうか。

「……………千秋くん？」

問い詰めるように聞かれた。文香さんの顔は俺を見ている。おい、ちゃんと自分の手元見ないと……………！！

「痛っ……………」

……………ほら切った……………。

「どうしました？」

念の為に聞いてみると、文香さんは手を後ろに隠して「な、なんでもないですっ」とそっぽを向いた。

……………なんで強がるのかな。俺は文香さんをジト目で睨むと、ソ

フアーから立ち上がったって、台所に向かった。

「っ？ な、なんですかっ？」

文香さんのリアクションを無視して、俺は手を握った。指から血がポタポタと垂れている。

「……………なんで隠すんですか」

「……………すみません」

「や、まあ良いんですけどね別に」

そう言いながら、俺は消毒液の場所を聞こうとしたが、なんとなく隠されたのが腹立ち、口が止まった。でも、このまま何もしなかったら文香さん痛いだろうし…………。

と、いうわけで、アニメの力を借りることにした。俺は文香さんの指を啜えた。

「っ！！？ ちっ、千秋くんっ……………！！？」

「……………うるふあい」

血を吸い、しばらく啜えながらチラつと文香さんを見た。顔を超赤くしながらも抵抗していなかった。

「っ……………んっ……………」

……………なんか吐息漏れてるんだけど。え、何？なんかエロいんだが……………。思わず口から離してしまった。

……………っーか、あれだ。何やってんだ俺。なんか勢いでやつちやつたけど。

「……………ば、絆創膏持って来ますね」

「……………は、はい」

……………なんか、気まづくなっちゃったな。絆創膏を引き出しに取りに行き、ついでに消毒液とティッシュを持って来た。

「……………お待たせしました」

「っ！！？」

戻って来ると、文香さんは指の傷口を舐めながら「バレたっ！！？」みたいな顔をした。

「……………あつ、もう少し傷口舐めといた方が良かったですか？」

「……………」

ムスツとした表情になる文香さん。だが「まあ千秋くんだし仕方ないか」みたいな顔をした。

「……………絆創膏、貼っていただけですか？」

「え？良いですけど。……………あつ、もしかして自分で貼れないほど痛いんですか!?!？」

「……………そういう事ではないんですけど。でも貼って下さい」

「……………は、はあ。あ、先に消毒しますね」

「……………結構です」

「えっ?」

「……………早く絆創膏をお願いします」

「は、はいっ」

仕方ないので、俺は絆創膏を剥がし、文香さんの指に巻いて貼つけた。

「……………っし、これで良いですか？」

「……………ありがとうございます。では、料理に戻るので待ってて下さい」

「あーいや、俺も手伝いますよ」

「……………いえ、大丈夫です」

「大丈夫ではないでしょう。怪我してるんですから」

「……………このくらい、大した怪我では」

「いや、怪我の程度を言ってるんじゃないやなくて、怪我したっていう事実を言ってるんです。包丁使ってるのに手元から目を離しちゃう子は一人で料理させられませんから」

「むっ……………だ、大丈夫です。私だって学習しますから」

聞き分けのない子だな。言いたい事を察してくれよ。俺は聞かん坊を説得するように、頭の上に手を置きながら言った。

「……………心配だから、一緒に料理したいって言ってるんです。察して下さいっ」

「……………」

意外なものを見る目で見られ、なんか気恥ずかしくなって来て、思わず頬をほりほり搔きながら言い訳を並べた。

「や、ほら。切り傷って意外と痛いじゃないですか。大した怪我じゃ

なくても文香さんが手を痛めてる所とか見たくないし。それにほら、なんつーかアレじゃん。二人で料理してると夫……」

アレ、俺今なんて言おうとした？自分の頭でも追っつかない言い訳を並べてるうちにすっごい恥ずかしいこと言おうとしてなかった？

「……………してると、なんですか？」

……………どうしよう、なんて言おう。大丈夫だ、「夫婦」とは言い切っていない。修正しろ。

「……………そ、創真と田所みたい、じゃないですか……………？」

何を言っただ俺は。てかどういう意味で言っただ俺は。わけがわからないよ。冷静に考えたら、恋人同士なんだから夫婦って言っても冗談で済むだろうが。

ドギマギしながら文香さんの反応を見ると、文香さんは普通に微笑んでいた。

「……………ありがとうございます。では、お手伝いお願いしますね」

「……………はい。何作るんですか？」

「……………野菜炒めでも作ろうと思っただけ……………」

「じゃあ、俺野菜刻みますね。肉とかは？」

「……………それは大丈夫です。先に焼いときますね」

「ういっす」

良かった……………誤魔化せた。俺は包丁を持って野菜を刻み始めた。

「……………いくじなし」

「へっ？」

「……………なんでもありません」

隣の文香さんから、何か言ってる声が聞こえた気がしたが、とりあえず料理に集中した。

×

×  
晩飯が完成し、テレビをつけて文香さんと食事にした。まあ、俺は野菜刻んでただけなんだけどな。

「いただきますーす」

挨拶して、俺は炒め物を箸でつまんで白米の上に乗せてから食べた。

「っ、美味しいですねこれ」

「……ほ、ホントですか？」

「はい。本当に料理出来たんですね」

「……そ、それはもう。ち、千秋くんの恋人です、から……」

可愛い。何それ。可愛い(2回目)。や、でも、別に料理できなくても俺は文香さんのこと好きですけどね。まあ、こんなことは口が裂けても言えないが。

そんな事を考えてると、文香さんが唐突に聞いて来た。

「……それで、夏休みの課題はあるんですか？」

なんでそれを聞いて来るんですかね……。てかさっきまでそんな話だったな……。どうしよう、割と時間空いてたのに全然言い訳考えてない。とりあえず、嘘は言わないで遠回しに表現しよう。

「あるけど、大した量ありませんよ。問題ないです」

「……分かりました。では明日、一緒にやりましょうか」

「待つて。なんでそうなるんですか」

「……大した量がないのでしたら、パパッと終わらせましょう？二人でやればすぐに終わりますよ」

え、や……。それはまずい。大した量ないつつつても、国数英の三科目分あるんだけど。何より、俺の宿題を文香さんに手伝わせられるか。

「や、いいです。すぐ終わりますから」

「……でも、やってないでしょう？それなら」

「いやほんと大した量じゃないんで。ウルトラマンの地球に居られる時間と同じ程度の時間で終わるんで」

「……何か隠してるでしょう」

「……きやつ、隠してません」

「……」

「……」

「……明日、一度取りに戻りなさい。良いですね？」

「……はい」

抵抗は諦めた。まあ、でも今すぐもってこいって言わない辺り、やっぱ文香さんも今日は俺と一緒にいたいんだろうなあ。そうポジティブに捉えると、なんか少し嬉しいわ。

で、食事が終わった。文香さんは少しご機嫌斜め気味にソファアールでテレビを見ていた。それはおそらく、俺が宿題をやってないことがバレたからだろう。この人は母親の素質があるな……。

手を掛ける部分に肘をつけて、足を組んでる文香さんは何となく女王に見えた。是非とも踏まれてみたい。

その時だった。時刻は10時になり、心霊特集の番組が始まった。直後、俺は近くにあったりリモコンでテレビを消した。

「……………千秋くん？」

俺の行動を不審に思ったのか、文香さんは俺の顔を見た。俺はなるべく真顔を装った。

「何ですか？」

「……………あの、どうしてテレビ消したのかなって……………」

「や、何と無いですよ。さて、スマブラでもやりますか？」

「……………怖いんですか？」

普段とは違っていたずらっ子のような声で言われた。

「は？何が？怖いって何？何それおいしいの？」

「……………ふうーん？」

文香さんはニヤリと微笑むと、俺の手からリモコンを奪い、テレビをつけた。あ、ヤバイ。不機嫌を俺の反応を見て楽しみ、発散するつもりだ。

「……………すみません、俺もう眠いのでお先におやすみしますね」

「……………ダメです♪」

「楽しそうに言うなよ……………や、別に怖いわけじゃないんですけどね」  
「……………じゃあなんで見ないんですか？」

……………実際怖いんだけどな。アトラクションとかのお化け屋敷は怖くない。だって作り物のお化けを出す時点で、お化けがないのと言ってるようなものだ。だが、心霊スポット、というのは本当にお化けがいるところだぞ？それをテレビで紹介するとかイカれてんだろ。

「……いや、待てよ？逆だろ。心霊スポットや怖い話をテレビで放送するということは、それは「ここやこのシチュエーションはお化けが出るから気を付けてください」という警告だろ。お化け対策を練ることが出来る！」

「いや、見ましよう」

「……………へっ？」

「見て、お化け対策を立てましよう。これを見れば人生、お化けに会わずに天寿を全うすることが出来ます」

「……………あの、何言ってるんですか？」

「……………大丈夫。俺は、負けない!!？」

「……………トビアさんですか？」

「落ちて着いてツツコミを入れてくる文香さん。というか、ちよつと待て。」

「文香さんはこういう番組平気なんですか？」

「……………私は、お化け屋敷のように自分の身に何か降りかかるものは苦手ですが、テレビや本でしたら問題ありません」

「……………なるほど」

「心霊番組でも生き残る脇役タイプか。心霊特集をバカにしているわけでもなく、信じてるわけでもない。冒頭に出て来て後は出番がないタイプだ。」

「……………千秋くんこそ。怖がってるなんて意外です。ホーンテ○ドマンシヨンは平気なのに」

「何言ってるんですか？作り物じゃなくて本物のお化けですよ？それを比べるのは、等身大ガンダムとホワイトベースのガンダムの強さを比べるようなものです」

「……………あの、もしかして、お化けが本当にいると信じてます？」

「信じるも何もいますからね」

「……………」

「え、何その目。なんでなんか生暖かい目を向けてくるの？」

「……………サンタクロースは信じてます？」

「信じるわけがないでしょ」

「……………」

なんか、不思議なものを見る目で見られたよ。

すると、心霊番組のVTRが始まった。俺はゴクツと唾を飲み込み、近くにあった何かを握った。

「……………」

「……………あの、千秋くん」

「っ!?? な、なんですか!??」

「……………手、痛いです」

「っ、あ、す、すみません……………」

握ったのは文香さんの手だった。俺は慌てて手を引つ込めた。すると、文香さんから「あつ……………」と切なそうな声が漏れた。

「……………?」

「……………あつ、あのつ……………手は、繋いでても良いですよ?」

……………怒ってたんじゃないのか?すごい優しいなこの人。結婚したい。

「……………すみません。お借りします」

俺はありがたく手を取った。直後、ギョツと手を握られた。力が強くて、少し痛いくらいに。文香さんの顔を見ると、すごい裏のありそうな笑顔で俺を見ていた。

「……………これで、逃がしませんから」

「……………」

生まれて初めて、俺は文香さんに心底恐怖を感じた。

だが、絶望してる間に心霊特集は進む。テレビの画面では、お化けが出たり幽霊が出たりとすごかった。その度に俺の身体はビクツと震えた。

『グオアッ!』

「っ!??」

『ガシャアアアアアン!!?』

「っひいっ!??」

『うおおおお!!?』

「ヌワッ!??」



気が付けば、俺は文香さんの腕にしがみついていた。いつもなら気になる文香さんの匂いや感触に気を回す余裕がない。

「……………あの、そんなに怖いですか？」

「……………嬉しそうですね、文香さん」

「……………はい。千秋くんの意外な一面が見れましたから」

「……………」

これは、文香さんのサドツ気か？いや、純粹にそう思っているんだろうな。……………なんか、情けない姿を見せてしまったな。彼女の前でくらい、格好つけられねーのかよ俺は。

肩を落としてショボンとしてると、文香さんが俺の頭を撫でて抱き寄せてくれた。

「……………大丈夫ですよ。お化けはこの部屋にはいませんから」

「……………文香さん……………」

この人、優しい……………。さっき、俺の手を握って「逃がしませんから」と文字通りお化けのように睨みつけて来た人と同一人物とは思えない。俺は文香さんに体を預けてホッとしてると、文香さんは俺の耳元で呟いた。

「……………あれ？」

「っ、な、なんですかっ？どうしました？」

「……………あの、窓……………」

「えっ？ちよっ、何何何無理無理無理無理やめてやめてやめてやめてー！」

「……………あ、窓に映った私でした」

「っーふ、文香さん〜！」

「……………ふふ。ごめんなさい〜」

……………しばらくはこれでいじられそうだ。

夏の終わりとは、秋の始まりでもある。

「……………きくん、千秋くん。起きて下さい」

翌朝、文香さんの声と、お尻を突かれる様子で俺は目を覚ました。目を覚ましただけで、起き上がることはしなかった。だってなんかお尻突かれたんだもん。何のつもりか知らないけど、この人何してんの？

「ち、千秋くーん……………起きて下さいー……………」

起こす気ねえだろ……………声小さ過ぎるし。てか、いつまで尻突いてんの？これ、俺起きてても良いの？起きたら赤面するパターンだよねこれ？いや、それはそれで面白いけども。

しかし、どういうつもりなんだ。なんで尻触ってんの？や、ほんとに。すると、文香さんは尻の突きをやめて、横になって寝転がってる俺の前に移動すると、俺の腹の中で丸くなって横になった。

「……………えへへ、千秋くんの匂いが……………」

……………あああああもうっ!!??可愛いなあ、俺の彼女!!??世界で一番可愛いんじゃないのかこの子!!??ああああ、結婚してえええええ!!??けど、落ち着け!せめて結婚は俺が就職してからにしろ!高卒で働こう俺!とにかく今は恋人らしい対応をするべきだろう。

俺は文香さんを優しく抱きしめてみた。すると、文香さんはビクツと体を震わせた。ああ、ビクビクする文香さんも可愛い。そのまま、俺の胸前辺りのパジャマをギュツと握ってくれた言うことは……………。

「……………起きてるんですか?」

……………あ、俺のバカ。雰囲気流されて自爆した。もう少し寝たふりして様子見しようと思ってたのに。

「……………千秋くん?」

いや、大丈夫。寝相が悪かったことにしよう。俺は引き続き寝たふりを続行した。直後、ギュウウツと腕を抓られた。

「いだだだだっ!!?」

「……………起きて、ましたよね?」

「起きてました!起きてましたから抓るのやめてごめんなさい!!?」

素直に謝ると、文香さんは手を離した。そして、「まったく……」と  
眩くと、俺の胸におでこを当てた。

「……罰として、しばらくこのままですっ……」  
「えっ……」

「……抱きしめて下さい。……その、私も触ってしまいました  
し、お尻なら触っても……良い、ですよ……」

「いや、触りませんよ。電車の中の痴漢じゃあるまいし」

「……」  
「……」

「……ですよ、千秋くんですものね。とにかく、このままです」

「は、はぁ」

命令で、俺はこのまま文香さんを抱き締めた。女の人の体って本当  
に柔らかいなあ……。

「……で、これはどういう事なんですか？」  
「……」

朝食を終えて、課題を持って来た俺は文香さんに正座させられてい  
た。

「……ページもやっていませんよね？これ」

「や、違うんですよ。俺の成績ならやらなくても平気かなって……」

「追試の癖にどの口が言いますか!?!」

「はい、ごめんなさい」

怒鳴られて、俺は頭を下げた。畜生、ホントにあの追試は悔やまれ  
るぜ……。

「……まったく、勉強をいつもいつもサボって……考えられませ  
ん。将来の事、何も考えていないのですか?」

「……はい、すみません。文香さんと結婚するという事以外、何も考  
えてません」

「……ふ、ふぎけてるんですか!?! 私は真面目にお説教をしている  
んです!!?」

「……ごめんなさい……」

そんな顔を真っ赤にして怒らんでも……。はぁ……。俺のバカ

……。

十分反省したと見たのか、文香さんは俺の前に机を用意すると、ペンを取り出した。

「……………まあ良いです。さ、とりあえず始めましょう」

「……………分かりました。じゃあ俺は数学と英語やるんで、国語は任せますね」

「……………全部、千秋くんがやりなさい」

「……………デスヨネー」

仕方ない…………。本気でやろう（ピツコロ風）。

く2時間後く

とりあえず、英語と国語は終わらせた。本気でやればこんなもんですよ。元々、数があったわけでもないし、特に英語は俺にとって改札口を定期で通るようなもんだから、速攻で終わった。

国語だって中間は点数取れてたわけだし、そもそも現代文は俺天才的だから、それほど時間はかからなかった。問題は、数学である。中間までの範囲なら、点数は良かったから速攻なのだが、期末の範囲はヤバイ。教科書読みながらじゃないと進まない。

くくくつークツソ……………!!?」

「……………色々なツケが今、回って来ましたね」

煽るな！この野郎！今の一言でやる気を無くし、俺はペンを投げた。

「少し休憩にしても良いですか？」

「ダメです♪」

なんでちよつと楽しそうなんだよ。

「いやいや、マジで。科目的には三分の二終わってるわけだし、2時間ぶつ通しなんだから休憩くらい下さいよ」

「……………仕方ありませんね。では、10分です」

制限時間付きかー。まあ、仕方ないやな。俺は後ろに寝転がった。

……………あーあ、明日から学校かあ。文香さんとしばらく会えないんだよなあ。

「……………行きたくねえなあ、学校」

「……………どうして、ですか？」

「楽しくないからですよ。今学期は文化祭に体育祭あるんですよ？地獄かよつての……………」

「……………文化祭？」

「はい。あ、来なくて良いですからね。俺、帰るし」

「……………なんでまたそういう事言うんですか」

「うちのクラスの出し物はまだ決まってるんですけど、何にしても俺がする事なんてないですから。文化祭には私服を持って行って、トイレで着替えて学校を出て自宅に帰ります。終わる時間になったら、まだ着替えて学校に戻れば完璧ですよ」

これを思いついた時、あまりの天才っぷりに軽くアークスダンス踊っちゃったからな。

「……………そう、ですか。私、千秋くんの学校の文化祭、一緒に行きたかったのですが……………」

「なんでですか？」

「……………千秋くんがいるというのも大きいですが、私は高校の時はほとんど読書をしていて、余り表に出たりはしなかったんです。ですから、友達もあまりいなくて……………文化祭の日は教室で本を読んでいたくらい、でしたから……………」

ああ、なんかその絵面は想像できるわ。お互い、暗い青春でしたね。「……………なんにしても、文化祭とかいう人の集まる日にうちの学校に来るのはダメです。存在するだけで大騒ぎなのに、俺といるともって騒ぎになりますよ」

「……………そう、ですよね……………」

シヨボンと肩を落とす文香さん。俺はそれに言った。

「……………ま、また今度休みの日にデートでもしましょう」

「……………そうですね。ありがとうございます」

少しは機嫌が直ったようだ。よし、良かった。

「……………ちなみに、体育祭も参加しないのですか？」

「しません」

「……………即答ですか」

「仕方ないでしょう。去年は俺がトイレ行ってる間に、クラス競技が問題なく開催されたんですから。もう絶対、体育祭は出ません」

「……………あ、あはは」

あの時の体育委員め……………ちゃんと人数確認しろつての。そんな話をしてるうちに、10分が経過したので、宿題を開始した。

く（昼飯や休憩挟んで）5時間後く

終わった。割と早く終わったな。まあ、俺の出来の良さが出てしまっただけだろう。そもそも、答え合わせできないから、答えなんて合っても間違つても問題はなかった。まあ、文香さんが許してくれなかっただろうけど。

「つふー！終わったあ……………」

「……………お疲れ様です。これ、差し入れです」

文香さんが、冷凍庫からアイスを出してくれたわ

「おおー！ありがとうございます」

「……………いえいえ」

微笑みながら、二人並んでアイスをかじった。ほおー、やっぱり夏はアイスだわー。特に棒アイス。特にZガンダムが最高。

「……………もう、夏も終わりですね」

「……………そうですね」

文香さんは小さく相槌を打ってから、顔を赤くしたままボソツと呟いた。

「……………あの、千秋くん」

「？　なんですか？」

「……………お願いがあるんです」

「良いですよ」

「……………まだ何も言っていないんですが」

「文香さんの言うことなら大抵OKしますから」

「……………なら、その……………夏休みが終わる前に、どうしてもしてほしいことがあるのですが……………」

なんだろう。一緒にプール？盆踊り？虫取り大会？バイト？SOS団かよ。

すると、文香さんは顔を真っ赤に染め上げたまま、ボソツと呟いた。  
「……………く、口付けを……………」

「……………」  
ボンツと文香さんどころか俺の顔も赤くなった。

「っ、ま、マジですか!?!?」

「……………は、はい……………」

顔を赤くしたまま俯く文香さん。確かに、そういう付き合い始めてからそういうのしてなかったけど……………でも、なんでそんな突然……………いや、大体わかるか。どうせ速水さんあたりに唆されたんだろうな。  
「……………あの、文香さん。別に速水さんとかに言われたからって、それに無理に従う必要ないんですよ?」

「……………えっ?」

「ほら、文香さんとても恥ずかしそうにしていますし、あまりそういうの慣れていないんでしょう?俺も恥ずかしいですし、そういう事は俺達のペースで……………」

「ちっ、違うんです!!?」

文香さんの声が大きくなった。それに俺は思わずビビってしまった。

「……………かつ、奏さんとかっ……………そういうのは、関係ないんです……………」  
……………と、言うとか?

「……………その、わたしがっ……………したいなって、思っ……………」  
「へっ……………?」

「……………私、その……………千秋くんがいないと、寂しくて、ダメそう……………」  
明日から、どうすれば良いのか分からなくて……………それなら、何とか『千秋くん成分』を補充すれば良いかなって思っ……………それで……………」  
「……………」

「……………ごめいわく、でしたら……………良い、んです……………けど……………」

文香さんは顔を赤くしたまま、途切れ途切れにボソボソと呟いた。  
正直、そういうのは文香さんがアイドルをやめてからって思っ……………いたんだが……………。

だが、彼女の方からそう言われて、拒否するほど俺は情けなくない。

「……………」

俺は、黙って文香さんの後頭部に右手を回した。

「っ」

文香さんは目を閉じて、若干上を向いた。キス待ちの顔って奴だろう。俺は、ゆつくりと顔を近づけて、唇と唇を重ね合わせた。しばらく押し付け合う事数秒、ぷはっと俺と文香さんは離れた。お互いの口から糸を引き、つうつと透明の唾液が垂れ下がる。

蕩けたような顔を浮かべる文香さんにムラつとしたが、理性で抑えつけた。何度も言うが、そういうのは文香さんが引退してからだ。

自分の中の性欲をかき消すように、俺は文香さんに聞いた。

「……………こっつ、これで、しばらくは保ちますか……………？」

すると、文香さんは顔を赤くしたまま俯いた。

「……………足りません。もう一度、お願いします……………」

「……………俺もです」

もう一度、唇と唇を触れ合わせた。

×その後、何度も何度もお互いに口を合わせた。

×

×ちなみにこの後、お互いに恥ずかしくなってスマブラに逃げた。台

無しだった。



## 事務所では（４）

8月31日、千秋が帰った後、文香は寝巻き（上は半袖シャツ、下は下着。千秋がいるときはちゃんとズボン履いてた）に着替えて、自分の唇に触れた。ここに、さつきまで千秋の唇がくっ付いていた。それどころか、唾液の交換まで行った。

「っ……………」

そのまま、ベッドに寝転んだ。ここで、千秋と寝ていた。いや、何もエロいことはしてないけど、朝はお尻を触り、胸前で寝転がり、抱き締められた場所だ。

思い出すだけでも秘部がキュツと締まるのを感じた。気が付けば、手が勝手に脚の間に向かった。その直後だった。

ピンポーン

「わひゃああアあ!?？」

思わず奇声を上げてしまった。で、慌てて手を引っ込めて起き上がり、インターホンを出た。

「は、はいっ」

『文香? 遊びに来たわよ』

スーパーとTSUYOAYAの袋を持った奏だった。文香はホツとため息をついて、マンションの自動ドアを開けると、玄関の鍵を開けた。

数分後、奏が入って来た。

「…………どっ、どうしたんですか?」

「んー、近くに来たから。あと、最後の夏休みどこまでしたのかなって思っって」

「…………シたって、何を?」

「ん? 不純異性交遊」

「ッ!??!」

顔を真っ赤にする文香の横を素通りして、奏は「お邪魔しまーす」と言いながら部屋の中に入った。

「文香ー? ほらおいでよ」

「っ！は、はいっ」

慌てて、文香は奏の後に続いた。二人でソファ―に座り、奏の買つて来たお菓子と飲み物を机に並べた。そして、最後にBlurryを開けて、のんのんびよりをつけた。

「……今日はのんのんですか」

「ええ。さ、女子会を始めましょうっ？」

まあ、ほとんど文香の惚気話だけど、と心の中で付け加えた。

「で、どうだったの？最後の夏は。随分と顔が赤いけど、何か良いことでもあった？」

「……えっ、そ、そうですか？そんな事ないと思いますけど……」

「いいえ？何かあったわね。まあ、誰にも（ありす、凜、加蓮、奈緒、周子、フレデリカ、唯、アーニヤ、卯月、未央↑newは除く）言わないから」

「……えっと、そのですね……」

文香は俯きながら、頬をぽりぽりと搔いた。

「……ベッドの上で、千秋くんを抱いてもらいました」

「ぶっっ！！？」

「!?？ か、奏さん!?？」

奏が飲んでたジンジャエールを鼻から吹き出し、文香は慌ててティッシュを取りに行った。

「……大丈夫ですか？」

「あ、あいじょうぶ……それより文香！」

「は、はいっ？」

「だ、抱いてもらったってどういう事!?？場合によっては……!!？」

鷹宮を殺す、そう思った直後、文香は恥ずかしそうに言った。

「……は、はい。その、一緒に寝るときに、私の方が先に目を覚まして……」

「おお」

「……お、おおっ……それで、その……興味本位で、千秋くんの胸前で丸まったんですけど……」

「おお」

「……………その時に、抱きしめてもらって……………」

「……………はっ?」

「……………千秋くん、起きてたのに寝たふりして抱きしめてくれて……………! もう、照れ屋さんなんですから♪」

「……………抱いてもらったって、そういう意味?」

「……………? 他にどんな意味が……………あっ」

カアアツと顔が赤く染まっていく文香。そして、真っ赤な顔で奏をジト目で見た。

「……………奏さんの、えっち」

「なっ……………あなたに言われたくないわよ! パンイチの癖に!」

「あっ……………! み、見ないで下さい!」

「いや、女同士なんだしそんな照れなくても……………なんならそのままでも良いのよ」

「……………ズボン履きますっ!」

文香は寝室からズボンを取りに行った。すると、目に入ったのは千秋の履いていたジャージのズボン。自分が貸していた奴だ。

「……………」

それを履いてリビングに戻った。奏の隣に座り、のんのんびよりを見ながらお菓子を食べた。

「……………まったく、こんな時間からこんなもの食べたら太っちゃいます」

「と、言いながらパクパク食べるのね……………。でも、あなたはそういうの気にしたことなかったじゃない」

「……………そうですか?」

「やっぱり、彼氏が出来ると人間変わるわねー」

「っーそ、そんなんじゃないです!!?」

「いや、別に恥ずかしいことじゃないと思うわよ? 私でもそうなるもの」

「……………そ、そうでしょうか?」

文香の質問に奏は頷きながら、ポ○キーを啜えた。

「それで、どこまでやったの?」

「……………どこまでと言われましても……………昨日から泊まりに来ていたの

ですが、スマブラやって、髪……あ、いやその後は一緒に夜ご飯作って、晩御飯作って、その時に指を……あ、いやなんでもありません。その後はホラー番組見て……」

「ふーん……それで、途中でごまかした二箇所は何があつたの？」

「……」

ニコニコと微笑みながら言われて、文香は黙り込んだ。だけど、言わないとなんか許してくれなさそうな雰囲気だったが、絶対に言いたくなかった。だから、素直にはぐらかした理由を白状した。

「……奏さん、髪の方は言いたくないです」

「あら、どうして?」

「……その、千秋くんの性癖に関わること、ですので……秘密にしておきたいんです……」

「……」

「……私以外の女の人に、知られたくない、というか……」

顔を赤くして途切れ途切れにそう言う文香を見て、奏はフツと微笑んだ。

「……そう、聞かないわ」

「……すみません」

「ううん、私もしつこく聞いちゃってごめんね。晩御飯の時の指の件も聞かない方が良い?」

「……はい。聞かない方が良いです」

「よし、聞いちゃおうかな」

「……」

即答されたので、即バレした。

「……言わなきゃ、ダメですか?」

「ダメ」

「……」

今度こそ観念したように文香は顔を真っ赤にして話し始めた。

「……その、料理してて、指を切っちゃって……」

「あら、大丈夫だったの?」

「……はい。それで、その時に千秋くんに心配していただいて……」

「いただいて？」

「……………指を啜えられて……………」

「それで!?!?」↑元気澁刺興味津々意気揚々

「……………少し、気持ち良くて……………私、変な性癖があるみたいで」

「……………」↑疲労困憊無味乾燥意気消沈

「……………もう一回、噛んで欲しいんですけど…千秋くんと言ったらド  
ン引きされてしまいますよね……………」

奏はどう反応したのか悩んだ。というか、自分が口を挟んで良い  
ものなのかも悩んだ。けど、なんか色々面倒になったので、ぶっ  
ちやける事にした。

「いや、大丈夫じゃない?」

「……………そ、それでしようか」

「うん。だって、彼の性癖がなんなのかあなたは知っているわけ  
でしょう?」

「……………は、はい」

「なら、彼にあなたの性癖を教えると、お互いフェアになった感じで、  
少し嬉しくないかしら?」

「……………確かに」

文香は顎に手を当てて呟いた。

「……………そうですね、明日にでも伝えてみようと思います」

「いや、そういうのタイミングを図らないと……………というか、明日って彼  
は学校でしよう?」

「……………そうですね?明日も千秋くんうちに来ますよ?」

「……………いや、あなた明日仕事じゃない」

「……………ですから夜です」

奏はスルーする事にした。

「それで、昨日はどうしてたんだっけ?」

「……………えーっと、ホラー番組見て……………それで一緒に寝て……………」

「えっ?いい、一緒に寝たの?一緒に寝て、何もしなかったの?」

「……………千秋くん、ホラー番組に心底ビビってて、それどころじゃな  
かったんですよ。私の手、絶対離さなかったんですから」

「あら、そうなの……。それで、今日は？」

「今日は……。朝、彼と起きて……。朝ご飯食べて……。そう、聞いてくださいよ。千秋くん、今日まで全然夏休みの課題やってなかったんですよ？」

「じゃあ何？教えてあげたの？」

「いえ、彼が全部一人でやってましたけど……。それで、終わった後……。」

そこで文香が思い出したのは、千秋とキスしたこと。直後、またまた顔を赤くした。

「……………」

「何？何かしたの？」

「……………その、口付けの方、を……………」

それを聞いて、奏はすっごい楽しそうな顔になった。

「何？どんな？どんなキス!?!?」

「はっ、ハッキリ言わないで下さい！」

「良いじゃない、それでどんなキスしたの？」

「……………その、普通にです」

「普通ってどんなのよ。ハリーとチョウミみたいな？」

「……………あ、あそこまで激しくしてません!!?」

「つてことは、そこそこ激しいの？」

「くくくっ！も、もう！奏さん！」

「冗談よ、冗談。ちなみに、どちらから誘ったの？」

「……………わたしです」

「……………あのへタレ」

奏は2本目のポ○キーを噛み折った。

「普通そういうのは彼氏からするものでしょう……………」

「……………ま、まあ千秋くんですし……………。あ、でもキスはこれから、会ったら毎日してくれるみたいですよ……………というか、私の方がキスしないと保ちそうにないです」

「ごめん、そこちよつと何言ってるのかわからない」

「私、恥ずかしながら、もう千秋くんとい日でも会わないと……………その日

は生きられる気がしなくて……。幸い、明後日は土曜日ですから、泊まっただけで済みます」

「あんた達……。そんなんで、本格的に学校始まったらどうする気なのよ。二学期は色々と学校でもイベントがあるものでしょう?」

「……。大丈夫です。文化祭も体育祭も、彼はサボって私の家に来るそうですから」

「いやいや、そういうんじゃないよ。てか、あの子とだけ暗い青春送ってんのよ……」

呆れ気味に呟いてから、奏は自分の伝えようとしたことを言った。

「……。彼、高校二年生なんでしょう? 修学旅行があるんじゃないの?」

「……。へっ?」

「三日か四日、長い所だと一週間くらいかしら? あなた、その間彼に会えない事になるけど、大丈夫なの?」

「……………」

文香はそのままフリーズした。

秋、それは文化祭でも体育祭でも修学旅行でもなく、ふみふみの誕生日の季節である。オタクは知らない間に感染している。

学校が始まり、数日が経過した。相変わらず、俺に友達などいなくて、一人でラノベを読みふける日々が続いた。まあ、それでも夜とかは文香さんの家で遊んだりするんだけどね。

修学旅行の班決めで盛り上がってる中、俺は相変わらず無関係無関心を貫いていた。何でも一緒だし。修学旅行は意図的にサボるのは難しいので、風邪を引くことに決定した。それまでに氷風呂に入り、上半身裸で寝て、冷えピタをおでこに貼る、完璧だな。仕事がなければ、文香さんに看病してもらえる特典付きだ。

そんな事を考えながら、教室の中でボンヤリしていると「鷹宮くん」と声が掛かった。

「？」

「まだ、班決まってない、のかな？」

「あ、そうですけど」

え、誰この女。こんな可愛い子、うちのクラスにいたっけ？文香さんの方が可愛いけど。

「良かったあ……なら、私と一緒に班にならない？中々、班員見つからなくて」

そう言うその女子生徒の周りには、女子が一人と男子が一人いる。全員名前を知らない。まあ、俺に選択権ないし、拒否権もないから了承するしかないけど。何より、どの班になっても風邪を引くから問題ない。

「良いですけど……」

「よかったー。じゃ、名前書きに行つて来るね」

黒板にその女子生徒は名前を書きに行った。他の二人は俺に話を振って来ることはなかったが、まあそんなもんだろう。俺の行動なんて、ヒツキー的に言うと、三人の後ろを黙ってついて行けば良い。俺



ガイル読んで良かったわ、

そんな事を思っていると、黒板に名前を書いた女子生徒が戻ってきた。全員の名前を書き終えたか。これで全員の名前を覚えよう。そう思っ、黒板を見た。

8班

- ・ 三村かな子
- ・ 男子生徒
- ・ 女子生徒
- ・ 鷹宮千秋

おそらく、一番上の名前が今書きに行った人の名前だろうな。三村さんか。一人くらいは班員の名前を覚えておこう。

×× 学校が終わり、俺は自宅に戻った。秋とはいえ、まだまだ暑い。この中、文香さんのマンションまで出掛けるのはしんどいが、向こうではそれ以上の見返りがある。行くしかない。

シャワーを浴びてから着替えて鞆を持って家を出た。途中、スーパーで買い物してからマンションに到着し、文香さんの部屋番号を入力した。マンションの管理人に「あいつまたここに来たよ」みたいに思われるのはマズイので、毎回帽子や服装を変えている。顔を覚えられるのは一番まずいから、帽子を被ってない時はマスクも着用している。

自動ドアが開き、マンション内を歩き、エレベーターに乗って上がった。到着し、玄関でもインターホンを押した。

「開いてますよー」

との事で、上がらせてもらった。

「どうも」

「……いらっしやい」

「あ、これ。晩飯買ってきましたよ。あと、アイスもあるんで、冷凍庫に入れておいて下さい」

「……毎度毎度すみません。ありがとうございます」

「いえいえ、俺もここで飯食うのが習慣みたいになってますから」

文香さんは袋を受け取って、台所に入った。俺は家の中に上がる  
と、とりあえずソファアに腰を下ろした。

「……………ふう」

「……………お疲れ様です。暑かったですか？」

「まだまだ夏ですからね」

「……………それはお疲れ様です。何飲みますか？サイダー、お茶、カフェオ  
レがありますけど」

「サイダーで」

「……………分かりました」

ラインナップが完全に俺のために揃えてあるんだよなあ。ありが  
たい。

文香さんが飲み物を入れて、トレーを持ってきた。

「……………晩御飯作っちゃいますね」

「手伝いましょうか？」

「……………いえ、大丈夫です。毎回毎回、手伝ってもらっては……………そ  
の、将来……………お嫁さんに、なれませんか……………」

「……………」

ああああああ!!？浄化されるううううう!!？可愛すぎんだろ  
この人おとおお!!？

「……………千秋くん？」

「……………死ぬ、可愛過ぎて死ぬ……………」

「……………か、かわっ……………!!？」

顔を赤くすんなああああ!!？尚更、可愛いだろうがああああ  
あああ!!？

「……………じゃあ、お願いします」

「……………は、はい」

文香さんは晩御飯を作り始めた。その間、俺は暇だったのでスマホ  
をいじっていた。

晩飯が完成し、二人で食べ始めた。作ったのはカレーだった。

「んっ、美味っ」

「……………良かったです」

ちゃんと俺の好みを捉えている。ジャガイモとか良い感じの硬さだ。柔らか過ぎるのは好みじゃない。

飯を食っていると、文香さんの視線が俺の口に集中してるのに気付いた。

「……………文香さん？」

「っ!?み、見てません!何も見てませんよ!?!?」

「……………」

なんか、一週間くらい前から文香さんが、食事中の俺をやけに見て来るんだよな。

「…………あの、なんか変ですか?」

俺、細かい食事作法とかは知らないが、割と礼儀正しい方だと思っ  
てただけだよな。

「いつ、いえっ!千秋くんは変ではありませんよ!?!?むしろ、変なのは  
私の…………性癖でして……………」

「はっ?」

「い、いえっ!なんでもありません!!?それより、どうですか?学校の  
方は!」

強引に話をそらされたので、仕方なくそっちに乗った。性癖の話は  
速水さんにも聞いてみよう。

「いつも通りですよ。一人でスマホいじってます」

「…………そういうことではなくてですね、その…………イベントとかです。  
そろそろ、そういうのを決める時期なのでありませんか?」

「ああ、今日は修学旅行の班決めの日でしたね」

「……………」

「あれっ?ど、どうしました?」

なんかショボンと肩を落とし始めた。なんかまずい事言ったかな。  
「……………い、いえ…………修学旅行の間、千秋くんと会えないと思うと  
……………」

「ああ、その心配はないですよ?」

「?」

「だって……………」

俺、風邪引きますから、と続けようとしたところで、俺の口は止まった。そんなこと言ったら怒られる。「修学旅行くらいちゃんとしてください！一生の思い出なんですよ!?!?」みたいな。最悪、看病に来てくれない可能性もある。ここは、黙っておくべきか。

「……………今は携帯とかあるじゃないですか。俺、ポケットW i | F i ありますから、遠距離でゲームも出来ますよ」

「……………そ、そうですね。大丈夫ですよ」

「はい。毎日、部屋抜け出して一人になれる場所探して、ちゃんと電話しますから」

「……………はい。分かりました」

まあ、風邪引くからそんなしないけど。

晩飯を食べ終わり、食器を流しに出して洗い物を手伝って終わらせると、二人でソファアの上に座った。

そして、俺は鞆から30Sを取り出した。

「やりますか?」

「……………やります!」

最近、文香さんが買ったモンハンXXをやる事になった。俺は太刀、文香さんはもちろん双剣。

「キークエなんですか?」

「……………レウスとレイアです」

「りよ。さっさと終わらせて上位行きましょ」

「はいっ」

×二人で狩りを始めた。

×

気が付けば、文香さんの部屋も大分変わったもんだ。俺が初めてこの部屋に来た時は本がバカみたいに多い事を除けば、割と普通の部屋だった。

だが、現在は普通の本の本棚とライトノベルの本棚と漫画の本棚に別れ、テレビの下の棚の上の段にはプレ4が設置されていて、そのプレ4の隣の箱の中には、30SやV i t a、そしてそれらのカセットの箱が敷き詰められている。下の段には、文香さんが気に入ったア二

メのBlu-rayディスクが並べられ、テレビの前にはフィギュアが何体か並んでいる。

ベッドの上にはポケオンとかのぬいぐるみが置かれていて、ベッドの隣の棚の上には、ヴァイス○ユヴァルツのデッキケースがいくつか並んでいて、その上の壁には色んなアニメのポスターが貼られている。そして、リビングから出口に繋がる廊下には、読み終えて付録も剥がした漫画雑誌が紐で結ばれて置かれていた。

「……………」

染まったなあ、この人。アイドルらしさゼロやん。少し羨ましいが、それ以上に俺の所為なのか？っていう罪恶感が…………。や、まあ俺の部屋よりはマシか。

そんな事を考えながら、軽く伸びをした。文香さんを無事に上位まで上げて、とりあえずそこでやめた。さて、明日も学校だし、そろそろ帰らないといけない。

「じゃ、俺そろそろ」

「…………は、はいっ。では、また明日、ですね」

「はい」

そう言っつて、鞆を持って玄関まで歩いた。靴を履いてると、文香さんが声をかけてきた。

「…………あの、千秋くん」

「はいっ」

「…………ちなみに、修学旅行っていつなんですか？」

「さあ？多分、11月頃」

「…………なら、良かったです」

「何がですか？」

「…………私の誕生日は、10月27日なんです」

「…………なるほど。覚えときます」

「…………はい。ちなみに、千秋くんの誕生日はいつなんですか？」

「5月9日」

「…………むっ、なら祝ってくれなくても良いです」

「なんでですか」

「不公平じゃないですか！」

「知りませんよ……。意地でも祝いますからね」

「……………むー」

なんで不機嫌そうなんだよ……。そんな会話はともかく、部屋を出て家に向かった。

エレベーターを降りて、マンションの出口を出た。しばらく家に向かっている時だ。「鷹宮くん？」と俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。まあ、文香さん以外で俺の事を呼ぶ奴なんてアイドルに限られてるが、今まで聞いたどのアイドルの声でもない。よって、俺と同姓の名前を呼んだと捉えるべきだろう。

そう判断した直後、俺の腕を後ろから引っ張られた。

「もうっ、鷹宮くんっ」

「？」

「どうして無視するの?」

声をかけて来たのは、三村さんだった。同じ班の。

「あ、どうも」

「何してるの?こんな時間に」

「あー……………ちよつと遊んでて、今帰ってるって」

嘘は言っていない。

「ふうーん、鷹宮くんも遊んだりするんだ」

「……………」

それは一体どういう意味なんですかね……。考えてることが顔に出たのか、三村さんは慌てて胸前で手を振りながら訂正した。

「い、いえちがうのっ!そういう意味じゃなくてっ……………どんなことして遊んでるのか、想像……………出来なくて……………!!?」

ああ、そういう意味か。まあ、別に特別なことしてるわけじゃないしなあ。

「モンハンとかかな」

「……………ゲーム?」

「うん。まあ、三村さんには無縁のものでしようっ」

「……………そうでもありませんよ。私の事務……………学外のお友達の中じゃ、

今P S O 2っていうゲームが流行ってるんです」

「それなら、俺もやってるよ」

「レベルは？いくつくらいなんですか？」

「プレイヤー、ハンター、バウンサーが75で……あとはそこそこかな？」

「す、すごいなあ……。私は、テクターが一番高くて42だよ……」

「あ、やってるんだ……」

学外のお友達か……は、ははっ、まさかね……？そんなドラゴンボール並みに各地にアイドルが散らばっててたまるかっただ。俺はドラゴンレーダーかよ。

「周りのみんなはもうS Hにいつてて……私、少し置いて行かれちゃってるんだ……」

「もしアレなら、レベリング手伝うよ。俺暇だし」

「本当に!?!?」

「ああ」

「なら、今日帰ったらお願いできるかな?……あ、シップはどこ？」

「5」

「よーっし、じゃあー……今の時間だと10:30からね？」

「了解」

あれ?なんで俺、知り合ったばかりの子とゲームやる約束なんてしてるんだらう……。三村さんとL O N Eを交換して、別れた。そういえば、あの人はこ

んな時間まで何してたんだらうな。俺も帰ろうと思って、自宅に歩き出した直後だった。後ろから手首を誰かに掴まれた。なんだよ、またかよ、誰だよ、キン肉バスターか

けんぞと思いいながら振り返ると、文香さんが未来日記の2ndのような目で立っていた。思わずビクツとしちゃったよ。

「っ!?!ふ、文香さん……!?!?なんで、こんなところに……!?!?」

無言で俺の3 O Sを見せてきた。あ、なるほどね。鞆に入れるの忘れてたのか。俺はありがたく受け取った。

「…………千秋くん、誰ですか?あの子は……暗くてよく見えなかった

のですが……………」

「あ、ああ、クラスメイトですよ。今日知り合いになった……………」

「……………」その知り合いになったばかりの子とゲームの約束ですか……………」

「や、だって周りに置いて行かれて可哀想だったから…………」。それにほら、クラスメイトと仲良くしといた方が、イベントの多い秋場とかは良いと思って……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「?」

手招きされたので、俺は文香さんに近付いた。耳を貸せ、みたいなモーションをされたので、耳を傾けた直後…………」。

「千秋くんのバカアアアアアアアアアア!!?」

怒鳴った文香さんは立ち去り、音爆弾を耳元で投げられた俺は、耳がキーンとして、その場からしばらく動けなかった。



趣味思考フェティシズムは人それぞれ。

「と、いうわけで、文香さんと喧嘩しちゃったんだけど……」

翌日の昼休み。屋上で俺は速水さんに電話をしていた。用件を伝えるなり、スマホの向こうから盛大なため息が聞こえた。

『全部聞いているわよ、文香から』

おお、それなら話が早い。

「文香さん、怒ってた？」

『……………』

あれ、返事がないな。何かあったのか？いや、文香さんと話したと言うことは、向こうの結論を知っているわけだ。

それを伝えるのが、俺と文香さんの仲直りの近道だ。それを速水さんが分かっているはずがない。それでも教えないということは、伝えるべきか悩んでいるという事だろう。

なら、俺は返答を待っただけだ。

『……………んー、一応聞きたいんだけどさ』

「はいっ」

『あなたの口からも昨日あった事を話してくれる？』

なるほど。文香さんからの報告だけでは、内容が片寄ってるかも、と思ったわけか。それなら、説明ないとダメだな。

との事で、説明をした。それを聞いた速水さんは、電話の向こうでしばらく黙り込んでしまった。

『……………』

「速水さん？」

『ちよっと黙ってて』

ふむ、なんか怒られちゃった。まあ、俺のために（或いは文香さんのため）に悩んでくれてるんだし、待機するか。……ただ、気になるのはなんで一々、話すのをやめる度に、小声で何か話してる事なんだよな。まあ、考えても仕方ないものは考えないが。

しばらく待っていると、速水さんは一つの結論に達した。

『……………自分でなんとかしなさい』

「えっ?」

散々考えててそれ?

『あんた達ほどいろんな意味でお似合いのカップル、そういないんだから。別れたら殺すわよ』

「ラジカル過ぎるよ!」

『何? ゆっこなの?』

日常見てるのかよこの人……。

『とにかく、自分で何とかする事、良いわね?』

「ああもう分かったよ。今日学校終わったら文香さんの家に顔出す」

『そんな必要ないわよ?』

「あ?」

『今、ここに文』

「あれ? 鷹宮くん? 何してるの?」

「えっ?」

『えっ?』

後ろから誰かに声をかけられた。振り返ると、三村さんが立っていた。

「……やばい、クラスメイトだ。また連絡する」

『えっ、ちよ』

電話を切った。まあ、文香さんの家に行くって伝えてあるし大丈夫だろう。万が一、クラスメイトにアイドルの知り合いがいるなんてばれたら、「サイン頼む」の連呼だろう。それだけはごめんだ。

「み、三村さん。何? どうかした?」

「い、いえ、私はお昼食べるの遅れてしまったから、ここで食べようって思っただけ」

「あ、そう。じ、じゃあ俺邪魔ですよね……。失礼します」

「いえ、そんなことないよ? 一人で食べるのは寂しいし、一緒にいてくれると嬉しいんだけど……」

「……そういうものなのか? いや、でも俺電話かけ直さないといけないし……」

「すみません、ちよっと電話しなきゃいけないんで」

「そ、そっか……ごめんね、無理に誘っちゃったみたいで……」  
「……そうやって謝られると、申し訳なくなるのは俺だけなんだろう  
か。」

「……電話終わったら戻ってくるんで。それで良い？」

「……いい、一緒に食べてくれるんですかっ？」

「俺は食べませんけどね」

一度、屋上を出てスマホから速水さんに掛け直した。

『……もしもし？』

「あー、速水さん？すみません、ちよつとクラスメイトが来たもんで。  
ほら、文香さんとの関係バレたらマズイじゃないですか」

『……文香です』

「……はっ？」

「……え、なんで文香さんが出てんの？掛け間違えたか？」

『……掛け間違いではありませんよ』

「あ、やっぱりか。あの、速水さんと一緒にいるんですか？」

『……はい』

何したんだよあいつ。俺と同じ年つてことは高校生だろ？何で学  
校サボってんの。まあいいや、そこら辺突っ込むとあいつ多分うるさ  
いし。

「あの、それで……なんで文香さんが？」

『……いえ、奏さんにスマホをお借りして……』

「や、そうじゃなくて。なんで俺の事怒ったのに電話代わったのか  
なーって……」

『……それは、その……謝り、たくて……』

「はっ？」

昨日の事か？なんで怒っておいて謝ってんの？

『……昨晚、理不尽に怒ってしまつて……』

「あ、いや……えっ？てつきり、俺がなんかやらかしたかと思つて、  
でも理由がわかんなくて速水さんに助けを求めようと思つてたんで  
すけど……」

『……いえ、昨晚は本当に私が悪かったです。千秋くんにだつて、クラ

スメイトと仲良くすることだってあるでしょうに……………」

「は、はあ……。まあ、別に俺は怒ってませんけど」

『……………ほ、ホントですか!?!?』

「はい」

まあ、実際怒ってないからな。そもそも俺ってあんま基本的に怒らないから。人の所為にするの嫌いだから。

『……………良かったあ。じゃあ……………その、今日。また、私の部屋に…来てくれますか……………?』

「はい。全然行きます」

『……………じゃあ、楽しみにしてますね!』

良かった、なんか元気戻ったみたいだ。さて、そろそろ俺、三村さんのところ戻らないと。

「じゃあ、また放課後。三村さんのお昼付き合わなきやいけないんで」

『はい……………えっ?三村さんって……………』

「失礼します」

電話を切った。……………あれ、そういえば結局、昨日はなんで怒られたんだろう。

少し考えながら、屋上の三村さんと合流した。

「すみません。お待たせしました」

「あ、ううん?さ、食べよう?」

おい、まだ弁当箱開けてねーのかよ。あと昼休み10分だぞ。

「……………や、別に先に食ってりや良かったのに」

「だって、せつかく一緒に食べるってなったから……………」

「俺はだから食べないんだって……………」

「……………食べる?私の」

「いや、いいよ」

言いながら俺は2メートルくらい距離を開けた場所に座った。

「えっ、なんでそんなに離れるの?」

「え、いやそんな離れてるつもりはないですけど」

「一緒に食べるんだから、もう少し近くでも良いよ」

三村さんは俺の隣に座って来た。あの、ちよっ……………近い近い近い近

いっつーの。

「えっ、あの……………」

「いただきます」

なんでそんな近づいてから普通に食うんだよ。もしかしてあれか、あまり距離感とか測らない子なのか？

「んー、美味しい」

おい、弁当箱の中クッキーとかしか入ってねーぞ。ちゃんと飯くらい食え。

「……………鷹宮くん」

「はい？」

「鷹宮くんは、私のこと知ってる？」

「は？」

何言っただこの子。サイコパスなの？この前知り合ったばかりだろ。

「そりゃ知ってますけど。同じ班に誘ってもらえましたし」

「……………うん。まあ、そうだよ。少し複雑かな」

「えっ？何が？」

「ううん。私的には、そっちの方が良いから」

「あ？そう？」

聞かれたくないニュアンスを含まれてたから、とりあえず聞かないでおこう。

「……………まあ、なんでもいいけど」

「それより、鷹宮くんは沖繩どこに行きたい？」

「んー……………アニ〇イトに行ければあとはどこでも」

「えー？沖繩まで行つて？」

「はい。あとは他の奴の好きな場所で良いよ」

「……………うーん、まあ鷹宮君がそう言うなら」

実際、行きたい場所なんてないからな。あるといえば美ら海水族館くらいだが、そういう見学する場所は一人でのんびりと見回りたいし。

「三村さんは行きたい場所とかあるんですか？」

「んー……サーターアンダギー」

「それは食べ物だろ……」

「あ、あはは……そうだよな。でも、私も海以外は特に行きたい場所があるわけじゃないんだよな」

「……あの、もしかしてお菓子とか好きなん？」

「う、うん……。自分で作ったりもするんだ」

「へえー……なるほどな」

なるほど……だからそんな文香さん並み、いや下手したらそれ以上の体型に……。

「……鷹宮くん？どうかした？」

「……やつ、な、なんでもないっ」

馬鹿、俺の馬鹿。俺には文香さんがいるだろ。文香さん以外で欲情するな。家帰ったら逆立ち腕立て伏せ50回だな。

「よし、ごちそうさまでした」

三村さんは食べ終わったのか、両手を合わせた。弁当箱を布に包むと、三村さんは立ち上がった。それに合わせて俺も立って、軽く伸びをした。

「よし、戻ろっか。もう授業始まるし」

「そーだな」

×教室に戻った。

×学校が終わり、放課後。家に戻って着替えて変装してから文香さんの家に向かった。本屋に到着し、マンションのインターホンで文香さんの部屋を鳴らした。

「文香さん？鷹宮ですけどー」

『……………』

「文香さん？」

無言のうちに自動ドアが開いた。……………入って良いんだよなこれ？

入って、エレベーターで文香さんの部屋の階まであがった。部屋の前に到着すると、再びインターホンを鳴らした。鍵が開く音がしたの

で、ドアノブに手をかけて入室した。

「お邪魔しま……えっ?」

中に入ると、文香さんが目のハイライトをオフにして立っていた。なんというか、闇のオーラの的な、それこそ深遠なる闇の出現レベル、アークス12人で挑む奴みたいなオーラを出していた。

「ふ、文香、さん……?」

「………千秋くん、少しお話よろしいですか?」

「は、はい………」

え、なんで怒ってんの?俺何かしたっけ………?

とりあえず、上がらせてもらった。のだが、上がるなり床の上で正座させられた。

「………千秋くん」

「はっ、はいっ」

「………お昼、私と電話しましたよね?」

「しましたね。それが何か……?」

「………その時、誰のお昼に付き合わないと仰いましたか?」

「えっ?えーっと、三村さんです、けど?お知り合いですか?」

そんなまさか。文香さんにそんな歳下の知り合いをアイドル以外で作れる社交性があるとは思えないし。

「………その方は女性ですか?」

「はい。同じクラスの。修学旅行でも同じ班なんですよ」

「………その人とは、どういう関係なんですか?」

「どういうって、今言った通りの………」

「………お昼休みに、一緒にお昼を食べるほどの仲なんですよね?」

………ああ、これもしかして。昨日、怒られた理由も分かったわ。

「………もしかして、ヤキモチ妬いてるんですか?」

「………」

文香さんはふいっと顔を背けた。

「大丈夫ですよ。俺、浮気なんて絶対しないし、三村さんとは本当に修学旅行で同じ班ってだけですから」

「………本当に?」

「はい。だから、安心して下さい」

「…………不安にも、なりますよ」

「えっ、俺ってそんな信用ないですか?」

何それ死にたい。

「…………だって、千秋くんのお知り合いの女性は、みんな可愛いじゃないですか」

「え、そうですか?そもそも知り合いの女性が少な」

「…………全員アイドルじゃないですか」

「…………確かに」

可愛くないわけがなかった。納得しちゃったよ。

「…………だから、その…………不安になってしまっんです。どうしても」

「大丈夫ですよ。三村さんはアイドルじゃありませんから。大体、流石にそんなにたくさんアイドルと知り合えるわけがないでしょう?」

「どの口が言いますか」

「……………」

うん、今のも納得した。文香さん以外にも、速水さん、塩見さん、橘さん、渋谷さん、神谷さん、北条さん、アーニヤさん、宮本さん、大槻さん、島村さんと11人。なでしこジャパン組める上に、文香さんを入れれば控え選手を一人付けられるまでである。

「…………すみません。でも、三村さんはホント違いますから」

「…………私だってアイドルだと思ってるわけではありません。ただ、クラスに可愛い女子生徒はいてもおかしくないよ」

「三村かな子さんっていう人なんですけど」

「…………今なんて?」

「えっ?」

文香さんの目つきが鋭くなった。

「み、三村かな子さん…………?」

「k w s k」

「や、そんな詳しくは知らないですよ。ただ、今日話した感じだと、お菓子作りが好きで、声が古鷹型に似てるって事くらいで」

「……………」



あれ、なんか文香さんすごい俺の事睨んでる。え、なんで？俺、何かしちゃった？

「……………で、なんか結構不思議な子みたいでして。なんか、飯食ってる時に『私のこと、知ってる？』とか聞いて来て。知らねーわけねえっつもの。同じ班に誘って来た張本人だろが」

「知らないじゃないですか」

「えっ」

この人まで何を言い出すのか……………。どういう意味なのか聞こうとしたが、文香さんはため息をつけて少し考え込んだ後、呟いた。

「……………言わないでおきましょうか」

「はっ？」

「……………いえ、なんでもありません。その三村さんとは何もないんですね？」

「ありませんよ」

文香さんの纏っている闇のオーラが消えていった。俺はホッと息をついた。その一瞬の油断を突いたように文香さんは言った。

「……………でも、許したわけではありません」

「……………はっ？」

「……………今の会話で、修学旅行の間は尚更不安になりました」

えっ、なんで……………。そんなに信用ないのかな俺。

「……………ですから、その……………千秋くんには、私の趣味に付き合ってもらいます……………」

「良いですよ別に」

「……………言いましたね？」

文香さんの趣味でしょ？全然良いよ？むしろ、こっちからお願いたいくらいだ。

そんな事を思っていると、文香さんは突然自分の着てる服のボタンを下から外し始めた。

「っ!?…ふ、文香さん!?？」

何してんの!?? 的なニュアンスを込めて聞いたが、無視してボタンを外す。おいおいおい、待て待て待て。そういう不純異性交遊はあな

だがアイドルをやめてからって俺は決めて……………!!？」

と、思ったら、なんか俺に向けて人差し指を差し出して、とんでもないことを言い出した。

「……………千秋くん」

「は、はいっ」

「……………何も聞かずに、その…噛んでください」

「はっ?」

「聞かないでください!!?」

はっ?や、無理だろ。お前今なんつった?

「……………どういうこと?」

「聞かないでください!!?」

「いやいやいやいや無理無理無理無理。説明して下さいよ」

いきなり噛めって何?何プレイ?ペットだと思われてんの?

「……………どうしても、ですか……………」

「そりやまあ」

「……………」

文香さんは恥ずかしそうに顔を赤らめて目を逸らした。言うか言うまいか悩んでいるのだろう。だが、やがて観念したように口を開いた。

「……………夏休みの最後、私の家で一泊したじゃないですか」

「はい」

あの日か。

「……………その時に、その……………一緒に料理したじゃないですか」

「はい。しました。文香さん、指切っちゃった時ですよ?」

「……………その時、指を咥えていたとき、その……………変な、快樂が身体中に、響き渡って……………」

「……………はっ?」

「ち、千秋くんが私の匂いを嗅ぎたがるのと同じです!!?私は千秋くんに噛まれたいんです!!?」

「……………」

そ、そんなこといきなりカミングアウトされても……………。すると、

再び文香さんはプルプルと手を震わせて、人差し指を立てた手を俺に向けた。

「……………そ、そういうわけです、その……………お願いします……………」

落ち着け、俺。これは良いのか？いや、噛むことは嫌ではないし、匂い嗅ぐのと同じと言われればそうなのだが、不純異性交遊にならないか？落ち着いて検証してみよう。

噛む、というのは日常を逸脱した行為だ。癖で、よく爪を噛む人もいるが、他人に噛まれるということは無い。

逆説的に言えば、他人に噛まれるケースを思い付けば、条件はクリアされる。考えろ。文香さんのためにも。

- 1、赤ちゃんはお母さんの乳首しゃぶる。
  - 2、以前のように傷口を舐める事もある。
  - 3、キスで相手の口の中を舐め回す事もある。
- ……………三つも事例があるなら大丈夫だろう（）。

俺は目の前の指を恐る恐る啜えた。直後、文香さんは目をキュツと瞑った。紅潮した顔から、乱れた吐息が漏れる。なんかすごいエロい。

……………えーつと、ここからどうすれば良いのだろうか。悩んでると、文香さんは震えた声で言った。

「……………ち、ちあきさん……………」

「……………ふあい？」

「……………さ、そのまま吸って下さい……………」

「ふ、ふうっへ……………？（訳…吸うって？）」

「傷口を、吸う、みたいに……………」

よく分からなかったので、とりあえずストローを吸うように吸ってみた。すると、文香さんはなんかすごい感じてるのか、目をキュツと閉じたまま、顔を赤らめている。

「……………んで、ください……………」

「へっ？」

「……………か、噛んで、下さい……………」

「……………いや、待て待て待て。」

「……………え、噛んでっつて……………」

「……………お願い、します……………」

「……………」

仕方ないので、少し歯を立ててみた。

「んうっ……………!!?」

「っーい、痛いですかっ?」

「……………っつ、続けて下さい……………!!?」

慌てて口を離して聞いたが、文香さんはそう答えた。仕方ないので、俺は続けた。

しばらくそのまま指以外にも腕や脚も噛ませられ、文香さんはようやく満足(?) したのか「も、もう大丈夫です……………」と言われた。腕や指はともかく、脚は流石にムラムラしたわ。ていうか、今もムラムラしてる。

と、思ったら、文香さんは何故か上に来るシャツのボタンを外し、肩まで露出し始めた。

「いつ……………!? ふ、文香さん!??」

「……………さ、最後に……………く、首筋を……………」

「く、首筋!??」

「やらないと他の女の子とお昼食べたこと、許しません!!?」

「ッ……………!!?」

ず、ずるい……………てかなんだ? ストライク・ザ・ブラッドでも読み返したのか?

しかし、そう言われれば俺も従うしかない。髪をかきあげる文香さんの後ろから、首筋を噛み付いた。

「あっ……………!」

声にならない声を上げる文香さん。……………あ、ダメだ。こっちの性欲が限界だ。このままじゃ襲ってしまう。だが、それはアイドルを文香さんが辞めてからじゃないと絶対にダメだ。ゴムもないし。

何とかしてこの性欲を別の所で発散しないと……………!!? そうだ、匂いだ。文香さんの匂いをゼロ距離で嗅いで満足しよう。それしかな

い。

そう決めると、俺は後頭部に鼻を押し付けた。

「ーッ!!?……っ、ち、あきつ、くんっ……!!?」

すみません、これで発散しないと無理そうです。後頭部に顔を押しつけながら、首筋を噛んだ。文香さんがどんな顔をしているのか見えないうが、これでムラムラが収まるまで押さえるしか……あ、あれ?なんか、収まるどころか、余計に……。

すると、文香さんが俺の前で脚を開いて、両手を広げた。まるで、俺に触ってくれとでも言わんばかりに。さらに、ふと窓を見ると、反射して映ってる文香さんは、顔を赤らめて後ろにいる俺を、何かを訴えるような目で見ていた。

おい、それはっ……ナニを訴えてる目だ……??

心の中で、俺がそう聞いた直後だった。

ピンポーン

その音で、俺も文香さんもビクビクツと身体が跳ね上がった。そして、二人揃って音の方を見ると、速水さんがインターホンに映っていた。

なんか急に恥ずかしくなり、俺達はお互いに慌てて距離を取り、文

香さんはインターホンのボタンを押した。

「は、はいっ!?」

『文香ー? 今日もノロケ話聞きに来てあげたわよー』

「は、はいはい! 今開けますね……!!?」

今日もってことは、今日以外もこの人速水さんに色々話してんのか……や、別に良いけど。

俺も文香さんも、顔を赤らめたままお互い目を合わせた。

「……さつきまでのことは、奏さんに悟られないようにしましうか」

「あ、当たり前です……」

ちなみに、文香さんの乱れた髪、腕や足の噛み傷、掛け違えたシヤ

ツのボタン、真っ赤になった顔で、普通にバレてメチャクチャ怒られた。俺今日、怒られてばっかだな。

## スキル：フラグメーカー

金曜日の夕方。今日は文香さんが用事があるとかで、俺は久しぶりに一人だった。俺、一人の時とか何してたっけな……。全然分らん。とりあえず、暇だからテレビでも見るか。というわけで、テレビをつけた。M〇テやってた。音楽か、アニソンとかは流れねーし興味ねーな。

そう思つて、テレビを回そうとした時だ。

『続いては、CAERULAの皆さんです』

ピタツと俺の手が止まった。おい、そいつら確か文香さんのいるユニットだよな？撮影が終わった次の日から文香さんに関することは全部調べ上げた俺に隙はない。

予想通り、テレビには塩見さん、速水さん、橘さん、二宮さん（名前だけ知ってる）、そして文香たんが映っていた。

「……タモさん（タモイさん）、文香さんに手を出したら虐殺するからな」

幸い、席は遠い。誰か一人でも指一本触れてみる。全員泣かす。

すると、タモさんが質問し始めた。

『ところで、塩見さん。最近、なんかアイドルの間にゲームが流行つてると聞きましたか？』

俺の背中に冷たい汗が流れた。

『そうですね。最近はゲームが流行っています。オンラインゲームですな』

『へえ……ちなみに、なんてゲームなんですか？』

『PS〇2って言われてるゲームなんですけどね。みんなで時間合わせて、指定の場所に集まって、狩に行ったりしてるんです』

おいしい!!?なんで言うの!!?なんで言うの!!?何考えてんの!!?』

『……ちなみに、どんなゲームなんですか？』

『アクションゲーム、ですね。モンスターを倒してレベルを上げていく感じですよ』

『そうですか。……ちなみに、この中でそのゲームやってる人はどれくらいいるんですか?』

すると、全員無言で手を挙げた。その反応に、タモさんは若干引き、俺は額に手を当てた。あいつら……間違いなくファン滅るぞこれ……。つーか二宮さんもやってんのかよ……お前は俺と関係ねえだろ。

『な、なるほど……。ゲームを始めたきっかけ、みたいなものはあるんですか?』

おい、待て。それはパンドラの箱だ。頼むから正直に答えるなよお前ら。

『んーなんでだっけ?』

『なんか、誰かがやってたからみんな連鎖的にやってたよね』

塩見さんに話を振られても、速水さんはベストとも取れる返しをした。うん、それ最高。

『そうでしたっけ? 文香さんからじゃ……』

『いやっ! 何と無くだよね! 多分、荒木さんとかが流行らせたんだよね!』

橘さんが素で何か言い出したので、慌てて塩見さんが隣から黙らせた。よくやった、塩見さん。今度ラーメン奢るわ。

そのまま、タモさんとしばらく話していたが、文香さんは何か口を開くことはなかった。うん、話振られても文香さん会話とか苦手だし。最初、会った時とかかなり苦労したからなあ。

すると、音楽のスタンバイに入ったので、俺はスマホで撮影を始めた。さて、これで明日、文香さんをからかうか。

×

翌日。M〇テの直後だったからか、文香さんは仕事が休みのよう

で。文香さんの部屋に入った。

「お邪魔します」

「……………あ、いらっしやい。千秋くん」

「どうもどうも」

「……………どうぞ、上がって下さい」



「昨日はお疲れ様でした。M〇テ出演」

文香さんは無言で何も無い場所ですっこけた。

そして、四つん這いになったまま、真っ赤になった顔で俺を睨んだ。

「……………みつ、見てたんです、か……………」

「はい。スマホのビデオで撮っておきました」

「っ！けっ、消してください！」

「消しても良いですけど、もうパソコンに保存してあるんで」

「っ……………ううう……………昨日に限って、ステップ一回失敗しちゃってるのに……………恥ずかしい……………」

「そんな、恥ずかしがらなくても良いですよ。なんていうか、こう……………と、とても可愛かったですし……………」

「っ……………も、もうっ！そういうこと言わないで下さい!!……………か、かわいい……………えへへっ」

そういう風にはにかむのやめて下さい。ときめいてしまいます。

「ちなみに、この動画。昨日から毎晩見ながら寝る事にしました」

「っ!!??な、なんでそういうことするんですか!!??」

「いや、良い感じにこれが眠れるんですよ。文香さんがノリノリで踊ってるのを見ると、こう……………安心感に包まれるというか……………」

「……………なんでそれで安心するんですか?と、とにかくダメです！せめてスマホの方は消してくださいっ」

「……………分かりましたよ」

仕方ないので、削除した。まあ、パソコンには残ってるし、良いか。

文香さんはため息をつきながら小声で呟いた。

「……………まったく、昨日のライブで少し疲れてるのに……………」

それに、俺は思わず反応してしまった。

「……………疲れてるんですか?」

「……………は、はい。少し」

「なら、今日は家にいましょうか」

「……………何か予定があったのですか?」

「や、良いですよ別に。気にしないで下さい」

「……………むっ」

言いながら文香さんは立ち上がった。で、不機嫌そうに腰に手を当てて、俺の顔の前にグイッと顔を近づけて来た。

「……………なんですか？ちゃんとか考えてくれてたんでしよう？」

「や、本当大したことじゃないんで」

「……………言つてください。じゃないと今日は泊まらせてあげません」

「あ、いや本当大したことじゃないんですけど……………。今日はたまには表に出てゲーセンでも行こうかと思ったんですけど……………」

「……………ゲーセン？」

「あまり行ったことないですよ？だから、たまにはどうかかって思ったんですけど、よくよく考えたら、テレビ出た直後に表歩くのはマズイですからね」

「……………」

すると、文香さんはまたムツとした顔になった。

「……………もう、どうしてそんな事言うのを渋ったんですか」

「や、だって疲れてるなら無理して欲しくありませんから」

「……………私は、千秋くんと遊ぶのなら多少無理しても大丈夫です。疲れと感ずることもありません」

「や、でも周りにバレたら……………。家出るところだって、周りの人に見られたらマズイんですし」

「……………それは、そうですけど……………」

「……………」

方法は一つか。

「来週にしましょう、ゲーセンは。ほら、現地で待ち合わせなら家に入る所も出る所も見られないでしょ」

「……………そうですね。分かりました。千秋くんとゲームセンター、楽しみです♪」

文香さんは楽しそうにそう言った。ようやく落ち着いて、とりあえず部屋の中が上がった。

さて、今日は何をしようか。とりあえずゲームかな？と思ったら文香さんは「あ、そうだ」と手を叩いてポケットから何かを取り出した。

「……………見てください、これ」

「？」

文香さんが取り出したのは、オモチャの手錠だった。えっ、なんで手錠？

「…………アニメ銀魂第166話『一つより二つ、一人より二人』って知ってますか？」

「ああ、銀ちゃんトシが手錠で繋がる奴？」

「…………はい。それを、少し試してみたくありませんか……」

「はっ？」

「…………ダメ、ですか…………？」

「や、別に良いですけど……。でも、あれやるなら二つないと……」

「…………さ、さすがに二つはアレかな、と、思いました」

一つでもアレだけど……。まあ、たまにはそういうのも面白いかもしれない。さすがに、副長みたいに鍵なくすなんて事も無いだろうし。

俺は右手を差し出した。右手を差し出せば、文香さんが使う手は左手だ。向こうは不便もしないだろう。

「どうぞ」

「…………で、ではっ」

文香さんは俺の右手と自分の左手を手錠に掛けると、なんか知らんがすごい満足そうな顔をした。

「…………ふふっ、じゃあ何かしましょうか」

「嬉しそうですね」

「…………そうですか？でも、他にもアニメとか見てやってみたい事とかあるんで、それが出来るのは確かに嬉しいかもしれません」

「例えば？」

「うーん…………アレです、具象化しりとりとか」

「いやそれは無理でしょ……」

まあ、良いけど。このまま何すりや良いのかな。とりあえずゲームとか？

「何します？…これから」

「…………そうですね。とりあえず、ゲームとか？」

「たまには、ゲームといっても他のゲームやります？将棋とかポーカーとか」

「……………ああ、良いですね。私も、ノーゲームノーライフを見てから、そういうボードゲームやカードゲームもやってみたいと思っていました」

「一応、持って来たんですけど」

ゲーセン行かなかった時のためにな。2nd計画(この言葉カッコいい)は大事。

そういうわけで、将棋をやることにした。ノーゲームノーライフで将棋ってやってたっけ？まあ良いか。食卓に座ってボードを広げ、駒を並べた。

「文香さん、ルール分かりますか？」

「……………大丈夫ですよ」

「やるなら罰ゲームつけませんか？」

「……………そうですね。では、なんでも小さな願い事を一つ聞く、というのはどうでしょう？」

「了解です。じゃ、先手どうぞ」

「……………盟約に誓って」

「盟約に誓って」

「アッシエンテ！」

と、いうわけで、将棋を始めた。

〜30分後〜

完封で負けた。マジかよ、文香さん将棋強い。

「……………嘘」

「……………ふふ、やりました」

マジでか……………。この人、思ったより頭良いのか？いや、本を読んだりやそれだけ知識が入って来るのは当然だが。や、でもそれを将棋に応用できるとか怖過ぎるんだけど。

「もっかいです」

「はい？」

「もっかいー！」

「……………良いですけど、その前にお問い合わせください」

「アツハイ」

そうだ、忘れてた。文香さんは顎に人差し指を当てた後、良い笑顔で言った。

「……………では、今日一日、私の事をお姉ちゃんと呼んで下さい」

「……………はっ?」

「……………私、姉弟に憧れてたんです」

「……………」

意外とマニアックなことを……………!だが、約束は約束だ。果たすしかない。

落ち着け、俺。二人しかない状況下で相手の名前を呼ぶことなんて少ないだろ。会話の相手なんて一人しかないんだから。回避の方法なんてある。

「……………とにかく、もう一回です」

「……………ちゃんとおねだりしないと嫌です」

「さつき良いって言ったじゃないですか!!?」

「……………言ってます」

「言った!」

「……………じゃあ変更です。おねだりするまで再戦は無しです」

「つ……………!お、お願いします……………」

「……………誰に頼んでるんですか?」

「二人しかいないでしょう!?!?」

「……………私、バカなので分かりません。あ、もしかしたら幽霊でも見えてるんですか?」

「幽霊!?!?いるの!?!?」

「……………いや、そっちで怯えられると、それはそれで困るんですけど……………冗談ですよ。でも、ちゃんとお願して下さい」

……………よかった、幽霊はいないんだな。しかし、ここまで分かりやすく調子に乗られるとは……………いや、負けた俺が悪いんだけどな。

とにかく、お願いしてこっちも仕返ししてやりたい。恥ずかしいが、背に腹はかえられぬ。

「……………も、もう一回お願いします……………お姉、ちゃん……………」

「ーっ！可愛いです千秋くん！普段、ゲームで負けたりして煽って来るから尚更ー！」

う、うぜえ……………！調子に乗った文香さんは、俺の頭を撫で始めた。

「…では、優しいお姉ちゃんがもう一度、相手してあげましょう」

「……………」

我慢だ。次のターンまでに仕返ししてやれば良い。

再戦した。

く2時間後く

0勝5敗。

「もっかい！もう一回頼みますお姉ちゃん!!?」

「……………はいはい。何回でもお相手しますよー」

絶対におかしい!!?なんで勝てないの!!?どう考えてもおかしい

!!?

「……………その前に、罰ゲームですよね。……………と、言ってもこれ以上にお願  
いすることなんて……………」

課せられた罰ゲームリスト

・お姉ちゃんと呼ぶ

・首筋にキスマークをつける

・文香さんのスカートを履く

・文香さんのストールを巻く

「……………あ、じゃあヘアバンドつけていただきましょわか」

「……………」

課せられた罰ゲームリスト

・お姉ちゃんと呼ぶ

・首筋にキスマークをつける

・文香さんのスカートを履く

・文香さんのストールを巻く

・文香さんのヘアバンドをつける（↑New!）

畜生……………せめてスカートは外したい……………!

「……………弟、というよりも妹みたいですわね?」

「……………るせー」

「んっ？何か言いました？」

「……………なんでもないです」

「……………さ、では再戦しましょうか」

畜生……………！楽しそうな顔してんなあ。そんなに俺を辱めて楽しいか？

「……………次は、どうしましょうか。メイクでも……………あつ、私メイクできないんでした……………。じゃあ……………」

もう勝った気でいるし……………。何とかして勝たないと……………。しかし、将棋か……………。ルールは覚えてても試す相手が過去にいなかったのが盲点だ。今度、速水さんあたりに特訓させてもらおう。

駒を並べ終えた所で、文香さんは「あつ」と声を漏らした。

「……………その前に、お手洗いに行っても良いですか？」

「……………どーぞ」

「……………千秋ちゃん、不貞腐れないで下さい。後で言うこと一つ聞いてあげますから」

「そんな残念賞いるか!!??てか誰が千秋ちゃんですか!!??」

「……………ふふ、冗談です」

微笑みながら、文香さんは自分のポケットを弄った。

「どうしました？」

「……………いえ、手錠の鍵が……………」

ああ、そういう手錠してたな。すっかり忘れてた。流石に異性だし、いや同性でも嫌だけどトイレに一緒に行くわけにはいかないよな。

俺はお茶を一口飲んで、次の将棋の手を考えていた。が、いつまで経っても文香さんが動き出さないことに気付いた。ふと文香さんを見ると、さっきまでの楽しそうな表情と違って、顔色が酷く悪い。

……………おい、まさか……………！

「……………文香さん??」

「……………どうしましょう」

「……………」

「…………鍵、無くしちゃった……………」

思うべき事は色々があると思うが、とりあえず真つ先に思い浮かんだのは「因果応報とはこの事か」という率直な感想だけだった。



ムツツリという枷を外すと性欲は暴れだす。

く前回のあらすじく

ちあき「昨日M〇テ見たべ」

ふみか「銀魂ごっこです！あなたを逮捕します！」

ちあき「たまにはボードゲームでもしませんか？」

ふみか「負けたらいうこと一つ聞いて下さいね？」

ちあき「将棋してたらいつの間にか女装していた件について」

ふみか「お手洗いにいきたいので手錠外しますね」

ちあき「りよ」

ふみか「鍵見当たらないンゴwww」

×ちあき「因果応報也」

×

「……ど、どうしましょう……」

文香さんは慌てた様子で涙目で俺を見上げた。本当はすごい仕返してやりたい所だが、流石にトイレはマズイ。間違つて漏らされた暁には、嫌われてもおかしくない。

「その辺に落ちてるかもしれないし、探しましょう」

「……で、でも、その……我慢が……」

「どのくらい保ちますか？」

「………わかりませんが、あと5分くらいなら」

それまでに探せば良いのか。

「………ちなみに、間に合わなかつたらどうします？」

「………どうするって………」

「俺も一緒にトイレに入っ」

「っ!?だ、ダメです！絶対に探して下さい!!？」

「は、はいっ」

すごい真つ赤な顔で怒られたので、俺は慌てて探しに行こうとしたが、手が拘束されてるので探しに行けない。

「あの、文香さ……お姉ちゃんも一緒に………じゃないと探せないです」

「………そ、そうですよね。頑張ります」

いや頑張らなくても良いけど。そんなわけで、二人で鍵を探し始めた。しかし、見つからない。ソファアーのとか机の下とか覗き込んでも見当たらなかった。何でないの？つーかこれと同じパターン、何かの漫画で読んだ事あるぞ……。なんだっけかな。

「ち、千秋くん！真面目に探してくださいっ！」

「ああ、はいはい」

涙目で怒られて思考停止。だけど、すぐに見つからねえと思うんだけどな……。ていうか、今更だけど特徴聞いておくか。

「お姉ちゃん、鍵ってどんなのなんですか？」

「……………」

「お姉ちゃん？」

「……………うつ、動き回ったら……我慢の、限界が……………！」

なんっ……………だと……………!??

「もうトイレに行きましょう！俺は身体をトイレからはみ出させますから！漏らすよりマシでしょう!?？」

「む、無理です！いくら千秋くんの前でも、おしつ……………用を足してる音を聞かれるのも恥ずかしいです!!？」

「落ち着いて下さい！今の俺は千秋くんじゃありません！千秋ちゃん、あなたの妹です!!？」

奥の手を使うと、文香さんは少し考え込んだ。そして、顎に手を当てて「確かに……………」と呟いた。え？これで納得したの？

すると、文香さんはもじもじしながら呟いた。

「……………では、そ、その……………お手洗いに……………」

「は、はい……………」

「……………ちゃんと、それでも身体はみ出させて下さいね」

「分かっていますよ」

そういうわけで、俺は文香さんとトイレに入った。

これで終わりと思った？まだ問題は続くんですよねーこれが。文香さんの家のトイレは、トイレットペーパー、つまり壁側が左手側にある。左手に手錠を掛けるから、俺の体をはみ出させるのは不可能だ。

「っ!?」

お陰で、一度錯乱しかけた文香さんの思考が戻ってしまった。

「……………ふ、文香さん?」

「やつ、やっぱり無理です!妹に見られるなんて無理です!」

デスヨネー。だけど、よく考えろ。妹の前で失禁する方が無理だろ。

「俺前向いてるから!なんなら目を閉じてるから!!?」

「……………ほ、ホントに……………?」

「ホントです!だから早くしないと……………!!?」

「……………嘘ついたら針千本吞ませますからねっ」

可愛いなあ、現役女子大生がそんなこと言うなんて……………。

そんなわけで、俺は目を閉じて文香さんと一緒に個室トイレに入っ  
た。

×

×

文香さんはソファで俺の膝の上で涙を流していた。あの手錠、鍵  
なんてなかった。側面のボタンで外れるタイプだった。

その事実や、俺の目の前でおし○こした事実がかなり恥ずかしかつ  
たようで、もう号泣である。

「……………ひっぐ、えぐっ……………!」

「……………ふ、文香さん……………仕方なかったんですから、そんな泣かないで  
ください……………」

現在、俺は着替えて普通の服装。妹ではなくなった。しかし、一時  
的にとはいえ、あんな説得に応じようとするなんて、この人詐欺とか  
に簡単に引っかけりそうだな。

「……………でっ、でもっ……………!わだじのっ、お○っこっ……………見られっ…  
グスツ…鍵なんてながっだのにつ……………ひぐっ……………」

「……………」

すごい泣かれて、とりあえず俺は文香さんの頭を撫でた。やれや  
れ、これじゃあどっちが姉なのか兄なのか分からねえぜ……………。まあ、  
前々から俺は文香さんを歳上だなんて思ってたからな。何な  
ら俺より歳下だと思ってるまである。

「文香さん、落ち着いて下さい」

「……………千秋くん……………」

千秋軍ってなんだよ…………。アニヲタ軍団みたいじゃねえか。……いや待てよ？今のクローネってアニヲタ集団と変わらないから、ある意味千秋軍なんじゃ…………。いやいやいや、絶対あり得ないやめろ俺の所為じゃない。

って、そんなことどーでも良いから文香さんを落ち着かせないと。

「今回は不可抗力だったんですし、気にしない方が良いでしょう。俺だって同じ立場であることは十分考えられたんですし。だから泣かないでください、文香さん」

「……………千秋くん……………」

文香さんはようやく顔を上げた。

「そもそも、監獄学園では男におし○こするとこ見られたり、男におし○こ掛けられたりしてる女の子もいるんだから、大丈夫ですよ」

「……………今のは台無しです」

「ご、ごめんなさい……………」

でもまあ、と文香さんは呟いて起き上がった。

「……………ありがとうございます、千秋くん」

「……………」

「……………やっぱり、千秋くん優しいから大好きです」

文香さんは微笑みながらそんな事を言い出した。ちよつ、馬鹿お前……………何言い出してんのいきなり？てか、文香さんも言っついて照れてんじゃねーか。

「……………文香さん」

「……………な、なんでしよう」

「今の台詞、もっかい言ってくれますか？ビデオ撮るんで」

「っ！絶対に嫌です！」

文香さんはポコポコと俺の肩を叩き始めた。はっはっはっ、文香さん意外と力あるからそれ割と痛いんだよなやめて下さい。

まあ、元氣出たなら何より。これからどうするかな。文香さんのポコポコ百裂拳を肩で受け止めながら考えてると、隣からグウツと可愛

らしい音が聞こえた。

横見ると、文香さんが顔を赤くして動きをピタリと止めていた。

「……………」

「ツ…………ツ…………」

……………ダメだ。今笑ったら殺される……………!!?俺は必死で笑いを堪えていると、文香さんはキツと効果音がしそうな勢いで俺を睨んだため、俺は目を逸らした。

「……………何笑いを堪えてるんですか!?!?」

「……………ふふつ、いやすみません……………」

「もー!もー!」

「今日、文香さん散々だなーと思ひまして……………プハッ」

「あー!また笑ったー!」

「今日は俺が作りますよ。少し待ってて下さい」

「……………生姜焼きが食べたいです」

「了解」

生姜焼きか…………。ガッツリ行くなー文香さん。相当ストレス溜まってんのかな。

とりあえず、料理を完成させて、食卓に並べた。いただきます、と二人揃って挨拶して、文香さんが先に肉を一枚食べた。

「……………ほんとに千秋くん、料理が上手ですね。少し、自信をなくしてしまいます」

「そうですか?まあ普通ですよ」

「……………普通ではないです。私には、こんなに美味しく作れませんから」

まあ、そりやそうだよ。文香さんの好きな味付けとかを研究して作ったからな。

「けど、所詮素人の料理ですから。文香さんだってレシピ覚えれば出来るでしょう」

「……………まあ、そうですね」

「それに、俺は文香さんの料理の方が好きですから」

「っ、も、もう……………!乗せるのが上手いんですからっ」

「そんなつもりはありませんよ」

文香さん可愛いなあ。これで、今日の晩飯は文香さんの手料理かな。楽しみだ。

そんな事を話しながら食事を終えて、俺は食器を流しに出した。さて、これからどうするか。まあ、正直俺も文香さんも一緒にいるだけで幸せを感じる事が出来る安上がりなタイプだからなあ。何かしなくちやいけないわけでもないんだが、それでも遊びに来てるなら何かしたい（矛盾）。

文香さんとは言えば、いつの間にか俺の隣で本を読んでいる。まあ、本と言っても、新訳とある魔術の禁書目録10巻だけだ。

……文香さん、本読んできるときは無防備だからなあ。少しイタズラしてみるか。俺は文香さんの後ろに回り込み、髪の毛を持ち上げてみた。サラサラしてんなあ……。てか、一切無反応なんだけど。

「……………」  
……今なら匂い嗅いでもバレないかな。髪を持ち上げて、匂いを嗅いだ。ああ、相変わらずこの人の性欲を駆り立てるような香り……。流石だ。何これ、媚薬なの？

そんな文香さんにバレたら絶対怒られるようなことを考えながら、俺の行動はどんどんエスカレートしていった。髪をかき分けて、後頭部に鼻を押し当てた。ふぁー！めっちゃ良い匂いっつーか良い香りっつーかでもそれ以前になんで文香さん気付かないの。

これはもう、このまま首筋を噛んでもバレないのでは？と思った直後だった。

「……………千秋くん、少しよろしいで」  
「へあっ」

文香さんが俺がさっきまでいた隣に振り向いた。頭が回転したことによって、俺は後ろから文香さんの太ももに向かって顔面ダイブした。

「きやつ？……………千秋くん？一体何をしてるんですか？」

「あっ……………いやっ、そのっ……………」

「……………」

「……………あ、これはマズイわ。お説教パターンだ。」

と、思った直後だった。文香さんは俺の背もたれに向かってはみ出た下半身を持って、ソファアの上に寝転がるように置いた。

「……………まったく。膝枕して欲しいならそう言えば良いのに……………」

……………また変な勘違いを……………。まあ、その方が俺的にも都合が良いな。

「……………す、すみません」

謝っておいた。あー、文香さんの膝枕柔らかいんじやー。文香さんは俺の頭を撫でながら言った。

「……………ふふ、甘えん坊な所も可愛いです」

「……………そーすか」

「……………今、少し照れました？」

「照れてないです」

「……………良いんですよ。素直になっても。本当は匂いを嗅いでたって素直に白状しても」

「えっ」

「ば、バレテルー!?!?」

「……………後ろから膝枕なんておかし過ぎます。バレないと思いましたが?」

あつ、やっぱ嗅いでる最中は気付いてなかったんだ。それで良いのか?」

「……………罰として、しばらく膝枕ですからねっ」

「は、はあ」

それは別に構わないな。むしろご褒美なまである。

だと、そんなことより、文香さん何か用があったんじゃないの?

「文香さん、俺に何か用ありました?」

「……………いえ、その……………このラノベを読んでて奏さんが仰っていたことをふと思い出したのですが」

「なんで禁書で奏さんの事思い出すの……………」

「……………奏さんの最近の口癖は『私に常識は通用しない』ですよ?」

「あいつはもうダメだな……………」

大体、なんでAngel Beats!からそっちに行っちゃったよ。わけわからん。

「……それで、奏さんから、その……ポツキーゲームというのを教わりまして……」

「……………やりたいの?」

聞くと、文香さんは無言で頷いた。ポツキーゲームねえ……。あの小っ恥ずかしいゲームをやるのか。まあ、上手くいくとは思わないしやる分には構わないけど。

「でも、ポツキーあるんですか?」

「……………ト○ポでしたら」

準備万端だな。

「良いですよ。やります?」

「……………では、準備しますね」

文香さんはト○ポを取りに行った。まあ、ポツキーゲームくらい合コンでもやってるし、別に平気だろ。

ト○ポを持ってきて、お互いに両端から啜えた。

「……………い、いきふあふよ」

「……………ふあい」

文香さんの合図でサクサクとお互いに端からト○ポを齧っていく。近づいていくに連れて文香さんの顔が赤くなって行くが、俺も多分赤いので人のこと言えない。

……………ていうか、中々折れねえな。何これ、割とト○ポって強度がすごいのか? って、このままだと本当にキスを……! そう思った直後からだった。文香さんが突然、俺の後頭部を掴んで、短くなったト○ポを追い越して唇を押し付けてきた。

「んうっ!?」

「っ!!」

そのまましばらく固まった。だが、口の中は固まっていなかった。文香さんの舌が俺の唇を突破し、頬の内側をかき回す様に舐め回してきた。

ちよっ……この人っ、何してんっ……!? 思考が追いつかない。自



分が何されてるのか分からない。何秒経過したか分からないが、ようやく口と口が離れた。プハッと文香さんは息を吐くと、真っ赤になった顔で言った。

「……………こっつ、これでっ……………さつき髪の匂い嗅いでたのは許してあげまふ……………」

「……………」

その文香さんの台詞に、俺はポカンとするしかなかった。

奏さん改め、アイドルがオタク化したのは私の所為じゃない(2)

「ふみかがログインしました」

アークスシップロビーに「ふみか」がログインした。とりあえず、シップをSH207に移動した。

デイリークエストを確認していると、ピコンと画面の上にパーティ申請のアイコンが出た。それを開くと、「Tulip」からパーティ申請が来たので、承認した。

Tulip：ガンナーLv64

ふみか：バウンサーLv70

Tulip『こんばんは、文香』

ふみか『……奏さん、こんばんは』

Tulip『あら、文香のコスチューム可愛いのね』

ふみか『……はい。もうすぐハロウィンですので、その限定コスチュームです』

Tulip『私も新しいの買おうかしら』

ふみか『……奏さんのキャラ、とても可愛いので似合うと思いますよ』

Tulip『そうかしら？……あ、楓さんが来たわね』

フレンドリストのオンラインに知り合いの文字が増えた。それにも、パーティの招待をした。

たのsea：ブレイバーLv50

Tulip：ガンナーLv64

ふみか：バウンサーLv70

たのsea『こんばんは、二人とも』

ふみか『……あ、楓さんこんばんは』

たのsea『文香ちゃん、こんばんは。……あの、一応聞ければど「ふみか」っていうのあなた？』

ふみか『……そうですけど』

たの sea 『意外とレベル厳しいのね……………』

ふみか 『……………そうでしょうか？私よりも、これから来る方の方が厳しいですよ？』

たの sea 『あら、私のレベルリングを手伝ってくれるって人？』

ふみか 『……………はい。もうすぐ来ると思うんですけど……………あつ、すみません L O N E が』

Tulip 『楓さん、彼かなり強いけれど、少し人見知りなのよ』  
たの sea 『あら、そうなの。そういう事なら分かったわ』

ふみか 『……………あの、すみません。千あ……………鷹宮くん、少し遅れるそうです』

たの sea 『あら、そうなの？』

ふみか 『……………後から入って追いついてくれるそうなので、私達で始めましょうか』

と、いうわけで、三人はおすすめクエストにあつた浮遊大陸(SH)に入った。とりあえず、これでデイリーを終わらせる事にした。

キャンプシップから降りて、浮遊大陸の上に移動した。三人のアバターは早速、ゴールを目指して走り出した。……………のだが、たの sea は早い話が、ボスに好かれる系な人だった。つまり……………。

Tulip 『ま、またラグネ!??ちよつと！まだエリア1も抜けないのに3体目よ!??』

たの sea 『なんか、私がフリーフィールドに出ると毎回こうなのよね。……………あ、カウンター失敗』

ふみか 『……………ちよつと待って下さい！レスタ掛けますから楓さんこつちに来て下さい!!?』

Tulip 『ちよつと！ガンナーにタゲ取らせる気!??』

ふみか 『……………ほんの一瞬ですから！ていうか、ガンナーは近距離職業です！』

Tulip 『ガンナーなのに!??』

と、まあカオスになっていた。よくよく考えれば、三人ともソロでやった事ないし、ふみかも Tulip もほぼ毎回、セルスリット(千秋)とやっていたので、プレイヤースキルが高いわけでもなかった。

すると、ふみかがラグネの足を壊して、ダウンさせた。

ふみか『……今です！後頭部を狙って下さい！』

Tulip『了解よ！』

たのsea『ラグネの攻撃って荒くね？』

ふみか『……すみません攻撃に集中して下さい！』

そのまま後頭部を殴り続け、何とか討伐に成功した。ドロップの塊を壊すが、レアドロの表記はない。

Tulip『あれだけ苦労させられてレアドロ無し……キツイわね』

ふみか『……ほんと、苦労する時は大体落ちませんよねこのゲーム』  
たのsea『大丈夫よ、もうマップに次のエリアへのアイコンが出てるから』

ふみか『……まだエリア1なんですけどね』

Tulip『嘆いても仕方ないわ。さっさと行きましょう』

Tulipがそう言っつて、エリア1のゴールに向かった直後だった。三人の目の前にラグネっぽいのが降って来た。

ヒルダ『緊急事態だ、よく聞け』

【虚の骸ダーク・アグラニ】↑赤文字

つまり、レア種二つ名の上にブーストが付いていた。三人はしばらく黙り込み、そのアグラニを眺めた。

やがて、Tulipが叫んだ。

Tulip『……無理よ。これ以上はさすがに無理！逃げましょう！』

ふみか『……でも、これ倒せばレアドロしますよね？間違いなく』

Tulip『ちよっ……文香？』

ふみか『……頑張りましょう！』

Tulip『文香あ!!？欲に目が眩んでるわよ!!？』

たのsea『アグラニの上に胡座』

Tulip『楓さんごめんなさい本当に喋らないで!!？』

挑むふみかとなのseaを見て、Tulipも仕方なく援護しようとした時だ。ピコン、とログに文字が入った。

セルスリット：ブレイバーLv77

たのsea：ブレイバーLv50

Tulip：ガンナーLv64

ふみか：バウンサーLv70

Tulip『！これは……！』

たのsea『まさか？』

ふみか『……やつと来ましたか』

三人から安堵するような声が漏れると共に、

セルスリット『お待たせしました』

セルスリットが浮遊大陸に降り立った。早速、ふみかが叫んだ。

ふみか『……すみません千秋くん！早速で申し訳ないのですが、ラ

グネのレア種の二つ名のブーストが現れました！』

セルスリット『ok。今行きます』

セルスリットは未だにキャンピングシップの前、三人が一番遠いエリア

2に移動する目の前にいた。

その距離を、セルスリットはテッセン移動でスイスイと走って行

き、直ぐに追いつき、そこからさらにグレンテッセンでラグネの脚を

一撃で破壊した。

セルスリットは攻撃しながら、とりあえず初対面の人に挨拶をし

た。

セルスリット『よつ、と……。あ、あのっ……高垣楓さん、ですか

？』

たのsea『そうよ？文香ちゃんと奏ちゃんのお友達なんでしょう

？』

セルスリット『は、はい。鷹宮千秋っていいます……。今日だけか

もしれませんが……その、よろしくお願いします』

たのsea『こちらこそよろしくね』

Tulip『ち、ちよつと！挨拶なんて良いから早く手伝いなさい

よ！』

セルスリット『あ、終わった』

Tulip『……へっ？』

アグラニは倒され、黒い煙となって消えたと共に、ドロップアイテムの赤い塊が現れた。

【たの sea はLv51になった】

たの sea 『あら、レベルが上がったわ』

セルスリット 『おめでとうございます』

たの sea 『ありがとう。……あら、リードロしたわ。☆10の弓ね』

セルスリット 『おお、弓は最高火力とんでもないですよ』

たの sea 『そうなの？』

なんて呑気な二人が会話してる中、ふみかとTulipは疲れ気味に眩いた。

ふみか 『……私達が苦勞して倒して来たラグネの上位互換を……』

Tulip 『……あっさり持って行かれたわね……』

二人して盛大にため息をついた。ちなみに、二人に大したリードロはなかった。

で、四人で攻略開始。次のエリアに入ると共に、たの sea がセルスリットに聞いた。

たの sea 『それにしても、千秋くん来るのすごい早かったわね』  
さりげなく下の名前で呼んだのに、ふみかが「むっ」と声を漏らす  
が、それに気付かずにセルスリットは聞き返した。

セルスリット 『そうですね。テツセン移動っていう移動方があるんですよ。レベル関係ないので、高垣さんも出来ますよ』

たの sea 『あら、そうなの？教えてくれる？』  
セルスリット 『良いですよ。まずは……』

二人の会話を聞きながら、ふみかは不機嫌そうにその辺にいる龍族を斬り殺した。それにいち早く気付いたTulipは二人に控えめに言った。

Tulip 『ね、ねえ？そのテツセン移動っていうのは、私達でも出来るの？出来るなら、みんなに教えて欲しいんだけど……』

セルスリット 『や、無理です。プレイヤーじゃないと』

T u l i p 『……そ、そうなの』

察しろよ、と思ったが、察してくれなかったので黙ってしまった。と、思ったらふみかが朗らか且つ不愉快そうな声で言った。

ふみか 『……そうですか。では、私と奏さんはお二人の邪魔にならないように、周りの敵の露払いをさせていただきますね?』

T u l i p 『ふ、文香? 落ち着』

セルスリット 『そうですか? すみませんね』

お前も気付けよ! と思ったのは言うまでもなかった。

二人の楽しいテツセン教室の間、ふみかは、ディスプレイストラクトウイングによるオーバーキルを連発。その様子を引き気味に見ながら、T u l i p は個人チャットで言った。

T u l i p 『文香、落ち着いてよ。楓さんにはあなた達の関係教えてないんだし、仕方ないわよ』

ふみか 『別に怒ってませんよ? (怒)』

T u l i p 『怒ってるんじゃない……。あの、さつきも言ったと思うけど』

ふみか 『……分かってます (怒)』

T u l i p 『わ、わかってるなら良いけど……。それ分かってるのよね?』

途中、キャタドランサが二体出たり、クオーツが1体出たりしたが、それらを楽に倒しながら、四人はボスエリアに向かった。

セルスリット 『おお、そうそう。そんな感じですよ』

たの s e a 『ふふ、でもこれ気を抜くとすぐに止まっちゃうわね』  
セルスリット 『まあ、練習あるのみですよ。あとは』

たの s e a 『ありがとうね、千秋くん』  
セルスリット 『いえいえ』

道中のボスで、ブレイバーの立ち回りとかも覚えたたの s e a は、かなり上手くなっていた。

セルスリット 『じゃ、次のクオーツとかカウンター取りやすいと思うんで、試してみてください』

たの s e a 『はい、千秋先生』

セルスリット『ちよつ……先生って……』

ふみか『メキッ』

Tulip『文香!?今、なんかすごい音したけど!?』

で、四人でクオーツに入った。とりあえず、セルスリットは後から助っ人に入るとして、三人で戦うことにした。

見事に3回ほど、たのseaがカウンターを取りまくり、Zガンダムの如く紫色に輝いた状態で、他の二人の援護を受けながら無事に倒した。

たのsea『やった、倒したわよ!』

セルスリット『お疲れ様です』

たのsea『ふう……楽しいわね。今まではみんながやってたからやっていただけで、自分の腕が上がった気がするわ。ありがとう、千秋くん』

セルスリット『いえいえ。どうします?この後、まだ何処か行きますか?』

たのsea『そうしたい所だけど、明日も仕事なのよ。だから今日はここまでね』

セルスリット『分かりました。じゃあ、お疲れ様です』

【たのseaがパーティーから脱退しました】

セルスリット『他のお二人はどうしますか?』

Tulip『……ごめんなさい、私も落ちるわ。なんか、胃が痛くて……』

セルスリット『そうですか?じゃあ、お疲れ様です』

Tulip『……お疲れ様』

【Tulipがパーティーから脱退しました】

残りはふみかとセルスリットの二人。すると、セルスリットが言った。

セルスリット『じゃ、やりましょう……あれ?』

×いつの間にか、ふみかもパーティーから抜けていた。

×文香はソファアの上でクッションを抱いて寝転がっていた。本当



はもつとレベリングしていたかった。だが、そんな雰囲気ではなくなつてしまったし、何となく面白くなかったので無言で落ちてしまった。

「……………千秋くんのばか」

そう呟くと、文香は抱いてるクッションに顔を埋めた。

その直後だった。スマホが鳴り響いた。画面を見ると、鷹宮千秋の文字。

「……………もしもし」

『文香さん？俺です』

「……………オレオレ詐欺ならお断りです』

『いや、鷹宮ですよ』

「……………なんのご用ですか。彼女を差し置いて初対面の女性とばかり話してた鷹宮千秋くん」

全開で不貞腐れてみると、困ったような声が聞こえてきた。

『あー……………だから、その……………彼女を差し置いて初対面の女性と話してたから、二人きりでもう少しゲームどうかなくて思ってたんですけど……………』

「……………」

その言葉だけで、文香は少し嬉しくなつてしまった。こんな簡単に彼氏を許してしまうなんて……………みたいな事を思いながらも、微笑みながら言った。

「……………もうっ、仕方ないですね。私が75になるまでやりますからね」

『えっ、それは逆に大丈夫なんですか？』

「……………大丈夫です」

翌日、二人は当然のように寝坊した。

プレゼント選びは慎重に。

9月最後の日、土曜日だったので俺はスタバに来ていた。しばらくコーヒーを飲んでると、待ち合わせの相手が来た。

「こんにちは、鷹宮くん」

「あ、どうも」

速水さんは俺のお向かいに座った。飲み物を机の上に置くと、ため息をつきながら言った。

「もう、今朝急だったから焦ったわよ」

「悪い。あんま友達と待ち合わせとかした事なかったから」

考えてみりや、社会人みたいなもんだからな。ちゃんと予定があってもおかしくない。

「今度からは予め言ってね」

「はい」

「それで、何の用なの？」

「文香さんの誕生日、何あげたら良いか分からなくて」

「……………あと4週間弱あるじゃない」

「こういうのは予め考えておいた方が良いでしょう」

「私の予定は予め聞いておかなかつた癖に……………」

……………確かに。

「でも、ほら……………俺って誰かに誕生日プレゼントあげた事ないから、不安なんだよね。何あげれば良いのか分からないし。ましてや女性に対してだから尚更」

「……………それは分かるけど……………。まあ良いわ」

速水さんは飲み物を一口飲むと、聞いてきた。

「ちなみに、どんなものを考えてたの？」

「えっ」

「何かしら考えてたんでしょっ？」

……………それ、聞いちやうの？

「まあ、考えてなくは、ないが……………」

「参考までに聞かせてくれる？何をあげようとしてたの？」

「…………言わなきゃダメ？」

「当たり前じゃない。文香はあなたが選んだものなら、大抵のものは喜ぶと…………」

「ゼータプラスのMG」

「……………一緒に考えましょうか」

悪かったな、センスなくて……………。ある意味では喜んでくれそうなんだがな……………。

すると、速水さんはため息をついてから呟いた。

「そういうことなら、一緒に探しに行ってみる？」

「今から？」

「ええ。テキストにAEONとか見るだけで、結構色々が見つかるものよっ。」

「マジカー」

「別に買う必要はないんだから。どんなものが売ってるかを考えるだけでも良いものよ」

……………なるほど。前調べってやつか。確かにそう言うのも大切だな。

「じゃあ、行こうかな。…………あ、文香さんには内緒で。やましい意味じゃなくて」

「分かってるわよ。サプライズって奴でしょ？」

「いや、誕生日は盛大に祝うって約束しちやったから」

「……………じゃあなんで内緒なのよ」

「何買うかは流石に教えたくないでしょー」

「ああ、そう言う……………まあ、理解はしたわ」

「じゃ、行くか」

×飲み物をお互いに飲み干すと、俺と速水さんは店を出た。

×

×AEONに到着した。速水さんが軽く伸びをしながら聞いてきた。

「さて、まずはどの辺りを…………」

「ゲーセン行かない？」

「あなたここに何しに来たのよ」

「え？だってゲーセンならキリトのフィギュアとか……」

「……………文香なら喜びそうだから困るのよねそれ……」

それな。本当にアイドルがそんなんで良いのか。

「でも却下よ。誕生日くらい、その手の商品から離れなさい」

「だよなあ……………」

「というか、あなたはどうかなの？」

「はっ？」

「アニメのキャラとはいえ、男の子のフィギュアを文香にプレゼントしても良いの？」

「流石にアニメキャラに嫉妬はないでしょ。ま、最もキリトに次元が一つ増えたら話は別だけどね。文香さんと知り合う前に、この世に一片のDNAも残さず消す」

「怖いわよ、発想が」

いやいや、アニメキャラに盗られたなんて事があればマジで自殺を考えるまであるから。

「で、一応聞くけど、他に思い付いたプレゼントはないの？」

「ない事もないんだけどなあ……………デザインとかはわからないから、やっぱり実用性のあるものが良いかなと思って」

「あら、少しはまともな事を」

「だから、ps2のプリペイドカードとか考えたんだけど」

「……………なんでそっちに逸れるのかしら」

「やっぱダメ？」

「ダメよ。二次元から離れなさい」

やっぱダメか……………となると、実用性……………。

「新しいプレ4のコントローラ」

「却下」

「メモリーカードとか？」

「却下」

「……………あつ、ポケットWi-Fiとかは？」

「却下。てかあんたそれ契約とかしなきゃいけないからバレるわよ」

速水さんはさつきより深いため息をつくど、俺を睨んだ。

「あんた、本当にダメダメなのね。文香が可哀想よ」

「今言った奴の何がダメなんだよ」

「全部よ。もう電化製品も却下」

「ええ……じゃあ後は……」

「実用性、と言う点は悪くないわ。ただ、あなたの場合は実用的過ぎるのよ」

「……そう？実用的なのダメ？」

「そうね……例えば、文香ならブックカバーとかなら喜ぶんじゃないかしら？」

「……なるほど、ブックカバー。探せばダンまちとかSAOのブックカバーとかあるかもしれないな」

「ブックカバーはやめておきましょう」

「なんでだよ!!？」

「分かりなさいよ!!？」

むう……我儘な奴め……

速水さんが仕方なさそうにため息をついて、人差し指を立てた。てか、溜め息つきすぎだろ。すみませんね、面倒かけて。

「じゃあヒント」

「え、いつの間にクイズ形式に」

「いいから聞きなさい。ヒント、文香の身につけてるものを思い浮かべなさい」

「身につけてるもの……？」

ふむ……文香さんといえば……

「ストールとか、ヘアバンド？」

「それで良いのよ」

「えっ、だって持つてるものあげても仕方ないでしょ」

「日によって女の子は身につけてるものを変えたりするのよ」

「……そういうもんか？」

「ええ。じゃあ決まりね。とりあえず、ストールから見ましようか」

「ストールってどこに売ってんの？ストール屋？」

「ストール屋って初めて聞いたわね……」

AEONの中を移動し、色んな店を間を歩いて行った。しかし、色んな店があるんだなー。ほとんど服屋だが、店によつて売ってる服は違う。こういうところは競争とか激しそうだなー。

そんな事を思いながら、速水さんの後ろをついて行つてると、速水さんがクルツと不満げな顔して振り返った。

「……………ちよつと鷹宮くん？」

「何？」

「なんで後ろを歩くの？一緒にいるのに」

「なんでと言われてもなあ……………。後ろにいた方が前にいる人の移動する方向転換に対応しやすいし……………」

「なんかRPGみたいな感じでこつち気まずいのよ。普通隣でしょう？文香と出掛けてる時とかどうしてるのよ？」

「いや、関係バレルとマズイから、文香さんとは出掛けてない」

「……………」

あれ、なんかすごい虫を見る目で見られた。

「……………確かにアイドルとお付き合いしてるから、そうなるのも分かるけど。でも、せっかく付き合ってたんだから、もう少し楽しんでもいいと思うけど……………」

「いや、それはマズイでしょう。アイドルと付き合い合ってる以上、一回のミスも許されないから。付き合ってるだけで文香さんがアイドル事務所クビになつてもおかしくないんだから」

「……………まあ、そうだけど」

「……………それでも、確かに家デートだけじゃアレなんで、ゲーセン行つたりもしました。その時も後ろからついて行ってましたから」

「……………文香に何か言われなかったの？」

「特には」

「……………文香、可哀想に。言えなかったのね、きつと」

「……………なんでそうなるの……………」

「とにかく、デートする時くらいは隣にいた方が良いんじゃない？ていうか、デ○ズニーの時は隣にいる所か手まで繋いでたじゃない」

「おい待て。お前なんでそれ知つ」

「とにかく、これからデートの時は隣にいる事。良い?」

「お前らまさかあのデートつけてたの? つけてたんじゃないだろうな?」

「さ、ストールの売ってそうな店を探すわよ」

「おい、聞けよおい! 俺の告白の台詞とか聞いてないよな!? 聞いてないんだよな!?!」

×あとで絶対問い詰めてやる! 是が非でも!!?

×

×ストールの売ってる店などを回った。要は、文香さんの場合は大人しめなストールが似合うという事らしい。

「……………なるほど。大体、把握した」

「そう? なら良かったわ」

「文香さんに似合いそうなストールを選べば良いんだよね」

「ええ。まあ、ぶっちゃけ文香ならあなたが選んだものはなんでも着そうだけど。それなら、あなたが文香に着て欲しいストールを買ってあげたら良いと思うわよ」

「……………なるほど」

「そうやって女性へのプレゼントを選ぶのか。かなり参考になった。流石、速水さんだなあ。」

「それで、プレゼントする柄は決まったの?」

「……………んー、まあ候補三つまで絞り込みました」

「あら、早いよね。他の店にも売ってるのだから、もう少し慎重に……………」

「そのうちの一つを誕生日、一つをクリスマスにすれば良いので、切り捨てるのは一つで良いと……………」

「待ちなさい。え、あんた今なんつった?」

「ん? や、だから三つある候補のうちの二つを選抜すんの。誕生日とクリスマスで」

「馬鹿なこと言わないでくれる? お願いだから」

「えっ……………ちよっ、何が?」

「同じ物を二回連続で渡す人はいないでしょう?」

「や、だってストールとかって、いくつか持つてて、それを使い分けるんでしょ?」

「それとこれとは話が別よ。あなだって……例えば、ガンプラを誕生日とクリスマスで連続でもらって嬉しい?」

「え?嬉しいけど?ガンプラだし」

「例えが悪かったわね……。なんかもう面倒臭くなって来た。クリスマスはクリスマスで、文香が身に付けてる中であげたら喜びそうなのを選びなさい。良いわね?」

「……………えーじゃあもう少しストール選び考えよう」

「そうしなさい。まだ誕生日まで4週間弱あるんだから」

その通りかもしれない。まあ、こういう店に男一人で入るのは気まづいから、多分ネットショッピングで済ませるけど。

にしても、俺一人じゃストールなんて答えには行き着かなかったな。速水さんには感謝せねばなるまい。いや、今日だけじゃないな。冷静に考えてみりや、この人がいなかったら俺と文香さんは付き合えてなかったかもしれないなあ。

……………そう考えると、なんか隣の人がすごい女神様に見えてきた。

「……………あー、速水さん」

「何?」

「えつと……その、なんだ。たまにはなんか奢るよ」

「えっ、何急に。変なものでも食べた?」

「……………や、なんか今まで世話になってたから、たまにはなんか奢ろうと思ったけど、やめとくわ」

「冗談よ。冗談だから。何か奢って?」

「はいはい……。あんま高いのは無しよ」

「分かってるわよ。とりあえず、フードコートに行きましょう?小腹が空いたわ」

「りよ」

で、フードコート。ラーメンだのマックだのケンタだのなんか良く分からんステーキ屋だのが並ぶ店通りを、俺と速水さんは見て歩いた。



「うーん……何が良いかしら？」

「や、俺は奢る側なんで。そちらの好きにして下さい」

「そうよね……。じゃ、とりあえず銀○こで」

「了か……とりあえず？」

「足りなかったら他にも頼むわね」

「……………」

確かに「高くないもの」とは言ったが、一つとは言ってない。まあ良いか。正直、文香さんと付き合って一年間は速水さんの助けなしでいられるは思えないし、これからもお世話になるかもしれないんだから、これくらいの出費は……………」

「とりあえず、たこ焼きとドーナツとポテトとチキンで良いわ」

「……………」

……余りにも容赦がなさすぎて泣きそう。つーか、アイドルがそんなに食って良いのかよ。

で、全部買い揃えて、机の上に並べた。俺も自分の分のラーメンを頼み、自分の前に置いた。

「……………あら？あなた、ラーメンも食べるの？」

「え？うん」

「私はあなたと一緒にこれらを摘めれば良いと思ってただけど」

「……………先に言えよ。つーか、フードコートの使用方間違ってるそれ」

「……………ま、買って来ちゃったものは仕方ないわ。食べましょう？」

そんなわけで、食事を始めた。ラーメンをゾボボツと啜りながら、速水さんに声をかけた。

「そういうえば、速水さんは彼氏とかいないん？」

「いないわよ。いい人がいなくて」

「ふーん……プロデューサーは？」

「プロデューサーと恋仲になっちゃったら大変よ。大問題じゃ済まされないわ」

「だよなー。いや、俺も今までたくさん協力してもらったし、返せば良いかなって思ったんだけど」

「誕プレでフィギュアだのガンプラだのコントローラだのを思い浮かべる人に助けてもらうことなんてないわよ」

「……………だよな」

その辺は誕生日プレゼントじゃタブーなのか。俺は嬉しいけどなあ。

「ま、私は彼氏作るなら大学に行ってから、かな」

「ふーん……………大学はどこ行くの？やっぱ文香さんと同じ場所？」

「うーん……………それも一応、考えてはいるわよ。けど、特には決めてないかしら。千秋くんは？」

「俺は進学しようかすら迷ってる」

「あら、どうして？」

「勉強が嫌いだから。だけど、仮に将来、文香さんと結婚するとしたら、大学くらい出た方が良いだろ」

「……………気が早過ぎない？」

「可能性の話だよ。無いとは言いきれないじゃん」

「まあ、そうだけれど……………」

ポテトを齧りながら、速水さんは呆れたように呟いた。どうでもいけど、女の人がポテト齧っていると、なんかすごいエロいな……………。

そんな事を考えてると、速水さんが「あつ」と声を漏らした。

「それなら今度、学園祭一緒に行かない？」

「はあ？速水さんの高校の？」

「違うわよ。文香の大学の学祭。……………文香から聞いてないの？文香、演劇に出るみたいよ？」

「……………k w s k」

おい、何それ聞いてないんだけど。

パクリはどこまでいつてもパクリ。

どっかの大学前。そこに原チャリでやって来ると、校門の前で速水さんが待っているのが見えた。

「お待たせしました」

「あつ、遅いわよ」

「すいません、道が混んでたもんで。原チャリ置いてくるんでも少し待っててくれます?」

「待ってても暇だから私も一緒に行くわ」

と、いうわけで駐車場に移動した。原チャリを止めて鍵を抜いた。

「……………ここが文香さんの大学かあ」

「何よ、知らなかったの?」

「はい。普段、アニメとか漫画の話しかしないもんで」

後はたまに文香さんが何処から仕入れてくるアニメでやってたシーンの再現で遊んだりな……。手錠の件は未来永劫永遠に誰にも言わない。

「それで、文香さんの演劇って何処でやってんの? さっさと見てさっさと帰りたいんだけど」

「あら、せっかく来たのに文香と話をしなくても良いの?」

「や、友達と一緒にの所を邪魔したら悪いなと思って。文香さんと顔合わせたら関係バレルかもしれないし、デメリットが多過ぎでしょ。何より、俺学園祭とか嫌いだし」

「そんな事ないわよ。デメリットは多くても、文香は喜んでくれると思うわよ?」

「……………そうか?」

「ええ。……………まあでも、確かにリスクーではあるわね」

実際、その通りだ。かなりリスクーだ。だけど、文香さんが喜んでくれるなら考えてみても良いかもしれない。

「……………ま、考えとく」

「じゃ、とりあえず中を見て回りましょうか」

「えー、さっさと演劇見ようよ」

「まだ開演時間じゃないのよ。それまで良いでしょ？」

「まあ、良いけど」

と、いうわけで、とりあえず二人で回り始めた。そういや普通に速水さんと二人で学祭にいるけど、文香さんに見られたらヤバイな。後でちゃんと正直に説明しないと。この前、出掛けた時はなんとか許してもらえたし、大丈夫だとは思うけど。あ、勿論誕プレ買いに行つたとは言わなかったが。

そもそも、俺がここに来た理由は、もちろん文香さんの演劇を見るためだが、それ以上に文香さんが俺に隠してた理由が気になる。いや、隠してたわけじゃないかもしれないけどね。恥ずかしくて俺に見られたくなくて、言わなかったのかもしれないし。まあ、九割九分九厘そうだと思うけどね。

……でも、それなら速水さんが知ってる理由がおかしいんだけどな。文化祭までは調べりや分かる事とはいえ、文香さんが演劇に出るって事までネットに載せるかね。アイドルがいれば学校の知名度が上がるとはいえ、それ以前に個人情報だから下手な事は載せないだろう。本人から聞いたとは思えない。そもそも、何で文香さんが演劇に？演劇部ってわけでもないだろうし……。一応、速水さんに聞いてみるか。

「あの、速水さ」

速水さんの姿が見えない。どうやら、逸れてしまったようだ。

あー、どうしよう。開演時間とか知らねーんだけど俺。電話してみるか。

「……………」

……出ない。まあ、この人混みだし、気付かなくても仕方ないか。とりあえず、パンフレットもらいに行こう。

と、いうわけで、入り口付近まで歩いた。ボンヤリしながら階段を降りて歩いてると「あのー」とゆきのんみたいな声を掛けられた。振り返ると、見覚えのある人がサングラスを掛けて立っていた。

「？」

「すみません、道を教えてもらえませんか？」

「……………高垣さん？」

「あら……………バレてしまいましたか」

あーそっか。向こう芸能人だし、p s o 2 内で話したただけだから俺の顔知らないか。

「俺ですよ。セルスリット」

「セル……………？ああ、千秋くん？」

「どうも。何してるんですかこんな所で」

「少しね。こここの大学の特別ゲストで呼ばれちゃったのよ。それで、講堂に連れて行って欲しいんだけど」

「や、俺別にこのの学生ってわけじゃないんですけど」

「わかってるわよ。一緒に探して？って事」

「地図持ってないんですか？」

「持つてるには持つてるけれど……………学祭の地図ってわかりにくいのよね……………」

「貸して下さい」

地図を借りた。えつと……………今は生物室が目の前にあるから……………ここがここで……………よし、把握。

「こっちです」

「あら、すごいのね」

「あ、ついでなんで一緒に速水さん探してくれませんか？逸れちゃつて。講堂に着くまでで良いんで」

「一緒に来ていたの？」

「はい」

「良いわよ」

と、いうわけで、高垣さんと講堂に向かった。まずは校舎から出た。

あーあ、また変な事になっちゃったよ……………。この件についても、文香さんに後日、説明した方が良いか。

そんなことを考えながら講堂に向かって歩いてると、高垣さんが

「あっ」と声を漏らした。

「どうかしました？」

「あのワツフル美味しそうじゃない？」

「……………食べたいんですか？」

「良いでしょ？せつかく来たんだもの」

「まあ良いですけど。俺、奢りませんよ」

「そんなつもりで言ったんじゃないわよ」

「や、ほら。たまにいるじゃないですか。女といるんだから奢れ、みたいな奴」

「私はそんなこと言わないわよ。こう見えてアイドルなんだから」

「あ、そうですね。すみません、失礼な事」

「良いのよ。…………でも、あなた変わってるわね」

「？何が？」

「アイドルにそんなこと言えるの、あなたくらいよ」

「……………」

確かに。アイドルが身近になり過ぎて普通に失礼な事言っちゃまったな。

「ホントすみません」

「だから良いって。じゃ、買って来るわね」

「あ、じゃあついでに俺はチョコワツフルで」

「……………本当に変わってるわね」

俺から150円をジト目で睨みながら受け取ると、高垣さんは買いに行った。しかしまあ、なんつーか大学の学祭は規模が違うわ。研究室やゼミ、部活、サークルの数だけ屋台や出し物がある。

……………すっげー参加したくねーわ。一度で良いから、屋台の営業はしてみたいと思う。だけど、そうすれば必ず従業員とトラブルが起これそうだからなあ。あと接客も嫌だし。やるなら、文香さんと速水さんみたいな仲良い人とやれば、意見の食い違いはあっても楽しくやれそうだ。

そんな事を考えてると、高垣さんが戻って来た。

「お待たせ」

「あ、どうも」

「さて、行きましようか」

ワツフルを齧りながら出発した。

「っ！学園祭のワツフルの割に美味しいのね……」

「本当ですね。そこそこイケる」

「でも、なんというか……虫歯になりそうね」

「あ、キシリトールのガムありますよ」

「じゃあ、食べ終わったらくれる？」

「良いですよ全然」

「ありがとう」

まあ、学生のレベルならこんなもんだろう。にしても、これが学祭初めての買い物だな。去年のうちの学祭は剣道部の店番しかしてなかったし。

で、そのまま二人でp s o 2について話し合ってる間に講堂に到着した。

「ふう、ありがとうね。千秋くん。でも、結局奏ちゃんは見つからなかったわね」

「ま、あいつもその内ここに来るはずなんで」

「あら、そうなの？」

「ふ……鷺沢さんが演劇に出るらしいんですよ。それを俺と速水さんは見に来ただけで……」

すると、スマホが鳴り響いた。画面には、速水奏の文字が出ている。

「もしもし？」

『ちよつと、何処にいるの？もうすぐ文香の演劇始まつちやうわよ？』

「……ああ、悪い。ちようど今、到着したとこだよ」

『なら早く来なさい』

「あいよ。先どの辺？」

『右上の方』

「おk」

それだけ話して電話を切った。

「なんか、速水さんここにいるみたいなんで」

「あら、それは良かったわ。それより、文香ちゃんが出るんですって？」

「らしいですよ」

「なら、私も一緒に見ようかしら。私の出番はもう少し後だし」  
「了解です」

二人で講堂に入った。速水さんに言われた通り、右上の方の席に座った。一人寂しくアイドルが座ってるのが見えたので、写メを撮ってから声を掛けた。

「お待たせ」

「あ、遅いわよ。てかどこに行ってたのよ」

「や、まさかあんな簡単に逸れると思ってなくて。ごめんごめん」

「まったく……つて、あら？」

「こんには、奏ちゃん」

「………楓さん？どうしてここに……？」

「私、ゲストで呼ばれて来たのよ」

「そうなの……。お疲れ様」

「いいえ？千秋さんとデート出来たし、楽しかったわよ」

「おい、何抜かしてんですか。案内しただけでデートはしてないでしょ」

「ふふ、冗談よ」

とりあえず、いつまでも立っていると邪魔になるし座るか。俺が座ると、その後に高垣さんが座った。………アイドルに挟まれるとか俺の人生本当にスゲエな、なんか。

高垣さんが持っていたパンフレットを借りて、これから始まる時間帯の劇を見た。

演劇部「ソードアート○オンライン」

おい、これ誰の許可を得てやってんだよ。訴えられたりしないんだろうな。伏せ字の意味まるでないし。

「………まんまね」

「………まんまなのね」

「………まんまだな」

三人揃って同じ感想が漏れた。しかし、となると文香さんは何の役だ？多分、やるのは原作一巻の流れをかなり要約してやることになるだろうし……閃光さんしか思い浮かばねえ………。



いやでも、冷静に考えればアニメを使うのは悪くないかもしれない。客にヒロインがアイドルだと思われたくないだろうし、コスプレをすればアイドルだとはバレにくくなるだろうし。

そんな事を思っていると、劇が始まった。さて、文香さんのコスプレ姿をカメラに収めるか。

『ソードアート・オンライン、それは萱場アキノリによって始まった、デスゲーム。クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは本当の死を意味する恐ろしいゲームであった』

おお、なんかナレーションが始まったけどパンフレットに書かれたタイトルでの伏せ字が全く活かされてねえぞ。あと、茅場アキノリって誰。

『そのデスゲームが始まって二年。とあるソロプレイヤーのキリオは、街の門の前で女性プレイヤーを待っていた』

キリオって誰だよ。雑過ぎんだろ。山田葵の兄かよ。

すると、舞台が明るくなり、中央にキリオ役の男が現れた。

『……………遅い』

ああ、あのシーンか。ラグーラビットとかエギルとの絡みはカットしたな。まあ、通じはするだろうが。

すると、舞台の脇から白と赤の女性が走って来た。……………つーか、文香さんだ。

『きゃああああー！よ、避けてー！』

『うおおっ!??!』

どっしーん☆と、二人はぶつかり、お互いに尻餅をつく。よかった、原作再現して胸を揉んでたら今からステージに乗り込んでキリオをマジでログアウトさせてる所だった。

『ど、どうしたんだよアスカ!??!』

『す、すみませんキリオさん……………！た、助けて下さい……………！』

『彼女の名前はアスカ、アイーнкラッドでは珍しい女性プレイヤーで……………』

ナレーターが説明を始める中、俺は頭の中で「アスカって誰だよ」「アイーнкラッドってスツゲー知ってる芸能人思ひ出す」とかつツ

コミを入れてると、速水さんが俺を不安そうに見てるのに気付いた。言わんとすることを察し俺は、隣の高垣さんに聞かれないうように、速水さんの耳元で小声で話した。

「……………大丈夫です、流石に劇に嫉妬する程ガキじゃないです」

「……………そう？それなら良いけど……………」

すると、クラデイル……………じゃなくて倉内デイル雄が現れた。おい、なんで和名なんだよ。つーかデイル雄って名前雑過ぎじゃね？

その後はほとんどパクリもパクリ、倉内をキリオが倒し、そのままアスカと狩に行き、そこでラクス（クラインポジ）と出会い、軍と出会ってボス撃破。その後違ったのはヒールプリーズ（ヒースクリフポジ）と戦わずにキリオがシャア軍団（血盟騎士団ポジ）に入団した事だった。

「……………何つーか、ただの雑なパクリ劇になってんな」

スターダストドラゴンストリーム（スターバーストストリーム）の演出はすごかったが。何がすごいって？12連撃が6連撃になってたところかな。まあ、演劇でやるんだから妥当か。

「……………そうね」

「つーか、そもそもなんで鷺沢さんって劇に出てんの？」

「さあ？なんか頼まれたとか言ってたけど……………」

ふーん……………ま、この様子なら俺の0.1%の心配も杞憂かな。そうこう思ってるうちに、倉内が死んで、結婚のシーンは省かれてラストの戦闘シーン。俺を差し置いて結婚したら、ブチ殺してた。

まあ、そんなこんなで劇は終わった。なんていうか、文香さんが俺に見せたいと思わなかったのがよく分かったわ。

「……………帰ろう。速水さん」

「……………そうね。なんか何もかもどうでも良くなったわ」

「……………じゃあ、二人ともバイバイ」

高垣さんと別れて、俺と速水さんは帰宅した。今度、文香さんを全力で労ってあげよう。

誕生日って何すりや良いのか分かんねえ。

翌日。SAOショックとも言える激震から覚め、俺は欠伸をしながら朝、目覚めた。10月8日、文香さんの誕生日まで二週間と五日しかない。それでも、文香さんに渡すストールは決まっていらない。そもそも、ストールにしようかも決まっていらない。

それ以外にも問題は山積みだ。どこで誕生日パーティをやるか。どうやってプレゼントを渡すか、何も決まっていらない。そもそも分からない。

どうしようか悩みながら歩いてると、花屋の前を通りかかった。……ふむ、花か。悪くないかも。俺は花なんてもらっても育てるの面倒臭そうで困惑するだけだが、女の子はこういうの好きそうだよな……。

いや、しかし花には花言葉ってもんがあるんだろ？間違って「生まれて来なけりや良かったのに」みたいな花言葉の花買ったら最悪だよなあ。

「……ふーむ」

「何かお探して……あつ」

「あつ、すいま……あつ」

声を掛けられ、横を見ると渋谷さんが立っていた。久し振りにこの人と会ったな。

「ど、どうも。……え、アイドルなのにバイトしてんの？」

「や、違うよ。これ実家」

「えっ……じ、実家？」

「うん」

じ、実家か……。なるほどね。文香さんの実家よりも先に突き止めることになるなんてな……。

ポカンとしてると、渋谷さんが聞いて来た。

「何、どうしたの？」

「や、その前に一つ。鷺沢さんとのあれ知ってる人だっけ？」

「付き合ってるんでしょ？知ってるけど？」

「あ、ならいいや。文香さんの誕生日なんだけどさ……」

「何、近いの？」

「うん。10月27日」

「へえー。何かあげるの？」

「まあ、色々候補はあるんだけど、それ以前にどこでやるかーとか色々悩んでてさ……。そしたら、花屋があったわけで、何となくここを見てて現在に至る」

「ふーん……。誕生日に花、か……。……。……。学生がやるにはキザ過ぎない？」

「あー……。だよーね」

「ちよつと待つてよ。私も一緒に考えるから。もう少しで店番終わるし」

「えっ？一緒に考えてくれんの？」

「私も同盟メンバーだからね。駅前のマック分かる？あそこで待つてよ」

「了解」

×どの事で、俺はマックに向かった。

×

×とりあえず、ポテトとナゲットと飲み物を注文してカウンター席で待つてると、見覚えある顔が三人に増えてやって来た。

「お待たせ」

「やっほー」

「久しぶり」

「……。なんで北条さんと神谷さんもいんの？」

「んー、なんか面白そうだったから」

渋谷さんが呼んだらしい。この野郎、人の真剣な悩みをよくも……。

「ていうか、なんでカウンター席に座ってんの？」

「そっだよ。普通、四人席だろ」

「や、お前から来るなんて知らなかったし」

ていうか、マックを複数人で来ることなんて中学以来なかったか

ら、つい習性でそうしちまったんだよ。

「まあ良いけど。それで、渋谷さんから聞いているの？」

「……まあ、一応」

「文香さんの誕生日で悩んでるんだろ？」

「あーまあな。でも、神谷さんって俺と同じでオタクでしょ？分かん  
の？誕生日とか」

「んなつ、わ、分かるよそれくらい！凜や加蓮の誕生日会だってやった  
んだぞー！」

「あーそう。まあ、それなら助かるけど」

まあ、オタクにだって色々種類はあるだろうしな。それに、協力し  
てもらってる側なんだから、失礼な事は言わない方が良いか。

「で、誕生日なんだけど……まずみんな何処でお祝いしてんの？」

「まあ、色々だよな？自宅に集まったり食べに行ったり」

北条さんが渋谷さんを見て質問すると、渋谷さんも頷き返した。

「そうだね。私は、私の家で祝ってもらったかな」

「やつぱ、そういうのって祝う対象の人によって変えた方が良いのか  
？」

「いや、そういうんじゃないよ。ただ、その時その時で考えれば良いん  
じゃないかな」

「……つまり、金銭面がピンチの時は祝う人の自宅って事？」

「……あつ、そういう事だったんだ……。ごめんね、二人ともお金な  
い中」

「そ、そういうんじゃないよ、凜！」

「変なこと言うなよ鷹宮！」

渋谷さんが謝ると、北条さんと神谷さんは慌てて否定した。で、神  
谷さんが追加説明をした。

「そういう実用的な話じゃなくてだな……こう、要するに祝う側が祝  
いたい場所で祝えれば良いんだよ」

「祝いたい場所、ねえ……」

「あとはー、そうだな。人数にもよるかな」

「あ、そうだね。多いときはお店とか行ったほうが良いかも。カラオ

ケとか」

神谷さんの意見に、北条さんが同意した。ふむ、人数か……。

「……………みんな来る？」

「「遠慮しとく」」

「えっ、なんで？」

声を揃えられて、思わず聞き返すと三人はジト目で俺を睨んだ。

「彼女の誕生日祝うのに他の女呼ぶ？」

「そこは水入らずで楽しむべきでしょ」

「鷹宮だって他の人に来て欲しくないだろ？」

「いや、でも文香さんに楽しんでもらわないと意味ないから……」

「「いいから一人で祝え」」

な、なんか怖いんだけど……。ていうか一人で祝えってすごい台詞だな……………。

「これは文香さん苦勞しそうだね……」

「そうだね……」

おーい、北条さん？ 渋谷さん？ それどういう意味？

俺の心の中の疑問を他所に、神谷さんが言った。

「まあ、とりあえず鷹宮くんの家でやるとして……」

「いや、文香さんの家でやるつもりだけど。よくよく考えたら、場所はどちらかの家しかないですね。ほら、周りの一般人に見られたらマズイでしょ」

「なら、鷹宮くんの家の方が良いんじゃないの？ サプライズとか出来るし」

「や、俺もう祝うって本人に言っちゃったんだよね」

「……………なんでサプライズにしなかったんだよ」

「だって誕生日知ったの本人の口からだし」

「ああそう……………まあ良いけど。それなら、文香さんの家でやるとして、どうするんだ？」

「んー……………とりあえず、晚饭作って、ケーキはその日に家で焼いたの持ってたって……………そこまでしか考えてない」

「えっ？ た、鷹宮くんって料理もできるのか？」

「えっ? うん」

頷くと、奈緒さんは意外そうなものを見る目で見て来た。

「スッゲー意外じゃない?」

「そうだね……そんな器用なんだ」

「や、だって独り暮らしだし。何回か文香さんに手料理ご馳走してるよ」

「ふーん……。まあ、そういうのも悪くないかもな」

「おお、なんか今日初めて褒められた気がする。いやそれはそれで寂しいけど。」

で、北条さんが聞いて来た。

「それで、その後は?」

「そこから先なんだよ、悩んでるの。プレゼントすらも悩んでるんだから」

「ふむ……プレゼントね……。何をあげようと思ったの?」

「最初はガンプラでもと思ってたんだけど……」

「修正してやる!」

「落ち着いてカミィユ! 速水さんに怒られて修正したから!」

「何あげるの?」

「ストール、とか?」

「ふむ、ストール……」

加蓮さんは顎に手を当てた。しかし、ガンプラってほんとにダメなんだな。ワンチャンあると思ってさりげなく提案してみたけど、こんなに怒られるとは。

すると、神谷さんがソワソワしながら聞いて来た。

「ち、ちなみに、なんのガンプラあげようと思ってたの……?」

「ゼータプラスのMG」

「なんでそんなマニアックなのなんだよ! そこはストフリだろ!」

「キラ厨は静かに。ストフリあげるならインジャあげるわ」

「……あたしなら断然ストフリの方が嬉しいけどな」

「ちよつと、ガンプラ談義は他所でやってくれる?」

渋谷さんに怒られたので、素直に謝って話を進めた。

「で、ストールってどんな柄のストールを考えてるの?」

「んー、ネットとかで色々調べたりしたんだけど……文香さんは大人しい色のストールとか合うかなと思って」

「ふむ、それで?」

「とりあえず、ハロのストールないかなと思っ」

「はいアウト」

バツサリ渋谷さんに断ち切られた。

「なんでキャラものなのよ。ていうか、ハロのストールって存在するの?」

「今のところは見つかってないです」

「バカじゃないの?」

うおっ、なんかすごい罵倒が飛んで来た。バカじゃないのってマジかこの人。

地味に傷ついていると、北条さんがポテトを齧りながら言った。おい、っーかそれ俺の。てか、自分のポテトあんじゃねえか。

「でも、ストールっていうのは悪くないと思うよ?」

「他にも色々考えてるんですよ。文香さんのヘアバンドとか……ほら、クリスマスにも何かあげないといけないんで、今ストールでクリスマスにヘアバンドを渡すと、グレードダウンした感じがしてダサくないですか?」

「いやいや、そんなの気にすることないと思うよ」

「そう?」

「うん。鷹宮くんがあげたいものあげたら良いと思う。あ、ガンブラじゃないから」

「分かってるよ」

「ただ、信用ねーんだよ、俺は。」

「ま、それならプレゼントは解決だね」

「や、でも柄が……」

「それは自分で決めなさい」

何のために集まったねんお前ら。

神谷さんが飲み物を口に含んで聞いて来た。



「他に問題って何があるんだ？」

「当日って何すれば良いのか、とか？あと演出？」

「演出は必要ないだろ。もうバレてるんだし」

あ、そっか。じゃあ当日だな。

「何すりや良いの？当日」

「何すりやって……いつも通りで良いだろ」

「や、だっていつも通りってゲームとアニメ鑑賞だよ？」

「……少し考えるか」

もはや呆れることもされなくなった。すみませんね、駄目男で。いや、でもこればかりは文香さんにも責任が……ないか。そもそも、文香さんがアニメにハマったのは俺ガイルが原因だし。

「……あれ、そういえば、誕生日会って何すりや良いんだ？」

神谷さんが困惑したように呟いた。やはり、彼女もこちら側の人間か。

と、思ったら北条さんも呟いた。

「そう言われると……そうね。私達って誕生日の時何してたっけ？」

「んーっと……なんか話して、プレゼント渡して……ケーキ食べて……」

「そうだよな、そんなもんだよな」

なんだ、結局ケーキとプレゼント以外はいつも通りなのか。

「なら、俺もゲームとアニメ鑑賞で……！」

「ゲームはいいけど、アニメはやめておいたら？」

「えっ、ゲームは良いの？」

少し冗談のつもりだったんだが。

「だって、ゲームなら私達もするし」

「それな。凜がガンダム〇S超弱くてさー」

「い、いいでしょ私の話は。大体、奈緒と加蓮が強過ぎるの」

「マジで？じゃあ俺と今度やろうぜ。俺が渋谷さんと組むから、北条さんと神谷さんのチームで……」

「絶対嫌」

「声を揃えて!?!?」

なんでだよ！クラスでハブかれてる気分になるからやめろ！  
俺の質問が顔に出てたのか、三人は順番に言った。

「だって絶対強いし」

「攻撃とか当たらなさそうだし」

「私、味方として意味無さそうだし」

ぐっ……！大体合ってる気がするから反論できねえ……!!?」

「あ、でも文香さんと一緒なら良いよ?」

「ね、文香さんはああいいうゲーム弱そうだし」

「いや、渋谷さんが出ないと意味無いだろ」

「? 何言ってるの? 鷹宮くんが見学に決まってるじゃん」

「……………」

おい、今のは流石にひどくね? ていうか、勝てると思ってる相手と  
1番弱い渋谷さんを組ませるとか性格悪すぎだろ。

「待ってよ。それじゃ私達のチームが勝てないじゃん」

俺の思っていたことを渋谷さんが言った。

「それなら、凜と文香さんを別れさせて、私と奈緒が別れば良くない  
?」

「確かに……それなら良い勝負になるかも」

なんか、ゲーム談義に花が咲いちゃったよ。まあ、結局いつも通り  
で良いって事が分かったし、別に良いけど。

「あ、それなら今からやらない? ゲーム」

「良いね。文香さんも呼んで」

あれ、なんか変な展開に……………」

「ねえ、それって俺も?」

「当たり前じゃん」

「待って待って。アイドルのお前らと俺と一緒にゲームして良いのか  
?」

「大丈夫でしょ」

こいつら気楽だなー。頭の中お花畑かよ。そういう所はやつぱり  
Kらしいわ。

「よし、じゃあ今から奈緒の家ね」

「鷹宮くん、文香さんと呼んでおいてね」

「待て、なんであたしの家なんだよ。まあ良いけど」

良いのかよ、もう少し頑張って反論しろよ。仕方ないので、食べ終えて席を立つ三人の後を追いながら、俺はスマホを取り出した。

「……………あー、もしもし文香さん？今暇？」

アイドル達がオタク化したのは私の所為じゃない  
(3)

「……で、どういう事なんですか？」

奈緒の家、そこで文香は千秋に問い詰めた。

「……何で千秋くんが奈緒さん達と一緒にいて、私を奈緒さんの家に誘うんですか？」

「や、だからそれは理由は今は言えないんだけど……」

「……ちゃんと説明して下さいと、納得できません」

そう言われても、千秋は目を逸らして何も言わなかった。すると、加蓮が二人の間に入った。

「ま、まあまあ。文香さん落ち着いて？ 私達が鷹宮くんを誘っちゃっただけだから。鷹宮くんにも何もやましいことはないよ」

「……ですが、私も驚いたんですよ？ 『神谷さん家でゲームするんだけど、来てくれない？』 って言われて。何がどういう状況になったのかまるで分かりませんでしたから」

「ガンダム〇Sって聞いたなら、そりゃ鷹宮くんもやりたくなるでしょ？ 普段、知り合いと対戦しないなら尚更」

「……それは、わかりますが……」

「私達もこれからは鷹宮くんを誘う時は、彼女にちゃんと許可ももらうからさ。ね？ 彼女さん」

「……はっ、はい……」

彼女を連呼され、恥ずかしくなった文香は赤面して俯いた。その様子を見て、奈緒と凜と千秋は引き気味につぶやいた。

「すげえ、言い包めた……。さすが加蓮だ……」

「たまにズルいよね、加蓮って……。プロデューサーにジュース奢らせるの上手いし」

「え、そうなん？ キャバ嬢の才能があるな」

その直後、加蓮は微笑みながら言った。

「なんて嘘。ホントはあのクソ男、ここで私達と4Pするために来た

「なんだよ？」

「へあつ!?？」

グレイズアイン並みの手の平返しに、千秋の間抜けな声が漏れた。その直後、ゆらりと文香は千秋の方に振り向いた。

「……………千秋くん、少しお話があります」

「えっ? いやっ、今のは」

「……………言い訳しないで下さい。お説教です」

「ちよっ、待っ……………! テメエ北条覚えてろよ!?？」

加蓮は言われても「あつかんべー」と舌を出した。文香に廊下まで引き摺られる千秋を見ながら奈緒、加蓮、凜は眩いた。

「自業自得だな」

「助けてあげたのにあれはないわ」

「アイドルにキャバ嬢はないよね」

最もだった。三人はバカップルを放っておいて、ゲームの準備を始めた。

30分後、文香(怒)と千秋(泣)が戻って来た。

「……………お待たせしました」

「あ、戻って来た」

「おかえり。もう始めてるよ」

「……………その前に加蓮さん、良いですか?」

「え、何?」

あつけらかなとした感じで聞き返した直後、加蓮は自分の背筋が凍りつくのを感じた。身体が動かない、まだ寒くなる季節でもないのに鳥肌が立っていた。それらの元は、文香からだった。

「……………二度と、性質の悪い嘘をつかないで下さい。良いですね?」

「……………は、はいっ」

本気で、もう二度と文香を怒らせるのはやめようと心に誓った加蓮だった。ちなみに、残り二人は「いやそもそも信じるなよ」と思った事は言うまでもない。

まあ、そんな一幕はともかく、ゲーム大会開始。結局、チーム決め

などはされずに、千秋を除く四人でグーパーをして別れた。

その結果、文香凛vs加蓮奈緒となった。

「つて、結局こうなるのね……」

凛は隣で浮かれてる奈緒と加蓮を見て呆れた。ちなみに、ソファアの下に千秋と文香が座っている。

「よーっし、まずは勝ったね」

「さっさと終わらせて、またチーム分けするかあ！」

ノリノリでそう言う二人の下で、文香は凛に言った。

「……………なるべく、足を引つ張らないようにしますよ」

「ううん。私もヘタクソだから、大丈夫」

その会話を聞きながら、千秋が後ろを振り返って言った。

「つーかお前らさ、誰が文香さんが弱いなんて言ったの？」

「へっ？」

文香はX1改を選んだ。

「俺と今までずっと一緒にやって来たんだよ？弱いわけないじゃん」

「……………」

沈黙が流れた。千秋がそう言った通り、文香と凛……………というやり、文香の一人勝ちとなった。白ける場。やがて、加蓮と凛が元気良く手を挙げた。

「文香さん！私とチームになろう！」

「……………えっ？えっ？」

「おい待て、俺の時と随分反応違くない？マックでお前ら俺の事拒絶してたろ」

「だ、ダメよ二人とも。文香さんが一番強いなら、一番弱い私と組むべきでしょ？」

「あ、渋谷さんも止める側じゃないんだ。ていうか俺の台詞は無視？幻聴扱い？」

軽く泣きそうになってる間にも、文香争奪戦は続いた。だが、その間に文香が「あのっ……………」と口を挟んだことにより、一時休戦した。

「……………あのっ、私は……………千秋くんと、やりたいです……………」

その言葉に、千秋は思わず泣きそうになった。やはりこの人は俺の

事を忘れてはいない、的な感じで。

だが、他の面子はそうもいかない。千秋と文香が組んだら誰も勝てないからだ。と、思った直後、文香は続きを言った。

「……そつ、そのつ……チーム戦なら、千秋くんに勝てる気がする、ので……」

ああ、そういうこと……と、四人は納得（一人涙目だけ）し、文香チームと千秋チームに別れて勝負を開始した。

そのままた方までゲームを続けた。文香と千秋のどちらかがやめると、戦力差が大きくなるのでやめるわけにはいかなかった。

その結果、疲れ切った千秋は、いつの間にか文香の肩に頭を乗せて眠ってしまった。

「……あら、眠ってしまいましたね……」

「えー。まだ鷹宮くんのこと一回も落とせてないのにー」

「……仕方ありませんよ。私と千秋くんはずっと連続でしたし」

「でも、鷹宮が寝ちゃったら、あたし達ゲーム出来ないぞ」

「……それなら、私が皆さんにこのゲームについて、色々教えて差し上げるのはどうでしょうか。そうすれば、次は千秋くんにも勝てるかもしれませんよ？」

「おお、いいねー」

との事で、四人で特訓を始めた。今更だが、文香の教え方は質より量だ。つまり、最初からクライマックスで、延々と戦闘開始。

そのまま、さらに2時間くらいぶっ通しで続け、加蓮、奈緒、凜はソファアの上でグダッと寝転がった。

「もう、無理……」

「疲れた……一生分ゲームやった気がする……」

「しばらくガンダムは見たくない……」

「……もうやらないのですか？」

キョトンと首を捻る文香に、加蓮が言った。

「……さ、流石に休憩しようよ……。文香さんは疲れてないの？」

「……疲れていますけど、もつとやらないと千秋くんには勝てませ

んから……」

「……よ、よくそこまで頑張れるね……」

「……ま、まあ、その……上手くなれば、千秋くんは私ともっと楽しんでゲームが出来るよ、と思いますから……」

途切れ途切れに恥ずかしそうに、文香は呟いた。その様子を見て、加蓮も凜も奈緒も茶化すのを躊躇するほど、胸。ズキユンと貫かれた。とうの千秋は文香の肩から滑り落ちて、膝の上で眠っていた。

その寝顔を見ながら、加蓮はソファアの上で屈んで、千秋の頬を突いた。

「まったく……こんな良い彼女いないよ？大事にしなよー」

「んっ……」

「あつ、やばっ……起きちゃった？」

「……大丈夫ですよ、加蓮さん。千秋くんはそのくらいじゃ起きませんから」

「あ、そ、そうなんだ？あと、突いても良い？」

「……もう突いてるじゃないですか。良いですよ」

「あ、じゃああたしも突く」

「私も」

「えっ、ちよっ」

奈緒と凜も参加し、寝てる千秋の頬を突いた。

「ぶにぶにしてるなー。柔らかい」

「ほんとね……普段のふてぶてしきとは考えられないくらい柔らかいね」

「……可愛いでしょう？私の家に泊まった時は、いつも私先に起きて寝顔を眺めるんです」

「えっ、と、泊まってるの？」

「……あつ」

口が滑った、みたいに目を逸らす文香。だが、その行為は周りの奴からしたら尚更、「質問して下さい」と言ってるようなもので。三人は目を輝かせて質問した。特に、いつもいじられてる奈緒は一層、目がキラキラしていた。



「何々!?どこまでいったの!?」

「何?泊まるってマジ!?何やったの!?」

「文香さんが大人になった!?」

「ちっ、違いますっ!落ち着いて下さい!別に、えっちなことしたわけではないんです!」

「一緒に寝たのに?」

「ありえない?」

「まあ、二人ともムツツリそうだし」

「う、うるさいです!千秋くんはそうかもしれないですけど、私は違います!」

「彼氏をあっさり切り捨てたよ……」

引き気味に加蓮は呟いた。まあ、確かに匂いを嗅がれたり噛まれる事をおねだりしたりする人の台詞ではない。その事を加蓮が知っているわけでもないが。

すると、加蓮の隣の凜が聞いた。

「……逆に、寝泊まりしてるのに何もしてないの?」

「………していません。千秋くんは私に手を出して来ていませんか」

「へー意外。普通、アイドルでスタイルも良い文香さんが彼女なら、何回か手を出すと思うんだけどな」

「………す、スタイル、ですか?」

「そうだな。文香さん、胸大きいし」

「……そ、そうでしょうか」

「うん。肌も綺麗だしまつ毛も長くて……」

「あと出るところ出てる割に締まるところ締まってるよね」

「っ?ち、ちよつと凜さん……!お腹触るのはやめっ」

「そうだよ、凜」

「……加蓮さん、ありがとうございます」

「触るなら彼氏が起きないようにしなきゃ」

「か、加蓮さん!?」

「お、おいっ。鷹宮起きちゃうんじゃないか?」

「大丈夫だよ、本人に触れなければ」

「しよっ……そういえば、千秋きゅんは割と起きやすいでしゅっ……ですよ!?」

「噛み過ぎでしょ。嘘つくの下手だね」

凜にシレッと看破され、文香はお腹や胸を触られ続けた。

「ちよっ、やめっ……んっ……!」

「ふわー、髪もサラサラ……ていうか良い匂いする……」

「ひゃっ……!か、髪はダメで……!」

「綺麗な手ー。ネイルしてあげたい」

と、まあ千秋を膝枕していて動かないことを良い事に、やりたい放題されてる時だ。髪を掻き上げた奈緒が「あれっ?」と声を漏らした。

「………なんで、こんなところに噛み痕があるんだ?」

「………えっ?」

「………えっ?」

三人はその質問に声を漏らした。もちろん、加蓮と凜の二人と文香の反応の意味は違ったが。

それをいち早く嗅ぎ取った加蓮は、文香に聞いた。

「………ねえ、なんで?」

「い、いやっ、その……」

目を逸らして、文香はタラタラと汗を流し、必死に言い訳を考えた。で、苦し紛れにボソツと呟いた。

「………きっ」

「「きっ」」

「……キスショットアセロラオリオンハートアンダーブレードに噛まれて……」

「はい嘘」

「もう少しまともな嘘つきなよ」

「お前、ツマンないウソつくね」

一人だけ人型近界民がいたが、とにかく全員からあっさり看破された。だが、今回ばかりは文香もバラすわけにはいかない。なんとか逃げ道を探した。

そんな中、少し前に千秋に言われた誤魔化し方を思い出した。

『とにかく、アニメネタを連呼して下さい。それで大抵の相手は呆れて諦めるから』

今、まさにその使いどきだ。

「……………ち、違うの！痛かったの！お腹が痛かったの！」

「いや、アニメネタで誤魔化さなくて良いから」

シレッと凜に防がれた。目の前で安眠してる千秋を叩き起こしてやりたくなかったが、可愛い寝顔を台無しにするのは嫌なので我慢した。

しかし、本格的にピンチだ。性癖を晒すような事があれば、変態認定は免れない。しかも、バレる相手がよりにもよってトライアドプリムス。三人とも、参加ユニットは多い。その伝達力は音速だ。

どうしようか悩んでると、加蓮がさつきままでと違い心配そうな表情で聞いた。

「……………もしかして、痴漢？」

「……………へっ？」

「いや、言いたくない事なら、何かあったのかなって、思っ……………」

すると、奈緒と凜も不安そうな表情に変わった。

「そ、そうなのか……………」

「何かあったの？鷹宮くんには相談したの？」

なんかとんでもない方向に話が進んでしまった。逃げ道とはいえ、他の人に心配されてまで隠し通すほどではない。

「……………ち、違いますから。そんな事件になるような事ではありません……………」

「そ、そっか、良かった……………」

「じゃあ、何で首筋噛まれるんだよ」

「……………」

これは観念するしかない、そう思っ……………口を開いた時だ。

「へ、ヘッキシー！」

わざとらしいクシャミが下から聞こえた。その直後、全員が下を見た。千秋が文香のお腹の方に寝返りをうった。

「……………千秋くん？」

「……………」

「……………千秋くん？」

「……………」

「……………俺の拳が真っ赤に燃える」

「お、おはようございます」

「あ、それで起きるんだ」

加蓮の呆れたような台詞を無視して、起き上がった千秋に文香は聞いた。

「……………いつから起きてたんですか？」

「なんで起きてた前提……………あ、いや、ついさつき起きたばかりです」

「……………本当は？」

「……………頬突かれまくってた時です」

「……………なんですぐに起きなかつたんですか？」

「……………文香さんの膝が柔らかくて……………あと、文香さんが焦ってるって見るの可愛くて」

「……………」

直後、文香はイラつとしたのか、冷たい目で千秋を見ると、思いつきり顔を抱き締めた。胸で窒息させるようにギュウツと抱き締め、千秋と凛と加蓮と奈緒は顔を真っ赤にした。

「っ！！？」

「……………柔らかいのが好きなんでしょう？このまま何分でも抱き締めてあげます」

「んーっ！んーっ！」

「なんですか？もつと強く？」

「んんっ！！？」

抵抗するも、割と力の強い文香には無駄だった。段々と呼吸が出来なくなり、抵抗する力も弱まり、千秋の両手足がぐったりし始めた所で、いち早く正気に戻った加蓮が慌てて止めに入った。

「ち、ちよつと！死んじゃうよ鷹宮くん！」

「へっ……………？」

文香はハツとして力を緩めた。千秋の頭は文香の胸の上に置かれたまま動かない。

「…………お、大きい胸は兵器だね」

「…………ああ」

凜と奈緒がボソツと呟いた時だ。正氣に戻った文香は顔を真っ赤に染めた。

「…………ほ、他の人がいる中で…………」

赤くなつた顔を両手で覆う文香。胸の上で微動だにしない千秋。しばらく沈黙が五人の間に流れた。

やがて、凜と加蓮は荷物を持って立ち上がった。

「…………じゃ、私達は帰ろっか」

「そだね、時間も時間だし」

「おおい！待てお前ら！この中であたしを一人にするなあ！」

「お邪魔しましたー」

「おーい！連れて帰れー！」

結局、帰られた。千秋と文香は一泊した。

物事を隠す時は徹底的にやれ。半端ならやらない方が良い。

夕方、俺は家でインフエリアの曲を聴きながら、パソコンを弄っていた。今日、予定では自宅にストールが届くはずだ。明日が文香さんの誕生日である。しかし、こんなに人へのプレゼントで悩む事になるとはなあ。意外と俺って繊細な奴なのかもしれない。

そんな事を考えながら、カチカチと艦これやりながら、ようつべのお笑い芸人の動画を見てると、ポツポツと雨が降って来る音がした。あ、そういや今日、文香さんがドクターストーン返しに来るって言ってたっけな。俺が取りに行くって言ってんのに、聞いてくれなかった。もしかして、たまにはうちに来たかったのかなあ。お陰で、うちに飾ってある文香さんグッズは全部、押し入れにねじ込むことになった。

でも、雨降ってるし文香さん来ないかもなあ。まあ、このくらいの雨なら来てもおかしくないが。……あ、洗濯物しまわなきゃ。

俺はベランダに出て、布団と枕を急いで回収した。部屋の隅にまず敷布団を三つ折りにして置いて、その上に掛け布団を畳んでおいた。もう一度ベランダに出て、あと枕だけ回収した。……うわあ、雨強くなつて来たな……。念の為、文香さんに今日は漫画は返さなくて良いって言っとくか。

そう思って、スマホを取り出した時だ。ピンポンと音がした。嫌な予感がして、おそろおそろ玄関を開けると、服の中に何かを隠した文香さんが、肩で息して立っていた。

「……………文香さん？」

「はあ……………はあ……………ずびばせん……………途中で、雨に降られてしまつて……………」

「……………タオル持って来ますね」

とりあえず、洗面所からタオルを持って文香さんに渡すと、他のタオルを床に敷いて、洗面所まで道を作った。

「とりあえず、シャワー浴びて下さい」

「……………すみません、お借りします。あ、でも漫画は無事ですよ？」

嬉しそうに服の中からドクターストーンを取り出した。

「そんなの良いですから、風邪引く前に早くシャワー浴びてください」  
「はっ、はい……………」

文香さんは軽く会釈すると、俺に漫画を渡して洗面所に入った。お風呂は沸かしていないが、仕方ないか。文香さん、風邪引かないと良いけどなあ。

そんな呑気なことを思いながら、とりあえず押入れの中だけは見られてはならないので、今のうちに文香さんの布団を用意し始めた。多分、服とか今日中じや乾かないだろうし、泊まりになるだろうから。

文香さんの布団と枕を用意して、文香さんのジャージも出した。

今のうちに、体の温まる料理を作っておこうと台所に立った時だ。またまたピンポンと音がした。直後、嫌な予感が頭に浮かんだ。

……………もしかして、文香さんがここにいるのバレたか？だとしたら奴はマスコミか…………。とうとう、あれを使う時が来たか…………。俺は以前作った、デスノートの隠し方の引火する二重底を開け、そこから「口止め料」と書かれた封筒を取り出した。

これは、付き合い始めた翌日から用意した、万が一マスコミにバレた時の口止め料だ。銀行の貯金をほとんど下ろしてあるから、10万円は入ってる。あと、中にはエロ本が入ってる。男ならこれで引き下がってくれるはずだ。

それをズボンに差して、玄関に出た。

「はっ」

「あ、宅急便です」

……………なんだよ、ストールか。警戒して損したわ。文香さんがシャワー浴びてて良かった。さっさと済ませよう。ハンコを取って来て、受け取り印を押すと、玄関を閉めた。

……………ふう、これで一件落着……………。

「しねえよアホか」

ヤバイじゃん。文香さんへの誕生日プレゼントどうしよう。見ら

れちやうまずいでしょ。今のうちに隠さないと……やっぱ押入れしかないか。

「……………千秋くん？今、誰か来ませんでした？」

「ヒイヒイヒイヒイイツ!?？」

ドア越しに声を掛けられ、ビツクリして京介みたいな奇声をあげてしまった。な、なんだよ！ビツクリしたなオイ！

「……………何かあつたんですか？」

あ、ヤバイ。怪しんでる声だ。俺はダンボールを壁際において、「いかにも元からここに置いてありました」みたいな雰囲気を作ってから言った。

「……………な、何でもありませんよ。発声練習です」

「……………現役アイドルにその言い訳にしますか」

……………確かに。思わず納得してると、洗面所の扉が開いた。あれ？まだジャージ渡してないはずなんだけど…………。俺の不安は的中し、出て来たのはバスタオルを巻いた文香さんだった。

「つ!??ふ、文香さあん!??」

「何を隠してるのか言いなさい!」

「その前に服!服!」

「そんなの後で良いです!」

「いや、良くねえよ!??」

「いいから教えなさい!」

掴みかかって来る文香さん。抵抗しようにも、現状は体のほとんどが肌であり、体を唯一煽つてる装甲もタオル一枚、おそらく下着も装備されていない文香さんが襲いかかって来たので、上手い抵抗の仕方が思いつかず、結局押し倒されてしまった。

後ろに倒れ、俺の上にはタオル一枚の文香さん。この状況はどう見てもヤバイ。

「……………さ、何を隠したんですか」

俺を追い詰めるのに必死なのか、文香さんは危機感も持っていない様子。無意識なのか、タオルはしっかり巻いてるので、取れる心配はない。や、全然悔しくなんかないけど。



って、やばいやばいやばい。視線気をつけないと。タオル一枚の巨乳に吸い寄せられる。

すると、文香さんか「ん？」と声を漏らした。俺の腰の辺りに。え？俺のズボン脱がす気？と思っただら違った。はみ出た封筒だった。

「……………なんですか？これ」

「あつ、待っ」

俺の制止も届かず、文香さんはその封筒を手を取った。

「……………口止め料？」

ああ、オワタ……………。俺の人生終了のお知らせ。文香さんはその封筒を開けた。中身のエロ本と金を見た直後、すぐく顔を真っ赤にした後、キツと俺を睨んだ。

「……………鷹宮くん」

「は、はい…………」

「……………なんでしゅかこれ……………へっくち」

おいおい、風邪引くって。

「あの、風邪引きますから一度服着てください…………」

「逃げようだったってそうはいきませんよ」

「や、逃げませんしちゃんと説明しますから……………風邪引かれる方が困ります」

「……………」

すると、文香さんは渋々といった感じで洗面所に戻った。扉を開けた時、今更顔を赤くしてたけどツツコまないであげよう。

「……………あ、文香さん。ジャージジャージ」

「……………あつ、そ、そうですねっ」

ジャージを受け取りに戻って来た。

待機すること数分、文香さんが戻って来た。ムツとした表情を作っているが、耳が赤いところが可愛いです。その事でニヤニヤしていると、ジロリと睨まれたので、何とか顔の筋肉に力を入れた。

「……………で、これは一体どういうことなんですか？」

文香さんの手にあるのは、口止め料の封筒 in the 10万  
円とエロ本。文香さんは相当ご機嫌斜めなのか、氷のオーラを放って

いたので、俺は思わず正座してしまった。でも、アレだな。ジャージ姿の文香さんの前で正座していると、少し興奮するな……。

「……………それは、その……………違うんです。それはですね……………」

「何が違うんですか？」

「あ……………それはつまり違うな……………。こう、それはですね……………」

「ちよつと待つてください。次、『それは』って言ったらこれの封筒をあなたの顔に投げつけます」

「アツハイ。えつと、それ……………その件に関してはですね……………」

直後、顔面に封筒が降って来た。文香さんが暴力を振るうなんて相当地立腹の様子だ。「それは」って言ってないのに……………。

若干、腫れ上がった顔を手で押さえると、文香さんが先に声を発した。

「じゃあ、聞き方を変えます。何の口止め料としていただいたものなんでしょうか？」

「……………はっ？ いただいた？」

「先程、チャイムの音がしましたね？そこで何かをいただいたんでしょう？」

あ、なるほど。俺が誰かを脅してこれをもらったと思ってるのか。

「いや、違います。これは俺が払う方の口止め料です……………」

「どういうことですか？」

「その……………方が一、俺と文香さんの関係がマスコミにバレた時のための口止め料にでも思いました……………」

「……………じゃあさっきの人は何なんですか？」

「宅配の人です。ほら、あのダンボール」

こんな事で文香さんに嫌われるのはゴメンだ。ていうか、嫌われたらプレゼントも何もない。

「……………あれは？」

「伝票ついてるんで、嘘だと思ふなら確認して下さい……………中身はなるべくなら聞いて欲しくないんですけど……………」

「分かりました。さつき来たということは信じます。中身に関しても問いません」

まあ、伝票見りや分かることで嘘ついても仕方ないしな。しかし、中身について聞かれなかつたのはラッキーだったな。

「私が怒ってるのは、こっちの事です」

文香さんは俺の顔面にダンクした封筒を拾った。

「この事ですー！さっきの事情を聞いたとしても納得できません！」

うっ、だよね……。賄賂って言ってるようなもんだしなあ。

「すみません……。でも、アイドルとお付き合いする以上はそれなりの準備をしないと……」

「大体、このえっちな本はどこで買ったんですか？千秋くん、未成年ですよね？」

「……………それは、その……………こ、コンビニで」

「……………」

「で、でも誤解しないでください！読んでませんから俺は！ほら、中の袋とじだって未開封でしょ？大体、俺が文香さん以外の女に勃起するなんてありえな」

また顔面に封筒がダンクされた。

「……………調子に乗らないでください。私が怒ってるのは使ったかどうかではありません。18歳未満禁止の本を買った事、私に内緒でそういう対策を考えてる事です」

「……………内緒で？」

「私は、千秋くんの彼女です。そういう相談を、どうして私に下さらないんですか？」

「……………」

「……………そういうのは、私と一緒に対策を考えて下さい」

まあ、そう言われればそうかもしれないけどさ。文香さん、勉強ができるバカだし……………いや、そういう事じゃないか。相談をする事が大事って事だよな。

「……………分かりました」

「……………では、とにかくこのえっちな本は私が預かります」

「えっ、それでも……………」

「口止め料にこの本は使えません」

ですよ。文香さんはエロ本を廊下に置くと、「さて」と話題を変えた。

「……それで、その……今日は泊めていただいてもよろしいですか？」

「良いですよ。服ないですもんね」

「……すみません」

「布団の準備できてますので。今、晩飯作りますね」

と、いうわけで、晩飯にした。

その後はいつもとやることは一緒だった。ゲームして本読んで噛んで匂い嗅いで。

だけど、俺は明日学校なので、今日早く寝ることにした。文香さんと隣同士に布団を敷いて、布団の中に入った。すると、文香さんは布団の中を移動し、俺の腕にしがみついた。

「……ふふ、千秋くん捕まえたよ」

何それ可愛い。

「……今日、なんか楽しそうですね」

「……そうですか？」

「はい。ゲームも本も……あと、アレもなんか楽しそうに見えましたよ」

「……実は、そうなんです、楽しいんです。千秋くんの家にお泊りなんて、久しぶりですから。布団で寝るのも久しぶりです」

「……そうですか」

「はい♪あ、そうだ。お姉さんが寝る前に書を読んで差し上げましたよか？」

「や、大丈夫です」

そんな事されたら眠れねーよ。つーか、文香さんが明日学校だから早く寝ろって言ったんじゃない。

………ていうか、いつまでくつついてんの？色々柔らかくて、色々当たってて眠れないんですが……。

「あ、あの、文香さん。そろそろ寝たいので……」

「……今日だけは、くっついて寝てはいけませんか……？」

………断れない、文香さんをお願い。

「……………分かりましたよ」

「……………千秋くん、優しいです。……………へくちっ」

「寒いですか？」

「……………はい、少し。涼しくなりましたから」

「……………」

「……………」

「……………もっ、もう少しくつついてもいいですよ」

「はい」

結局、早く寝ることは諦めた。まあ、目覚ましセットしたし、大丈夫だろう。

翌日、10月27日。布団の中で寝てる文香さんの脇に挟まってる体温計が鳴り響いた。

「……………38.2℃」

「……………」

文香さんが誕生日に風邪引いた。

## 風邪引くふみふみ（1）

文香が風邪を引いた。まあ、雑巾みたいに濡れて家に来て、シャワーの後にタオル一枚で男を押し倒し、夜になっても俺の脇腹を突いたり腕にスリスリしたり、深夜テンションでどちらかというどペツトみたくなっていれば、風邪引くのも当然だ。

「……すみません、ちあきくん……」

ハア、ハアと息を切らしながら、文香は千秋に謝った。

「や、まあ仕方ないですよ。昨日は雨すごかったし、俺もすごい怒られましたし、バスタオル姿で」

「……ば、バスタオルの事は言わないで下さいよ……」

顔を赤くして、布団で顔の半分を隠しながら、ボソツと呟いた。その様子に心底可愛い思いつつも、何とか顔に出さずに千秋は立ち上がった。

「何なら食べられますか？うどんとか？」

「……そ、そうですね。うどんとかだと嬉しいです……」

「了解です、今作りますから」

千秋は台所に向かうと、まずポカリをコップに注いで文香の枕元に置いた。それからうどんの調理を開始。

すぐに完成させると、文香の隣に持って行った。

「はい、お待たせしました」

「……すみません、わざわざ」

「大丈夫ですよ。前は俺が面倒見てもらいましたし」

「……ありがとうございます。いただきます」

うどんを受け取り、ふうふうしながら啜った。その間に、千秋は棚から冷えピタと風邪薬を取り出し、コップに水を汲み、アイスノンを冷凍庫から出して持って来た。

「文香さん、冷えピタです」

「……あ、はい。ありがとうございます」

「あと、風邪薬です。水もあるので、食べ終わったら飲んで下さい」

「……はい、すみません」

「あと、タオル巻いたアイスノンもあるので頭の下に置いてください」  
「……………は、はい……………。あのっ」

「他に何かしてほしいことあったら言ってくださいね。いつでもここにいますから」

「……………へっ?ここに?」

「はい。そうですけど」

「……………今日、学校ですよね?」

「何ですかそれ?」

惚けた回答に文香はムツと頬を膨らませた。

「……………行きなさい」

「えっ?」

「……………学校に行きなさい」

「えっ、なんでですか?」

「……………なんでそんな純粋に聞き返せるんですか?お気持ちは嬉しいですが、そういうことはちゃんとしなきゃダメです」

「でも、文香さんの面倒見ないと……………」

「……………帰って来てからで十分ですから。千秋くんは学校に行ってください」

「で、でもっ……………何かあったら……………」

「……………ていうか、行ってくれないと私このまま帰ります」

「制服に着替えます」

自分は気にしないが、文香は気にすると思うので洗面所で着替え  
た。

着替え終わると、歯磨きをして鞆を持った。

「じゃあ行ってきますね」

「……………は、はい。お気を付けて。けほっ、けほっ……………」

「……………大丈夫ですか?」

「……………大丈夫ですから。行ってください」

「……………あの、冷蔵庫にお茶でも入ってるので、喉乾いたら」

「……………は、はい」

「……………あ、あと汗かいたらジャージの替えはあのダンスに入ってま

すから」

「……………わ、わかりました」

「……………あ、あと何か異変が起こったり、帰りになにか買って来て欲しいものがあつたりしたら、連絡下さい」

「……………は、はあ」

「……………あ、あと誰かうちに来ても無視して全然良いので…………」

「早く行きなさい。私は大丈夫です」

怒られたので、千秋は早く行くこうとした。だが、その前に一ツ言い忘れたので、最後に付け足した。

「あ、あと…………」

「なんですか？」

「あ、いや最後にしますから。えつと…………あそこの押入れあるじゃないですか」

「……………あ、はい」

「……………あれ、絶対開けないでください」

「へっ？」

「……………絶対に、です」

「……………わ、分かりました」

「では、行ってきます」

千秋はそれだけ言うと、部屋を出て行…………こうとして最後に振り返った。

「……………あの、ホントに何かあつたら」

「早く行きなさい」

学校に行った。

で、文香はうどんを食べ終わると、冷えピタを貼っつけた。

「……………貼ってくれば良かったのに」

そう呟くと、布団の中に寝転がった。布団の上で寝転がり、目を閉じた。すんすんと布団の匂いを嗅いだ。

「……………」

千秋の匂いがしない。考えてみれば、普通一人暮らしの家に布団が二枚ある事はない。こっちはほとんど文香用なので、当然と言えば当



然だ。

「…………しばらく、千秋くんは帰ってこないよね」

文香は起き上がって、自分の使っていた布団を畳むと、千秋が寝ていた布団を広げ、その上に寝転がった。

「♪」

突然鼻歌を歌い出した。が、すぐにケホツケホツと咳をしたのでやめた。

大人しく寝ようとしたところで、また別の問題が発生した。匂いで眠れなくなってしまった。

「……………」

なんか今更自分の行動が恥ずかしくなり、誰がいるわけでもないのに恥ずかしくなって布団で顔を隠した。

しばらく目を閉じて大人しくしていたものの、眠れないので、頭の中で暇潰しをすることにした。

「……………そういえば」

何か思い出したように、文香は押入れを見た。千秋が絶対開けるな、と言っていた押入れ。何が入ってるのかすごく気になった。

「……………」

見るのはやめた。千秋が見るな、と言ったなら見るべきではないと思っ直し、布団の中で丸まった。

「……………」

でも気になり、布団から顔を出して押入れを見た。もしかして、とても大事なものが入ってるのかな、と思ってみたり。

「……………」

でも、それなら自分に隠す必要はないでしょ、と思っ直し、布団の中で丸くなった。

「……………」

もしかしたら、点数の悪いテストが入ってるのかも、と思っって布団から顔を出した。もしそうなら、叱ってやろうと思ったりした。

「……………」

でも、そんなのび太みたいな事はないと思っ直し、布団の中で丸

まった。

「……………」

エロ本の可能性も思い浮かび、押入れを布団の中から覗いた。そういえば、昨日没収したエロ本、アレの内容が気になった。自分のためではないとは言え、買ったのは千秋本人。少なからず、本人の好みが反映されているはずだ。

ふと廊下を見ると、昨日没収したエロ本が落ちていた。

「……………」、これはあくまで千秋くんの好みを把握するためです。断じて私のためではありません」

一人しかいないのに言い訳をしながら、そのエロ本を拾ってパラパラとめくった。多いのは、やはり巨乳だった。

「……………」

布団の上でエロ本を読みながら、自分の胸を寄せてみた。

「……………」私も負けてないと思うのですが……………」

いつの間にか、無意識にそのエロ本を千秋が自分で買ったもののように思い込んでしまっていた。

「……………」うわ、あ……………」

男のエリンギが女の色んな穴に突っ込まれてる所を見ながら、文香は思わず両手で顔を隠した。隠した割に、指と指の間からチラチラと見えていた。

「……………」そういえば、千秋くんにも……………」これ、生えてるんですよ、ね……………」

そう思うと、更に顔が真っ赤になった。千秋の奴はどんな形なんだろう、とソワソワしながら考えてると、段々と体が火照って来るのを感じた。

「っ……………」

頬が紅潮し、変な気分になって来た時だった。

ピンポーン、とインターホンが鳴った。

ビクビクンツと文香の肩が跳ね上がった。慌ててインターホンをみると、楓の姿があった。

『文香ちゃん?』

バックンバックン言ってる胸を右手で抑えながら、乱れてる息を何とか整えた。一発で正気に戻り、文香は慌てて玄関を開けた。

「はっ、はいっ」

「お見舞いに参っ……どうしたの？」

尋常じゃないくらい汗だくの顔と、真っ青かつ真っ赤な顔色を見て、楓は怪訝な表情を浮かべた。

「……ど、どうもしませんよ？」

「尋常じゃないくらい汗かいてるけど……顔色も悪いし、そんなに体調悪いの？」

「……いつ、いえ、その……」

「それなら、早く寝た方が良いわよ。ほら、布団に戻りましょう？」

「ちっ、違っ……これは」

楓に背中を押されながら、部屋の奥に連れて行かれた。そもそもなんで楓さんがここに？とか考えながら連行されると、「んっ？」と楓が声を漏らした。

その視線の先には、布団の上のエロ本。文香は別の意味で顔色が悪くなった。

楓が、ギギギツと文香を見た。

「……………文香ちゃん？」

「……………は、はい」

「まさかとは思うけど、これを読んで熱が上がったなんて事はないわよね？」

「……………すみません」

その反応を見て、楓は額に手を当ててため息をついた。

「……………文香ちゃんって、えっちな子だったのね……」

「ち、違います！」

「はいはい、いいから布団の中に入りましょうねー。えっちな文香ちゃん」

「っーか、楓さん……………!!？」

顔を真っ赤にしてぶんぶん怒る文香を、楓はどうどうと落ち着かせて布団に寝かせた。

「……………うう、読まなければよかったです……………」

「そもそも、なんでそんなの持ってたの？」

「……………」

言えなかった。千秋くんがエロ本をマスコミへの口止め料にしようとしていたものを私は読んでました、なんて言えなかった。

だが、別に自分のものというわけでもなく、何と答えようか頭の中でグルグル巡らせた結果、文香はボソツと呟いた。

「……………ちつ、千秋くんが持っていたものを……………興味本位で」

「……………あの子は後で説教ね」

ああ、ごめんなさい千秋くん……………と、心の中で謝罪した。今度何か奢ろう、とも思った。

すると、楓は不機嫌そうに呟いた。

「まったく……………こんなに可愛い彼女がいるのに、こんな物持ってるなんて……………」

「……………へっ？あの、今なんて？」

「ん？……………あー、私も知っちゃったのよ。文香ちゃんと鷹宮くんが付き合ってる事」

「な、なんでバレたんですか!?!？」

「鷹宮くんがバラしたの」

「……………千秋くんが？」

「ええ。『本当は奏さんに頼もうとしてんですけど、あの人アレで高校生なんですよね。で、唯一学生じゃない高垣さんに頼もうと思っ』って頼んで来たわ」

「……………それ、奏さんには絶対言えませぬ……………」

「彼、すごくあなたの事を心配してたみたいよ。最近まで関係を隠していた私にバラすくらいなもの。背に腹は代えられないって感じだったわね」

「……………」

そんなに心配してくれてたんだ……………と、文香は少し嬉しくなった。そして、エロ本の件身代わりにしてごめんなさい、とも思った。

「私は午後から予定があるから、一緒にいてあげられるのは午前中だ

けだけど、何かして欲しいことがあったら何でも言ってみてね？」

「……………は、はい。すみません、楓さん」

「病人は気を使わなくて良いの。寝なさい?」

「……………分かりました」

「……………あ、えつちな本読んでたことは内緒にしてあげるからね?」

「っ!か、楓さん!……………よろしくお願いします」

何か言われる前に負ける文香だった。

## 風邪引くふみふみ（2）

その頃、千秋。ロングホームルームで、沖縄の観光ルートを班ごとに決めてる中、椅子に跨って半端なく貧乏揺すりをしていた。班員が一步引きながらその様子を見てる中、かな子が苦笑いを浮かべて聞いた。

「……………あの、鷹宮くん？どうしたの？」

「……………」

「た、鷹宮くんっ？」

「おうっ!?!?な、何っ?誰?建造時間何分だったっけ!?!?」

「あ、あの……………三村、だけど……………」

「み、三村さん……………?何、どしたの?」

「いや、鷹宮くんも一緒に修学旅行の行き先決めたくて……………何かあったの?」

「いや、何でもない。俺はグランドキャニオン行けば良いから」

「……………グランドキャニオンはアメリカだよ……………」

「……………」

×心配ですごい貧乏揺すりしてた。

×

×楓に帰る前に、自宅から替えの服を持って来てもらい、軽く色々スーパで買って来てもらって、文香は再び眠り始めた。しばらく目を閉じてると、ピンポーンと音がした。

「……………」

寝ようと思ってた時に……………と少しイラついたが、お留守番はしっかりこなさないと、と思い直し我慢して応対した。

「……………は、はい……………」

玄関を開けると、神谷奈緒が立っていた。

「よう」

「……………な、奈緒さん……………?」

「鷹宮くんに言われて、お見舞いに来たぜ」

「……………え、でも、学校は……………」

「今日は開校記念日なんだよ」

嘘だった。本当はキュアブラックのスケールフィギュアと引き換えにサボらされた。

「とにかく、あたしが看病するから、文香さんは寝ててよ」

「……すみません、お手数をおかけします……」

「いや、良いよ別に」

それにしても、と奈緒は思った。よくアイドルをここまでこき使えるな、と千秋に思わず感心してしまった。

文香は布団の中に戻り、寝転がった。

「体調はどうなんだー？」

「………まだ少し怠いです……」

「お腹は？何か食べる？」

「………楓さんに作っていただいたので大丈夫です……」

「そっか……。じゃあ、何かして欲しいことあったら言ってくれよ？」

「………はい」

「ところでさ、この部屋の本って読んでも平気なのか？」

「………大丈夫だと、思いますよ」

奈緒は本棚からBLEACHを手にとって読み始めた。

すると、文香の携帯が鳴り響いた。手の届く位置に置いてあったので、文香は自分でスマホをとって耳に当てた。

「………もしもし」

『文香さんっ？』

「！ち、千秋くんですかっ？」

一瞬、すごい嬉しそうな顔になったが、すぐにハツとなって厳しい口調で聞いた。

「………学校ですよね？なんで電話してくる暇があるんですか？」

『今昼休みなんですよ。それより大丈夫ですか？神谷さんと高垣さんは来ました？』

「………はい。今、月牙天衝の練習してます」

『何してんだよあいつ……。それで、その、体調の方は……』

「………大丈夫ですよ」

とりあえず、気を使わせないような返事をする事にした。

「……元気とは言えませんが、大分今朝より……」

『げ、元気じゃないんですか!?!?』

「……楽に、えっ?」

『や、やっぱり俺帰った方が良いですか?そ、そうですね。帰った方が良いですよ?今から早退を……!』

「……だ、ダメです!あと2時限なんですから、ちゃんと授業受けて下さい」

『大丈夫です!俺、エージェントの才能ある(気がする)のでバレずに帰れます!』

「……そういう問題ではありませんっ!私なら奈緒さんもいますし大丈夫ですから!」

『そ、そうですか……?ほんとのほんとに大丈夫?』

「……大丈夫です」

『死なない?』

「……ただの風邪で死ぬますか」

『……わ、分かりました。あ、何か買ってきて欲しいものとかありますか?万引きしてでも買って来ますよ!』

「大丈夫です!」

『分かりました……。あの、神谷さんに代わってもらえます?』

「……は、はい。……奈緒さん、千秋くんからです」

「月牙天……あたし?はい」

奈緒はスマホを受け取ると、耳に当てた。

「もしもし?なんだ、あたしにまで」

『おい、文香さんに何かあったら』

「あったら?」

『お前を殺す』

「ヒイロかお前は……。分かってるよ、その代わりアレな?」

『約束は果たす』

「はいはい……じゃ、文香さんに代わるよ?」

奈緒は文香にスマホを戻した。



「……………では、私はそろそろ寝ますので」

『は、はい。あの、本当に辛かったら言っ』

「大丈夫ですっ」

そう言っつて電話を切った。ふう、と文香は息を吐くとスマホを床に置いて寝転がった。

ふと奈緒の方を見ると、ニヤニヤしながら見てるのに気付いた。

「……………なんですか？」

「いやー？」

気になったので聞いてみたが、ふわふわした返事を返して来てから言った。

「さっき、電話来た時に文香さんすごい嬉しそうだったなーと思って」

「っ、そ、そうでした？」

「うん。なんか、すごいホツとしたような感じだった」

「……………」

カアアツと顔を赤くする文香に、奈緒はニヤニヤしながら言った。

「その時の文香さんの顔、すごい可愛かったぞ」

「……………や、やめてください……。恥ずかしいです……………」

「ごめんごめん。ほら、早く寝ろよ」

「……………は、はい……………」

文香は目を閉じた。

『『卍』『解』『神殺鎗』』

「……………奈緒さん、眠れないので静かにして下さい」

×

× 何時間経過しただろうか。文香はまた目を覚ました。目をこしこ

しと擦りながら、くあつと欠伸をして起き上がると、千秋が本を読んでいた。

「……………」

「あ、起きました？」

「……………おはようございます」

「身体の調子はどうですか？」

「んっ……………朝よりかなり楽になりました」

「良かったです。一応、体温測りましょう」

「……………はい」

体温計を渡すと、文香は脇に体温計を挿した。しばらく、そのまま待機した後、ピピピツと体温計が鳴り響いた。

「……………37.3℃です」

「大分下がりましたけど、少し高めですね」

「……………はい。千秋くんのお陰です」

「そんな……………俺は全然何もしてないですよ」

「……………そんなこと、ないです。千秋くんが二人もここに連れて来てくれたから……………」

「……………そう言ってくれると、嬉しいですけど」

「……………はい、ありがとうございます」

お礼を言うと、千秋は照れ臭そうに頬をかいた。

「……………じゃあ、文香さん」

「? なんですか?」

「遅くなりましたけど、誕生日おめでとうございます」

「……………えっ?」

文香は反射的にスマホを見た。10月27日、自分の誕生日だった。風邪引いててすっかり忘れていた。

「今日は風邪引いてますから、誕生日会は明日にしますが、それでも一応、言っておこうと思って」

「……………す、すみません。自分の誕生日なのに、すっかり忘れてました。ありがとうございます」

「プレゼントとかは、明日の方が良いですか?」

「……………そうですね。パーティーの時にお願いします」

「分かりました。じゃあ、」

そこで言葉を切ると、千秋は文香の唇に自分の唇を押し付けた。

「っっ!」

文香が目を見開いてる間に、千秋はしばらく唇を押し付けた後、顔を真っ赤にして離れた。

「……………今日のプレゼントはっ、こ、これで……………」

「……千秋くん、顔真つ赤ですよ？」

「……文香さんだってそうです」

「……バカ。風邪、移っちゃうかもしれないのに」

「……移っちゃったら……その時はその時です」

「……」

千秋に微笑まれて、文香は気恥ずかしくなって顔を逸らした。

「とりあえず、今日の分はこれで良いですか？」

「……」

目を逸らす文香に千秋は追撃するように問い詰めると、文香は目だけ千秋に戻すと、顔ごと向けた。

「……足りません。もう一回……」

「……た、足りない？」

「……すみません、少し嬉しくて……気分が高揚してるみたいです。

もしかしたら、風邪の所為かもしれませんね」

「……風邪の所為だったら、仕方ないですね」

千秋はもう一度、文香とキスをした。もう一度というかそのまま10回くらいキスをした。

×

今更、キスをし過ぎてお互いに恥ずかしくなって、千秋は逃げるように風呂に入った。

で、二人で晩飯を食べて、歯磨きをして寝ようとなった時だ。文香は深呼吸をすると、布団を敷き始めた千秋に言った。

「……千秋くん」

「なんですか？」

「……寝る前に、パジャマを取り替えたいのですが」

「あ、すみません。俺、洗面所いますね」

「……いえ、その……汗をたくさんかいたので、身体を拭きたいんです」

「そ、そうですか？」

「……拭いて、いただけませんか？」

「……はっ？」

貴様今なんと言った？と言わんばかりに千秋は首を傾げた。

「……………お願い、します」

「……………えっ、いや……………えっ?」

「……………ま、前もとは言いません。背中だけで、良いですから……………」

「いやいや、ちよっ……………えっ?あの、自分で何言ってるか分かってますか?」

「……………分かってます。でも、背中は届きませんし……………明日、誕生日会を開いていただくのに、ぶり返したらダメじゃないですか……………」

「や、でも……………」

「……………千秋くんっ」

文香は千秋の胸元の服をキュツと掴むと、上目遣いで聞いた。

「……………彼女にここまで言わせて、拒むんですか……………?」

「……………」

すると、千秋はため息をつくと、緊張気味にため息をついて呟いた。

「……………分かりました」

「……………ありがとうございます」

文香はそう言うと、早速千秋に背中を向けて上半身の服を脱いだ。

千秋はタオルを手に取ると、文香の背後に立った。理性をフルに燃やし「俺は人の背中を拭くためだけに生まれた存在だ」と言い聞かせながら座った。

「……………ふ、拭きますよ」

「……………ふ、拭きますよ」

「……………ふ、拭きますよ」

二人とも顔を真っ赤にしていた。とりあえず、文香の脇腹に左手を添えると「ひゃうっ」と文香から声が漏れた。慌てて左手を引っ込めた。

「すっ、すみませんっ」

「……………い、いえっ、驚いただけです……………。続けて下さい」

「……………は、はい」

文香の脇腹に再び手を添えた。ふにふにと柔らかい感触が手に残る。千秋は理性をイノケンティウスで燃やすと、背中をタオルで擦った。擦るたびに「んっ」と文香から色っぽい声が漏れる。

そのまま背中を拭き終わると、千秋は文香の背中から離れた。

「……………お、終わりましたよ」

「……………も、もう終わりですか?」

「…じ、じゃあ、俺は洗面所にいますから、終わったたら呼んで下さいねっ」

千秋は逃げるように洗面所に入った。その背中を見て、文香は呟いた。

「……………少しくらい、手を出してくれてもいいのに」

楓に持つて来てもらった新しいパジャマに着替え、文香は「良いですよ」と千秋に声を掛けた。

「……………寝ますか」

「……………そうですね」

二人は布団に入った。キスしといて今更な気もするが、風邪移るといけないから、という名目上で二人は別々の布団で、顔を真っ赤にして寝た。

テンションが高いと、服装だけでなく中身も小悪魔。

翌日、文香さんは一度家に帰った。1日遅れの影響誕生日会ということで、なんか俺のジャージじゃなくて私服に着替えたいらしい。汚いって意味じゃないよね、大丈夫だよねその辺。

で、せっかくなので文香さんには13時から改めて来てもらう事にして、飾り付けや準備を始めた。とりあえず、誕生日なのでテキストに色紙を細長く切って丸くして紐っぽくした奴、アレを部屋の壁に貼っつけた。

「……………これいるかなあ」

なんか別に必要ない気がして来た。せっかく作ったわけだけど、いざ自分が作ったものを飾るってなると、なんか恥ずかしいわ。

……………まあ、せっかく作ったんだし貼るけれども。

こう、良い感じに紙の紐を飾り付けた後「文香さん、誕生日おめでとう」という垂れ幕を装着。よし、こんなものか。

部屋の飾り付けを完成させると、食材を冷蔵庫から出した。

本来なら文香さんの家でやる予定だったため、その時に持っていく用の食材は揃っていた。飯を炊いてサラダをカットして、その上に刺身を添え、コーンスープを作り、あとはチキンステーキ。完璧過ぎて涙が出る。

「……………いや、待て」

まだ13時まで時間がある。今から作ったら冷めるだろ。ケーキだ、ケーキを焼こう。やつぱお手製のものが良いよね。

ケーキの作り方をググって、そこから若干アレンジすれば良いよね。美作昂じゃないが、アレンジは得意だ。

で、ケーキを焼き始めて飾り付けも終えて、クラッカーも買ってゲーム機も用意して……………あとはなんだ？こんなもんか？こんなもんだな。

「つと、そろそろ料理作り始めないと」

鶏肉は火が通るの遅いし。

さつき考えていた料理を作り終え、机の上に並べようとした。そこ

で、アクシデントが起こった。机の上に料理が乗り切らない。これはマズイ。ダサ過ぎる。もつと考えて作るべきだったな……。

いや、作ってから後悔しても仕方ない。とりあえず、どうするか考えないと。その時、俺の視界に入ったのはこの前のネットショツピングの段ボール箱だった。

「……………こいつは使える!」

ちようど、うちに椅子はなかった。机がちゃぶ台だから。これにテーブルクロスっぽくタオルを置けば……………うん、段ボール机は俺が使えば良いか。

料理を並べてると、ピンポンと音が鳴った。お、文香さんかな? ちようど準備終わったし、驚いてもらおう。

俺はウキウキしながら扉を開けた。

「文香さん? 待ってまし……………」

「……………あ、千秋くん。お待たせしました」

「……………」

「……………す、すみません。予定より早かった、ですよね……………? でも、そのっ……………楽しみ過ぎて……………」

「……………」

「……………千秋くん?」

「……………」

俺は返事をする事ができなかった。何故なら、目の前の文香さんの服装がすごかったからだ。

肩丸出しのクリーム色っぽい色の服。何これエロ可愛い鼻血出そう。ボーツとした表情で文香さんを眺めてると、ムツとした表情の文香さんが俺の頬を抓って正気に戻った。

「……………いだけだっ!?」

「……………もう、何をボーツとしてるんですか?」

はっ! そうだ。文香さんは玄関の前だし、こんな所を周りの人に見られたらマズイ!

「は、入って下さい……………!」

「……………はい、お邪魔します」

文香さんを部屋の中に入れてドアを閉めた。あーヤバイ、何あの文香さん。赤くないのに通常の3倍可愛い。普段も鬼可愛いけど。

……いかにいかに、文香さんがあんなけしからん格好してるなんて理由があるはずだ。馬鹿みたいに似合ってるけど文香さんが自ら好んで買ったとは思えないし。

俺は咳払いをすると、頬をかきながら聞いた。

「……あの、文香さん？」

「？ なんですか？」

「……そ、その服装は一体……」

「……似合ってますか？」

「いえ、それはない。SEEDの世界のナチュラルよりナチュラル。

……ただ、その……文香さんらしくないなーとは思いました……」

「……そ、それは、確かに私が選んだ服ではない、のですが……」

文香さんは顔を赤くしながら、ポツリポツリとその服を購入した経緯を説明し始めた。

「……その、一週間ほど前に、せっかく誕生日なので……その、千秋くんにつ、かつ、可愛いと言ってもらえるよう……お店で流行の服とかを、聞いてみまして……それで、店員さんが『小悪魔』とおっしゃられて……そのまま勧められるがまま……」

「……」

「……ちつ、ちなみに、買ってから今日まで着ませんでした。……ですから、その……初のお披露目なのですが……ど、どうでしょうか……」

恐る恐る、といった感じで質問して来る文香さん。どうでしょうか？ だって？ そんなもん、答えは決まってる。

「メチャクチャ可愛いです」

「っ……」

顔を真っ赤に染め上げる文香さん。可愛すぎて吐血しそう。もう結婚しちまおうかなー。

あ、ダメだ。でも理性がやばい。小悪魔どころかサキユバスの淫夢サービスまである。



「さ、さて、それより飯にしましょう！出来立てなのが冷めちゃう」  
俺は逃げるように居間に向かった。文香さんも付いてきて、食卓を見るなり「わあっ……」と感嘆の声を漏らした。

「……………これ、全部千秋くんが作られたんですか？」

「はい、まあ」

「……………すごい、美味しそうです……………」

目をキラキラと輝かせているふみふみ可愛い。でも肩の露出が眩しくて直視出来ない。

まあ、喜んでもらえるなら嬉しい。味の方も問題ないし、飯にするから。

「よし、じゃあ食べましょう」

「……………はい」

文香さんはその場に座り、俺は冷蔵庫の中を見た。

「何飲みます？」

「……………何があるんですか？」

「コーラとジンジャエールと午後ティーと……………」

「……………もう、買いすぎですよ？」

「あと、これ」

俺はニヤリと微笑んで冷蔵庫からほろ〇いの缶を見せた。

「……………お酒？」

「今年で20歳ですよね？飲むかなーと思いましたが」

「……………どうやって買ったんですか」

「……………」

「……………後でお話があります」

なんてこった、まさか怒られるとは。ていうか、その格好で怒られると少し興奮するな。

つて、ダメだつてば。文香さんに手を出すのはアイドルを引退してから。

「と、とにかく飲みます？」

「……………いえ、結構です。まだお昼ですし」

「……………夜は飲むんですか？」

「……………少しでしたら。せつかく買っていたきましたし、私が飲まなかったら千秋くんが飲むしかありませんし」

いや、それはそれで高垣さん辺りにあげようと思ってたし。俺の知り合いで20歳超えてる人ってあの人だけだし。

まあ、そういう事なら置いておくか。

「じゃあ、何飲みます?」

「……………ミルクティーで」

「はい」

氷をコップに入れて、その中にミルクティーを淹れた。俺の分はジンジャエールにして、二人分のコップを持って文香さんの待つ机の前に座った。

「じゃあ、文香さん。誕生日おめでとうございます」

「……………ありがとうございます」

コップをカチンと軽く当ててジュースを飲んだ。で、昼飯を食べ始めた。

「んっ……………このチキンステーキ、とても美味しいです」

「良かったです」

「……………なんか、最近千秋くんの手料理を食べて思うんです」

「?」

「……………私、もっと頑張らないとって……………」

「……………」

すみません、料理上手くて。飯を食いながら謝った。

「で、でも文香さんの料理もすごく美味しいですよ?」

「……………大丈夫です、気を使わないでも。私も、今まで本以外に興味を示さなかったからだって分かってますから……………」

いや、そんな風に凹まれても困るんだけど……………。俺がなんて言えば良いのか戸惑っていると、文香さんは微笑みながら言った。

「……………ですから、千秋くんと知り合えて良かったです。私の中の世界を、広げてくれましたから」

「っ……………」

こ、この人はなんでそういうことを平然と……………!お陰で「ま、そ

の広がった世界って二次元なんですけどね」ってツツコミ損ねたじゃねえか……………」

「……………千秋くん、顔赤いですけど、照れてるんですか？」

「……………うるせーです」

肩の露出がすごい気になるんだよ。

「……………可愛いです」

「うるせーです！」

本当にうるせえ。この人、テンション高いと人のこといじって来るんだよなあ。まあ、そういう少し意地悪なところも可愛いんだが。

「……………コーンスープもお刺身も美味しいです」

「初めてですよ、飯でこんなに力入れたの。今日は特別ですからね」

「……………千秋くんの次の誕生日、絶対に私も力入れますからね」

「それは楽しみにしてます」

ま、空回りして自分じゃ収集つかなくなつて、結局速水さんあたりに協力を仰ぎそうだけど。ま、こんな事、口が裂けても言えない。

「……………なんですか？」

「えっ？」

「……………今、何か嫌なこと考えてる顔してました」

エスパールかよ。ま、からかわれた仕返しだ、絶対に教えない。

「知りませーん」

「……………むっ、教えて下さい」

「わかりませーん」

「……………な、なんですか！教えなさい！」

「ちよっ、揺らすな揺らすな。チキン食えない危ない」

ていうか、胸が揺れてる。肩丸出しだから尚更。

すると、ムツとした文香さんは俺を睨んで言った。

「……………教えないと幻術にかけますよー！」

何言ってるの？もう酔ってるの？

「月読できるもんならして下さいよ」

「ぐぬぬっ……………」

この人も大分毒されたなあ。ていうか、本当はそんなに怒ってない

だろ。

「……………そういえば、テストは大丈夫なのですか？」

「テスト？」

「……………夏休み前の期末試験では追試だったじゃないですか」

「……………あー、問題ないですよ。俺はほら、あとから楽しみたいタイプなんで、中間は真面目にやってるんですよ。中間である程度は取っておけば、期末は楽出来ますから」

「……………まあ、千秋くんが大丈夫と言うなら」

「それに、今年はクリスマスがあるので尚更気合い入れてます」

「？ クリスマスは毎年あると思いますが……………」

「……………非リアにクリスマスはないんですよ」

「あー……………なるほど」

「でも、今年は文香さんがいますから。ま、多分冬コミデートになりそうですが」

「あー……………コミケですか」

今更だけど、アイドルからコミケって単語が出るのすごいな。少し申し訳なさすら感じる。本当すみません、こっちの世界に引きずり込んでしまつて。

「あ、でも文香さんがコミケ以外で行きたいところがあったら、そつちでも良いですよ」

「……………はい。まあ、それはもう少し後で決めましょう」

「そうですね」

飯を食べながら頷いた。うん、サラダも美味いわ。

「……………でも、私はどんなクリスマスでも、千秋くんと過ごせるなら楽しみですよ…」

「……………そうですねっ」

「……………あ、また照れた」

「な、なんですか。今日はすごいご機嫌ですね」

「……………それは、まあ……………千秋くんにお誕生日を祝っていただいてますから」

「……………喜んでいただけで何よりです」

俺はまた照れたのをバレないように顔を背けた。まあ、バレてると  
思うけど。

「……………あの、千秋くん  
？」

あれ、またいじって来ると思ったら違った。改まった感じで何の話  
だろう。

「……………何故、先ほどから目を合わせてくれないんですか？」  
「……………えっ？」

「……………いえ、その……………朝はそうでもなかったのに、お昼になって急に  
目を合わせなくなったな、と思ひまして……………」  
「…………………………」

「……………あの、私、何か変ですか？」  
……………どうしよう。あなたの服装がエロすぎるんです、とは言えな  
い。でも、このままじゃ文香さんを傷つけてしまうかもしれない  
……………。

しかし、文香さんは俺の嘘を看破する能力に長けてるからなあ  
……………。  
「……………すうー、はあ……………」

深呼吸をすると、正直に話す事にした。

「……………そ、その……………」

「なんですかっ？」

うっ……………さつきと違ってムツとしてる……………。

「……………ふ、文香さんの服装が……………」

「……………や、やっぱり変でしょうか……………？」

「……………エロいんです……………」

「…………………………はっ？」

「…………………………露出してる肩、強調されてる胸、匂いを嗅ぎたくなる脇の  
下、全部がもう……………」

「かつ、解説しないでくださいー！」

「はい」

カアツと顔を赤くする文香さんが可愛かったが、その服装で顔を赤

くされるとエロさしかないので、むしろやめて欲しかった。

「……………」

「……………」

二人で顔を赤くしながら俯いた。何これ、お見合い？みたいな空気が流れ始めた。もう付き合ってたのに。

すると、文香さんが俯きながらポツリポツリと呟いた。

「……………じ、じゃあ、その……………次からこの服は控えますね……………」

「えっ?」

あ、いや待って。

「ち、ちがいます!別に悪い意味でエロいんじゃないんです」

「?」

「……………そ、その……………その服、俺は好きですから……………エロいけど……………ですから、その……………また今度、着て下さい……………」

「……………」

文香さんはキョトンとした顔で俺を見ると、顔を赤くしながら且つ、嬉しそうな表情で文香さんは微笑んだ。

「……………わかりました」

「……………よ、よろしくお願いします」

「……………は、はい」

なんか顔を赤くして俯きながら、とりあえずお互いに恥ずかしくなったので、黙々と飯を食った。さっきまで美味かった飯が何の味もしねえや……………。

## 異性の介護は大変。

食事が終わり、俺と文香さんはアニメを見ることにした。劇場版銀魂である。

正直、映画のチョイスをミスった。何も考えずに銀魂の映画をつけたわけだが、なんていうか……途中で文香さんの手を握ったり、文香さんの肩に頭を置いたりしたいのに、そういうシーンが無い。だって真面目になつたかと思えばいきなりギャグになるんだもん。

ていうか、珍さんで全部台無しなんだよ。これ、誕生日に見る映画じゃない！って文香さんに怒られそうだなー。

チラツと隣の文香さんを見ると、何やら難しい顔をして考え事をしていた。そういう顔も可愛いので、しばらく眺めてると、ボソツと文香さんが呟いた。

「……………千秋くんの『アレ』もあんな形なのかな……………」

……………えっ？今、なんて言った？聞こえちやっただすけど……………えっ？アレって……………俺の十二の事？

……………いやいやいやいや、それはないから。文香さんは純粋な子だし、人の突起物に興味持つかありえないから。そもそも、『アレ』と言っただけで『ち〇こ』とは言ってないし。

何とか無理矢理頷いて納得しようとする、隣からまた呟き声が聞こえた。

「……………千秋くんのアレ……………ち、千秋くんの……………ううっ……………」

徐々に顔が赤くなつて行つた。おいこれまさか、本当に考えてたんじゃ……………いやいやいや、うちの文香さんがまさかそんな卑猥なものを考えるはずがない！

「……………ち、千秋くん」

「はいっ？」

こ、声をかけて来た!?？まさか、確認するつもりか!?？

「……………さ、その……………銀魂はやめましょう……………。映画に集中出来なくて……………」

「……………」

俺も集中できねえよ……。誰かさんの所為とは言わないけども。

「……………そうですね」

仮に珍さんがいなくても銀魂は下ネタ多いし。

とりあえず同意してBlue-rayを切った。さて、そうなる何を見るか。他に良い感じの映画は……………。

「消失見ましたもんね」

「……………はい。東のエデンと中二病も見ましたし……………」

「んー……………けいおんは？」

「……………見ました」

「ガルパン」

「……………それも」

「んー……………もううちにあるのはほとんど見ちゃいましたよね」

「……………そうですね」

新しいBlue-ray買わないとなあ。あ、でもお金ないや。

「……………また新しいバイト始めるかな」

「……………バイト、ですか？」

「はい。短期で」

そろそろ学園祭があつて、その振替休日も来るからなあ、学園祭も丸々サボれば四日間は働ける。

「……………そういえば、前は私達の写真撮影のアルバイトをしていましたね」

「はい。あのバイトは神でしたね。プロデューサーさんもカメラマンさんも話が合う人だったし」

「……………あの時がキツカケで、クローネではアニメが流行りましたからね」

「……………すみませんでした」

「……………えっ？な、なんで謝るんですか!?!？」

「……………俺の所為ですみませんでした……………」

「……………な、何を謝ってるのか分かりませんが落ち着いて下さい」

……………俺の所為でクローネをオタクの集まりにして……………いや、高垣さんや島村さんも感染してるし、クローネだけってわけでは……………あれ



？というか、もう事務所全体に広がってるんじゃない？……。

「……………千秋くん？顔色悪いですよ？」

「……………はっ、だ、大丈夫です」

あまり深く考えないことにしよう。それより、アルバイトの話だったな。

「ま、また何処かのアイドルの写真撮影について行けば良いですよね」  
「ダメです」

「えっ？」

な、なんで？

「……………アイドルはダメです。私が困ります……………」

「……………なんで？」

「……………だって、千秋くんがまた他のアイドルと仲良くなったらって思うと……………」

「ああ、そういう……………大丈夫ですよ。もうかなりのアイドルと仲良くなってますし」

「……………そうやって不安を煽るようなことを言うのはこの口ですか」

「ふおふえんはふあい（ごめんなさい）」

頬を摘まれたので、速攻で素直に謝ると、「まったく」と声を漏らして手を離してくれた。

「……………すぐに意地悪言うんですから。お姉さん、そんな風に育てた覚えはありませんっ」

「……………誰がお姉さんですか。育てられた覚えもないし」

たまに姉面してくるこの風潮はなんなんだろうか。いや可愛いから良いけど。

「……………とにかく、アルバイトをするなら私にどこで働くかを教えてください」

「え、なんでですか？」

「……………アイドル以外にも色々困るのはいいですから。女優さんとか、ホストクラブとか」

「いや、彼女いるのにホストはないでしょう……………」

「……………かつ、彼女……………えへへ」

嬉しそうに、はにかむなよ可愛いな畜生。

でもなあ、実際嫉妬してるのは文香さんだけじゃないんだよなあ。文香さんがテレビとかに出て、男性ファンがキャーキャーはしゃいでると思うとすごいイライラするし。まあ、文香さんはバイトじゃないから仕方ないとは思うけどね。

こんな事、文香さんには言えないが。

「それより、どうしましょうか」

「……………そうですね。実は私、モンハン持って来たんです」

「……………なんの装備欲しいんですか？」

「……………バルフアルクです」

×……………了解。

×

夜までゲームやりながらお話しして、晩飯の時間。晩飯を食った後、ケーキを出した。手作りケーキをちゃぶ台の上に置いて、飲み物を用意した。ほろ〇いと、俺の分はサイダー。

コップに氷を入れて飲み物を注いで持って来た。

「……………これ、お酒ですか？」

「はい。せっかくです」

「……………まったく、まだ未成年なのに年齢を誤魔化してお酒を買うなんて……………」

「バレなきや良いんですよ」

「……………そういう問題ではありません。怒りますよ」

うつ……………本当に怒ってる。次からは気を付けよう……………。

「すみません……………」

「……………はい」

「あ、今ケーキ切りますね」

ケーキを切って皿に乗つけた。作ったのはイチゴと生クリームのオーソドックスなケーキ。すごい美味そうだ（小並感）。

「……………いただきます」

「はい。俺もいただきます」

ケーキを食べ始めた。文香さんはフォークで切り分けた先端の

ケーキを切断し、口に運んだ。

「んーっ、おいひいです……」

ほっ……良かった。ケーキ作ったのなんて初めてだったからな……。すごいドキドキしてた。俺もケーキを一口。本当だ、美味しい。

「良かった……。ケーキ焼いたのなんて初めてだったから……」

「……ええ、千秋くんが焼いたのですか？」

「え？はい」

「……女子力に、また差が……」

「そ、そうだ文香さん！プレゼント、プレゼント渡しましょう！」

「……ふえっ？」

なんか悲しそうな顔し始めたので、誤魔化すようにプレゼントを渡すことにした。隅に置いてある段ボール箱を開けて、中の物を渡した。

「どうぞ、これ」

「？これは……」

色んな人に相談してようやく買ったストールだ。でも、なんか人にプレゼント渡すのって少し恥ずかしいな……。というか、照れ臭い？

「……ストール、ですか……？」

「はい」

「……わあっ。ま、巻いてみても良いですかっ？」

「は、はい」

文香さんは嬉しそうに袋を開けてストールを取り出すと、自分に巻き始めた。うん、予想通り似合っている。俺のチョイスは完璧だ。

「……ありがとうございます、千秋くん！とても、とても嬉しいです……」

「よ、良かったです」

「……あ、そうだ」

文香さんは何か思い付いたのか、俺と肩がくっ付きそうな距離まで近付いて座ると、ストールを広げて俺の方にも巻いた。

「っ？」

「……ふふっ、これでどうですかっ？」

ま、マフラーを二人で巻くみたいな感じか……。少し照れ臭いけど、でも悪くない。

「……………暖かいです」

「……………肩に頭を置いてもいいですか？」

「……………どうぞ」

そのまま、しばらく二人でくっ付いた。何か話す事もなく、だからと言って眠る事もなく、ただ黙っていた。

「……………千秋くん」

「はい」

「……………私、幸せです」

「……………俺もです」

「……………私のお店に『俺ガイル』を探しに来てくれて、ありがとうございます  
います」

「……………こちらこそ、取り寄せてくれて、ありがとうございます」

そう言っつて、俺はサイダーを口に含んだ。それに釣られてか、文香さんも自分の飲み物を飲んだ。

……………ほんと、こういう時間が心地良い。何もしない時間が心地良いなんて、年寄りくさいかもしれないが、少なくとも文香さんとのこういう時間は嫌いじゃない。

そんな事を考えながらホッコリしてる時だった。文香さんは突然、俺をその場で押し倒した。

「えっっ？」

ドタツと倒れ、文香さんは俺の上に馬乗りになった。気が付けば、俺にも巻かれていたはずのストールは文香さんの手元に回収されていて、綺麗に折り畳まれていく。

「……………ふ、文香さん？」

「……………ちあきくん……………」

あ、あれ……………顔が赤い……………？なんかボートツとしてるし……………おい、も  
しかしてお前これ……………。

「……………ちあきくんは酷いれす……………」

「へっ？な、何がっ？」

「……………いつになったら私を呼び捨てで呼んでくれるんれすか!!?」  
「いきなり何の話!!?」

ひ、ひえー!酔っ払ってる!!?ほ〇よい一口で!!?嘘だろ!!?

「誤魔化さないでくだふあい!」

「いや、誤魔化してな」

「……………もうお付き合いを始めて二ヶ月も経つのに……………私は敬語でさん付け……………奏しゃんとはあんなにタメ口で偉そうに話してる癖に!」

「え、偉そうだった?」

「私ともタメ口で話して下さい!!?」

「……………え、いやでも、歳上の方ですし……………」

「関係ありません!」

「はい」

……………か、関係ないのか……………。

「じゃあ試しに……………私に何か言ってみてください」

「へっ?何かって?」

「自分で考えなさい!」

そ、そんな理不尽な……………。何かとか言われても……………。少し、酔いが覚めそうな事言ってみるか。

「……………文香、好きだよ」

「……………」

「……………」

「ふんっ」

「痛い!!?」

えっ!!?なんで今ビンタされたの!!?

「私も好きですよバカ!!?」

お、怒られた……………っていうか頬痛い……………。ていうか、いつまで馬乗りになられてれば良いんだろう……………。

「……………ちあきくん」

「は、はいっ。何でしょう文香さん」

「……………ふみかさん?」

「……………な、何?文香」

「んーっ……………」

「っ!!?」

突然、前のめりに倒れて来て口と口をくっ付けられた。そのまま、口内に舌が侵入して来て、舐め回された。

又チャ又チャと音を立てる事数秒、ようやく離れた。つうーっど口と口から糸が引かれている。

「……………な、何してんの?」

「……………」

恐る恐る聞いたが、返事はない。すると、文香さんは机の上に目を向けた。しばらく見つめた後、机のケーキに手を突っ込んだ。

「えっ、何してんの!!?」

せっかく作ったケーキを…………。

少しシヨックを受けてると、文香さんはケーキ塗れになった手を俺の顔の前に突き出した。

「……………食べて」

「はっ?」

「……………汚れちゃったから、食べて」

「いやっ、意味わかんない」

「私が噛まれフェチなの知ってる癖に意味分かんないわけないでしょう!!?」

「痛い!一々ビンタしないで!」

気持ち良いから!文香さんからの暴力は何故かすごく気持ち良いから!

とにかく、噛めば良いんだよね…………。なんか猫になった気分だが、今の文香さんには逆らえない。恐る恐る手を啜えて、汚れを取るように生クリームやスポンジを食べた。

「……………ど、どうでふか?」

「ふんっ」

「ふあふっ!!?」

また叩かれた。

「歯を立てないと意味ないでしょ!!?」

「ご、ごめんなふあい！」

なんでだろう……こんな事を他の人にさせられたらキレて両手足縛って海に投げ捨ててると思うけど、文香さんにさせられてると思うと、こう……ある意味で興奮する……。良い気分ではないが、悪い気分でもない。

まるで文香さんの手ごと食べる勢いで、手に付いたケーキをしやぶってると、文香さんの口から「んうっ……」と色っぽい声が漏れる。

……エロい。ようやく、手のケーキが無くなった。なんかもうすごいプレイしてんな……。俺、まだ17なんだけど……。

すると、文香さんはケーキにまた両手を突っ込んだ。また舐めさせられるのか……と、思った直後、両手のケーキを顔や服の下のお腹、腕、脚などに塗りたくった。

「ちよっ、おまつ……何してんの!?？」

「……さあ、舐めてください」

「出来るか!?？」

「……むっ、私を食べられないとでも言うんですか？」

「流石に食えるか!?？ちよっ、頼むから冷静になって!!？正気に戻って！」

「私は正気です!!？」

「余計悪いわ!!？」

ああああ……ど、どうしようどうしよう正直舐め回したいけど、アイドルやっってる間の文香さんに手は出さないと決めたのにそんなポリシーを破るような事は……!!？

と、思ったら今度は文香さんは俺の顔に手を当てた。ケーキの付いた手を。

「……は？」

「……ちあきくんが舐めてくれないなら……私が舐めちゃいます……」

「は、はわわわわっ……」

俺がお酒を買ったばかりにこんな事に……!!？

文香さんの顔が近付いてきて、俺の頬をペロペロと舐め始めた。ま

だ普通のプレイもしていないのになんて事を……と、少しショックを受けてると、ガクツと文香さんの身体から力が抜けた。

「……………すぴー」

……………寝やがったか。いや、寝てくれてありがとう。なんかもう色々減茶苦茶になっちゃったな……。

まあ酒を買って来た俺の自業自得か。とりあえず、文香さんを退かして立ち上がって、自分の顔を洗ってケーキを落とした後、机の上のケーキや飲み物を片付け、床に散ったケーキも片付けた。

さて、問題はここからだ。文香さんどうしよう。ケーキ塗れになっておいて、風呂に入らないわけにも……いや、少なくとも体を拭かないわけにはいかないよなあ。

「……………これは介護だ。手を出すわけじゃない」

そう、介護だ。どうしようもない酔っ払いのお世話をしてあげるだけだ。毛利のおっちゃんだって娘によく介護されてるし、大丈夫だ。

「……………ふ、文香さん。ちよつと失礼しますよ……」

「……………んにゅ……文香さんじゃ、ありません……」

起きてんの？いや、まあ寝てる人に声って割と届くらしいけど。

「……………文香、ちよつとごめん」

タオルを持って来て、まずは顔、腕、足を拭いてあげた。で、残り  
は問題のお腹。

そもそも、酔っ払い文香さんは服の下のお腹にケーキを塗っていたので、服がもう台無しになっているだろう。今日、初めてのお披露目らしいのに……………。

とにかく、服を脱がすしかないか……。もう一度言うが、これは介護だ。寝てる女を襲うのではない。

「すうー……………はあー……………」

深呼吸をしてから、俺は文香さんの服に手をかけた。幸いというかなんとというか、割と脱がしやすそうな服だ。これならバレないだろう。

そう思っ胸の辺りまで流した直後、乳首が出て来た。

「っ……？」



慌てて服を戻した。なんで!??なんでなの!??なんで下着がないの!??確か肩が出る服でも下着ってちやんとあるよな!??

「……………やっちゃった……………」

見ちゃった……………あれだけ手は出さないと誓ったのに……………。

いや、待て。ポジティブに考えろ。T O L O V Eがあるじゃないか。あいつら少年誌で堂々と乳首を描いてる。つまり、乳首はR—18ではない!まだ、手は出していない!

ま〇こはアウト!乳首はセーフ!

「……………すうううう……………はああああ……………」

深呼吸して、再び文香さんの服に手を掛けた。とりあえず、脱がす前にお腹を拭いた。ある程度綺麗かな?と判断すると、ジャージを用意して、上半身を起こさせた。

文香さんの服を脱がし、さつさとジャージを着させた。文香さんの服は洗濯しても平気なのか分からないので、とりあえずケーキの汚れだけ拭き取ってハンガーに垂らした。

「……………ふう」

ようやく一段落……………したとは言えない。文香さん、このまま寝たら虫歯になっちゃうよなあ……………。

洗面所から文香さんの歯ブラシを持って来て、歯磨き粉をつけた。まさかこんな偽物語のようなことになるなんて……………。

「文香、口開けて」

「……………んみゆ……………」

……………今更だけど、俺の方が年下なんだよなあ。今回は酒が悪いとはいえ、文香さんこの人大丈夫なのか?二十歳になった事で、これから飲む機会のかも増えるだろうし……………。

……………346事務所って高卒でも入れんのかな。

「……………って、そんな事より今は歯磨きか」

とりあえず、文香さんの歯磨きを手伝ってあげた。

## 速水奏相談室（1）

日曜日、奏は自宅でのんびりしていた。今日は仕事がない。最近は何が恋人を作ったため、一緒に遊ぶ事が減ったが、あまり悪い気はしない。むしろ、文香が自分やありす以外に親しい人を作ってくれた事に、少し喜びを覚えていた。まあ、少し寂しくはあるけど。

そんなことを考えながら、周子を遊びに誘おうと思ってスマホを取り出した時、ピンポンとインターホンが鳴った。

「っ？」

誰かしら、と思ってインターホンの受話器を取ると、カメラには文香が映っていた。

「？ 文香？ どうしたの？」

『……グスツ、ちっ、ちあぎぐんどっ……喧嘩じまじだ……！』

「………上がって」

少し安心したら……と、呆れながらも、とりあえず家に入れた。

とりあえずお茶を入れて、自分の部屋に文香を入れた。部屋に入ると、ちゃぶ台にお茶を置き、二人は座った。

「………で、何があったのよ」

「………それが、昨日は千秋くんの家で私の誕生日パーティーをしてくれていて……」

「あ、そうだ。これ誕生日プレゼント」

「………へ？ あ、ありがとうございます……？ なんですか？」

「マフラーよ。これから寒くなるし、千秋くんと一緒に使えるかなって思ってた」

「………開けても良いで……ち、違います！ いえ、ありがたいですけど、とにかく後にさせて下さい！」

「そうね。何があったの？」

コホンと咳払いしてから、文香は説明を始めた。

今朝、千秋の様子がおかしかった。

・一緒に寝ていなかった。文香は布団で千秋は床に寝ていた。理由を聞くと、アイドルと一緒に寝るのはまずい、とか今更過ぎる理由を

言われた。

・今朝起きたら、自分の服装が昨日までと変わっていた。

・千秋の顔が腫れ上がっていた事。聞けば、壁に顔をぶつけたと言われた。

・朝、「あれ？なんで呼び捨てなんですか？」と聞くまで、タメ口に呼び捨てだった。正直、嬉しかった。

・朝食に昨日のケーキの残りも出してもらえたけど、崩壊した城のように崩れていた。昨日、千秋が綺麗に切り分けていたことを覚えている。理由を聞いたら、転んでぶち撒けちまったと言っていた。

・いい加減気になるので、問い詰めたが「何でもない」の一点張りで、イラっとしてので出て行ってそのままの足でここに来た。

「…………と、いうわけなんです」

「……………」

奏は顎に手を置いた。

「…………まあ、話を聞いてる感じだとハッキリ言わない鷹宮くんが悪い気もするけど…………昨日、何があったのか分からないと何も言えないわね」

「…………はい」

「けど、彼がそこまで隠すなんて、あなたよっほどの事をしたんじゃないの？」

「…………そうかもしれませんが、けど、彼の顔が腫れていたんです。もし私がしたのであれば、キッチンと謝りたいんです」

「…………文香の中で昨日の事で覚えてることは？」

「…………いえ、それが、ケーキを食べて千秋くんと一緒にストールを巻いて、飲み物を飲んでから記憶がなくて…………」

「……………」

仕方ないわね…………と、奏はため息をつくとスマホを取り出した。余りにも情報が足りなさ過ぎるので、少し操作すると耳に当たった。

「ちよっと待ってて。もしもしっ…」

『……………速水さん？』

「……………鷹宮くん？」

『…………ごめん、俺ちよつともう無理だわ。今から切腹しようと思ってるから。じゃあ』

「いやいやいやいや待って待って待って待って！落ち着いて！」

『いやもう無理。文香さんに嫌われたら生きてる意味ないし』

「待って！別に文香はあなたを嫌っていいじゃないから！」

『いやいやいやいや。「この、分からず屋アアアツ!!？」なんてバナージみたいな言われて出て行かれたら死にたくなるっしょ』

「いやそれ別に嫌われたわけじゃないでしょ!?!？」

『いや嫌われたね。とにかく俺もう死ぬわ。知ってる？即身仏つて。あれで仏になれたら良いなあ…………』

「ダメだから！仏とかマジでダメだから！」

『俺は死んで駄女神に異世界転生させてもらうんだ』

「いや何意味分からないことを…………！」

『いや、界王星に行つて修行するのも良いなあ。あ、霊術院に行つて死神になるのも』

わけのわからない事をグダグダと言われ、奏がどうしようか悩んでると、文香が奏の携帯を取り上げた。

「ちよつ、文香!?!？」

『え？文香さ』

「良いから今から奏さんの家に来なさい!!？良いですね!?!？」

『え、いや俺速水さんの家知らな』

「失礼します」

文香は電話を切った。で、今にも泣き出しそうな顔で奏を見上げた。

「…………どうしましょう」

「よく何も考えずに自信満々に言えたわね…………」

×とりあえず、千秋が来るまで待った。

×

奏が電話して自分の家まで誘導し、千秋はようやく到着した。

「…………お、お邪魔します…………」

「いらっしや〜」

奏は千秋を玄関まで出迎えた。

そのまま、二人は奏の部屋に向かった。

「……………文香さんいるの?」

「いるわよ」

「……………」

ドツと嫌な汗が千秋の顔に浮かんだ。心臓がバクオングだった。

部屋の前に到着し、千秋は足を止めた。

「……………やっぱ俺帰」

「帰ったらキスするわよ、文香の前で」

「……………」

千秋は深呼吸すると、部屋に足を踏み入れた。中では、文香が机の前で正座していた。

「文香さん……………」

「……………千秋くん」

千秋は文香と向かい合うように座り、奏は二人の真ん中に座った。まるで模擬裁判である。

「で、鷹宮くん。話を聞かせてくれる?」

「……………えっ、なんの?」

「昨日の」

「えっ……………」

「ダメよ。ちゃんと話さないよ。文香はそれで怒ったんだから。あなたが何したのか知らないけど、自分の取った行動にはちゃんと責任とらないよ」

「いや、俺が何かしたわけじゃないんだけど……………むしろされた側で」

「私が千秋くんに何かしたんですか!?!?」

「あ、いや……………」

ハッキリしない千秋の言葉に、奏はイライラしたが、なんとか抑えて言った。

「あのね、鷹宮くん。文香と付き合ってるんでしよう?」

「うん」

「なら、ちゃんと言わなきゃダメよ。何があったのか知らないけど、付

き合ってるのなら、その相手は鷹宮くんの中で一番親密な相手になるんだから、隠し事は良くないわ。文香が何かしたのなら尚更」

「……………」

真面目な顔で奏が言うと、千秋は俯いた。文香が援護射撃するように言った。

「……………わ、私もっ、ちゃんとやってほしいです。千秋くんを、傷つけてしまったのなら、余計に……………」

「……………それは、分かってますけど」

それでも千秋は言おうとしなかった。奏は、これは相当何か昨日あったんだなと思うと、今度は提案してみた。

「……………なら、私に言えない?」

「は?」

「文香に言えないのなら私には言えないの?」

「……………」

千秋は少し顎に手を当てた後「まあ速水さんなら大丈夫か」と呟いた。

「速水さん、廊下出ようか」

「あら、話してくれるの?」

「……………誰にも言わないことと、文香さんとの付き合いをこれからも続けると約束してくれるなら」

「……………分かったわ。悪いけど文香、待っててね。聞き耳とか無しだから」

奏と千秋は部屋を出た。

廊下で千秋から昨日あったことを聞いた。

戻って来た。

「あんたが悪いわ文香」

「ええっ!?」

まさかの判決だった。

「ち、ちよっと!何があったんですか本当に!?」

「……………文香は知らない方が良いわよ」

「なっ、なんでですか!??いいから教えてください!」

「……………」

奏と千秋は顔を見合わせた。どうする？みたいなやり取りを視線で行なった後、千秋が気まずそうに言った。

「……………いや、文香さんの為にも言わない方が良いです」

「どうしてですかっ！」

「文香さんがお酒を飲むと、何をしでかすか分からないって事で。それを肝に命じて下さい」

「うっ……………！」

上手く躲したなーと奏は思ったが、それはそれでありなので黙ってる事にした。

「……………私、お酒飲んでから何かしてしまったのですか？」

「はい。しかもほろ〇い一口で。だから、これからはお酒飲まないって約束して下さい」

「……………分かりました」

文香は俯きながら呟いた。

「……………けど、一つだけ良いですか？」

「何ですか？」

「……………千秋くんの頬が腫れてると、ケーキが崩れてるのって私の所為ですか……………？」

「……………」

そう聞かれて、千秋は目を逸らした。それだけで理解した文香は千秋を抱き締めた。

「……………ごめんなさい、千秋くんっ……………！」

「へっ？」

「……………私の、所為で……………！痛い思いをさせてしまいました……………。ケーキも、せっかく作っていたのに……………」

「……………だ、大丈夫ですよ。別に痛くなかったし、ケーキだっていつでも作れますから」

そう言うと、文香は一瞬ムツとして、顔を上に向け、千秋と目を合わせた。

「……………千秋くん、怒ってください」

「へっ?」

「……今回、完全に私が悪いので、ちゃんと怒ってください」

「……いいいやいや、俺が酒買わなきゃこんな事にはならなかったんですし、別に怒らなくても……」

「……今朝は私の事避けてた癖に」

「うっ……」

「……わかりました。じゃあこうして下さい」

「?」

「……私を一発殴って下さい」

「はっ?」

「……理不尽に暴力振りましたし、それくらいされないと私が私を許せませんっ」

「……」

アニメにこの人も毒されたなあ、と思いながら千秋は頷いた。

「……わかりました」

「……お願いします」

文香はキュツと目を瞑った。千秋はその文香の顔に手を添えると、右手を振り上げた。

その右手を文香の後頭部に回し、髪をかき上げて首筋に噛み付いた。

「ふえっ!!?」

「ふいずふあに」

そのまま噛み続けた。

「痛ッ……!……アアッ……ひうウツ……!ち、千秋くっ……!」

「っ」

「……ふあっ……!だっ、だめえっ……!!?」

「っ」

「っふああっ……!」

「っ」

ダメ、と言いつつ抵抗しない文香。そのまましばらく千秋は噛み付いてると、「コホンと咳払いが聞こえた。



そつちを見ると、奏が顔を赤らめながらも二人を睨んでいた。それに気付いた千秋と文香も、顔を真っ赤に染めて奏の方を見た。

「……………そういう事は、私のいない所でしてくれるかしら？」

「……………(´、´)めんなさい」

謝った。

寂しさと性別は関係ない。

修学旅行はいよいよ明日になった。学校では修学旅行の準備も忙しくなっていた。まあ、行くルートの見直しだの、首里城やひめゆりの塔とか、クラスごとに回る場所の歴史の調べだの、沖縄戦のDVDだのと、そんなもんだ。現在はしおりの最後の確認である。

ま、何にせよ俺には関係ない。風邪を引く予定だからな。前日の氷風呂や冷えピタの準備は着実に進めている。

悪いな、みんな。俺は不参加して文香（結局呼び捨てになった）と五日間、イチヤイチャさせてもらうぜ。

「……………」と、いうわけだ。トランプやウノならまだ良いが、ゲームとか漫画は持つて来ないように、良いな？」

学年主任の先生の台詞で、ようやく終わった。そんな何度も何度も読み返さなくてもしおりに書いてあんだから必要ねーだろとは思いますが、これで授業が潰れるなら何よりだ。

体育館からクラスごとに出て行って、俺のクラスは出口から一番遠いので一番最後になった。

ぼんやり待機してうちに、隣のクラスが立ち上がった。

「ね、鷹宮くん」

「ん？」

三村さんが声をかけて来た。名前順的にお前俺より後ろの方だろう、なんで何食わぬ顔で隣まで来てんの？

「良かったの？結局、行きたい場所とか全然言わなかったけど」

「良いんだよ。気にしなくて。俺は希望とかないし」

何処に行っても同じだからな。いや、何処にも行かない、ってのが正確か。悪いな、せっかく班に誘ってくれたのに。でも、三村さんだって余ってたから俺誘ってくれただけでしょ？いてもいなくても同じだろ？俺なんか。

「……………」でも、鷹宮くんも班員なんだし……………」

「気にしなくて良いって。俺は沖縄より京都奈良派だからさ、沖縄ならぶっちゃけどこ行っても同じだから」

「……………うん、わかった」

そんな事を話していると、うちのクラスも体育館から出る事になった。体育館を出ると、体育館に入る時よりも肌寒く感じた。空を見上げると、ポツポツと雨が降って来ていた。

「……………あつ、雨……………」

三村さんが隣で切なそうに呟いた。良かったー、折りたたみ持って来といて。でも、洗濯物死んでるな。……………帰るのが憂鬱だ。

「はあ……………」

面倒臭つ……………」

教室に戻り、帰りのホームルームが終わり、俺は帰ることにした。明日、旅立つ前に文香成分を補充しないと。

帰りの準備を済ませると、鞆から折りたたみ傘だけ取り出して、教室を出ようとした。だが、三村さんがブーツと空を見ているのが見えた。

「……………」

前までの俺なら気にしないのだが、文香と付き合い始めたからか、少し気になった。

「何してんの？帰らんの？」

聞いてみると、三村さんは頬を掻きながら答えた。

「実は、傘持って来てなくて……………」

「あら、そうなん？」

「うん……………。どうしよう、この後事務所行かないといけないのに……………」

「？ 事務所？」

「あ、ううん。なんでもないんだ」

文香みたいなこと言うな、この人。もしかしてこの人も……………なんてありえないよね。アイドルがそんなところ中にゴロゴロいてたまるかってんだよ。

ま、何にせよ明日は修学旅行だ。三村さんに風邪を引かせるわけにはいかない。

「これ、使って良いよ」

「へっ？」

「じゃ、俺帰るから」

「ちよつ……鷹宮くんっ?」

傘を三村さんの近くの机に置くと、俺は教室を出た。これで、明日風邪を引ければ最高だ。

さて、雷雨決行だ。雷は鳴ってないけど。雨の中を走り始めようとした直後、グイッと襟を引つ張られた。お陰で、喉がしまつて「グエツ」とカエルのような声を出してしまった。

「ま、待って!」

後ろを見ると、三村さんが立っていた。

「エホッ!エゲフツ!……な、何すんだよ……」

「ご、ごめんね?でも……流石に悪いから、せめて一緒に帰ろうよ」

「いやいや、一緒について……傘一本しかないのに」

三村さんは俺の傘をさすと、一人分のスペースを空けた。ああ、やっぱりそういうことか……。

「ほら、行こう?」

「……は、はあ」

もう仕方ないや、行こう。文香さんに見られたら怒られるけど、まあそれなりの理由があるし、大丈夫だろう。

俺が傘を持って、学校を出た。にしても、流石に家まで送るのはヤバイよなあ。テキトーなところで別れないと。

「鷹宮くん、一応言うけど」

「? 何?」

「逃げたら怒るからね」

「……………」

「明日は修学旅行なんだから」

……………いや、途中で逃げるよ俺は。だって、文香に見つかる方が怖いもん。こういう場合、大抵フラグとして文香は近くにいる。見つかるのも時間の問題だ。テキトーなところで傘を持たせて逃げよう。

しばらく歩いてると、自販機があった。こいつは使える。

「ごめん、ちよつとこれ持ってた」

「あ、うん」

傘を持ってもらい、俺は自販機でコンポタを二本買い、一本差し出した。

「はい、これ」

「……………あ、ありがとう。ちょうど、肌寒い季節になったもんね」

「ああ。じゃ、俺帰るわ」

「へっ?」

俺は傘の下から飛び出した。

「ちよっ、鷹宮くん!」

「あばよーとつつあーん!」

「明日、怒るからねー!!?……………まったく」

自宅に向かって走った。よし、これで大丈夫。これで文香に見つからなければ大丈夫。

しばらく走っていると、見覚えのある背中が傘をさして歩いているのが見えた。どう見ても文香だ。一瞬、冷やっとしたけど、走り始めてから2分ほど経っている。見られたとは限らない。

俺は後ろからその傘に入り込んだ。

「すみません、文香。傘の中に入れて下さいっ」

「ひゃっ!?……………ち、千秋くん……………?どうしたんですか?」

「傘持って来てなくて……………」

「……………へー、そうなんですか」

あれっ、なんか怒ってるのかな。まあ良いか。

「すみません……………。何処に向かっています?俺ん家?文香ん家?」

「……………千秋くんの方です」

「じゃ、先に俺家帰ってお茶淹れときますね」

「……………だ、ダメです。風邪引いちゃいますよ」

「いやいや、それより文香と二人で相合傘なんてしてる方がマズイでしょう。周りの人達に知られたら……………」

「……………大丈夫です。私、前髪おろして眼鏡かけてると、まったくの別人に見えるらしいんです」

「そうなんですか?」

「……………はい。ですから、このままでいいです」

さりげなく俺に一步寄ってきて、肩をくっ付ける文香。俺は文香の持つ傘を持った。

「持ちますよ」

「……………千秋くんも、大分恋人っぽいことするようになりましたね、照れが残ってますが」

「……………」

文香は俺をニヤニヤした顔で見たが、もうからかわれるのも慣れたので黙ってることにした。

自宅に向かって歩いてると、ふと公園の草を見た。そこに、一匹カエルが止まってるのが見えた。

「あ、カエル」

カエルって冬は冬眠してるんじゃないかなかった……………？と、思ったが、まだ11月だった。カエルを持つと文香に見せた。

「文香、カエル」

「……………あら、可愛いですね」

そう言いながら、文香はいつの間にか遠くに離れていた。

「って、文香！濡れてる濡れてる！傘、傘！」

「……………そうですね」

「いや、いいともじゃないんだから！」

だが、追っても離れる文香。その視線は、俺の持つカエルに向いていた。……………あ、もしかしてこの人。

「カエル、ダメなんですか？」

「……………いえ、その……………ダメというか」

「ケロロ軍曹見たのに？」

「……………それは関係ないかと。ただ、見るぶんには良いのですが、触るのは……………」

この時、俺はどんな顔をしていたのだろうか。多分、すごい意地悪な顔。文香がビクツと肩を震わせるくらいには。

俺はカエルを持って文香に突撃した。

「我輩、ガマ星雲第58番惑星、宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊隊長、ケロロ軍曹であります！」

「きやつ……!??ぼ、ボケガエル！いい加減にしなさい!!?」

日向家長女にも負けない威力の拳が俺の溝を的確に捉えた。俺はその場で前のめりに倒れ込みそうになったが、なんとか膝立ちで耐えた。カエルは逃げていった。

俺の前に、文香は仁王立ちして立った。

「……………何か言うことは?」

「……………調子に乗ってすみませんでした」

「……………はい」

肩を借りて、結局傘も文香がさして家に到着した。

帰宅すると、まず雨にガツツリ濡れた俺は風呂、文香はタオルで良い、との事で風呂には入らなかった。別に一緒に入りたかったわけじゃないってばよ。

シャワーを浴び終えて、頭を拭きながら洗面所を出た。部屋では文香が正座して待っていた。

「ふう……………お待たせしました。なんか飲みます?」

「……………お茶をお願いします」

との事で、麦茶を入れて俺も座った。

「それで、何のぐ用ですか?」

いや、大体分かってるけど。多分、俺の成分でも貯めに来たとかそんなんだろ。

「……………いえ、明日から修学旅行との事なので、ちゃんと準備はしているのかな、と思ひまして、様子を見に来ました」

「母ちゃんかよ……………。俺は割と自分のことはしっかりしてる人なんだけど」

「……………期末テストほぼぼぼ一桁の人の人の台詞ですか」

「いや、まあでもちゃんと準備は済ませてあるんで」

「……………それなら良いですけど」

「他に用は?」

「……………ありませんよ?」

「え、え、え?」

え、な、ないの?夏休み入る前はあるに求めて来たくせに…………

？

「…………あの、俺明日から五日間…………」

「…………知っています。修学旅行ですよね？」

「…………大丈夫ですか？」

「…………大丈夫です」

なんだよ。まあ、俺も風邪引くから別に平気だけど。…………あれ、もしかして、風邪引く予定なのバレてる？もしくは、三村さんと一緒に帰ってたことも…………。

「……………」

いやいやいや、落ち着け。文香は誕生日パーティー以来、俺の部屋には来ていない。それからまた文香の家で遊んだらアニメ見たりゲームしたり噛んだり匂い嗅いだりしてたから。だから、氷や冷えピタがバレている事はない。

三村さんと帰っていた事だって、文香なら正面から何か言ってくるはずだ。問題はないはず…………。

「…………千秋くんは大丈夫ですか？」

「何が？」

「…………そ、そのっ…………ふ、ふみふみ成分は…………」

かわいい！何そのふみふみ成分って!?!成分関係無しに抱き締めたい！というか、抱き締めても良いよね！俺も成分足りないことにすれば良いだけだし、何より成分取らないと怪しまれるかもしれないしね！

「…………じ、じゃあ、その…………失礼します」

俺がそう言うと、文香は両手を広げた。俺がハグをしようとした時、文香は少し膝立ちになった。お陰で俺の顔は文香の胸に埋める形になった。

「っ!?!」

「…………ふふ、どうですか？」

「…………っ!」

どうですかって、声出せねえよ！パイ圧が、すごい…………！間近で感じるとこんなにすごいのかこの人！苦しさが気持ちよさに変わって



来やがる……！

って、そうじゃねえ！なんの真似だ!?!?

「んーっ！んーっ！」

「……………ふふ、楽しそうでしたね。クラスメートと相合傘までしてましたからね」

「っ!?!?」

み、見られてたああー!?!?ツ?

「……………楽しそうに二人で歩いて。まるで恋人同士のようでした」

か、完全にヤキモチを……………ちよつと嬉しいけどそれ以上に怖い。

「んー!?!?!んー!?!?!」

「……………なんですか?言い訳があるなら聞きますよ?」

ならまず離せよ!という、俺の思いが通じたのか、離してもらった。

「……………柔らかかった……………」

「……………もう一回やります?」

「お願いします」

「……………そうですね、同じ事しても面白くありませんから、スネークさんのようにCCCというのはどうでしょう?」

「……………ごめんなさい、勘弁して下さい」

CCCって……………締め上げられたまま話さなきゃいけないのかよ……………。

「……………その、三村さんっていうんですけど、三村さん傘忘れたみたいで……………本当は、傘だけ貸して帰るつもりだったんですけど、一緒に帰らないと怒るって言うから……………で、でも俺なりに考えて、文香に見られたら傷付けると思って、途中で抜けてきたんです!」

「……………わかってます」

「……………わかってたの?」

「……………はい。だけど、やっぱり腹立たしくて……………」

「……………すみません」

断り切れなかった俺が悪い。

「……………でも、千秋くんも断ろうとしていたようですし、その件は大丈夫です」

「……………良いんですか？」

「……………ええ、その件は」

……………その件は？え、じゃあ他に何かあんの？

「……………なんで、風邪引くかもしれないのに傘から飛び出して行っただんですか」

「……………えっ」

「……………明日から修学旅行、一生に一度の思い出なのに、何故それを放り投げるような真似をしたんですか」

「……………あー」

正直、サボろうと思ってた、とは言えなかった。

「……………もしかして、明日の修学旅行、わざと風邪引いてサボるつもりでしたか？」

「……………違うヨ？（裏声）」

「……………学祭や体育祭もサボろうとしてた癖に？」

「……………」

「……………確かに、明日から離れ離れは寂しいですけど、私との思い出と学校での思い出はそれぞれ持っておくべきです！」

「……………すみません」

バレた……………クツソ！前日で抜かったか……………！これで明日サボったら嫌われそうだなあ……………。仕方ない、諦めるか。

「……………氷、どうしよう」

「？ 氷って何ですか？」

「……………いえ、文香の言う通り、修学旅行は風邪引く予定でしたから、冷凍庫に大量の氷が置いてあります」

「……………大量って、どのくらい？」

「……………10月からコツコツ溜めてたんですよ。うちの氷作るトレイ40枚分くらい」

「……………バカじゃないですか？」

「……………すみません」

「……………まったく、こんな事でそんな無駄な執念を……………ま、まあ、それだけ私と離れたくなかった、と思えば悪い気はしませんか……………」

「……………」

なんで怒ってる最中に照れてんだよ。可愛いからやめてくれ。とにかく、氷どうしよう。これからは冬だし、氷使う機会なんて……………」

「……………仕方ありませんね、少し私が氷を引き取ります」

「マジですか!?!?」

「……………次はありませんからね」

「ありがとうございます！文香さん大好きー!」

「大っ……………べ、ベルくんの真似しなくて結構です!」

分かつちやったよこの人……………。てか、分かつてるのに照れるなよ……………」

でも、それで明日から五日間、文香と会えないのか……………。何というか、我ながら情けないが寂しい……………。

「……………ね、文香」

「? 何ですか?」

「……………もつかい、成分補充しても良いですか?」

「……………どうぞ。匂いも嗅ぎますか?」

「……………お願いします」

また飛び付いた。

明日から、修学旅行だ。

出鼻を挫かれた旅行は嫌な思い出になる。

修学旅行当日、空港集合との事で、風邪を引く事は叶わずに俺は空港に到着した。忘れ物はない。ちゃんとポケットWi-Fiも3〇Sも持って来た。あとこの前、誕生日の時は押し入れに隠していた、文香のアイドルのグッズも持って来た。

……憂鬱だ。昨日は文香の匂いを嗅ぐに嗅いだとはいえ、憂鬱だ。五日間保つのか、俺は。心なしか頭がボーッとしてるし……。

はあ……いや、まあウジウジしてても仕方ないか。せつかく行くんだ、ポジティブになろう。楽しんで、文香にお土産話を聞かせてやろう。あと、お土産に何か買って行こう。何がいいかな、石垣島プレゼントすれば、二人で住めるかもしれない。いや金ないから無理かな。そんな事を考えながら集合場所に到着した。うちのクラスを探し、その最後尾に来た。

暇だったので、スマホを取り出した。

鷹宮千秋『空港着いた』既読

速攻で既読ついたよ……。やっぱ、文香も寂しいんだろうな。ていうか、ふみふみっていうの気に入ってるの？誰が呼んでんのそれ？

ふみふみ『おはようございます。飛行機は初めてですか？』

鷹宮千秋『初めて。墜落しないですよね？』既読

ふみふみ『大丈夫でしょう』

だと良いけどな……。

鷹宮千秋『文香は飛行機とか乗ったことありますか？』既読

ふみふみ『ありますよ。何度か仕事で』

鷹宮千秋『ああ、やっぱり』既読

鷹宮千秋『怖くなかったんですか？』既読

ふみふみ『なかつたですよ？というより、本に夢中で……』

あ、なるほど……。

鷹宮千秋『何読んでたんですか？SAO？ダンまち？エロマンガ先生？冴えない彼女？』既読

ふみふみ『……なんで全部松岡ハーレムなんですか』

ふみふみ『当時はラノベを読む前でしたから』  
汚れなき頃のふみふみか……。

鷹宮千秋『今もラノベ以外の本とか読むんですか?』既読  
ふみふみ『読みますよ。学部も文学部ですから』

鷹宮千秋『本書いたりしないんですか?』既読

ふみふみ『いえいえ。そういうのはハーメルンで満足してますから』

最近、ネットの二次創作にまで手を伸ばし始めた文香は、暇さえあればスマホをいじっている。

で、最近始めたのはSAOの二次創作で、オリ主「鷹宮文香（ゲームではタカフミ）」というキャラを作って、キリトとイチヤイチャしながらゲームクリアを目指している。鷹宮文香って名前はなんか結婚したみたいで嬉しかったけど、キャラは完全に文香本人で、ほぼほぼ文香とキリトの夢小説と化している。彼氏の立場的には複雑だ。

鷹宮千秋『大学かー、俺どうしよっかなー』既読

ふみふみ『私の大学来ませんか?』

鷹宮千秋『行きます』既読

ふみふみ『あの、誘っというアレですけど、少しは考えませんか?』  
鷹宮千秋『まあ、実際高校出たら地元の大学に戻るかもしれないし』既読

ふみふみ『……実家に帰ってしまうんですか?』

……あ、そうじゃん。高校出たら、俺下手したら文香さんと離れ離れになってしまうのか。

鷹宮千秋『まず、東京の大学は確定しました』既読

ふみふみ『そ、そうですね……』

ふみふみ『まあ、大学の話は帰って来たら話しましょう』

すると、ちようど良いタイミングで集合の声が聞こえた。仕方ないので、「集合掛かったんで行きます」とだけ送信してスマホの画面を落とす。

そのまま教師の話に耳を傾け、右から左に受け流し、動き始めた。なんか荷物の金属を感知する奴とか色々通って、飛行機に乗るまで少

し時間が空いた。

その間、みんなトイレ行ったりしていた。俺もトイレに行つた後は暇なので、一人で飛行機が見える窓の前の椅子に座つた。

飛行機がたくさん並んでる所を写メつた。

『鷹宮千秋が写真を送信しました。』

鷹宮千秋『飛行機めっちゃある』既読

ふみふみ『すごいですね』

ふみふみ『千秋君は、飛行機のパイロットになりたいとか思ったことありますか？』

鷹宮千秋『ないですけど』既読

鷹宮千秋『なんで？』既読

ふみふみ『いえ、男の子は大体、そういうのに憧れると聞きましたから』

鷹宮千秋『あー俺はガキの頃から剣道やってみましたから』既読

鷹宮千秋『侍になりたいとか思っていました。銀魂読んでましたし』

既読

ふみふみ『その頃からアニメオタクだったのですね』

鷹宮千秋『いやジャンプコミックくらい読むでしょ』既読

ふみふみ『私は読んでませんよ』

鷹宮千秋『それは読書オタクだからでしょ？』既読

ふみふみ『まあ、小学生の頃から書は読んでいましたけど……』

ふみふみ『オタクと呼ばれる程ではありません』

鷹宮千秋『いやいや、バイト中に本読んでる時点でお察しでしょw』

既読

ふみふみ『むっ、違います』

鷹宮千秋『江戸川乱歩賞受賞作を2〜10作目を答えなさい』既読

ふみふみ『ハヤカワポケット、猫は知っていた、濡れた心、危険な心、6回目は受賞作無し、枯草の根、大いなる幻影、華やかな死体、孤独なアスファルト、蟻の木の下の』

鷹宮千秋『へー、6回目受賞作ないんだ』既読

……あれ、返信が止んだ。……怒つたかな。謝つた方が良かった

もしれない。

そう思つて何か送ろうとした時、隣に誰か座つて来た。

「おはよ、鷹宮くん」

「？ ああ、三村さん」

三村さんは俺の制服の裾を摘んだ。

「捕まえた♪」

「？ 何が？」

「昨日、逃げたら怒るつて言つたよね？」

「……………」

×× 忘れてた。すごく怒られた。

×

× 飛行機に乗り込んだ。俺は自分の席に座つた。

「…………だから、私の事を気遣つてくれるのは嬉しいけど、自分が風邪引いちや意味ないの。分かった？」

「…………わかつたつてば」

その間、ずっと三村さんのお説教を受けていた。どんだけ良い人なんだよ、大して仲良くない俺なんかそこまで説教するとか。ありがた迷惑だよチクショー。

つていうか、なんで隣に座つてんの？もしかして、俺の隣？

「…………え、俺の隣つて三村さんなの？」

「うん。私達の班の二人、付き合ってるから。…………私が隣だと嫌だった？」

「…………そうだったんだ…………。どうでも良い情報を仕入れてしまったぜ…………。」

「嫌じゃないよ別に」

まあ、誰が隣でも移動すれば良い話だからな。離陸したら、三村さんも仲の良い女子の元に行くだろうし、俺は寝よう。

「じゃ、おやすみ」

「ダメ」

「だ、ダメっ？」

「ダメ」

何でだよ……。ていうかダメって……。俺の意思は？

「せつかく隣になつたんだから、少しくらいお話しようよ」

「いや別にすることないでしょ話なんて」

「昨日、☆13武器出たんだ」

「え、何それk w s k」

何処で落ちたの？ズルくない？

「いや、出たと言ってもウエポンスバツチなだけどね」

「なんだよ。三村さんって何だっけ？ヒーロー取ってた？」

「うん。お陰様で」

そういやそうか。……。そういえば、アイドル達にもヒーロー増えたなあ。今じゃ、文香以外みんなヒーローじゃねえの？ちなみに、文香はダブルオーキリトフルセイバーで未だに頑張ってる。

「ヒーロー楽しいよねー。双機銃テキトーに撃つてれば殲滅出来るんだもん」

「まあな。俺はタリスで頑張ってるけど」

「？なんでタリス？」

「カツコ良いじゃん。タリスアクションで瞬間移動できんのすごくね」

「でも、使い難くて……」

「まあ、ぶつちやけテキトーにやっても火力出るのがヒーローだからな」

俺がデュアルブレードやった時、火力を1000以上出すのにどれだけ苦労したか……。ヒーロー始めたら速攻で出たからな。テキトーに斬ってただけで。

「でもね、最近少し悩んでて……」

「どしたん？」

「私は良く蘭子ちゃ……。友達と一緒にやって普通にXHとかクリアしてるんだけど、私じゃなくて友達が強いからクリアしてるだけじゃないかなって……」

「あーそういうね……」

それは分かるわ。俺は基本ソロだから自然とプレイヤースキルと



か身に付いたけど、三村さんみたいに友達が始めたから私も、みたいな人にはそういう実感湧かないよな。

「なら、ソロで行ってみれば良いじゃん」

「…………でも、私がやっていると後から『フレンドのいるパーティ』から辿って、『闇に飲まれよ、シフォンケーキ』って言いながら助けに来てくれて…………」

「え、何それ日本語？助けに来たんだよね？闇に飲まれよってダーカー側の台詞だろ」

「ああ、蘭子ちゃ…………友達という言葉では『お疲れ様です』って意味なんだ」「そいつ誰だよ…………。ヤベエ奴だな…………」

おい、口滑らせすぎだろ。二回も間違えねーからな？まあ、蘭子ちゃん誰だか知らないけども。

ちなみに、シフォンケーキってのは三村さんのキャラ名だ。

「…………ま、それなら、たまにはソロでやってみたって言えば良いんじゃないの」

「…………でも、クリアできなかつたら恥ずかしいし…………」

「なら、俺が一切手出しせずについて行こうか？知らない奴とやってりゃ、その友達も遠慮するだろうし、もし負けそうになったり死んだりしたら、ムーン投げてやるから」

「…………鷹宮くんは退屈じゃないの？」

「別に。どうせ通話しながらやるだろうし、仮に暇だったら東京〇3のコント見ながらついて行くよ」

実はマイブームだったりする、東京〇3。東京喰種や東京レイヴンズより面白いし。いや、アニメじゃないし比べようがないが。

「…………じゃあ、今度お願いするね」

「ん。じゃ、帰って早速やるか」

「いやそれは無理だよー」

知ってた。

×……………そういえば、何か忘れてる気がするけど、なんだったかな。

×

×沖繩に到着した。もう11月なのに、沖繩はまだ少し暑さが残って

いた。これ、真夏に来たらどうなってしまうんだろうか。人類は皆、干物になつているに違いない。やはり俺は東京に住みたい。

まあ、そんな事はどうでも良い。それよりも、俺は今瀕死な状態になつていた。

「……………大丈夫？ 鷹宮くん……………」

「……………死ぬ」

酔つた。超気持ち悪い。なんか頭痛いし目もボーツとするし死にそう。

と、いうわけで、三村さんに肩を貸してもらつていた。情けないなんてもんじゃねえぞこれ……………。ほら、他の男子からゴミを見る目で見られてんじゃん……………。あ、いやアレは違うわ。暗殺する目だ。夜中はホテルを抜け出して屋上で寝よう。

「……………三村さん、これからの予定は？」

「え？ えーつと……………首里城公園。バスで移動して集合写真をクラスごとに撮つて、見学して、そこからホテルですけど……………大丈夫ですか？」

「……………無理」

「……………じゃあ、先生に言つて先にホテルに戻ろつか？」

「……………そうする」

そんなわけで、俺は一度その辺の椅子に座らせてもらい、三村さんは先生とお話しに行つた。

その間、クラクラしている頭を抑えて空港内を見回した。考えてみれば、ここは沖繩、那覇空港だ。あんま実感ないけど。せっかくだし、この空気を堪能しようと思つて、息を大きく吸い込んだ時だった。

「……………はっ？」

……………なんで、文香が、ここにいんの……………？

どんな曲でもダンスがあれば盛り上がる。

文香の香りがする。何処からだ？匂いのする方に顔を向けると、文香がおみやげ屋さんの中にいた。うちの学生服の集団をジッと見ている。どうやら、俺のことを探しているようだ。けど、なんだ。合点がいったぜ。昨日、向こうから求めてこなかったのは、今日ここに来るからだったんだな。大学サボってまで来やがってあのバカ……。まあ、その辺は自己責任だが。

すると、三村さんが戻って来た。

「鷹宮くん、集合写真だけ撮ったらバスで休んでて良いって」

「マジかよ……」

まあ、たかだか乗り物酔いだからそうなるか。

仕方ないので、荷物を持ってバスに向かった。俺の席はバスの中でも三村さんの隣のように、しばらくバスに揺られた。正直吐きそう。後ろからタクシーが付いて来ているのは、おそらく文香だろう。あの子、ストーカーの気質があるな。

「……泣きそう」

「も、もう少しだから、頑張ってっ」

もう少ししてどれくらいよ……。あと何年後の話なんですかね……。

そのまま吐き気と戦いながらバスに揺られること数十分、ようやく到着した。このなんかすごい赤い城だが、そんな事どうでも良いくらいに体調悪い。

「……降りよう」

「ん」

二人で降りて、首里城に足を踏み入れた。で、ここで何しろ言うねん。見学して写真撮って何？奈良や京都みたいにな有名所ならそれなりに感動はするが、首里城とかイマイチパツとしないし、来ても「すげー」「赤いわー」「シャア専用だわー」としか言えない。

これは飛行機酔いに感謝だな、なんて思いながら記念写真の順番を待った。生徒達に紛れて後ろを見ると、文香が後からついて来ていて

「ここが、阿波根さんの聖地……」とかほざいてた。海子って呼んでやれよ……。

うちのクラスが写真を撮る番になり、全員で並んだ。当然、俺は一番横の一番後ろ。目立たない位置に並び、まずは一枚。で、なんで三村さんは俺の隣に来るのかな。やめるよ、俺のこと好きなのかと思っちやうだろ。

「鷹宮くん、大丈夫？」

「ああ、さつきよりマシ」

まあ、体調悪いんだけどね。

そんな会話をしてる間に、まずは直立不動で写真を撮った後、ポーズをとって良いことになった。

俺はとりあえずポーズはとらない。だってイベントの時だけはしゃぐ奴、みたいに思われたくないし。と、思ったら隣の三村さんが声をかけて来た。

「アークスダンスのポーズとりましょう！」

「は？え、どうした急に。てか、二人じゃキツくね」

「せーのっ！」

「ゆゆ式OPP?？」

三村さんは何故か最後の「ps02!」のポーズをしたので、俺も一緒にそのポーズをした。パシヤツと写真を撮る音が聞こえて、写真を撮った。

………何やってんだよ俺。なんかすっごい恥ずかしい思いした気がする。今更顔を赤くして後悔してると、ブルツと寒気がした。そつちを見ると、文香がニコニコ微笑んだままこつちを見ていた。

「……………」

「……………」

こ、怖い……………え、何その笑顔。抹殺の使徒みたいな笑みして……………いや、でもクラスメートとの思い出作れって言ったの文香だし、

恐れていると、写真撮影が解散になった。

「鷹宮くん、バスに戻ろっか」

「いや、早く回ろう。なるべく早足で。そして一番奥で待機しよう」  
「えっ、うん」

ふと後ろを見ると、文香はスマホで通話しながら何度もペコペコと頭を下げていた。なんだ？もしかして、撮影に来てたのか？偶然、俺が修学旅行の間に？だとするとアレはプロデューサーさんに連絡でも取ってるのか？

……いや、文香って割とアホだから、もしかしたら学校だけじゃなく仕事もサボってこっちに来たのかも……。あり得るな……。後で聞いてみるか。

×とりあえず、何にせよまた文香に謝る事が増えたな……。

×  
×  
首里城見学が終わり、ホテルへバスで移動。その間も三村さんと軽くお話し、ホテルに到着した。バスから降りる前に先生が全員に言った。

「あー、ホテルに入る前に一つ。他所の学校も同じホテルに泊まるから、仲良くしなくても良いけど、その辺よろしくな」

え、マジ？嫌だなー。そういうの苦手だから……。まあ、関わることなんてないと思うけど。

ホテルに入り、そこからは飯の時間以外はほとんど自由。とりあえず、全員での飯の時間が終わり、部屋に戻ると速攻で俺は部屋を出た。だって、同じ部屋に仲の良い人いないし、ここは気まずくなる前に退避するのが正解だろう。

ポケットWi-Fiと3〇Sはポケットに入れて来たので、とりあえずホテルの中で誰も来そうにないところを探そう。

そう思っただけ探索していると、廊下なのに広くなってる所に出た。何か、楽器がいくつか置いてある。

「……………」

ああ、楽器を見るとついトラウマが……。けいおん！に憧れてギターを練習したっけなあ……。小学生の頃に少しだけピアノをやってたからか、ギター、ベース、ドラムに興味が出て、楽器屋で覗いたり、実家に帰った時は親父の借りたりしていたが一向に上達せ

ず、結局ピアノしか弾けなくて、もうやめよっかなーなんて考えてたわ。でも、唯か濡か髪下ろしりっちゃんが好きだった俺はやけに悲しかったなあ。今はムギちゃんも大好きです。

で、この楽器は誰のなんだろう。ホテル備え付けのなら弾いてみたいんだけどなあ。

「……………」

弾くのはやめておこう。人通ったら目立ちそうだし。

このホテルは大きく分けて西棟と東棟の二つの建物に別れている。見た所、その西棟がうちの学校でもう半分が東棟のほうだ。そっちに行こう。行くのは禁止されていないからな。

東棟のフロントに到着し、そのソファアに座った。ここなら、向こうの教師は見たことない子供が遊んでて、うちの学校の教師が来ても向こうの生徒が遊んでるように見える。そもそも、こっちに来るとは思えない。

「…………あ、文香今家にいねーのか」

そうじゃん、ポケットWiFiいらないうん……。仕方ない、ソロで行くか。通信はやめよう。あんま知らない人とやるの好きじゃないし。

最近はギルドスタイル狩技なしでやってる。来年発売のワールドのために慣らしてる所だ。

バルファルクを相手に、ノーダメクリアを狙いながら片手剣を振っていると、いつの間にか誰かが後ろから画面を覗き込んできていた。

「？」

「……………こんばんは、千秋くん」

「…………ふ、文香……………」

「……………何してるんですか？こんな所で」

「……………あ、いや……………」

慌てて3OSを隠した。

「……………部屋で、友達といなくて良いのですか？」

「……………」

そこは良い。怖いのは、さっき最後に文香を見たのは、抹殺の使徒

のような笑みだった。てか、今思い出してもチビリそう。

そんな考えが表に出ていたようで、文香は微笑みながら言った。

「…………大丈夫です、先程の件なら怒っていませんよ。私がクラスメートと楽しんで下さい、と言いましたから」

「…………へっ?」

「…………どうでしたか? 一日目は楽しかったですか?」

意外な反応…………いや、でもまあ、そういう事なら感想言うか。

「別に首里城行っただけなんで、特にないですよ」

「…………輝く、虹を見せて」

「ps02!」

「…………随分、楽しかったみたいですわね」

「はっ、体が勝手に」

怒ってない、とは言うけど明らかに不愉快そうだ。

「ていうか、そもそもなんでいるんですか」

「…………撮影です」

「嘘だ」

「…………本当ですよ。トライアドプリムスの皆さんの撮影について来ちゃなんです」

「なんで!?!?」

「…………お手伝いで」

「え、そんな自分と全然関係ない撮影に手伝いに…………?」

多分この人、俺のためについて来たんだろうなあ。変わった人だ。

「…………じゃ、少し外出ますか?」

「…………良いのですか?」

「良いでしょ。結局、夏とか俺と文香で海行ったことないし」

このホテルの前は海になっている。表に出れば海だ。

「…………でも、クラスメートの皆さんとは?」

「いいです、友達いませんし」

「…………アークスダンスの子は?」

「女子の部屋行けっ?」

「…………では、海に行きましょう」

二人で表に出た。ザザア……ツと波の音が聞こえる。こうしてると、以前はドラマとかは「こいつら海歩いてるだけで楽しいとか何言ってるの?」とか思っていたけど、いざこうなると割と楽しいわ。やっぱ空気や雰囲気って大事だな。

「……明日からの予定はどのようになっているのですか?」

「明日は班行動、明後日は午前中クラス行動で午後は班行動、4日目は自由、最終日はクラス行動です」

「……では、4日目に御一緒してもよろしいでしょうか?」

「いいですね、そうしましょう」

よっしゃ、4日目が楽しみになってきた。

すると「おい」と後ろから声が聞こえた。北条さん、渋谷さん、神谷さんが走って来た。

「文……あれ?鷹宮くん?」

「なんでここにいるの?」

……厄介な奴らに見つかった。

「どうも」

「なんでここに……?まさか、文香さんを追いかけて!?!?」

「いやいや、逆、逆」

すると、三人はニヤリと微笑みながら文香を見た。

「……ふーん?」

「彼氏を追いかけて?」

「わざわざあたし達に付いて来たんだ?」

「っ……!いい、いいでしょう別にっ」

あーあ……まあ、自業自得だし、仕方ないか。

「じゃ、俺部屋に戻りますね?」

「何?私達が来て照れてるの?」

北条さんが俺の事もからかおうと思ってるのか、ニヤニヤしながら言った。

「? 違うから。お前らが来たって事は、プロデューサーがいつ来てもおかしくないだろ」

「あ、な、なるほど……」



「俺がここにいてるって事がバレるだけでもマズイんだから。かなり不自然な形で文香ここに来たんだし」

「そ、そっか……………」

「じゃ、撮影頑張ってる」

帰ろうとした俺の腕を文香が掴んだ。何？と言いかけて振り返った直後、キスされた。俺も北条さんも渋谷さんも神谷さんも顔を赤くした。口の中を舐め回されることはなかったけど、キスはキスだ。

「……………え、おまつ、外で……………」

「……………では、千秋くん。また」

文香は逃げるように走ってホテルに向かい、「……………じゃあ」「……………また」「……………ち、チューしやがった」と三人は眩気を残してその後を追った。

×

× 未だ心臓をバクバク言わせながら、俺はホテルに戻った。そういえば、

× ここ東棟か。早く西棟に戻らないと。

歩いてると、ドンつと誰かとぶつかつた。

「きやつ」

後ろに尻餅をついたのは、おそらく向こうの学校の女子生徒だろう。

「あ、すみません」

「い、いや、こっちこそごめつ……………」

なんだ、可愛い子だな。茶髪のショートヘアが似合ってる。

その子は俺を見上げると、キョトンと首を捻った。

「……………あれ？誰？」

「えっ、何急に」

「え、だって修学旅行生、だよな？でも、うちの学年に君いたっけ？」

「……………ああ、俺は別の高校なんです。西棟に泊まってる」

「あ、ああ、なるほど……………。って、早く戻らないとっ。ごめんなさい」

「いえいえ」

その子は走ってエレベーターに走った。可愛い子だったなー。何、最近のJKってみんなアイドルみたいに可愛いのか？

そう思っていると、女の子が尻餅を着いた場所にヘッドホンが落ちていた。あの子の落とし物か？

でも、いくら他所の高校とはいえ、女子の部屋に突入するのは退学も良いとこだよなあ。

「……………」

とりあえず、修学旅行五日間もあるし、一応俺が持つとくか。

気を抜くと非常事態になる。

翌日、午前中のクラス行動を終え、午後の班行動になった。

美○海水族館に班で向かう。ここは俺が沖縄でアニ○イトの次に興味がある場所だったので、少し楽しみだ。

班員四人でタクシーを捕まえて移動。俺は自ら率先して助手席に乗った。仲良いのは後ろでキャツキャウフフしていたまえ。

「何処から来たんですか？」

わ、運転手さん声掛けてきた。

「東京です」

「へえ、高校生？」

「はい」

「勉強とか大変でしょ」

「いや、赤点取らなきや全然平気なんで」

「目標がえらく低いな……」

………なんか運転手さんに呆れられたんですけど。僕、客ですよ？  
その後も、向こうは気にせずガンガン話してくるのに、こっちが気を使ってしまい、かなり散文的な会話を続けながらも、美○海水族館に到着した。

中に入り、仲良く歩く三人の後ろを黙ってついて行った。おお……  
ジンベエザメでつけーなあ……。これでプランクトンしか食わねー  
んだからビビるわ。

ゆうゆうと泳ぐジンベエザメを見ながらただボンヤリしていると、  
ラスメート達が行ってしまっただので、仕方なく後を追った。もつ  
とゆっくり見たかったんだけどな……。

すると、ずっと後ろにいる俺に気を使ったのか、三村さんが二人か  
ら離れて俺の隣に来た。

「すごいね、ジンベエザメ思ってたより全然大きかった」

「え？あ、うん」

「でも、他のお魚とか食べちゃわないのかな？」

「知らんの？ジンベエザメって主食プランクトンだから、あの辺の魚

を食ったりはしないんだ」

「へえー、物知りだね」

「いや常識だと思うが……」

少なくとも俺は小学生の時から知ってた。

「鷹宮くんって、魚好きなの？」

「いや別に普通。ただ、無心になってこういう大きな水槽を眺めるのが昔から楽しくて、小学生の頃にたまに図書室で図鑑借りてたくらいだな」

「へえー、昔から変な子だったんだね」

「おい待てどういう意味だオイ」

「じゃあ、もう少し見て行く？」

「いや、いい。先行こう」

ここで見ていけば他の人が退屈するし、俺の所為で周りの人に迷惑にかかる方が嫌だ。

「あ、でも写真だけ撮っても良い？」

「良いよ」

文香に送る約束しちゃったし。ジンベエザメを何枚か撮ると、先に進んだ。

70種類のサンゴだのふれあいコーナーだの熱帯魚だのを見回り、写真に収め、すぐに見終わってしまった。これだから学生と来るのは嫌だったんだ。

続いて、イルカショーに向かった。全員で椅子に座り、調教されたイルカがピョンピョン跳ねてるのをぼんやり見ながら、スマホを取り出した。文香に写真を送ることにした。

『鷹宮千秋が写真を送信しました。』×20

鷹宮千秋『美○海水族館の写真』既読

……あれ、既読付いたのに珍しく返信来ないな。忙しいのか？別に無理して見なくても良いのに……。

ふみふみ『あの、送ってもらった写真にいくつか不具合があるのですが』

え、不具合？何？てか不具合ってどういうこと？

鷹宮千秋『不具合?』既読

ふみふみ『不具合というか、不可解な点です』

ふみふみ『千秋くんはどこに写っているのですか?』

? 変な事を言う子だな。

鷹宮千秋『そんなもん写ってませんが』既読

ふみふみ『千秋くんを「そんなもん」だなんて冗談でも言わないでください』

お、怒られた……………。なんで怒るの。

鷹宮千秋『ごめんなさい』既読

ふみふみ『はい』

ふみふみ『だって思い出残すには自分を写真に写さないとダメじゃないですか』

ああ、さっきの話に戻ったのね。

鷹宮千秋『いやいや、自分の写真がスマホに入ってるのとかなんか恥ずかしいですし』既読

ふみふみ『意味が分かりません』

うん、それは俺も思った。大体、文香との写真は結構入ってるし。

鷹宮千秋『けど、俺と写真撮ってくれる友達なんかいませんし』既読

ふみふみ『昨日、仲良く写真を撮っていた方はダメなのですか?』

鷹宮千秋『え、女の子と写真撮って良いんですか?』既読

ふみふみ『ダメです』

何言ってるんのこの人。

ふみふみ『と、言いたいところですが、クラスメイトとの思い出ですし、構いませんよ?』

あら、意外。文香って割と余裕ある…………いや、最近になって余裕出て来たと言うべきか。

ふみふみ『それに、千秋くんなら浮気はしないでしょう?』

信頼されてんなー。そういうこと言われると、少し嬉しいじゃねえか。だからこそ、俺も断言することができる。

鷹宮千秋『当たり前です』既読

ふみふみ『浮気したらジ・イクリップスの刑って約束ですし』  
え、そんな約束してたっけ？ていうか信頼されてんの？

鷹宮千秋『あの、そんな約束した覚えが無いのですが』既読  
ふみふみ『しました』

鷹宮千秋『そうでしたしました』既読

画面越しの気迫に押されました。

すると、隣の三村さんが俺の手を引いた。

「？ 何？」

「イルカさんにご飯あげられるみたいだから、行かない？」

えっ、そうなん？ていうか、ご飯って言い方可愛いな。

「いや、俺はいいや。三人で行ってきな」

「ダメ、連れてく」

××なんでだよ……………。仕方ないので、強制連行された。

××水族館の後もいくつか観光地を回った。その途中、うちの班員の二人の友達の班と合流したりして、いつの間にか12人班になっていた。まあ、その分俺は一人でいられるし、問題はないけどな。

で、最後に来たのはブセナ海中公園。ここはなんか野生の魚を観察できるらしい。

そこに到着し、四人で橋を渡った。他の修学旅行生もここに来る予定の班が多く、若い男女四人組が多く見られる。まあ、うちの学校は修学旅行は私服OKだし、他の学校もそうである可能性もあるので、他の学校かもしれないが。

海中公園の橋の上を歩いた。しかし、沖縄の海綺麗だなー。なんつーか、東京湾の500倍は綺麗だ。上から魚見えるし。

「あれ、何これ」

うちの班の男子が橋の向こうの自販機を見つけた。魚の餌の自販機らしい。一個100円。

「面白そうじゃん、買おうぜ」

「うん、投げよう」

男子と女子が買った。モナカみたいな生地の中に餌が入っている

ようで、筆つて投げた。ちなみに、モナカも餌らしい。ていうか、これ丸々餌らしい。

それを放つては投げてる二人を見ながら、俺はボンヤリと手摺にもたれかかった。

「……………疲れた……………」

「もう、疲れるの早いよ?」

隣で同じようにもたれかかった三村さんが声を掛けてきた。

「いやいや……………今日ほとんど歩き回ってたし、もう死にそう……………」

しかも、俺文香に送る写真撮ってないし……………。誰かに写真撮ろうつて声掛けるの怖くてなあ……………。俺って割とコミュ障なのかもしれない。

「それはそうだけど……………」

「……………なんか、悪いな」

「? 何が?」

「随分、気を使わせたみたいで。俺なんかに話し掛けてくれたみたいだし」

「ううん、そんな事ないよ。気なんか使ってない。だって、友達でしょ?」

「……………」

泣きそう。そうか、俺と三村さんって友達だったのか……………。初めてアイドル以外の友達が出来た。

「三村さあん……………」

「え、なに?」

「や、何でもないです」

「……………う、うん?」

俺の周りの友達はアイドルばっかだからなあ。いや、こんな悩みを誰かに聞かれたらフクロにされそうだが。

すると、前の男子と女子が餌をあげ終えたのか、海中展望塔に向かった。海から建物が出ていて、その階段を下りると地下に窓が付いているから海中を見ることが出来るっただけだが。

俺と三村さんも中に入り、窓を覗いて海の中を見た。あ、これも写

真撮つとくか。もちろん、俺は写さない。

まあ、これもさすが学生だ。飽きるのが早い。すぐにここから出て行ってしまった。

俺も仕方ないのので後に続いた。これで2日目も終わりか。しかし、沖縄も悪くないなあ。今度来ることがあったら、絶対に一人で来よう。  
×××

だが、2日目は終わりではなかった。班員と逸れた。まあ、途中から人数増えたし、俺一人くらい気付かなくても仕方ないだろう。

「……………」  
ここから歩いてホテルに行くのか……………。そもそも「ここ」が何処だか分からないが。困ったなあ。三村さん、多分俺の事心配してるだろうし…………。

どうしたものか…………。いや、でもまあ、なんとかなるだろ。そんな楽観的な事を考えてると、目の前で誰かがキョロキョロと辺りを見回してるのが見えた。

「……………あつ」  
昨日の…………茶髪の女の子。俺の「あつ」に気付いたのか、茶髪さんはこつちを見た。直後、パアッと顔を明るくした。

「あつ……………き、昨日の！」  
「どうも」

何この人、もしかして迷子？なんでそんな嬉しそうにこつちに駆け寄って来んの。

あ、そうだ。ヘッドホン返そう。

「あの、これ」

「あつ、私のっ！あなたが持ってたの？」

「まあ、床に落ちてたし」

「ありがとう」

茶髪さんはヘッドホンを受け取った。受け取ったのに離れようとしない。うん、これもう間違い無いわ。

「もしかして、迷子？」



「っ？ち、違うから！迷子ではないから！」

そんな照れなくても良いでしょう。

「俺も班員と逸れたところなんだけど」

「そ、そうなの……………？なんだ……………」

「やっぱ迷子なんじゃん」

「だ、だから違うから！落胆したわけじゃないから！」

「ああそう……………」

どうでも良いが。

「で、でも…………一緒にいても、良い…………？」

こいつ、自分が迷子である事を隠す気あんのか。

「……………好きにして」

「ありがとう」

さて、まずは連絡を取りたい所だが…………。とりあえず時間を見た。ホテルでの集合時間まであと10分もない。

これは、先にホテルに帰ってもらうしかないか。スマホを取り出して耳に当てた。

「……………もしもし、三村さん？」

『……………あつ、鷹宮くん!??何処にいるの!??』

「分かん。けど、大丈夫」

『大丈夫じゃないよ！みんな心配……………！は、してないけど……………！私しか、してないけど……………!!?』

そこは嘘でもしてると言っとけや。

『い、いや、でもね！気付いたのは私じゃないんだよっ？班の子が気付いたの！「二人いなくね？」って！』

「あの、分かりましたから……………」

『で、でもっ……………みんな「まあ平気でしょ」みたいな空気になって、探しに行こうって言っても聞いてくれなくて……………!』

「……………お願いだから黙ってお願いだから」

『わ、私は心配してるけど、みんなそうでもなくてっ！し、してないから！みんな心配なんてしてないから！私しか心配してないから!!?』  
「……………分かったから」

なんで最後はまくし立ててきたんだよこいつ……。もう俺のライフはゼロよ……………!

「じゃあ、三村さんはみんなとホテルに帰ってて。俺もすぐ戻るから』『ええっ!??だ、大丈夫なの?一人なのに……………』

「大丈夫。一人じゃないから」

『?誰かいるの?』

「ああ。別の高校の人」

茶髪さんも、俺が電話してるのを見て、同じように電話をしていた。「とにかく、先に帰ってて」

『わ、分かったよ……。本当に平気?』

「平気。じゃ」

それだけ挨拶して、電話を切った。

「そうなんだよ、なつきちー!完全に沖縄で迷子になったよー!」

茶髪さん、頼むから現状の報告だけしたらさっさと切って。先に進めない。

そんな事を考えてると、ポツツと何かが鼻の頭に当たった。触ると指が濡れた。アレ、これまさか…………いや、まさかでもなく雨だな。

案の定、ザアーツと降ってきた。

「あっ」

「ちよっ、雨!??ごめん、なつきち切るね!」

茶髪さんは電話を切ると、ひゃーっと頭を抱えた。

「ど、どうするっ?」

その間に俺は鞆から折り畳みの傘を取り出した。

「つて、傘あ!??」

「そら、修学旅行だし傘くらい持って来るでしょ。無いの?」

「…………どーせ使わないと思ってスーツケースの中に…………」

「……………」

「…………何その目」

「いや別に?」

「むー…………ほとんど初対面なのにムカつく…………」

いや、この非常事態を理解出来てないんだもん。未知の土地で迷

子ってヤバいんだからな？

思いつきりバカにした目で茶髪さんを見てると、段々と俺の目は茶髪さんの胸元に吸い寄せられて行った。何故なら、雨で濡れて透けているからだ。

「っ」

慌てて目を逸らすと共に、傘を差し出した。

「？」

「いいよ、使って」

「え？いい、いいの？」

「うん。あと、これ」

俺は上着を脱いで、茶髪さんの肩に掛けた。

「……………えっ？」

「あーあの……………ほら、周りの目とかあるし……………」

「……………何急に優しくしてるの？ナンパ？」

落ち着け、キレるな、俺。

「いや、羞恥心が無いならそう捉えても良いけど……………」

「羞恥心……………？」

落ち着いて自分の体を見ると、服が透けている事に気付いた。直後、カアツと顔を赤くした。

「……………ご、ごめん……………」

「いや別に。それより、屋根のある所を探そう」

……………文香には黙っておこう。下着を見たなんてバレたらジ・イクリップスだわ。

一難去つてまた一難。

とりあえず、コンビニを見つけられることができた。お互いに自己紹介して、多田さんが傘を買ってる間に、俺は鞆からしおりを取り出した。ホテルの名前を把握し、それをスマホで検索した。

ここから歩いて2時間は掛かるな……。いや、2時間で済んで良かった、というべきか。

多分、今日ずっとタイミング良くタクシーを拾えていたのは、多分先生達がルート先読みしてウロつかせたり、タクシー会社側が何処から修学旅行生が来るってのを知って、観光スポットを回ったりしてたんだろいな。

つまり、これからタクシーを捕まえようにも、ほとんどは駅前とかに戻ってしまっているだろう。それに、二人でこの距離をタクシー乗ったらいくら掛かるか分からんし。

沖縄には駅が15個しかないし、泊まってるホテルの近くに駅はなかった。つまり、ホテルまで歩いて行くしかない。

「……………はあ」

「どしたの?」

買い物を終えた多田さんが声を掛けてきた。

「ここからホテルまで歩くしかないし面倒だなーって」

「え……………歩くの?」

「そりやそうでしょ」

「うええ……………面倒臭つ……………」

まあ、最悪その辺のホテルで一泊するしかないわけだが、それならまだタクシーの方が安く済むし、やっぱあり得ないな。うん、ホテルだけは絶対ありえない。

とりあえず行くか、と思つたらポケットのスマホがめっちゃ震え始めた。

「げっ……………」

文香からメッセージがたくさん来たよ……………。

ふみふみ『かな子さんから聞きましたよ』

ふみふみ『逸れてしまったそうですね?』

ふみふみ『大丈夫なんですか?』

ふみふみ『もしもーし?』

ふみふみ『見てるんですよね?』

ふみふみ『私、気になります!』

ふみふみ『誰と一緒にいるんですか?』

ふみふみ『未読無視は良くありませんよ?』

ふみふみ『ねえ、見てるんでしょう?』

ふみふみ『怒りますよ?ねえ?』

『ふみふみがスタンプを送信しました。』

『ふみふみがスタンプを送信しました。』

『ふみふみがスタンプを送信しました。』

『ふみふみがスタンプを送信しました。』

『ふみふみがスタンプを送信しました。』

『ふみふみがスタンプを送信しました。』

『ふみふみがスタンプを送信しました。』

こ、怖え〜!!?何何、なんで!!?ヤンデレ!!??

「? どうかしたの?」

「ご、ごめんちよつと待ってて」

「???

俺は電話を掛けた。

「あー……………もしもし?文……………」

『千秋くん!?!?どこで何してるんですか?!?!?』

キーン……………と来た。今、耳にキーンと来たよ……………。

「……………今はコンビニです。雨降ってきたんで雨宿りしてます」

『どこのですか?!?!?』

「絶対言わない、探しに来そうだし……………」

『探しに行くに決まっています!!?!?』

「ダメですよ。風邪引きますし。まあ、今はスマホありますし、傘もあ

りますから、すぐにそっちに着きます」

『すぐって……………どれくらいですか?』

「歩いて一時間はかかりますけど」

『風邪引いちやいますよ!!?』

「大丈夫ですよ別に。それより、文香に迎え来てもらって風邪引かれる方が困りますから」

『……………で、ですが……………』

「や、本当大丈夫なんで。じゃ」

それだけ言って電話を切った。まったく、相変わらず心配性だなこの人は……………。

さて、これから帰るか。そう思って隣の多田さんを見ると、ニヤニヤしながら俺を見ていた。

「……………何」

「誰？文香って。彼女？」

「あ……………」

まあ、正体バラさなきや平気か。

「そうだよ」

「うわっ、意外。彼女いるんだ」

そうだよ、しかもアイドル。まあそんな事は口が裂けても言えないが。

「文香、文香か……………まあ、うん、偶然だよね」

勘付いてるよ……………。怖っ。いや、でも普通アイドルなんて思い付かないでしょ。もしかしたら、あの人の友達で文香って人がいるのかもしれないよな。

「何、文香って友達いるの？」

「うん。友達っていうか……………歳上なんだけどね。あまり話した事ないし」

「えっ?と、歳上?」

まさか、まさかね?歳上で文香なんて名前の人は世界中にたくさんいるしね?!

……………一応確認してみるか。

「もしかしてさ、最近……………正確には夏頃にオンラインゲームとか周りで流行らなかった?」

「あ、そう！そうなの！私もやってる！なんで知ってるの!?!」

「…………ファンタシスター、スター」

「レーアドロ☆コイコイ!」

間違いない。こいつ、アイドルだ。

「何、鷹宮もぷそやってんの!?!」

「ああ、まあな」

ていうか、君達に広めた張本人です、多分。

「いいねえ、意外とロックだねえ!」

「まあ、その辺の話は移動しながらにしよう」

「うんっ!」

ロックだねえ、の意味は分からないがな。

コンビニを出て、二人で傘をさしてスマホを頼りに歩き出した。

「で、クラスは?」

「ヒーロー!61!」

「やるじゃん」

「鷹宮は?」

「80」

「うわっ…………」

「おい、なんだよ」

「いや、すごいナって」

嘘だ、絶対引いた。

「80いってる人なんて私の知り合いでも数えるほどしかないのに

…………」

「へー、そうなん?あ、その道右」

「あ、うん。てかさ、みんなどこでレベリングしてんの?」

「知らね。俺はE P 1く4クエストでさっさと終わらせちゃったから

なあ」

「え、何それ」

「期間限定。7月か8月くらいだったっけか」

「へー、良いなあ」

まあ楽だったな。あれ回ってりやすぐ終わったし。

「で、多田さんは346じゃ誰と仲良いの？」

「へ？うーんと……なつきち……木村夏樹とか前川みくとか……？」

「んー……その辺は知らねーな」

「えー知らないの？二人とも結構有め……」

そこで、多田さんの口は止まった。ギギギつとぶつ壊れたロボのように俺の方を冷や汗流して振り向いた。

「……………ば、バレてる……………？」

「そりやそうだろ……………。俺、こう見えてアイドルに詳しいからな」

嘘は言つてない。なにせ、色んなアイドルの連絡先を持つてるんだからな。

「……………そ、そっか……………バレてたか……………」

「まあ、大丈夫。サインとか求めないから」

「求めてよ！サインくらいなら別に良いのに！」

そう言われてもなあ……………。鷺沢、速水、橘、塩見、宮本、大槻、アナスタシア、渋谷、神谷、北条、島村、高垣と知り合いだからなあ。サインに価値を見出せないというか……………頼めば書いてくれそうとか……………。

「え、でも詳しいのにみくとかなつきちは知らないの？」

「あ、あ……………俺は世間一般の『詳しい』とは違ってさ……………。まあ、この辺の事情は詳しくは言えないけど」

「……………何、もしかして社長の息子なの？」

「いや違うけど。いや、俺自身は問題ないんだけど……………こう、むしろ周りのみんなの心配というか……………」

「周り!?？周りにアイドルがいるの!?？」

「あ、いや、なんつーか……………」

なんて言えば良いのかな……………。いや、もう言っちゃって良いかな。俺の知り合いの中に多田さんの友達がいれば問題ないんだが……………。

ていうか、そもそも多田さんもなんでアイドルなんだよ……………。てかなんでそこら中にアイドルがいるんだよ……………。宝くじ当てるよりアイドルと知り合う方が簡単じゃねーか。

とりあえず、ストレートに答えるのはやめておこう。



「…………夏休みにあつたクローネの写真撮影、アレのバイトで下働き  
しただけだよ」

「へえ、それで知り合いに…………クローネ？」

…………あつ、やべつ。

「…………あの、まさかとは思うけど…………文香って彼女…………鷺沢文香  
さん？」

「…………チガウヨ？」

「そうなの!?？」

や、ヤベエー！マズイマズイマズイ！これだけは  
マズイ！

「ち、違うから！全然違うから！」

「え、だって…………偶然にしては…………」

いやいやいやいや、そんな偶然よくあるだろ、と思ったが、基本的  
に人は思い込みから全てが始まる人生き物だ。俺がそう言っても信  
用されない可能性もある。何とか誤魔化さないと…………!!？」

仕方ない、三村さんに迷惑掛けたくないが、この際だ。多田さんの  
死角になる位置で三村さんにメッセージを送った。

鷹宮千秋『唐突にすまん』既読

鷹宮千秋『今だけ俺の彼女になつて。三村文香と名前変えて』既読  
本当に心配してくれていたようで、既読付くのが早かった。

「文香さん、クローネだし…………そういえば、夏頃から口寄せの術の印の  
練習してたり、ギターでチャルメラ弾いたり、事務所に来る度『今日  
も1日、がんばるぞいっ』とか言ったり…………それ何なのか奈緒に聞い  
たら全部アニメのネタらしい…………」

おい、証拠あげるのやめろ。ていうか、今度「がんばるぞいっ」やつ  
てもらおう。

すると、三村さんから返信が来た。

三村文香『これで良いの?』

よっしゃ、理解が早い！

鷹宮千秋『ok』

トークルームを削除すると、画面を見せた。

「ほら、これ。三村文香って言うんだ。俺の彼女」

「……………」

「メッセージ送って確認しても良いけど？」

「……………」

すると、多田さんはホッと息をついた。

「……………なんだ、てつきりアイドルと付き合ってるのかと思っちゃったよー」

「なわけないだろ……………」

あ、危なかった……………。ついうっかりバレるところだったぜ……………。

まあ、顔見せろって言われても、三村さん見せれば問題ないし、この件は問題ないな。相変わらず、自分の情報操作の才能が怖いぜ。

「で、彼女とどんなことしてたの？」

「あ？なんでだよ」

「だって気になるじゃん。私、恋人出来たことないからさー。鷹宮みたいなゲーマーに出来る彼女なら尚更気になるから」

「おい。ゲーマーに偏見持ちすぎだろ。ゲーマーだってな、ゲームより彼女のが好きなんだぞ」

「つ……………よくそんな恥ずかしいこと言えたね……………」

「え、なんで？」

恥ずかしいのか？ 嚙んだり匂い嗅いだりしてるからか、あまり恥ずかしいって感覚は分からないわ。嫌な感覚麻痺だな……………。

×

2×0分後程経過した。雨は強くなり、雨音以外何も聞こえない。俺と多田さんは、おそらく公民館と思われる建物の前、入口の前の階段になっている所で雨宿りしていた。

道路は、若干洪水していて、足首まで水位が上がっている。

「……………どうするっ？」

「どうしような……………」

取り残された俺と多田さんは、休憩も兼ねてしばらくそこでぼんやりした。

このままでは、ホテルに着くどころかここで一泊するハメになる。

さーて、困った困った。

「あー……多田さん。今いくらある？」

「へ？ま、まあ、アイドルだしそれなりにはあるけど……」

「……………その、最悪……最悪なんだけど……どっかのホテルで一泊することになるけど……それでも良い？」

「へっ!?？い、一泊って……………!?？」

「俺と二人で。多分、ラブホとかしかないけど」

「む、無理無理無理無理!いや、鷹宮くんが嫌いとかじゃないけど……さ、流石に、それは……………!!？」

うん、知ってる。文香がいるのに他の女とラブホなんて俺だって嫌だ。

「じゃ、歩くしかないな」

「ええっ!?？あ、歩くって、この雨を!?？」

「早くしないと晩飯の時間に間に合わない。間に合わなかったら、自腹切ってホテルのクソ高いお土産コーナーでなんか買って行かないといけねーんだぞ」

「か、帰りに何処かに寄って行くのは？」

「体が濡れてなきやそれもありだけど……間違いない足は濡れるから」

「むう……………」

まあ、もう少し雨が大人しくなってからでも良いけど……。その場合は、晩飯はホテルの購買になるが。

「……………ま、多田さんに任せるわ」

それだけ言って、スマホを取り出した。三村さんは先生に伝えてくれているだろうけど、さっきとは状況が変わったため、自分でも連絡しておこうと思った。

「……………あっ」

また文香から電話来てる……。でも、雨の音で声とか聞こえないよなあ。メッセージで良いや。

鷹宮千秋『雨音で聞こえないので文面で失礼します』既読  
だから既読早えーって……。

鷹宮千秋『ご心配なく、今帰宅中です』既読

ふみふみ『あとどれくらいで着きますか?』

や、だから分からないって……。まあ、不安なんだからそういう質問が来るのもわかる。

鷹宮千秋『1時間以内に頑張ります』既読

ふみふみ『いえ、頑張らなくて良いので、とにかく気を付けて下さい』

文香あ……。泣きそう。優しい人だ……。

鷹宮千秋『あなたのために帰って来ます』既読

あれ、返事がない。多分、画面の向こうで悶えてるな。可愛い。

俺はスマホに入ってる文香写真集を見た。寝てる文香、抱き枕で寝てる文香、寝ながら親指を小さく啜える文香、本に涎を垂らしながら寝る文香、胸元がはだけて寝てる文香。

よし、エネルギーのチャージ完了、今すぐにでも出れる。あ、でもその前に先生に連絡を……。あ、ダメだ。携帯の充電がやばい。ナビなしだと帰れなくなるし、電話は無理だ。

「よっし」

多田さんが立ち上がった。心なしか、雨が若干小降りになった気がする。

「行こう！鷹宮！」

「ん？ああ」

そう言って階段から下りようとしたが、その足が止まった。さっきより水位が上がってる。脛の三分の一くらい濡れそうな感じだ。あー、これは女子は嫌がるよなあ。まあ、ホテルに到着すれば風呂に入れるとはいえ。

……。仕方ないか。行け、と言えば気にせずに行くだろうけど、基本的に良い人な俺は

俺は折畳み傘を畳んで鞆にしまうと、多田さんの前でしゃがんだ。

「んっ」

「……え、何？」

「背中、乗れよ。足、濡らしたくないんでしょ？」

「えっ、で、でもっ……!」

「平気だ。こう見えて一年前はバリバリの剣道部だったんだから」

「え、嘘だ」

「おい、どういう意味だそれ」

「見えない」

ストレート過ぎるだろ……。上杉達也かよ。それで甲子園制覇するの？

「いや、足濡れても良いならいいよ。だけど、なんかすごい嫌そうだったから……」

「……でも、重くない？」

「……女性を重いと言ったら彼女に殺されるんで」

「……良い心掛けだね」

多田さんは俺の背中に乗った。

「あ、傘さしてね」

「分かってるよ」

コンビニで買ったビニール傘を多田さんはさした。

LONEの通知を切ってスマホを手渡した。

「ルート案内よろしく」

「う、うん……」

それだけ言うと、歩き始めた。

「………ね、鷹宮」

「? 何？」

「後で、LONE交換しない？」

「? 良いけど？」

×

× ホテルに何とか到着した。と、いうのも、雨がかなり小降りになっ

た辺りで道路の水が踝くらいまで引いたからか、タクシーが動くようになり、途中で乗せてもらったからだ。

そのままホテルまで直行。到着した。金を払い、ホテルの中に入ると、フロント前のロビーのソファで教員が何人か待っていた。

気付いた教師が駆け寄って来た。

「あつ、遅かったな！」

「すみませんね、迷惑かけて」

「いやいや、無事で何より。そっちの子は………たつ、多田李衣菜!!」

「ああ、同じホテルに泊まってる子です。偶然一緒になつて」

「一緒だったのか。向こうの学校でも一人いないって言うからもしかして、と思つたが……。まあいい、とりあえず李衣菜ちゃ……多田さんは向こうの教員に挨拶しておきなさい。鷹宮は風呂入つて来なさい。食堂に鷹宮の分の食事は用意してあるから」

「マジですか。すみませんね」

「せっかくだから、多田さんと一緒に食べるか？」

「えっ?」

俺はチラツと隣を見た。多田さんもこつちを見ると頷いた。

「はい、じゃあせっかくなので」

「では、まずは俺にサインしてから東棟に戻りなさい。食堂はそちらの食堂で構わないよ。良いな? 鷹宮」

「はあ」

「はー………え? サイン?」

「このおっさんもちやつかりしてんなー」

多田さんは言われた通り紙にサインして東棟に戻った。先生はサインを眺めながら、俺の頭に手を置いた。

「鷹宮」

「なんすか?」

「よくやった、今期の成績上げてやる」

あんたそれで良いのか。

言われた通り、風呂に入ってから東棟の食堂に向かった。まだ、多田さんは来ていなかったが、既に二人分の食事が用意されていた。

「………腹減つたなあ」

まあ、多田さんが来るまで待つけどな。

そんなわけでボンヤリしていると、食堂に誰かが入つて来た。茶髪の女の子、だが多田さんではない。三村さんだ。

「あ、三村さん」

「！ 鷹宮くん！良かった……帰ってこれたんだ……!!？」

「まあ、なんとか」

「もう、心配したよ……。ごめんね、私がちゃんと見てれば……」

「いやいや、逸れた俺が悪いから。気にしないで」

「う、うん……」

そうは言っても、三村さんは気にしているのか俯いた。仕方ないので、俺はデザートのプリンを手にとって放った。

「それやるから、気にするな」

「へっ!!？い、良いよ！もらえないよ！」

「そんな嬉しそうな表情して言われてもな……。何、デザート好きなの？」

「へ？う、うん。好きだけど……」

「とにかく、逸れたお詫びに貰ってよ」

「……………じゃ、もらうけど……。あ、隣座っても良い？」

「良いよ」

三村さんは俺の隣に座った。

「それで、大丈夫だったの？」

「何が？」

「いや、帰り。雨降ってたし、心配だったんだから本当に」

「何とか帰って来れたよ。スマホの充電もギリギリ保ったし」

今は部屋で充電中。

「それに、もう一人と一緒に帰って来てたんだ」

「？ 誰？」

「いや、うちの学校じゃないけど、絶対三村さん知ってるよ」

「え？私も……………？」

「ああ」

どうせここに来るし、別に問題ないよね。っと、そうじゃん。ここに来るんじゃない。

「それよりさ、その人の前で俺の彼女の役をやって欲しいんだよね。三村文香って名前で」

「へ？あ、そう。それ気になったの。何なの？」

「後で全部話すから頼む。今回だけ」

「……ま、まあ良いけど」

よし、助かった。

すると、ようやく多田さんが食堂に現れた。

「お待たせー……って、アレ？」

「あ、多田さんっ。この人が俺の彼女の……」

「あれ？李衣菜ちゃん？」

「へ？か、かな子？」

「……えっ？」

え、何。知り合い？

俺の疑問をよそに、二人の会話は続いた。

「なんでかな子がここに？」

「李衣菜ちゃんこそ、なんで……？」

「私はただの修学旅行だけ……」

「なんだ、私もだよー。一緒だったんだー」

「ねー、知らなかった」

……あれ？これ相当ヤバイんじゃない？……二人が知り合いじゃあ、三村文香の偽名は使えない。それどころか、多田さんはさつき鷺沢文香に勘付いてすらいたよな……。このままでは……。そんな事を考えていた時だ。今、一番来て欲しくない人の匂いを俺の鼻が嗅ぎ取った。

「……ここから千秋くんが私の名を呼ぶ声が聞こえたのですが……あれっ？」

文香（本物）がここに来てしまった。



## ふみふみの修学旅行（1・2日目）

羽田空港。そこに文香はやって来た。今日は千秋が修学旅行のため、文香も付いて行って、向こうでサプライズしてやろう、と思った次第だ。その為、大学はサボった。

プロデューサーに何とか北上のフィギュアで、トライアドプリムスの撮影に同行させてもらい、楽しみ過ぎて鼻歌を歌ってる文香であった。

集合場所に到着するなり、プロデューサーの姿が見えたため、文香は挨拶した。

「…………スラマツパギ」

「スラマツマラム」

「…………私で最後ですか？」

「ああ、行こうか」

「…………はい、お待たせして申し訳ありません」

「いいって」

千秋の写真を見てニヤニヤしていた、とは言えなかった。

出発までの間、文香はトイレに行ってからスマホをいじっていた。

千秋からLINEが来たので、返事を返していた。

大学の話をしていると、突然写真が送られてきた。飛行機の写真だった。

鷹宮千秋『飛行機めっちゃある』既読

ふみふみ『すごいですね』

ふみふみ『千秋君は、飛行機のパイロットになりたいとか思ったことありますか？』

鷹宮千秋『ないですけど』既読

鷹宮千秋『なんで？』既読

ふみふみ『いえ、男の子は大体、そういうのに憧れると聞きましたから』

まあ、千秋くんのことだから絶対ないだろうなあ、とは思っていたが。でも、もしパイロットになりたいと思っていたのなら、それはそ

れで可愛いので妄想が捗るので良かった。

鷹宮千秋『あー俺はガキの頃から剣道やってましたから』既読

鷹宮千秋『侍になりたいとか思ってた。銀魂読んでましたし』

既読

パイロットより酷かった。

ふみふみ『その頃からアニメオタクだったのですね』

鷹宮千秋『いやジャンプコミックくらい読むでしょ』既読

ふみふみ『私は読んでませんよ』

鷹宮千秋『それは読書オタクだからでしょ?』既読

そう言われ、少しムツとした。凶星だったからだ。

ふみふみ『まあ、小学生の頃から書は読んでいましたが……』

ふみふみ『オタクと呼ばれる程ではありません』

鷹宮千秋『いやいや、バイト中に本読んでる時点でお察しでしょw』

既読

ふみふみ『むっ、違います』

鷹宮千秋『江戸川乱歩賞受賞作を2〜10作目を答えなさい』既読

ふみふみ『ハヤカワポケット、猫は知っていた、濡れた心、危険な

心、6回目は受賞作無し、枯草の根、大いなる幻影、華やかな死体、孤

独なアスファルト、蟻の木の树下』

鷹宮千秋『へー、6回目受賞作ないんだ』既読

「……………」

意地悪くカマをかけられて少しイラつとしたが、まあそのくらい良  
いかなって思ってた返事をしようとしたが、少し離れた場所から「文香  
さん!」と声が掛かったので、そっちに向かった。

「ね、これ可愛い?」

奈緒がストラップを差し出した。

「……………確かに、可愛いですね」

「これさ、鷹宮のお土産にしたら?」

「えっ」

いや、お土産も何も沖縄にいるんだけどね……とは口が裂けても言  
えなかった。

「……いえ、千秋くんには別に……」

「いやー買って行つてやれよ。五日間も一緒にいられないんだから」  
「……」

どうしよう、と文香は思ったが、まあ買って行つても良いと思って  
買って行くことにした。

××  
那覇空港に到着し、文香はまず辺りを見回した。修学旅行生の集団  
を探した。学生服だらけなので、すぐに目につく……と、思ったら本  
当にいた。

あの中から千秋の姿を探さなければならぬ。だが、ジツと見てた  
らストーカーに思われるかもしれないので、お土産屋さんから観察す  
る事にした。

「……いない」

おかしい。群れの中にいない。探してる間に、修学旅行生達はバス  
に乗り込んでしまったので、文香は慌ててタクシーで跡を追った。

千秋のしおりを（勝手に）コピーしておいたので「前の車を追つて  
ください」なんてドラマみたいな台詞を言う必要はなかった。

しばらく移動し、首里城に到着した。

「……ここが首里城ですか……」

タクシーの運転手にお金を払い、学生服連中の後を追った。する  
と、一番後ろで歩いている奴の姿を見つけた。女子生徒に肩を借りて体  
調悪そうに歩いている奴。

「………千秋くんだ」

なんで女子生徒、それも三村かな子の肩借りてんの？ゴオツと嫉妬  
の炎のイノケンティウスだったが、もしかしたら体調を崩したのかと  
考え直した。

だとしたら少し心配だが、しおりによるとここで記念写真を撮る。  
それだけ撮ってあとはバスで休むつもりかもしれない。だとしたら、  
千秋と話せるかもしれないし、少し楽しみになってきた。

若干、ウキウキしながら待っていると千秋のクラスの写真撮影になっ  
た。

「アークスダンスのポーズとりましょう！」

「は？え、どうした急に。てか、二人じゃキツくね」

「せーのっ！」

「ゆゆ式OP！！？」

二人揃って「ps02！」のポーズを決めた。完全に元気にしか見えなかった。

またしても嫉妬の炎が火拳のエースだった。むしろ「いてつくはどろ」かもしれない。それが千秋まで伝わったのか、ビクツとしてこっちを見た。

だが、クラスメートとの思い出を作れと言ったのを思い出した。例えばアイドルが相手でも、クラスメートなのは変わらない。

耐えよう、そう思った時、電話が掛かってきた。

「……はい、もしも」

『文香さん！！？どこにいるの！！？』

加蓮からだった。そういえば、一切許可をもらわずにここに来てしまった。冷や汗を流しながら答えた。

「……えっと、首里城公園です……」

『何でそんなところにいるの！！？修学旅行か！早くこっち戻って来なさい！！？』

「……ごっつ、ごめんなさい……」

『まったく……！今、私達空港だから。すぐ戻って来なさいよね！！？』  
そこで電話は切れた。

×文香は仕方なく首里城から出てタクシーを拾った。

×

×ホテル。トライアドプリムス+文香の部屋。さつき、千秋と話してから三人の態度は一変した。

文香がここに来た理由を完全に察した三人に質問攻めにあっていた。

「で、どこまでヤツたの？」

突然、アイドルとは思えない質問が加蓮から飛んできた。

「……どこ、どこまで、とは……」

「だからー、ゴールインしたの？最後まで」

「ご、ゴールインって……………」

顔を赤らめて俯く文香。

「……………そんな、まだ、ですが……………」

「へえー、意外」

「意外でもなくない？鷹宮くんって、そういうの固そうだし」

凜が言うと「あー確かに」と加蓮は呟いた。

「でも、キスくらいはしたんでしょ？」

「……………それは、しましたけど……………」

「どんなキス？タイプなの？」

「……………あの、言いませんよ？私は」

「えーなんでよー」

「……………そ、それは……………だって、千秋くんと、二人だけで……………共有したい、ですし……………」

顔を赤らめてポツリポツリと言うと、三人はその姿の文香を見て顔を赤らめた。

「……………かわいい、文香さん」

「ふえっ!?？」

「ね、天使かな？って思った」

「成就してるのに恋する乙女だったな」

「な、なんですか！三人で私をからかって！」

もうっ、と文香は頬を膨らませた。

それを見て、凜は微笑みながら声をかけた。

「ごめんね、文香。それよりさ、明日はどうするの？」

「……………明日、ですか？」

「せっかく、鷹宮くんを追っかけてここに来たんだし、一緒に観光してきましたら？」

「そうだよ。それなら、鷹宮も喜んでくれると思うけどな」

凜と奈緒にそう言われ、文香は首を横に振った。

「……………いえ、明日は千秋くん、班行動ですので無理です。明後日もクラス行動の後に班行動、明々後日から自由行動ですので、その時にご



「…………雪ノ下さんみたいですネ」

「…………誰？」

「凜は知らないと思うぞ。今度、原作貸してやる」

そんな話をしながらソーキそばを啜った。

すると、凜がボソツとつぶやいた。

「そういえば、ソーキそばの『ソーキ』って何だろうね」

「あー確かに。日本の食べ物なのにカタカナ使ってるし」

「ちよつと、ググってみるか」

「…………ソーキとは梳の訛りで、豚の肋骨が櫛に似た形状であるため、あばら肉もソーキと呼び習わすようになった、そうですね？」

「へえ、文香さん流石に詳しいな」

「…………はい。一通り沖縄の事は調べましたから。千秋くんはどうせ調べないと分かっていましたので」

「あいつは本当にダメだな…………」

「じゃあ、めんそーれってどういう意味なの？」

「…………それは『いらつしやい』という意味です。このくらいは、本を読んでも自然と覚えられますから」

「そういえば、文香って文学少女だったね…………」

決してオタクアイドルではない事を凜は思い出していた。

加蓮がそばを啜ってから呟いた。

「でも、それなら文香さんと修学旅行とか行ったら楽しそうだなー」

そういえば、文香さんが高校生のときはどうだったの？修学旅行」

「…………私の高校は、アメリカへ行ったのですが…………」

「海外!?？すごい！」

「どうだった!?？アンジェリーナ・クリドゥ・シルズとかいた!?？」

「奈緒、静かに」

そう聞かれたが、文香は申し訳なさそうに俯いて呟いた。

「…………いえ、その…………現地で買った本を一生懸命和訳しながら楽しんでいたら、いつの間にか一週間経って…………」

その台詞に、全員気まずそうに目を逸らした。千秋も千秋だが、文香も文香だな、と、思った。

××

撮影が終わり、トライアドプリムスと文香はホテルに戻って来た。伸びをしながらホテルの部屋に向かう途中、修学旅行生達が食堂に向かうのが見えた。

「で、結局……なんだっけ？鷹宮？は帰って来たの？」

「帰って来てないんじゃない？部屋にいなかったし」

「あーあ、外雨降ってんのに。あいつ死ぬんじゃない？」

「それワンチャンあるわ」

それを聞いて、加蓮も凜も奈緒もうわあ……と引いた。千秋、学校でどんな扱い受けてんの？みたいな感じで。

とりあえず、そんな小言は文香は聞きたくないだろうと思い、奈緒が文香に声をかけようとした。だが、隣に文香の姿はない。

「……あれ？文香さんは？」

「へっ？あ、いない」

「どこ行ったのかな」

そう三人が辺りを見回した時、「どういいうことですか？」と文香の声が聞こえた。前の学生に話しかけていた。

「……ちあ……鷹宮くん、どこにいるんですか？」

「へっ？だ、誰……？」

三人ともブフォツと吹き出した。すっかり前髪おろしてサングラスをしてるあたり、冷静なんだろうけど、それにしてもいきなり突撃するか？みたいな感じで。

が、その文香はしっかりと怒っていて、オーラで沖縄が凍てつきそうなおーラを出していた。

「……………え、何この人」

「ヤバくね？」

よって、アイドルと気付かれる事なく逃げてしまった。それを好機と捉えた三人は、文香に声をかけた。

「ち、ちよつと文香！落ち着いて！ね？」

「……………なぜ、逃げてしまったんでしょうか？」

「そんな劣等生の妹の優等生みたいなオーラ出してたらそうなるって



！」

凜と奈緒が落ち着かせると、別の学生っぽい女子が階段から下りて来るのが見えた。

「……………あの、すみません……………」

「だから落ち着いてって……………」

加蓮が止めようとした時、その女子は振り向いた。完全に見覚えのある顔だ。

「……………あれ？かな子、さん？」

「へっ？ふ、文香さん……………」

「あれ、かな子？」

「えっ、ええっ!?？凜ちゃんに、奈緒ちゃんに、加蓮ちゃん!?？」

「……………月火ちゃんはいませんかよ？」

「いや、全然言っていないです……………」

文香はさつきより柔らかい感じでかな子に聞いた。

「……………あの、それで……………鷹宮くんは……………」

「鷹宮って、鷹宮千秋くんの事ですか……………」

「……………はい」

「……………なんで文香さんが鷹宮くんを知ってるのですか……………」

「そんなの恋び……………」

「ち、ちよつとした知り合いなんだ！あたし達と鷹宮は！」

うっかりバラそうとした文香の口を押さえて、奈緒は誤魔化すように言った。

「そ、そうなんですか……………」

「それより、今あいつ何処にいるか教えてくれる？」

加蓮が横から口を挟み、かな子は少し俯きながら言った。

「それが……………私達と帰ってる最中に逸れてしまっ……………。それで、今歩いてこちらに向かっているみたいなんです……………」

かな子はホテルの入り口をチラッと見た。雨が降っていて、とても歩いて帰って来れるようには見えなかった。

すぐにスマホを取り出し、LONEを連呼する文香を放っておいて、凜が聞いた。

「どこにいるの？」

「分からないけど……多分、遠く」

不安そうに俯くとかな子の頭に奈緒は手を置いた。

「大丈夫だって。あいつ、馬鹿だけど馬鹿じゃないから、割とすぐに帰って来るって」

「う、うん……」

「それより、修学旅行中なんだろう？早く食堂行かないと怒られるぞ」

「そ、そうだね。じゃ、また後で」

かな子は小さく手を振ると、トボトボと肩を落として食堂に向かつて歩き出した。

どうしよつか、みたいな感じで奈緒、凜、加蓮が顔を見合わせると、文香の大声が響いた。

「千秋くん!?どこで何してるんですか!?」

即座に三人とも耳を塞いだ。

「キーンと来た」

「今、耳にキーンときたよ」

そう呟く凜と加蓮を無視して、文香はしばらく問い詰めた。だが、「大丈夫なんで」を最後に電話を切られてしまい、シュンツと肩を落とした。

その文香の肩に加蓮は手を置いた。

「ま、まあ、とりあえず部屋に戻ろうよ。本人が平気って言うてるなら、私達に出来る事はないよ」

「……………はい」

四人は部屋に戻った。

加蓮や凜や奈緒がランプとかウノとかモンハンで盛り上がった中、文香は何度か電話をかけてみたが、全然出なかった。

その度に気落ちしていったが、ヴヴツとスマホが震えた。

「! 千秋くんから……!」

「お、返信来たの?」

凜と加蓮は s w i t c h、奈緒は 3 〇 S を置いて文香の持つてるスマホを見た。

鷹宮千秋『雨音で聞こえないので文面で失礼します』

「……………社会人？」

加蓮が呟いたが、次のメッセージが届いたため、誰も反応しなかった。

鷹宮千秋『ご心配なく、今帰宅中です』

「……………普通、彼女とのLONEでご心配なくとか使う？」

「使わない……………」

加蓮と凜がそう呟く中、文香は返事を返した。

ふみふみ『あとどれくらいで着きますか？』既読

鷹宮千秋『1時間以内に頑張ります』

ふみふみ『いえ、頑張らなくて良いので、とにかく気を付けて下さい』既読

そう返すと、加蓮と凜と奈緒は天使を見る目で文香を見た。すると、返信が来た。

鷹宮千秋『あなたのために帰って来ます』

文香的には少しホツとしたが、他三人はお腹を抱えて大爆笑を始めた。流石にフォロー出来なかった。

××少し元気になったため、文香も一緒になってゲームを始めた。四人でカマキリをフルボッコにしていた。

「あ、あのさ……………文香さん、上手過ぎない？」

「……………そんなことありません。千秋くんいつもやっていますから」

「ていうか、鷹宮くんがおかしいよね」

「私、今何もしてないんだけど」

そんな話をしてる時だ。文香の耳がぴくっと動いた。そして、立ち上がった。

「どうしたの？」

「……………今、千秋くんが食堂から私の名前を呼ぶ声が聞こえた……………」

「え？聞こえ……………え？食堂から？」

「正確な現在位置まで？」

「……………少し行ってきます！」

文香は部屋を飛び出した。  
数分後、修羅場った。

おとなしい奴ほどリアットが鋭い。

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ……!!

『俺が嘘をつくために彼女役になってもらった女が、嘘をつく対象だった女と知り合ってた挙句、本物の彼女が姿を現した』

な、何を言ってるかわからねーと思うが、俺も何でこうなったのか分からなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……とかどうかどうにかなってる多分。

修羅場とか土壇場とか、そんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ。もつと恐ろしい事が俺の身に降りかかろうとしている。

とりあえず、食欲ないしお腹痛いので僕もう帰ります。そう決めて逃げ出し、文香の横を通り過ぎようとした直後、横から文香の手が伸びて肘を曲げて俺の頭を挟むと、自分の脇腹に力任せに押し寄せた。すぐく密着してるのにちっとも嬉しくない。頭割れそう。

「いだだだだ！ちよつ、文つ……なんでっ……!!?」

「……いえ、逃げようとしていたので、何かやましいことがあるのでは?と思ひまして……」

グツ……この俺が、判断ミスをしでかすとは……!!?窓をぶち割って逃げるべきだった!

「ええと……それで、どうしてここにかな子さんと李衣菜さんがいらっしやるのですか?」

「それはごっちの台詞ですよ。なんで文香さんがここにいますか?」

いやっ……なんでお前ら普通に話してんだよ……。少しは俺の心配とかしろよ……。

「……私は、トライアドプリムスの皆さんの撮影のお手伝いについて来ました。北上のフィギュアを生贄に捧げて」

「私は修学旅行です」

「わ、私も修学旅行で……」

「あ、俺も修学旅……」

「……それは知ってます」

「グエツ……！に、にえあい！なああああらギヴギヴギヴ……！！？」  
パンパンと文香の手を叩くと、手を離してもらった。ドシヤツとその場に崩れ落ちた俺を文香は引きずって、元の椅子に座らされた。その隣に文香が座り、俺の向かいにある晩飯の前に多田さんが座り、文香の前に三村さんが座った。おい、なんだよこれ。家族会議？なんというか、十中八九俺が末っ子な気がするぜ……。

とにかく、ここにいる全員がそれぞれ持つてる情報を整理しろ。場合によっては、まだバレないし話題の運用を考えればいくらでも誤魔化せる。

「……………」

よし、いけるな。考えてみりや、現状は何故かアイドルが偶然ここに居合わせたただけだ。全員にバレなきや良いポイントを頭に置いとけばやれる！

とりあえず、話題を作れ。そこからこの三人の共通の趣味、p s o 2の話題に持っていければ俺の勝ちだ。

「えつと……悪い、腹減ってんだ。とりあえず、俺と多田さんは飯食ってても良いか？」

「……………ダメです」

「いやいや、頼むってマジで。こっちは歩いて1時間の距離を雨の中、歩いて来たんだから」

「そ、そうですよ、文香さん。途中から、私が足濡れないようにおんぶしてくれましたから！」

「……………おんぶ？」

うん、早速地雷踏んだ。話題をちよつと間違えた。

「……………おんぶしてもらったのですか？千秋くんに？」

「うん。……………あ、鷹宮。パーカー返すね」

最悪のタイミングで多田さんはパーカーを俺に返却した。それを見て文香から殺気にも似た眼力が飛んで来た。

「うん、そうだね。文香さん、二人ともお腹空いてると思いますし……………」

三村さんにもそう言われて、文香は仕方なさそうにため息をつい

た。

よし、良いぞ。このままなら p s o 2 に逃れる作戦は生きてる。文香には後で説明すりゃ良いだろう。今の文香はどう見ても冷静じゃないし。

と、いうわけで、飯を食い始めた。沖縄っぽく刺身とか出て来てとても美味しいです。なんの魚だか知らねーけど。

さて、ここからは話題選びは慎重にいかなくてはならないな。さっきみたいに誤爆したら終わりだ。そのためには、まず文香を冷静にさせなくてはならない。

だが、俺と文香の関係がバレないように文香を冷静にさせるには、文香のなんだかんだで押しに弱いあたりを責めるのは無理だ。

とりあえず、メッセージでも送るとしよう。

鷹宮千秋『後で諸々の事情は話すから怒らないで』既読

……あれ？文香、スマホ見てないのに既読ついたぞ？

ふみふみ『文香さんならスマホ持たずに出てったよ？by加蓮』

なんで持つて来てないの!?!あと、なんであつさりロック解除されてんの!?!いや、ロックすらしてない可能性も……!!?!

だが、ヤバイ。これじゃ文香が落ち着いてくれない……………。

「そういえばさ、鷹宮って彼女いるじゃん?」

突然の多田さんからの原爆。すると、三村さんが控えめに手を挙げた。

「あ、それ私だよ」

「……………はっ?」

「……………」

原爆じゃなかった。水爆だった。三村さんが誘爆させ、ついでに文香の周りの地雷にも誘爆した。俺を今にも殺しそうな勢いでギロリと睨んだ。うん、作戦変更。真実を全部話します。文香に嫌われたら元も子もない。

「うん、で本当は名前は三村文……………」

「待った!もう俺全部話します!話しますから怒らないで嫌わないで!!?」

立ち上がって三村さんを止めた。

で、説明を始めた。直後、三人は呆れたように額に手を当ててため息をついた。具体的に言うと、文香と付き合ってる事と、それがバレないように三村さんに彼女役と改名をお願いした事。

「……………なんていうか、あれだよ。鷹宮って」

「な、なんだよ……………」

「自分の首締めるの上手いよね」

「うぐっ……………」

「……………そうなんです。夏休みのクローネの撮影の時も、双子の弟とかわけのわからない嘘ついてましたし……………」

む、昔の話を掘り返すなよ……………！

「私もビックリしました……………。いきなり、三村文香に改名して彼女になれ、なんて言われて……………」

「……………すみません、かな子さん。私の彼氏が……………」

「い、いえ。別に迷惑したわけではありませんから……………。そもそも、ちゃんと面倒を見ていなかった私が悪いんですし……………」

「かな子、気にすることないよ。高校生にもなって逸れる方が悪いから」

「……………李衣菜さんの言えた台詞ではありませんけどね」

「うっ……………！た、確かに……………」

俺抜きでみんな盛り上がっちゃってまあ……………。俺は一人で黙々と飯を食った。お魚、美味しいナー。

「うぐっ……………！そ、そもそも俺も聞いてないぞ！三村さんがアイドルだったなんて……………」

「……………知らない方が悪いです」

俺の必死の言い訳も、文香によって断ち切られた。

すると、多田さんが確認するように聞いてきた。

「……………それで、さ。文香さんと鷹宮は、付き合ってる、んだよね？」

「ああ、バレたらもう開き直るわ。8月の後半から付き合ってるよ」

「まだ、付き合いたてなんだ……………」

「分かっているとと思うけど、誰にも言うなよ？バレたら文香はアイドル



辞めることになるかもしれないだし……」

「うん、分かってるよ」

「三村さんも頼むわ」

「うん。誰にも言わない」

まあ、ここはもう信用するしかない。口封じのために殺すわけにもいかないしな……。とりあえず、スマホに録音して言質も取ったし、大丈夫だろう。

すると、多田さんが飲み物を飲みながらニヤニヤして言った。

「でも、文香さんが惚れるのも分かるな」

「なんで？」

三村さんが聞き返すと、多田さんはニヤついたらままた続けた。

「だって、良い人だもん。普通、見ず知らずの人に傘とパーカーを貸して、雨の中おんぶなんてしてくれないよ？」

「……確かに、そうかも」

「でしょ？私、文香さんの彼氏じゃなかったら惚れちゃってたかもな」

「り、李衣菜さん……」

「冗談だって。人の彼氏は取らないよ」

ケタケタ笑いながら、また飲み物を飲んだ。

「……なんか、一方的に褒められるのは少し照れ臭いな。俺は何とか照れ隠しをするために、頬をかきながらボソツと呟いた。

「……別に、そんな感謝されるようなことしたわけじゃないから」

「……いえ、私も彼女としては鼻が高いです。ちゃんと、女性を見捨けないで助けてあげたのは、偉いと思いますよ」

「……」

文香にも褒められ、自分でも顔が赤くなったのがわかり、俺は目を逸らした。すると、三村さんまでもがニヤリと微笑んだ。

「あ、照れてる？鷹宮くんがそんな表情するの、珍しいね」

「……照れてない」

「照れてるじゃん。可愛いところあるんだね」

多田さんにも追撃するように言われ、恥ずかしくなった俺は誤魔化

すように頬をかきながら言った。

「いや、別に……そんな感謝される事じゃないって。何度かわざと背中を揺らして小さい胸の感触を味わってたし……」

直後、ふっと停電したように三人の表情が消えた。いや、多田さんだけは顔を赤らめて自分の胸を抱いた。文香と三村さんは、これでもかというほどの無表情で俺を見た。

そこで、ようやく俺は自分の失言を悟り、口を押さえた。控えめに言つてめちやくちや怖い。

「……………今の、無しで」

苦し紛れにそう言うと、文香が立ち上がり、俺の首根っこを掴んで椅子を後ろに倒して俺に尻餅を衝かせた。

「おごっぴり!? ケツが……天衝……!!?」

「……………お話があります。私の部屋に来なさい」

悶える間も無く引き摺られ、俺は食堂から無慈悲にも連れ出された。多田さんはそんな俺にあっかんべーっと舌を出し、三村さんは苦笑いで手を振っていた。

×この後、普通に地獄を見た。

×翌日、3日目の朝。俺は起き上がると、隣で文香が寝ていた。

「……………えっ?」

え、な、なんで……………?今、修学旅行中だよな?慌てて起き上がると、俺のベッドの隣のベッドでは神谷さん、向かいのベッドに寝てるのが渋谷さんで、その隣に北条さんが眠っている。えーつと……………何があつたんだっけ……………?

確か昨日は文香に部屋に連行されて……………すごく怒られて……………せつかく来たんだからトランプやろうってなって……………それで……………。

……………そのまま寝落ちしたのか……………?見た所、ここの部屋ベッド4つしかないから、文香のベッドで寝かせてもらってたのか……………?

「……………え、ヤバイやん」

早く自分の部屋に戻らないと……………!俺は慌てて部屋を出て行くうとしたが、服を引っ張られて動けない。文香が握っているのだ。

「ちよつ……！文香……離して……！！」

「…………ちあきくん……結婚、してください…………」

「それは良いけど手は離して！」

グツ…………今日は午前中クラス行動だから早く行かなきゃいけないのに…………!!？この人、腕力無駄に強いから……………。

「仕方ない…………！」

俺は寝てる文香ごと布団を被って、首筋を噛んだ。直後、文香の体から力が抜け、俺の手を離した。今回ばかりは文香の変態性に助けられた。

部屋を出て、大慌てで自分の部屋に戻った。

クラスメートからは「何こいつ？」みたいな目で見られたが、何とか間に合い、クラス行動に向かった。

「朝<sup>×</sup>からとんだハプニングだったなあ…………」

染み染みとそう思いながら、今帰仁城跡に来ていた。クラス行動は終わり、班行動である。まあ、班行動と言っても他の班も合同だが。

ここから見える景色はとて良い、と聞いていたが、まあ確かに良かった。ここから野球ボールを思いつきり遠投してみたい、と思う程度には。

だが、それ以上に不思議な事が起こっている。

「……………なんでいんの？」

「えっ？」

多田さんが俺の左隣で並んで歩いていった。

「私達は今日、午後は自由行動なんだ。ちなみに明日も」

「……………で、なんでここにいんの？」

「だからついてきた」

「いや、ついてきたじゃなくて」

ぞ。え、自由過ぎない？フリーダムガンダムだってそんな自由じゃねえぞ。

いや、でもどうせ理由を聞いても答えてくれないだろうし…………。それに、問題はもう一つある。

「で、なんで三村さんも手を握ってんの？」

反対側の右手は三村さんに握られていた。

「昨日、迷子になったばかりだし当然でしょ？」

「いやそんな子供じゃないんだから……」

あの、俺には彼女いるんだけど……。それ、君は知ってんだろ？ いや、嬉しくないことはないんだけどさ、流石に文香に申し訳ないというか……。

そんな考えが顔に出ていたのか、三村さんが澄まし顔で言った。

「じゃあ、せめて私の前で歩いて」

「あー……いやでも三村さんだって他の人と話したいんじゃない？」

「大丈夫。李衣菜ちゃんもいるし」

それで良いのか……。いや、もう良いのか。

「さ、それより満喫しよう！このよく分からない城を！」

「おー！」

「分かってないのについて来たのかよ……」

三村さんは俺の手を離して隣を歩いた。とりあえず、文香さんに隠さずに言おう。そう思ってLONEを送った。

どんな状況でも、事故なら裸を見てしまった方が悪くなる。

両手に花、これは全国の男子が羨ましがる最高の状況であろう。自分の両隣に可愛い女子をはべらせ、腕でも組んであれば肘でオツパイを突く事もできる。

俺は、今まさにその状態と言えるだろう。それも、二人ともアイドルだ。全国のファンに知られたら集団リンチにされるだろう。

だが、そんな天国的状态も、男の方に彼女がいれば全てが翻る。

「あ、サーターアンドギー売ってる!」

「食べよつか!」

その両手の花、多田李衣菜と三村かな子は俺の両サイドの手を引いて屋台に走った。いつの間にか、俺達と同じ班だった二人とは完全に別行動、ここまで自由にして良いのか?と思っただが、同じ班の二人だって別の班と合併してたし、別に問題ないだろう。

まあ、流石に予定通りの見学コースは外せないで、それを回る事は避けられないが。

サーターアンドギーを買って、近くのベンチに向かった。とりあえず両手に花を回避するために二人に先に座ってもらい、俺は端に座った。食べ歩き飲み歩きは日本人として最低のマナーらしいから、そこは厳しくしたい。

しかし、沖繩ってスゲエな。なんつーか、どこ歩いてても基本的に海が見える。

ボンヤリと外の風景を眺めながら、スマホを取り出して海の写真を撮った。すると、さっきまで三村さんと話してた多田さんが「おっ」と声をあげた。

「良いねえ、写真撮ろうか」

「へ?あ、いや別に……」

断ろうとしたが、言葉が止まった。そういえば、文香から言われたクラスメイトとの写真、まだ撮ってなかった。多田さんは違うけど

別に問題ないだろう。

「……じゃ、撮るか」

「あれ？意外と素直じゃん」

「うるせ」

一々、茶化すなよ……。

俺がスマホを構えると、多田さんと三村さんは頬がくっ付きそうな距離まで近付いた。

「鷹宮もくっ付かないと……」

真ん中の多田さんが俺の腕を引いた。お陰で、俺の肘は多田さんの胸に当たるが、多田さんは気にしている様子はない。肘をバレないうちに引っ込めた。ようやく三人が画面の中に収まったので、写真を撮った。

「……よしっ」

「いや、よしじゃないよ」

三村さんから不満そうな声が上がった。三村さんだけではなく、多田さんも不満そうな顔をしている。

「普通、撮る時は何か言うよね、李衣菜ちゃん」

「うん。私もいきなり撮られて中途半端な笑顔になっちゃった」

そう言う通り、二人とも苦笑いっぽい笑みで写真に映っている。

「え、なんかって……」

はい、ピーナッツって？でもそれは千葉人のやり方らしいからな……。

「やり直し。私が撮ってあげる」

俺の手からスマホを取った多田さんは俺の隣に移動した。まあ、自撮りする人は端っこじゃないと、撮れないからな。

で、再び俺は真ん中になり、多田さんがスマホを構えた。画面に入ろうと、二人は寄ってくる。いや、もう何も考えるな俺。煩惱よ、くたばれ。

「よし、撮れた。これ、私達にも送ってくれる？」

「おk」

返事をして早速、多田さんと三村さんに加えて文香にも送ろうとす

ると、二人は後ろの海を見た。

「ね、かな子。足だけ浸かってみない？」

「……良いね。沖縄の海なんて滅多に入れないし」

「え、ちよっ」

二人は海に向かって走り出した。俺は仕方ないので、近くのコンビニでタオルと足を洗う用の天然水を買って行った。

コンビニに到着すると、見覚えのある人が飲料水コーナーにいるのが見えた。

「…………あれ、北条さん？」

「…………あ、鷹宮」

昨日の夜から、北条さんと渋谷さんは俺の事を呼び捨てるようになってしまった。いや、別に良いんだけどね。

「何してんの？撮影は？」

「この近くでやってるよ。私は文香さんの靴下買いに来た」

マジかよ…………。世間って狭いなオイ。

「てか文香の靴下って？一枚いくら？」

「いやそういう意味じゃなくて。文香さんの足濡れて靴の中に水入ったから」

「ああ、なんだよ」

「いや、文香さんの靴下売ってるって思いつく方がおかしいけど…………」

「で、なんで飲料水のところにいんの？」

「ついでに飲み物買いたくて。みんなの分」

「ふーん…………。いや、そういう飲み物はプロデューサーさんとかが用意してくれてんじゃないかねえの？」

「昨日のうちに買った飲み物、部屋の冷蔵庫に入れたまま忘れてきたんだって」

何やってんだあの人…………。

「で、お金もらったからみんなの分買いに来た」

「へえ。あ、文香は紅茶が好きだよ」

「お、さすが彼氏」

うるせー。茶化すな。

「ていうか、鷹宮こそ何してんのさ。今日、班行動じゃないの?」

「んー、班員が足だけ海に浸かりに行つたから、足洗う用の天然水とタオル買いに来た」

「保護者みたいな事してるなあ……………」

俺もそう思う。

「けど、濡れた足じゃ店には入れないし、何れにしても俺が買いに来なきゃダメだったと思うよ」

「んー、確かに」

そんな話をしながら、天然水の大きいペットボトルを持った。北条さんも籠に飲み物を何本か入れていく。

「でも、良いの? 昨日迷子になつたばかりなのに」

「大丈夫でしょ。迷子になつても、一人でホテルに帰れるつて昨日分かつたし」

「いやそういう問題じゃないと思うけど……………。また文香さんに怒られるよ?」

それは困るけど……………。

「それなら、北条さんも早く戻つた方が良いんじゃないの。一応、アイドルだし」

「いや、奈緒がトイレにいるんだよね」

あ、一緒に来てたんだ。

「……………あー、あのさ。ずっと気になつてたんだけど」  
北条さんが唐突に言いづらそうに口を開いた。

「? 何?」

「鷹宮つて、いつまで私達の事をさん付けで呼ぶの?」  
「はっ?」

「いや、ホントに。私とか凜つて歳下じゃん?なのに、絶対さん付けるからさ」

「あ……………」

なんか今更変えづらいというか……………。というか、アイドルを呼び捨てつて馴れ馴れしくない?

「え、呼び捨ての方が良い?」



「うん、正直言う。なんか他人行儀だし。多分、奈緒とか凜とか……あとかかな子とか李衣菜も同じ事思ってるんじゃない？」

「……………分かった。まあ、気が向いたら呼び捨てで呼ぶよ」

「いや、今。練習」

「はあ？」

「だって絶対うむやむにするじゃん」

ぐっ、まあ、確かに……………！

「ほ、北条……………」

「加蓮」

「え？」

「加蓮って呼んで」

「……………いや、そっちは鷹宮って……………」

「そりや、異性で鷹宮を下の名前で呼んで良いのは文香さんだけだからね」

「……………恥ずかしいんだけど」

「ピュアか。文香さんは下の名前で呼んでる癖に」

「……………俺、二人が待つてるかもしれないから」

「逃がしやしないわよ」

ちゃんみおがノートを返してもらおうとしたらギュツと力を入れたゆっこの如く、腕を強く握られた。

「……………言わなきやダメ？」

「ダメ」

こ、こいつ……………！楽しんでやがるな……………！

「良いじゃん、前は『加蓮さん』って呼んでたんだし」

「……………そりや夏休みの話だろ」

「呼んでたことには変わらないよね」

「……………」

仕方あるまい……………。

「……………加蓮」

「うん、OK」

OKじゃねえよ。

なんか恥ずかしくて顔を赤らめると、最悪のタイミングでバカがトイレから出てきた。

「お待たせ加れ……あれ？鷹宮」

「おお、ちょうど良いタイミング。奈緒でも試してみなよ」

「へっ？」

「お前なんで今トイレから出てくんだよふざけんなよ」

「い、いきなりなんでなじられてんだ!?？」

が、北条さんは依然として俺の腕を握っている。

「……………奈緒」

「……………はっ？」

名前を呼ぶと、顔を赤くする神谷さん。

「なっ……………なんだよ、いきなり！」

いいや、もう言っちゃまえ。どうにでもなれ。

「奈緒。奈緒超可愛いよ奈緒。モッフモッフの髪の毛に頭埋めたい奈緒」

「い、いきなりなんだよ！やめろよ！」

「赤くなってる奈緒可愛いその太眉毛可愛いトライアドプリムスで一番身長小さいの可愛い」

「う、うるせー！やめろホント……………あっ」

「ツンツンしながらも顔赤くしてる奈緒可愛いアニオタ奈緒可愛いキラ信者奈緒可愛い」

「後ろー鷹宮後ろー！」

「へっ？」

言われて後ろを見ると、文香がガタノゾーアより禍々しいオーラを発して立っていた。

「あっ……………ふ、文香……………」

「……………こんにちは、こんな所でアイドルをナンパですか？千秋くん」

「……………」  
だ、誰かっ……………助けを……………！北条さんは……………ダメだ。完全に他人のフリで飲み物探してる。神谷さんは……………ダメだ。グリッターティガ探してる。

カタカタと震えていると、文香は俺に向かって手を伸ばした。

「……………少し、お話ししましょうか」

「へっ」

「……………拒否権も発言権も基本的人權ありません。来なさい」

「ちよっ、最後のあれば他のいらなくね!??ていうか、待つ、ごめんな  
や」

俺はコンビニのトイレに連行された。

×この後、メチャクチャ噛んだ。

×後から聞いたら、文香は加蓮と奈緒が遅いから迎えに来ていたらしい。  
い。

……………にしても、まさかコンビニのトイレで噛まされるとは……………。  
なんかいつもと違う場所だからか、文香いつもより息荒かったし  
……………。

いや、思い出すな今は。多田さんと三村さんの所に戻る前に、さっき  
までの事は顔に出さないようにしないと。

というか、名前呼びか……………。今まで考えた事もなかったなあ。  
まあ、確かに向こうがそう呼んで欲しいならそうした方が良いのかもしれないが……………。多田さんと三村さんで実験してみるかあ。

そんなこと考えながら、さっきの海に到着した。

「おーい、李衣……………」

声を掛けた直後、俺は固まった。

「も、もうっ！やったなー！」

「きやつ、ちよっ……………！それ！」

二人の遊びは、私服のまま水掛けっこへと進化していた。

「……………おい」

声を掛けると、二人は動きを止めた。

「何やってんだバカども」

ようやく冷静になったのか、俺の方を見てピタッと固まった。で、透けて下着が薄っすら見えてるが、さっきまでもっとエロい文香を見てたのでなんとも思わない。

なので、自分でも驚く程冷静に二人に行った。

「…………タオルと天然水買って来たから、それで軽く流して。その間、近くのユニ○口探しとくから」

「…………ごめんなさい」

いくら沖縄でも、11月にビショビショに濡れた服装のままでは風邪引くだろう。特に、多田さんは昨日も雨の中で歩け歩け大会だったし。

何より、服が濡れたままだとタクシーにも乗れない。

スマホで近くの服屋を探した。げっ、ユニ○口は全部A E ○ Nの中にしか入ってねーや…………。

…………もう俺のパーカーで良いかな。昨日みたいに雨降られた時のために、着てる分ともう一枚パーカー持って来てあるし。

「なあ、二人とも…………あれ？」

いなくなってる。と、思ったら少し離れた岩場の上で三村さんが辺りを見張るように立っているのが見えた。なんであんな人目の付かない場所に…………。

今着てる分と鞆の中の分のパーカーを持って岩場に向かった。

「ねえ、服んだけど俺のパーカーで…………あっ」

「は？」

「え？」

天然水で全身を流そうとしていた。つまり、多田さんは服と下着は脱いでその辺に掛けておいて、天然水を自分に掛けていて、三村さんはそれを周りの人がこっちに來たら何とか対応出来るようにするためにいるのだろう。まあ、俺の接近に一切気付かなかったけど。

まあ、そんな風に冷静に分析してる場合ではない。胸や股間は足と腕でラノベのカラーページのように隠れてはいるが、ほぼほぼ全裸である事には変わらない。よって、多田さんは段々と顔を赤くしていた。

ここは、用を終わらせて迅速に逃げるべきだろう。

「…………三村さん、近くの服屋見つからなかったの、今日は俺のパーカーを羽織って下さい」

「へっ？あ、う、うん？」

「じゃ、俺はあっちで待ってま」

「し、死ね変態イイイイイ!!？」

「ゴフツ」

背中を向けた直後、刺し穿つ死棘の槍並みの威力を持ったペットボトルが俺の後頭部に直撃した。

俺は前に倒れた。後ろから「うわああああん！」「り、李衣菜ちゃん落ち着いて！人来ちやう！」という会話を聞きながら、俺はとりあえず、謝り方を考えた。

×

×

俺の前を、魔王の恋人と駐在さんに怒られた時の勇者エミリアなみに怒った様子で歩く多田さん。俺と三村さんはその後ろを気まずそうについて行った。不機嫌な割に俺のパーカーはしっかり羽織ってんだよな、あの人。

「……………どうしよう、三村さん」

俺のパーカーを羽織ってるもう片方の三村さんに聞いてみた。

「……………いや、今回は鷹宮くんが悪いよ……………」

「待って。俺の弁明を聞いて」

「弁明？」

「そもそも、その水は足を流すために買って来たんだよ。天然水2Lが二本あっても身体は流すには足りないだろ」

「た、確かに……………」

「だから、天然水とタオル渡した時も、とりあえず足だけ流せて意味だったんだよ……………」

ていうか、こっちはそもそも全身濡れる勢いで遊んでるなんて思わなかったからね。

「……………そっか。じゃあ、一概に鷹宮くんが悪いとも言えないね」

「……………いや、まあ俺も三村さんがあんなプールの監視員みたいな事してたら気付くべきだったけどさ…。言葉足らずなのは間違いないし」

「でも、なんですぐに謝らなかったの？」

「いや、その……さつさと用を済ませて立ち去るべきかと思って……」

「とにかく、女の子の裸を見ちやっただし、謝った方が良いよ」

「……なんて謝るの？裸見てごめんなさいって？」

「……いや、普通にごめんなさいで良いと思うけど」

「……はあ、俺この修学旅行で何回謝ってんの？」

『あ、すみません』

『鷹宮千秋「ごめんなさい」既読』

『鷹宮千秋「唐突にすまん」』

『すみませんね、迷惑掛けて』

『マジですか、すみませんね』

『えつと……悪い。腹減ってたんだ。とりあえず、俺と多田さんは飯

食ってても良いか？』

『ちよつ、最後のあれば他のいらなくね!??ていうか、待つ、ごめんな  
さ』

7回か……。いや、昨日の夜中は文香さんにボッコボコにされてる  
間、5回は謝ってたから12回かな？何にせよ多いわ。

そんな事より、早く13回目の謝罪をしないと。

「あの、多田さん……」

「………何？」

あ、話は聞いてくれる辺り優しいわ。

「すみませんでした。まさか、その……全身を流してると思わなくて

……」

「……」

「ホント、マジで……まさか、その……足以外も流してると思わなくて

……」

「ーっ」

あ、顔赤くなった。ヤバい。

「と、とにかくホントすみませんでした！」

誠心誠意と勢いで頭を下げた。すると、多田さんはその場で足を止  
めた。

で、後ろを振り向くとボソツと呟いた。

「……………今回だけだから」

大きなホツとしたため息が俺から漏れた。後ろの三村さんも安心してくれたようで、同じようなため息が聞こえた。

「でも、文香さんには言うからね」

「えっ!!? なんっ……………!!?」

「当たり前じゃん。彼女いるのに人の裸見ておいて」

「待って! せめて自分で言うから! 密告される感じが一番怒られるから!」

「まあ、伝わるならなんでも良いけど」

とりあえず、その場で電話した。メチャクチャ怒られて、15回目の謝罪をした。

ロリコンは悪いことでも犯罪でもない、むしろ聖職者だ。

翌日、とうとう4日目。明日で沖縄旅行も終わりな分けだが、全然感慨深くない。むしろやっと帰れるーって感じ。1日目は飛行機酔い、2日目は雨の中女の子一人背負って強歩大会、3日目はコンビニで嘔んで海で覗いて電話で怒られて、ロクなものではない。

だから修学旅行なんて嫌だったんだよ……。まあ、そんな残念旅行も今日は違う。文香と沖縄デートだからだ。無料で二人で出掛けられるとか、唯一修学旅行で良かったと思える思い出だな。

まあ、別に沖縄に興味があるわけではないんだが。どちらかと言うと、文香とデート出来るって所が素晴らしい。この素晴らしい世界に祝福を！

そんな事を考えながら、少しウキウキしつつホテルの階段を降りていた。撮影があるということは、プロデューサーも沖縄にいる事になる。なら、ホテルでの待ち合わせはマズイだろう。との事で、待ち合わせ場所は近くのコンビニの前だ。

鼻歌を歌いながら階段を降りていると、スマホがヴヴツと震えた。

ふみふみ『申し訳ありません。昨日の撮影が予定より押ししてしまつたため、午後からでもよろしいでしょうか?』

「滅べ世界イイイイイ!!?」

ホテル内で絶叫し、「了解」と返信して、先生に「うるせえ」と怒られた。

しかし、文香と出掛けられないのなら、外に出る必要はない。今日の午前中は二トだな。

そう決めて部屋で寝転がった。どうせ、同じ部屋の連中は表に遊びに行ってる。一部屋を独占できるのだ。これはこれで美味しい。

……しかし、朝の8:00に待ち合わせしていたから、午後の何時までか知らないが暇になっちゃったな。



………そういえば、楽器弾けるとこあったつけ。今なら誰もいないだろうし、あそこで暇潰ししよう。

そう決めて、移動した。楽器の場所に到着し、キーボードの前に座った。ピアノもキーボードも似たようなもんだろ。

「………何を弾こうかな」

………とりあえず、テキトーに中学の時に好きだったG O e e e Nの曲でもやるか。まあ、キ〇キくらいしか弾けないけど。

そんなわけで、ピアノを弾く感覚でキーボードを弾き始めた。楽譜は頭の中に入ってる。頭良いからな。

「♪」

鼻歌を歌いながらキーボードを弾き、何とか終わった。割と覚えるもんだなーとか思いながら手をプラプラと振っていると、パチパチと拍手の音が聞こえた。

「？」

「お疲れ様ー、すごかったよ」

………え、なんで多田さんと三村さんいんの？

「本当にすごかった。ていうか、キーボード弾けるんだね」

「いや、頭に入ってる楽譜通り弾いただけだから。一番だけだし。てかなんでいんの？」

修学旅行しろよ、いや俺の言えた台詞ではないが。

「鷹宮くんも誘おうと思って」

「それよりさー…なんか弾いてよー別のー」

多田さんが興奮した様子で俺の目の前に顔を突き出した。

「えっ、なんで……」

「いやー、実は私も最近家でギター練習してるんだけどさ、中々上手くいかなくてねえ。ね、鷹宮くんてギターも弾けんの？」

「無理。あれはクソゲー」

ギター出来る人は絶対頭おかしいよね。こういう教育を受けたら出来るようになるのかな。

「私は弾けるよ？ギター」

へえー、多田さん楽器出来るんだ。まあ、たまにロックだなんだと

言ってるからな。

「へ？李衣菜ちゃん、ギター弾けるようになったんだ？」

「ひ、弾けるようになったんだよ！」

「ああ、弾けないのね」

「ひ、弾けるってば！もう少し練習すれば！」

「弾けないんじゃないか……」

何故変な見栄を張るのか……。

「い、いーじゃん！私はロックなの！」

「だからそれなんなの……。岩なの？硬いつて言ってるの？いやでも胸はそうでもなかつ」

「文香さんに電話しよっか」

「やめて冗談だからお願い李衣菜様」

何とか謝った。

「で、他に何が弾けるの？」

「他とか言われてもなあ……」

あとは弾けねえよ。猫踏んじやつたとか？

「楽譜があれば弾けるかもしれないけど……」

「楽譜はないかなあ……」

「だろうな。諦めてくれ」

大体、そんな人に聞かせられるほど上手くないし。

三村さんがキョトンとした顔で首を傾げた。

「ていうか、なんで鷹宮くんはここに居るの？文香さんとお出掛けじゃなかったの？」

「午前中は撮影長引いたらしくて。だから、ここで時間潰してたんだよ」

「そうだったんだ……。あ、もしかしてさっきの『滅べ世界』って……」

「……聞こえてた？」

「自販機の下の子供銀行のお金拾った長谷川さんの台詞だよね」

「……」

パクったわけじゃないんです。反射的に出ちゃったんです。

「じゃあ、私達もそれまで一緒にいようか」

「え、なんで」

「だって、鷹宮くん暇でしょ?」

「まあ、暇だけど」

「なら良いじゃない」

まあ、良いけど。てか、逆に二人は良いの? って意味なんだが……

まあ、二人が良いなら良いか。

「で、何する?」

「せっかくだし、楽器で遊ぼうよ」

「いや、構わないけど二人はそれで良いの? 遊びに行かないのか?」

「んー……なんというか」

「夏なら海水浴とかダイビングとか色々あったけど、今の時期じゃ海にも入れないし……」

「五日間は長過ぎるよね」

………こいつら、段々と俺の思考回路が移って来てないか? いや、絶対俺の所為ではないが。認めない。

「まあ、二人が言うなら何でも良いけど」

「おおー! ドラムある。ロックって感じるなー」

電子ドラムだぞそれ。てか君の言う「ロック」の定義が知りたい。

多田さんが楽しそうにドラムの椅子に座った。

「ね、ドラムは出来ないの?」

「出来ないって事はないよ。中学の時に音楽で少しやったし」

「おおー! 教えてよ!」

「言っても齧った程度だけだな。なんかよく分からんナントカビートって奴」

なんだっけな……。ていうか真面目に授業受けてなかったから、俺の出来ることが何なのかすら分かってないけど。

「それでも良いからさ」

「あ? えーつと……じゃあ、右手と左手をクロスして膝の上に置いて」  
「へ? う、うん」

「で、左手で一回叩く間に右足を二回踏んで、右足で一回踏む間に右手で二回叩く」

「……………はっ?」

これを教わったなー。懐かしい。両手と両足を別のリズムで動かすのが楽しくてマスターしたわ。

まあ、ドラム本体は叩いた事ないから、これが何なのか分からないけど。

「……………え、えつと……………左手で……………?」

「だから、左手で一回叩いて右足で二回踏んで右手で四回叩くんだよ」「意味が分からないよ!」

「こういう事?」

別の声が聞こえてそつちを見ると、三村さんが余裕でこなしていた。

「ああ、そういう感じ」

「か、かな子ちゃんってロックだったの!?!?」

「えっ?う、うん?」

いやいや、ロックとは程遠いだろ。おそらく文香以上の弾力と柔らかさを持つそのボディは色んな意味でロックとは程遠……………。

「えいっ」

「痛っ!?!?」

三村さんをボンヤリ見ていると、いつの間にか接近して来ていて俺の頬を抓った。

「今、いやらしい目をしてました」

「えっ?そ、そう?」

「文香さんに言いつけちゃおう」

「ま、待て待て待て! 冤罪は勘弁して!」

「冤罪じゃないよー。鷹宮の目、すごかったし」

た、多田さんまで……………。というか、なんだ? 性欲の抑えが効かなくなってるのか? まあ、確かに文香とはエロいことできないし、その癖アブノーマルなことしてるから性欲はある意味たまりやすいが……………。

ダメだ、もつと理性を持たないと。

「それで、鷹宮くん。これが何なの？」

出来たことが嬉しかったのか、あまり何か言われる事もなく三村さんは聞いて来た。

うん、でもその……ごめんね。

「それが分からないんですよね……」

「……………」

「……………」

二人の目線が急に冷たくなった。うん、ごめんね。こんなドラマを知ってるとは言わないよね……。

「さ、外に出ようか」

「そうだね」

「……………」

出て行く二人の背中を眺めながら、俺はスマホを取り出した。さて、もうピアノ飽きたし、ゲームやろう。

と、思ったら二人が戻って来て俺の両手を拘束した。胸に腕が当たってる。柔らかい。

「鷹宮くんも」

「行くよ」

「え、な、なんで……?」

「良いから」

「何なのお前ら。俺の事好きなの？」

聞くと、二人はかあつと顔を赤くした。

「つ……は、はあ?!? バカじゃないの?!? 全然違うから!」

「そ、そうだよ! 寝言も大概にしてよ変態!」

「え、何でそこまで言われなといけないの……」

「これはもう文香さんに報告だね」

「うん、むしろ密告する」

「待て待て待て! やめて下さい死んでしまいます」

「知らない」

「わかった! サーターアンドギー奢るから!」

「よし、行こうか」

「良いね」

「あ、あれ？あれえー？」

「こ、こいつら……！俺はため息つく他なかった。」

×

午後になり、俺は文香と合流し、沖縄観光を始めた。

……プロデューサーさんの運転する車の中で、凜、奈緒、加蓮、

三村さん、多田さんと一緒に。

助手席に座りながら、どうしてこうなった、と全力で頭を抱えていた。

「いやー、まさか李衣菜とかな子と鷹宮くんが三人揃って同じ修学旅行先にいるとはなあ」

「……そうですね」

文香が言うには、観光しようとしたらプロデューサーさんが「俺が案内してやる」となり、断ろうとしたがタクシー代とか浮くのに断るのは不自然だ、という事になり、結局みんなで来る事になった。

いや、ホントどうしてこうなった……。これじゃ本当にただの修学旅行だ。

さらに今回は文香達の行きたい場所に行くので、前に行った場所とかぶる可能性大である。

「はあ……」

「どうした？」

「いや何でもありません……」

まあ良いか。文香と出掛けられる事には変わらないし。

後ろでは、女子達がなんか色々と話している。

「しかし、鷹宮くん」

「なんですか？」

「随分とやってくれたね」

「？」

「うちの事務所、オタクの集まりになっちゃったよ。基本的にみんなps2やってる」

「……………」

いや、俺の所為じゃないだろ……………。じゃないよね？じゃないと思いたい、うん。

「ま、お陰で俺もオタク趣味は隠さなくて済んでるんだが」

「そういえば、このすば三期やるらしいですよ」

「楽しみだな」

「ゲーム買いました？」

「買った」

「俺今クリスにハマってます」

「俺はアイリス一筋だから」

「え、ロリコン？」

「違うから」

すると、後ろから加蓮が口を挟んだ。

「え、嘘だ。プロデューサー、莉嘉ちゃんを見る目ヤバいじゃん」

「ち、違うから！全然ヤバくなんかないから！」

「あーそれ私も前から思ってたよ。あと、悠貴とかプロデューサーのこと怖がってたし」

凜にもそう言われプロデューサーさんはガビーンって音がしそうなほどにショックを受けていた。

何と声をかけようか分からなかったが、とりあえず慰める事にした。

「……………安心してください、プロデューサーさん。俺も禁書は絹旗、のんのんびよりはれんちよん、ZZはプルツ、異能バトルは千冬ちゃんが好きですから」

「だ、だよな！別におかしいことじゃないよな！」

よし、元気が出た。すると、スマホがヴヴつと震えた。

ふみふみ『ロリコンさん、後でお話があります』

バックミラーを見ると、文香がニコニコしていた。目が笑ってないけど。

とりあえず、後で謝ることを決めた。

人を見た目で判断するな。女性も胸で判断するな。

俺や多田さんや三村さんはもうほとんどの沖縄の観光地を回ってしまった。逆に文香や凜、奈緒、加蓮、プロデューサーさんは今まで撮影だったから、海以外何処も見えていないらしい。

そういうわけで、まずは美ら海水族館にやって来た。2回目だというのに元気にはしゃぐ多田さん、三村さんとトライアドプリムスの三人の後ろを、俺と文香とプロデューサーさんは呑気についていった。

「元氣ですなー、あの人達」

「まあ、昨日まで撮影だったからな」

「いや、普通疲れてると思うんですけど……」

「いやいや、もう慣れたんだろ」

慣れたで済ませて良いのか……。

それと、さつきからソワソワそわそわしてる文香。すごい気になるんだよ。さつきからずっとチラチラ前の五人のこと見てる。その様子は非常に可愛いが、別に無理することはない。

「鷺沢さん」

「は、はいっ」

「はしやぎたいなら前の五人に混ざって来て良いですよ」

「っ？ち、違います。別にはしやぎたくないか……！」

「いや、いいから……。大学生ならまだまだこの手の施設ではしゃいでてもおかしくないですし、誰も子供っぽいなんて思いませんよ」

「……………」

すると、文香は少し考え込むように俯いた。あ、これは知ってる。あと一押しで行くパターンだ。

でも、ここは引くべきだろうな。このまま押せば文香が五人と合流するのは知ってるが、今日はプロデューサーさんが隣にいる。文香の扱いを分かっている、と思われるだけでも危険だ。

まあ、無理には言いませんが、と戦うとしたところで、文香が俯きがちに呟いた。

「……………いえ、その……女子高生の中に一人だけ大学生が混ざると



……その、浮きそうデ……」

あー……そういうことか。いや、待て。

「いやいや、高2が2人、中2が1人、小6が1人と普段一緒に歌って踊ってる人達が何言ってるんですか」

「っーあ、あれは仕事ですから……」

「とにかく、大丈夫ですよ。三村さんなんてアレとても高校生のサイズじゃ……」

「……………」

「……冗談です」

「おいおい、鷹宮くん。女の子の胸は小さいからこそ輝くのであって……」

「……………」

「……冗談です」

プロデューサーまで黙らせるとか文香パイセン半端ないっす。

「……………」もう、男の子って本当にえっちなんですから」

ため息をつきながら言う文香に、俺は誤魔化すように言った。

「……………」とにかく別に一緒にいてもおかしくありませんから。ね

？プロデューサーさん」

「あ、ああ。そうだぞ、文香。せっかく来たんだ、楽しんで来い」

プロデューサーさんにもそう言われた文香は少し考え込んだ後、  
渋々といった感じで頷いた。

「……………」分かりました。では」

楽しそうに文香は前の五人に合流した。その背中をボンヤリ見ると、プロデューサーさんが聞いて来た。

「鷹宮くんって、おっぱい星人なのか？」

「男はみんなそうでしょう」

「それは開戦の狼煙か？おっぱいは小さいからこそだろ」

「いやいや、何言ってるの？そう言いながら男はみんな巨乳に目が行くようになってんだよ」

「いやいやいや、じゃあお前ありすとかのおっぱい見たことある？平かと思いきや、若干膨らみのある胸……そう、それはまるでサハラ砂

漠の如く美しいんだ」

「サハラ砂漠って美しいか？」

ていうか、橘さんの胸見たの？それは流石にドン引きなんですけど。「それを言ったらね、巨乳だって素晴らしいんですよ。尻、腰、胸にかけての凹凸、かの有名な永仁の壺の如く美しいライン、そしてトップに存在する乳首と言う名の一輪の花、それはもはや頂上に存在するに相応しい存在感を発揮しているんです」

「永仁の壺に尻はないだろ」

一回だけ文香の胸見たっけなあ……。あれはすごかった。美乳とはまさにあの事だったんだなあ。

「そもそもな、男達のそういう巨乳に憧れる視線が世の貧乳を苦しめてる事に気付かないの？巨乳じゃなくても女性の胸は美しいんだよ。変に高望みしようとする男の性癖が負の原因なんだよ」

「だが、それと好みは別問題でしょう。大きいのが好きと言って何が悪い？むしろ、その同情で好まれる方が女性にとっては屈辱的であり、屈辱でなかったにしても向上心の低下に繋がるのでは？」

「しかし、成長には必ず個人差がある。どんなに努力しても大きくなるらない人もいる。それら全てを包み込む許容も必要ではないのか？」

「そもそも、許容とはなんだ？どこの目線で我々男達は胸を語っている？人というのは中身を見るべきなのであり、外見だけで女性を選ぶなど言語道断だ。失礼にも程がある」

「その通りだな。胸、というのはあくまで女性の外見のステータスだ。それでその人の全てを否定すること自体がおかしい」

「しかし、だ。人というのは少なからず内心的な事が表に出て来る生き物だ。何かしらの変化はあるんだろう。胸にもそれは影響しているのかもしれない」

「となると、胸の小さい者は控えめな性格なんだな。謙虚で常に周りの事を考えている、凜とかそうだな」

「しかし、巨乳の方も器が大きい方が多いですよ。鷺沢さんとか三村さんとか速水さんとか」

「つまり、両方素晴らしいということだな」

「そうですね」

一つの結論が出て、お互いに握手した。六人の後を追おうと思つてふと周りを見ると、周りの人達がゴミを見る目で俺とプロデューサーさんを見ていた。

「……………」

「……………」

その目線の中には、当然アイドル達も含まれていた。

「……………先に車に戻りましょうか、プロデューサーさん」

もうこの施設にはいられない。俺もプロデューサーさんも水族館から出た。

×

× 続いて到着したのは国際通りだった。プロデューサーさんはおつ

ぱい談義の罰として車で待機、俺は逆に連行されていた。俺的には女子六人について行く方がダメージでかいので、本当にあいつら俺の扱いを心得ている。

「じゃ、あたし達あっち見て来るから」

「1時間後には車に戻って来るように！」

というわけで全員が立ち去った。残ったのは俺と文香の二人だけ。完全に気を使われたなこれ…………。

まあ、( )厚意に甘えさせてもらおうかな。そう思つて声を掛けた。

「……………まあ、そういうわけなんで、一緒に廻りま」

「いやです」

えっ?こゝ、断られた?意外過ぎてちよつとビビるんだが…………。

「……………え、な、なんで…………?」

「……………鷹宮くんは、小さくて大きい女の子が好きなんですか?」

質問したら全く関係ない質問で返された。ていうか、小さくて大きい女の子って何?

「え、な、なんで?」

「……………車の中では、小さい女の子が好きと仰られていますよね」

「は、はい…………」

「……………水族館では、巨乳好きって言っていました」

普段なら「巨乳」の単語で顔を赤くするのに……相当、キテるなこれ……………」

「……………ですから、ロリ巨乳が好きなんですか？種島さんや刀藤さんみたいな……………」

「い、いやいやいや！そんな事ないから！」

「……………でも、先ほどまでの話を聞いた感じだと……………」

「それはアニメの話で……………いや、リアルでも巨乳は大好きだし文香だって大き」

「道の真ん中でセクハラですか？」

「……………すみません」

文句は言われたものの、満更でもなさそうだ。

「や、でも本当誤解だから。俺は現実も二次元も含めて文香が一番だから……………」

「……………それなら良いです」

なんとか許してもらえたようで良かった……………。さて、改めて何処行くかな。まあ、文香の行きたい場所に行けば良いかな。

「どこ行くか」

「……………そうですね。とりあえず適当に見廻りしましょうか」

「アニメイトあるけど」

「……………行きましょう」

そんなわけで、ようやく沖縄デートっぽくなって来た。

アニメイトに向かって歩いてると、「あっ」と文香が声を漏らした。店の表にシーサーのTシャツがぶら下がっていた。

「……………これ、可愛いですね」

「いや、シーサーって片方口閉じてるものだろ。なんで両方開いてんだよ」

「……………そうなんですか？」

ていうからこれ、女の人に着たらちようどオツパイの箇所口開いてるシーサーが来るんじゃない……………。

文香なら尚更大変な事になる気がする。

「それを買うのはやめよう。多分、卑猥な事になる」

「……………卑猥、ですか？」

「とにかく、行こう」

「は、はい……………あ、じゃああつちの店に入っても良いですか？」

今度は雑貨屋を指差して聞いてきた。

「良いですよ」

そう言うと、文香は楽しそうに店に入った。

今更だが、文香はアニメやゲームだけでなく読書家であり、アイドルだ。よくよく考えたら、こういう普通の女子が入りそうな店に入りたくなるのも当然だろう。

……………これからは、もう少し別のデートとか考えた方が良いかもなあ。いや、でも表に出ると周りの人に見られる可能性もあるし、やっぱ引き籠もってアニメとかゲームするしか……………。

いや、でもデートするからには文香にも楽しんでもらいたいし……………。正直、変装すればバレない気がしないでもないが……………。

「……………千秋くん。これとかどう思います？」

声を掛けられ、俺はそつちを見た。手に持つてるのは海ぶどうの置物だった。おい、その需要はなんだよ。

……………まあ、デートのことは今度考えるところか。そう決めて、文香の隣に歩み寄った。

キーホルダーをよく見ると、緑色のガラス製で出来てて、光に反射して割と綺麗に光っている。

「良いじゃん。なんかキラキラ光ってて」

「……………はい。でも、箸置きみたいなんです」

「へえ、そうだったんだ。何か問題が？」

「……………私、昨日海ぶどう食べたんですけど、苦手で……………」

なるほど……………。嫌いな食べ物箸置きは確かに嫌だわ。ていうか、800円は高いわ。

他の商品を見回っていると、店内にガチャガチャを見つけた。沖縄の名物キーホルダーガチャという奴だ。ラインナップはソーキそば、サトウキビ、ちんすこう、ゴーヤチャンプル、サーターアンダギー……………おい、食い物ばっかじゃねえか。

で、当然、沖縄の名物で食べ物ばつかなわけだから海ぶどうもある。  
「……………わっ、かわいい……………」

文香も気に入ったようで、財布から300円取り出した。  
「やるの？」

「……………はい。奏さんとありすちゃんにも買って行きます」

「ふーん……………」

律儀だなあ。まあ、キーホルダーは個人へのお土産に持ってこいだから分からなくてもないが。

……………俺にはお土産買って行く友達がいないからな。アイドルが何人かいるけど、向こうは忙しくて会う機会がないし、何人か現地にいるし。

300円を投入し、出て来た緑色のカプセルの中を文香は覗いた。

「……………」

「なんだった？」

「……………海ぶどうです」

「……………」

俺はそつと目を逸らした。

「ま、まあ、あと2回やるんだし、その中から欲しいものを取って余ったのを二人のお土産にすれば良いんじゃないの？」

「……………そ、そうですね」

そう言っつて、文香はガチャガチャを回した。赤と青のカプセルで、中身はソーキそばとゴーヤチャンプルだった。

「お、良かったじゃん。その二つは食べるの？」

「……………はい。両方とも大好きです」

そいつは良かった。

「……………むむむ、でも逆に悩んでしまいます。どちらを私のにしましょう……………」

真剣に悩んでる……………可愛い。そんな事を考えながら、俺も一回やった。

……………海ぶどうだ。いや、まあ俺は別に嫌いじゃないけど。カプセルをポケットにしまって文香の方を見ると、まだ悩んでた。どんだけ

美味かったんだよ。

「決まった?」

一応、聞いてみると文香は首を横に振った。で、「そうだ」と呟きながら質問してきた。

「……………千秋くんは何出ました?」

「俺?」

「……………はい」

「海ぶどうだけど」

答えると、文香は三つのカプセルに目を落とし、緑のカプセルを選んだ。

「……………これにします」

「は? いや待って待って待て。」

「それ海ぶどうじゃ……………」

「……………そうですよ? だから、それにしたんです」

「……………なんで?」

「……………千秋くんと、お揃いだからです」

満面の笑みを浮かべてそう言われ、俺は思わず目を逸らした。おい、それは反則だろ……………。

赤くなった顔を隠すように手で覆っていると、文香は青と赤のカプセルは鞆にしまい、緑のカプセルは開いてキーホルダーを出すと鞆に付けた。

「……………では、行きましようか。アニメイトへ」

「……………ういっす」

中途半端な返事をしてしまった。

旅の終わりは呆気ない。

そんなこんなで、午後の見回りも終わり、俺達はホテルに戻った。まあ、途中でレンタカーがパンクして大幅に遅れたが。

お陰で大浴場の時間は過ぎてしまった。だが、だからと言って部屋の風呂は嫌だ。ルームメイトから浮くから。

よって、俺は文香さん達の部屋のシャワーを借りることにした。ノックをすると、「はい？」と声が聞こえてくる。

ドアが開くと、加蓮が待っていた。

「どうも。風呂借りに来た」

「ああ、うん。上がって」

中が上がって、違和感に気付いた。

1、ニヤニヤしてる加蓮と凜

2、顔を赤くして俯いてる奈緒

3、何故かいらない文香

どう考えてもなんかあったら……。まあ、気にしないで良いか。

「文香は？」

「飲み物買いに行っちゃよ」

ふむ、なるほど。怪しい。まあ良いか。さっさと風呂入って部屋に戻って寝りゃ良いだけの話だ。

「あつそ。じゃ、風呂借りるな」

「ごゆっくりー」

加蓮に手を振られ、横にスライド式のドアを開いてバスルームに入った。

全裸になって俺は風呂場に入りました。

文香が湯船に浸かっていた。

「……………はっ？」

「えっ？」

すぐに真っ赤になる文香の顔、多分俺の顔も真っ赤になってる。

……………え、何これどゆこと？状況が全く飲み込めないんだけど



……。

「…………ち、千秋、くん…………？」

「…………ふ、文香…………。飲み物買いに行つたんじゃ…………」

「…………なんの話、ですか…………？」

なるほど。嵌められた。あいつら、余計なお世話にも程があるだろうコラ。

「…………すみません、俺出ますね」

「えっ…………」

切なそうな文香の声を無視して服を着て出て行こうとした。だが開かない。なるほど、閉じ込められたか。

まあ、それならここで待機してるしかないな。文香の裸を見ない為には、ここで待機して上がるタイミングで俺が風呂場に入れば良い。あ、それならタオルで体隠してもらわないと困るな。伝えておこう。

「文香、閉じ込められたから俺ここにいろわ。出てくる時にはバスタオル巻いて出て来て」

これがベストアンサーだろう。

…………で、なんで文香から返事がないんだろうな。不思議。

「…………あの、千秋くん」

「？ 何？」

「…………入つて来て、くれませんか…………？」

「…………はっ？」

こいつ今なんつった？

「…………えっ？」

「…………いえ、ですから…………私は、その…………気にしませんから…………一緒に、入りませんか、と…………」

…………何言つてんの？この人。

「…………本気で言ってるんですか？」

「…………は、はい」

「…………」

本気で言つてんのかよ…………。バカなんじゃないかしら…………。

や、別に嫌と言うわけではない、むしろラッキーなまであるんだが、

流石にそれはマズイだろ……………。

「……………」

「……………」

だが、ここで引き下がったら文香がエッチな女の子みたいって感じになっちまう。それはそれで良くないよなあ。せめて俺と一緒に入ればイーブンになるわけだが。でも、文香の職業的にも俺の立場的にもマズイよなあ。

大体あいつら、プロデューサーさんにバレたらどうするつもりだよ、と思つたが、プロデューサーさんがどんなにバカでも流石に女子部屋にノック無しでは来ないし、来たとしても文香が入つてると聞けば洗面所に顔は出さないだろう。考えられてんなあ、畜生め。

「……………千秋くん？聞いていますか？」

相当、勇気を振り絞つて且つ、恥ずかしさを振り払つて言つたからか返事を急かしてくる文香。

……………いや、やっぱそれはマズイだろ。特にここラブじゃないホテルだし。ドア一枚の向こう側にトライアドプリムスいるし……………。ていうか、あいつらマジで覚えとけよ。

とりあえず、無難な答えを返しておくか。

「文香」

「……………なんですか？」

「……………ごめん。ここで流石にそれは出来ない」

「……………そ、そうですか」

「で、でも、その……………なに？東京に戻ったら、考えなくも、ない……………」

「！」

「じ、じゃあ、俺しばらくここにいるから」

俺はポケットからスマホを取り出し、ゲームする事にした。とりあえずFGOでもやつか。じゃないと理性飛びそうになるし。

×さて、東京戻ったら速水さんに全力で相談しよう、

×

×翌日、修学旅行最終日。空港で俺は椅子に座っていた。多田さんは

別の飛行機、文香達も同じく別の便ということで、俺は一人でボンヤリしていた。

お土産買おうにも相手がいらない。アイドル達に買うのも考えたがそもそも会えないしなあ。あ、いや速水さんの分は買ったけど。

修学旅行の思い出を振り返ってみると、なんか結局いつもとあんま変わらなかった気がする。文香やアイドル達とただ何となく遊んだ感じ。まあ、つまらなかつたわけではないが。

「……………はあ」

思わず、小さなため息をつくとき三村さんがこっちに歩いてくるのが見えた。

「どうしたの？ 鷹宮くん」

「いや、疲れたなーって……………」

本当に。まあ、でもこれで残りのイベントは期末試験だけだ。それが終われば文香とイチヤイチャ出来るしな。

そう考えると、悪い気もしない。むしろ楽しみにも感じてくるものだ。いや、修学旅行が終わってから楽しみになるのもおかしい話だが。

「……………楽しくなかつた、かな」

三村さんが俯きがちに聞いてきた。あ、やばい。少し気を遣わせちゃつたかも。

「いや？ そんなことないよ。なんだかんだ言つて楽しかつたし」

「そっか、良かったー！」

パアツと一面に広がるひまわり畑の如く咲き誇る笑顔を見せる三村さん。流石、アイドルなだけあつてかわいい。この人、これだけかわいい上におっぱいもでかいんだから、さぞファンも多いんだろうなあ。

そんな少し失礼な事を考えてると「さて、」と話題を変えるように言った。

「鷹宮くん、少し良い？」

「あ？」

「会つて欲しい人がいるんだ」

「文香か？」

「……………そこは分かっても言わないで欲しかったな」

「……………ごめん」

呆れられてしまったぜ……………。

まあ、とにかく荷物を持って三村さんの後に続いた。うちの学校の生徒がお土産を選んでは、俺は一人で飛行機の見えるでつかい窓の前へ。そこに行くと、文香だけでなく加蓮、奈緒、凜、多田さんが待っていた。

「連れてきましたよ」

「……………ありがとうございます、かな子ちゃん」

「おおー、やつと来た。遅いよー」

「そうだよ、みんな待ってたんだぞ」

いやいや、何で責められてんの俺？よく分からないんだけど。

「ごめん」

謝っちゃったじゃねえか。何で謝ったんだ俺。

とにかく、話題を逸らすことにした。

「なんだよみんな揃って」

「いやーこんな機会そうそうないし、写真撮ろうと思って」

「は？写真？」

すると、今度はいつぞやのカメラマンさんが来た。

「悪い、遅れた。南斗水鳥拳の練習してて」

何その言い訳。バカなのん？するならそすんの練習にしろよ。

「いえ、ではお願いします。カメラマンさん」

「おう！みんな飛行機の前に立ちな！」

言われて、窓の前に並んだ。後ろには飛行機がいい感じに並んでいる。

右から凜、加蓮、奈緒、俺、文香、三村さん、多田さんの順番で並んだ。すると、文香がスツと俺の腕に手を絡めて来た。

「っ？」

「……………これくらいは、ね？」

耳元でそう囁かれた直後、カシャツとシャッター音が響いた。

なんやかんやあったが、これで俺の修学旅行は終わった。

## ふみふみの修学旅行（3・4日目）

3日目、千秋が額に手を当ててコンビニから出て行った後のコンビニ。奈緒と加蓮は文香に気まずそうに聞いた。

「……………二人でトイレで何してたの？」

「……………いえ、なんでもありません」

「いや、なんでもないじゃなくて」

今更になつて、コンビニのトイレで大胆な事をしてしまったなあ、と全力全開で後悔してる文香だった。

すると、「まっ、まさか……………！」と奈緒は一步後ずさった。

「トイレでしたのか!?? エロ同人みたいに！」

「……………? エロ同人？」

「奈緒、何言ってるの？」

聞きなれない言葉に文香も加蓮も首を傾げた。直後、まるでむっつりスケベがバレた男子中学生の如く、奈緒は顔を赤らめて目を逸らした。

「なっ、なんでもない……………」

「ねえ、奈緒もそのエロ同人っていうの持ってるの？」

加蓮の攻撃対象が奈緒に変わった。

「なっ、何だよ！持ってるじゃないって！」

「ふーん?じゃあ帰ったら奈緒の部屋探索しようつと」

「や、やめろよ！無いから！プリキュアもSEEDもナルトの同人誌なんか無いから！」

「あるんだ！」

ナルト、と言う言葉が出た直後、文香も一瞬で奈緒の前に移動して肩に手を置いた。

「ナルトの同人誌ってあるんですか!??」

「いきなりどうした文香さん!??」

「k w s k !」

「わ、分かったから落ち着け！」

何とか文香を落ち着かせ、奈緒は「とりあえず」と加蓮を見て言っ

た。

「加蓮は先に戻っててくれ」

「なんで!?!?」

「……………加蓮が聞くべき話じゃない。オタクの闇と言っても過言ではないからな」

「え?あ、う、うん…………?」

仕方ないので、加蓮は買い物を済ませてビーチに戻った。

で、奈緒はため息をついて説明した。

「えーつと……………まあ、その、何?あるよ?ナルトの同人誌」

「どんなのですか!?!?」

すっげー興奮してるなー、と若干引きながらも奈緒は確認した。

「えつと……………その、何?引かない?」

「引きません!」

「本当に?」

「本当に!私は千秋くんのごとで多少引くことがあってもナルトとキリトさんのことで引くことはありません!」

「その答えにあたしはドン引きなんだが…………。もう少し鷹宮に優しくしてやれよ…………」

そこを注意してから、奈緒はコホンと咳払いして言った。

「……………BL」

「……………はい?」

「……………BL」

「……………あの、聞こえないのですが」

「だから!BLって言うてんの!」

「……………びーえる?」

お婆ちゃん発音で返すと、奈緒はガクツと項垂れた。で、どうせ説明する羽目になるんだろうし、と思って説明を始めた。

「……………だから、その……………ボーイズラブの略だよ」

「……………ぼーいずらぶ、ですか?」

「ああ、その……………つまり、ゆるゆりの反対というか……………むしろガチ百合の反対というか…………」

「…………あの、結論を話していただだけませんか？」

「…………つまり、男同士の恋愛だよ」

「……………はい？」

キョトンとした顔で文香は首を傾げた。イマイチ理解してないのか、それとも本能的に理解しようとしなのか分からないが、その反応にイラつとした奈緒は焦れつたくなってヤケクソになった。

「だーかーらー！ナルトのウインナーをサスケのピーチにねじ込むんだよ!!？ローシ（自主規制）を塗りたくって、後ろからガンガンと腰を振（自主規制）」

「っ……？」

シーンとする店内。気が付けば、店内にいる人は全員、奈緒と文香を見ていた。

その視線に気づき、奈緒と文香は顔を真っ赤にした。

「……………とりあえず、お店を出しましょうか」

「……………だな」

店を出た。撮影現場に戻りながら、文香はボソツと呟いた。

「……………つまり、千秋さんとキリトさんが…………」

「やめてやれよ!!？」

「……………でも、私、気になります！」

「いや、そんな風に言われてもな…………。まあ、とりあえずあたしの同人誌を後で見せてやるから、妄想はそれ見てからにしろよ」

「……………持って来てるんですか？」

「……………お守りで。ナルト×サスケ」

「……………見せて下さい」

「あ、ああ…………」

×ホテルに戻って読んだ。満足した。

×

×翌日、水族館にて。プロデューサーと千秋が二人揃っておっぱい談義によって追い出され、文香はご機嫌斜めだった。

その文香に李衣菜が遠慮気味に言った。

「ま、まあまあ、怒らないであげてよ。男の人ならみんな胸に興味ある



のは当たり前だし、文香さんだって大きいじゃん」

「……………私は別に、胸のことを大声で話していたことに怒っているのではありません」

「? じゃあ、何に?」

「……………もしかしたら、私は千秋くんの好みからは外れているのかも、と思っってしまったのです」

「……………あー」

李衣菜は車の中でのプロデューサーとのロリコン談義とさっきのおっぱい談義を思い出してしまった。

それらを組み合わせると、単純に考えて千秋が好きなタイプは歳下巨乳女の子ということになってしまう。

「……………いや、でもそれはないと思うけど」

「……………そうでしょうか。千秋くんの好みは確かに小さい女の子なんです。WORKING!!?では種島さんが好きみたいです」

「そ、そっか……………」

「そこは『ちっちゃくないよ!』って言うところですよ」

「えっ? あ、うん、ごめんなさい?」

なんか謝ってしまった。

すると、文香はかな子を見た。ビクツと肩を震わせるかな子。

「えっ? な、なんですか?」

「……………かな子さん、身長いくつでしたっけ?」

「152cmですが……………」

「……………小さくて大きい女の子」

「ええっ!?!? な、なんで私を見るんですか!?!?」

「……………千秋くんと修学旅行同じ班」

「それは私から誘ったわけで、鷹宮くんは……………!」

「……………かな子さんが千秋くんの好みを知っていたとしたら?」

「ええっ!?!?」

「ち、ちよつと文香さん落ち着いて!」

慌てて李衣菜が間に入った。なんか騒がしい三人を遠目で見ながら、トライアドプリムスの三人は顔を見合わせた。

「……………どうする？アレ」

「……………とりあえず、文香さんのあの状態は『バーサークモード』と呼ぶ事にしよう」

「いや、そういう話じゃなくて」

「バーサークモードの文香さん面倒臭いね……………」

「あ、採用するんだ」

「とにかく、何とかしないと……………」

凜、加蓮、奈緒、凜、奈緒、加蓮と呟いた。最後の加蓮の呟きを聞くと、凜と奈緒は加蓮を見た。

「え、何」

「いや、この手の悪巧……………作戦考えるのは加蓮の役目でしょ？」

「だな。そういうの加蓮得意だし」

「待って。今、凜悪巧みって言いかけなかった？」

「かけなかった」

まあ、言われた通り加蓮には作戦があった。

「よし、じゃあこの後は国際通りに行くけど、二人とも良い？」

「？ 良いけど……………」

「なんで？」

この後、国際通りでスライド式のドアを食い止めるためのつつかえ棒~~×~~を買~~×~~いに行った。

~~×~~風呂場。閉じ込められた文香と千秋。文香は壁一枚向こう側に千

秋がいると思うと、どうしても心臓がバクバクとうるさかった。

既に湯船に浸かって20分経過している。いつもより全然長風呂である。

千秋を待たせてしまう罪悪感があったが、それ以上に恥ずかしさがあったため、どうしても上がることが出来ない。……………というか、千秋がほんの少しも覗こうとしないことが少し気に入らなかった。覗いて欲しいわけではないが、少しくらい興味持って欲しかった。

「……………」

今、何をしてるのか気になり、声を掛けてみた。

「……………千秋くん？」

「はい？」

呑気な声。「こいつ、全く私のこと意識していない」と1発で理解した。

「……………今、何してるんですか？」

「え？FGO」

すぐくムカついた。というか、どちらかと言うとMの文香的には、やっぱり少し覗いて欲しかった。

「……………千秋くん」

「？何？」

「……………千秋くんって、私のことどう思ってますか？」

「どうって……………超好きとか？」

「……………」

少し照れ臭かった。何の躊躇もなく言われ、顔を赤らめてお湯の中に顔を半分埋めた。

「……………え、なんですか急に？」

「……………いえ、その……………」

聞かれて、顔を出してから答えた。

「……………壁一枚向こう側に、お風呂に入ってる彼女がいるのに……………その、全然覗こうとしない、から……………」

「……………」

そう呟くと、千秋は黙り込んでしまった。

「……………あ、礼装落ちた」

その呟きが、文香の沸点を怒りがブチ抜いた。ザバアツと上がって、ドアを開けた。

ドアの向こうの千秋を見ようとすると、千秋はスマホから顔を上げようともしない。

「っ、ち、千秋くん！」

「……………何？」

「……………千秋くんは、私に魅力を感じませんか？」

「いや魅力しか感じないけど」

「ごつちを見てください！」

「嫌だよ！」

「何ですか!?? 国際通りでは私が二次元でも三次元でも4次元でも一番好きと言ってくれたじゃないですか！」

「だからこそだろ！」

「意味が分かりません！」

「だーかーらー！」

千秋はスマホからようやく顔を上げて文香を見た。

「ゲームに集中してないと襲い掛かりそうなんだっつーの!!?」  
「っ……………」

顔を赤くして千秋は怒鳴ると、文香の裸を見たことを自覚して慌ててスマホに目を戻した。それに気付き、文香もなんか恥ずかしくなつて、慌てて体を隠すように風呂場に隠れた。

洗面所の出口の扉の向こうからガタツと音がしたが、文香も千秋も構わなかった。

「……………じ、じゃあ、その……………私に魅力がないわけじゃ」

「んなわけないでしょう！大体、付き合う前からだけど無防備すぎるんだよーそのドスケベなボディを少しは自覚しろー！」

「あうう……………」

「さつき裸を堂々と見せようとして来た癖に恥ずかしがるな！」  
「っ……………」

文香は顔を赤くして俯きながら壁に隠れた。

「……………申し訳ありません、千秋くん……………。千秋くんの事も考えずに……………」

「いや、良いよ別に……………。俺も、襲わないようにするためとはいえ、態度悪かったし……………」

「……………でも、その……………私は、襲っていただけでも……………」

「バカ言わないで下さい。アイドルでしょう」

「……………そ、そうですか……………」

「とにかく、さっさと風呂交代してください。俺も早く部屋に戻らないと……………いや、怪しまれはしないや。存在認知されてないし」

「っ……わ、分かりました……」

と、いう過去最大規模の惚気話を扉の向こうで聞いていた三人は、とりあえずブラックコーヒーを買いに行った。

だが、まだアホな話は続く。攻守交代である。文香が上がり、千秋が風呂に入った。三人がコーヒーを買いに行ってしまったため、文香も外に出れない。つまり、今度は文香が大変だった。

千秋が風呂に入ってる間、文香は想像以上の性欲に襲われた。特に、昨日は奈緒のエロ同人を読んだばかりのため、男性器とはどういうものなのかを理解してしまったため、なんか尚更だった。

「……………」

千秋のもあんなんのかな、と思う度に頭を振って煩惱を打ち払った。

「ちっ、千秋くん！」

「なんすか?」

「スマホをお借りしてもよろしいですか!?!?」

「はあ?……………あつ（察し）。い、良いですよ」

「ありがとうございます!」

千秋が察した事を察する事なく、文香は千秋のスマホでゲームに集中した。

こうして、文香の修学旅行は終わった。

インターバル回という奴です。

修学旅行が終わった翌日、振替休日で俺は家でダラけていた。だつて疲れたもん。死ぬかと思つたわ。

とにかく、しばらく俺は家から出ない。絶対にだ。そう思つて部屋でのんびりしていると、ヴヴツとスマホが震えた。

ふみふみ『いつ一緒に風呂に入りますか?』

×俺は家を飛び出した。

×

×うちの高校ではないどこかの高校。その校門から速水さんが友達と思われる人達と出てくるのを見つけた。

声掛けづらかったが、それどころのピンチではないので無視して声をかけた。

「速水さん」

「えっ、た、鷹宮くん!?!」

とりあえず、友達の前なのでさっさと用件を言つてここから立ち去ろうと思ひ、ズカズカと近付いて肩に手を置いた。

「な、何よこんな所で……きやつ!?!」

「……………俺には、君が必要だ」

「……………はっ?」

「……………んっ?」

周りの友達からも声が漏れた。速水さん自身も何故か顔を赤くしているが、一切気にしないで俺は速水さんの手を引いて走り出した。しばらく走つてると、後ろから「ち、ちよつと!」と声が聞こえたので立ち止まった。

「なっ、何なのよいきなり!どうしたの!?!」

「速水さん!俺には君が必要なんだ!」

「は、はあああ!?!意味分かんない!何いきなり言い出してんのよ!?!」

「頼む!速水さん以外じゃダメなんだ!」

「ばっ、ババババカじゃないの!?!だっただだだ大体、文香とはどうす

るのよ!?」

「文香じゃダメなんだ!」

「まっ、まさか別れる気じゃ……!」

「頼む! 俺を助けると思ってる!」

「いいいい意味分らないわよ! 文香と別れるのは許さな」

「このままじゃ俺と文香が一線を越えることになるんだ!」

「せ、せめてあなたが文香をまだ好きというのなら二股って事では

……はっ?」

一瞬で真顔になる速水さん。

「………どういうこと?」

「実は、大きい声じゃ言えないんですけどね、俺と文香が一緒にお風呂入る事になりそうなんスよ」

「………文香と別れるって話じゃないの?」

「は?なんで別れるの? 喧嘩売ってるの?」

「告白して来たのは?」

「誰が告白したの?」

意味のわからない質問を連呼してくる速水さん。なんか夢でも見たのか?そして、俺が答えるたびに顔を真っ赤にして怒るのはなんですかね?」

「………鷹宮くん」

「何?」

「とりあえず、1発殴らせてくれない?」

「なんで!?」

「私、こう見えて結構鍛えてるのよね」

「おい待て。マジかお前。お願いだから待って。待って下さい」

「歯を食いしばりなさい」

「待って! 謝る! 謝るから待って」

速水さんの手が鞭のようになくなって、ノーモーションで俺の頬を打った。ヒュビシツツツツと風を切る音と、俺の頬を引っ叩いた音が混ざった音が響き渡った。

××

ブ○ンコベリーとかいう、異様に高いファミレス。そこで俺はなんでも言うことを聞くのと引き換えに速水さんに相談に乗ってもらった。無難、俺の奢りで。

何故か激おこの速水さんと自分の飲み物を（俺が）持って来て、早速相談をすることになった。

「……………で？話って？何なの？」

「……………あの、なんで怒ってるのでしょうか」

「早く話さないと帰るわよ」

「はい、すみません」

……………なんで怒ってるんだろう。いや、まあ確かにテンパっていたとは言え、友達と一緒にいたのに勝手に連れ出したのは悪かったと思うけど……………。

「……………いえ、そのですね……………」

で、文香と修学旅行中の話をした。少しお土産話や惚気話なんかを含めながら話した。

とりあえず、話を聞いてから速水さんは言った。

「……………あの、一つ良い？」

「何？」

「あなた、アイドルを引き寄せる能力者なの？ドルドルの実でも食べたの？」

「え？いや、ろうそく人間じゃないけど……………」

「かな子と李衣菜とも仲良くなるなんて……………あなたがアイドルに興味あれば心がびよんぴよんしてたろうに……………」

いや、それはまあ俺も思う。しかも、そのアイドル達がどいつもこいつも一癖も二癖もあるから幻滅することもある。頭にパツと浮かぶだけでオタク文学少女にわかロツクオタク巨乳スウィーツオタクキス魔のふりした処女ビツチオタクだからなあ……………。全員がオタクになってるのは俺の所為じゃないよね。

「あなた今、失礼な事考えていたでしょう」

「いえ、ナンデモ」

相変わらずニュータイプばりに鋭い人だ。そのうち金縛りして来



そう。

「ま、まあ、とにかくですね。一緒にお風呂入ることになりそうなんですよ。何とかならないかと思ひまして」

「入れば良いじゃない」

「いやダメでしょ」

「あなたから聞いた話だと、性行為をするのがダメなだけで、それ以外は別に構わないんでしょ？この前だって私の目の前で文香の首筋嚙んでたじゃない」

「あ、いやまあ、そうなんですが」

「何あれ、物語ごっこ？」

「違うから。てかその遊び楽しそうだな。今度誘ってみよ」

「子供か。ごっこ遊びに何を言ってるのよ」

「やる？羽川さん」

「やらない！やるなら撫子ちゃんが良い！」

「やらないのに所望すんなよ……。というか、そのキャスティングは無理がある。」

「ま、まあとにかく、助けて欲しいんだよ。どうしたら良いかな？」

「いや、だから入るしかないわよ。約束しちゃったんでしょ？」

「その通りなんだが……。でも、理性を抑えられる自信がないわ。好きな女の子が目の前で真っ裸でいるんだぞ？」

「……………なら、物語ごっこだと思えば良いじゃない」

「いやいや、どう見ても金髪吸血鬼どころじゃないボディだろアレ。思い込みにも限度があるでしょ」

「まあ、成長すれば文香超えるし、大丈夫でしょ」

「いや、全然大丈夫じゃないよね。何も解決してねーよ」

「ていうか何？さっきからアドバイスがテキスト過ぎるんだけど。まだ怒ってるの？」

すると、注文した料理がやって来た。速水さんのステーキと、俺のライス。俺の金だと白米しか注文出来ないんですよね……。ライス単品で注文した時の店員さんの顔ったらもうね。

つーか、速水さんも速水さんでこの時間からなんでそんなガッツリ

食つとんねん。

「もつと真面目に言ってくれ、頼むから」

「真面目に言っただけなの？」

「いいよ。むしろ真面目に言ってくれないと困るんだけど。こっちはな、言うことを何でも聞く約束を」

「水着で入れれば良いじゃない」

「……………」

全部解決した。そんな簡単なことなら相談に乗って貰う必要なかったじゃねえか……………」

俺はライスを速攻で食い終わると、財布を取り出した。金を置いて、俺は立ち上がった。

「……………俺帰るわ」

帰ってタイムアタックのハルコタンやろう。根絶やしにしよう。

そう思ったのだが、速水さんが俺の腕を引いた。

「待ちなさい」

「え、何」

「誰が帰って良いって言ったの？」

え、ダメなの？

「それより、今日は私の言うこと聞いてもらうんだから、ダメよまだ帰っちゃ」

「え、今奢ったじゃん」

「誰も一つなんて言っただけでしょ？」

「こ、こいつ……………まさかアニメ以外でそのハメを使って来る奴がいるとは……………」

「とりあえず、待ってなさい」

この事で、完食まで待機した。店を出て、伸びをする速水さんに聞いた。

「……………で、どこ行くの」

「決まってるじゃない、あなたは今日私の言いなりなんだから。精々、こき使わせてもらおうよ」

「……………マジ？」

「マジよ」

ズタボロになるまで振り回される事が確定した。

とりあえず、最初に連れて来られたのはボーリング場だった。

「……………なんで？」

「遊ぶからよ。さすがに奢りとは言わないから」

うーむ、やはりか。まあ平日だし安く済むだろ。

で、来たのはラウー。中に入り受付に来ると、見覚えのある髪が揺れているのが見えた。

「……………あれ、卯月？」

速水さんの視線の先には島村さんと知らない女子が二人いた。

「あつ、奏ちゃん」

「と、響子と美穂も一緒なのね」

「こんにちは」

「奏さんは……………」

どっちが響子さんでどっちが美穂さんだか知らないが、黒髪の方が俺を見るなり目を輝かせた。

「デートですか!?!?」

「違うわよ」

ありえねーよ。俺、彼女いるし。

「この人は鷹宮千秋くん。あなた達には『セルスリット』って言った方が分かりやすいかもじゃないわね」

「ああ! p s o 2 の!?!?!?」

えっ、分かるの? て事はアイドル?

「何故かうちの事務所のどれかしらのパーティーに参加している人ですか!?!?!?」

「私、一緒にやった事ある! テクターで支援したらお礼言われちゃいました!」

「ああ、私と美穂ちゃんと響子ちゃんと一緒にやってた時だよね? バルロドスが4回出て来た時の!」

と、三人が p s o 2 トークで盛り上がっている間、速水さんが俺に耳打ちした。

「…………卯月、美穂、響子と一緒にして事は、その時に文香はいなかったってことよね？」

「…………誘われて、断りきれなかったんです」

「…………黙っててあげる」

「…………ありがとうございます」

×

×

ボ×リングで完封した後、ラウーのゲーセンに来た。しばらく中を回っていると、クレインゲームに夢中になっている人影を見つけた。

「ねえ、アーニヤちゃん。もうやめておいたほうが」

「美波は黙っていて下さい」

…………あれれー？おかしいぞー？どつかで見たぞー？あの白髪の方。

白髪の外国人さんは一心不乱にウサ○ツチのぬいぐるみを狙ってクレインゲームに100円玉を連投していた。

「…………ねえ、アレ」

「こんにちは、アーニヤちゃん、美波」

声かけんのかよ。片方は誰だか知らないが、もう一人はアーニヤだ。まだウサ○ツチ好きだったんだな。

もう片方のお姉さんは速水さんを見るなり「助かった！」みたいな顔をした。

「奏さん！こんにちは」

「美波、静かに」

美波とかいう人を1発で黙らせると、アーニヤはクレインを動かした。ウイーンとクレインは動き、プー○ンのぬいぐるみを正面から捕らえるが、ヌルツと落ちてしまう。

「何してるの？」

「……………見ての通りだよ。もう32回目」

偉い人は言いました、UFOキャッチャーは貯金箱だと、という台詞が頭をよぎった。このままじゃアーニヤさん破産しかねないなあ。

…………仕方ない、一肌脱ごうか。

「アーニヤさん」

「美波、静かに」

「いや、美波じゃなくて千秋」

「っ？ 千秋、久し振りです」

新たに人が来た分かると、流石にプレイを中断した。

「アーニヤちゃん、知り合いなの？」

「ハイ。千秋です」

「いや千秋です、と言われても……」

「美波、セルスリットよ」

「ああ、あの！」

だからなんで分かるんだよ。俺ってどんな存在なんだよ。

「てことは、この人もアイドル？」

「新田美波です、よろしくお願いします」

「あ、ああ。どうも」

頭を下げて、俺はアーニヤに声を掛けた。

「で、何してんの？」

「これ、取れないです」

「あー、貸してみ」

プレイ残機はまだある。俺はアーニヤの前に立つと、クレーンを動かした。アームでタグの所に引っ掛けて取った。

「ほれ」

「おお……！ありがとうございます！」

「すごい……ps02以外にも上手なのね」

「まあ、そうだな」

×内心、上手くいって良かったーとホッとしてるとは言えなかった。

×ゲーセンを出て、今度はAEONに来た。速水さんが新しい服があるというので、仕方ないから本屋に来ていた。いや全然意味わからない。

「なんで俺達本屋にいの？」

「んー、実はさ、ありすちゃんっているでしょ？」

「ああ、あのお子様だろ？」

「あの子だけは唯一、オタク文化にハマらなくてね」

「へえー」

「本人はアニメにハマるの子供っぽいと思ってるみたいで……」  
「うわっ、それはキツイ。むしろ浮いてるんじゃないかそれ。」

「だけど、その所為か話についていけない事も多々あるのよ。だから、オススメのアニメの原作本でも買ってあげれば、読むかなって思うの」

なるほどね、他人に買ってもらったものなら読まない失礼だしな。つーか、わざわざいい人だなこの人。

まあ、アイドルの中には話を合わせるためにアニメ見る人というだろうし、多少は読んでおいて損はないと思うが。

「で、どんなのが良いと思う?」

「あー……まあ、原作コーナー行ってから決めよう」

「そうね」

そう言つて、ラノベコーナーに行くと、見覚えのある奴が本を選んでいた。

「……………ふむ、どれにすれば良いのでしょうか……………」

……………橘さんだ。一心不乱に本を選んでいる。

「……………むむむ、やはりどれを選ぶべきなのか……………」

俺は速水さんと顔を見合わせた。お互いに頷くと、さりげなく後ろに立った。

「……………やはり鷹宮さんに文香さんの好きなもの聞くべきか」

「文香はS A Oとか好きだよ」

「あーあとナルトとかね」

「そうなんですか?」

「ああ、あとは禁書とかユニコーンとか……………あとWORKING!!とか」

「ああ、あとアレね。監獄学園」

「なるほど……………勉強になります」

「いやいや、小学生に監獄学園は早いよ。……………てかそれ、俺も初耳なんですけど。どこで知ったんですか?」

「へ？なんか事務所で読んでたけど。『私も、千秋くんのエリンギを……』とか言いながら」

「え、何それ怖い」

「まあ、あの子どつちかというとムツツリだからね」

「……そんな話は聞きたくなかった……」

肩を落としてると、いつの間にか橘さんが静かになつてゐるのに気が付き、俺と速水さんが見下ろすと、顔を赤くして橘さんは俺達を見上げていた。

「あのっ……い、いつからここに……？」

その問いには、俺と速水さんは声を揃えて微笑みながら答えた。

「最初から」

×▽ たちばな は 逃げ出した。

×

そんなこんなで速水さんを家まで送ってから俺も帰宅を始めた。なんかアイドルとよく会う日だったなあ、と思つてると、スーパーの前で買い物を終えた文香と出会った。

「あっ」

「……あ、千秋くん」

俺はさりげなく文香と合流し、文香が持つてる袋を持つと言った。

「帰るか」

「……はい」

文香の家に帰宅した。

テンションが上がると隙ができる。

12月。期末試験まで残り僅かであり、従って他の学生達は焦り出す季節である。

そんな中、俺は全く焦っていない。だって文香に怒られるのは怖いから、毎日少しずつ勉強していたからな。しかし、毎日勉強するだけで期末はここまで焦らなくて済むとは、文香に感謝だなこれ。

そんなわけで、俺は学校が終わるなり出掛けることにした。家帰って着替えて、ウキウキしながら家で自転車に跨った。

自転車を漕ぐこと数分、どっかの大学に到着した。中に入り、匂いを頼りに歩き回った。すると、歩いてる目的の女の子を見つけた。後ろからこつそりと近付き、ガバツと襲い掛かった。

「ようっ！文香！」

「ひゃわっ!?？」

文香の両肩を叩くと、肩をビクツと震わせた。

「……………あつ、ちあ……………鷹宮くん……………」

「どうも。さあ、行きましようか」

「……………それは、良いのですが……………その、良いのですか？学校で、目立つのでは……………」

「大丈夫ですよ」

自分の大学にアイドルがいるってだけでみんな自慢になるから、自分の大学から文香がいなくなってしまう、或いは文香がアイドルをやめる事になるような情報は漏らさないはずだ。

早く行こう、と言わんばかりに文香の手を取って大学の駐輪場から俺のチャリを出した。

「どうぞ」

後ろの所に文香が乗り、ギョツと俺の腰を抱き締めた。……………そうだよ、ふみふみ。そのために俺はチャリで来たんだ。おっぱい柔らかいサー。

鼻歌を歌いながら自転車を漕いでると、後ろから声が聞こえて来た。



「……………千秋くん、ご機嫌ですネ」

あ、ヤバイ。オツパイで機嫌良いと思われた？

「そりやそうでしょ！文香の水着を買いに行くんだから！」

何とか誤魔化してみた。

そう、これから文香と俺の水着を買いに行く。一緒にお風呂に入る、という話から「それなら別に温水プールでも良いんじゃないや？」などと話が飛ぶに飛んだ結果、この時期にプールにも行くしお風呂にも入る事になった。

成績は平気なんですか？と聞かれ、俺はこの前の小テストの結果を見せつけてやった。完封で満点である。俺が本気を出せばこんなものよ。

「……………あの、それにしても今日はテンション高過ぎるような……………」

そうなんかな、自分じゃわからんが。まあ、何？文香とお風呂に入れるってのにテンション低い方がおかしいわ。ていうか、なんか最近はずっとデートしてもバレないんじゃないかと思う程だ。

文香と付き合い始めて4ヶ月、それ以外にも速水さんやトライアドプリムスや修学旅行の時にもずっとアイドルといたが、サインを求められることもなかった。

まあ、俺がマネージャーに見えてるからサインを求められないのかもしれないが、それなら尚更ラッキーだ。マネージャーに見えてる時点で恋人には見えていないのだから。

とにかく、少しくらい表に出ても良いと思うようになって来た。まあ、正直温水プールは危険な気もするけどね。

ショッピングモールに到着し、水着コーナーに来た。まあ、お互いの方針で、各々で水着を買う事になったから別行動なんだが。アレ？これ、一緒に来た意味が無いんじゃないや……………。

俺は水着に拘りなんてかけらも無いので、さっさとテキトーに選んで文香のいる店の前に行った。まあ、中には入らないんですけどね。店の前のベンチに座って待機していると、なんか後ろからクンクンクンクンと匂いを嗅がれてるのを感じた。

なんだ？野良犬か？と思ったら見覚えのない女の人だった。こい

ついきなり何してんの？つか誰？

「……………文香ちゃんの匂いがする」

……………どういう事？ていうか、ヤバいだろこいつ。文香の匂いを知っている、という事はストーカーの可能性もあるし、そもそも俺と文香の関係があつさりバレた可能性もある。

「……………いや、誰ですかあんた」

「んー？一ノ瀬志希」

いや、そういう事じゃなくて。いや、聞き方が悪かったが。

「ね、ね。それより、なんでお兄さんから文香ちゃんの匂いがするの？」

「文香？誰スか？」

まずはそう言うのが正解だろう。カマをかけてる可能性もあるしな。

「んー？鷺沢文香っていう人」

普通に言っちゃうんだ。こいつ本当なんなの？いや、でも失敗したかも。もし、俺と文香が2ケツしてる事をこいつが知つてるとしたら？嘘をつくという事は、そこに隠さなきゃならない事があるという事がバレる。

「……………おかしいなあ、文香ちゃんの匂いなのに」

全然違つた。こいつ、本当に匂いで判断してんのか？犬なのか？

「とにかく、人違いだから。さっさと……………」

「おかしいなあ、文香ちゃんの匂いなのに……………」

おい、胸の匂いを嗅ぐな。つーか何したんだよこいつ……………。もう何なんだよ、なんとかしてくれ誰か。

全力の抗議の視線を送つてると、本物の文香の匂いが近づいて来るのを感じた。それと共に、久々に感じた魔王の絶望的オーラも。

文香が俺をすごく見た。小学生みたいな表現をしても、怖い事に変わりはないし、むしろ少し怖かったわ。

「……………何をしていますか？」

「あつ……………文つ……………鷺沢さん……………」

違うんですよ、これはこの変態セクハラ痴漢女が…………と、続けよう

としたところで、俺の匂いを嗅いでる女の子が文香を見た。

「あつ、文香ちゃんだ」

「……………志希さん？」

「……………あ？知り合い？」

すると、一ノ瀬さんは俺と文香を交互に見た。で、「ああ！」と何かを納得したのか、ポンツと手を打つと朗らかな笑みで言った。

「二人とも恋びムグツ！」

慌てて二人で口を塞いだ。

で、場所は変わってフードコート。ミスドでドーナツを買って、三人で座った。

「……………こちら、一ノ瀬志希さん。アイドルです」

「うん、そんな感じはしてた」

「……………それで、こちらが鷹宮千秋くん。……仰っていた通り、私の恋人です」

「文香ちゃんに!?？恋人!?？」

「こつ、声が大きいです！」

本当だよ。お前もアイドルならマズイって事くらい分かるだろ？

怒られても、一ノ瀬さんは謝らずに俺に顔を近づけた。

「……………ふーん、イケメンさんだねえ」

「いや、あのつ、ちよつ……………」

クシャツと音がした。文香が紙コップを握り潰す音だ。それでも、一ノ瀬さんはオーラに気付かずに俺の頬を触り始めた。おい、なんだよこいつ。

「……………あの、一ノ瀬さん。俺、文香の彼氏なんで……………」

「知ってるけど？」

「…………………………」

ダメだこいつ。多分、初恋もまだなタイプだ。ほらあ、早速もう魔神文香になつてんじゃん。

でも、人にあまり怒ったことがないので、強く言えないのが俺の悪いところなわけで。どうしたものか考えてると「あー！」と声が出た。「見つけたわよあんだ！」

何故か速水さんがいた。で、こつちに来ると一ノ瀬さんの腕を引つ張った。

「いっつもいっつも失踪しないで！探すこちらの身にもなりなさい！」

失踪してんの？何、ルパンごっこ？

速水さんはそう言うと言達を見て言った。

「悪いわね、邪魔して」

「え、なんでここにいんの？ってならないの？」

「いや、だつてあんただし」

それで説明ついちゃうんだ。すごいや。

少し感心してると、速水さんは俺と文香の持つてる水着の袋を見た。で、ニヤリと微笑むと「頑張つてね」と言つて去つて行つた。

「……………なんだつたんだ？」

一応、文香に言つたつもりだつたんだが、文香は俺に目を合わせないでツーンとしてる。

「……………文香？」

「……………千秋くん、鼻の下伸びてました」

「えっ？」

そ、そうかな。割と迷惑してたんだが。

「……………千秋くんは女の子の、それも可愛い女の子と友達になるスキルとか高いから、私不安です」

それは本当に申し訳ないばかりだ。でも、知り合いになつちまつた以上は、下手に冷たくするわけにもいかない。

けど、俺だつて文香にイケメンの友達ばかり出来たら怖いだろうしなあ。まあ、ここで俺が何を言つても説得力はないだろう。この前、速水さんと出掛けた時もなんかアイドルの知り合い増えちゃったし。

ここは、行動に移すべきだろう。俺はドーナツを食べ終わると立ち上がった。

「帰るか」

「え？も、もうですか…………？」

もつと遊びたいんだろうが、一ノ瀬さんの一件で気を引き締めない

といけないことを学んだ。

だが、デートが終わりだとは言っていない。

「……………帰って、入りましようか」

「つ……………は、はい……………」

そう言うとおそらく羞恥と歓喜で顔を赤くしながら文香は俯いた。

×さて、いよいよ風呂だ。

×

×文香の部屋。そこで俺は先に水着に着替えてシャワーを浴びた。一応、シャワーを浴びてから湯に浸かるべきだよな。

スーツとシャワーで体を流し、湯船に浸かった。……………今更だけど、俺達は何してるんだろう。なんでわざわざ水着を買ってまで一緒に風呂に入ろうとしてんだ……………」

「……………はあ、バツカみたい」

眩きながら俺は天井を見上げた。

すると、ガチャつと扉が開いた。

「……………お、お待ちせ、しました……………」

文香が入って来た。紺色の水着で下半身はパレオになっている水着。いや、お風呂に入るのにその格好はどうかと思うが、それ以上に似合っており、色っぽかった。

「……………」

「……………ど、どうでしょう、か……………」

「……………可愛い、綺麗、美人、似合ってる、結婚したい、嫁にしたい、婿になりたい」

「ふえっ!?」

「つーや。やべっ、声に出てる!?」

あううつ……………と顔を赤くして俯く文香。俺も恥ずかしくなって目を逸らした。

「……………か、体流さないとおつ……………」

わざわざ声に出して体を流し始めた。……………なんだろ。水着なのにエロいな……………」

なるべく意識しないように目を逸らした。身体を軽く流した文香は、一緒に湯船に入った。

「……………しっ、失礼します……………」

いやそんな畏まらなくても。俺の向かいに座る文香。

……………狭い。お互いに脚が当たる。すべすべの文香の脚に、そこそすね毛の生えた俺の脚が当たる。

「……………」

「……………」

……………気まずい。なんだこれ。なんか付き合いたてに戻ったみたいだ。水着なのに。

微妙に泣きそうになると、文香が急に気合を入れたようにムンツと鼻から息をすると、俺の脚の間に入って来た。

「っ！！ふ、文香さあん！！？」

「……………ここにいさせてくださいっ」

大胆な行動したくせに、俺の身体に当たらないように小さく丸まる文香。顔は見えないが、耳まで真っ赤になってるのがよく分かる。

なっ、なんだこの可愛い生き物……………！オツパイ以外は小動物じゃん最早。

「あ……………ふ、文香」

「……………な、なんですか？」

「……………べ、別に、その……………こっちに寄り掛かって来ても……………良い、けど……………」

「……………へっ？」

しばらく俺の顔を見上げた後、文香は俺の身体に体重を乗せた。柔らかい体が俺の身体にダイレクトで当たる。良かった、上半身だけ寄りかかって来てて。下半身も密着してたら巨大化したバベルの塔が当たってた。

「……………千秋くんの体、暖かいですね」

やめろおおおお。そんな、そんなムラムラさせるようなことを言うなあああああ！！？

ヤバイヤバイヤバイ、襲いそう！なんとかして理性に仕事させない

と終わる！

「ふ、文香！」

「な、なんですかっ!?？」

「ごめんっ！」

俺は文香がこっちを見た直後にキスをした。顔が真っ赤になるが、気にせずに舌を入れた。

しばらくそのまま固まり、10秒くらいでプハツと別れた。文香が顔を赤くして俺を見つめている。

「……………き、急にっ……………どうしたの、ですか……………」

「……………」

いや、何とか性欲を解放しようと思って。でも襲ったらマズイからキスで我慢しようと思って……………。まあ、少しは、うん。解放できたし。

いつの間から身体ごと俺の方に向けて、四つん這いになってる文香がそつと目を閉じた隙に、俺は立ち上がった。

「ふー、満足した。俺先にあがるわ」

「……………はっ？」

俺の海パンを真顔の文香が掴んだ。

「え、何？」

「……………まで」

「はっ？」

「……………そこまでしておいて満足したってなんですか!?？」

「ええっ!?？」

「人をその気にさせておいて……………許しませんよ。今日という今日は！」

「なんで!?？俺、なんか悪いことし……………あ、やっぱキスとか嫌だった？」

「嫌なわけではないでしょう!?？」

あーこの子ちよつとアレだ。会話難しいタイプだ。

「とにかく、お説教します！座りなさい！」

うわあ……………面倒な事になりそうだし、従っておいた。座ると、文香

は再び俺の足の間座った。

「……………そこで説教すんの？」

「……………何か文句でも？」

「イエ、ナニモ」

照れてる。ほんとはあんま怒ってないだろこの人。

「大体、千秋くんはいつもいつも女性に対して壁がなさすぎです。そもそも、彼女にキスする直前に『ごめんっ！』って何ですか！」

と、俺の脚の間でクドクドと説教する文香は、しばらく逃がしてくれなくて、普通に逆上せた。



冬休みつて割と2週間はある。

気遣いは大切だが、気を遣い過ぎるのも良くない。ちようど良くやろう。

期末試験が終わり、冬休みに入った。まあ、そんな時期でも文香はアイドル業もあって忙しい。そのため、冬コミには行かなくなった。なんでも、誰とは言わなかったが同人誌を持っている知り合いがいるらしく、その人に借りて読んだりしていたらしいので、行く必要がなくなったそう。

まあ、そんな話とはかく、今は少ない空き時間でLONE通話で文香とクリスマス付近の予定を決めている。

「20は？」

『……申し訳ありません。20、21日は、ライブの練習でして』

「22は？」

『……その日は、Mステのライブに出なくてはならなくて』

「ふむ……23？」

『……その日も、25日のクリスマススキーイベントの練習と打ち合わせで……』

「てことは、24もか……」

『……はい。24、25で泊りがけでして』

……分かつちやいたが、やはり多忙だな。クリスマス当日に会えるとは思ってなかったが、その前前日までビッシリ予定が詰まってるとはなあ。前前前世から予定を探し始めるべきだったか……。

というか、クリスマススキーイベントってなんだろうか。

『……あ、でも25日の夜と26日は空いていますよっ？』

「マジっなら……」

その日に会おう、と言おうと思ったが、口が止まった。今でさえ忙しい文香は、これから休日無しに仕事詰めだ。それなのにクリスマス夜の俺が遊びに行つて大丈夫なのか？疲れとか溜まってるんじゃないのか？

いや、そりや俺は会いたいけど、向こうの事情も考えないとダメだろ。

「いや、いいや」

『……………はい?』

「今年のクリスマスは諦めよう。大変でしょ?」

『……………なんでですか?』

なんでって……………あー、文香の事情を考慮して俺が気を遣ったとか察されたら、逆に気を遣わせそうだな……………。なんか、こう……………上手い具合の理由無いかな……………。

「あ……………し、正月は二人で出掛けるし、その為にバイトしたいなーみたいな……………」

正月は文香と一緒に初詣に行く。うちの親戚の家の方に初詣にもってこいの神社があるからな。そこに行く事になっている。

すると、電話の向こうから驚く程冷たいため息が聞こえて来た。

『はあ……………。話は分かりました』

「……………は、はい?」

『……………では、今年はもう会わないという事でよろしいですね?』

「へ?あ、いやクリスマスが終わればそれなりに予定は空くのでは……………」

『そろそろレッスン再開するので失礼します』

電話は切られてしまった。えっと……………なんだろう。俺なんかまずい事言ったのかな……………。まあ、嘘がバレると厄介だし予定も無くなったから、とりあえずどっかバイトを探すとするか。

×俺はバイト雑誌を取りにコンビニに向かった。

×取りに行ったバイト雑誌をめくっていると、速水さんから電話がかかって来た。んだよ人が集中してる時によー。まあ無視したら後がめんどいから出るけど。

「もしも……………」

『何やってんのよあんたあー!!?』

……………キーンと来た、今、キーンと来たよ耳に。鼓膜が逝くかと

思った。てか何？いきなり何のつもり？

「……………何がだよ。つか、耳死んだんだけど……………」

『あんなった、前からバカだバカだと思ってたけど、ここまでバカだとは思わなかったわ！』

「だから何がだよ。喧嘩売ってんの？」

『クリスマスの事よ！なんで文香と過ごさないの！？？』

耳が早い事で……………ていうか、世話焼き姉ちゃんかよ。

「いや、俺も一緒にいたいとは思ってたよ？だけど、ほらお互いの都合とかあるじゃん」

『何よお互いの都合って』

「あ……………」

どうしよう、言いたくないんだけど……………でも、言わないと何言われるかわかったもんじゃないし。

「いや、ほら？文香って12月忙しいらしいじゃん？」

『ええ。そうね。それで疲れが溜まってるかもしれないし遠慮したんだ？』

「なんでそこまでわかんの！？？エスパー！？？」

『分かるわよ。あんたと文香の思考回路なんて』

お、おう……………。それ別の問題が発生してると思うんだが。

『そんなことはどうでも良いのよ。とにかく、文香に謝りなさい』

「いや、なんでよ。だって実際疲れてるでしょ？しかも24、25は泊まりがけなんですよ？それが終わって今度は俺を泊まらせてくれるなんて向こう超疲れると思うんだけど」

『……………なんで貴方がその疲れを癒してあげようってならないのよ』

「……………なるほど。その発想はなかった」

『このポンコツ！』

「……………しかし、俺に癒せるだろうか。文香ってあれだよね？本大好きじゃん？むしろ一人で本読んでた方が疲れも取れるんじゃない」

『あんたホントツトダメだわ。もうホントダメ。ダメダメ村のダメダメチャンピオンだわ』

「おい、いくらなんでも言って良い事と悪い事があるぞ」

失礼過ぎるだろ。ていうか何その不名誉過ぎる村。3日で滅びそうだな。

でも、真面目な話、文香とこれから会うのは無理そうだな。何より、なんか怒っていたみたいだし、電話も出てくれないかもしれない。

「…………でも、今から予定を変えるのは無理だろ。しばらく文香と会う機会なんてなさそうだし、電話出る暇もなさそうじゃん。てか、いつ電話したら良いのかわからないし。文香の足を引っ張ることだけは御免だから」

そう言ってみると、速水さんは多分電話の奥で微笑みながら言った。

『…………ふーん？そう言う事言うの？なら、私に任せなさい』

「……………は？」

そこで通話は切れた。…………でも、そうか。なんか知らないけど文香は傷付いてたんだな…………。速水さんがそうやって怒る時は、大抵文香が傷ついた時だから。

俺は正直、正月や誕生日、記念日と違ってクリスマスの特別性がイマイチ理解出来ていない。何故なら、キリストの誕生日だと知ってしまったからだ。何故、キリストの誕生日だけ世界中で祝われているのが分からない。だから、今回の件もあんな風に言ってしまった。

「…………もう少し、女心とか学ばないとダメなんかなあ」

そんなことを呟きながら、その場でゴロンと寝転がった。すると、また電話がかかって来た。

「…………プロデューサーさん？」

珍しいな。もしかして、また貸して欲しいBlurryでもあったのかな。

「もしもし？」

『ああ、鷹宮くん？君、24と25暇かな？』

「暇ですけど」

『良かった、バイトしないかい？時給弾むから…………』

「やりましょう」

来たあああああああ!?!?正直、面接とか応募とか面倒だったか

ら助かるわ!

「今回も泊まりですか?」

『ああ。新潟までね』

「新潟?寒そうですね。緒花とかいるんですか?」

『いやいや、スキー場だから』

「……………はっ?スキー場?」

待って。スキー場ってどこかで聞いたんだけど。

『いやー、奏の言う通り鷹宮くん誘ってよかったわー。面倒な面接とが必要無いし、二つ返事でOKしてくれるし、周りの子達とそこそこ面識あるし』

……………は?速水さんの差し金?なんか、嫌な予感が……………。

『それにほら、鷹宮くんってスキー超上手いんでしょ?ジャンプして空中で四回転くらいできるんでしょ?』

「いや出来るか!何言ってるんだよあの人!」

ていうか、スキーってまさかさ……………!

「あの、今回俺が同行する企画のタイトル教えてもらえます?」

『ああ、言ってなかったね。クリスマススキーライブだよ』

「……………参加メンバーは?」

『えーつとね……………美波……………新田美波と橘ありすと相葉夕美と高森藍子と、後は……………』

あ、そのメンバー知ってる気がする。いや、諦めるな。奇跡的にメンバーが変わってる可能性も微レ存……………!!?

『鷺沢文香だよ』

ハメラレタ……………。

俺はキラだとバレた時の夜神月並みに膝をついて絶叫しそうになつたが、プロデューサーさんにバレるとマズイので口を塞いだ。

×

×と、いうわけで、事情が変わった。早急に文香と仲直りしないとい

けない。クリスマスの時で良いって?そんなわけあるか。

当日は文香との関係を知られるわけにはいかないし、話す時間なんかない。今のうちに謝らないと気まずい事になる。

そんなわけで、俺は文香のマンションの前で待機していた。既に季節は冬、正直かなり寒いけど泣き言は言っていられない。

「……………息が白い。体が震える。耳が痛い。」

「……………ていうか、何してんだろうな、俺は。いや、別に現状の事を言ってるわけではない。別にバイトがあるから、とかそういう事ではなく、文香を怒らせたと分かった時点でこうして謝ると考えるべきだった。」

そんな考えが浮かべずに、クリスマスが終わり、話す機会が来るまで待とうとしていたのだ、俺は。冷静に考えれば、どうせ文香のいな生活に耐えられるわけがないので、何れにしても自分からこうしていたかもしれない。だが、それは結局は機会を待っていたに過ぎない。

「……………情けない」

そんな呟きが漏れた。すると、空から白い埃のようなものが落ちて来た。雪だ。

「……………寒い。風邪引きそう……………あ、鼻水垂れてきた。ポケットからティッシュを取り出して鼻をかんだ。」

いや、これは洗礼だ。この洗礼を受けて少しでも反省しろ。それが俺に出来る事だ。それに、時間はもう9時を回ってる。もうすぐ帰って来るだろ。我慢しろ。

〜1時間後〜

「……………あの、まだ帰って来ないの……………？頭に雪積もってるんだけど……………ていうか、もう10時過ぎてんぞ……………。未成年が起きてて良い時間じゃな……………あ、ハタチでしたね。」

「……………ヤベエ、眠くなつて来た……………。あーダメだダメだ。気をしっかり持て。謝らなきゃいけないーんだから。」

「ふえつくち!!？」

うー、さびー。鼻水拭かなきゃ。

再びティッシュで鼻をかんでると、「……………千秋くん……………？」と控えめな声が聞こえた。

「……………あ、文香。やっと帰って来た」

「な、何してるんですか!?!?こんな時間にこんな所でそんな格好で!?!?」

「そんな格好、とはどの事だろうか。と、思ったが俺の頭と肩には雪が積もってるし、多分その事だろう。」

「……………や、文香に謝ろうと思って」

「そんなのどうでも良いから来なさい!」

「言われて、俺は立ち上がった。雪を振り払うと、文香が慌てた様子で俺の手を取った。」

「つ、冷たい……………。いつからここにいたんですか?」

「……………多分、1時間くらい前?」

「つーも、もうバカ!」

「俺の手を引いて文香はマンションの中に入ろうとした。それを俺は止めた。」

「いやいや、俺謝りに来ただけだから。てか、この格好でマンションに入ると雪とかで落ちて汚れるし」

「聞こえなかったんですか?そんなのどうでも良いから大人しく付いて来なさい!!?」

「はい」

「余りの怖さに自分でも驚くほどに素直な返事が出た。」

「文香に半ば引き摺られる形で部屋に入った。」

「パーカー脱いでください。外でハタいておきますから」

「との事で、パーカーを脱ごうとした。だが、手が上手く動かない。」

「……………どうしたんですか?」

「……………ごめん。なんか、手がかじかんじやって……………」

「……………仕方ないですね……………」

「文香にパーカーを脱がしてもらった。で、洗面所に放り込まれた。指は使わずに何とか体の動きだけで服を脱ぎ捨てると、バスルームに入ってシャワーを浴びた。」

「……………あつたけえ。いや、そんな場合じゃない。なんて文香に謝ろうかをすぐに考えないと。いや、考える事自体おかしい。自分が申し」

訳ないと思った事を素直に話せば良いんだ。

そんなことを考えてると、ガチャつと後ろから扉の開く音がした。

「失礼します」

タオル一枚の文香が入って来た。

「っ!? ふ、ふーみかちゃあん!?」

「……………手がかじかんでるんですよね? 私に洗わせていただきます」

「ええっ!? い、いや何もそこまで……………!!?」

「ダメです!」

あ、真面目モードだ。文香の顔すごい真剣だもん。これは聞いてもらえないぞ。

俺は文香の前に座り、頭を洗ってくれた。わしゃわしゃとシャンプーを流してくれた。続いて、身体も洗ってくれるのか、背中をスポンジで擦り始めた。

「……………」

「……………」

かなりの好シチュエーションのはずなのに、文香が怒っているから全然興奮しない。というか、文香が怖くて直視出来ない。

「……………さっ、こっちを向いてください」

「へっ……………」

「……………前も洗います」

「え? いやそれはおかし」

「いいから向きなさい!」

「はい」

仕方ないので、振り向いた。訂正、すごく興奮します。女の人に正面を拭いてもらうとか半端じゃない。しかも目の前の人はタオル一枚。恥ずかしくて死にそう。

やがて、体を洗い終えてシャワーで体を流すと、文香は俺に怒った表情のまま言った。

「……………先に上がって下さい」

「へっ?」

「お話があります。帰っちゃダメですからね」



「……………は、はあ」

言われて、俺は先に上がった。着替えは用意されていて、ジャージとパンツが置いてあった。勿論、俺のである。よく泊まるからお互いの家にお互いの下着が置いてあるのだ。

しばらくソファで座って待っていると、文香が戻って来た。相変わらず、不機嫌そうな表情である。

俺の隣に座ると、厳しい顔でと集めて来た。

「……………それで、何してたんですか?」

「あーいや、だから文香に謝ろうと思って……………」

「風邪引くかもしれないのに雪の中を外ですか?」

「そ、そうだけど……………」

「このつ……………! バカ! アホ! マヌケ! 風邪引くかもしれないのにそこまでする必要あるんですか!?!?」

「あるよ」

「は、はあ!?!?」

「俺は、1日でも早く文香と仲直りしたかったんだ。確かに風邪を引いていたかもしれない。だけど、それ以上に文香を傷つけたままじゃ嫌だったんだ」

「ち、千秋くん……………」

「ごめん。俺は別に、クリスマスに特別な思いなんてなかったから、正月に会えるなら無理して会うことは無いと思ってたんだ。だけど、文香がそこまでクリスマスに会いたがってると思ってなかった。……………だから、ごめん」

とりあえず、誠心誠意謝った。すると、文香はしばらく俯いた後、ギョツと俺を抱き締めた。

「……………いえ、クリスマスに関してはいいです。でも、風邪を引くかもしれないような真似はもうしないで下さい。私も、心配になりますから」

「……………ああ、分かった」

「……………では、もう寝ましようか。今日は泊まっていけますか?」

「そうする」

そう言つて、二人で布団の中に入った。丁度、雪も降つて来ていたし、二人で布団に入るとさらに暖かい。

すると、文香は布団の中で俺に抱きついた。

「……………文香？」

「……………こうすれば、暖かいですよね」

「……………そうな」

……………か、可愛い。何だこの可愛い生き物。ヤバイ、なんか照れ臭くなつてきた。

この恥ずかしい感じを何とか誤魔化そうと思い、頬をかきながら言った。

「いやー、それにしてもビックリしたわ。まさか風呂に入つて来て体洗つてくれるとは思わなかったからさー」

「……………あつ」

……………あつ、やばい。地雷踏み抜いたかも。

すると、文香の俺の身体を締め上げる力が強くなった。ていうか、苦しくなつて来た。

「……………ふ、文香？」

「忘れて下さい」

「い、いやそれは無」

「忘れなさい」

「はい」

会話はそれで止まり、文香は俺を締め上げたまま眠つてしまい、俺は中々寝付けなかった。

スキーの時は人の言う事は聞きましょう。

クリスマススイブ。今日から泊りがけのバイトである。俺はプロデューサーさんに言われた予定表と必要なもののリストにある準備を済ませて事務所の前まで来た。バイト内容は搬入・軽作業の皮を被った雑用だ。まあ、別に構わないけど。

今回もバイトはアイドルよりも早く集合になっているため、俺は朝早く事務所にやって来た。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。ガルパンのBlurry持って来た？」

「はい、持って来ました」

「よし、じゃあバスに荷物詰めるから運んじやって」

「はい」

言われるがまま、俺は荷物を運び始めた。

「トランザム」

「……………」

前と全く同じ感じで運び始めた。俺もプロデューサーも全く成長していないようだ。

そんな一幕はともかく、バスに乗って出発。前と違ってそんなに人数が多いわけでもないのに前と同じくらいの大きさのバスだった。それは荷物がアホみたいに多いからだ。つまり、俺は既に虫の息である。

「おーい、みんなちよつと良いか？」

そんな中でも、俺に自己紹介させようとするのだからプロデューサーさんすごいや。

「文香とありすは知ってると思うけど、今回、雑用としてバイトで雇った鷹宮千秋くん。よろしく頼む」

「……………鷹宮千秋です」

「……………なんでその人虫の息なんですか？」

誰だか知らないけど茶髪の人が聞いてきたが、お前らの荷物だよコノヤロー。

俺は黙って椅子に座った。よくよく考えれば、これからやるのは前のような写真撮影ではなくクリスマスマススキーイベントだ。まあ、向こうのスキー場に依頼されたものなんだろうが、おそろくライブもやる。ライブもやるということは、間違いなくステージの設営もしなくてはならない。忙しくなりそうだ。

……今の内に寝ておこう。そう思って目を閉じた、のだが。

「ね、隣良い?」

知らない女の人が声をかけて来た。いや、良くないんだが……。

「あ、私は相葉夕美……って、知ってるかな?」

「名前だけ」

文香とユニット組んでる子だからな。知らないわけにはいかない。

そして、このまま話しているわけにもいかない。文香の怒りのボルテージが雲の上まで駆け上がっている。僕は何もしてないのに。

「ね、好きなお花は何?」

「え?ゼフィランサス」

「ゼフィランサス!?なんで?」

「そりゃカッコ良いからですけど」

「え?か、カッコ良い?」

「はい。地上用と宇宙用で換装出来るんですよ。宇宙用になるとフルバーニアンって言うんですけど。これがまたカッコいいんですよ。見ます?」

「待って。何の話してるの?」

「何のって、決まっていますよ」

俺はスマホの写真を探し、ガンダム試作1号機を見せた。

「……………え、何これ」

「ゼフィランサス」

「そうじゃないよ!!?花だよ!ロボットじゃないよ!」

「ロボットじゃないです!モビルスーツです!」

「知らないよ!」

ふっ、嫌われたぜ。女の子に嫌われるにはオタクの気持ち悪い部分を見せれば一発だ。

と、思ったら相葉さんはスマホの画面を覗き込んで来た。

「でも、たしかにカッコ良いね。なんだっけ、ゼフィランサス？」

「え？あ、うん」

「ガンダムかー。そういうえば、事務所で流行ってるなー。これガンダムに出るんだよね？」

「は、はい。0083に」

「ぜ、ゼロゼロ……？」

「あー、スターダストメモリーって言った方が分かりやすいかも」

「ふーん……面白い？」

「あ、はい。面白」

直後、ゾツと後ろからドス黒いオーラを感じた。確認するまでもない、文香からだ。怒りが雲の上どころか無限パンチの最大射程距離まで伸びてる。

何か手を打って離れないと、思ったが俺は窓際の席だからどうしようもない。

「ふーん……。それにしても君、随分アイドルと話すの慣れてるね」

「そうですか？」

「うん。普通、こんな風に話せないでしょ。ていうか、文香さんとありすちゃん知り合いなの？」

「あー……前のクローネの撮影の時にちよつと色々……」

「ふーん？なーんかつまんないなー」

ズイツと下から顔を覗き込んで来た。ちよつ、近いっつーの。最近のアイドルは距離感つてものがねーのか。

「ふ、文香さん？手が痛いです……」

「あらごめんなさいありすちゃん（棒読み）」

「ひいつりっ？」

聞こえない聞こえない！何も聞こえない！

ていうか、なんかものっそいデジャヴってるんだけど……？

「………怖い」

「？何が？」

「………色々ですよ」

俺は遠い目をして窓の外を見た。さて、なんて言い訳しようか考えないとな。

×× スキー場に到着した。雑用と言い切られた俺は、早速フロントと受付をし、プロデューサーさんがスタッフと打ち合わせをしている間に、バスの中の荷物を運び、アイドル達にスキーウェアを渡し、着替える間にイベントで使う機材とかをスタッフと一緒に運び、頃合いを見てアイドル達と合流して個人の荷物を預かり、アイドル達の泊まる部屋に荷物を置くと、スキー板とストックを担いでゲレンデに出た。

ゲレンデではアイドル達が既に待機していた。  
「お、お待たせ、しました……………」

……………なんか前より一段とハードだぜ……。まあ、今回はライブだから仕方ねえっちゃ仕方ねえが。

「ありがとうございます、鷹宮くん」

前に会った新田さんの前にスキー板を置いた。続いて文香、相葉さん、高森さん、橘さんの前にスキー板とストックを置いて行く。

「聞いてると思いますが、ミニライブは20時からです。その2時間前までは自由に遊んでいいそうです。それから、昼飯は13:30から、晩飯は18時からだそうですので、時間厳守をお願いします」  
そう言うと「はい」と返事をしてみんなはスキーをしに行つた。

「あ、あのっ、ちあ……………鷹宮くんっ」

文香から声を掛けられた。

「なんですか？ 鷺沢さん」

「わ、私……………その、スキーやったこと無くて、それで……………滑り方を、教えて欲しいのですが……………」

あ……………教えられるものなら俺も教えてやりたいんだが……………。

「すみません、仕事がありますから」

「……………そう、ですか」

「まあ、仕事が早く終われば、その分だけ早く遊べるかもしれませんが、その時に」

「！ は、はい……………」

そんな嬉しそうな顔を……！ああ、俺の彼女可愛い……！！？

そうと決まれば、俺は早速次の仕事をしに行った。

その後もライブステージの設営、客席の配置などの資料を預かった。よし、足を引つ張らないようにこれを頭に入れてよう……と、思ったらプロデューサーさんが声をかけて来た。

「鷹宮くん」

「はい？」

「君はスキーしながらで良いからアイドル達に何も無いように見えてもらえるかな」

「え、それだけでいいんですか？」

「いや、むしろこれは大変な事だよ。怪我でもされたらライブは中止になってしまうからね。もちろん、何人かにここからでも見守らせはするけど」

「……なるほど。一人でですか？」

「ボッチの君には分からないかもしれないけど、普通に仲良い友達同士で五人くらいなら同じコースで滑るものだよ」

「一言余計なんですが……まあ、分かりました」

確かに大変だ。五人とはいえ、それぞれを見てなくちゃいけないんだから。

とりあえず、俺はスキー板を借りてゲレンデに出た。さて、まずはアイドル探しからだな。文香との約束もあるけど、バイトとして来る以上、それは二の次だ。

まずはアイドル達の位置を確認しないと。ゲレンデに出て文香の匂いを探した。ふむ、少し遠いな。香りが薄い。リフトの乗り口付近まで滑ってもう一度嗅いだ。

……雪上だから嗅覚が鈍感になってるのか？上手く嗅ぎとれない。あ、いや近くなってる近くなってる。

「……あ、おーい！鷹宮くん」

相葉さんの声だ。そっちに顔を向けるとザザアツと目の前まで滑って来た。

「あ、どうも」

「うん。何してるの？」

「アイドル達の見守りを頼まれて。他の方達はどこですか？」

「みんなすぐ来るよ。最後尾の美波さんが一応、見てくれてるけど……」

そういう通り、橘さんが次に来て、その後に高森さん、文香、新田さんがやって来た。意外と橘さん上手いな……。滑れないのは文香だけのようだ。

「新田さん、先に行つて下さい。俺が最後になつて皆さんを見るので」  
「分かりました。面倒見が良いんですね」

「いえ、別にそんなことは……」

……。新田さんの大人の雰囲気はなんとなく良いな……。つい  
うっかり惚れそうになりそうだけ。……。いや、やめておこう。文香  
がすごい睨んでる。

滑れる四人がリフトに乗り、最後に俺と文香が乗った。よし、計画  
通り。良かったよ、文香が滑れなくて。

「……鷹宮くん、ありがとうございます。わざわざ、私のために時間  
を作ってくれて」

文香が唐突にお礼を言つて来た。

「いえいえ、プロデューサーさんが面倒見てこいつて言うから来れた  
だけですよ」

「……それでも、嬉しいです。私と、こうしてリフトにも乗っていた  
だけで……」

「っ……」

やめろよ。恥ずかしいだろ。俺は赤くなつた顔を隠すように目を  
逸らした。

「……でも、バスの中では少し嫉妬してしまいました」

「……あれはすみません。普通の女子ならオタクにしか理解できない  
所で拘れば引くと思つたんですけど……。引かずにこつちの話に  
乗ってくれる辺り、相葉さん良い人ですね」

「……今も嫉妬しそうですね」

うん、ごめん。ミスった。



「でも、鷺沢さんには悪いけど、鷺沢さんだけ特別仲良くは出来ないから。その理由は言わなくても分かると思うけど」

「……………はい。頭では理解しています。……………それでも、何となく嫌なのですが」

「それは仕方のないことですよ。まあ、不愉快にさせてしまった分、東京に戻ったら相手しますから」

「……………まるで、私が相手して欲しくて仕方ないみたいな言い方ですね」

「……………すみません。俺が構って欲しいだけなんです」

なんとなく照れくさくて誤魔化すような言い方をした事を素直に白状すると、文香は俺の頭を撫でた。

「……………ふふ、そういう所、可愛いです」

「……………あの、会話だけならともかく頭撫でると周りで見られますから……………」

「あつ、す、すみません……………」

いや、いいんだけどさ。

すると、リフトの出口が見えて来たので、俺は安全バーを上げた。

「降りれますか？」

「……………さつきは、美波さんのお陰で何とか降りれましたが」

「なら大丈夫でしょう。さ、行きますよ」

念の為、文香の手を握ってリフトを降りた。

「よーっし、じゃあ行こうか！」

相葉さんの号令で、みんな滑り始めた。

一度は降って来てる文香だが、一応滑り方を教えておくことにした。

「文香、滑る時は足をハの字にして、この斜面を広く使ってクネクネと滑るんだ」

「……………なるほどっ」

「こんな感じ」

俺は先に滑り始めた。ここは俺が先に滑らなければ、下で支える相手がいなくなってしまう。

俺はゆっくりと降り始めた。スーツと降りながら端から端を往復しながら下り、途中で止まった。ここまで来い、という意味で手を振ると文香は深呼吸して降り始めた。……………足をまつすぐ揃えて真下に。

「きやああああああああああ!!?」

「言う事を聞けええええええ!!?」

真っ直ぐ俺に突進して来る文香。俺は避けようかと思ったがこのまま降ったら危ない。何とか止めようと受け止めようとした結果、衝突して文香は止まり、俺は3メートルほど転がって、スキー板が外れてなんとか止まった。

……………痛え。左腕ぶつけたかも。

「だ、大丈夫ですか?!?」

近くを滑ってた新田さんが慌てて駆け寄ってくれた。

「あ、ああ。平気です。それより、鷺沢さんは平気ですか?」

「は、はい。ありすちゃんが見てくれますけど……………」

そう言う通り、橘さんが文香の元で何か話していた。

その様子を何となく眺めてると、新田さんが「もしかして」という感じで聞いて来た。

「滑れないんですか?」

「いや、滑れますよ。ちょっとトラブルがあつて」

「……………怪我はなさらないようにして下さいね?」

「ええ、分かっています」

「……………あつ」

「? 何ですか?」

「頬、血が出てますよ?」

「えっ?」

触ると、指に血がついた。本当だ……………。全然気づかなかつた。すると、新田さんは俺の頬をティッシュで拭くと絆創膏を貼ってくれた。

「これで良しつ。念の為、後で洗ってくださいね」

「え?あ、すみません。わざわざ……………」

「いえいえ」

新田さんは先に降りて行った。……あーどきつとした。心臓に悪いなあの人。

ふと上を見ると、文香が不愉快そうな顔をしていた。あの顔はヤキモチを妬いてるけど、自分の所為なので怒れない、という顔だ。

「さ、文香さん。一緒に降りてみましょう」

橘さんの助言で、二人はゆっくりと降り始めた。なるほど、一緒に降りた方が良かったのか……。

二人仲良く降りて来る様子を眺めながら、俺ものんびりと降り始めた。

クリスマスの特別性はカップルになれば理解できる。

見張り役、とは聞こえは良い。おそらく、ほとんどの人が「あの人は仕事を回すように見えて遊ぶ時間を提供してくれてるんだな」と思うはずだ。実際、俺のその可能性は考慮した。

だが、人生はそんな甘くなかった。

「きやー！転ぶー！」

と、転びそうになる相葉さんの元へ向かい、

「きやつ！ここのコース難しいよー！」

高森さんの元へ向かい、

「わー転んでしまいますー（棒読み）」

文香の元へ向かいと……何というかも……大忙しだ。ていうか、文香絶対何回かわざとだし。

とにかく、すごい疲れるんだよ。まあ、相葉さんも高森さんもスキー超上手いってわけじゃないから、ちよくちよく転ぶのは仕方ないんだけどさ。

「お疲れ様、鷹宮くん……」

昼食時、文香と高森さんがトイレに行ってる間、俺は新田さんと橘さんと相葉さんと一緒に話していた。

午前中の段階で既に疲弊しきっている俺に新田さんが声を掛けてくれた。

「い、いえっ……そんな……まだまだ、これからですから……！」

「いやそんな無理しなくても……」

「ご、ごめんね？なんか……」

いやいや、無理しなきゃダメなんだよ。俺の所為でライブ中止にさせるわけにはいかない。一時も気が抜けねえんだよ。

しかし、思ったよりキツイミッションだぜ……。

「にしても、鷹宮くんはスキー上手だね」

新田さんが話題を変えた。

「そうですか？」

「うん。だって、文香ちゃんとかが転んでも絶対に助けに行けてたで

「しよ?」

「いや、まあ、何となく感覚で」

「というか、身体を動かす事なんて大体は感覚でイけるでしょ。感覚でどうにもならないのは勉強だけだ。感覚で挑んだら文香に超怒られた一学期の期末を思い出すぜ。あの時は付き合ってもないのに怒られたんだよなあ。」

「……………考えたら、あの時から俺の事好きだったのか?今度、文香に聞いてみよう。」

「……………美波ちゃん、どうしよう。今少しムカツとした」

「大丈夫、私もだから」

「いやなんでだよ!?」

「そんな悪いこと言ったのか俺!?」

「て、ていうか、橘さんだって上手いじゃん。今日一回も転んでないでしょ?」

「そ、そうですか?」

「確かに、ありすちゃんも上手いよね。前にやった事とかあるの?」

「いえ、私も何となく感覚で……………」

だよな。それに、新田さんだって上手いじゃん。何食わぬ顔でパレルターンとかやってたじゃん。相葉さんはともかく、新田さんにジ

ト目で見られる謂れはないと思うんだが……………。

そんな話をしてると、文香と高森さんが戻って来た。さて、じゃあ飯にするか。

×× 昼飯が終わり、午後もスキー開始。相葉さんは午後と比べて上手く滑ってくれていて、午前よりは仕事は減った。まあ、それでも忙しいんだが。

俺は文香と一緒に滑っていた。スーツと文香のペースに合わせて、いつでも支えられるように緩やかな坂道を下って行く。

「大分、慣れて来たんじゃないですか?」

「……………は、はい。鷹宮くんのお陰です」

まあ、そうだな。俺のお陰だな。ていうか、他の人ももう少し面倒

見てやれよ。

で、リフトの隣まで移動できた。アイドル達と合流して、リフトに乗った。すると、前を滑っていた相葉さんが言った。

「ねえ、たまにはリフト乗るメンバー変えない?」

何? 喧嘩でもしたの? と思っただが、俺もそうしかかった。文香と別れたいわけではないが、いつまでも同じ人と乗っていると怪しまれるからな。

「良いですよ」

新田さんもOKしてくれて、グーチョキパーで別れた。

その結果、俺の隣には橘さんがいた。

「……………」

「……………」

あつ、あれっ? なんか気まずいゾっ!? 考えたら、橘さんと二人きりなんて初めてじゃね?

どうしよう、ていうか小学生を相手に何で気まずくなってんだよ。とりあえず、何か言え。情けないぞ、俺。

「た、橘さん。楽しい?」

「はい。スキーというのは数える程度しか行った事しかないのですが、想像以上に楽しいです」

「そっか。なら良かった」

「それよりも鷹宮さん」

俺が一生懸命考えた話題を「それより」と一蹴されました。相変わらずなんかズレてるぜ、この子。

「文香さんともつとイチャ付かなくて良いのですか?」

「ブフツ」

いきなり何言い出すんだよこいつ!? なんか普通に吹き出しちゃったじゃねえか!!?

「なっ、何だよ急に!」

「いえ、奏さんにお願ひされたものでして。『あいつらが人目を気にせず、ていうか人目を気にしててもイチャつき始めたら容赦無くぶっ飛ばして良い』と」

あいつは小学生に何を頼んでんだ。東京戻ったら覚えてろよ畜生めが。

「ですが、私としてはもう少しイチャついて欲しいと思います」

「遠回しに俺を殴りたいって言ってる？」

「いえ、そういう事ではなく、世間では今はクリスマススイブなのですから、恋人同士なのでしたら少しはイチャついてても良いと思います」

「……………」

おお……橘さんってそういう融通は利く人なのか。割と良い子なんだな。迷惑電話して来たときはイラつとしたが、もう少し仲良くした方が良くもしいないな。

「……………ま、今日の夜にでもな」

「あ、でも噛んだりするようでしたら見過ごせません。私はあくまで二人が一線を越えないように見張る役目ですから」

「……………ああ、肝に銘じるよ」

しっかりとしてるなこの子。そんな話をしながら、リフトから降りた。

みんなで集まってから、また順番に降り始めた。高森さんと新田さんが降りて、その後を相葉さんと文香が降りた。おい、あの二人大丈夫か？

少し心配になりながらも、俺も橘さんと一緒に降り始めた。しかし、本当に器用に降りるものだなー、橘さん。割と上手いわマジで。ボーゲンとはいえ、転ぶ心配がまるでない。

「上手いじゃん」

「ありがとうございます」

「パラレルってのもやってみたら？」

「なんですか？それ」

「ハの字じゃなくて、足を揃えて降るんだよ」

「……………なるほど」

言われるがまま、橘さんは両足を揃えて滑り始めた。だが、思った以上の加速だったのか、すぐにバランスを崩した。

「っ、やべっ……………！」

俺は慌てて橘さんの救援に向かった。が、俺も万能ではない。つまり、バランスを崩しました。

結果、橘さんと仲良く転び、盛大に尻餅をついた。

「つてえ……！」

つ、最初に転んだ時にぶつけた左腕に響くな……。助ける時は気を付けないと。

とりあえず、橘さんの安否を確認しようとしたら、橘さんは俺の膝の上で上半身を乗せて倒れていた。怪我はなさそうだ。

「大丈夫か？」

「……………」

「……………橘さん？」

「っ！は、はい。問題ありません」

答えながら、橘さんは俺の膝の上から動いた。で、何故か太ももを突いて来た。

「……………何してんの？」

「……………いえ。うちの座布団に似ていまして」

「はっ？」

「堅過ぎずに柔らか過ぎずの良い感じですね、鷹宮さんの膝」

「え？あ、そ、そう？」

「はい……………」

えっと……………褒められてるのかな？いや、まあ何でも良いが。

その直後、下から冷たい視線を感じた。言うまでもなく、文香からだ。俺を微笑みながら睨んでいる。あ、ヤバイ、消される。

「さ、さあ、橘さん。早く降りちゃおう」

「え？は、はい。そうですね」

てなわけで、一緒に降り始めた。ああ、文香の目線が怖い……………。後でまた怒られるんだろうなあ。

×

×スキールが終わると、軽く風呂に入ってから晩飯である。ちなみに、

俺は風呂に入る時間などなく、アイドル達が風呂に入ってる間に晩飯を食って、そこからすぐにライブステージの設営だった。



俺は大忙しでステージを作ったり椅子を並べたりして、気が付けばライブの時間だった。クリスマス、つまりサンタの衣装を着たアインフェリアが歌って踊っていた。

スキー場のホテルに泊まってる客全員が来て、超盛り上がりつつ俺も警備の仕事しながらチラツとステージを見た。今思えば、文香のライブを見るのはこれが初めてだ。

「……………」

文香って、ライブの時だとあんな顔するのか…………。いや、ようつべとかで動画は散々見た。だけど、生だとやはり違う。俺の知らない文香が、すごく輝いて見えた。

そして、改めて思った。俺はあの人とお付き合いしてるんだな、と。普通の学生なら絶対ありえない、友達のいない俺には普通よりワンランク下の学生だ。そんな奴がアイドルであり、俺とは全く別のステージに立っている女性と付き合っているんだ。

「……………奇跡も魔法も、あるんだなあ」

そんな眩きを漏らしながら、俺は絶対に周りの人にバレずに文香との交際を続ける事を誓った。

どうしても良いけど、サンタのライブ衣装はとてエロくて素敵だったと思います。

××  
ライブが終わり、俺はライブステージの片付けだ。明日とかビニールシートとか全部片付けて、ようやく休めるとなった頃には10時半を回っていた。あと1時間で温泉終了である。

当然、年功序列的に他のスタッフさん達が先に温泉に入った。まあ、知らないオッサン達と風呂に入るのは苦手だし、仕方ないんだけどね。

入浴時間残り30分になり、俺はようやく温泉に向かった。体を流したから湯船に浸かった。男は長風呂とかする奴が少ないからか、俺が身体や頭を洗い終わった頃には誰もいなかった。

これで風呂独り占めである。…………まあ、別に誰かいても良いんだが。ボンヤリしていると、露天風呂があることに気付いた。正直、露天

風呂には興味が無い。ただ、もし女子風呂に文香がいるとしたら？いや、覗きとかじゃなくて、壁越しの会話って少し憧れてたんだよね。

「……………よし行こう」

そう決めて、俺は露天風呂に向かった。腰にタオルを巻いて扉を開けて竹垣の向こうに行くと文香がいた。声じゃなくて本人が。

「……………はっ？」

顔を合わせるなり間抜けな声が漏れた。

「……………ちっ、ちあきっ……………くんっ？」

「ふ、ふみか……………？」

え、なんで？ふみふみなんでここに居るの？ちよつと理解が追いつかない。俺、ちゃんと男風呂に入ったよな？俺が身体を洗ってる頃にはまだオッサン達いたんだから。

……………と、なると、導かれる答えはただ一つしかない。

「……………混浴か」

そう言った直後、文香は顔を赤くして立ち上がった。あ、バカ。立ち上がったら……………！

「ちよー！バツカお前全部見え……………！」

「っー」

慌てて文香は胸と股間を隠して温泉に戻った。俺は両手で顔を覆いながら後ろを見た。

「あの、俺戻りますね……………」

「……………あつ、ま、待っててくださいー！」

帰ろうとすると止められてしまった。で、文香からポツリポツリと声が聞こえて来た。

「……………あつ、あによっ……………女湯には誰もいません、でしたし……………その、一緒に……………」

本気で言ってるのかこいつ。と、普段の俺ならそう思ったが、今日は疲れてイカれているのかもしれない。まあ、ここにはもう誰も来ないだろうしな。

そう思うと、俺は湯船に足をつけた。で、岩を一枚挟んで背中越しで文香と温泉を堪能した。

「……………ふう」

本当に思う。前に一緒にお風呂入って良かった、と。前の経験が無ければ俺は今頃死んでいた。

「……………お疲れですか？」

ため息をついたのを察したのか、文香は質問して来た。

「まあ、それなりに。ていうか、他のメンバーはどうしたんですか？」

「……………他の方々は、先に入りました。私は、千秋くんならこの時間に入って来ると思いました、少し遅れて入浴したのです」

読まれてるよ……………。俺について詳し過ぎだろ。

「……………あ、いえっ。別に一緒にお風呂に入ろうとか思ってたわけじゃないんですよ？私も、混浴だなんて知りませんでしたからっ」

誰も何も言ってるよーよ。

「……………た、ただ、その……………壁越しにお話できたら、良いなあと思いまして……………」

「……………全く同じこと考えてたのかよ……………」

いや経緯は若干違うが。すると、文香はクスツと微笑んだ。

「……………なんだか、嬉しいですね。想い人と同じ事を考えて、それを実行出来るなんて……………」

「ーっ！」

こ、こいつはいつもいつも恥ずかしいことを……………！

これ以上、この話題に付き合っていたら俺の命が保たない。話を逸らそう。

「そ、そういうえばーライブ、見てたよ」

「……………見て、いらしたのですか？」

「はい。俺はアイドルのライブとか、そういうのは素人だから完成度とかはよく分かんねーけど、かなり感動はした」

「……………そう、ですか？」

「ああ。文香っていつもあんな感じなんだな」

「……………あんな感じ、と言うのは……………？」

「なんか、こう……………ノリノリっていうの？普段、本とかアニメ見てる文香からはちよつと想像できなかったから。ようつべとかで動画は見

てたけど、やっぱ生は違うわ」

「……………そうですね。普段は少し暗いかもしれません」

「あ、いや別にそういう意味じゃなくて。ていうか、俺は大人しい子の方が好きだから。ワーワーキヤーキヤー電車の中だろうと平然と騒ぐ学生とか嫌いだし」

「……………たまに、千秋くんって闇が深いこと言いますよね」

「ごめん」

申し訳ない。闇が深いものでね。

「……………でも、千秋くんに感動してもらえたなら、嬉しいです。ありがとうございます」

「まあ、俺素人だけどね」

「……………素人かどうかなんて関係ありません。千秋くんだから、嬉しいんです」

「……………そうですか」

「……………今、照れました？」

「うるせえ」

一々、人をからかうな。

「……………千秋くん」

「？ 何ですか？」

「……………お風呂から上がったなら、時間ありますか？」

「あるよ、全然」

ガルパンBlurryはもうプロデューサーさんに貸しておいたし。

「……………でしたら、屋上に来ていただけませんか？」

「屋上？なんでまた」

「……………お願いします」

「まあ良いけど」

「……………では、私は屋上で待っていますので」

ザバツと文香が立ち上がった音がした。おそらく、上がったのだろう。

俺も一人で残ってても仕方ないので、さっさと上がることにした。

文香に言われるがまま屋上に来た。文香はまだ来てないようで、俺は浴衣姿でベンチに座った。うー寒い。風邪引きそう。

しかし、星が綺麗だ。星が降るようで、とはこの事か。東京じゃこういうの見れそうにないからな。

「……………お待たせしました」

文香がやって来た。走って来たのか、少し顔が赤い。俺の隣に座りながら謝った。

「……………すみません、髪を乾かすのに手間取ってしまって……………」

「あ、全然。凍てつきそうだったただけなんで」

「……………むう、意地悪なんですから」

実際、寒かったからな。

「それで、何？」

「……………いえ、その……………」

「？」

「……………メリークリスマスです」

文香はそう言いながら、プレゼントを俺に手渡した。……………ああ、そっぴやクリスマスだったな。

それと同時に、俺はプレゼントは家に置いて来たことを思い出した。

「あ、ああ、悪い。わざわざ」

「……………いえいえ」

「あの……………俺のプレゼント、家にあるんだけど……………」

「……………はい。楽しみにしてますね」

「開けて良いか？」

「……………どうぞ」

開けると、中にはマフラーが入っていた。

「……………おお、マジか」

「……………喜んで、いただけましたか？」

「ああ。あ、ちよつと待って」

俺はマフラーを巻くと、文香にも巻いた。

「……………わあ」

「……………どう？」

「……………実は、こうなると良いなって、思っていました」

「……………そうですか」

……………にしても、俺だけもらって何も渡せないってのはなあ。何か渡せるものないか考えるが、一つしか思い浮かばなかった。

「あー……………文香」

「……………なんですか？」

「ありきたりだけど、目を閉じて」

「……………はい」

目を閉じてもらって、文香の口に俺の口を近付けた。

まあ、その、何だ。とりあえず、クリスマスが聖夜扱いされてる理由は何となく分かるわ。

才能ある者ほど狂ってる。

翌日、スキー旅行も今日で終わり。まあ一泊二日だしそんな感慨深くはないが。

なんだかんだあったが、前回に比べりや全然楽な仕事だった。今は、朝飯の席。アイドル達と朝飯を食うなんて、それはもう贅沢の一言に尽きるのだろうけど、アイドルが身近になり過ぎて何も感じない。こんなこと言ったら周りの男共に八つ裂きにされるんだろうが……。

そんな話とはかく、今日は午前中だけ遊びたい人だけスキーをして、遊ばない人は部屋で待機とか、とにかくそんな感じだ。

で、俺は遊ばないグループに行った。何故なら、今晚はクリスマスであり、文香と過ごす日だからだ。こんな日に今遊んで疲れ果てて夜爆睡とか笑えないし。

一方の文香は、そんな事は全然考えてないのか、橘さんに誘われるがままスキーをしに行った。カメラマンさんはスキー中のアイドルの写真を撮りに行ったりしている。

そんな中、俺と同じ待機組がもう一人いる。

「新田さん、コーヒーです」

「あら、ありがとう。鷹宮くん」

セルフサービスの珈琲を持ってきた。

「ブラックで良かったですか？」

「うん」

ちなみに俺はブラックは飲めない。甘党なんです。

「鷹宮くんは滑らなくても良いの？」

「はい。疲れましたから……。新田さんは良いんですか？」

「ええ。藍子ちゃんが疲れてしまったそうで」

「高森さんもいるんですか？」

「はい。今、お手洗いの方に」

あーじゃあ高森さんのコーヒーもいるかな。

「高森さんって砂糖いります？」

「ええ。確か必要だと思うよ」

よし、じゃあ今のうちに取りに行くか。座ってた机の上には自分のカフェオレを置くと、コーヒー入れ機に向かった。高森さんの分のコーヒーをいれて戻って、机の上に高森さんのコーヒーを置いた。

戻って来て椅子に座ると、新田さんがコーヒーを飲みながら言った。

「で、文香ちゃんのお付き合いは順調なの？」

「ブフオツ!?!?」

な、なんだいきなり!?!?なんで!?!?どういうつもり!?!?てかなんでバレた!?!?」

いや、待て落ち着け。カマをかけてるだけかもしれない。惚けるベキだ。

「な、何の話……………?」

「惚けなくても結構です。夏休みの終盤から……………いや、夏休みの頭からかな?文香ちゃん、恋する乙女みたいに奏さんに相談してたし、オシヤレとかにも気を使うようになってたから、誰かに恋してるんだろうなーって」

「い、いやでも俺とは限らな」

「いやいや、今回のスキーマの様子とか見てたらすぐに分かったから。あ、この子が文香ちゃんの彼氏だなって」

「……………」

おおう文香あ、分かりやす過ぎるぜ……………」

「……………あの、このことはくれぐれも内密に」

「はい、わかっています。で、どんな感じなの?文香ちゃんと」

ああ、やっぱ、普通の大学生なんだなその辺は。知り合いの恋とか気になるみたいだ。その前に、一つ確認しないと。

「あの、その辺にプロデューサーさんいたりしませんよね?」

「いないよー。そんな罫にはめようとしてるんじゃないから。私だって文香ちゃんの邪魔はしたくないもの」

「なら良いですけど……………」

しかし、どんな感じと聞かれてもなあ。



「まあ、そんな特別な事は無いですよ。割と喧嘩するし、修学旅行には付いて来るし、撮影にはついて行くし」

「そ、それは特別まみれだと思っただけ……し、修学旅行？」

「はい。俺が修学旅行で五日間いないって時に、トライアドプリムスの三人の撮影について来たんですよ、あいつ。まあ、嬉しかったですけどね」

「ふ、文香ちゃんも中々やるなあ……」

引き気味に言われてもなあ。

「けど、文香ちゃん大変なんだろうなあ」

「大変なのはこっちですよ。あいつ、割とむつつりだから」

×

「へっくちー！」

「文香さん、風邪ですか？」

×

「いやいや、そう言うことじゃなくて」

？ どういうこと？

新田さんはコーヒーを飲みながら続けた。

「そうじゃなくてさ、鷹宮くん。アイドルの知り合い多いでしょ？」

「なんで知ってるんですか？」

「事務所がよく鷹宮くんっぽい男の子の話は聞いてたし、今日だって随分とアイドルと話すの慣れてるみたいだったし」

……この人、よく見てるなー人の事。この人の前ではあまり弱み見せないようにしないと。

「まあ、そうですね。知り合いのアイドルは多いです」

「ああ、やっぱり」

「この前またアイドルリストに三人追加されましたし」

「この前？」

「アーニヤさんと新田さんとラウーであった日ですよ。あの日、ボーリング場で島村さんと小日向さんと五十嵐さんとも会ったんですよ。あの時に新田さんと小日向さんと五十嵐さんが追加されました」

「卯月ちゃんとは知り合いだったんだね……。1日でそれだけ知り合

いになるって事は、修学旅行なんかかなり多くと知り合えたんじゃない？」

「いえ、そうでもないですよ？多田さんとだけですわね」

「だけって……そもそも知り合いになれるのがおかしいんだけどね……」

それな。俺もそう思うわ。

「や、あとクラスメートの三村さんもアイドルだったから二人かな？」

「……クラスにもアイドルがいるんだ」

すると、新田さんは「あつ」と声を漏らした。

「話が逸れてたね。つまり、鷹宮くんの周りには可愛い女の子がたくさんいるって事」

「それで？」

「だから、気が気でないだろうなーって」

ああ、そういうことか。

「まあ、俺は浮気なんてしませんから。そんな甲斐性ないし」

「友達いないの？」

「アイドルしか」

「す、すごい返しだなー」

そんな話をしてると、高森さんがトイレから帰ってきた。長かったな、うんこか？いやそんな事聞かないけど。

「ふう……」

「あ、高森さん。コーヒーです。どうぞ」

「あら、ありがとうございます。鷹宮さん」

「砂糖とミルク入れましたけど、良いですか？」

「ええ、ありがとうございます」

机の上のコーヒーを手に取り、一口飲んで息をついた。

「……はふう……」

……な、なんだ？この感じ……。高森さんの周りだけ、なんかやけにほんわかしてるような……。心なしか、高森さんの空間だけ緑色のオーラが見えるような……。

「……………新田さん？」

「…………ふう」

「新田さんっ?」

な、なんだ?新田さんまでのんびりし始めたぞ…………?どういうことなんだこれは…………?ていうか、俺まで変な空気になってきたような…………。

「そういえば、鷹宮さん」

「っ?は、はいっ」

「ちゃんとお話するのは初めてでしたね。高森藍子です」

「あ、ど、どうも」

「そうは言っても、今日でお別れですけどね」

「そ、そうですね」

なんか俺まで頭の中がぼーっとしてきたような…………。はっ、いかにいかにかんかん。アイドルの相手をするのも俺の役目だ、多分。すると、隣の新田さんが声をかけてきた。

「大丈夫?」

「こつちの台詞なんですが…………なんですかこれ。なんか高森さんの周りに緑色のファンシーなオーラが見える気が…………」

「それが藍子ちゃんの能力だね」

「能力!?」

「いや、少し大きさに言っただけ。藍子ちゃんが話すと、『ゆるふわ空間』っていう謎のゾーンが生まれるの」

「何それカッコいいけどカッコよくない」

何その中途半端な能力。

「…………前々から思ってたんですけど、アイドルって割とおかしい奴多いですよ」

「藍子ちゃんはまだ可愛い方よ?他にも、霊が見える子とか、サンタクローズな子とか、ブリュンヒルデな子とか、キノコとかいるし」

「…………」  
ファンの人達はそんな現状を知ってどう思うのだろうか。いろんな意味で闇の深いアイドルの深淵を聞いて、俺は黙って何も考えないことにした。

×××

スキーが終わり、帰宅。新潟からバスで帰宅する事になった。ここからも俺の仕事はある。アイドル達への差し入れの配布、サービスイリアでの面倒、全部俺の役割だ。ま、今回は新田さんと言うスーパー常識人がいるので問題ない。ほんとこの人神だわ。女神かな？

あつという間に事務所に到着し、アイドル達は先に解散した。俺は機材の片付けがあるため残った。

しばらく片付けをして、給料をもらってようやく帰宅の時間になった。文香にもらったマフラーを巻いて駅に向かって歩いていった。

駅前のスタバを通り掛かった所で、スマホが震えた。

ふみふみ『横を見て下さい』

との事で左を見たが、何も無い。逆かと思つて右を見ると、文香が手を振っていた。

こつちこつち、と手招きされ、一度店に入った。

「何してんの？」

「……待っていたんです。さ、帰りましょう」

すぐに帰るなら店の中に入れた意味ないだろ……。そう思いながらも口には出さずに電車に乗った。

最寄駅に到着し、スーパーで今日の晩飯を買うと、文香に声をかけた。

「ごめん、クリスマスプレゼント取りに行くから一旦家帰るわ」

「……………あ、でしたら、私も一緒に伺います」

「へっ？」

「……………マフラー、失礼しますね」

俺の首元のマフラーを外し、二人で巻けるように巻き直してくれた。

「……………人前でこれやるの？」

「……………嫌ですか？」

「嫌ではないですが……………」

は、恥ずかしい……………。ていうか、周りの目とか…………。

自宅に到着し、プレゼントの袋を持って鞆に入れて家を出て、文香

の家に向かった。

今更だが、東京も雪は降っていないなかったものの積もっていた。

「うー、さむさむ。暖房つけようぜ」

「……………そうですね」

文香は暖房をつけ、マフラーを外し、上着を脱ぐとハンガーにかけて干し、お風呂を沸かした。

それを見ながら、俺もマフラーと上着を脱いでハンガーにかけた。

「晩飯にするか」

「……………はい」

二人でキッチンに立った。やはり、クリスマスといえばチキンだろう、という事になり、鶏肉である。

なんかこうして二人でキッチンで料理していると、新婚みたいな感じで何となく楽しい。なんて少し妄想しながら調理していた。

「あ、文香。ごめん、醤油取って」

「……………はい。……………どうぞ」

醤油を取ってくれて、ありがたく受け取った。だが、その俺の動きが止まった。

「……………文香、それ新しいエプロン？」

「……………はい。この前、買いに行きまして……………。どうですか？」

「あ、ああ。似合ってるよ」

「……………ありがとうございます」

青いジーンズ生地のエプロンだ。似合ってはいるが、それ以上に新妻っぽいな……………。ホント、結婚したいわ。まあ、俺が就職するまで待機だが。

「……………高卒で就職しようかな」

「……………大学には行かれないのですか？」

あつ、やべつ。声に出た。

「いや、冗談ですよ」

言いながら調理に戻った。

実際、マジで結婚するつもりなら、やはり将来の事を考えて大学は出るべきだろう。それまでは我慢するしかない。

文香も調理に戻り、世間話のように聞いてきた。

「……………そ、そうですか。ちなみに、千秋くんは文系と理系、どちらなんでしょうか?」

「理系です」

マスター器用貧乏とも言える俺なら、なるべく楽できる道を選んだ方が良いだろう。

「……………将来は、何になりたいんですか?」

「んー、まだ決まっちゃいないけど……………考えてるのはアイドル事務所のプロデューサーですかね」

「……………何故、ですか?」

「まあ、二回もバイトしてるから就職しやすそうってのもあるけど、文香の担当になりたいってのもあるかな。なれば、人目を気にせずに二人で出かけられるじゃん」

その時は、着るものはスーツになりそうだけど。

「……………そう、ですね。そうなれば素敵です」

「まあ、迷ってるんだけどな。俺が就職する時は文香は26だし、いつまで一緒に仕事できるかわからないから。俺が他の子の担当になっ

て一緒に出掛けるような事があつたら、文香も嫌でしょ?」

「……………それはそうですが、千秋くんの進路ですから、千秋くんが決めたら良いと思いますよ」

「だな」

そんな話をしたら、料理が完成したので食卓に運んだ。

## 事務所では（４）

12月27日、その日文香は事務所に来ていた。年末の事務所の大掃除である。ほとんどのアイドルが集まって、レッスルームや更衣室などを掃除する日である。

で、文香、奏、ありすの三人は更衣室を掃除していた。

「……………そう。ありす、つまり文香とバカ宮くんは特に何もなかったのね?」

「はい。夜に屋上でキスしてたくらいです」

「……………待ってください。見てたんですか?」

「私はお二人の監視役ですから」

「……………私達って、そんな信用ないんでしょうか……………」

「ないわよ」

そう言われ、文香はガツクリと肩を落としました。

「普段の文香は良いけど、鷹宮くんが関わるとどうも……………ねえ?」

「はい。文香さん、とても浮かれていましたし」

ありすにまでそう言われ、少し泣きそうになりながら掃除を進めた。ちなみに、今日は千秋も自分の部屋を掃除しているはずだ。事務所での仕事が終わる次第、文香が様子を見に行くことになっている。

その時に八つ当たり気味にからかってあげよう、なんて考えながら文香はモップで床を磨いていた。

「……………」

やがて、何を思ったのか頭上でモップを振り回して構えた。

「戦闘モードへ移行。今から私はかぶき町のゴミを一掃するまで止まりません」

そう言いながらモップから炎が出てる（イメージ）で周りに向け回す文香の肩に奏が手を置いた。顔が若干濡れている。

「……………あつ」

「文香?遊んでないで仕事しましょう?」

「……………すみませんでした」

怒られて真面目に掃除に戻る文香。その文香にありすが聞いた。

「ちなみに文香さん、今のは何の真似ですか？」

「……………今のは、銀魂のたまさんですよ。モップから火が出るんです」  
「それはラノベですか？」

「……………いえ、漫画です。面白いですよ。千秋くんの部屋に全巻あるので借りましょうか？」

「いえ、漫画とか子供っぽいものに興味はありませんので」

そう言いながらも顔には「気になる」と書かれているのを察し、文香はニヤリと微笑むと再びモップを構えた。

「逃がさん。水面を駆けるは不撓の魔弾。ロック！『不撓燃えたつ勝利の剣』!!？」

「そ、それは何のアニメですか!?!？」

「……………Fate／です。いえ、FGOをやった方が早いでしょうか？  
来年の7月に復刻来ると思いますのでそれまで待つ事になりそうですが」

「ふむ、なるほど……………。あ、いえ、全然興味ありませんが」

さらに文香は調子に乗って構えようとする、奏がまた後ろから殺気を放って文香に声を掛けた。

「文香?。」

「……………はい、すみません」

「次はないわよ」

怒られたので今度こそ真面目に掃除を始めた。まったく、と声を漏らしながら奏はロッカーを拭いた雑巾を絞ろうとすると、バケツの水がかなり汚れることに気付いた。

「少しバケツの水交換して来るわね」

「……………あ、はい」

そう言って奏が出て行った直後、文香はモップを構えた。

「卍、解『神殺鎗』」

「おおおお！」

最早、モップは関係なくなってるが、とりあえずカッコ良いのでありすは感動した。それを見るなり、アニメの事を自慢げに語っていた千秋の気持ちがよく分かった。他人の知らないことを説明するの楽



しい、みたいな。

「卍解『天鎖斬月』!!?」

「て、天鎖斬月!?!」

「……これはですね、放出される霊圧を全て小型に凝縮する事で速度を特化させる卍解なんです」

「よくわかりませんがカッコ良いです!」

続いて、今度はモツプを逆手に持って前に突き出すと手を離れた。当然、モツプは倒れるが続けた。

「卍解『千本桜景厳』終景『白帝剣』!!?」

「そ、それはなんですか!?!」

「……これは千本桜景厳で作りに出した千本の刃を全て一本に押し留めた形態ですね」

「なるほど!」

本当にわかっているのか微妙だったが、次の卍解をしようとした所でその動きが止まった。扉の向こう側から、神崎蘭子と二宮飛鳥が目を輝かせて見ているのに気付いたからだ。

それを見るなり、なんだか文香は楽しくなってきてしまった。

「卍解『残火の太刀』……!」

「「おおおおお!」」

×バカが始まった。

×

×バケツを入れ替えた奏は、少し疲れたので自販機で飲み物を買った。

せつかくなので文香とありすの分も買って行こうと思い、ココアを三つ購入した。

自分達の持ち場に戻ると、何やら騒がしいことに気付いた。中を覗くと、文香を中心に中学生達が集まっていた。何人かメモしてる奴もいる。

「花風紊れて花神啼き 天風紊れて天魔啗う『花天狂骨』」

人が集まってきて楽しくなってきた文香は、ノリノリでモツプと箒を一本ずつ持った。そこからさらに胡座をかいた。

「卍解『花天狂骨枯松心中』」

「かてん……何？」

「いや、まずは聞こう」

「一段目『躊躇疵分合』。相手の体についた疵は分け合う様にも自分の体にも浮かび上がる」

理解してる者もいれば、してない者もいる。それでも構わずに文香は続けた。

「二段目『慚愧の褥』。相手に疵を負わせた事を悔いた男は、慚愧の念から床に伏し、癒えぬ病に罹ってしまう」

そして、文香はモップを下に、箒を上に向けて構えた。

「あれよあれよと三段目『断魚淵』。覚悟を決めたものたちは、互いの霊圧の尽きるまで湧き出る水に身を投げる」

文香は最後の動きに合わせた。

「女の情けは如何にも無残、あたる男に貸す耳も無し、いとし喉元光るのは、未練に濡れる糸白し、せめてこの手で斬って捨てよう、無様に絡む未練の糸を、此にて大詰めの段『糸切鋏血染喉』」

直後、モップで何かを斬るモーションをし、モップについていた水滴が奏の顔に掛かり、中学生達から歓声が上がった。

「すごい！カッコ良い！」

「なんですか!??何のアニメですか!??」

「文香さん、メの段もつかい言って！」

「メモメモ……」

などと声が上がリ、文香が胸を張っていると奏のぶん投げた雑巾が文香の顔面にヒットした。

中学生達は振り返ると、激おこの奏を見るなりありすも含めて退散した。

「一段目はお互い、同じ傷を受けるんだっけ？」

「あつ……か、奏さん……」

「二段目は一生癒えない病だったかしら？」

「……す、すみませんでした奏さん……!」

「女の子同士でキスしたなんてなったら心にどんな病が起こるのかし

らっ。」

「っ!!?ま、待って下さい!私彼氏いるんですよ!!?」

「大丈夫よ、お互い病になるから二段目通りだから」

「そう言う意味ではないのですが!!?」

ジリジリと冷たい霊圧を放ちながら近付いてくる奏と、涙目で退がる文香。だが、すぐに壁に追い込まれてしまった。

「かつ、奏さん……?冗談ですよね……?」

「……………」

「……………か、奏さん……?聞いてますか……?」

「……………」

「唇を尖らせて迫って来ないで欲しいのですが……!」

「……………」

「かなっ……!」

×

更衣室の掃除が終わり、奏は安心して文香を捨て置いてロビーに戻った。

ソファーに座って、思わず大きなため息を漏らすと、その隣に周子が座って声をかけた。

「どうしたん?」

「……………ああ、周子。大したことじゃないのよ。ただ、文香バカになっただなーって」

「あー……………」

悲しげに周子は目を逸らした。

「ま、まあ、良くも悪くも純粋な子だし、影響されやすいんだよ。きつと」

「でも、もう少し弁えてくれないかしら……………」

「そうだねえ、あたしから言おうか?」

「いや、平気。多分、懲りてるから」

「そ、そう」

何をしたか聞いた方が良いのか迷ったが、避けておいた。あまり聞きたくなかったし。

で、とりあえず話題を変えることにした。

「そういや、最近あの子どんな感じなん？」

「あの子？」

「ほら、鷹宮くんだっけ？」

「ああ、相変わらず文香とはうまくいってるみたいよ。その結果が今の文香だし」

「面白い子だったからまた会って話したいなー」

「クリスマスなんて、わざわざバイトしてまで文香の仕事についてきたのよ？」

自分の所為とは言わないでおいた。

「へえー、彼女の為にわざわざ？」

「まあ、その彼女の方も修学旅行について行ってただけどね」

「……………なーんか、あれだね。バカップル？」

「意味通りじゃなくて本物のバカ同士だけどね」

「奏はどうなん？」

「？ 何が？」

「彼の事はどう思ってるん？」

「バカ」

「そうじゃなくて。奏ってキスしたがる割りに浮いた話聞かないから」

「ああ、鷹宮くんが彼氏だったらって？絶対嫌」

「これまたハッキリした拒絶」

「嫌よ。あんな面倒な男相手にするの。性格は悪くないけど、それ以上で女の子の事も分かってないもの」

「あー、確かにそんな感じするかも」

散々な言われようだが的確だった。

「でも、性格は悪くないんだ？」

「ええ。もう少し女心が分かればまだ良いんだけど」

「ふーん？」

すると、プロデューサーが二人のところに来て来て声を掛けた。  
「二人とも。持ち場の掃除は終わったのか？」

「更衣室は終わったわよ」

奏に答えられると、続いて周子を見た。

「あたしも終わったよー?」

「周子はん! サボらんといてくれます?」

「……………」

小早川紗枝からそんな声が聞こえてきて、周子は黙り込み、プロデューサーと奏はジト目で周子を睨んだ。

「……………あ、あたしトイレ」

「行きなさい」

「……………」

無言で周子は紗枝について行った。

どんなに気を付けていても、事前に蒔いた種はどうしようもない。

文香に言われて、俺は部屋の掃除をしていた。すぐに飽きた。

まあ、さつきよりは綺麗になったし、大丈夫だよね！という楽観的思考で俺は逃げ出した。

財布とスマホとスマホの充電器と交通ICを持って家を出た。これだけあれば十分暇を潰しに行ける。とりあえず、どっか暇潰し出来る所を探さなければ。まあ、そんな場所は限られてるわけだが。

電車に乗って5分ほどで降りた。文香の事務所の最寄り駅な訳だが、この辺にはカラオケがある。平日だし安く暇潰しに出来る。

一人カラオケは良いよ？誰も気にする事なく歌えるし。どんな歌を歌ってもドン引きされない。て言うか俺の知り合いアイドルだから一緒に行きたくない。

そんな事を考えながら歩いてると、なんかすごい派手な格好した女の子とドンつとぶつかった。

「あ、すみません」

「い、否。問題ない」

い、否……………？いや、聞き違いかもしれないし……………。

その女の子はもう一人友達がいたようで、二人揃って顔を隠すようにさつさと歩いて行ってしまった。何なの？アイドルなの？

まあ、とにかく気にせずにカラオケ行こうと思って歩き出そうとすると、足元に何かが落ちてるのに気づいた。

「……………なんだこれ」

なんかアニメとかでよく見るような表紙の本なのに薄っぺらい。ノートの表紙に書いたが、紙で書いたのを表紙に書いたか……………ていうか、これ俺見ちゃいけない奴なのでは……………。

よく言うところの魔導書かグリモアールか神界日記がデスノートか……………いや、デスノートはないな。

とにかく、見られたら一番恥ずかしい、ある意味パンツを見られる

より恥ずかしいものだろう。

「……………」

どうしよう、間違いなくあの女の子のだよなあ。警察に届けるのも可哀想だし……………」

でも、俺が保管していたところであの子とこれから会う事なんてあるのか？しかし、ここに放置したら周りに見られ、T w i t t e rとかで拡散されそうだし……………」

「俺が預かってた方が良いか……………」

持って帰ろう。そう思って、とりあえずながらスマホをしながらカラオケに向かった。

だが、想像以上に早く再開する事になった。カラオケにさつきゴスロリの女の子とそのあとをについて行っていた子がいた。ちょうど良かった、ノート返そう。

「あの、すみません」

「っ!?」

声をかけると、ビクツと肩を震わせる二人。俺を怪しい人を見る目で見て来た。おい、なんでだよ。変質者に見える？嘘だね。

「あ、いや……………」

「へっ?」

ノートを差し出した直後、ゴスロリの方が1発で顔を真っ赤に染め上げた。

「あー大丈夫ですよ。これ中見てないで」

「す、すみません!この人も私達と同じ部屋で!」

「えっ」

「えっ」

「へっ?か、畏まりました?」

「えっ、いやなんで……………」

「お客様、学生証はお持ちでしょうか?」

「え?は、はい」

学生証を見せ、なんかいつの間にか流れで一緒の部屋に行く事になってしまった。

で、部屋に入り、俺はホツと息を吐きながら椅子に座った。直後、ゴスロリの方が壁ドンするかの如く、俺の真後ろの背もたれに手をついて迫って来た。すごい迫力だが、顔が真っ赤なので全然怖くない。

「あ、あのっ!」

「えっ、何」

「……………貴様は我が禁じられた魔導書を開いたか!?!?」

「おい、普通に喋れ。わけわかんねーよ」

なんで人を巻き込んで置いて自分の世界の言葉を使ってるんだよ。ていうか、口調まで厨二病真っしぐらか。

「……………その、このノートの中、見ました……………?」

「見てないですよ。……………見なくても大体察したんで」

ううっ、と顔を赤くして俯くゴスロリ少女。すると、隣の茶髪さんがようやく口を開いた。

「ま、まあまあ蘭子。見られていないなら良いじゃないか。君も悪かったね、蘭子が勝手な事を」

僕?って、こいつ何処かで……………。

「……………ああ、二宮飛鳥か」

「! 僕を知ってるのかい!?!?」

「まあ、一応」

文香とユニット組んだことある人は基本的に覚えてるし。ていうか、お前ボクっ娘かよ。

「って事は何?こっちのゴスロリもアイドルなんですか?」

「……………僕は知ってて蘭子は知らないのかい?」

「え、なんで?」

「……………今年の夏にユニット組んでるんだけどな」

今年の夏の大半は文香と付き合ってたからなあ。しかし、アイドルでも厨二病になるのか。本当、アイドルと知り合うたびに後悔するシステムなんかありませんかね。

「彼女は神崎蘭子。で、僕は二宮飛鳥」

「ふーん……………」

俺も名乗った方が良いのかな。でも、相手はアイドルだしこれから



会う事も……いや、逆だ。アイドルだからこそこれから会う事があるかもしれないわ。

「君の名は？」

「タキくん？」

「いやそうじゃなくて。セカイに定められし君の真名だよ」

「……………二宮さんもそっち側でしたか……。いや、もう良いや。」

「鷹宮千秋だよ。アイドルなら『セルスリット』って言った方が分かりやすいかも」

「あの有名な？？」

「ほら見たことか。」

「男の人だったんだ……………」

「おお……………あの伝説の……………！」

とうとう伝説にまでされちまったか俺は。

しかし、この二人は分かりやすいぞ。俺のぷそのフレンドはほとんどがアイドルな訳だが、その中でも黒主体のゴスロリで翼が六枚くらい生えてて、墮剣グラムの武器迷彩を厨二臭いこと言いながら振り回してる女の子だろ。名前は確か……………。

「ブリュンヒルデさん？」

「！ うむ、我こそが破壊と」

「普通に話せ」

「……………はい。私がブリュンヒルデです」

「やっぱり」

分かりやす過ぎるんだよなあ。もう、そのノートからして分かるから。多分、あのクオリティの高いノートにはぶそとかで使ってる台詞も書かれてたりするんだろうなあ。

「しかし、よく作ったなそんなノート……………」

「ひうつ……………」

神崎さんがノートを大事そうに抱き締めてる姿を見て、ボソツと呟いた。だって、すごいくない？あのクオリティ。なんでそんなもん描けるんだよ。

「それ、全部ペンだけで描いたんですか？」

「ああ、アレは全部蘭子の自作だよ」

マジか。Twitterとかで拾って来た画像を印刷して貼っ付けたわけでもないのか。スゲエな。

「ふーん……。俺も中二の時にそういうノート作ろうと思った時があったよ。……。絵が描けなくて完成前に捨てたけど」

「ああ、蘭子は絵を描くのも上手いんだ」

「カッコ良い能力とかは考えた事あるんだけどな」

ほとんどパクリだったが……。それもほとんどBLEACHとナルトを混ぜたようなパクリ。

「どんな能力を考えたんだい？」

「あ？えーつと……。オリジナルの斬魄刀の能力とか。なんだっけな……。欺け『水月鏡像』だったっけ」

「おおっ!?!？」

うおお、なんかウケたみたいだ。二人とも興味津々。けど、もうやめてね。トラウマがドンドン掘り返されて来てるから。名前は鏡花水月のパクリだし、能力は確かイザナミを無理矢理斬魄刀用に合わせたような奴だし。

問い詰められる前に帰ろう。

「まあ、とにかく用事も済んだし俺帰りますね。金は置いて行きますから」

無駄金だった。そう思って財布を開けると、「あつ、あのっ……。」と神崎さんの方が口を開いた。

「……………わ、我が魔道書を手にした愚者よ。これも何かの縁と言えよう。共に鎮魂歌を」

「普通に話せ。誰が愚者だコラ」

「……………あ、あのっ……せつかくですので、一緒に歌いませんか？」

「……………」

まずい、気に入られてしまったみたいだ。何が悲しくて厨二アイドルとカラオケなんてしなきゃいけないのか。

「や、いいです」

「良いつてよ、蘭子！」

「えっ? いやそうじゃなくて……」

「うむっ! では、参ろうか!」

完全に同族扱いですか……。いや、まあ良いや。元々、俺も時間潰しのつもりで来てるし。

「二人とも歌ってどうぞ。俺は聞いているからさ」

「? 良いのか?」

「ああ。アイドルの歌が間近で聴けるだけで金払った価値はあるし」

まあ、アイドルに興味ないんだけどな。ただ、プロを目の前に歌う勇気がないだけです。

で、採点を入れて先に歌い始めたのは神崎さん。歌ってる最中に二宮さんの耳元で聞いた。

「……流石、アイドルだけあつて歌上手ですね」

「まあね。レッスンでも歌ってるし」

歌ってる曲はグラブルのOP。メチャクチャ美味しい。ていうか、グラブルのフレンドにもブリュンヒルデさんいるけどもしかして本人ですか?

……あれ? つーか、今日はアイドル達って事務所の掃除じゃなかったか? 「ていうか、今日ってアイドル達、事務所の掃除じゃないんですか?」

聞いた直後、二宮さんの視線が攻撃的な視線に変わった。ジロリとジト目で睨みつつ、一人分くらいスペースを空けた。え? 俺なんかまづいこと言った?

「……なんでそれを知ってるんだ? 事務所の人間でもないのに」

あつ、やばっ。アイドル相手に気が抜けた。どうしよう、文香の事は言わない方が良いし……。

「三村さんから聞いたんですよ。あの人、同じクラスなんですよね」

一番リアリティあるのはこれだろう。本当に同じ学校だし、後でケーキ奢って口裏合わせてもらえば済む。

「……三村さんって、三村かな子さん?」

「そう。修学旅行同じ班だったし、その先でトライアドプリムスと多

田さんと会った」

「へ、へえー……。ていうか、歳上の人だったのか」

「タメ口で構わないですよ」

歳下だろうとは思ってたけど、本当に歳下か。いや、まあ気にしないけど。

「事務所の掃除は僕らが担当の所は手早く終わらせたからね。それまで自由時間をもらったから、その間にノートをまとめておこうと思つて」

「ノート？学校の宿題？」

「いや、蘭子の持ってた」

「把握」

「さつき、更衣室で文香さんからカツコ良いフレーズを教えてもらったからね」

「文香って、鷺沢文香？」

「知ってるんだ？」

彼女だからな……。ていうか、何を教わったんだ？とても気になるが見ちゃいけないような気もするし聞くのはやめよう。本人に聞こう。

そんな話をしていると、神崎さんが歌い終わり、次は二宮さんの番。二宮さんはやはりというか何というか、ボカロ曲を入れていた。そういうの好きそうだな。

「鷹宮さん、我が鎮魂歌は」

「普通に話せ」

鎮魂歌なんて歌ってねーだろ、縁起でもねーこと抜かすな。

「……………わ、私の歌はどうでしたか？」

「上手かったですよ。目の前にグランとルリアが見えました」

「そ、そうですか……………」

「シルヴァ姐さんが出たのに一言も喋らなかつたからなあ……………」

「祈る暇は与えん！」

「ビューネラルブリット！」

「……………うるさいよ二人とも」

怒られたので黙りました。

二宮さんも歌い終わり、次は神崎さん……かと思つたら二人は俺にデンモクを渡して来た。

「はい、鷹宮さんの番」

「……………えっ、俺？俺はいいよ」

「ダメだよ、せつかくお金払つてるんだし」

さつき納得したんじゃねえのかよ……。だが、こうなると女性は面倒な事を俺は知っている。絶対、引き下がらないからな。

仕方なくデンモクを受け取り、曲を選んだ。……………他人とカラオケ来たの初めてなんだよなあ。他の人が知ってる曲を選ばないと……。……………これで」

入れたのは、レアドロ K O I 恋。超盛り上がった。やつぱps  
o2は偉大ですわ。

××  
あつという間に時間は過ぎ去り、退室した。途中で三村さんにも「後でケーキ奢るから口裏合わせて」と言つておいたし、問題ないだろう。

「あー……………疲れたあ」

「鷹宮さん、そこそこ歌上手いね」

「そこそこな」

曲によつては超下手だし、人に誇れるほどでは無いが。しかし、誰かとカラオケ行くのは割と悪く無いな。今度、文香でも誘つてみるか。

とりあえず、二人を事務所まで送ろうと思つて三人で事務所に向かった。

神崎さんもノートのことすつかり忘れたみたいだし、二人も楽しんでいたみたいだし何よりだ。今年の終わりにトラウマなんて作りたく無いだろうし。

……………そういえば、もうすぐ今年も終わりか。今年は随分と濃い一年だったなあ。アイドルと知り合つて、アイドルに勉強を教えてもらつて、アイドルと付き合つて……………。まあ、どれも楽しい思い出

だったし良いんだけどね。

何より、文香と付き合えたのが一番大きいかな。喧嘩したりもしたけど、文香のお陰で久々に楽しい時間を過ごして来れたと思う。この文香と付き合っていていられる時間が、永遠に続いてくれれば嬉しい。

いや、気を抜くわけにはいかない。結構、喧嘩もしてるし、今年の終わりまでは俺も文香を怒らせないようにしないと。

そう決心した時だ。

「……………千秋、くん？」

事務所の近くまで来た時、コンビニの袋を持った文香が声をかけて来た。

「……………ああ、文……………鷺沢さん。お久しぶりです」

脳内電源を切り替えて声をかけた。直後、文香の表情が変わった。俺の両サイドに二宮さんと神崎さんがいたからだ。

「……………鷹宮くん？今度はハーレム計画ですか？」

「ひえっ」

だが、これで終わらなかった。

「あつ、鷹宮くん！ケーキ、奢ってくれるんだよね!?!？」

三村さんが駆け寄って来た。

今年最後の修羅場が幕を開けたので、とにかく謝り倒した。

どんな時でも冷静さは失わず、自分を客観的に見る術を身につけよう。

部屋の掃除のサボりがバレ、文香にドミネーター型エアガンで脅されながら掃除を終えた翌日、俺は文香と一緒に駅前に来ていた。まあ、目的は一つしかないよね。

「お待たせ、鷹宮くん、文香さん」

「ああ、三村さん。別に待ってないよ。ベルファストと無双してたし、なんなら夢想してたまであるから」

いやー、育てる事に熱中しててストーリー全然やってなかったんだな。ボスクラスの相手を台所の汚れより歯ごたえ無くぶつ潰していく銀髪メイドさんマジ可愛い。

「……………千秋くん？何を夢想していたのですか？」

「いえ、なんでもないです」

後ろから氷のオーラを醸し出して文香が言ったので慌てて黙った。相変わらず、ラスボス街道一直線な文香だなあ。どのゲームでもラスボスはれるんじゃないかこの人。

「ていうか、文香だつてキリトでいつも妄想してるんだから別に怒らなくても……………」

「……………」

え、なんでそこで急に頬を染めるの？恋してるの？キリト殺そう。

「あっ、キリトさんってアレですよ？文香さんがよく、奈緒ちゃんや比奈さんと一緒に鷹宮くんとB……………」

「わ、わーわーわー！早くケーキ食べに行きましょう！二人とも！」

B……………？なんだろ。俺とあのムカつくリア充が一緒にしてBから始まるもの……………」

「……………BBQか？」

「考えなくて良いですから！早く行きましょう千秋くん！」

との事で、ケーキバイキングに向かった。まあ、年末にこんな所に来るのはどうなんだろう、とか考える事は色々があるが、俺が奢ると

言った以上は仕方ない。

近くのケーキバイキングに到着し、入店した。お支払いは後らしいので、さっさと席に座って二人に言った。

「じゃ、好きなもん取って来いよ。俺待ってるから」

「うん」

「……………よろしければ、千秋くんのものを取ってきますが」

「良いよ別に」

「……………そうですか？では……………」

二人がケーキバイキングに向かい、俺は一人でスマホを取り出した。暇なので、種火周回する事にした。ほんとはベルファストと出撃したい所だが、燃料がないんです。許して下さい。

両儀式で暴れてると、「あれっ？」と聞き覚えのある声が聞こえた。ふと見上げると、多田さんと見知らぬ女性が立っていた。

「鷹宮じゃん、何してんの？」

「FGO」

「……………ケーキ食べなよ」

「いや、他二人がケーキ取りに行ってるから席を死守してるんだよ。いわば、これは防衛任務だ。これ以上にならないほどの重要な仕事だぞ？」

「いや大袈裟だし……………」

すると、隣の女の子が多田さんの肩を叩いた。

「この人は？」

「ん？前に話した修学旅行先でおんぶしてくれた人」

「ああ、この人が例の彼女がいなかったら彼氏にしても良かった」

「ちよつとそれは人前で言うことじゃないから黙ってお願ひみくちやん！」

「むぎやっ!?？」

口を塞がれるナントカさん。イチヤイチャしてないで紹介するか立ち去ってくれねーかな。

すると、多田さんが俺達の隣、つまり三村さんの席に座り、もう片方は俺の隣に座った。



「ね、せっかくだから一緒に食べても良い?」

「返事する前に座つちやつてるね。別に良いけど」

「やったね。みくちゃん、ここにしようよ」

「へ?でも、鷹宮チャンも誰かと一緒に来てるんじゃないやあ……」

「大丈夫だよ、鷹宮の知り合いなんてどうせ……」

そう多田さんが言った直後、文香と三村さんが戻って来た。それを見るなり啞然とするみくちゃんとやら。

「……お待たせしました、千秋くん……あら?」

「あれ、李衣菜ちゃんとみくちゃん?」

「……………」

「ね?私達の知り合いでしょ?」

ていうか、鷹宮チャンってなんだよ。なんでいきなり馴れ馴れしくなってるの?別に良いけど。

久々にJKみたいな奴と会ったな、そう思っていると、轟ツと嫌な風が吹いた。文香が、お得意の笑ってない目を俺に向けていた。

「…………ふふふ、千秋くんったら。少し目を離れた隙にこれですか?」

「いや、違うんですよ……。別に俺から声かけたわけじゃ……」

「そ、そうそう、文香さん。今回は私から声かけちゃったの。ごめんね?」

多田さんがすかさずフォローしてくれた。こういう所は良い人だなこの人。

「? どういう事にや?」

えっ、今「にや?」って言った?いや、それより言うわけにはいかない。何とか誤魔化さないと。

「ああ、あ……」

困った顔で多田さんが俺に目を向けてきたので、俺は三村さんに向けてサインを送った。左肩、左肘、左手首を順番に触った後、帽子のツバを触るフリをし、最後に左耳たぶに触れた。

直後、三村さんは微笑みながらフォローに入った。みくちゃんの隣に座り、耳元で何か囁いた。

「……………文香さんは、鷹宮くんの事が好きなんだよ」

「にやつり!? ホントに!?」

おい、にやつてなんだよだから。スゲエ気になるんだよ。そして痛いんだよ。ちなみに、今のサインは「誤魔化せ」のサインな。あながち嘘でもないし、何とかなるな。

「へえー……ふーん……?」

ニヤリとみくちゃんは文香を見上げた。うん、まあ付き合ってるんだけどな実際。まあ、嘘は言ってないし良いか。

戻って来た女子二人は、文香は俺の隣に座り、三村さんは多田さんの隣に座った。……普通アイドルに囲まれたな。慣れてる自分が怖いわ。

で、今度は俺達がケーキを取りに行く番である。

「じゃ、行こうか」

多田さんに声を掛けられ、俺とみくちゃんは立ち上がった。で、この人いい加減名前なんなのよ。

ケーキを選んできると、みくちゃんが俺の隣に立った。

「ね、鷹宮ちゃん」

「なんですか。ていうか、名前教えてもらえませんかね」

「……私の名前知らないにや?」

「あとその猫語やめろ。メチャクチャ可愛い軽巡洋艦思い出す」

うちの艦隊の中で三人目の嫁艦だからな。

「……可愛いなら良くない?」

「良くない。普通に話せ」

自分の中の世界を周りに押し付けるのは好きじゃない。それで痛い目見てるし。主に中学二年生の時に。

「むー……私は前川みくです。よろしく」

「一応聞くけど、アイドルなんでしょ?」

「……ホントに私のこと知らないの?」

「知らんがな」

悪かったな、知らなくて。

「それで、鷹宮ちゃん」

「何?」

「今、好きな人とかいる?」

あー……そうか。こいつには文香との関係伏せてるし、そりやそういうの気になるよな。

「いねーよ」

この返事がベストだろう。

「ふーん?じゃあ好みのタイプは?」

「なんでお前に話さなきゃいけねーんだよ」

「まあまあ、良いでしょ別に」

「……………」

むう、まずいな。こういう、THE・JKタイプは俺の一番苦手なタイプだ。まず間違いなく面倒臭いからな。そして絶対に逃がしてくれない。

すると、多田さんが俺と前川さんの間に入って耳打ちした。

「みくちゃん、ダメだよ」

「?李衣菜ちゃん?なんでにや?」

「……………あんまり距離近いと、文香さんが」

「……………あつ」

察した前川さんはふと文香の方を見た。幸い、三村さんと仲良くお話ししていたので問題無かった。

「ご、ごめん……………」

「いや俺に謝られても」

「あれっ?」

前川さんが何かに気付いたような声を上げた。

「……………待つて?鷹宮チャン、彼女いるんだよね?」

「あん?」

「……………あつ」

多田さんが「やつべ」みたいな声を上げた。何かある、と一発で察した俺は多田さんの肩を掴んだ。

「……………ちよつと話があるんだけど……………いいよな?」

「……………はい」

「前川さん、悪いけど先に席に戻ってて」

「え？あ、うん。はい」

写輪眼を開眼する勢いでお願いと従ってくれた。

多田さんを店の隅に連行し、壁に追い込んだ。

「おい、どういう事だ？もしかして、言ったのか？俺と文香の関係」

「正解☆」

直後、多田さんの後ろの壁に手をついた。正解☆じゃねえよ、可愛いなちくしょう。

「っ!? たっ、鷹宮っ?」

「どういう事だ。かいつまんで話せ」

「いやっ、その……それよりこの状況は……?」

「いいから話せ。返答によつては」

「……よ、よつては?」

「iTunesカード奢らせる」

「……ち、ちっさいなー……。鷹宮に期待した私がバカだった……」

何を期待したのか知らないけど、とりあえず話を聞こう。

「別に、話したってわけじゃないよ……。ただ、その……文香さんと付き合ってることを隠しつつ、修学旅行で鷹宮と会えたことを話したっただけで……。まあ、その……鷹宮に彼女がいるってことを言っただけ」

「なんで言ったんだよ」

いや、そこからアイドルを連想する可能性なんてかなり低いけど、それでも可能性はゼロではないし、俺がボツチであることもアイドルと知り合いであることも知ってるプロデューサーさんの耳に入れば「もしかしてうちのアイドルか?」となる可能性も無くはない。

すると、多田さんは顔を赤く染めて上目遣いで俺に言った。

「……………言わなきや、ダメ?」

「いや別に言わなくても良いけど。興味ないし。ただ、他の人にはあまり言って欲しくないってだけ」

「……………興味ない?」

「ねえよ。思い出話しの流れでつい言っちゃったって事もあるだろうし」

「……………」

「……………あれ、なんで怒ってんの？どちらかというと怒るのは俺の方だと思っただけ……………。少し困惑してる時だ。」

「……………千秋くん？」

後ろから驚くほどの冷たい声が聞こえた。慌てて振り返ると、文香が俺の事を超睨んでいた。

「……………みくさんに突然『叶わぬ恋だけど頑張つてにや！』と言われて来てみれば……………。付き添いとはいえ、彼女と遊びに来ている中、他の女の子に壁ドンとは良い度胸してますね……………」

「は？か、壁ドン……………」

改まって自分の状況を確認してみた。ホントだ、壁ドンしてたわ俺。あ、いやでも多田さんなら何とかしてくれるかも。何だかんだ速水、三村に続くフオロワーだし……………。

「突然、鷹宮に壁ドンされて『そうさ！浮気だよ！悪いか。ははは』とか言われましたー」

いや言つてねえよ!?!俺つて多田さんには一体、どんな風に見えるわけ!?!?

「いやっ、そんな誠みたいな事は言つてな……………!」

言いかけた俺の肩に文香の手が伸びる。メキメキと音がするレベルで握られ、俺は店の外に引きずられた。

このあと、店の裏の路地裏でメチャクチャ噛まされた。

## 最終章前の振り返り（1）

大晦日。バカップルは二人揃って文香の部屋でまったりしていた。炬燵にみかんを剥いていた。

千秋が満足そうに剥き終わったみかんを炬燵の上に置いた。

「……………ふう」

「……………わあ、可愛いですね」

みかんの皮で作ったカタツムリだ。それを見て、文香が感嘆の声を漏らすと、千秋は少し嬉しくて胸を張った。

「ま、まあね。俺、器用だから」

「……………でも、食べ物で遊ばないでくださいね？」

「……………すみませんでした」

謝りながら、カタツムリの殻の部分になってるみかん本体を分離させて半分に割った。

「はっ」

「……………あー」

手渡すと、文香は頬を染めながら口を開けた。恥ずかしがるならやらなきや良いのに、と心底思いながら千秋はみかんを千切って口の中に入れた。

「……………美味しいです」

「そうですか」

テキストに相槌を返しながら、みかんを1つむしって空中に放って口でキャッチした。

今年もあと30分ほど。なのに、テレビでは相変わらず俺ガイルのDVDが映されていた。風情もへったくれもなかった。

「……………それにしても、今年も色々ありましたね」

「それな。まさか彼女出来ると思ってたから」

「……………そうですね。私も、まさか歳下の恋人ができるとは思っていませんでした」

「えっと……………なんだっけ？確か最初は不良に文香が絡まれていた時に、颯爽と俺が助け出したんだっけ？」

「……………違います。千秋くんは私との思い出をそんな風に改竄するんですね」

「いや冗談だって」

「……………出会ったのは、それのおかげじゃないですか」

文香の視線の先にはちやうど、一期最終回の体育祭が映されていた。

「……………何故、私の店に来たんでしたっけ？」

「売ってなかったんですよ、俺ガイル6巻が。駅前の本屋だと、うちのクラスの面子とかち合う可能性もあつたんで、前に見つけたこの店に来たんです」

「……………なるほど」

「まさか、興味持たれると思わなかったですけど」

「……………あの時は、本なら基本的になんでも興味ありましたから」

「今もでしょ。たまに図書館とかから借りてるよう分からん本読んでいるじゃん」

「……………本に興味がなくなつたわけではありませんから」

「そういうや文学少女シリーズって貸したことあつたっけ？」

「何それk w s k」

その反応に「もう引き返せないかもなあ……………」と思つたのは言うまでもない。

「まあ、今度貸すよ」

「……………はい、楽しみにしてますね」

「で、それからたまに俺がこの本屋来るようになったんだよなあ」

「……………あの時はすみませんでした。本が読みたければ買えば良かったですよね……………」

「いやそんな気にしなくて良いよ。俺も、その……………何？文香の事美人だなーとか思ってたから」

「……………そ、そうですか……………」

「だ、男子高校生には色々あるんだよ。簡単に一目惚れするし可愛い人見たら取り敢えずお近づきになりたいとか思っちゃうし」

「……………千秋くんは、出会った時から私の事をそのように思っていた

のですか?」

「おいおい、俺とそこらの男を一緒にするなよ。美人とか可愛いとかは思っても、絶対一目惚れはしないようにしてたからな。だから、あくまでちゃんと『本を貸すだけの関係』って割り切ってたから」

「……………まあ、変にナンパされてたよりマシなので何も言わないであげます」

「ていうか、ナンパ男扱いされるの嫌だったから一線引いてたまであるよね」

「……………千秋くんはもう少し、余計なこと言わない努力をしてください」

なんか怒られて、千秋は「すみません」と返した。

「いや、でもそれなら文香にももう少し気を使って欲しかったんだけど」

「?」

「平気で部屋に男を上げるし、男の部屋にも入って来るし、もう少しパーソナルエリアアツツーの?そういうの考えて欲しかったよね」

「っ……………あ、あの時は、その……………そういうのがあまり分かっていなかったんですよ。アイドルになるまで、親しい友人とかいませんでしたから……………」

「……………にしてもでしょ。お陰で理性を抑えるのが大変で……………。ていうか、それは今も変わってないから」

「へっ?今も、ですか……………?」

「何でもない」

「むっ、なんですか?」

「……………」

目を逸らすと、文香は頬を膨らませて千秋の方に寄りかかる。腕に胸がむにと当たった。

「そ、そういうところだよ」

「……………へっ?」

「……………そ、その……………何?割と距離近くて、その……………胸とか押し付けて来たり……………人目を気にしないで噛ませたり……………その辺」



「あつ……………」

自覚したのか、自分の胸を抱きながら若干離れる文香。男としては残念だが、理性を保たなければならぬ方としては助かった感じがあった。

「……………千秋くんのえっち」

「えっちなのを抑えてるから注意したんですけど……………」

千秋は小さくため息をついてから言った。

「ごっちは襲わないように耐えるのが必死なんだよ。ただでさえ文香つて……………その、何？……………大きいし」

「……………あうう」

頬を染めて俯く文香。その姿はいかにも可愛らしかったが、千秋も頬を赤く染めてるので人の事言えない。

「……………千秋くんは、私にくっ付かれるのは嫌ですか……………？」

上目遣いで尋ねられ、千秋は「うっ……………」と言葉に詰まった。どうしたものか悩んだ挙句、文香の肩に手を乗せて自分の方に寄せた。

「……………嫌なわけねーだろ」

「……………前もこんなことありましたね」

「うるせ」

千秋の肩に頭を乗せたまま、ホッと一息ついて目を閉じた。

「まあ、知り合ってからしばらく経って、俺風邪引きましたっけ」

「……………はい。泊まっていけば良い、と言ったのにカツコつけて帰って風邪引いてました」

「カツコつけてない。…………とは言い切れない」

「ほらやっぱり……………」

「でも文香と同じ部屋で寝泊りはまずかったですよ。当時は付き合ってもなかったし」

「……………それは、そうですね……。でも、弱った千秋くん、可愛かったですよ？」

「うるせー。大体、文香あの時世話焼き過ぎだったから」

「……………そう、ですか？」

「今だから言うけど、俺の体を拭いてくれた時、胸が後頭部に当たって

「すごかったからね?」

「……………やっぱりえつちじゃないですか」

「……………男ならそんなもんでしょ」

「……………まあ、男の子ですし。……………それに、私は千秋くんになら襲われても……………」

「……………」

千秋は聞こえなかったことにした。机の上の紅茶を飲み、ホツと息をついた。

「……………なつ、夏休みに入ってからでも色々ありましたね」

「ああ。補習とか祭りとか撮影とかな」

「……………もう補習はダメですからね」

「分かってるよ……………」

文香怒ると怖いし、とは思っても言わないでおいた。

「……………この頃から、でしょうか。私が、千秋くんを意識し始めたのは……………」

「え、なんかあったっけ?」

「……………夏コミや夏祭りの時とかですね」

「あー……………そういや、冬コミは行かなかったけど良かったん?」

「……………はい。欲しいジャンルは、奈緒さんが持っていましたから」

「どんなの?」

「……………黙秘で」

「……………」

問い詰めてもよかったが、知らない事もある方が良さそうなので黙った。

「夏コミでなんかあったっけ?」

「……………自分が好かれてる所を自覚してない所も好きですよ。それは、無意識って事ですから」

よく分からなかったので、とりあえず千秋は「お、おう?」とだけ言っておいた。

「……………撮影の時とかは奏さんやありすちゃんに迷惑を掛けました」

「? なんかあったん?」

「……………恥ずかしながら、他のアイドル達と仲良くしていた千秋くんに嫉妬してしまいました……………」

「あー……………なるほど」

「……………他人事のように言っていますが、千秋くんが一番悪いんですよ」

「えっ、なんで？」

「……………弟なんて嘘をついたり、私の気持ちになんて一切気付かないんですから」

「弟の方はすみませんでした……………」

まずはそこを謝ってから自分の弁護に移った。

「いや、でも気持ちの方は仕方ないでしょう。クラスに友達がいらないボッチの事が好きな女性がいるとは思えなかったんだから」

「……………でも、千秋くんも既に当時は私のこと好きだったんでしょ？」

言われて、奏に嵌められたことを思い出した。

「……………や、でも自覚したのはあの時からなんですよ。速水さんに質問攻めされた時」

「……………自分の気持ちに中々気付かないのもどうかと思いますが」

「……………」

反論出来なかった。

「実は、デ○ズニーの前に俺、速水さんと渋谷さんと北条さんと島村さんと服買いに行ったんだよね」

「……………そうなんですか？」

「なんかデート用の服買うとか言って、速水さんがわざわざ面倒見してくれた」

「……………今にして思えば、デ○ズニーランドの告白ってすごい出来レースですよね」

「あー確かに。速水さんとかだけが結果を分かりきってたんだろっなあ」

「……………いえ、私も分かっていたよ？」

「あ、そっか。……………緊張してたのは俺だけなのか」

「……………本屋さんでの告白は、正直……………その、嬉しかったです」

「……………まあ、俺と初めて会った場所ですからね」

「……………告白の言葉は悪い意味で千秋くんらしかったですが」

「すみませんね、照れ屋なもんで」

少し不貞腐れたように目を逸らした。

「……………それから付き合うようになったんですよ」

千秋に身を委ねる文香。頬を若干赤く染めながらも、千秋から離れようとしなかった。

千秋も千秋で心の中はすごく緊張してる癖に、平常心を装って紅茶を飲んだ。

「……………千秋くんの胸、すごいバクバクいってる」

バレてた。

「……………好きな女の子にくつつかれて緊張しない男はいないでしょ。特に文香は忘れてたけど歳上だし」

「……………忘れてたってなんですか」

「……………いや、落ち着いてるけどとても歳上っぽくないんだよな」

「……………誕生日までさん付けに敬語だった癖に」

「歳下にいつまでも敬語使ってる人に言われたくない」

「……………仕方ない、じゃないですか。その……………あまり、人と話してこなくて、その……………敬語が口調、みたいになっちゃったんですから……………」

「……………もしかして気にしてた？」

「……………少し」

なんか悪いことしたかも、と思った千秋はフォローに回ることにした。

「ま、まあ敬語なのは悪いことじゃないから。相手に丁寧な印象を与えられるし、それに……………その、何？俺の好きな絹旗だって基本、敬語だしな。あと全然関係ないけど、SOS団で一番年上の朝比奈さんだって敬語使ってるし……………あー、えっと……………だから……………」

何とかフォローの言葉を考えるが、アニメしか出てこない。それを察してか、文香はクスツと微笑んで千秋の肩を抱いて、自分の膝の上に頭を置かせて撫でた。

「…………ふふ、別に気にしてませんよ」

「……………なんで膝枕させられてるんですかね」

「……………語彙力の足りない歳下の彼氏くんを、お姉さんが甘えさせてあげてるんです」

「……………」

恥ずかしかつたが、そのままだったかったので千秋は文香の膝の上で落ち着いた。

俺ガイルが終わった。時計を見ると、0時ぴったりになった。

「……………千秋くん、あけましておめでとうございます」

「……………あけおめ」

そう言っつて、二人はしばらくのんびりした。

## 最終章前の振り返り（2）

正月、千秋は文香の部屋のリビングで待機していた。文香は寝室で着替えをしている。

とりあえず、うちの親戚の実家の家の方にある山〇観音とやらに行く。ここは去年までは家族と一緒に行ってたけど、広いし出店もあるしで良い感じだと千秋は思っていた。というか、リア充を始めてそろそろ半年になるのに、まともなデートをしてないから不安だった。

まあ、文香ならどんな場所に連れて行っても喜んでくれそうだけど。そんな事を思っていると、寝室の扉が開いた。

「……………お待たせしました」

振り返ると、着物の文香が立っていた。赤と白の着物に、真っ白なファーを首に巻いている。着物なのに大きい胸はしっかりと強調されていて、なんつーか鼻血出そう。控えめに言ってもチャクチャ可愛い。

そんな控えめに言ってもメチャクチャ可愛い（二回目）文香は、そんな千秋の視線に反応してか、頬を赤く染めて聞いて来た。

「……………あつ、あのっ……………どうでしょう、か……………」

はつとして、千秋はとりあえず感想を言うことにした。

浮かんだ感想は、浴衣の時は「笑いませんか?」「ほんとに?」を連呼した挙句、ジロジロ見られただけで顔を赤らめていたのに、今は自分から感想を求めようになつて来るとは成長したなあ、とすごい上から目線の感想が浮かんだ。

外見的感想ではないため、考え直した。どんなことを言えば良いか考えた挙句、千秋は目を逸らしながらボソツと呟いた。

「ずっ……………」

「ずっ……………」

「……………ずっ、瑞鳳の新春グラより可愛くて似合ってますよ……………」

千秋の方は全然成長していなかった。ガツカリした目で文香は千秋を見ると、ため息をつきながら言った。

「……………実際、私より千秋くんの方が照れ屋さんですよね」

「……………」

今回ばかりは反論の手立てを失った。

二人して部屋を出て、電車に乗った。埼玉の西〇球場までなので電車賃はそこそこ掛かるが、バイトしたので問題ない。

家を出て、二人で腕を組んで駅に向かった。いや、イチャイチャしてるわけではなく、文香が歩きづらいついて腕を組んでいた。流石に人前で文香にもらったマフラーを二人で巻くことはしなかったが、それをしなくても十分恥ずかしかった。

椅子に座り、ホッと一息ついて文香が呟いた。

「……………山〇観音、でしたっけ？どんな所なのですか？」

「広い所だよ。俺の知ってる限りだと、でっかいメインの建物以外にも七福神が並んでる所とか、階段あがれば五重の塔とかあるし」

「……………なるほど。つまり、千秋くんはこれから行く場所の外観しか知らないということですね？」

「……………悪かったな。興味ないもんでね」

「……………なんてね。別に、私もそれほどお寺に興味があるわけでもありませんから」

「……………」

「……………拗ねてる千秋くんも可愛らしいですよ？」

「……………うるせーです」

えへへー、と勝ち誇った笑みを浮かべて千秋の頬をツンツンと突く。心なしか、最近はボディタッチも増えた気がする。

「……………そういえば、付き合いたての時もこんな感じで、やけに俺にくっついてきたよね、文香」

「……………そう、でしたか？」

「そうだよ。色々つくっ付けてたから性欲我慢するのに必死だった」

「……………うう……………今度から自重します……………」

「……………いえ、別に嫌ってわけじゃないから……………」

「知ってます」

さらに肩にまで頭を置いて来る文香。照れ隠しするように千秋は呟いた。

「文香とは家デートが多いからなあ」

「……………まあ、仕方ありませんよ」

今は、文香は髪を下ろして眼鏡をかけてるので、一応変装にはなっているはずだ。

「なんかちやうど、文香と付き合い始めた時だよ。……………お互いの性癖がバレたの」

「……………そ、そうですね」

匂いフェチと噛まれフェチという、お互いに恋人がいた過去なんてないのに特殊過ぎる。

こんな性癖の話は外でする話じゃないので切り上げた。

「学校始まってからも色々あったよなあ」

「……………はい。私の文化祭に千秋くんが来てたことは驚きました」

「速水さんに連行されて……………。そういえば、その時か。俺が高垣さんと知り合ったの」

「……………彼女といるのに別の女性の話ですか？」

「いや、割と他の人の助けなしじゃ付き合えてなかったし、仕方なくね？」

「……………まあ、そうですね。……………特に、奏さんには」

ほんと、二人は奏に頭が上がらなかった。

「そういえば、この頃にも一回喧嘩したっけ？」

「……………はい。しました」

「確か、俺と三村さんが知り合った時の奴だよ。嫉妬して」

「……………申し訳ありません、あの時は……………」

「いやいや、俺も悪かったよ。俺だって文香が知らない男と飯食ってたら嫉妬してそいつの頭カチ割っちゃいそうだし」

「……………それはそれで問題な気がするのですが」

考えて見れば、当時既に文香はかな子の正体を知っていたことになる。まあ、その話を蒸し返すと嫉妬が再臨しそうなので千秋は黙っていたが。

「その後もいきなり手錠したいとか将棋で女装させられたりお姉ちゃんと呼ばされたりポツキーゲームしたり……………」



「…………あの時はとにかく千秋くんと一緒に居たかったんですから、仕方ないじゃないですか…………」

「…………いえ、その…………俺も悪い気はしなかったから…………。まあ、手錠でトイレ行きそうになった時は」

「その話はしないでください」

キツと睨まれたので話をそらすことにした。

「その後は文香の文化祭に行ったっけ」

「…………はい。お恥ずかしい限りです」

「あのクソパクリの奴な」

「…………あの時の話も、あまり…………」

「はい…………。俺もあのSAOもどきはあまり思い出したくないです…………」

文化祭のことも色んな意味で話を逸らした。

「その後もいろいろあったよなあ」

「…………はい。お誕生日、祝っていたきました」

「当日は風邪引いて1日遅れになったけどね」

「…………申し訳ありません」

「考えてみれば、風邪ひいて当然なんだよな。ずぶ濡れになってお風呂はいつからタオル一枚で人のことを押し倒し、夜になっても浮かれていつまでも寝ようとしななんだから」

「ううっ…………意地悪なこと言わないで下さい……………」

「いえいえ。むしろ、傷付いたのはその後だから…………」

「うっ…………お酒、ですか…………？」

「まさか、場所を弁えずに速水さんの前で噛んだりするとはなあ…………」

「あっ、そっちですか？」

「え？他に何が？」

「…………その、ケーキを台無しにしたりしてしまったし…………」

「それは気にしてないよ」

正直、少し気にして欲しかった文香だが、千秋はそれ以上その話をするつもりもないのか、誕生日当日の話をした。

「そういえば、誕生日もあまり何か特別なことした覚えはないよね」

「……………はい。でも、プレゼントいただきました」

「……………何あげたつけ？」

「……………照れ隠しで惚けなくて良いです」

「……………」

「……………ふふ、そういうところ、可愛らしくて好きですよ？」

微笑みながらそう言われ、千秋は顔を赤くして目を逸らした。

「……………千秋くんにいただいたストール、毎日使わせていただいていますよ」

「……………そうですか」

電車を降りて乗り換えた。乗り換え時間は2分程だった。

別の電車に乗り、また座れた。

「修学旅行でも色々あったよなあ」

「……………まさか、付いて来ると思わなかったでしょう？」

「そりやそうでしょ」

「……………いつから気付いてました？私がいるの」

「那覇空港」

「へっ……………？」

「那覇空港で文香の匂いが香ったから……………」

「……………千秋くん、それちよつと気持ち悪いです」

「部屋にいたのに食堂の俺の声が聞こえる文香に言われたくない」

「……………」

「……………」

お互いの気持ち悪さが露出することになった。

「修学旅行先でも冷やっとしたよ。まさか、コンビニで噛まれるとは……………」

「……………あれは千秋くんが悪いです」

「……………悪かったよ。一応、弁明しても良いか？」

「結構です」

だよね、と千秋はため息をついた。

「……………プロデューサーさんとエッチな話を公共施設でするし……………」  
「あれはほんごめん。マジで」

「…………もう謝っていただいたので結構です」

「そういえば、キーホルダー喜んでもらえたの？」

「…………はい。奏さんもありすちゃんも喜んでくれました」  
「なら良かった」

海ぶどうのキーホルダーを二人で買ったことを思い出していた。

修学旅行が終わってからの話に移った。

「修学旅行が終わってから大変だったよね。また喧嘩しちゃうし」

「…………はい。まさか、千秋くんがあそこまで女心を理解してないと思っと思っていませんでした」

「…………悪かったですよ。文香が疲れてると思ってたから…………」

「…………いいんです。気持ちはありがたいですから。ただ…………私は、千秋くんといれば、疲れなんて感じないことを忘れないで欲しいです…………」

顔を赤く染め、俯きながらそう言う文香をからかいたい千秋だったが、自分もなんか恥ずかしくなって顔を赤くしたので。何も言えなかった。

「…………でも、それ以上にあの時は驚きました。笠地蔵みたいになつてる千秋くんが私のマンションの前で座っていたのですから…………」

「アレは、本当に一刻も早く謝りたかったからな…………。今にして思えば苦行だった…………」

「…………もう二度と、ああいったことはしないで下さいね」

「はいはい…………」

「はいは一回」

「…………はい」

あの後、体を洗ってくれたのを思い出したが、文香が「その話を話したら殺す」みたいな目で見られたので、黙った。

「そのあとは…………スキーだっけ？」

「…………はい」

「今だから言うけど、新田さんに俺と文香の関係バレたよ」

「へっ…………？」

「なんか普通に見抜かれた。あの人察しが良すぎて怖いわ」

「あらー……千秋くんにしては珍しいですね、そういうところでバレるなんて」

「……いや、どちらかというと文香がたくさん転びやがったからバレただけだな……」

「……すみません」

「けど、今度からはバレないようにもう少し上手くやるよ」

「……バレないようにするなら、嘘ももう少し上手くついて欲しいです」

「……へっ？」

「……蘭子ちゃんや飛鳥ちゃんとカラオケに行ったり、かな子さんに裏を合わせてもらおうと迷惑かけたり……」

「うっ……」

「……掃除もしないで」

「……悪かったよ」

「……楽しかったですか？カラオケは」

「……正直に言うとなんか楽しかったです」

「……では、今度は私と行きましょうか」

「良いけど……アイドルとカラオケ行くのはちよつと……。ほら、アイドルってみんな歌上手いし……」

「……蘭子ちゃんと飛鳥ちゃんとは行けるのに、私とはいけないんですか……？」

「……今度、行きましょうか」

「……楽しみにしてますね」

そう言って、電車を降りた。もう一度乗り換えで、これが最後の乗り換えである。

今度は席は一つしかなかった。

「座って」

「……え？でも……」

「着物だし、歩きにくいでしょう？」

「……では、失礼します……」

文香は椅子に座った。

「……………で、いつ行く?」

「……………そう、ですね」

「8日は? 成人の日」

「……………あつ、その日は……………」

「? なんかないの?」

「……………申し訳ありません。その日は……………大学の方達と、飲みに行く約束をしております……………」

「えっ……………飲む気?」

「……………いえ、飲まないようにはするつもりです。……………千秋くんの、約束ですから……………」

「ならいいけど……………」

その返事に、ホツと胸を撫で下ろした。

「……………ちなみに、さ」

「? なんですか……………?」

「その飲みって、男も来るの?」

「来ますけど……………」

「……………」

「……………あつ、ヤキモチですか?」

「……………そんなんじゃないよ」

「……………大丈夫ですよ。私、浮気は絶対ありません」

「……………本当にそんなじゃないです」

ただ、千秋の心配は別のところにあった。飲み会の席で酒は絶対飲むことになるだろう。周りに煽られて文香が仮に飲んだとすると、最悪のケースとして男に何処かに連れて行かれる可能性もある。

その場合を想定しておかなければならないのは必須だ。千秋は顎に手を当てて少し考え事をした。

「……………」

「……………千秋くん?」

声を掛けられて、ハツとした。

「まあ、分かったよ。取り敢えず、別の日にしようか」

「……………はい」

二人でそう決めながら、とりあえず西〇球場に向かった。

成人してすぐに酒やタバコを乱用する奴は新しいおもちやを買ってもらってはしやぐ小学生と変わらな  
い。

初詣行くと出てる出店って何なんだろうな。

初詣。それは一年の平穏や安全を祈るために、年初めに神社を参拝する事である。

それは俺も毎年行っではいるが、正直今まではそこまで好きな行事ではなかった。だって年初めだからって一々参拝する理由はないでしょう。なんでお参りなんだよ。平穏無事を祈るのも分からなくはないが、そんなもん行きたい奴だけが行って、行きたくない奴は家で大人しくさせろよ。なんで毎年毎年家族に付き合わなきやいけねーんだよ。

……………そう思っていた時期が俺にもありました。

「……………はい、千秋くん。これからも、ご一緒に歩んで行きましょ  
うね」

縁結びを文香に手渡された。……………ああ、彼女との初詣は最高なん  
じゃ……………。

文香と山〇観音に来て、お参りを済ませてから文香がお守りを買  
いたいというので、買い物中である。

「ありがとう」

お礼を言いながら、お守りを受け取った。紫色の派手なお守りをポ  
ケットにしまうと、文香も嬉しそうにそれを手元の中着に入れた。て  
いうか、お祭りじゃないのになんで巾着持って来たのん？

「……………千秋くんっ、おみくじ、おみくじ引きましょー！」

「りよ」

貯金箱みたいな箱に1000円玉を2枚入れた。

「……………はい、先どうぞ」

「……………あつ、私の分も出してくれたのですか……………？ありがとうございます  
ます」

「いやいや。家デートが多くてあまり彼氏らしいことしてあげられないから、これくらいはね」

「……すみません。では」

おみくじの箱に手を突っ込んだ。どれを取るのか迷ってるのか、中を弄っていた。どれでも同じだったの。

運命を感じたのか、SEED覚醒したように目を見開いて手を引き抜いた。

「……もう、僕達を、放っておいてくれええええ!!?」

「文香、声大きい。恥ずかしい」

「……すみません」

本当にSEED覚醒してるのかよ。

「……どうぞ、千秋くん」

「開けないの?」

「……同時に開けたいので……」

そうですか、一々可愛いとか一々思ってたら俺が死んじゃうわ。

俺もおみくじを引いた。とりあえず、一番最初に手に触れた奴を引いておいた。

「……では、開けましょうか」

「よし、じゃあ」

「「せーのっ」」

わざわざ声を揃えてまで同時に開けた。俺は神様とかそんなもんは信じてないので、あまり信用はしてないのだが……あつ、中吉だ。何というか……可もなく不可もなくというか……つまらん奴だわ。

「文香、どうだった?」

「……」

「文香?」

「……あつ、は、はいつ。なんででしょう?」

「どうだったん?」

「……あ、あまり良くありませんでしたねっ。まあ、私はおみくじとか余り信じませんし、結んでしましましょうっ」

どうやら、悪かったようだ。結ぶ暇に向かい、文香は背伸びして上



の方に結ぼうとした。おそらく、上の方が神様に見えやすい、という  
どっかで聞いた迷信を実行してるのだろう。

おみくじとかは信じないのに、おみくじに関係する迷信は信じちゃ  
う辺りがとても可愛らしい。とりあえず、背伸びしてる文香の肩に手  
を置いて落ち着かせると、手の中のおみくじを取った。

「俺がやるよ。なるべく、上の方にでしょ?」

「つ……。あ、ありがとう、ございます……」

こんな事で顔を赤くしちゃうふみふみ本当かわいい。

結び終わると、本堂を出て下り道を下った。しばらく歩くと、出店  
がたくさん並んでる場所に到着した。

「……………(こ)は?」

「なんでか知らないけど、出店が出てる場所」

「……………何故、出店が?」

「さあ?まあ、だるま売ってたり三本締めする店もあつたり甘酒売っ  
てる場所もあるから、ある意味では正月を祝ってんだろ」

「……………な、なるほど」

まあ、関係ない屋台もあるけどな……………。

「何か食べたいものある?」

「……………では、たこ焼きを」

「りよかい。買って来るから待ってて」

「……………あつ、待ってっ」

「?」

「……………その、一緒に、買いに行きませんか……………?」

……………何このかわいい生き物。あ、俺の彼女か。

俺が手を差し出すと、文香は手を繋いでたこ焼きの列に並んだ。購  
入し、二人で立ったまま食べ始めた。

「熱いから気をつけろよ」

「はっはふっ……………」

「もう遅かったか……………」

口の中ではふはふとたこ焼きを動かしながら、何とか嚙み潰して飲  
み込む文香。

その実に愛らしい食事シーンを見ながら、俺もたこ焼きに息を吹きかけて食べた。そんな俺を見て、文香は何かを思いついたような顔を浮かべた後、恥ずかしそうに言った。

「……………千秋くん」

「? 何?」

「そのつ……………私の分も、ふーふーしてくれませんか?」

ふーふーって言い方可愛い。

「えっ、俺が? 爪楊枝二本あるよ?」

「いえ、その……………千秋くんの、吐息で……………冷まして、欲しくて……………」

……………吐息とか言うなよ……………。むしろ俺の熱は上がっちゃうだろ。

言われるがままたこ焼きに息を吹きかけ、文香に差し出した。あーんと口を開けて、たこ焼きを食べた。

「あつ、あふつはふつ……………」

結局、熱かった。まあ、そんな文香も可愛い。こういう何気ない一時に、何となく幸せを感じる。そうか、これが幸せというものか……………。

たこ焼きを食べ終え、他に何か食べたい物を聞こうとした時だ。ガバツと後ろから腰の辺りを抱きつかれた。文香かと思っただが、目の前にいるし違う。誰だ? と後ろを見ると、見覚えのある金髪がニコニコ笑顔で俺を見ていた。

「千秋くん! 久し振り!」

「……………げっ、莉嘉……………」

チツ、やはり出会えたか……………。親戚と会う羽目になるとは思ってたけど、思ってたより早かったな……………。

「ちよつと、莉嘉。何処に……………あれっ? 千秋?」

「うわっ、美嘉姉まで……………」

ピンク髪の城ヶ崎美嘉まで現れた。ふっ、まあ良いさ。こういう時のためにちゃんと対策は考えてある。

「うわって何? 新年の挨拶もないのー?」

「あけおめことよろ」

「うわ、テキトーだし……………」

「悪い、今彼女がいるんだ。空気読んで退散してくれる?」

「えっ……千秋に彼女……？嘘でしょ？」

「マジだから」

そう、城ヶ崎美嘉は最近の女子高生、その物つて感じのするJKだ。つまり、恋人といると知れば必ず空気を読む。妹はアホ真っしぐらだが、姉の方は見た目よりしつかりしてる。

そう思ったのだが、美嘉姉は割とマジで心配そうな顔で見上げた。

「……………大丈夫？病気なの？」

「いやマジだってば。疑うなら見せてやっても良いが……絶対に声は上げるなよ」

「う、うん。でも、違ったら病院に連れて行くからね？」

どこまで疑ってたんだこの野郎。まあ良いさ。文香を見せて、サインでも書いてもらって二人を黙らせればこの件は片付く。城ヶ崎姉妹はやけにアイドルの事情に詳しいから、おそらく超がつく程、アイドルのファンなんだろうし。

その完璧な計画を実行するために、文香をチラツと見た。察した文香は、少し不機嫌そうながらも俺の前に出て礼儀正しく頭を下げた。

「……………初めまして。千秋くんとお付き合いさせていただきます。」

「驚沢文香と言います。よろし……」

「えっ？文香ちゃん？」

「えっ？」

「えっ？」

女の子三人揃って「えっ？」という声が漏れた。何事かと思いい顔を挙げると、文香が「あっ」と声を漏らした。

「……………美嘉さんと、莉嘉ちゃん……？」

「えっ？」

今度は俺から声が漏れた。何、知り合いなの？

で、三人はジロリと俺を睨んだ。

「で、千秋？」

「どういう事なのか」

「……………説明していただけますか？」

おい待て。なんで俺が睨まれてんの？むしろ説明して欲しいのは俺の方なんだが……………」

「……………あの、説明するので睨まないでくれませんか……………？」

とりあえず懇願すると、三人はなんとか表情筋を緩めてくれた。

で、話し合いの結果、親戚である城ヶ崎姉妹はアイドルであることがわかった。俺の周りにはアイドルしかいねえのかよ、と思う所だが、もう慣れたしツツコミは入れないでおく。

「……………ふーん？千秋と文香ちゃんがねえ？」

「ねー！なんか意外だよねー。千秋くんとか絶対生涯独身だと思つてたもん！」

「莉嘉、謝るか今年のお年玉全部俺にパクられるか選べ」

「わつ、謝るからカツアゲはやめて！」

カツアゲじゃねえ、教育だ。

「ま、そーゆー事なら私達は退散しようかな。行くよ、莉嘉」

「えー！久々に千秋くんと会ったのにー！」

「今度遊んでやるから」

「本当につ？じゃあ、またね！千秋くん！」

嵐のような姉妹は立ち去り、俺と文香は取り残された。まあ、何とか二人きりになれたな。予定とは違うが上出来だ。

「よし、じゃあ俺達も……………」

「……………」

……………やっぱり不機嫌になつてる文香ちゃんでした。

「……………あー、文香。あいつらは普通に親戚なだけで……………」

「いえ、別に怒ってません」

その顔で何を言つてんだよ……………。

呆れてると、そんな俺の表情を読み取つてか、文香がため息をついて呟いた。

「……………本当に怒つてはないんです。私が勝手に、可愛いアイドルの知り合いがとうとう、親族にまで食い込んでる千秋くんを見て、これからも苦勞しそうだと思つただけですから……………」

「……………なんかごめん」

「……………いえ、ですから怒ってません」

……………でもなんか罪悪感が……。あれ？俺、自分の家族以外はマジで知り合いアイドルなんじゃねえか？

「ま、まあ、それより出店回ろう。他に食べたいものは？」

「……………たい焼きと豚汁と焼きそば」

ガッツリ行くなーこの人……………。

××引き続き、文香と腕を組んで列に並んだ。

××文香の家に帰って来た。寝室で文香が着替えてる間に、俺はぬくぬくと炬燵に入った。年明けのテレビなんてどうせロクなもんやっかないし、アニメでも良いかな。

文香の家のプレ4を弄っていると、文香が着替え終わったのか戻って来た。俺の隣に文香は座り、炬燵に入った。

「……………ふう、暖かいです」

……………さつきから感じてたけど、女の子って胸だけじゃなく全体的に柔らかいよなあ。

「……………千秋くん、えっちな目をしてますよ？」

「あ、いやっ……………」

「……………そんなにくっ付きたいなら、もつとくっ付きちゃいます」

「……………もしかして、自分がくっ付きたいだけ？」

「……………はい」

さらに体重をかけて来る文香。クツソー、誘惑して来るなー。襲わないように理性を保たないと……………。

「……………そういえばさ、文香」

「？ なんですか？」

「成人式の飲みにいる男ってどんな奴？」

「……………気になるんですか？」

「まあね」

「……………ふふ、ヤキモチですか？」

「そんなんじゃないって」

ただ、どんな奴が参加するか知りたいだけだ。ヤキモチかもしれない

いが、それ以上に警戒してる。文香の酒の弱さを知ってるから。もし、お持ち帰りされるようなことがあったら危険だからな。

「……………千秋くん、私の演劇を見ていたのですよね？」

「ああ。あれなら見たよ」

「……………その時の演劇部の皆さんです」

ふむ、あの時のか……………。演劇部、か…………。

「おk」

「……………何を考えてるのですか？」

「別に？大したことじゃないよ」

「……………怪しい」

「えっ」

「……………教えなさい」

睨まれたので、目を逸らした。目は逸らしてるのに、文香から疑いの視線がガンガン突き刺さる。くっ、仕方ない。かくなる上は……………！

「ちよつと、千秋くんんっ!?？」

「んっ……………」

キスした。ぐぐぐつと押し付け、口を離してとりあえずカッコつけて言ってみた。

「……………今年1発目」

「っ……………！こ、こんなので私は誤魔化され……………んんっ！」

さらに文香の首筋を噛んだ。噛みながら、とりあえず速水さんか三村さんあたりに協力を仰ぐことに決めた。

## 潜入捜査。

冬休みは割と長く、1月8日まで冬休みである。だが、文香はそうはいかない。大学の冬休みは高校より短いからだ。その分、春休みが長いんだけどね。で、その期間を利用して、俺は三人の諜報部員を召集した。

場所はスタバ。一人でスマホをいじっていると、速水さんと三村さんと島村さんが現れた。俺の前の席に座る三人に、俺は言った。

「……………来たな、我が同士よ」

「誰が同士よ。あんたぶつ殺すわよ?」

「……………そうだよ、鷹宮くん。私達、こう見えて忙しいんだけど……………」

「あ、あははっ……………」

「……………ごめんなさい。わざわざ来ていただいてありがとうございます……………す……………」

謝ると、三人は呆れたように呟いた。

「2人には折り入って頼みがある。いや、本当にマジの頼み」

「何?聞いただけ聞いてあげる」

「ああ、実は成人式の日……………」

「なるほど。成人式の日には文香が大学の友達と飲みに行くらしいから、その男メンバーを調べたいってわけね?」

「なんで分かるの!??」

「……………あんたの事は文香の次によくわかってるつもりよ」

えっ、それって……………。

「ごめん……………。俺、二股する気はないから……………速水さんの気持ちには答えられない……………」

「帰るわね」

「嘘ですごめんなさい!」

「ったく……………あんたは……………」

ほんの冗談のつもりだったのに……………。

すると、さつきまで苦笑いを浮かべていた三村さんが質問した。

「でも……………調べるってどういう風に?」

「具体的には、大学を見学してる定で動き回る。まあ、この時期にオーブンキャンパスはやってないからな。そこで、このメンバーを二つに分ける」

「ほ、本格的ですね……」

島村さんが引き気味に呟いても気にせず続けた。

「三村、島村班は演劇部を見て回ってもらおう。標的は演劇部男子。声を掛けても猫を被られるのが見えてるから、なるべく後ろからついて行って自然な様子を観察して欲しい。くれぐれも正体はバレないようにして欲しい」

「うん。分かったけど……」

「演劇部の人なんてどの人だか……」

「大丈夫。大体はピックアップしてあるから」

この前の文化祭の時に出て来た男達の顔を覚えていたため、その大学の演劇部のホームページを調べ、そこから顔を割り出してプリントアウトした画像をLONEで二人に送った。

「そいつらが標的」

「……ち、千秋くん本気出し過ぎです……」

「島村さん、彼女のためなら本気を出せるのが彼氏というものです」  
「喧嘩するたびに私に泣きついてくるのは誰かしらね」

はい、私です。すみませんでした。

すると、島村さんが不安そうな顔で聞いてきた。

「でも、その……大学に勝手に入っても良いのでしょうか……？」

「コナンの映画でも普通に入ってたし平気ですよ」

多分。

「………わかりました。頑張ってみますね」

「うん。鷹宮くんの頼みだしねっ」

島村さんと三村さんは微笑みながら承諾してくれた。本当にこの人達天使だなあ。可愛いし優しいとか、文香と付き合ってたなかったら惚れてたまである。

「私はどうすれば良いの？」

速水さんが口を挟んで来た。



「速水さんは俺と文香と合流してほしい」

「へっ？文香と合流しちゃうの？」

「まあ、疚しいところはない事を表すためにな」

本当は、耳が異様に良い文香から隠れながら、大学探索は無理だからだ。俺と一緒に授業を受けられるのは、ある意味では文香も喜ぶと思うしね。

「……………それ、私いるの？邪魔じゃないかしら？」

「いるよ。速水さんがいないと、俺と文香の関係がバレかねないじゃん」

「でも、私がいても同じじゃないかしら？」

「変装すれば平気でしょ。文香も基本は変装してるだろうし」

「もしバレたら？」

「その時には、俺が速水さんの弟になることにしました」

「はっ？」

割とマジで理解してないって声だ。まあ、そうなるよね。

「文香にはあらかじめ『学校見学したい』って伝えておいて、設定とかも伝えておく。で、姉が学校見学に行きたいって言うから、弟も付いて行きたいって言ったことにする」

「……………待ちなさい。私と貴方が姉弟は無理があるでしょう？」

「どう思う？島村さん、三村さん」

聞くと、二人はジツと俺と速水さんを見比べた。

「……………無理では無さそう」

「ね。奏さん、カッコ良いもんね」

「えっ、そ、そう、かしら…………？」

うんうん。明らかにこいつ高校生には見えねーからな。最大だと24歳に見えなくも無……………。

「……………今、失礼なこと考えてるでしょ」

「考えてないから。ごめんなさい」

「考えてないのになんで謝るのよ」

うん、怒られる前に話をそらそう。三人にとって一番重要な話をすれば逸れるだろ。

「三人にはもちろん、報酬を出す」

言いながら俺はスマホをスワイプし、画面を見せた。コレクトファイルの☆13武器が映されている。

「こいつの入手を手伝」

「引き受けましょう」

×よし、作戦開始だ。

×

早速、文香の大学に来た。島村さんと三村さんには随時、お互いの居場所を報告する事にしてある。

速水さんと二人で文香と合流した。文香には学校を見学したいって言ったら心良く引き受けてくれた。結婚しよう。

門の前だと島村さんや三村さんと一緒に居られる所を見られてしまうので、何処の学校にもあるであろう図書室にした。だが……。

「……………速っ……………姉ちゃん、ここどこっ?」

「……………あんた分かって歩いてたんじゃないの?」

迷った。もう待ち合わせ時間を5分過ぎている。このままじゃ昼休み終わっちゃうよ。まあ、文香は授業ないらしいし平気だと思うけど。

「姉ちゃん、どうしよう」

「一々、お姉ちゃんって呼ばなくて良いから」

「じゃあ、奏?」

「……………弟(役)に呼び捨てられるのはムカつく」

「……………奏お姉ちゃん」

「……………少し可愛くてムカつく」

「どうすりゃ良いんだよ」

「図書室を探しなさい」

「呼び方の話じゃねえのかよ……………」

歩き回っていると、スマホが震えた。文香からだ。

ふみふみ『今どこですか?』

ああ……………そりゃ来るよね。スワイプしてトーク画面を開き、電話をかけた。

「もしもし、ふみっ……文香お姉ちゃん？」

『お姉ちゃんっ!??……あ、そ、そっか。奏さんの弟設定、でしたね……。……お姉ちゃん、えへへ』

高1の弟が姉の友達に姉ちゃんつけるのおかしいかな。コナンじゃないんだから。

「いや、鷺沢さんの方が自然かな」

『……………』

「あんた……………」

「え、何？」

「なんでもないわ。早く道を教えなさい。昼休み終わってしまいわ」

「はいはい。鷺沢さん？迷っちゃったんだけど……図書室ってどこですか？」

『……………せめて文香さんにして下さい。なんか他人行儀で嫌です』

「え、でも高1の弟が姉の友達を下の名前で呼ぶのってハードル高……………」

『じゃなきや返事しません。一生』

「一生!??」

くっ、それは流石に嫌だ……。いや、流石にじゃなくても嫌だ。

それに、俺も文香にいきなり鷹宮くんなんて呼ばれたらショックだろうし……………。

「分かった、文香ちゃんが良い？」

『ちゃんっ……………!??あっ、新しい、ですね……。えへへっ』

「……………少し恥ずかしいなこれ」

『……………こっ、これからそう呼んでくれても良いんですよ……………?』

「……………考えとくよ」

「ねえ、いちやついてないでさっさとしてくんない？」

速水さんのイラついた声が聞こえたので、軌道修正した。ていうか、文香の声はこの人に聞こえてないよね?どこまで察しが良いんだよ。

「でさ、図書館までの道のりを教えてくんない？」

『……………でしたら、問題ありません。こうして話してる間に、千秋くん

の声を頼りに今、移動してますから』  
「えっ?」

直後、速水さんが驚いたような顔をして俺の後ろを見ていた。えっ、と思つて後ろを振り返ると、頬をムニツと突かれた。

「……………みーつけた♪」

……………ちよつと怖いんだけど。この人なんなの?ある意味絶対音感以上に異常だわ。

「……………こんにちは。千秋くん。奏さん」

「こ、こんにちは、文香。何で私たちの場所が分かったの?」

「……………なんでつて……………声ですよ?」

「はっ?」

「んっ?」

「よし、文香。見学させて」

話をそらすと文香は微笑みながら「はい♪」と答えた。なんか機嫌良いな。どうしたのこの子。

俺と同じことを考えていたのか、速水さんが文香に聞いた。

「ふ、文香?何か、機嫌良いわね」

「……………はい。千秋くんや奏さんと同じ校舎内を歩けるなんて思つてませんでしたから」

「……………私も?」

「……………当たり前じゃないですか。奏さんは、私の大切なお友達ですから」

「ふ、文香……………」

速水さんだけでなく、俺までキュンツとしてしまった。気が付けば、二人で文香の頭を撫でていた。

「っ?な、なんですか?何で二人して頭を撫でるんですか?」

「いや、良い子で可愛くてつい……………」

「……………私が一番年上なのですが……………」

文香の後に続き、学校内を歩いた。文香に見えないように島村さんと三村さんに現在位置を連絡し、とりあえず廊下を歩き回った。文香が大学の冊子を手に取った。

「……………ここを見てください。今、歩いているのが本校舎で一号館です」  
「あ、いや説明はいいよ。紙だけちようだい」

「へっ……………」

「ゲームやってるだけあってマップ把握は早いんだ俺」

「……………」

俺の役目は文香をうまく誘導して、島村さんと三村さんが追ってる面子と鉢合わせさせないことだ。それ以外なら何をしても問題ない。

……………でも、何故か文香は不機嫌そうにしている。

「……………えっ、なんで怒ってるのん？」

「……………千秋くんを案内できると思っていたのですが……………」

「……………」

そんな顔されたら、頼る他なくなるじゃないですか……………。

「……………ねえ、やっぱり私いると邪魔じゃない？」

「奏お姉ちゃん、俺、姉ちゃんと一緒に学校見廻りたいナ☆」

「分かったから気持ち悪いその口調やめなさい」

「っ！いい、いくら奏さんでも千秋くんのお姉ちゃん座は渡しませんよー！」

「……………彼女じゃないのね」

なんかグダグダになって来たな。まあ、もう何でも良いけど。しかし、マジで島村さんと三村さんには感謝しないとなあ。多分、ストーリーキングしてる気分で良い気はしてないだろうし。

島村卯月「演劇部捜索隊」『すみませーん、見つかったちゃいましたー』

三村かな子「演劇部捜索隊」『美味しいから大丈夫だよ』

わけのわからない文章に、俺はため息をついた後、速水さんの耳元で呟いた。

「速水さ……………姉ちゃん、……………よろしく」

「えっ？ちよっ、待ちなさ」

×返事を聞かずに廊下を走り出した。食堂の位置は把握してる。

×

×食堂から男達に囲まれてる連中から島村さんと三村さんを連れ出した。今は中庭のベンチに座り込んでいる。

「……………ここまでくれば平気だろ……………」

「ご、ごめんね……………。鷹宮くん……………」

「すみません、私の所為で」

「いや、頼んでる立場ですし、別に大丈夫です」

それ以上に、必要な話を聞きたい。

「で、どうだった？どんな人だった？」

「良い人だったよ？」

三村さんのそれは「どうでも良い人」なのか「都合の良い人」なのか……………まあ、どちらでも良いけど。

「何でも良い人だと？」

「さつき、ケーキを奢ってもらえたから、かな？」

「……………良い人のハードル低いな」

「美味しかったから大丈夫だよ」

……………つまり、女を見つけたら奢って自分の印象を良くしようとする、という事か。あまり良い奴らじゃないな。

「島村さんは？」

「良い人でしたよ？」

「お前らは天使かよ」

「て、天使だなんて……………」

「えへへ……………」

皮肉のつもりだったんだがな……………。

「そうじゃなくて、話した印象とか」

「話した感じは優しそうな人でした。……………でもなんというか、私達と話す前の男友達といたときは話し方が違いました」

やはりか。まあ、男なんてそんなもんだ。

すると、言いづらいことなのか島村さんは俺の耳元に移動し、ボソッと言った。

「……………それと、その……………たまにですが、かな子ちゃんの……………むっ、胸を、チラチラ見ていたような……………」

「……………なるほど、ありがと」

理解した。これ以上は無理だな。

「分かった、ありがと。もう、二人とも大学を出た方が良い」

「ほえっ?なんで?」

「俺が介入したことで、情報収集されたと思われる可能性もあるから。ストーキングされてる可能性も考慮して、一応事務所を経由してから帰った方が良いよ」

「でも、そんなんで☆13武器を手に入れてくれるの……?」

「足りなきや、プリペイドカードでも良いよ」

「い、いやいやいや!良いよ別にそんな!」

役に立った。とりあえず、やはりのその辺の男子大学生より下衆である事はよく分かった。それだけで十分だ。

「じゃあ、私達は帰るね」

「お疲れ様でした」

「ああ、本当にありがと」

「でも、鷹宮くん」

「?」

三村さんに声を掛けられた。さつきまでの幸せそうな顔とは違い、真面目な顔で言った。

「ちやんと、文香さんを頼ってあげてね」

「?」

「文香さんも、多分それを望んでるから」

そう言われてもな……。仮にも、これから文香が飲みに行こうとしてる男を調べてるなんて、文香には言えない。あーあ、なんというか……俺の方が文香より重いかもしれないな。

二人は出口に向かった。ホッと一息ついて、とりあえず文香と合流しようと思ひ、本校舎に入ると、ちょうど文香と速水さんと出会った。

「あっ」

「……見つけました」

メチャクチャ怒られたけど、とりあえずトイレって言って誤魔化した。

我慢すればするほど、解放した時の爽快感は格別。

学校見学という名の潜入捜査を終えた翌日、今度は別の人物に会いに行った。場所は文香とは別の大学、さらにそのラクロスサークルだ。勿論、学校見学という大義名分の元にやって来た。

……で、今回はラクロスサークルの部室を探しに行つて迷子になるなんてことがないように、アーニヤについて来てもらっている。

「こつちです」

「いやー、悪いね急に」

「いえ、私も美波に会いに行けますから」

それは一体全体どういう意味なのん？リアルな百合とか本当にいるのだろうか……。いや、いないだろ。アーニヤは外国人だから、表現が少しストレートなだけだ。

……しかし、百合か。文香だったらやつぱ速水さんかな……。普段なら速水さんが文香を引つ張つてそんな気がするけど、文香の方が性欲強そうだよな……。

『……奏さんは普段、誰かとキスしていますが……欲求不満なのですか？』

『へっ？ど、どうしたの文香急に？』

『……もし、そうなのでしたら……私が、奏さんの欲求を満たして差し上げましょう……』

『まっ、待つて文香！顔近づけて来ないで!?!?文香落ち着いて!?!?』

『奏さん……』

『ふみっ……んっ』

……悪くないな。絵でも練習しようかな。

「アーニヤ、絵が上手い人つてアイドルにいない？」

「? 絵、ですか？」

「そう。絵」

「それでしたら、蘭子が絵上手かったと思いますよ?」

……神崎さんか。人語で話させればアリだな。今度、カッコ良いフレーズと引き換えに教えてもらおう。



「着きました」

いつの間にか到着していたようで、ラクロスサークルの部室の前に来た。

「……………今更だけど、アーニヤならともかく俺が入ったら他の部員に「え、何あの男？」みたいに思われなかな……………」

「……………あの、やっぱり呼んできてくれない？」

「何故ですか？」

「いや、まあ、その、何。色々入りづらいから」

「??？」

「行ってきてくれたら後で取ってやるウサ○ツチのぬいぐるみ二つに増やしてやる」

「分かりました」

部室をノックし、中に入るアーニヤ。しばらく待っていると、新田さんを連れて来てくれた。

「あ、やっと来た」

「お久しぶりです、新田さん」

「どうして部室に来ないの？」

「いえ、誰かいると気まずいですし……………」

「いないから大丈夫だよ」

「へっ？」

「いない時間をちゃんと見てここにしたらから」

「……………わざわざすみません」

「ううん。さ、入って」

言われて部室にお邪魔した。中はやはりというかなんというか汚い。まあ、部活やサークルの部室なんてそんなもんだろうな、なんか知らんけどテレビと64あるし。

俺と新田さんとアーニヤは椅子に座り、新田さんの淹れてくれたお茶を飲んだ。

「で、何？聞きたいことって」

「ああ、それなんですけどね。大学生が飲みに行く時って、どんな店をチョイスするんですか？」

「へっ?」

「いや、ほら。やつばそういうチョイスとかあるのかと思って」

「……………何かあるの?」

「まあ、少しね……………」

これで文香達が行きそうな飲み屋を割り出す。いや、割り出すとまでは行かなくても傾向がわかればそれで良い。

「……………んー、そう聞かれても……………安いところかなあ」

「そうなんですか? 酒を飲めるようになって間もないアホな男子大学生なら、見栄を張って高い所とか行きそうですけど……………」

「ひ、酷い言い様だね……………」

「千秋は、大学生に恨みでもあるのですか?」

「……………大学生だけじゃないさ。ワーワーギャーギャー騒いでりやとりあえず面白いと思ってる頭のおかしいラリラーラーな学生全員この世から一片のDNAも残さず消滅すれば良いと思ってる」

「ら、らり……………?」

「鷹宮くん、アーニヤちゃんに変な日本語教えないでくれる?」

「……………すみません」

今、新田さんの目、笑ってなかった。

「うーん……………私のサークルがよく行く居酒屋の傾向なら教えても良いけど……………」

「お願いします」

「でも、理由を聞かせてくれる?」

「えっ」

「誰かと飲みに行くとかなら少し見過ごせないかなって。鷹宮くん、17歳だったよね? 文香ちゃんもいるのに法律違反は許せないかなーって」

ぐっ……………やはりそうなるか。どうしよう、本当の事を言うべきか? いや、言うべきだな。嘘は大事なところだけつくべきだ。それ以外の嘘はなるべく言うべきではない。

「あー……………実は、文香が成人式の日に飲みに行くんだよ」

「……………なるほど、そういうことね」

うん、察しが良くて助かる。みなまで言いたくないし。

「? どういうことですか?」

アーニヤは全然理解してなかった。まあ、外国人だし仕方ないね。「つまり、鷹宮くんは文香ちゃんが心配なんだよ。他の男の子と一緒にだつたら嫌だなーって。だから、こつそり付いて行きたいんだって」「つまり、千秋のヤキモチ?」

「そうよ」

そうよ、じゃねえよ、と思ったが、そこを否定すると文香の酒の弱さも言わなければならなくなるので黙っておいた。

「千秋、思ったより可愛いところもあるんですね」

「うるせ」

「ふふふ、照れなくても良いのに」

畜生、大人っぽくてもこういう所はまだまだ大学生か……。いや、まあなんでも良いが。

「もちろん、ただで教えてなんて言いませんよ。アーニヤにはウサ○ツチのぬいぐるみを約束してます。新田さんも何か欲しいものあつたら言ってください」

「いや、いいよそんな。ただ教えるだけだし」

「いえ、一人だけ何もなしというわけにはいきませんから」

「えっ、一人だけって……?」

「既にアーニヤ以外に三人ほど協力をいただきました」

「……………」

あ、少し引かれてる。でも仕方ないじゃん、心配なんだもん。男に連れて行かれないとしても、仮に飲んで酔つたら周りに何をするか分からん。

「まあ、教えるだけなら良いけど……。私はコーヒーで良いからね」

「そんなんで良いんですか?」

「良いよ、別に。そんな大したこと教えるわけじゃないけど」

俺にとつてはでかいんだけど……。まあ、良いか。それよりも教えてもらおう。

「あくまで私達が行く居酒屋だけだね、なるべく安い所に行くよ」

「安いところ？」

「うん。大学生の飲み会はただ食事しに行くんじゃないやなくて、みんなで遊んだりゲームしたりする事が目的だから、あまり高い所は避けるかなー」

「なるほど……………」

「例えば、鳥〇族とか〇休とか。あと大人数の場合は、多少大声出しても平気なように少し広いところ使ったりするかな」

ふむ……………なるほどな。

「ゲームというのは？スマブラとか？」

「いやいや、そういうんじゃないやなくて、王様ゲームとか山手線ゲームとかだよ」

「……………なんですか？それ」

アーニヤが口を挟んだ。あー、まあ知らないよね。日本の頭の悪いゲームだよ。

「……………アーニヤは知らない方が良い」

「えー、なんでですか千秋。教えて下さい。私も王様になりたいです」

「日本の暗部とも言える遊びだから」

「いやいや、鷹宮くん。そんな変なことしないよ」

「え、そうなの？負けたら脱衣とかしないの？」

「しないから。アーニヤちゃん、王様ゲームっていうのはね、くじを引いて王様になった人がなんでも命令できるっていうゲームだよ」

「山手線ゲーム、というのは？」

「お題に決めて、リズムに合わせて答えて、答えられなかった人が負けっていうゲーム」

「どちらも面白そうですね。やりましょう！」

「えっ、三人で？」

三人で王様ゲームってそれ固定じゃん……………。何番と何番を選んでも選ばれるから。

「うーん……………王様ゲームは無理かなー。山手線ゲームならなんとか」

「じゃあそれやりましょう！」

「私は良いけど……………」



「…………じゃあ、何故居酒屋に入ろうとしていたのですか？」

「……………」

……………いつそ、飲もうとしていたことにした方が良いか……………？

「とにかく、家でお説教します」

「えっ、いや待っ……………」

「来なさい」

文香の部屋に連行された。

到着するなり、正座させられてお説教。1時間ほど続いてようやく解放された。

「分かりましたね？そういうのに興味が出るのも分かりますが、ちやんと法律は守って下さい。それだけ一緒に居られる時間が短くなってしまうんですから」

「……………」

「分かりましたか？」

「……………」

「聞いてますかっ？」

「……………わかったよ」

にしても、なんかあれだな。文香に正座させられて怒られると思うと少し気持ち良い。

「ねえ、文香」

「……………なんですか？」

「もう1時間くらい怒ってくれない？」

「……………バカにしてるんですか？」

「いや、冗談です……………」

これ以上怒られるのは後が怖いので黙ることにした。文香はふんつと鼻息を鳴らすと、俺の頭を撫でた。

「……………少し、怒りすぎましたね。さ、ご飯にしましょう。今日は、千秋くんの好きなものを作ってあげます」

「か、母ちゃん……………」

「……………どうせなら、嫁さんと呼んでください……………」

何それ可愛い。言ったことが恥ずかしかったのか、文香は赤くなっ

た顔を隠しながら台所に戻った。

ていうか、当たり前のようにここで飯食うんだな。せつかくだし、俺も飯作るの手伝うかな。

「文香、俺も手伝うよ」

「……………ふふ、なんだか久しぶりな感じがしますね、千秋くんのご飯作るの」

「それな。何作んの？」

「……………千秋くんの大好きな唐揚げです」

「俺が大好きなのは文香の首筋だから」

「つ……………も、もう、バカなんですから……………。じゃあ、その……………食べます、か……………？」

言いながら、文香は髪をかきあげて首筋を出した。いや、正直ツツコミ入れて欲しかったんだけどな……………。

まあ、そこまで言うなら噛むか。文香の首筋に口を近づけようとした所で、顔が止まる。てか、俺達さ……………。

「おかしくね？」

「はうつ……………す、寸止めなんて……………」

いや、聞けよ話。

「……………何がですか？」

「いや、普通に噛もうとしてるけどさ、考えてみりやこれ異常だよな……………。なんで噛もうとしてんだ俺……………？」

「……………千秋くんから言い出したんじゃないですか」

「いや、そういう事じゃなくてさ。こういう行為ってさ、もう……………その、何?……………えつちなこと……………した後で、普通のプレイが終わった後のカップルがする事だよね」

「えつ……………!?？」

「なんつーか……………その、何。これも充分、不純異性交遊だよね」

前は問題ないと思ってんだけど、むしろ問題だよね。性交よりヤバイよねある意味。

「……………千秋くんは、その……………シたいのですか……………？」

「ぶつちやけ」

「っーじ、じゃあ……………」

「でも、やはり文香がアイドルやってる間は、その……あまりそういう事しない方が良いと思ってるから」

「……………そう、ですが……………」

「で、ここからが問題。俺達のこの噛んだりする行為もマズイ気がするんだよな……………」

「……………」

もちろん、俺の意図的に匂いを嗅ぐ行為も。いや、たまたま嗅いだり、寝てる文香の匂いをこっそり嗅ぐのは俺だけの問題で済むが、文香も受け入れていると別問題になる。

「……………千秋くん」

「え、何？」

真面目な文香の声が聞こえてきた。

「……………確かに、その通りかもしれない」

「あ、ああ。じゃあ……………」

「でも、私も千秋くんと同じです」

「？」

「……………私も、その……………千秋くと、シたいんです……………」

「……………ほあ？」

いきなりなんのタイミングアウト？え、何この流れ……………ヤバいんじゃないのちよつと……………。

「……………でも、私も、その……………その行為をするのはまずいのは理解しています……………」

「うん、だよね良かった」

「……………ですから……………その、あの噛んだりする行為まで我慢となると……………千秋くんと一緒に、寝るときに……………何するか、分からない、です……………」

え、それ何ってナニするんですかね。

「……………だから、我慢は、その……………勘弁して、欲しいです……………」

……………まあ、その……………まさかそこまで話してくれるとは思わなかった。女の子だから自らの性欲を隠す事を知らない満載の男よりも恥



ずかしいだろうに……………。

そこまで言われたら、俺も断るわけにはいかない。

「……………わかったよ。変な話して悪かったな」

「……………いえ。それよりも千秋くん」

「? 何?」

「……………恥ずかしくて死にそうなので、晩御飯お願いします」

「えっ、文香は?」

「……………布団の中で悶えます……………」

「はっ?」

恐ろしいほどの早歩きで文香は寝室に潜り「ああああ……………」と小声なのにやけに響く声が聞こえてきた。

うん、その、なんだ。唐揚げじゃなくて文香の好きなものを作ろう。

我慢しようと思った日に限って誘惑が来る。

その日の夜。結局、なんやかんやで文香の家で泊まる事になり、とりあえず食事を終えた。

まあ、なんか文香が随分と恥ずかしがってて会話が一つもなかったんだけどね。現在、文香は多分寝室で悶えてて、俺は居間でダラけていた。

……………なんか、意識しちゃうなー。あの人の事。なんで俺とシても良いとか言うのかな。嬉しいけど俺の理性が一段階弱まった気がする。いやいやいや、ダメだつてば。文香の処女は絶対に俺がもらうが、それは文香がアイドルを引退するまで待機だ。

……………ちゃんと堪えないとなあ。キツツイ任務だが、アイドルと付き合うのはそれだけの事だということなんだろう。

「……………風呂入るか」

多分、文香が復帰することなんて無さそうだし、俺は風呂入って寝よう。そう決めて、欠伸びながら洗面所に向かった。一応、風呂場をノックし、返事がないため突入した。

さっさと全裸になって風呂場に入った。身体と頭をさっさと洗い風呂に入った。ふう、暖かい……。やはり、真冬の風呂は最高だな。しばらく温まってよう。

最近は毎日のように文香といるが、もはやそれが当たり前になってきた。むしろ会わない日というのがあり得ない程だ。まあ、正月休みであり、向こうが大学生であり、さらに家が近いと言うこともあるからそうなるだけで、俺も学校が始まればそうもいかない。

そう考えると、成人式が学校始まる前でラッキーだよな。学校始まってからじゃこうもいかなかっただろうし。お陰で、余裕で調べられるし、文香にも怪しまれることは無い。

勿論、演劇部の男達が良い人そうなら調べたりなどはしなかった。だが、明らかに良い人ではない。下心を上手く隠しているように感じた。これはもう心配でしょ。彼氏がいる事を文香は隠してるはずだし、向こうは文香を狙うのに躊躇などない。いや、アイドルだから多

少の躊躇はあるかもしれんが。

向こうの出方次第だが、最悪の場合は殴り合いにもなるかもしれない。そうなったら、俺と文香はどちらにせよ、しばらく会わないほうがいいよな。芸能人の周りの人間に暴力沙汰なんてなったら、間違いなく問題だ。設定としては、たまたま通り掛かった少年の定で助け、そのまましばらく距離を置く流れにするしかない。そうなれば、お互いに辛いけど、こればかりは仕方ないだろうなあ。

……ま、こんなことは方が一の可能性だ。あまり今は考えない方がいい。そうならない為の方法を限界まで考えよう。あくまで暴力は最終手段、冷静に平和的に解決しなければ。

その方法を全力で模索してる時だ。

「…………へあつ!?ちつ、千秋くんつ!?」

そんな声が聞こえた。だが、俺は見向きもしなかった。これからの文香の飲み会の時の戦略のが大事だ。

戦略としては、なだめる↓願う↓脅す↓脅す↓殴る、といった所か。最初は何とか穏便に行つて、それでもダメなら下手に出る。それでもダメなら社会的に、次に学生的に、そして最後に警察的に脅そう。詳しく言うとうと大学の友達にバラす、次に学校に有る事無い事言う、それでもダメなら警察沙汰にする。これでいける。これでダメなら相当な馬鹿だ。

「千秋くん!」

大声で叫ばれ、声が風呂場に反響して流石に横を見た。文香が風呂場にタオル一枚で立っていた。

「……………文香?なんでいるの?」

「……………す、すみません。誰もいないと思ってて……。それよりも、何か難しい顔をしていましたか?…何かあったのですか?」

「……………いや、俺がいるのに気付いたなら裸でそこにいるなよ……。風邪引くぞ」

「……………そんな事よりも、千秋くんの様子がおかしくて気になったので……………」

くつ、風呂には誰も入って来ないと思つて迂闊だった……………!まあ

「良いや、とりあえずきとーなことを言っておこう。」

「そろそろ学校始まるなーって思うと憂鬱でさ……………」

「……………そんなに学校つまらないのですか?」

「いや、普通に会話してないでマジ風邪引くから出て行って服着なよ」  
一応、目を両手で覆ってはいいるが、この理性バリアが滅びるのも時間の問題だ。早く出て行ってもらわないと困る。

「だが、今のは失言だったようだ。目を隠してる俺の耳にはシャワーを流す音が聞こえてきた。」

「……………あの、文香?まさか、シャワー浴びてる?」

「はい」

「何してんの?」

「……………千秋くんに、私の身体を興味ないみたいに言われたので」

「いやいやいやダメでしょ!」

「……………それに、千秋くんが本当に気が滅入っていたようでしたので。私でよろしければお話を聞こうかと、思いました」

「……………風呂で?それに気持ちはありがたいけど文香には絶対話せない内容で悩んでるんだよなあ……………」

「……………いや、ダメだつてば」

「……………先程のお話では18歳未満には禁止されてるようなえつちな事をするのはダメなんですよね?一緒に風呂に入るのは18歳未満禁止されていません。アニメでもよくそういうシーンありますし」  
「……………」

「仰る通りで。とりあえず、頭の中で歴代ガンダムの主人公と主人公機と主人公の仲間と中ボスとラスボスを思い浮かべて心頭滅却しようとした。」

「……………ああ畜生、ダメだ。「命拾いの、良いお湯だったのに……………」が全てを阻害しやがる……………」

「なら、クロスオーバーだ。それで妄想しろ。例えばだ、ISの主人公がウツソならどうなる?基本的に何もしなくてもモテるあの世界なら、トリツキー過ぎて主人公最強してお姉様方に囲まれてハーレムを築き上げるウツソが目に見える……………なんかあんま面白くなさ

そうだわ。ていうか、シャルロットに風呂で抱きつかれて鼻血で出血多量で死ぬんじゃない……。――

あーバカバカやめろ！風呂場の出て来るアニメはよせ！どんなことでも連想されちまう！

なら、SAOと銀魂だ。銀ちゃんがSAOに参加したら……。――小説版ならキリトの家でアスナがお風呂借りてましたね……。いやアニメなら飛ばされるし何とかなる。アスナと銀ちゃん、超喧嘩しそう。圈内事件頭とかで銀ちゃんが寝転がってて文句言ってくるアスナに「ギャーギャーやかましいんだよ、発情期ですかコノヤロー」って平気で言っちゃう未来が見える。

……。ちよつとやってみようかしら。文香だつて相変わらずオリ主とキリトのBL小説を（俺に隠して）やってるし、俺もやってみても良いかもしれない。

そんな事を考えてると、チャプツと前に誰か入ってきたのを察した。……。文香が入ってきたか。目を閉じてるから分からないが、恐らく当たりだろう。

もしそうだった時のために、体育座りをして股間を隠した。だってなんか恥ずかしいもの。

「……。それで、千秋くん」

ほら当たり。

「っ、な、何？」

「……。そんなに学校が嫌なのですか？」

「ま、まあ。それはね」

「……。何故ですか？」

「まあ、行っても暇なだけだからね。三村さんとかは話したりすることもあるけど基本的に向こうも女子の友達がいるわけだし、俺と話すことは少ないんだよ」

「……。そう、ですか。楽しいこととかないんですか？」

「ない。学校行事もないし、あっても楽しくないから。まあ、俺の高校生活は勉強と文香に捧げるよ」

「……。――」

あれ、返事がないな。照れてるのかな。と、思ったら俺の手が誰かに、というか文香に握られた。

「……………私と一緒にいてくれるのは嬉しいですけど……………でも、せつかくの高校三年間なんですから……………」

「修学旅行もそれなりに楽しんだし、もう別に良くね？」

「……………まあ、千秋くんがそう言うなら」

……………さて、そろそろ限界かな。理性？違う違う、理性ならあと5分は保つ。じゃあ何かって？逆上させてきた。

「……………あれっ？千秋くん、何だかお顔が赤くなって……………」

「……………ぐほっ」

「ちよっ、千秋くん!?千秋くーん！」

×俺の意識はお風呂の熱の中に消えていった。ぐふっ。

×

目を覚ますと、ベッドの上だった。額には濡れたタオルが置かれている。とりあえず起き上がり、ふと見ると文香が顔を赤くして俺の上に馬乗りになっていた。

「……………何してんの？」

「……………いえ、その……………余りにも、寝顔が可愛かったので……………キス、しようと思って乗ったら……………起きちゃって……………」

……………可愛いのはお前の方だ。てか、なんで？何があったんだっけ？

「……………そ、そっか……………」

なんか俺まで恥ずかしくなつて曖昧な返事を返した。

「……………それより、これ何があったん？」

「……………千秋くんが、お風呂で逆上させてしまったので、私が運んで来たんです」

「お、おう……………」

「……………それよりも、その……………」

「？」

「……………早く、服は着た方が……………」

「へっっ？」

ふと自分の体を見ると、上半身裸だった。布団に隠れた下半身も何も履いていない。

「……………もっ、申し訳、ありません…………。なるべく、見ないようにしたので、その…………服は、着させられなくて…………。ジャージや下着は、用意しておいたので…………。」

「さ、先に言えよ…………。」

なんかすごい恥ずかしい思いをしてしまったぜ……………！

とりあえず着替えよう。そう思ったのだが、文香が部屋から出て行ってくれない。それどころか、じつと見られてる気がする。

「……………あの、着替えたいんだけど」

「っ—そ、そうですねっ。すみません、今出ますっ……………！」

顔を赤くしながら寝室を出た。なんなんだ一体。

とりあえず着替え終わり、部屋の前で待機してる文香に声をかけた。

「お待ちせ」

「は、はい……………」

「悪かったな、手間をかけさせて」

「いっ、いえっ…………。私は、千秋くんの…………あられない姿を見れたので……………」

「……………」

そういう事を本人の前で言うな。いや、もはや何も言うまい。文香がムツツリである事は知ってたし。

「寝ようか」

「……………はい」

二人でベッドに入った。なんか、お互い恥ずかしくて背中を向けあった。

……………なんだこの空気。もう何度も一緒に寝てるのに何この感じ？今更、とても恥ずかしくなってきた。色んな話をしてしまったからか？それとも風呂に入ったからか？

いや、なんでも良い。とにかく意識するなよ。眠れね—ぞこのままだ。

「……………千秋くん」

「っ、な、何っ？」

「……………眠れないのですが……………」

「……………俺もだよ」

なんだよこれ。なんでこんな眠れないの。呪われてんのか？

その直後だ。文香が後ろから俺の背中に抱きついてきた。ブラのつけてない胸が服越しに当たり、背中に胸の感触がダイレクトアタックされる。

「ふっ、文香っ？」

なっ、何の真似だよいきなり!!？

「……………申し訳ありません。こうしてれば……………眠れる、気がして……………」

こ、この女っ……………!そういう言い方されたら断れねーだろうが!

「……………おやすみ、なさい……………」

文香はそう言うと、おそらく目を閉じた。

……………ホント、この人の胸は柔らかいな……………。つて、いかんいかんいかん!落ち着け俺!アホか、死ぬぞ俺!眠るところか襲いそうだ!

落ち着け、俺……………。このまま流れと性欲に身を流して襲うと文香の足を引つ張ることになるぞ!落ち着け、とにかく落ち着け。煩惱を、焼き尽くせ!明日はまた文香の大学の情報収集なんだぞ!とにかく、そのまま朝まで眠れなかった。



どんなイベントでも前日はワクワクする。

成人の日の前日。今日も俺は潜入捜査を終えて帰宅していた。大  
学からの帰り道、今日も手伝ってもらっていた奏が声をかけて来た。  
「ねえ、鷹宮くん」

「? 何?」

「明日は居酒屋に行くの?」

「そりゃ行くよ」

そのために今まで貴重な休みを潰して来たんだ。

「まあ、それは良いけど、あまり文香に迷惑かけないようにね?」

「分かってる」

「それと、ちゃんと文香に相談するように」

「え、それは無理」

だって、相談するって事は俺が今まで何をして来たか、とか文香の  
周りの連中を探ってたとか、そういうのを全部バラすって事でしょ?  
そんなこと、文香には知られたくない。

「ダメよ、言った方が良いわ」

「なんでだよ」

「あなた、前々からちゃんと文香に相談するようにつて約束してたわ  
よね?」

うっ、それを言われるとそうなんだが……………。

「誕生日の時だったかしら? 恋人である以上はしっかりとお互いに相  
談し合う事、これをすっかり忘れていないかしら?」

「いや、でも今回のこれは……………」

「言い訳しない」

……………まあ、そうなんだが。

「そもそも、今回の事は何にしても文香に話すべきよ」

「なんで」

「飲み会の席に行けば、文香は必ず飲まされそうになるわ。あなたが  
いないと、どうしたって『千秋くんがいらないなら少しくらい…………』と  
思ってしまうわ。誕生日の時の惨状を文香には結局、詳しく伝えてい

ないのだし、何が起こるのか本人は分かっているのだから」

「……………なるほど。俺がいると知ればそれも防げる、と言うことか……………」

確かに、文香を信頼してないわけではないが、誰だって周りに「飲め飲め」と言われれば飲むかと思ってしまうかもしれない。だが「飲むな」と言った本人が近くにいればそれは別だ。意地でも飲まないだろうし、しつこい様なら俺が止められる。

「……………でも、それなら黙ってて俺が現場に行っても最悪のケースにおいての結果は同じなんじゃ」

「そうね、結果的にはね。でも、文香自身で止められるならそれがベストでしょう？あなたが出て来なければあなたとの関係はバレなくなるんだから」

確かに、まずは俺との関係をバラさないことが重要だ。最悪の場合の結果は同じだが、文香自身の意思によって飲む事を止められる可能性は事前に話した上で俺が居酒屋に行った方が高い。

「……………でも、今までコソコソ動き回ってたのがバレたら嫌われるんじゃ」

「私は大丈夫だと思っただけだね。あの子、そんな事で嫌うような惚れ方してないもの」

「そうではあっても、それなりに傷付けることになるかもしれないだろう」

「それは仕方ないわ。そもそも、動くのならこうして潜入捜査をする前に文香に話しておくべきなんだから」

それはそうかもしれない。ていうか、その方が情報は効率良く手に入ったはずだ。何せ、演劇部の連中と一番長く付き合ってるのは、他にもない文香だ。そこから出て来る情報が一番正確だと言えるだろう。

……………でも、一緒に飲み会に行くという事は、文香もそれなりにその人達の事を信頼しているはずだ。文香にとって「友達」くらいのラインに立っている人達を悪く捉え、コソコソ調べていたなんて知ったら文香は俺の事をどう思うだろうか。

「ま、さつきは『話しなさい』と命令したけど、話すか話さないか、それを決めるのはあなただからね。ただ、私は話した方が良いと思う」  
「……………」

そんな事を話してる間に駅に到着した。速水さんは駅の方に歩きながら「またね」と小さく手を振った。

……………どうするべきか、か。そんなもの決まってる。確かに、散々文香には嘘をついて来たからな。ていうか、俺の嘘は文香には必ず回り回ってバレるようになってる。それなら一層……………。

×結論が出た俺は、文香の家に向かった。

×

×文香の家に到着し、全部話した。潜入捜査してたこと、その途中で男達を見た時の俺の印象、全部。

すると、文香はキョトンとした顔で首を捻った。

「……………知ってましたよ？全部」

「……………はっ？」

「……………いえ、全部ではありませんが、千秋くんが何かコソコソ動いてたのは分かっていました」

「……………マジ？」

「……………はい」

……………諜報部員を気取って隠密作戦の指揮官を気取ってた自分が恥ずかしい……………。全部バレてんじゃん。

赤くなった顔を両手で覆って後悔してる俺に、文香は追撃するように言った。

「……………流石に演劇部の皆さんの印象などは分かる余地がありませんでしたが、私に隠れて何かしてるのは分かっていましたし、アイドルの皆さんに迷惑をかけてるのも分かっていました」

「……………えっ」

「……………最初の捜査は私の大学に来た時でしょうか？多分、私を奏さんと千秋くんが抑えて、その隙に他の誰かが演劇部を調べていたのでしょうか？」

「……………そ、そこまでバレてるんですか……………？」

「…………その次に美波さんの所にも行ったそうですね」

「えっ、なんで知って……………」

「…………本人から聞きました」

あの野郎……………！気が付けば、文香は少し怒ってるようで、若干を頬を膨らませていた。

……………やっぱ怒ってるよなあ。文香にとっては友達とも言える人達を疑い、自分に内緒で調べられていたんだから。

怒られるのを覚悟で目を閉じてると、文香は俺をジト目で睨みながら言った。

「……………千秋くん。私なんで怒ってるか分かりますか？」

「……………文香の友達と言える人を、勝手に疑って調べてたから、ですよね……………」

「はいハズレ」

「えっ、は、ハズレ……………？」

違うのん？てか、それ以外に何が……………。

「……………私が怒ってるのは、そういう事をコソコソと隠れて情報収集していた事です。それも、色んな人に迷惑をかけて」

「……………」

ああ、確かにそつちもあつたわ。……………文香、こういうのには本当にうるさいから、これはかなり怒られるかも……………。そう思って、若干怯えつつ文香の顔を見上げると、思いの外微笑んでいた。

「……………でも、ちゃんと話してくれたのでそれ程怒ってなかったりもします」

「……………ふみふみ」

「……………その呼び方やめて下さい」

はい、ごめんなさい。

「……………それ程、怒ってはいませんが、やはり私に相談せず他の方に迷惑を掛けるのは良くありません。私は私の周りの演劇部の方を悪く言われても気にしませんから、これからはちゃんと事前に相談して下さいね」

「……………わかりました」

………そっか、まあそうかもしれないな。とにかく、喧嘩になったり怒られたりしないで良かった。

「……………それで、どうなのですか?」

「何が?」

「……………明日は、来るのですか?」

ああ、そういうね。

「行くよ」

「……………居酒屋に?」

「ああ。勿論飲まないから」

そもそも奴らが変な動きをしないか見張りに行くのに飲んでる暇なんかない。

「……………そうですか。演劇部の皆さんは……………」

「まあ、あくまで俺から見たら、だ。大体、高校の時に彼女がいなかった奴は大学で夢を見るし、高校の時にいたとしても別れたなら彼女は欲しがらる、男なんてそんなもんだ。だから、文香にガツつくのもある意味では当然の話だから。あんま気にするなよ」

「……………はい。確かに演劇の時に『衣装作りに必要で知っておきたいから』という理由でスリーサイズを聞いて来たりしましたが」

「おい待てその話は初耳学」

バツキバキのど変態どもじゃねえか。潜入しておいて良かった。

「で、教えたの?」

「……………はい。衣装係の方にだけ仕方なく。申し訳ありません」

「いや、仕方ないから良いけど……………」

まあ、そればっかりはな。それに、あまり束縛する彼氏にはなりたくない。

「ま、この話はこれで終わりだ。とにかく明日、何かあったら武力介入しに行くから、俺の事は気にしないで楽しんできな」

「……………はい。あの、今日は」

「泊まっていくよ。実は文香も緊張してるでしょ、明日の飲み会」

「……………バレてましたか?」

「まあね」

そりや初めての飲み会だ。一緒に食事に行く機会も少なかつただろうに。それもアイドル以外の人達であり、異性がいる中でだ。前に自分で何があったか分からない酒も出てくる。そりや緊張するだろう。

「ま、そういうわけだから。明日、緊張しなくなるようにゲームしまくらおう」

「……………そこは千秋くんの手でほぐして欲しかったのですが……………」  
「今日はどこ行く?」

「……………たまにはバスタークエストなんてどうでしょうか?」  
「良いね。二人で」

×と、いうわけで、バスタークエストに向かった。

×バスタークエストの周回を終えて、俺は文香と寝ることにした。  
ベッドに入り、二人で手を繋いだ。

……………明日はいよいよ、成人の日か。

「そういえばさー」

「? なんですか?」

ふと思ったことがあったので聞いてみた。

「明日、成人の日だけど、文香は成人式には出ないの?」

今日、現時点でここにいるということは、実家の長野には帰らないという事だ。文香はそれで良いのか気になったので聞いてみた。

すると、文香は微笑みながら頷いた。

「……………はい。仕事もありますし、それに千秋くんとの時間の方が大事ですから」

「いや、でもさ。成人式って人生に一回しかないし……………」

「……………それを言ったら、今の一日一日すべて人生に一回しかないものですよ?」

「まあ、そうだが……………」

「……………それに、私はアイドルを始める前は本に夢中で友人と呼べる方はいませんでしたから」

……………そうか、そう考えると俺も成人式には行かないかもしれない

な。

「そっか」

「そうです」

俺は文香の手をキュツと握り締めた。本当に柔らかいな、女の人の体は。どこもかしこも、指先に至るまで。

「……………千秋くん？」

「……………なんでもない」

「……………千秋くんはやっぱり甘えん坊ですね」

「うるせ」

なんか全然眠くないな。眠れる気がしない。俺は起き上がって、ベッドから降りた。

「？ 千秋くん？」

「なんか眠くない。寝れる気がしない」

「……………実は、私も眠れなくて……………。一緒に起きていても良いですか？」

「どうぞ。コーヒー飲む？」

「……………そんなの飲んだら余計に眠れなくなりそうですが……………」

「じゃあ飲まない？」

「……………飲みます」

やっぱり。台所でインスタントコーヒーを淹れた。……………あつ、コーヒーで思い出したわ。

「文香」

「……………なんですか？」

「……………ブレンド・S。全部見た？」

「……………」

討 論 開 始！

「見ました！この前、録画した分をようやく全部見終わりました！」

「いや、やっぱり面白いよなきらら！きらファンも面白いしマジで最高だわー！」

「千秋くんはどの子が一番好きですか？」

「女の子なら主人公。男なら比企谷八幡」

「いやいや、秋月紅葉さんですから！」

「どう見てもヒツキーでしょ！中身は大分違うけど」

「でもやっぱり千秋くんはヒロインでしたかー」

「文香は？」

「妹」

「あー分かる！妹可愛いよな！大学生だけど！」

「特に登場シーンが良かったです。ギャップで死ぬかと思いました」

「あー一緒だわ。世の中で最強の萌えはギャップだわ」

「………千秋くんが一番好きなのはアホの子でしょう？」

「好きなものと萌えるものは違うでしょ。大体、文香だってキリトみたいな正統派なヒーローが好きなくせに」

「き、キリトさんはあのメンタルの弱さと戦闘中にギャップが生まれるんです！」

アニメ談義でいつのまにかソファアールで寝落ちした。



## 私達の恋愛はこれからだ！（最終）

翌日の夕方。演劇部との飲み会の時間になった。文香は千秋の調査した通りの居酒屋に入り、予約しておいた席に向かう。一通り辺りを見回したけど、千秋くんの姿は無かった。まあ、遠くから私のことを守ってくれると仰っていたし、いつか来てくれるでしょう。

しかし、今日は一段と演劇部の皆さんは騒がしい気がします。テンションが高いみたい。もしかしたら、成人式とは理由もなく舞い上がる日でもあるのでしょうか。

ならば、私も少しはテンションを……いえ、慣れないことはするものではありませんよね。

ただでさえ、居酒屋なんて私にはあまり縁が無い場所でしたのに……そんな事を考えながら辺りを見回していると、一席で、どこか見覚えのある方二人がサングラスにニット帽を被っているのが見えた。

「……………」

気になって凝視するとサツと顔を隠すお二人。ていうかあれ……美波さんとアナスタシアさん？こんな所で何を……………」

「文香、何してんの？行くよ」

演劇部の方に声をかけていただいたので、気にせずに奥に進んだ。歩いている途中、ふと横を通り掛かったを見ると何処かで見えたことあるモコモコそうな茶髪、落ち着いた黒髪、二つのチョココロネの三つの髪型が見えた。

「……………」

その三つの髪型を持つ三人はそれぞれ伊達眼鏡、マスク、ブシドーのお面を被っている。ていうか、最後ので大体誰が誰なのか分かかってしまいました。

何となく怪しく思えて来たので別の席を見ると、銀色の髪にゴスロリなのにタキシード仮面のグラサン、さっかくセルティのヘルメットを被っているの下から紫色のエクステがはみ出てる女の子がいたり、何処かで見えたアイドル達が変装をして、店中で待機していた。

これ絶対千秋くんの仕業ですよ……。アイドルの皆さん、わざ

わざご協力ありがとうございます。そして千秋くん、他の人に迷惑をかけるのはやめてくださいと何度言えば……………」

「はあ……………」

「どうしたの？文香」

「……………いえ、何でもありません」

演劇部の田中さんが声をかけて下さいました。まあ、他人に言えるわけないから言わないけれど。ていうか、変装してもお店にサイン書いて飾らせていたら意味ないでしょうに……………。ホント、千秋くんはいつも肝心な所が雑なんですから。

「こちらのお席でよろしいですか？」

店員さんが6人用で隅っここの座敷を案内してくれた、楓さんと美優さんの隣の。……………あれ？店員さんのこの声、少し無理してるけどひよつとして……………」

そう思っ顔を上げると、そもそも千秋くんが店員さんをしていました。えっ、この子何してるんですか？流石に戸惑いが隠せないのが……………」

そんな私の気も知らずに、店員千秋くんは伝票とペンを取り出した。

「ご注文はどうなさいますか？」

「とりあえず生六つで良いか？」

その問いに、幹事の佐藤さんが私達全員に聞き返した。他の方達は了承の返事を返していましたが、私はそうもいかない。千秋くんの手前なら尚更です。

「……………あの、私はジンジャーエールで……………」

「え、文香飲まないの？」

千秋くんの目の前で仕事関係以外の男性の方に下の名前と呼ばれるのは抵抗があつたがこの際無視した。

「……………申し訳ありません。私、お酒はあまり飲めないのです……………」

「大丈夫でしょ。今日くらい」

うっ、千秋くんの言った通り飲ませようとして来ますね……………。でも、千秋くんの手前で、いや手前じゃなくても飲むわけには行かない。

「……………いえ、本当に弱いので。月詠さん並みなので本当に」

「へっ？月詠って銀魂の？文香って漫画読むんだ？」

「……………」

しまった、食いつかれてしまった。いや、話が逸れた今がチャンスと見るべきでしょう。

「…と、とにかく、私はジンジャーエールで」

「畏まりました。ビール五つにジンジャーエールですね。少々お待ちください」

私の心中を察してか、千秋くんは注文を取ると足早に店の奥に戻りました。

ホツと一息つくくと、佐藤さんが声を掛けてきた。

「えっ、文香って漫画読むの？」

「……………ええ、まあ少し」

とりあえず頷いておいた。私は嘘が下手なようですし、何より千秋くんに嘘をつくなど言っておきながら自分が嘘をつくのは嫌だった。

すると、私の他に唯一の女性の田中さんが声を興味を持ったように質問してきた。

「へえー、どんな漫画？」

「……………どんな、と言われましても……………」

確か、千秋くんがオタクっぽく見られない漫画を教えてくださいました。それらを言いましよう。

「ワンピースと」

「おお、まあ王道だな」

「ナルト……………」

「終わった時は泣いたわ」

「銀魂とヒロアカと……………最近だとD r. ストーンや約束のネバーランドですね」

一通り王道のものを言うと、皆さんは段々と普通の顔になる。千秋くんの読み通り、彼らはオタクのようだ。そして、それと共に大学で彼女を作ろうと考えている方々らしい。

今の反応は、おそらく同族を見つけたと思ったらにわかだった、み

たいな反応でしょう。本来なら言い返したい所ですが、ここは我慢するべきですね。

「ジャンプ以外では読んでないのか？」

佐藤さんとは反対側に座ってる加藤さんが質問して来ました。ジャンプ以外、ですか……。そういえば、あの映画この前実写化しましたよね。アレもセーフでしょう。

「……ジャンプ以外でしたら、亜人でしょうか？」

直後、田中さんと山本さん以外の男子全員の目が光った気がした。あれ、何か地雷踏んだのでしょうか……？

「深夜番組のアニメじゃん！」

「マジでか！文香って意外とおタクの気があるかも……！」

「アイドルでもやっぱそういうの好きなんだな」

しまった……。余計なことを言ってしまった……。それと、アイドルとか店内で大声で叫ばないでいただきたいのですが。いえ、アイドルしか店内にいないので、今は別に良いのですが。

「でも亜人つてのは意外だよな」

「なんで亜人読もうと思ったん？」

……。理由ですか……。どうしましょう、彼氏に薦められて、とは言えません……。いや、先程の思考をトレースすれば……。

「………実写映画化する、との事でしたので気になりました」

「あーそれは分かるわ。有名になると気になるよな」

「………私個人的な意見ですが、永井さんと中野さんのコンビが好きですね。性格は正反対に見えて、実はそれなりの信頼関係はできている、みたいな」

「分かる。なんやかんやあの二人良いコンビだよな」

「私も分かるな。絶対永井の方が受けだよな」

「田中黙れ」

などと亜人トークで盛り上がり始めた。ていうか、田中さん腐女子だったんですね。

まあ、私のオタク趣味はなんとか隠せたし、話も盛り上がって来たから結果オーライかもしれない。でも、これからは気をつけないとい

けませんね。

みんなで亜人の名シーンを語っていると、店員千秋くんがやって来た。

「お待たせしました、生五つとジンジャーエールです」

「おお、きたきた」

「ありがとうございます」

意外にも、店員さんにお礼を言った。やっぱり、この人達は別に千秋くんが言うほど悪い人ではないのかもしれない。

チラツと気になって千秋くんを見上げると、少し不愉快そうな顔をしていた。もしかすると、嫉妬でしょうか？後で構ってあげるの、今は我慢して下さい。

×心の中で謝りつつ、とりあえず成人の日のお祝いを楽しんだ。

×

2×時間が経過した。亜人トークからアニメトークに移り変わり、現在ではみんなSAOトークをしている。

SAOは演劇でやったものなので、私も原作を読んだ事にしてあるので、そこからヲタバレする事はなかった。

「やっぱさー、彼女欲しいよな。てかただのコミュ障ゲーマーの癖にリア充かとかキリトずりーよな」

佐藤さんがケタケタ笑いながら、若干赤くなつた顔で言った。酔ってきてるのか、徐々に本音を話すようになってきた。私も田中さんと中田さんと千秋くんの助けがあつて、何とかお酒は飲まずに会話を続けた。

「いやいや、それ言ったらオタクカップルが近くにいますけど」

「それな。マジ爆死しろよお前ら」

「うるせえ。大体、俺達別にお前らが思ってるほどイチャついてねえからな」

「……………そうですか？一緒に釣りに行ったり、湖のほとりで別荘を買ったり、森の中で幼女を拾ったりしてないんですか？」

「するわけないでしょ文香」

まあ、そうですよね。

「大体、私達まだエッチもしてないんだからね。お付き合いすつ飛ばしていきなり結婚してエッチしてる大人のエレベーターカップルと一緒にしないで」

「おおつと？田中さんも酔ってるみたいですね。そんなカミングアウトをするなんて珍しい。」

「えっ？お前らそうなん？」

「エロ同人みたいなことしてないん？」

「してねーよ。大体、こんな貧乳に欲情なんかしないっつもの」

「は？あんたちよつとそれどういう意味？」

「冗談です怒らないで下さい」

「ふん、おっぱい星人」

良かった、一瞬喧嘩になるかと思いましたが。まあ、酔ってるとはいえあんな失礼なこと言われても謝れば許してあげる辺り、二人はやっぱり仲良いんでしょう。

しかし、このお二人もまだエッチはしてないんですね。そう考えると、私も別に千秋くんのお付き合いはそんなに焦ることはないのでしょうか……。いえ、にしても千秋くんはもう少し手を出してくれると良いのに。

少しムツとしてる時だ。隣の佐藤さんが私を横目で見ながらボソッと呟いた。

「…………おっぱい星人といえば」

「……………」

えっ、な、なんですかみんなして。タラリと冷や汗をかいてると、気が付けば加藤さん、山本さんも私を見ていた。いや、正確に言えば私の胸でしょうか。

その視線がなんとなく怖くて何も言えなくなっていると、田中さんが小声で呟いた。

「……………文香ってさ、大きいよね。ムカつくほど」

「……………は、はい？」

「ちよつと揉ませて」

直後、正面の田中さんから手が伸びてきて胸を揉んできた。



「何でもないです……………」

そんなわけで、中田さんが割り箸を握って全員の前に差し出した。

「よし、引けー!」

言われて、皆さん全員でくじを引いた。私の割り箸に赤い印はない。

すると、田中さんが手を挙げた。

「はーい!私、王様!」

「ちっ、田中かよ」

「今舌打ちした奴、後でぶっ飛ばすから」

田中さんは顎に手を当てた。命令を考えてるんだろう。まあ、田中さんは割と常識人だし、この中で少ない女性なので変な命令をしてくることは……………」

「じゃあ……………2番が3番の胸を揉む!」

「……………は?」

誰かから冷たい声が漏れた。そうでしたね、彼女は腐った女子でしたね……………。男率の高い中で男同士で胸を揉んでたら、笑いも起きるし面白いかもしれない……………。

そう思って、念の為わたしの番号を確認した。

「……………あつ」

さっ、3番……………。マズい、どうしよう。普通に考えて揉ませるわけにはいかないし、私自身嫌だ。

「2番は?」

「佐藤」

「3番は?」

うっ、よりにもよって一番エツチな目をしてくる佐藤さん……………。どうしたら良いのか分からず、頭の中で策を考えるも何も浮かばない。

その間に「3番誰?」「俺じゃない」みたいな確認作業が行われていた。で、消去法で3番の持ち主に辿り着いてしまった。

「っ、え、マジ?」

中田さんが声を漏らした直後、酔ってるのか佐藤さんが本気のガツ



ツポーズをした。

「つしやあああああ！まさかの完全勝利Sううううう!!？」

「はああああ!!?てめっ、ふざけんなそこ変われ！」

「絶対断る。いくら積まれても譲らない」

しかも、すでに盛り上がり始めていた。拒否したいけど、特に男子三人が大はしやぎでビールを一气飲みまでし始めた。どうしよう、絶対に揉ませちゃダメですよ。ある意味、お酒を飲むよりもダメな事だ。何とかやめせないと……！

「あつ、あのつ、流石にそれは……！」

「おい、流石にダメだろそれは」

中田さんが間に入って下さった。流石に彼女がいるだけあって、私の事情とか考えてくれてるみたいだ。

しかし、酔っ払った男3人は止まらない。

「はあ?いやいや、これは罰ゲームだから」

「席は端の方だしバレないって」

「1秒くらいならなんとか行けるから」

「い、いやでもなあ……！」

「加藤、中田抑えろ」

「ラジャ」

「あつ、おい！」

中田さんの説得も阻まれ、佐藤さんは私の方に体を向けた。どうしよう、逃げたいのに身体が動かない。ゲームの一環なら我慢するしかないのでしょうか?いや、そんなはずはない。

しかし、私の意思はまるで無視されて、佐藤さんの両手は私の体に近付いてきた。何とか後ずさるけど、壁に追い込まれてしまった。

「っ……………」

キュツと目を瞑った時だ。「お客様？」と声が聞こえた。全員そつちに目を向けると、千秋くんが驚くほど真顔で立っていた。

「当店でそのようなことはお控え下さい」

ゲツ、と目の前の佐藤さんは正気に戻ったのか、ハツとした顔になった。気が付けば、周りのお客さん(アイドル達)はみんなゴミを

見る目で私達の座敷を見ていた。アイドルだと分からなくても、女性陣に見られていれば誰だって気まづくなるでしょう。

未だにバクバク言ってる心臓を何とか抑えようとしてると、千秋くんが私に手を差し出してきた。

「お客様、お連れ様がお見えのようですが」

「へっ……………」

お連れ様？そんなのいるはずがない、と頭の中では分かっているも、私の手は自然と動いた。気が付けば、勝手に千秋くんの手を取って席から立ち上がっていた。

「ち、ちよつと待てよ！」

当然、佐藤さん達は食いかかってきた。

「お連れ様って、俺達と一緒に飲んでるんだけど？」

「しかし、あちらの方が『鷺沢文香様に御用』と仰られていましたか」  
そういう千秋くんの視線の先には、奏さんとありすちゃんの変装無しで、さらにプロデューサーさんまで立っていた。一発でアイドルだと気付いた佐藤さんは「どういうこと？」みたいな感じで私を見てきたが、何がどうなっているのか私も分からないので説明出来ない。

そんなのが顔に出ていたのか、奏さんとありすちゃん、そしてプロデューサーさんは微笑みながら言った。

「文香、仕事だった」

「車を表に止めておりますので急いで下さい」

「事務所まで行くぞー」

「へっ……………？あ、そ、そうですか……………」

えっ、なんでプロデューサーが……………？ほ、ほんとに仕事なのでしょうか……………？

戸惑いながらも、本当に仕事だった時のために、とりあえず挨拶だけして三人についていった。

最後に千秋くんが演劇部の皆さんに頭を下げた。

「では、失礼いたしました」

そういうと、千秋くんは私達とは別れて店の奥に消えて行った。もしかして、助けられた……………？いや、でも仕事だって言って、プロ

デューサーまで来てくれてるし……………。

困惑しながら店を出ると、本当に目の前に事務所の車が止めてあった。

「文香、乗って」

プロデューサーさんに言われ、車に乗り込んだ。中には千秋くんがいた。つて、千秋くん!?!?なんでここに……………!

未だ何も分からずに、とりあえず千秋くんの隣に座ると、プロデューサーさんは助手席に乗り込んだ。

「じゃ、後は任せたわね」

「分かってる。二人とも気をつけて帰れよ。店の中のものにも伝えてくれ」

「分かりました」

奏さん、プロデューサーさん、ありすちゃん、は挨拶すると、車は動き始めた。

で、伸びをしながらプロデューサーさんはつぶやいた。

「いやー、危なかったな。文香がもう少しで傷物にされるところだった」

「本当ですよねー。いやー危なかった」

「黙れ、お前が言うな泥棒猫」

「怒らないで下さいよ……………。346事務所バイト枠とハルヒのBerry全部売り払ったんですから……………」

「まあ、なんとなく修学旅行の辺りから気付いてただけだな」

「気付いてたんですか!?!?」

「ち、ちよつと!何が起きてるのか説明を下さい!」

二人が何か話し始めたので、とりあえず説明を求めた。いくらなんでもわけがわかりません。

すると、プロデューサーさんが語り始めた。

「バカ宮から連絡があつたんだよ。文香が危ないかもしれないから手を貸してくれて。で、その件に関して二人が付き合ってること全部バラしてくれた」

「バカ宮言うな」

「えっ……………？ば、バラしてんですか……………」

「そうだよ。どの道、文香がアイドル引退まで隠し切れるかは分からないし、バレるならバラした方が良いとも思ってたからな」

「な、何故そんなことを……………」

「文香を傷物にされるわけにはいかなからな。飲まされなくとも、胸とか揉まれたりするだけでもアレだから」

「そのために、わざわざ店で日雇いのバイトを始めてアイドルの貸し出しまで強請られたよ」

「……………」

千秋くんが……………」

「いえ、でもなんでわざわざプロデューサーにバラす必要があったのですかっ?」

「店から連れ出した後、あいつらが付いてきたらどうすんだよ。事務所の手なら仕事の話も本当っぽくできるだろ」

「な、なるほど……………」

「だけど、流石に事務所の車はプロデューサーなしじゃ動かさなからな」

「わざわざそんなことのためにハルヒのBlurayも事務所の信頼も全部投げ捨てたんだよ、アホ宮は」

「アホ宮もやめろ」

わ、わざわざそんなこととしてまで……………。ありがたい、そして嬉しく思う反面、不安な事もあった。

「……………それはつまり、私と千秋くんは別れなければならないのですか……………」

プロデューサーさんに関係がバレた、それはそういうことに繋がる。そうだとしたら、とても残念だ。しばらくはショックで眠れないかもしれない。

だが、プロデューサーさんは「いいや?」と首を横に振った。

「そもそも、うちに恋愛禁止とかそんなルール無いし」

「へっ……………」

「常務からもそんな話聞いたことないからな。いや、まあそりや表で

ガッツリいちゃつかれるわけにはいかないけどな?」

「じ、じゃあ……………」

「好きにいちゃついて良いぞ、まだまだ」

そう言われると共に、車は止まった。場所は私のマンションだった。

「じゃ、文香。また今度、仕事でな」

「あ、はい」

「それと鷹宮くん」

「なんですか?」

「くたばれリア充」

「あんた本当に大人か?」

そういうわけで、私と千秋くんを降ろして車は走り去った。さつきまでの騒がしさが嘘のように、今は静かさが残っていた。

私も千秋くんもボンヤリと立ち尽くしていたが、やがて私から千秋くんの手を取った。

「……………行きましようか」

「……………んっ」

私の部屋に帰った。

無言で自動ドアをくぐり、エレベーターに乗って部屋の中に入った。

「……………今日泊まっていきます?」

「泊まる」

「……………では、お風呂沸かしますね」

「おう」

お風呂のスイッチを入れて、コートを脱いでハンガーに掛けた。リビングのソファアールで、千秋くんはのんびりし始め、私はその隣に座った。

で、千秋くんの肩の上に頭を置いた。

「……………千秋くん、ありがとうございます」

「いいよ、彼女を彼氏を守るのは当然だから」

「……………でも、やり過ぎです。わざわざプロデューサーまで巻き込ん

で」

「それはマジで危ない橋を渡ったよ。別れさせられたら元も子もないからな。でも、文香の身の方が大事だったから」

「……もしかしたら別れなきやいけないかもしれない、となった時、少し不安だったんですからね」

「悪かったよ。まあ、そうなくても表面上だけ別れてたってただけだ。連絡先とか消されても、お互いメールアドレス暗記してるしな」

「……………そうですね」

しかも、その結果プロデューサー公認でお付き合いが認められた。それはつまり、もうこれから先何をしても問題ないというわけだ。

そう思った直後、心臓がドクドクと鳴り響き始めた。そう、ナニをしても問題ない、ということだ。

「……………」

「……………」

お互いに無言のまま、私は身体ごと千秋くんに寄り掛かった。胸が肘に当たるように。

すると、千秋くんは私の肩を抱き寄せてくれた。お互いに顔を見合わせる、無言で顔を近づけてキスをした。

絡め合うように舌と舌が混ざり合い、長い時間を掛けてようやくキスを終えた。やがて、千秋くんから声をかけてきた。

「……………文香、明日休み？」

「……………はい」

「……………じゃ、徹夜しても平気だな？」

「……………はい」

「……………やっぱ今日はやめとく？」

「……………そこで引くのは情けないですよ」

「……………だよ。じゃ、ベッド行こうか」

そう言って、風情もへったくれもなく、私達は寝室に向かった。けど、結局私達らしいのはこれなのかもしれない。

ラノベによって知り合い、お互いに本を薦め合い、自分で自分の気持ちに気づくことさえ出来ず、グダグダしたまま色んな人の力を借り

ながらお付き合ひして来た。私達が手助けなしで、これから交際を進めることはできないかもしれない。

でも、それでも、私達は私達のペースで、私達の恋愛を堪能しようと思う。

番外編が本編になる可能性も捨てきれない。

## 自撮り（1）

三学期になった。成人の日は無事に終わり、大体二週間ぶりの学校である。教室では、クラスの面子は「久しぶりー」「初詣行った?」「いや、行ってないわ」などと、新年トークが始まっていたが、まあ俺には縁のない話である。友達なんてクラスには一人しかいないからな。その一人も、つい最近まで一緒に潜入捜査をしたりしていたので、久しぶりでも無ければ、初詣に行ったかくらいの雑談は済ませてある。ps02を介してなら毎日顔を合わせてるしね。

そんなわけで、俺はさつさと席に着いてFGOを始めた。福袋で手に入れた沖田さんは俺の嫁である。

「鷹宮くん」

「?」

声をかけられ、振り向くと三村さんが小さく手を振っていた。

「おはよ」

「どうも」

「何してるの?」

「FGO。そつちで流行ってない?」

そつち、というのは事務所の事だ。それは見事に通じたようで三村さんはスマホをいじると、画面を見せて来た。

「このこと?」

「やってるんだ、意外」

「うん。お気に入りはこの子」

「……………ジャックザリッパ……………。あつ、そういう趣味なの?」

「可愛いでしょ?」

あ、解体フェチとかじゃないんだ。少しホツとした。流石に三村さんがそういう趣味だったら立ち直れないわ。

「おう、俺ジャックになら解体されても良いわ」

「そ、それはないかな……………」



ドン引きされてしまった。まあ、今は俺でも引くわ、うん。  
すると、教室の隅から「おい」と手を振ってるのが見えた。勿論、俺にじゃなくて三村さんにだ。

「あ、みんな呼んでる。じゃあまたね、鷹宮くん」

「おい」

携帯をしまつて、友達の方に走っていった。さて、俺もFGOに戻りますか。

×

×

学校が終わり、帰宅の準備を始めた。今日は文香は仕事だし、一人で家でゲームかな。

そう思つて教室を出たとき、スマホが震えた。文香からLONEだ。

ふみふみ『奏さんと遅めのお昼です』

『ふみふみ が写真を送信しました。』

写されてるのは文香と速水さんのツーショットだった。場所はどつかの公園のようで、文香は俺の作った弁当、速水さんはハンバーガーを持っている。速水さんの腕が伸びて来ているところを見ると、多分速水さんが撮つたのだろう。ていうか、文香つて自撮り出来なさそうだし。

にしても、昼飯遅くね？今日は随分と忙しかったみたいだな。家帰ったら晩飯作つといてあげよう。昼飯遅かったんだし、量は多くなくて良いだろう。

セルスリット『遅くね？』

ふみふみ『奏さんの撮影が長引いてしまいました』

セルスリット『じゃあ、弁当冷めちゃってたでしょ』

一応、保温可能な弁当にしたんだけどな。銀色の奴。あんま意味なかったかもしれない。

ふみふみ『いえ、美味しいですよ』

ふみふみ『確かに冷めてしまってますが』

セルスリット『じゃあ、今日の晩飯はあったかいもんにしてやる』

ふみふみ『楽しみにしていますね』

そこでLONEを切った。向こうは友達と一緒にだし、いつまでも俺とメールしてたら速水さんに気を使わせてしまおうだろう。

学校を出てスーパーでテキストに晩飯を買いに行つた。暖かいものか、簡単に鍋でも良いか。長ネギ、人参、肉、エノキ、エリンギ、豆腐……あとはなんだ？こんなもんか？こんなもんだな。

スーパーで買い物を買った後は、文香の家に行つた。ポストの中のを回収して机の上に置くと手洗いうがい。続いて買って来たものを冷蔵庫にしまい、干してある洗濯物と布団を回収して畳み、必要なものはアイロンを掛けてタンスやクローゼットにしまった。布団はベッドの上に戻した。

床やソファアーの上に散らばってるものを元の場所に戻したあと、簡単に掃除機をかけ、窓を開けて数分程換気。その間に風呂場の掃除をして湯炊きし、窓を閉めて暖房をつけた。

時計を見ると、いつも文香が帰ってくる時間まで30分を切つていた。再び手洗いうがいをすると米を炊いて、野菜を刻み始めた。食戟のソーマを見てからアレより速く野菜を刻めるように練習しています。

すると、ガチャッと扉の開く音がした。予想より帰ってくるのが早いな。

「……た、ただいまー」

「おかえり。お疲れ」

「はい……。もうクタクタです……」

玄関まで出迎えると、文香だけでなく速水さんも一緒だった。

「あれ、速水さんじゃん。なんでいんの？」

「……私がお誘いしたんです。一緒にどうですか？つて。ご迷惑でしたか？」

「いやいや、全然？」

「文香と二人きりの所を邪魔して悪かったわね」

「いや別に全然ガツカリしてねーから。駅まで送ろうか？」

「追い返す気満々じゃない」

「冗談だよ。コート寄越せ」

「へっ?」

「……はい、千秋くん」

素直に手渡す文香と、何のつもり?みたいな感じで手渡して来る速水さん。それを一切気にせずコートハンガーに掛けた。

文香と速水さんが手洗いうがいをしてるうちに、ハンガーを窓際に干して料理を再開した。食材を刻んで鍋にぶち込んで火を通して間に、おたまとお椀と箸をコタツの上に運びに行った。

コタツでは、文香と速水さんがゲームを始めていた。やってるゲームはドラクエ。アイドルファンの皆さん、本当にすみませんでした。俺が食器をコタツの上に置いたのに気付くと、文香は画面を止めて立ち上がった。

「あ、手伝いますよ」

「そう?じゃあ飲み物と米頼むわ」

「じゃあ私も……」

「速水さんはいいよ。お客さんだし」

「……そうですね。奏さんは待ってて下さい」

「えっ、そ、そう……?」

「何飲む?ほろ〇い?」

「も、もうっ。飲みませんし、そもそもありませんっ」

拗ねたように文香は冷蔵庫の中の牛乳を3人分淹れて運んだ。今更だけど、鍋の時つうどん入れるよな。白米いるのか?いや、まあもう炊いじやっだし、ウチじゃ食べてたから平気だと思うけど。

戻って来た文香が炊飯ジャーを開けてご飯を盛って、再びコタツに運んだ。よし、そろそろ鍋も良いかな。鍋つかみを装着し、コタツの上に着陸させた。

「……美味しそうですね……」

「まあ、俺が作ったからな」

「……はいはい、そうですね」

文香は呆れながら投げやりな返事を返すと、コントローラを置いた。で、3人で手を合わせた。

「いただきます」

と、声を掛けて、俺は速水さんのお碗を取った。

「なんか食べる？一通りなんでも入ってるけど」

「え？あ、わ、悪いわね。任せるわ」

との事で、とりあえず肉と野菜と豆腐をバランスよく入れて速水さんの前に置いた。

「ありがとう」

「……私もお任せでお願いします」

文香にお碗を手渡され、同じようによそって文香の前に置いた。最後に自分の分も入れて食べ始めた。

「どうする？速水さん今日泊まってく？」

「へっ？」

「あ、いや自分の家みたいに言っちゃったけど」

「いや、明日は学校だからいいわよ」

「じゃあ後で送ってくよ」

「わ、悪いわね本当に」

「いやいや、時間も時間だし」

「でも、文香は……」

「……いえ、私は気にしませんよ。後で構ってもらえれば十分ですから」

「構ってもらうのね……」

そりゃな。俺の三倍くらい文香はカマちよだからな。まあ、俺は俺で結構重いつて言われるけど。

「文香、風呂沸いてるからその間に入っちゃって良いからね」

「……ありがとうございます。では、私は先にいただきますね」

で、話を変えることにした。

「今日は仕事忙しかったのか？」

「……はい。写真撮影だったのですが、カメラマンの方が変な方でして……」

「わかるわ。特に私を見る目がヤバかったわね」

「え、そういうのって分かるもんなの？」

「分かるわよ。特に、胸と足への視線わね」

「ふーん……。……えっ、じゃあ文香もしかして会ったばかりの時とか俺の視線分かってた？」

「……………」

すると、文香は目を逸らした。いや、わざとじゃないんだよ。夏場とか薄着になると特に吸い寄せられるんだよ。だから速水さん、そのゴミを見る目はやめてください。

「でっ、でもっ、ちゃんとその度に目を逸らしていただいたのも分かっ  
ていましたよ！」

「いや、フオローはいらねえから……………」

「そ、それより、その変なカメラマンの方のお陰でお昼も遅くなっ  
てしまったんですから」

強引に話を逸らしてくれた。俺も乗るしかないなこれは。という  
か後で弁当箱もらわなきゃ。

「そっ、いや、あの写真なんだっただけ？」

「……………食事の時間が遅れてしまったと言いたかっただけです」

「ああ、いやそういうんじゃないよ。文香のスマホから来たのに速水  
さんが自撮りしてたから」

「……………それは、その……………」

「文香ってば、自撮りかなり下手なんだもの」

「っ、か、奏さんっ！」

「ほら見てこれ」

「ちよっ、す、スマホ返して下さいっ！」

速水さんはソファに置いてある文香のスマホを取ると、開いて俺  
に見せて来た。慌てて飛びかかる文香だったが、速水さんはその文香  
を抑え込んでいる。

その間に、俺はのんびりと文香の写真の所を見始めた。……確かに  
文香の顔が見切れてたり、速水さんの顔が上半分写ってなかったりし  
てるな。

「文香……………。仮にも女学生が自撮りも出来ないで……………」

「う、うるさいです！というかスマホ返して下さい！」

「……………あっ」

「な、なんですか……………?」

「……………キリトと、クラインが……………」

「っ!」

……………そういやそうだったな。文香、腐ってたな。文香を腐らせた奈緒は絶対に許さないリスト筆頭だ。

直後、顔を真っ赤にした文香がコタツの中から飛び出して来た。

「うおっ!?」

「かつ、返しなさい!」

コタツの中から俺の真上に乗っかって来た。俺の上に体を重ね、胸が俺の胸に当たってるのも気にせずに俺の手からスマホを奪った。

「ちよつと、いちやついてないで早く食べなさいよ」

「お前が言うな!誰の所為だ誰の!?」

スマホを奪った文香は、慌てて自分の座っていた場所に戻った。その羞恥は大胆な事をしてしまった事からなのか、それともスマホを見られたことによるものなのかは知らないが、間違いなく怒りが混ざってるのはよく分かった。

これは後で拗ねそうだなあ、と思つてると、速水さんが一人落ち着きながら半ば呆れた様子で言った。

「大体、文香の女子力の低下は鷹宮くんの所為でもあるのよ」

「え、俺?」

「なんでだよ。関係無くね?」

「今日、ここに来てから思ってたけど、あんた達普通逆でしょ」

「何が?」

「まあ、そういう家庭は少なくないとも思うけど……………でも多数ではないわね」

「か、家庭って……………」

文香、一々照れるな、可愛いから。

「ぶっちゃけたことを言うと、まるで鷹宮くんが主夫で文香が養つてるみたいだったわよ」

「へっ?」

「だってそうじゃない。文香が仕事を終えて帰って来たら、家事を済

ませて鷹宮くんが出迎えてるんだもの。料理やお風呂の準備、あと多分掃除も終えて。しかも学校終わった放課後の短い時間で。完全に主婦スキルレベルマックスじゃない」

「なにそれちよつとうれしい」

「喜ばないの」

だよね知ってた。弁当まで俺が作ってたし。

ふと文香の方を見ると、俺以上に問題を抱えているような顔をしてブツブツと何かを呟いていた。

「……………確かにそうかも……………このままでは専業主夫家庭に……………? いやでも私は今のままで十分幸せな……………しかし、女性としてそれは流石に……………でもアイドルはやめたくありませんし……………」

おお、鷺沢さんったら深刻うー。まあ、何にせよ俺が学生の間は専業主夫をしてるしかないんだし、焦るような事ではない。

それより、焦らなきゃならないこともあるし。

「いや、でもそれと文香の女子力の低下は関係ないでしょ。こう言っちゃなんだけど、文香って元々女子力低いからね?」

化粧も出来ない、服も拘りない。家事は一通り出来るのだけが唯一の女子力かな。まあ、俺と付き合ってからそれはそれなりにオシヤレはするようになってたけど。

「いやいや、だからそれがおかしいんだってば。普通ね、彼氏が出来たらそれなりに女子力は上がるものよ? 自撮りにしても、二人で出かけた時の思い出に写真なんか撮ったりするでしょ普通」

「そう言われてもなあ……………。そもそも二人で出かけることが少ないし」

「……………そうですね。出掛けたら宇宙規模になりますから」

「は? あなた達普段どこにデートとか行くのよ」

「惑星ナベリウス」

「惑星アムドウスキア」

「惑星リリーパ」

「惑星ウオパル」

「待って、次にハルコタンって言ったら叩くから」

「東京」

「ラスベガス」

直後、文香に手刀、俺に拳が飛んで来た。

「……………す、すみません……………」

「なんか俺の方本気じゃなかったか……………?」

解せぬ。

「でも、真面目な話すると少し前まで俺と文香の関係は隠さなきゃいけないと思ってたから、普通に出掛けたいのは山々でも仕方なかったんだよ」

「まあ、そう言われるとそうなのかもしれないけど。お出かけ解禁になったんだから、今度の土日に出かけて来たら?」

言われて、俺と文香は顔を見合わせた。そういえば、まともなデートなんて初詣以来か?アレも用終わったらすぐ帰ってゲームしてたからな。

……………アレ、なんだろう。急に恥ずかしくなって来たぞ。もう性行為までしてるのに。文香も同じようで、頬を赤らめて目をそらした。そんな僕達に呆れたように速水さんは言った。

「あんた達ねえ……………何を今更恥ずかしがってるのよ」

「すみません……………」

だって、あんまり慣れないことだし。

「まあ、とにかく今度普通にデートでも行つて来なさい」

結論を出すように速水さんに言われた。そんなわけで、今更になつて普通のデートである。



## 自撮り（2）

デートの日。とりあえずデートっぽくしたいとの事で、駅前で待ち合わせした。待ち合わせ時間より10分程度早く到着し、一人でアズレンをやっている。

しかし、何とか文香とこう言った感じのデートは初めてだ。いや、告白した日を含めりやデ○ズニーには行ったけど。でも、あの時とは状況も二人の関係もお互いの呼び方も何もかもが違う。

………当時は告白が賭かっていたのに、今も同じくらい緊張してるのが不思議だ。性行為して、噛んで匂いを嗅ぐ変態行為までしてるのに何を今更照れてんだ俺は。

「……………千秋くん」

後ろから声が出て振り返ると、文香が立っていた。俺と同じように偉く緊張した様子の。どうやら、俺と文香は似た者カップルらしい。

「……………い、行こうか」

「……………そ、そうですね……………」

付き合いたてのカップルかよ、俺達は。

二人で無言で歩き始め、とりあえず駅の中に向かう。文香がふと気になったのか、緊張を振り切つて聞いてきた。

「……………そ、そういえば今日は何処に行くのですか？」

「うえっ？あ、あー……………正直、全然考えてないわ」

「……………へっ？」

「い、いや本当悪いと思ってるよ。だけど、こう……………慣れないことでさ……………。結局、当日色んなところをブラブラしようかなって……………」

「……………ま、まあ、そういうデートも有りですよ。それに、今日の目的は自撮りですし」

ああ、そういやそうだったな。今回のデートは特別ルールがあり、とにかく回った店とかで自撮りすることになっている。

「……………あ、千秋くん。せっかくですし、その……………今ここで自撮って行きませんか？」

「……………ジンドる……………？」

「……へっ？じ、自撮りって……動詞ではないの、ですか……？」  
「いや、たぶん名詞だけど……」

だって「自撮りする」とは聞くけど「自撮る」とは言わないでしょ？サッカーが名詞なのと同じだと思っただが。

すると、文香は顔をカアツと赤らめて俯いた。うん、そんな仕草をされると俺もからかいたくなるからさ。

「よし、文香。自撮るか」

「……うるさいです」

「おーい、顔隠してると自撮る意味ないぞー」

「……やめて下さい」

「ほら笑って笑って文香。俺が自撮っても意味ないんだから。文香がやらないと」

「~~~~っ！」

「あっはっはっはっ、羞恥心からのその仕草は可愛いけど文香意外と力あるんだから拳でポカポカと胸を殴るな泣きそう」

「もうっ、千秋くんなんて知りませんっ」

「悪かったよ。それより自撮りするの？」

「っ！ま、また言う……！」

「いや今のは煽ってないから……」

顔を赤くしながらも、文香は俺に寄ってスマホを取り出した。二人して、文香が持ち上げてるスマホを見る。驚く程、二人とも画面に収まってない。

「文香、もうちよい下。俺は目しか映ってないし、ヘアバンドしか映ってない」

「……こ、こうですか？」

「もう少し下」

「……この辺？」

「うん、まあそんなもんかな。あと、カメラはスマホの上の方についてるんだから、撮る時の視線はそっちな」

「……はっ、はい……」

ふむ、自撮りも思ったより簡単だな。もしかして、俺もリア充JK

だったりするのかな？いや、Jではないが。

「……で、では、撮りますよ………」

なんでそんな緊張してんの。面接写真でも撮ってんのかよ。

ピロンとシャッター音感のカケラもない音が鳴り、ようやく自撮りが終わった。

「………ど、どんな感じでしょうか……？」

「あー撮れてる撮れてる」

「………笑ってくださいよ」

「顔強張ってる人に言われたくない」

「………」

「………」

「………何で私、緊張してるんですか？」

「こっちのセリフな」

×そんな話をしながら、とりあえず出掛けた。

×まず来たのはアウトレットだった。ゲーセンに来ては良かったけど、それではいつもと同じになりそうだったのでやめておいた。

「よし、文香。とりあえず見て回るけど、何か入りたい店あったら言って。入るから」

「………は、はい。分かりました」

と、約束して、二人でアウトレットを見て歩いた。アウトレットと  
言うだけあって、服屋がたくさん並んでいる。特に女性用の服屋が多  
く、文香の着せ替えができると思えば楽しい時間になりそうだ。ま、  
俺に女性のファッションのセンスは無いので、下手な事は言わないっ  
もりだが。

すると、文香が俺の袖を引っ張った。

「？ 何？どっか行く？」

「あ、あのお店に………」

文香の指差す先には本屋があった。てか、アウトレットに本屋があるのか。

「………まあ、良いけど」

「で、では……………」

目を輝かせて本屋の中に突入した。まずはラノベとコミックスから最新巻を確認した後、普通の小説の方に行った。俺にはついていけない世界だが、文香は楽しそうだし別に良いか。ていうか、本屋でバイトしてんだからここを見て回る意味あんのか。

しばらく文香の後に続いてると、文香は足を止めた。

「……………私の本屋の方が品揃えが良いです」

「そ、そっか……………」

「……………では、自撮りして先に進みましょう」

「えっ、本屋で？」

「……………でも、それがルールですし……………」

いや、まあその通りだが……………。

「じ、じゃあ店の前で撮るか」

「……………そうですね、分かりました」

店の前で自撮りした。おい、本屋の前で自撮りってなんだ。

本屋を出て、再びアウトレット中を歩き始めた。しかし、この手の施設って本当に服屋が多いのな。まさにリア充専用って感じの店だ。俺もこういう店を一人で回ったりして、勉強とかした方が良いのだろうか。

そんなことを考えながら歩いてると、またまた文香が袖を引いた。

「何?」

「……………今度は、あそこに……………」

文香の指差す先にはラウーがあつた。だからなんでアウトレットにラウーが……………いや、もう何も言うまい。

「え、ゲーセン行くの?」

「……………いえ、ボウリングに」

「えっ、文香ってボウリング好きなの?」

「……………あまりやった事ないんですけど……………でも、やってみたくとも思った事もありますし、こういう施設はデートっぽくないですか?」

なるほど、一理ある。そんなわけで、ボウリング場に入った。

……俺、ボウリングやった事ねえんだけど大丈夫かな。

手続きをして、靴を借りてボウリングのレーンに立った。アレだよな、球を転がして10人小隊を全滅させれば良いんだよな。

「よし、やろうか」

「はい」

先行は「ふみふみ」から。置いてあるボールを持って、狙いを定める文香。あの、15ポンドとか書いてあるのを軽々持つてるんですけど……。

「が、頑張つて、文香」

「……はい、頑張ります」

そう頷き、静かにピンを睨む姿は、流石アイドルと思わざるを得ない集中力だ。スナイパー文香とお呼びしたいまでである。

集中力が極限まで高まったのか、右足を踏み出した。右手のボールを後ろに引き、ソツと転がした。球は、サッカーのコートのコーナーキックを蹴る場所に引かれている曲線の如く急カーブし、ガーターに落ちた。

「……………」

「……………」

気まずい。予想の遙か上を行ってヘタクソだ。いや、俺もやった事ないし人のこと言えないかもしれないが、にしてもアレはないだろう。曲がった、というより真っ直ぐ斜めに転がした感じ。

「……………おかしいですね。ボールが曲がりました」

「文香、ピンに向かって真っ直ぐ転がそう」

「……………はい……………」

返事をしながら頷く文香。で、二投目。さつきよりガーターに入るまでの時間は長かった。まあ、1秒ほどしか変化はなかったが。

恥ずかしかったのか、顔を若干赤くして戻って来る文香に「ドンマイ」と小さく返すと、手首をコキコキと回しながら立ち上がった。

「もしかして、ボールが重いんじゃないの?」

「……………いえ、あれくらいがちょうど良いのですが……………」

15ポンドで?それはそれで怖いんだけど……………。

少し恐れてると、文香が少し悔しそうな表情で聞いてきた。

「…………あの、よろしければ私にボウリングを教えていただけると…………」

「いや、俺も今日初プレイだからなあ」

「…………そ、そうですか。何だか意外…………でもありませんね、すみません」

「オイ、なんで謝ったオイ」

まあ、俺もそこまでうまく投げられるとは思えないし、文香に頼られても困るんだけどな。

持って来た8ポンドの球を持って、チラツと隣のレーンの人を見た。真っ直ぐに腕を振り上げ、転がった球は床の三角の印の上を通ってるな。なるほど、あれが目印になってるわけだ。ピンを狙うよりも賢明かもしれない。

そうと決まれば、球を転がしてみた。ストライクとは行かずとも、7本倒れた。

「おお…………す、すごいですね、千秋くん……………」

「なんでちよつと悔しそうなんだよ」

引きつった笑みで文香が拍手していた。いや、そもそもストライクでもスペアでもないんだから拍手の意味がわからないんだが。

さて、2投目だ。さっきの球は若干左に逸れて、右側の3本が残ってしまった。あそこを狙撃するには、やはり三角の印を頼りにするしかないだろう。

だが、俺の投球は若干左にズレるようなので、ガーターのギリギリのラインから投げれば丁度良いかもしれない。

そう狙いを定めて腕を振るうと、狙い通りに3本ぶっ飛ばした。よっしゃ、楽勝。ドヤ顔で文香を見ると、不満げな顔で俺を見ていた。おい、今こそ拍手する時だろ。

「…………千秋くん上手です。何が初めてなんですか?」

「えっ、いやマジで初プレイだって。アレだろ、ビギナーズラックみたいなもんだろ。文香だってFGO初回ガチャでマーリン当ててただろ」

「……………むー」

なんで不満げなんだよだから。こういうのは慣れの問題だろ。何かテンションの上がるような事言つてやった方が良いかな。でも、俺そう言うの苦手だし……………。

文香のアドバイスになりそうなことを含めて言えばなんとか……………。

「ま、あれだな。真つ直ぐ投げればボウリングなんてチョロいよ」

「真つ直ぐ投げられれば苦労はしません！」

ちよつとセリフを間違えた。恨みがましそうな目で俺を睨んだ後、立ち上がって15ポンドのボールを持ってピンを睨んだ。

「……………まったく、私のことバカにして……………！」

言いながら、文香はボールを振り上げて転がそうとした。足を滑らせて盛大にすつ転んだ。ボールは手から離れ、コロコロと転がって行く。

「ちよつ、文香!?」

慌てて文香の方に駆け寄ると、おでこが赤くなっていた。

「あーあー……………大丈夫かよ……………」

「……………うう、痛いです……………」

涙目で体を起こす文香。何とか手を握って立ち上がらせ、ふとレーンの向こうを見ると、ピンは一つも残っていないかった。普通に投げるよりも転んで投げた方が倒れる、みたいになってしまい、文香は唾然としていた。

……………どうしよう、どうしたら良いんだろう。まあ、いや、とりあえず……………。

「……………このゲーム終わったら、自撮りしてやめるか」

「……………はい」

×× 気まずい空気がその場を支配した。

×× その後もラーメン屋、ディスク屋、アニ○イト、公園、プラモ屋、何かスポーツ用品の店と周り、夕方になったので帰路についた。

俺と文香は二人で自宅に向かい、引きこもり二人がたくさん動いた

はずなのに、揃ってホクホクした表情で帰って来ていた。

「……楽しかったですね、デート」

「ああ。思いの外な。家デートもいいけど、こういうのも悪くない」

「……はい。ボウリング以外は最高でした」

「あの瞬間、写メ撮っておけば良かった」

「は？」

「いえ、撮ってないし後悔もしてないので怒らないで」

怖いわ、声のトーンの変化が。

「……さて、では奏さんに送りましょうか」

「そうだな」

一応、自撮りの写真は送る事になってるからな。多分、速水さんも心配してるだろうし。しかし、今日の写真は自信があるぞ。

「じゃ、頼むわ」

「………はい」

文香はスマホを操作し、写真を送った。

「しかし、公園でまったりのんびりするの悪くなかったな」

「……そうですね。まあ、結局寒くて噛んでもらってしまいました」

「本当、お願いだから次から公衆の面前でそういうのはやめろよ」

「………す、すみません。自重します」

あれは本当にヤバかった。周りにはハグに見せるために苦労したものだ。

「で、でも千秋くんだってどきどきに紛れて匂い嗅いでた癖に」

「い、いやアレはほんの一瞬香っただけだから！ほんの一瞬吸っただけだから！」

「飛行船の喫煙室の中に入った元太くんの言い訳ですか。ていうか、ガッツリ20分くらい髪の中に頭突っ込んでた癖に」

「………ボウリングで転んだ癖に」

「それは関係ないでしょう！」

むーっ、と二人して睨み合う事数分、俺も文香もプツと吹き出した。

「ま、いっか」



「……………そうですね。楽しかったですから」

二人で微笑みあった。

すると、速水さんからピロンとメッセージが届いた。おそらく、お褒めの言葉だろう。俺も文香も楽しみな顔してLONEを開いた。

速水奏『や、だから女子力低いわよ。背景一切映ってないじゃない』

「……………」

「……………」

二人揃って固まった。

すると「ちなみにどこ行ったの？」と来た。

デートコースを送った。

速水奏『女子力低いわよ（2回目）』

どうやら、まだまだ修行が足りないようだ。

## メンズ服（1）

学校が終わり、俺は自宅に入った。あー、腰痛えー。授業中寝過ぎたわマジで。寝過ぎた所為か頭と腕と肩と腰が痛いわ。

あークソ、マジで面倒臭えな学校。二月のケツにはもう試験かー。まあ、古典以外のどの教科も点数の合計150点超えてるし、古典も132点だから、あと18点取れば勝つる。だから、勉強の必要がない。

だけど、うちの彼女はそれを許さない。本人曰く「赤点ギリギリなんて許しません！ちゃんと努力すべき所は努力をしなさい！」だそうです。

二週間くらいあるから今から勉強の必要はないとはいえ、なるべく文香に学校の鞆を見せるべきではないだろう。毎回、古典の授業の頭にやる小テスト、10点満点で最高でも4点のものがバレル。とはいえ、捨てるテスト勉強が出来なくなる。

で、このテストがバレない方法を俺は考えた。それは、俺の方から文香の家に行く事だ。それなら、俺の部屋に放置されているテストプリントは見つからない。見つからないどころか探されることもない。そう決めて、俺は家を出た。今日は文香は授業は3限まで。つまり、もうそろそろ家に着く、あるいはもう着いてる頃だろう。

なら、こつちに来る前に行かなくてはならない。まあ、俺の方が足早いし大丈夫だろう。

そんなわけで、文香の家に行った。途中、すれ違うことなく合鍵を使って開け、部屋に入った。

「文香、いる？」

「……………あ、千秋くん。いらっしやい」

出迎えてくれた。いやー、わざわざ申し訳ない。

「上がっても良い？」

「……………どうぞ」

お邪魔しまーす、と唱えながら部屋の中に上がり込んだ。いやー、あつたけえ。暖房ついてんな。

手洗いうがいをしてから部屋の奥に歩き、2人でソファーに座った。

「もうすぐモンハン発売だな」

「……そうですね。楽しみです。ベータ版も楽しかったですから」

「文香、ゲーム上手くなったよなあ」

「……はい。最初は右も左もわからなかったですからね」

「いやそれ本当に文字通りな。最初はプレ4の起動の仕方から……」

「ううっ……む、昔の話です……」

顔を赤くして俯く文香はとても可愛くてからかってやりたかったが、今日はやめておいた。

「さて、今日はどうする？家？出かける？」

「……どうしましょうか。私はどちらでも良いですよ？」

「あー……あのさ、どっちでも良いなら、ひとつお願いがあるんだけど……」

「？ 珍しいですね。どうしたのですか？」

「いや、その……服を、見に行きたいと思つて……」

「……何か変なものでも食べたのですか？」

「違うから！」

ていうか、俺が最後に食った物は文香の作ってくれた弁当だ。

まあ、確かに自分でもらしくない事を言ったと思うが。なんかそう思うと恥ずかしくなり、顔を赤らめて目を逸らしながら呟くように言った。

「いや、その……前に自撮りの件で出かけた時から思つてたんだけど、周りのカップルの男の方の私服つてカッコ良いんだよな。顔は割とブスも多いのに、私服がカッコ良いだけでオーラもカッコ良く見えてさ」

「……千秋くんも、かつこ良くなりたいと？」

「いや、アイドルが彼女だからさ、俺もそれなりにおしゃれしないと……こう、カップルというより女王とペットに見える気がして」

「……私は気にしませんよ？千秋くんがペットでも」

「いや文香が気にしなくても……今なんて？」

「いえ、なんでも」

なんかサラツと怖いこと言った気がしたんだが……まあ、良いか。あまり聞かない方が良さそうだし。

「けど、俺は全然オシヤレとか分かんないからさ……。文香に手伝って欲しくて」

「……わかりました。千秋くんがそう仰るなら、出掛けましょう」

「なんか悪いな、俺の事情に付き合わせるみたいで」

「……いえ。それよりも、千秋くんが行きたい所を言ってくれるようになって嬉しいです」

「サンキュ」

何となく照れ臭くなり、小さくお礼を言っつて文香と部屋を出た。

玄関を出ると、外は馬鹿みたいに寒く、まだまだ冬は続きそうな感じだ。少し風が吹くだけで服の隙間から入ってきて、鳥肌を立たせてくるのがとても鬱陶しい。

「千秋くん」

後ろから声がかかった。振り返ると、文香が手を差し出してきていた。その手を取って、2人で手を繋いで歩き始めた。

向かう先はまだ決まってないが、まあデパートにでも行けば大丈夫だろう。なんか服屋いっぱいあるし、飽きたらゲーセンも行ける。

マンションを出て、手を繋いだまま街を歩く。冷たい風が吹くたびに文香が身震いするのが視界に入る。やっぱり、手を繋ぐだけじゃ寒さは取れないか。

さつきは文香から手を差し出してくれたし、今回は俺から、かな。

そう思っつて手繋ぎを解除すると、文香の後ろに手を回して肩を抱き寄せた。

「っ」

顔を赤くするも文香。だが、それはおそらく羞恥ではない。むしろ歡喜だろう。ちなみに俺の顔の赤みは羞恥です。

「……千秋くん」

「こ、こうした方が、あつたかいだろ？」

「……はい。とても嬉しいのですが……その、歩きにくいので腕組み

に変えてもらっても良いですか？」

「……………」

自分の行動がとても恥ずかしくなって、無言で手を離した。やっぱりらしくない事はするべきじゃないって事ですね。

×

デパートに到着し、店の中の地図を見た。店の配置を書いてあるため、やはりゲームでもデパートでもマップは重要だ。

エスカレーターで二階に上がり、一本の道を見た。この道は奥の本屋とゲーセンに着くまでの間、全部服屋である。多分。

とにかくこの通りを歩いていけば、何かしらビビツとくる店が一軒くらいあるだろう。

「……………行くぞ、文香」

「はっ、はい……………」

2人して緊張気味に歩き始めた。なんか、こう……………オタクがこういう通りを歩くのは勇気がいるな……………。場違い感がすごい。周りのカップルはイケイケリアリアな感じがして、なんかもう宇宙に浮かぶザクと同じくらい自然と場に溶け込んでいる。

俺と文香はどうだ？いや、文香はリア充に見える。可愛いし、服装だつてたまに速水さんと買い物に行くくらいだ。

だが、俺は……………うつ、なんか胃が痛くなってきた……………。いやいや、落ち着けよ。大丈夫、別に変な事はないさ。文香がいるんだから。彼氏には見えなくとも、まあ弟に見られればそれで良い。

そんな事を思いながら2人で並んで歩いてると、服屋通りを抜けてゲーセンと本屋の前に来ていた。

「……………あれ？もう終点？」

「……………なんでお店に入らなかつたんですか」

「……………すまん、緊張しててそれどころじゃなかつたんだ」

通り過ぎてどうすんだよ、俺。

我ながら自分に呆れたものだが、俺以上に俺に呆れた様子の文香が俺の手を引いた。

「はあ……………。こつちに来てください」

「えっ?」

「私がお店を選びます。大丈夫、こういう時のために奏さんにお店は抑えてもらっています」

「おお……ちゃんと俺と服屋に行く事を想定してくれていたのか……。まあ、自分で探したわけじゃないのが文香らしいが。」

「とりあえず、1軒目に来た。メンズとレディースと両方ある服屋。いかにもオシャレそうで、中に入るだけで心臓が握り潰されそうな気さえする。」

「こ、ここに入るの……?」

「行きますよ」

だが、文香の俺の腕を引く力は強く、抵抗する間も無く入店した。

「ヤベーな……。なんかどの服もキラキラしてて高そうだ。正直、今日は買うつもりは無く下見のつもりなのだが、どれが良いのかさっぱりわからない。」

「……では、千秋くん。試着室で待っていて下さい」

「は?な、なんで?」

「……私が服を片っ端から持つて行きますので、それを全て着てください。知識のない私達では、試行錯誤を繰り返して似合うものを探すしかないありません」

「オイイイ!なんだその数の暴論は!ていうか、速水さんも一番重要などこ教えてないのかよ!?!?」

「ま、待て待て待て!そんなの何時間掛かるか分からないし、何よりお店に迷惑だろ!」

「……しかし、男性服の知識をつけるにはこうするしか……」

「だからってそんなトライアンドエラーの繰り返しはないだろ!」

「ダメだ。これも帰るかゲーセン行った方が俺達のためであり、店のためだ。一回、パソコンかなんかで調べてから来るべきだったかもしれない。」

「そもそも、あまり焦る必要はないんだ。周りがどう見ようと、俺と文香が恋人である事には変わらないんだから。だからさっさと帰ってゲームやろう。」

そんな事を考えてると「あの」と声が掛かった。2人揃って振り返ると、店員さんが立っていた。

「洋服をお買い求めですか？」

来た！これだ！服に関しては歩くGoogleと言っても過言ではない店員さんだ。これなら何とかなる。

「は、はい。だけど、2人揃ってあんまこういう店慣れてなくて……」  
とりあえず、俺の服を買いに来てるので俺が答えた。店員さんは俺と文香を見比べると、微笑みながら聞いてきた。

「えつと……お姉様の御洋服ですか？弟さんの御洋服ですか？」

「……………はい？」

この店員、今なんて？

「いえ、ですからお姉様か弟さんの御洋服かと……」

「……………」

「……………」

まさか、本当に姉弟に見られるとは……。こいつはちよつと想定外だ。そんなに俺の服ってダサイのかな。いや、それ以前にそんなに俺と文香って顔似てるか？

まあ、とにかく服を案内してもらわないことには何も始まらない。俺は店員さんに答えた。

「あ、俺の服です。ね？お姉ちゃん！」

小さく手を上げて答えてから文香に確認を取ると、文香はこっちを見つめた。その顔はやがて、プクーツと膨らみ、ジロリと俺を睨んだ後に、店員さんを睨んで俺の腕に抱き着いた。

「この人は私の彼氏です！」

「えっ」

「失礼しますー！」

文香さんはそう一喝、いや二喝？すると、怒って俺の腕を引いてお店を出てしまった。な、なんだ？なんなんだ一体？何を怒ってんだ？

わけがわからないまま文香に引き摺られ、人気の少ない場所、エレベーターの前に連れて来られた。

「ど、どうしたんだよ文香!?？」

「……千秋くん、来週の日曜は空いていますか？」

「え？そ、そりや空いてるけど……」

「お出掛けです。奏さんも一緒に」

「……えっ」

「同じ歳くらいの異性が並んでカップルに見えないなんて由々しき事態です。三人で千秋くんの洋服を買いに行きます！」

「え、ええ……そんな、別に俺は気にしないのに……」

「私が気にするんです！私と姉弟に見られるなんて……まるで千秋くんがバカにされてる気分です許せません！」

お、おう……。俺のために怒ってくれてるのか……。ちよつと嬉しい。

「大体、千秋くんもヘラヘラと私の事を『お姉ちゃん』なんて呼ばないでください！」

「ご、ごめん……？」

「まったく……。とにかく、奏さんに連絡を取ってみるので、少し待っててください」

「分かったよ……」

「それと、後でもう一回だけ『お姉ちゃん』と呼んで下さいませんか？」

「えっ？」

そんなわけで、なんか今度の日曜に服を買いに行くことになった。



## メンズ服（2）

日曜日、俺は駅前で待機していた。今日は文香と速水さんと待ち合わせしている。

なんか俺の服をかうとかで出掛けなきゃいけないわけだが、前の日の俺と違ってモチベーションは低かった。だって面倒臭いもん。しかも速水さんも一緒でしょ？あの他人にも自分にも厳しい人は当然、俺にも当たりが強くなるだろう。いや、当たりが強くなるというよりも厳しくビシバシと奏のパーフェクトスパルタおしやれ教室の始まりだ。下手な事を言うとか冷たい目線で冷凍されてしまうかもしれない。

あ、やばい。そう思うと緊張してきた。少しでも気を紛らわそうと、FGOのイベントを周回していると、後ろから肩をつつかれた。振り向くと、むにと頬に人差し指が刺さった。文香の指だった。

「……引っかかった〜」

何それ可愛い求婚したい。

「引っかかってやったんだよ。文香の指に触れたくて」

「も、もう……千秋くんだったら……。そ、それなら……。いっそのこと、啜えてくれれば良かったのに……」

「おまつ、表にいるときにそんな……。いや、文香が良いなら、良いけど……」

「……こ、これはこれで……その、良い気もするので……今度、時間があるときに……」

「その馬鹿二人。表でアブノーマルにイチヤイチャするのやめてくれる？」

「……………」

「……………」

速水さんから突然、声が掛かった。駅の真ん中で恥ずかしい事抜かし過ぎた……。

「…………ごめんなさい」

「次から気を付けます……」

「次、私がいる時に惚気たら帰るからね」

つまり、貴重な一回目を挨拶もする前に使ってしまったということか……。いや、まあこつちから速水さんに頼んでるわけだし、向こうが嫌と言うなら惚気ないようにはしないと。

「……すみません」

「じゃ、行くわよ。鷹宮くんの洋服を選べば良いんでしょ？」

「……はい。私じゃ、お力不足のようで……」

「大丈夫よ、文香には元々そういうの期待してないから」

「なっ……！わ、私だって少しは知識があります！この前だって……！」

「クレンジング液も知らない子は引っ込んでなさい」

容赦無く正面からたつた一言で文香を完膚無きまでに叩き潰すと、速水さんは俺を見た。

「もちろん、あなたの意見も聞かないから。似合う服とか、全部私が選んであげるからね」

「そ、そうですか……」

まあ、その方が助かる。選べと言われた方が困っただろうしなあ。やっぱ、分かる人が選んでるのを見て、その中から系統別に頭の中でカテゴライズしていくしかない。

そんなわけで、三人でデパートに向かった。と言っても、前に入ったデパートではない。だってあそこ行きづらいし。

電車に乗って少し遠出した所にあるアウトレットにきた。アウトレットの服屋に向かう途中、ゲーセンが目に入った。

「あつ、ゲーセン！ゲーセンある！」

「本当ですね。艦これやりませんか？」

「バカ2人、何しに来たのか考えなさい」

冷たく速水さんに怒られたので、黙って服屋に向かった。まあ、このゲーセン以外はほとんど服屋みたいなものだ。石投げれば服屋に当たるこの辺りの店ならどこでも服屋だから、テキトーな店を見つけた。

「さて、じゃあ洋服探しましょうか」

「あの……オシャレすぎて入りにくいんだけど……」

「知らないわよ」

「……そうです、千秋くん。私のためにオシャレになってくれるんでしよう」

「いやオシャレっつーか男子高校生の平均ちよい下くらいで良いんだけど……」

「……ダメです。姉弟に間違えられるくらいなんですから。せめて夫婦に見えるくらいになりたいです」

「カップルじゃねえのかよ……。どんなにオシャレしても無理な気がするわそれ」

実際、今結婚したとしても夫婦には見えないだろうしね。

「そう言えば、前にも洋服見繕ってあげた事あったわね」

「あー……文香に告白した時か……」

あつたな、そんな事。あの時は結局、俺が選んだ奴にしたんだっけ。

……あれ？そう考えると、俺っておしゃれの才能が……。

「無いわよ」

「心を読むな！」

「……いつから奏さんと千秋くんは、言葉を交わさずとも思いを伝えられる関係になったんですか？」

「飲み込み方！」

面倒だな俺の彼女！大体、ある意味では俺と文香の事を一番分かってるのは速水さんだ。読まれても何ら不思議はない。読んで欲しくないけど。

そんな話をしながら店内の洋服を見回った。速水さんの後に続き、俺と文香は並んで歩く。なんというか、つくづく場違いな気がするわ。こんな所に俺がいるのは。

しかも、他の男性客からの嫉妬の視線がすごいもんだから困る。まあ、そりやアイドル二人連れて服選んでもらってたんだから、そりやそうよね。

「……文香、怖いオーラ出して」

「……はい？」

「ほら、怒った時に発される真夏でも真冬に感じるレベルのオーラだよ」

「あの、何を言っているのか全然分からないのですが……」

「あー……じゃあ、仮に俺がラッキースケベで三村さんにおっぱいダイブしたら……」

直後、藍染並みの霊圧を感じた、と錯覚するレベルの圧を隣から感じた。

「……じ、冗談っすよ、姉御……」

「冗談でも次にそういう事言ったら、月牙天衝ですから」

「ごめんなさい……」

ま、まあ、お陰で他の男性客は出て行った。その事にホッと胸をなでおろしていると、前の速水さんが「鷹宮くん」と声をかけて来た。いつの間にか、何着か服を手に持っている。

「これ、着てみてくれる？」

「……こんなに？」

「そう。全部組み合わせ考えてみたから。拒否権はないわよ」

マジかー……。いや、まあ良いけど。俺のためのもんだし。

服を預かって試着室に入った。名前がよく分からないけど、緑っぽい色のセーターっぽいのが、コート、首まで襟のある白いTシャツ、黒いズボンだ。

……どの順番で着れば良いんだ？コートとズボンはわかるが、Tシャツとセーターはどっちが下なんだ？セーターなんて着たことないから分かんないんだけど……。

「……セーターだな」

このモコモコした肌触りは肌に直で着ないとダメだろう。まあ、売り物なので直で着るのはまずい気がするから、今着てる自分のTシャツの上に着るけど。

そう決めて、とりあえず全身を装備した。

「……着替え終わりましたか……？」

試着室の外から文香の声が聞こえた。ちょうど、着替え終えたので試着室のカーテンを開けた。

「着たけど……」

「……あれ？あなたニツトは？」

「は？帽子なんてあった？」

質問に答えると、速水さんは怪訝そうな表情を浮かべた。

「ニツト帽じゃなくて、緑の服よ」

「え？白のTシャツの下に着てるけど」

「なんでニツトを下に着るのよ！普通、逆でしょ!?!?」

あ、そうだったのか……。ていうか、あれニツトっていつのか。通りで下に着る服なんて表から見えないのに、色の付いた服を着させられたと思っただわ。

「悪い、着替えてくる」

「本当にセンス無いんだから……」

「あ、あはは……」

文香にまで乾いた笑いを出されて軽く死にたくなっただが、まあそこは良いだろう。実際、俺の方がセンスないだろうし。

改めて着替え終えて、もう一度カーテンを開けると、それでも二人は微妙な顔をした。

「……え、何？」

「なんか、あれね。オシヤレ過ぎて……着てる、というより着られてるっていうか……」

「……私の知ってる千秋くんじゃない……」

「どういう意味だよオイ、特に文香の方」

「……これじゃあ、どっちかって言う则可愛い顔してる癖に少しでも彼氏らしく男らしい表情を保とうとして余計に可愛くなってる千秋くんじゃなくて、どこにでもいるただのイケメンだと言ってるんです！」

「本当にどういう意味だよオイ！」

「お願いします、元の千秋くんに戻ってください！」

「文香、ヘアバンドの匂い嗅がせて」

「……ああ、良かった。いつもの千秋くんだ……」

「あんたらほんとどんな毎日を送ってるのよ……」

本当にな……。

や、まあ、とにかく似合わないってことはわかった。それならこの服に用はないな。

「なら着替えるよ、もう」

「あ、待ってください。一応、写真撮りたいです」

「文香、あなた本当どこまでも欲望に忠実になったわね」

そんなわけで、元に戻った。

その後も、何度も何度も着せ替え人形にさせられたが、どれを着ても二人は、特に文香は微妙な表情を浮かべた。どうやら普段の私服は相当ダサく、そのダサさが身に染み込んでるようだ。

流石に軽く凹んでる俺を捨て置いて、二人は真面目な顔で会議を進める。

「どうすれば良いのかしら……」

「……そうですね。何を着ても千秋くんじゃないです……。いえ、中は千秋くんなんです……」

「そうね……。金銭的に買うのは1セットだけなんですけど、考えたらそれはそれで問題あるのよね……。その服着てる時だけ別人になるっていうのも……」

「はい……。困りましたね……」

真面目な顔の会議でとても失礼なことを言われていた。今日1日で二人の無意識下による心の連続パンチは既に百発を超えている。親切に服を選んでくれるのに、辛辣に攻め続けられてる気分だ。

まあ、でも今の話の流れで結論は出たようなものだろう。心のダメージを抑えながら、悩んでる2人に言った。

「どれ着ても一緒なら、一番安いのが買おうぞ」

「だめよ、そんなの」

「……そうですね。似合わない服を買っても……」

「似合わない服しか買えないんだよ。何せ、着るのは俺なんだから」

「……何、自虐ネタ？」

「……千秋くんを悪く言うのは、例え本人でも私は許しませんよ」

「いやお前らさつきから言ってたくせに……いや、まあ良いや。自虐

とかそんなんじゃないから」

そこを注意してから説明を始めた。

「何を着ても、普段のダサイ俺のイメージがついてるから逆に似合わないんでしょ？なら、どれでも良いから買って、それでしばらく文香とデートするなりすれば良いんだよ。それなら、少しずつダサくない俺のイメージが出来上がっていくもんでしょ」

そう言うと、二人は顔を見合わせた。意外な物を見る目で俺を見た後、「確かに……」みたいな表情になる。

「……そうですね。そう言われれば確かに……」

「まさか、鷹宮くんにもまともなこと言われると思わなかったわ」

「言ってることは自虐そのものなだけけどな……」

自分のダサイファッションの荒療治を自分で提案したんだ。こんな惨めな話あるかってんだ。

まあ、でも今回の買い物は俺としても良い教訓になった。年齢が上がるにつれて、服装もちゃんと年相応のものにしなければならぬという事だ。

それを頭の片隅に入れて、試着した服の中で一番安かった組み合わせを手にとって試着したから出た。

「……っし、じゃあ、とりあえず一番安かったのを買って帰るか」

「待った」

二人の間をすれ違おうとした直後、二人から手が伸び、俺の動きを見事にロツクした。

「……それなら、一番オシャレな奴を吟味しましょう？」

「……そうですね。おしゃれな洋服なんて、千秋くんのお金では滅多に買いに来れませんから」

「……」

どうやら、まだまだ着せ替え人形は続くようだった。

その後は、二人が満足するまでの間、とにかく洋服を選ばされ、そこそこ高い組み合わせのものを買わされた。

## バレンタイン（1）

2月12日。レッスンが終わり、文香は更衣室で奏とありすと着替えをしていた。今日のレッスンも一段とハードだったけど、文香もそれなりについていけるようになっていた。

そうやって来たのは、レッスンや仕事が終わりに帰ってからに楽しみが出来たからだと考えるべきだろう。

「……♪」

「あら、ご機嫌ね。文香」

鼻歌なんて歌っていると、奏が口を挟んで来た。

「……そうですか？そんな事ないですよ」

「何か良いことでもあったの？」

「……いえ、帰ったら千秋くんが温かいご飯を作ってくれて待つててくれると思うと楽しみで……♪」

「新婚さんの夫？」

「夫!? それは千秋くんの方です！」

「いや、どう考えても今のセリフは逆だったわよ。あなた達、この前のデートから何も変わってないじゃない」

言われて、反論出来なくなる文香。深刻な顔で俯くしかなかった。

「うう……やはり千秋くんと半同棲状態になってるとそういう事に……でも、一時も離れたくないし……一体、どうしたら……」

「文香さん、鷹宮さんと一緒に住んでるのですか？」

「……いつ、いえいえ！ほとんど同棲なだけで、別に夫婦なわけでは……！……えへへ」

「夫婦とは一言も言ってますが……」

ありすでさえ呆れた表情を浮かべた。奏はどうしようか悩んだが、とりあえず幸せそうなので指摘しておいた。

「まあ、もうすぐ嫌でも女子力が試される日が来るから、あまり気にしなくても良さそうだけどね」

「？ どういう意味、ですか？」

「あら、女の子なら誰だって分かるでしょ？」



「……………」

「へっ？あなた本気で分かってないの？」

その確認にもキョトンと首を捻ったその反応を見て、奏もありすも驚いた表情を見せた。

それに文香も思わず驚き、聞き返してしまった。

「えっ、なんですか？二人して……………」

「あなたねえ、二月と言ったらバレンタインデーじゃない」

「……………あつ」

「い、今思い出したんですか……………」

さあーつと文香の顔色が青くなった。

「文香、あなたまさか……………」

「ま、全く準備してないんですか……………」

「……………でも、千秋くんだったってこの手のイベントには疎いですし、案外忘れてるんじゃない……………」

「そんなわけないじゃない。男の子にとってもバレンタインは特別な日なのよ？そんな日を意識しない子がいるわけないでしょ？」

「……………」

さらに冷や汗を増す文香。すると、ありすがスマホを取り出し、耳に当てた。

「もしもし、鷹宮さんのお電話ですか？」

『橘さん？どしたの？』

「あの、おかしなことを聞くようですが、バレンタインが近づいていますけど、覚えてます？」

『うえっ！？！？ばっ、ババババレンタイン！？？そ、そっかそっかー。そういやもうそんな時期かー！いやー、全然気づかなかったわー！』

「……………そうですか」

ありすも奏も呆れ顔を浮かべる中、文香は助かったーみたいな表情をした。結果、奏にギロリと睨まれたので無理矢理、真顔に戻した。『いやー、去年までは一切、もらった事ないけどさー。今年はもらえるかもなーなんて思ってたよねー。ほら、女の子の知り合い増えたじゃん？いや、全然期待なんてしてないけど』

そのセリフに、文香がピクツと反応した。奏とありすの脳裏に嫌な予感がよぎるが、文香がいると思つてない電話の向こうの千秋はペラペラと続けた。

『特にあれな。速水さんとか。あの人って料理とかしなさそうじゃん？そんなクールぶつてる子が作った不器用なチョコとかスゲエ気にならない？』

自分のチョコよりも奏のチョコを気にした事に気にした文香と同時に、今度は褒められたかと思つたら変に貶された奏も反応した。

が、テンションが高いのか珍しく饒舌な千秋は止まらない。

『それとさあ、三村さんのチョコも楽しみなんだよね。いや、もらえるとは限らないけど。でも、あの人確かお菓子作りが趣味なんでそ？いやホント楽しみだわ』

「あ、あの、鷹宮さん……」

『あーあとアレ。多田さんからももらえたり……』

「鷹宮さん！」

『うおつ、な、何？』

黙らせたものの、ありすはどうしようか悩んだ。どうやら、この後に文香は千秋の待つ家に帰宅するらしいし、このまま帰せば喧嘩になるのは目に見えていた。

何とかそれを回避するために何か良い手はないか考えた結果、こう言ってみた。

「その、今日はお暇ですか？」

『え？うん。あーでも、もう文香の晩御飯作り始めちゃってるんだよな。今日は文香の好きなマグロのカツだよ』

「では、私もお邪魔しても？」

『了解。でも、珍しいな。なんか用あつたの？』

「はい。実は、私も鷹宮さんにチョコを渡したいと思ひまして」

『えっ、ほんとに？』

「ホントです。そこで、せっかく渡すなら喜んでもらいたいので、鷹宮さんのチョコレートの好みを教えていただきたくないので、詳しく話を聞きたいのです」

その説明に、文香が「なっ……!?？」と声を漏らすが、ありすは構わずに続けた。

『いやーそんな気を使わないで良いのに。その辺で買ったもんでも全然喜んじゃうよ?』

「いえ、それでは私の気がすみませんので。では、後ほど文香さんと一緒に伺わせていただきます」

『はいはい。メチャクチャ美味しいマグロカツ食わせてやるから楽しみにしてろよ』

「はい」

そこで、電話を切った。直後、文香が慌てた様子でありすに駆け寄った。

「あつ、あのっ……ありすちゃんっ? どういうつもりですか……うち、千秋くんを取るのには例えありすちゃんでも……!」

「いえいえ、そんな気はありません。ただ、私がいれば文香さんは鷹宮さんと喧嘩にはならないでしょうし、それに文香さんは私を通して鷹宮さんの好みのチョコを知れるのではと思ひまして」

「な、なるほど……」

「でも、それじゃあ文香とありすのチョコは同じ味になっちゃうんじゃないかしら?」

奏の確認に、ありすは首を横に振った。

「大丈夫です。私は鷹宮さんのアドバイスを全く無視しますから」

「そ、そう……」

サラリと切り返され、奏は引き気味に相槌を返した。

「せっかくですし、奏さんもご一緒に行きませんか? 今日の晩ご飯はマグロカツだそうですよ?」

「いえ、私は遠慮しておくわ。……鷹宮くんへのチョコレートに入れるハバネロ買いに行かないといけないから」

「……………」

奏の怒りを抑えることを忘れてた、と思ったあたりすが、目の前の奏は笑顔ではあるが、額に青筋が浮かんでいるため、もう自分では止めることはできないと思うことにした。

× × ×  
奏と別れて、ありすと文香は二人で鷺沢家のマンションに向かった。電車に乗り、二人で座ってる間は文香は少し不機嫌そうだった。やはり、さっきの千秋の浮かれようが面白くないのだろう。

だが、それでもありすは物怖じする事なく声を掛けた。

「怒らないで下さい、文香さん」

「いえ……分かっていきます。千秋くんは過去に友達がいなかった事ないそうですから、今年に友達が増えてバレンタインにチョコを貰えるのは初めてみたいですので、はしゃぐ気持ちも分かるんです」

「文香さん……」

「……でも、腹立たしいです。私以外の人からチョコを欲しがってるなんて」

シヨボンとしてたのに、急にキリツとして怒ったような表情への切り替わりに、ありすは引き気味な笑顔を浮かべて言った。

「ま、まあまあ、世の中には『友チョコ』というものもあるみたいですから。アイドルの方達もそういうイベントは好きですし、チョコを貰うのは仕方ないと思いますよ」

「……いえ、自分からもらおうとしてるのが腹立たしくて……」

その返答に、今度は顎に手を当てて聞き返した。

「……そういうものですか？ 私には、恋人というのがあまりよくわかりませんが……」

「……はい。でも、私や千秋くんは割と特殊な恋愛だと思うので、参考にしない方が良くと思いますよ」

「なるほど……？」

言われたが、イマイチよく分からないありすは適当な相槌で返し、話を元に戻した。

「でも、鷹宮さんが色んな人からチョコをもらいたがっているのなら、文香さんが一番印象に残るチョコを作れば良いのではないですか？」  
「……そうですね。一番美味しくて、私の事を忘れられなくなるようなチョコを作ってみせます」

この時、文香の妙な言い回しにありすが気付かなかったのは言うま

でもない。ただ、文香の頭に一番に浮かんだ食材は自分の唾液だった。

駅に到着し、文香の家に向かった。その途中、何かを思い出した文香はありすに声を掛けた。

「……ありすちゃん、少しコンビニに寄ってもよろしいですか?」

「良いですよ」

文香に言われて、二人はコンビニに向かった。

理由を聞かなかったのは、何となく文香が買うつもりのものが理解出来たからだ。なんだかんだ彼氏思いな文香だから、お土産を買うつもりなのだろう。

その予想通り、文香はスイーツの並べられている冷ケースに向かった。

「……ありました。これです」

そう言って文香が手に取ったのは、艦これとのコラボ商品だった。おそらくエクレアだろう。

それを見てありすは若干固まったが、今更ながら自分の事務所のアイドルの間で流行っているものを思い出し、何も考えないことにした。

文香はそれを二つ購入し、コンビニを後にした。

「ふ、文香さん。そのためだけに寄ったんですか?」

「……はい。やはり、コラボ商品は一度は食べておきたいですから」

言いながら、文香は袋の中を漁り「はい」とありすにエクレアを差し出した。

「……へっ?」

「……ありすちゃんにです。先程は、気を使わせてしまいましたからお詫びという事で」

「……ふ、文香さん……!文香さあん!」

「ふふ……よしよし。食べるのはご飯の後にしましょうね」

ガバツと文香に抱きつき、ありすの頭を優しく撫でた所で「あれっ?」とありすは声を漏らした。

「へっ?でも、二つしか買ってないんじゃない?……。鷹宮さんの分は…」

「……千秋くんにはデザートは抜きです。」

そんな事をしてるうちに文香の家に着した。

玄関から既に良い香りが二人の鼻腔を刺激し、二人とも思わず頬を緩ませた。

「……文香さん、いつも夜はこんな匂いを漂わせてくるのですか？」

「……夜ご飯のメニューによります……」

ただ、今日のは格別だった。揚げ物のお腹が空いて喉の乾く香りがとても香ばしかった。

だが、いつまでも部屋の前でニヤニヤしていたら変質者なので、文香が鍵を開けて入室した。

「……ただいま〜」

「お邪魔します」

挨拶すると、キッチンから主夫が走って来た。

## バレンタイン（2）

バレンタイン当日。事務所ではアイドル達のチョコ交換会が行われていた。

私もその交換会に参加しなければならぬ。とりあえず、プロデューサーさんとちひろさん、それと仲の良いアイドルの皆さんと千秋くんがお世話になった皆さんに渡す予定です。

まずはロビーの自販機の前に向かった。ここで大抵のアイドルはコーヒーなりジュースなりお茶なりを飲んでるので、大半は渡し終えられそう。

まずはカウンター席に座ってる3人組に声を掛けた。

「……卯月さん、美穂さん、響子さん」

渡す予定があつたのは、私に千秋くんが告白する日のデートのための私服選びでご迷惑をかけた卯月さんだけだけど、他のお二方もせっかく一緒にいるので渡しておきましょう。何だか一人にしかあげないのは感じ悪いですし、多めに作っておきましたから。

「っ？あつ、文香さん。ハッピーバレンタインです！」

同性である私から見ても輝いて見える笑顔で、卯月さんがチョコレートをくれた。

美穂さん、響子さんからもチョコも受け取り、紙袋の中にしまった。私からもチョコを渡すと美穂さんが楽しそうな表情で聞いて来た。

「文香さんのは手作りですか？」

「……はい。一応……」

「美穂ちゃん、当たり前ですよ。文香さんには彼氏がいるんだから」

「あ、そ、そっか」

響子さんが微笑みながら仰つて、私は顔を赤くして俯いた。そういう風に言われると恥ずかしいですね……。

「あ、文香さん。彼氏で思い出した」

そう言うのと卯月さんが鞆からもう一つチョコを取り出した。

「彼女さんにこんなこと頼むのもアレだけどさ、鷹宮くんはこのチョコ渡しておいてくれませんか？」

「……へっ?」

キョトンと小首を捻ってしまった。別にもらえることに驚いたわけではない。卯月さんの手元にあるチョコは手作りではなく、買ったものだった。

「……これ、買ったものじゃ……」

「本当は手作りが良いかなって思ったんだけどね。文香さんがいるから、私は手作りじゃない方が良いかなって思ってた」

そっか……。わざわざ私に気を使って……。

「……すみません、私なんかにお気を使わせてしまって……」

「ううん。いつもレベリングお世話になってますし」

ああ、そういえばそうでしたね。まあ、手作りではないようですし、受け取っておきましょう。いや、多分手作りだったとしても受け取ってしまうかもしれないけど。

「……わざわざありがとうございます。それでは、私はこれで」

小さくお辞儀をしてその場を離れた。他にも渡さなければならぬ人は多い。

続いて合流したのは修学旅行でご迷惑をかけたトライアドプリムスの皆さんだ。

「あ、文香」

加蓮さんが気付いて小さく手を振って来た。私も小さく会釈をして挨拶し、鞆の中からチョコの包みを三つ取り出した。

3人も同じようにチョコを用意してくれた。

「はい、文香さん」

「ハッピーバレンタイン」

「それと、こつちも鷹宮に渡しておいて」

3人とも、千秋くんチョコを用意しておいてくれた。本当に申し訳ないです。

「……すみません、みなさん。これは私からです」

「ありがとう」

3人にチョコを配った。そういえば、前に凜さんが彼氏さんと喧嘩した時に相談に乗ってあげましたっけ……。奏さんに、千秋くんの下



着を盗んだのを本人にバラすと脅されて。

私も用意した方が良かったかもしれない。

「……すみません、私は水原さんの分をご用意してないのですが……」

「あーいいいいいよ。ナルには私入りチョコ渡してあるから」

「……凜さんが、入ってるのですか?」

「何でもない」

血でも入れたんでしようか?……あ、今更ですけど私の身体にチョコを塗っても良かった……いや、良くないですね。何を考えてるんでしょうか私は。

「文香さん?なんか顔赤いぞ?」

「……っ、なんでもありませんよ!!?あはっ、あははっ……」

奈緒さんに言われて何とかがごまかした。ま、まあ、その、何とか……私は顔に出やすいみたいですし、そういう妄想は家ですることにしてしまおう。

「……あれだね、凜もだけど彼氏が出来ると女って変態になるんだね」

×加蓮さんがボソツと遠い目をして呟いた。

×

更に色んな方々の元にチョコを渡して回った。けど、なんででしょうか。同数ならともかく、チョコが増えていくのですが……。なんか私が関わりを知らない人にまでもらってて、千秋くんはどれだけのアイドルと関わって来たんでしようか。

まあ、でも後は李衣菜さん、ありすちゃん、奏さんの3人だけだから、千秋くんがもらえるのは想定できるから、ようやくホツと出来る。……にしても、少し千秋くんにはキツク言うべきかもしれません。もう少し女の子と関わるのは避けて欲しいものです。

「あ、おーい!文香さん!」

李衣菜さんが元気良く手を振ってるのが見えた。鞆の中をゴソゴソと漁りながら駆け寄ってきて、チョコを渡してくれた。

「はい。これ、鷹宮と文香さんのチョコ」

「……あ、はい。ありがとうございます」

……あ、今日初の千秋くんへの手作りチョコだ。というか、今更だ

けど李衣菜さんは他の方と違って、千秋くんとは……こう、ら、ラブ  
コメ？的な出会い方をしていますよね……。

偶然、修学旅行先が同じで、ホテルの中で落し物を拾い、お互いに  
同じ境遇の中で再会して、雨が降ってきて靴を濡らさないためにおん  
ぶまでしてあげている。

万が一、私と千秋くんが出会っていなかったら、李衣菜さんとお付  
き合いしていたかもしれない。

「……………」

「……………文香さん？」

でも、そんな事聞いても私に何かできるわけじゃないですよ。仮  
にそうだとして、私がか言ったところでそれは煽っていることにな  
るのは人の気持ちに疎い私でもわかります。

だから、ここは何も言わずに受け取っ……………」

「いやー、私最近彼氏ができて、ついうっかり作り過ぎちゃったんです  
よー。だから2〜3個くらいもらってくれませんか？」

「……………」

全然何でもなかった。

自分の深読みがとても恥ずかしくなり、チョコだけ交換してその場  
を立ち去った。

×

×  
残りのありすちゃんとう奏さんにもチョコを配り終え、いよいよ帰  
宅。まあ、今更千秋くんチョコを渡すくらいじゃ何も緊張はしな  
い。

だから、チョコレートがちゃんと好みに合ってるかーとかで緊  
張してるのは気の所為だと信じたい。今日も千秋くんは私の部屋で  
晩御飯を作ってくれている。

……………千秋くんのために持ち帰ったチョコレートは本人に渡したく  
ない、なんて思ってしまうのは、いけないことでしょうか。皆さんが  
私に気を使って手作りではなく、わざわざ別に買って来たものをくれ  
たのに。私という人間はつくづくわがままで独占欲が強いらしい。

まあ、千秋くんにはちゃんと差し上げますけど。

「……はあ」

そんな自分に嫌気がさす。やっぱり私のチョコにも涎か何か入れておけば良かったでしょう。まあ、ありすちゃんのお陰で好みは知れたんですし、それで満足するべきでしょうけど。

……いや、いろいろと考えるのはやめましょう。部屋に帰って千秋くんと温かいご飯を食べて、デザートに大量のチョコを食べれば良いですね。

そう考えたところで、ちょうど自分の部屋の前に到着した。……そういうえば、千秋くんは皆さんの手作りチョコを望んでましたっけ。まあ、それは説明すれば許してくれるでしょう。

「……ただいまー」

「あ、おかえり。ご飯にする？お風呂にする？それとも……」

「千秋くん」

「冗談だから遮るのやめろ」

正直、初エッチ以来、全然何もしてないので欲求不満ではあります。男の子の癖にヘタレですからね……。

「……では先にご飯をいただきますね」

「了解」

……ソワソワしながら私の片手の紙袋を何度もチラ見して来てる。そんなにチョコが気になるかな。

「……千秋くん、ご飯」

「はっ、はいはいっ。あ、コート預かるよ」

「……ありがとうございます」

私のコートをハンガーに掛けに行つたのを見ながら食卓に座ると、机の上にはとても上品に仕上げられたお寿司が並んでいた。

「……千秋くん、出前でもとつたんですか？」

「いや俺が作った」

……どこまでチョコが楽しみだったんでしょうか。普通、お寿司なんて握れますか？少なくとも形だけは完璧に見えますよこれ……。マグロ、サーモン、するめイカ、中トロ、えんがわ、ネギトロ軍艦、馬肉、牛肉……って、馬肉に牛肉!? 何処まで本気出してんですか!?

馬肉に至っては何処に売ってるんですか!?!?

「……………あの、お寿司ってこんな簡単に……………」

「なんか見よう見まねで。なんつーか、人間やろうと思えば出来ないことってないんだな」

「……………」

確かに千秋くんは本気出せば何でも出来るタイプの人ですが……………いや、ツツコミを入れるのも阿呆らしいし、放っておきましょう。

晩御飯を食べ始めた。箸でお寿司を摘んで一口いただいた。

「……………お、おいひい……………」

「だろ? いやー、ついうっかり作り過ぎちゃってなあ! いや、全然バレンタインは関係ないけど!」

なんてわかりやすい……………。一周回って可愛く見えてきましたね……………。

「……………千秋くんはそんなにバレンタインでのチョコが楽しみだったのですか?」

「い、いやいやいや、そんなまさかあ!」

「……………私のチョコだけでは満足出来ませんか?」

「へっ? いやいや、文香のチョコと周りのチョコを比べるのはね、俺が文香と他の女の子どっちが好きかを比べるのと同じ事だからね」

「ーっ、そ、そうですか……………」

分かりにくいけど……………つまりは私のチョコが一番嬉しいって事ですよね……………。

相変わらず、捻くれた褒め方しか出来ないんですから。けど、その一言でチョコを渡す気になってしまう私も単純な子かもしれない。

「……………皆さんからチョコをいただきましたが」

「まっ、マジで!?! いや全然嬉しくないけど!ど、どのくらい?」

「ザツと20以上」

「……………えっ、に、20……………? 多くて7〜8個だと思ってただけ……………」

「……………全部食べましょうね。李衣菜さんとありすちゃん以外の皆さんは、私に気を使って、わざわざ手作りではなく購入して下さったんで

すから」

「よし、それは全部溶かしてチョコフォンデュにしよう」

「……千秋くん」

「いやいや！20個もチョコ食えないでしょ！虫歯になるし鼻血出し太る！」

「……まあ、チョコフォンデュ美味しいですし良いですけど……」

そんな話をしながら、二人で食事を進めた。

×そして、それと共に私は一つの決心を固めて行った。

×食事が終わり、今日はうちに千秋くんは泊まっていくことになった。今はお風呂に入っている。

私は先に布団に入ることにしていて、ベッドの中で本を読んでいた。

「ふうー……よし、寝るか文香」

「……はい」

「あ、その前に……はい、これ」

千秋くんが何か袋を渡してくれた。中には紙に包まれた箱が入っている。

「……これは？」

「文香なら絶対チョコをくれると思ったから。俺からもバレンタインって事で」

「……開けても良いですか？」

「……んっ」

中を開けると、ヘアバンドが入っていた。青っぽい紫色のヘアバンド。

……本当に、この人のこういう所は狡い。

「……千秋くん、バレンタインデーにはお返しの日として、ちゃんとホワイトデーというものがあるのですよ？」

「だから、それは俺からのバレンタインデーだっつの」

「………まったく」

若干、照れてるようで頬を赤く染めた千秋くんは布団をまくった。

直後、顔を真っ赤に染めた。下着姿の私が露わになったからだ。

「……………はっ?」

「……………千秋くん、チョコばかりではなく私を食べて下さいませんか?」

「……………おまつ、マジか……………」

「……………良いじゃないですか、バレンタインデーくらい。恋人同士がロマンチックな思い出を作るには良い日だと思いますよ?」

「……………ロマンチックっつかエロチックだろ」

「……………うるさいです。それで、どうするんですか?」

「……………後悔しても遅いからな」

このあと、滅茶苦茶セツ

総選挙ふみふみに投票しました。

バレンタインも無事終わり、しばらく平和に過ごせそうな時期がきた。俺も文香も、夕食後を文香の部屋でのんびりと過ごしていた。文香は本を読み、俺はゲームをする。いつも通りの日常だ。

すると、文香が俺の肩に頭を置いた。もうこの程度でドギマギする事もなくなった俺は、慣れた様子で文香の頭を撫でた。

文香も撫でられるのには慣れたのか……いやこれ本に集中してるだけだなこれ。

すると、本を読み終えたのか、本を閉じた。辺りを見回すと、コタツの上のみかんが目に入ったようで、手に取って剥き始めた。どうやら、小腹が減ったようだ。

剥いたみかんを一つむしると俺の口元に運んで来た。

「……どうぞ、千秋くん」

「どうも」

一口いただいた。わざわざ自分よりも俺を優先して……酸っぱいな。彼女に食べさせてもらっても、味自体は変わらないことが証明された。

「そのみかん酸っぱいから食べない方がよいよ」

「……そうですか。すみません、なんか毒味させたいので……」

「文香のための毒味なら進んでやるよ。例え毒が入ってたとしても」

「……私より先に死んだら呪い殺します」

「そいつは怖いな……」

最近、そういうちよつと重たい愛にも慣れてきた。勿体無いので酸っぱいみかんをもう一度食べると、文香も同じように酸っぱいみかんを食べた。

「おい」

「……千秋くんにだけ酸っぱい思いはさせません」

「……あそう」

しかし、こう言うのんびりした時間も悪くない。

コントローラをコタツにおいて後ろに伸びをした。合わせて文香

も後ろに倒れ込みながら、俺の腕に頭を置いた。

「……ふふ、千秋くんの香り……」

「……そう言うの口に出すなよ……」

「……照れちやうからですか？」

「……」

「……可愛いです」

……昔は手を繋ぐだけでも照れたのになあ……。最近、妙にから  
かってくるんだよなあ……。少し、仕返しがしたいかもしれない。

まあ、それは後で考えるとして……なんか小腹が空いたな。

「少し出掛けよう」

「……怒ってしまいましたか？」

「いやいや、コンビニでなんか買ってこようと思って。一緒に行かな  
いっ。」

「……でも、外は雪ですし……」

最近、引き籠もり根性が強くなってんなこの子。まあ、こうなった  
のも正直半分くらい俺の責任なわけだが……。

「じゃ、一人で行ってくるわ」

「うっ……ま、待ってください。私も行きます……!」

やはり来るよね、こう言うと。

俺がコタツから出ると、文香も渋々コタツから出てスイッチを切っ  
た。

俺は基本的にコートは着ない。厚着が嫌いだから、大きくても少し  
厚いパーカーくらいで止めている。ほら、関節曲げると布が重なるの  
嫌じゃん。

そんな俺の服装を見て、ガッツリコートを着込み、手袋とマフラー  
を装備した文香が引き気味に聞いてきた。

「……相変わらず寒そうな格好ですね」

「いやいや、なんのこれしきだから」

「……そうですか、まあ風邪引かなければ何でも良いですが」

文香の部屋を出て、エレベーターに乗って降り、マンションの自動  
ドアを出ると雪はやはり積もっていた。道路は所々凍っていて、小学



生ならトリプルアクセルごっこが始まりそうな勢いだ。

文香と手を繋いで、コンビニに向かう途中、俺は思い出したように言った。

「……そういや、ワールド大したことなかったなあ……」

「……あー、はい……」

面白かったには面白かったよ？スリンガーとか滝落としかディアブロスの巣とか縄張り争いとか。

「でも、その……ちよつと自然の武器が強すぎるよなあ……」

「……はい。千秋くん、鉄刀の最終武器とレイギエナ装備で全部倒しちゃいましたからね……」

「文香だつてラスボス初見で倒せてたじゃん」

「まあ、はい……。だつて飛んでる時にスリンガー2〜3回当てれば高確率で落ちて来るじゃないですか」

「それな。あともう少しモンスター強くしても良かったと思う」

強くて詰まったのはネルギガンテとテオだけだったから。テオは火耐性付ければ余裕だったし……。

中ボス扱いのゾグ・マダラオスなんてFGOやりながら倒せちゃったから。

「……で、でもっ、ワールドのお陰で面白い動画見つけましたよっ」

「？ 何？」

「…山手線っていうゲーム実況者です。部屋に戻ったら見ませんか？」

「ゲーム実況かあ、俺は興味ねえわ。なんだかゲーム上手い自慢されてる気がして」

「……いえ、それが山手線はですね、下手なんです」

「はっ？」

「…つか、山手線っていうネーミングセンス。そう言うのは割と好きです。」

「……私も最近になって山手線を知ったんですけど、上野さんと渋谷さんってお二方が実況してるんですよ」

「へえー。真逆じゃん」

「……はい。コンセプトは、山手線で真逆の二駅が少しでも交流するためにゲームをやる、って事みたいなんですけど……」

駅にそんなことで動かれたら駅員が迷惑だろ……。

「……それで、上野さんはゲームが上手いんです。ですが、渋谷さんの方がとても下手で、ネルギガンテ討伐の生放送では渋谷さん3乙、合計23回しました」

「おい、それ何時間放送したの?」

「……休憩挟んで四時間半ですね」

「……3乙23回とか、ネルギガンテがハンターの装備を作れちゃうだろ……」。

しかし、それはそれで面白そうだ。下手くそのゲーム実況、つまり失敗する様を見せて笑わせる、いや笑われてる?わけか。

「でも、4時間半も見るとは勇気はないんだけど」

「……大丈夫ですよ。生放送を終えてから、その動画を編集して投稿してるので、大体1時間分になってます」

「それでも1時間あんのね……」

まあ、そのくらいなら見ても良いかな。

「じゃ、後で見るか」

「……はい!」

そういや、イビルが三月に来るんだっけ。強くなつてると良いなあ。もう理不尽なくらい化け物にして欲しい。

「しかし、その間どうするか……。やるゲームないよな」

「……そろそろ千秋くん、期末テストでしょう?勉強の方はどうなんですか?」

「うっ、頭が……!」

「明日、学校が終わったら勉強ですね」

「……」

「……試験が終わったら、フォ○トナイト付き合ってあげますから!」  
「!… いいね!」

確かに、あれの日本版サービス開始が上手く重なってたな!

あまりの楽しみさにウキウキしてて油断していた。首筋に水滴が

垂れてきた。

「ひゃわっ!!? (すごい裏声)」

男とは思えない声が俺から出て、隣の文香の方がビクツとして足を滑らせた。その結果、俺の腕にしがみついて来た。ふわお!おっぱい柔らかい!

「っ、ふ、文香っ?」

「すっ、すみません……………」

「いや、いいけど…………。大丈夫?」

「…………は、はい…………」

そこまで話して、ハツとする文香。で、俺をキツと睨んだ。

「ていうか、変な声をいきなり上げないで下さい!」

「わ、悪い…………。首筋に水滴が垂れてきて…………」

「…………ま、まったくもう…………!そんな防御力の薄そうなもので来るからです…………!」

言いながら、文香は体勢を正すと、自分の巻いてるマフラーを取った。

「…………屈んで下さい」

「は、はあ」

言われて、文香の前に前のめりに屈むと、外したマフラーの端を使つて俺の首に巻き、反対側を自分に巻いた。

「…………これで、首筋には当たりません」

「…………どうも」

で、さつきと同じように俺の腕にしがみ付いた。ああ…………少し姉っぽく振る舞う文香マジで可愛い…………尊い…………。今更だけど、本当に俺には過ぎた彼女だよなあ。

「へくちっ。…………マフラー外したから寒いです…………」

「文香、ティッシュ」

「…………う、ありがとうございます…………」

まあ、女子力も嫁力も俺の方が高いらしいが。

そんな話をしていると、コンビニに到着した。買う物はとりあえず飲み物とお菓子。ジンジャーエールとポテチを購入してお店を出た。

「……買うのってそれだけですか？」

「あ、なんか食べる？」

「……いえ、ただそのくらいなら明日でも良かった気がして……」

「ちよつと文香と表歩きたかったただけだから。じゃ、帰るか」

「あつ……」

「？」

切なそうな声を漏らす文香。

「？　どうかした？」

「い、いえ……その……名残、惜しくて……。せつかくだから、もう少し歩いて帰りませんか……？」

「……さつきまで寒いから嫌ってゴネてた癖に」

「うー……ちゃんと寂しく一人で行くと言いだしたときは乗ってあげたじゃないですか……」

「冗談だよ、行こう」

超可愛い理由だったので、少しいじってからオーケーするともっと可愛かった。

ま、どんなに可愛かろうと、オタクの寄る道なんて大抵決まってる。どんなに意識しなくても必ず吸い込まれるように指定の店に行くように出来てるのだ。

「……つい来ちゃいましたね……」

「……そうね」

そう、古本屋だ。ゲームもディスクもトレカも売ってる店に来ない理由がなかった。用がなくても一日潰せるのだ、この店は。デートらしき皆無だなこれ。

「……あ、あはは」

文香も俺と同じようなことを思ったのか、乾いた笑いを漏らした。まあ、別に来ちまったもんは仕方ない。

「……寄っていくか」

「……はい」

中に入って色々で見回った。最近は漫画とかは新品で買うようにしてるからそっちは用はない。

ゲームの方を見に行った。ここで暇潰ししてる人達は大抵非リアなので、マフラーの共有は解除した。だってほら、爆発しろとか言われたく無いじゃん？

お互い、別でゲームやディスクを見回つてると、面白いゲームを見掛けた。そういやこの手のジャンルは買ったことないと思い、それに手を伸ばした。文香にバレないようにレジで購入を済ませると、文香の事を探しに行った。

所が、ディスクコーナーにもゲームコーナーにもトレカコーナーにもいない。

漫画の方を覗きに行くと、黒バスの温泉のシーンを見ながらニヤニヤしていた。

「……」

あれ声かけて良いのかな。それとも先に帰ろうかな。

迷つてると、ふとこつちを見た文香と目が合い、慌てて本をしまつて駆け寄ってきた。

「す、すみません……！お待たせしました……」

「それは良いけど、漫画読むときはなるべく顔に出さないようにな」

「へっ?」

「ニヤニヤしてるの見えたから」

「……い、以後気をつけます……」

顔を赤くして俯いてしまった。

帰りも二人でマフラーを巻き、腕を組んで帰宅した。

文香マンションに到着し、手洗いうがいをしてから文香はお風呂を沸かしに行き、俺は早速買ったゲームの準備を始めた。

「そういえば千秋くん、何を買ったのですか……?」

「ん?フオ○トナイトが日本が出るまでの暇つぶし」

「?」

パッケージを見せた。バ○オハザードのパッケージ。文香の顔が外にいた時より真っ青になるのが見えた。

「私、お先に寝ますね」

「ダメ」

涙目の文香の手を掴んだ。

「お願いします！酷いですよ！！」

「いやいや、考えてみろって。これはゾンビやお化けを撃つゲームだ。文香、お化けやゾンビは倒せるんだ。つまり、弱点克服になるんじゃないか？」

「……確かに」

やったぜ。もちろん、さっきのは口実である。ただ、さっきからかわれたのが悔しかっただけである。

「じゃ、やりますか」

「っ、は、はい……」

怯えてるふみふみマジかわいい。でもちよつと罪悪感が芽生えるのは俺が真人間だからでしょうか。

×ドギマギしてる文香と協力プレイでやり始めた。

×

×……めつつつちや怖いな、バイオ。とりあえず途中のキリが良いとこで切り上げておいたけど、ちよつと舐めてたわ。これは俺も文香と一緒にじゃないと眠れないかも……。

しかし、そんな俺よりも尚更怖がってる文香が、俺の胸に抱き付いてプルプル震えていた。

「……」

「ご、ごめん、文香……。まさか、こんなに怖いとは……」

「っ……いい、いえっ、わっ、わたたっ、わたしにはホラーはっ、その……ごっ、ごっごっ、克服できないとっ……分かっただけでもっ……」

「……や、本当ごめん。聞ける範囲なら何でも言うこと聞くから、だから怖がらないで……」

「……っ……」

やばい、本当にやり過ぎた……。とにかく、何とか気を紛らわさないと。

「も、もう寝ようか！あ、その前に歯磨きと風呂だな！俺、文香の分の歯磨き持ってくるから！」

ソファーから立ち上がった直後、俺の袖を引っ張った。

「待って！」

「何？」

「ひ、ひとりにしないで……」

涙目の上目遣いで俺を見上げる文香はかなり可愛らしかったが、その事でキュンとしている場合では無い。

「じ、じゃあ、一緒に行くか……」

「……は、はいい……」

そのままへっぴり腰で俺の腕にしがみつきながら、付いてきた。罪悪感が……明日、絶対にバイオ売ろう。

歯磨きを準備し、鏡の前で磨き……始めようとしたら文香が俺の手を引いた。

「？ ど、どうした？」

「あの……か、鏡は……後ろに、誰か映ったら怖いので……」

「映らないから……」

「いいからリビングで！」

「あ、うん」

仕方なくリビングに向かった。二人でソファーに座るまでの間も、文香は俺から手を離さない。

シャコシャコとで動かしながら、ふと文香の方を見ると手がすごい震えていて、口の中で歯磨きが頬をボコボコにしていた。

「ちよっ、文香！落ち着いて！」

「へっ？あ、あ……」

「お、俺が磨いてやるから落ち着け！」

「っ……す、すみません……」

口の中で歯磨きを啜えたまま、文香の口の中を歯磨きで磨き始めた。

火憐ちゃんよろしく、とてもエロい反応をされてこちらが反応に困ったため、さっさと終わらせて、俺の分も済ませて洗面所で口をゆすいだ。

「じゃ、お風呂入って来るね」

「えっ……」

「大丈夫、シャワーだけで済ませるから。10……いや、8分で出てきてやる」

「……わかり、ました……」

良かった。こればかりは一緒に入るわけにもいかんし。

お風呂場に入り、全裸になって髪を洗い始めた。文香のためにもさっさと髪を洗い流し、続いて体を洗おうとした時だ。お風呂場の扉が開いた。タオルを巻いた文香が立っていた。

「ふ、文香!? 何してんの!?」

「だ、ダメです……! や、やつぱり怖くて……!」

「や、でもだからって一緒に……!」

「お願いします!一緒に入れば、千秋くんも無理して早く上がる必要ありませんし、湯船にも浸かれますから!」

……はあ、仕方ない……。てか、どんだけ怖かったんだよ……。

「……分かったよ」

「……あ、ありがとうございます……」

ホッと安心するようにため息をつき、にゅーつとシャンプーをプッシュして頭を洗い始めた。

なるべく文香の顔を見ないように身体を洗ったが、やはり俺も男だ。視線が吸い込まれる。勃起を収めるので精一杯です。

俺も文香も身体や頭を洗い終わると、二人で湯船に浸かった。俺の脚の間に文香の体が来て、なんかもう性欲を抑えるのでいっぱいいっぱいになっていた。

落ち着け、俺……煩惱を消せ。今は文香に頼られてるんだ……。今襲えば、文香はさらに俺を怖がってしまう。煩惱退散煩惱退散……。そんなことを考えてると、湯船の中にいるはずの文香が小刻みに震えてるのが見えた。

「……………」

それを見て、俺はハツとした。温かいお湯の中なのに震えてるなんて、さっきの恐怖が相当なもんだったに違いない。

今更になって深く反省し、後ろからキュツと文香を抱き締めた。

「つ……ち、千秋くん……?」



「……ごめん、文香」

「へっ……？」

「本当は、少しからかうつもりだったんだよ、あのゲーム買ったの」  
「……」

「まさか、こんな怖がるとは思わなくて……」

これは、嫌われたかもなあ……。こんだけビビらせたら……。しゅんっとしてると、文香は俺の腕をキュッと掴んだ。

「……大丈夫です、怒ってませんよ」

「……文香」

「……それより、素直に謝ってくれたので、嬉しかったです」  
「……」

この子、良い子だなあ。ほんと、俺にはもったいない子だ。なんだかこっちまで泣きそうになると「そういえば」と文香が続けた。

「……可能な限り言う事を聞いて下さるんですね？」

ビクッと俺の肩が震え上がった。

「それは……文香の恐怖が消えるまでね？」

「……しばらくは怖くて夜も眠れそうにないなーこれは」  
グッ、こ、この子は……！

「……わかったよ。しばらく、俺は文香の言うこと聞く」

「……はい、約束ですよ」

そう答えた文香は、とても良い笑顔を浮かべていた。

## づ) 褒美

期末試験が終わった。文香に隠していた小テストが見つかった俺は見事に監禁されて勉強していた。

まあ、そんな地獄のような時間も今日で終わりだ。小さく伸びをしながら文香の家に帰宅した。

「ただいまー」

声を掛けると、文香がひよこつと顔を出した。俺の顔を見るなりぱあつと嬉しそうな表情を浮かべて、駆け寄って来た。何故かエプロンを装備している。

「……おかえりなさい」

「なんか作ってんの？」

「……はい。たまには私がお昼を作ろうかと……」

今の時期大学生は暇なんだよな……。羨ましい限りだが、俺もこれから春休みだし、この際何も言わない。

「……それより、どうでしたか？ テストは」

「余裕だよ。元々やればできる子だからな」

「……なら、いちいち私に説教させないで下さい」

「ごめん……」

「……では、手を洗って食卓で待っていてください。もう直ぐご飯ができますから」

言われて、洗面所で手を洗ってから合流した。

昼食を終えて、俺と文香は立ち上がった。今日は二人で出かける約束をしている。

「文香、もう行ける？」

「……はい。行きましようか」

私服姿の文香が顔を出した。いつの間にか着替えていたようだ。

……相変わらず胸が強調されるような服ばかり着るな……。まあ、服屋の店員さんに勧められるがままなんだろうけど。

「……？ 何ですか？」

ジツと見ていた所為か、文香はキョトンとした顔で聞いてきた。

「文香ってさ、本当におっぱい84なの？」

「……私と喧嘩したいんですか？」

「ち、違って！ 文香、最近胸を強調するような私服ばかり着るからさ……」

「つ、そ、そう、ですね……。いつものように…店員さんに、勧められるがままですの……」

だよなあ。まあ何でも良いけど。

「まあ、よく似合ってるよ。揉みしだきたくなるくらい」

「……何で途中でやめておかないんですか」

「冗談だよ。行こう」

「……もうっ、そういう意地悪言う千秋くんには……！」

頬を膨らませながら俺の腕に飛びついて来た。

「……出掛け先に着くまで、今日はこのままです」

「……ご褒美？」

「……いまだにくつつかれた時に心臓がドギマギしてること、隠せていませんよ」

……もしかしたら俺はとんでもない女を彼女にしてしまったのかもしれない。

二人で腕を組んだまま部屋を出た。エレベーターで一階に降りて、マンションから出た。今日は普通にショッピングの予定だ。

とりあえず電車に乗って隣の駅のショッピングモールまで直行した。何度かオシャレについて学ぶために、この手のお店の中を廻ったりはしたので、前みたいに入るだけでも勇気がいるなんてことはなくなった。買うことに勇気は必要だが。

まあ、今日はどちらかというと文香の買い物だ。着せ替えた文香が見たかったり、文香の普段行くお店が知りたかったりと。

すると、文香が掴んでる俺の腕をくいと引っ張った。

「ここ……入りたいです」

「良いよ。いつも来てるん？」

「……はい。たまに……」

ふーん、こういう店に来るのか。レディース専用って感じのお店

だ。文香が入るには少しアダルトな雰囲気があると思うんだが……。  
「あ、いらつしやいませ」

店員さんがトコトコ歩いて来たため、俺は慌てて目を逸らした。まさか、入店直後に声をかけられるとは……！

これは文香もキヨドるんじゃ……と、思ったら意外な言葉が飛んで来た。

「いつもありがとうございます」

「……いえ、いつも色んなお洋服をご紹介していただき、ありがとうございます  
ございます」

「いえいえ、アイドルの鷺沢文香さんのお力になれて私共も嬉しい限りですよ」

……もしかして、店員さんと仲良くなったのか？ 文香にそんなコミュニケーションがあるとは……。

まあ、それなら俺も挨拶しておいた方が良くもな。そう思つてとりあえず深呼吸をしてから挨拶しようとした時だ。

「今日もあれですか？ 彼氏さんのために胸を強調するような洋服ですか？」

「ちよっ……店員さ……！」

「へっ？」

「えっ？」

俺と店員さんが間抜けな声を漏らして顔を見合わせた。

しばらく瞬きをして目を合わせてる間、文香は頬を赤く染めて俯いた。

その様子を見て、ようやく察した店員さんが俺に声をかけて来た。

「……あの、もしかして……彼氏さん、ですか……？」

「あ、はい。文香の彼氏です」

「……てっ、店員さん……！」

はわわわっ、と声を漏らしそうなほどにテンパった文香が、あわあわしながら店員さんに何か伝えようとするが、なかなか言葉が見つからない様子。

……え、店員さんに勧められるがままっというか……店員さんにり

クエストしてたの……？　それも、わざわざ俺のために……？

「あ、あー……」

なんだか気恥ずかしくなって……というより気まずくなって俺も目を逸らしてしまった。

ど、どうしようかな……。この空気……。店員さんがそれを察してか、慌てた様子で文香に声を掛けた。

「っ、も、申し訳ありません……！　て、てつきり弟さんか何かかと……！」

「……いえ、大丈夫です……」

「あの……なんか俺もすみません……」

……そんなに弟に見えるかな、俺……。

「そうでしたか……。あ、じゃあもしかして以前仰られていた、彼氏さんの洋服を見に来られたんですか？」

「……は、はい。一応……」

「え、そうなの？」

それは初耳なんだが……。

キョトンとしてると、店員さんが「そうなんです」と俺に向かって言った。

「先週くらいでしたでしょうか……。勉強嫌いの彼氏が勉強頑張ってるから、ご褒美に洋服を見繕いに来てあげたいと仰られていて……」

「っ、て、店員さん……！」

さらに顔を赤くして叫ぶ文香を見て、俺は少し感動してしまった。普段の俺ならからかっていたかもしれないが、まさか文香がそんなサプライズを考えてくれてるとは……。

……つと、ダメだ。落ち着け。嬉しくても抱き締めるな。今は店員さんの前だ。

「文香、ありがとう」

「っ、えへっ……えへっ……」

頭を撫でるだけにとどめておいて、店員さんをお願いした。

「じゃあ、お願いします」

「はい。ご案内いたします」

今更だが、ここメンズ服もあったのか……。レディース服だけだと  
思ってたわ。

×  
×  
見繕ってもらった服をプレゼントしてもらい、お店を出た。嬉しさ  
もあるが、それ以上に恥ずかしかった。

「……まさか、店員さんにめちやくちや褒められるとは……」  
「……」

すごいよ、あそこの店員。「わ、お客様足長いですね」「お客様、ス  
タイル良いのでこちらもお似合いだと思いますよ」「お客様、童顔なの  
でこちらの色も良いと思いますよ」とすごい褒められながら服を勧め  
られた。

お陰で、たくさんそれなりに買ってしまった。その所為か、文香の  
機嫌が少し悪い。

「……文香？ 怒ってる……？」

「……」

「ふ、文香……？」

……返事がない……。やっぱり怒ってるのかな……。流石に買い  
すぎたか……。

「わ、悪かったよ文香。けど、あれだけ熱心に勧められたら流石に断り  
づらいつて……！」

「……っ」

すると、文香が足を止めて振り返った。

「……別に、そんなことで怒っていません」

「え？」

「……買うと言ったのは私ですから」

「じゃあ、なんで……」

「……千秋くん、あの女性店員の方に褒められてる時、とても嬉しそう  
な顔をしていました」

「えっ、そ、そう？」

「そうです。私以外の女の人に、あんな顔するなんて……」

え、マジ？ あんま意識してなかったんだけど……。

「わ、悪い……。あまり容姿について褒められた事……というか文香以外に褒められた事なかったから……」

「……」

「……マジか。反省しないとな……。しかし、文香にはどう言えば良いのか……」

「わ、悪かったよ文香……」

「……別に、褒められて嬉しい気持ちは分かるので謝っていただかなくても結構です」

口調とセリフが合ってねえよ……。何とかして機嫌直さないと……！

「ほ、ほらっ、俺は文香に俺のためにエ……。俺の好みの服選んでくれるの嬉しかったからさ、多分その事ですつと嬉しそうな顔してただけだっつ」

「……」

「それに、俺は文香に褒められた時が一番嬉しいから！ それから……なんだ？ 文香の今日の昼飯も嬉しかったし……！」

「……」

「……だから、その……。そろそろ、機嫌なおしてくれると……」

……。俺のバカ、ご褒美くれるのにまさかこんな事になってるなんて……。

しゅんと肩を落としてると、文香は俺の両頬に両手をあてて、口を近づけてきた。

うそっ……。こんな所で!? と、思ったら頬にキスされた。

「……本当に怒ってませんよ。少し面白くない気分だっただけです」

「っ……」

「……さ、他のお店も見て回りましょう」

「お、おう……」

そんなわけで、他のお店も回り始めた。

他にも色々、服屋以外にも靴、小物、帽子、メイトなどを見て回り、気が付けば夕方になっていた。

「……や、悪いな本当に。試験終わっただけなのにこんなに……」

「……別に、試験が終わったからってだけではありませんよ」

「へ？」

「……これから、千秋くんは受験ですから。それに向けて頑張ってもらうためのものでもありますから」

「……」

そっか。俺これから受験、か……。

「……文系科目は私が面倒見てあげますから。頑張りましたよ、千秋くん」

……絶望しかねえんだが……。まあ、この際仕方ないか……。

文香と同じ大学に行きたいし、ここは気合を入れるべきだろうと頑張つて思い込んでると、隣の文香が「あつ……。」と声を漏らした。そつちを見ると、店頭のショウケースの中にワンピースが飾つてあつた。

「文香？」

声を掛けるとハツとしたのか、文香は焦った様子で本屋を指差した。

「……あつ、本屋さんがありますね。見に行きませんか？」

「良いけど……」

「……劣等生の最新刊、千秋くんがお勉強中だったから買うの我慢してたんです」

それはわざわざありがたい。俺も読みたくなっちゃうし……。

「じゃ、先に行つて。俺ちよつとウンコしたいから」

「……せめてトイレに行きたいと言えませんか？」

「じゃ」

一旦、文香と別れた。

×

× 本屋で本を購入し、文香の部屋に帰って来た。

晩飯は外食で済ませて、とりあえずお風呂を沸かして文香はラノベを読み始めた。

その間に俺は袋の中からさつき買った服を、洗面所の扉の横の壁掛けに下げてからフォ○トナイトを始めた。



お互い、だんまりと作業をしてると、湯張り完了のチャイムが鳴った。それに気付き、さつさとフォートナイトを終わらせようと建築しながら目に付いた敵に突っ込んでショットガンを構え……ようとしたところで両サイドから挟撃を喰らって死んだ。

……まあ良いか。風呂入ってこよう。文香は集中しちやってるし。シャワーを浴びてさつさと湯船に浸かった。

「……………ふう」

しかし、今日はまさかのサプライズだったなあ……。これは俺も文香に何かあった時はお祝いしてやらんとなあ……。

……まあ、何か近いうちであれば良いんだけど……。その辺は速水さんに聞いておこうかな。

そんなことを考えながら風呂から上がり、体を拭いて寝間着に着替えた。

「文香ー、洗面所空いたぞー」

「……………あ、はい」

俺が声をかければ文香は読書に集中していても顔を上げてくれるのは本当に嬉しいです。

本を閉じて洗面所の方に歩いて来る文香。

「悪い、先に入っちゃった」

「……………いえ、気にしないで下さい。私も本を……」

と、言いかけた所で文香は壁掛けをふと見上げた。文香がさつき見ているワンピースが下がっていた。

「あ、あれっ!?!? こ、これ……………!」

「ああ、なんか見てたの見てたから買っておいた」

「買っ……………いつ!?!?」

「トイレタイムの時」

「小五郎さんですか!?!?」

ツツコミながら「もー!」と、俺の胸をぽかぽかと叩く文香を受け止めながら言った。

「まあ、今日のお礼って事で……」

「……………もー、ほんとにずるいんですから……………!」

そう言いながらも嬉しそうな顔を隠しきれない文香に心底可愛  
さを感じながら、しばらくそのまま二人でじゃれ合った。

## 旅行の打ち合わせ。

高校までの学生の春休みは長いようで短い。まあ、おまけの休みみたいなもんだし、夏や冬と違って社会人には一週間の休みも与えられないから仕方ないといえれば仕方ない。

しかし、学校によつては長い事もあるわけで。この機会に俺と文香はどこか旅行に行こうという話になり、旅行雑誌を買ってきた。

もうほとんど同棲状態で、文香の部屋で二人で暮らしている。もちろん、文香が泊まりの仕事とかなら自分のアパートに帰るが。

「で、どうするか」

「……そうですね。どこか行きたい場所がありますか？」

「秋葉原」

「やり直し」

「や、やり直し……？」

ボツつてことかな……？ や、まあ流石に冗談のつもりではあつたが。

「どこにするか。今の時期ならどこ行っても楽しめそうだけど」

「……千秋くんは行きたい場所ないのですか？」

「俺は特には……」

「……むー、私と一緒に出掛けたくないのですか？」

「や、海は流石にこの季節無理かなって。水着姿が見たい」

「……も、もう……えっちなんですから……」

「付き合ってる間は海には遊びに行けなかったからなあ……」

「……そういえば、そうですね。あの時は、撮影でしたから」

懐かしい。

「あの時の水着って文香が選んだん？」

「……いえ、用意されていたものをお借りしました」

「なるほど……。じゃ、今年は文香の選んだ水着が見れるのかな？」

顔を赤くするかな？ と思つてそんなことを言つてみた。だが、文

香は思いの外、怖い笑みを浮かべて返して来た。

「受験ですよね？ 海なんか行く暇があると思つてるのですか？」

「……」

「……鬼かよ、この女……」

「……1日くらい良くないですか？」

「……模試の成績次第ですね」

「賄賂するしかないか……」

「……なぜ真面目に勉強するという選択肢がないのですか……？」

「だって模試はやっても上がるとい保証はないじゃん。実力や運だけじゃ限界がある。」

「……大体、賄賂なんていうその場しのぎなどしても意味ないでしょう。ちゃんと勉強して、現時点の自己の把握をしっかりと測るべきです」

「無理だって……それにほら、指定校推薦の可能性も捨てきれないし」

「どの追試の口が抜かしますか」

「……」

「追試の口ってなんだよ……。まずいな、このままだとこのままズルズルとお説教コースに……」

「ふ、文香っ。それより早く旅行の予定決めちまおう」

「……そうですね。私も、お説教したくなってきましたから」  
「ナイス判断、俺。このまま話を進めちまおう。」

「文香は行きたい所ないのか？」

「……いえ、ないこともないのですが……」

「どっ？」

「……その、奈良に……」

「おなら？」

「鷹宮」

「じ、冗談です……」

「すげえ、多分今初めて呼び捨てされた。そんなにイラつとしたのか？ や、俺でもすると思うけど。」

「……奈良です。一度で良いので、奈良公園に行ってみたくて……」  
「行ったことないの？」

「……はい。中学生の時に、一度だけ修学旅行で行ったきりです」

そいつは意外だ。文香、ああいう日本の古臭い寺とかあるところ好きそうなのに。

「……千秋くんは行ったことありますか？」

「あるよ。俺も修学旅行で行って鹿でロデオして超怒られた」

「……当たり前です……」

あの時の俺は何考えてたんだろうな……。キチガイなら面白いみたいな考え方だったっけか。

「じゃ、奈良だな。奈良公園は外せないとして、他どこに行く？」

「……そうですね。千秋くんはどこか行きたい場所はないですか？」

「とりあえず、らき☆すたの聖地を片っ端から」

「……あとは法隆寺とかでしょうか」

ちよつ、無視とか酷くないですか。いくら俺でも傷つくんですけど。

「法隆寺か……聖徳太子の？」

「楽しい木造建築」

「隋に行つて忘れてたけど、建設中の法隆寺がもう完成している頃なんだよな、楽しみだ。……ひどくこぎつぱりしてる」

「……ギャグマンガ日和ごっこは今度にしましょう」

「えー、久々に文香の飛鳥文化アタックの回避が見たかったのに……」

まあ、体を逸らした時の張った胸がエロくて見てたら「そんなに胸が見たいならもつと近くで見れば良い」と締め上げられたが。

とりあえず法隆寺、奈良公園と決まった。

「あとは……東大寺とかか？」

「……ほとんど奈良公園の近所ですが……まあ、そうですね。千秋くんでも知ってる有名どころはその辺りでしょうか」

「なんだよその含みのある言い方……」

俺がバカだつて言ってるの？

「そーいや一泊二日で良いのか？」

「……はい。あまり時間もありませんから」

「じゃあ、観光地はそんなもんかな……。あとは泊まる宿とかか……」

「……そうですね。せっかくですし、温泉のある所が良いですね」

「温泉ねえ……。あ、アレやる？ 壁を間に挟んで話す奴」

「……そういうのは現地のノリでやるものでは？」

あれやるの実際大変そうだな。周りの人に聞かれたら恥ずかしいし、文香はアイドルなんだから尚更だ。

「やめておこう」

「……そ、そうですね……」

同じことを思ったのか、文香も頷いた。

さて、まあだいたい予定は決まった。あとは宿とかだが……。

「……あの、宿は私が予約しますね」

「良いのか？」

「……はい。良い温泉宿を知ってるんです」

「温泉かー。俺、長風呂嫌いだから速攻出ちやいそうだけど」

「……混浴でもですか？」

「逆上しても上がらない」

「……まあ嘘ですが」

……この子はいつからこんな小悪魔になったのか。しかも、これまた可愛いのが腹立つ。

まあ、真面目な話、混浴は困る。他の男に文香の裸を見せるわけにいかないの、全員の目を潰して回らなければならぬから。

「嘘でも嘘じゃなくても良いけど、混浴はやめてくれ」

「……あら、なんでですか？ 逆上しても上がらないのでは？」

「それいいから……。いや、他の男性客の数だけ1日の殺人事件が増えるのは困るでしょ？」

「……そうですね。私も千秋くんが他の人の裸を見て反応しようものなら、ついうっかり夜は寝かさないかもしれないかもしれませんから」

「……なんで俺に制裁を下そうとしてんだよ……」

他の女性客の虐殺とかじゃ無いんだ。いや、どっちにしても頭おかしいけど。

「……では、予約しましょう」

パソコンで予約をした。なんか選ぶ宿は秘密にしたいとかで俺に見せないで。

そんなわけではばらくゲームして待機していると、予約を終えたのか  
文香が隣に座った。

「……終わりました」

「悪いな。本当は男がそういうのやるべきなんだろうけど」

「……いえ。私の行きたい場所をお願いしましたから、それくらいは  
気にして無いです」

「次、旅行に行く時は俺がやるから」

「……はい。楽しみにしていますね」

まあ、行きたい場所がないんだが。結局、文香が楽しめそうなところ  
を探すしかないんだよなあ……。

その辺はおいおい探すとしよう。とりあえず、今は奈良の話だ。

「……ま、三箇所も回れば良いよな」

「……千秋くんは、行きたい場所はないのですか？」

「ないってことはないけど、文香は割と神社とかじっくり楽しみたい  
タイプでしょ？」

「……は、はい」

「なら、じっくり回ろう。時間なんか気にしないで」

「……ありがとうございます」

そう言うと、文香は俺の肩に頭を置いた。ゲームしづらい、なんて  
言ったら離れちゃうよな。こうしてくつつかれるのは嫌というわけ  
じゃ無いし、このまま黙ってしよう。

「……あら？ 千秋くん、凡ミスが多いですね」

テレビの画面を見ながら文香がそんなことを言った。今やってる  
のはフォ○トナイト。

一人の敵を前にして、緑ポンプショットガンと建築で殴り合っている。  
先に相手の頭上をとってヘッドを狙いたいんだけど……階段が  
上手くいかない。というより、文香のおっぱいが腕に当たってて操作  
しづらい。まあ、心地良いから何も言いませんが。

「文香もやるか？」

「……いえ、千秋くんがドン勝するところが見たいです」

「これまたプレッシャーかけるような事を……。」

仕方ない、勝ちに行くか。そう思った時だ。突然、どっかからロケランが飛んで来て、HPの少なかつた俺ももう一人も揃って爆殺された。

「……」

「……」

「……もういいや」

「……そ、そうですね……」

コントローラをその辺に置いた。二人してそのままボンヤリとソファに座ってテレビを眺めた。

「あー……なんつーかさ、文香」

「? なんですか?」

「付き合ってもう7ヶ月だよな」

「えつと……そうですね、8月からですから」

「あの時からずっと思ってたんだけどさ」

「……なんですか?」

「文香って割と甘えん坊だよな」

「……ふえっ!?!?」

唐突な俺のカミングアウトに、文香は顔を真っ赤にした。

「な、なんですか急に!?!?」

「や、すぐにくつついて来るし、自分の胸の大きさや体の柔らかさ、良い香りとかを一切自覚せずにベタベタくつついて来てさ、お陰で!付き合ったばかりの頃の俺は性欲を我慢するのが大変だったわ」

「ううっ……人をビッチみたいに……!」

「違うの?」

「ちっ、違います! ……あ、甘えん坊なのは、そうかもしれませんが……」

あ、そこは認めるんだ、意外。

「……言っておきますが、甘えん坊なのは千秋くんの所為ですからね」  
「えっ、なんでっ?」

「……千秋くんが、私の気持ちにいつまでも気付かないからです。夏休み……特に撮影の時はムカムカしっぱなしでした。変な嘘までつ



いて……」

「悪かったよ……。人の気持ち盗み聞きしてた文香さん」

「あ、あれは……すみません。奏さんの所為とはいえ……」

「や、別に怒ってないけど」

「考えりや、告白まであれ完全な出来レースだったんだよなあ。気付かない俺が悪かったのか？」

「……そういうわけですから、私は千秋くんに存分に甘えちゃいますからねっ」

「言いながら、文香は俺の膝の上に頭を置いた。」

「……でっかい子供だな」

「む、それは千秋くんの方が子供です」

「ああそう……」

小さくため息をつきながら、文香の頭を撫でた。

「文香は気持ちよさそうにゴロゴロ言い始めた。……なんか、猫っぽいな。そういうえば、この前確か文香にイタズラしようと思って買ったアレが……あった。」

その辺から猫耳のカチューシャを手に取って文香の頭にかけた。

「ひゃっ……？？ な、なんですか……？？」

「うん、やっぱり文香って年寄りの猫っぽいわ」

「ど、どういう意味で……？？」

「よっ、と」

「しゃ、写メ撮らないで下さいー！」

「待ち受けにしようっ」と

「っ、ち、千秋くん！」

そのままソファアームの上でじゃれ合った。

## 旅行（1）

奈良、それはつまり京都に並ぶ日本人の故郷である。日本ならではの  
のお寺やら神社やらが新世界の霸王色の覇気並みに各地に散らばつ  
た県である。特に代表的な東大寺の中には大仏が存在し、日本っぽさ  
がなんか良い。

……うん、無理。知識の無さがモロにバレるわ。

とにかく、そんなわけで奈良である。新幹線で一気に京都まで移動  
し、乗り換えて奈良に到着した。本当なら京都を少しくらい覗きた  
かったみたいだが、受験生ということで奈良一本絞りしか出来ない。  
さつきまで夜中までゲームやり過ぎた副作用で俺の膝の上で爆睡  
こいてた文香は、目を輝かせて奈良を見回していた。

「……ふわああ、すごい……奈良県ですね……」

「ん、お、おう」

そんなに変わりあるか……？ まだ駅なんだけど……まあ、とりあ  
えず一泊二日しかないんだ。さつきと目的地に行こう。

「じゃ、まずは奈良公園で」

「……すう、はあ……」

深呼吸してんなよ……。別に空気が変わるのは都道府県ごとじゃ  
なくて山か平地かだろ。

いや、やらずに決めつけるのは良くないな。もしかしたら、深呼吸  
することで本当にその土地の独特な空気を味わえるのかもしれない。

そんなわけで、俺も深呼吸してみることにした。

「すう……っ、エホッ！ エゲフツ！ オエツ……！」

「ち、千秋くん!? どうしたんですか!?」

「エフツ……！ く、口に……小蠅が……！」

「……何してるんですか」

ぐっ……！ やはり深呼吸なんてしないに限るぜ……！

文香に背中をさすってもらい、無事に復活した。心を落ち着かせる  
方の深呼吸をして呼吸を落ち着かせた。

「……ふう、よし。文香、どうしようか」

「……はい、ではまずは東大寺に行きましようか」

「良いね。鹿早くみたいの？」

「……そうですね。それもありますが、やはり大仏でしょうか。74  
5年から製作が開始されたものですから、それは気になります」

「え、そんな前から作ってんの？」

「……そうですね？」

「そっか……そんな前から日本のフィギュアブームが……」

「……絶対違うと思うのですが……」

「萌え度ゼロのフィギュア作ってなんのつもりだったんだろうな」

「……千秋くん、話聞いてますか？」

冗談だからその真顔やめて。二人で駅を出て、歩いて奈良公園に向  
かった。

「そういえば、宿はどの辺の取ったんですか？」

「ふふ、お楽しみです」

……まあ、そう言うならそれで良いけど。でも結局ずっと教えてく  
れなかったなあ。なんか隠すようなことあんのか？ いや、どうせ文  
香のことだし、サプライズとかなんとか考えてるんだろうけど。

「……それよりも、今年は鹿に乗るようなことはしないで下さいね」

「しないから……」

「……では、行きましようか」

そう言うと、文香は俺と腕を組んだ。うん、まあいつものことだな。  
こんなことで顔を赤くしてたら、部屋だと平気でノーブラになる文香  
相手ではメンタルがいくつあっても足りない。

「そういえば、小学生の時は奈良県ってすごい好きだったんだよね」

「……そうなんですか？」

「うん。なんか、こう……奈良って名字が超クールで強そうじゃない  
？」

「……あー、シカマルさんのな？」

「まあそれもあるかな。とにかく、こう……周りに大阪とか兵庫とか  
京都とか有名な奴とかゴリゴリの画数多い奴らが集まる中『奈良』つ  
ていうシンプルスさに憧れてさあ」

「……まあ、言わんとすることは分かりますが……」

あ、分かるんだ。生まれて初めて共感された。いや、そもそも誰にも話したことないけど。話す相手いなかったから。

「じゃあ文香はどの都道府県がカツコ良いと思う？」

「……そうですね。やはり京都でしょうか」

「あー分かるわ。京って文字がもうイケメンで……」

「……様々な歴史あるお寺や神社があるというのもありますが、江戸時代に入ってから東中心に政治が傾く中、京都だけは交通機関の発達などによつて衰退することはありませんでしたから、そういう意味でも……」

「う、うん……そ、そうね……」

……だめだ、ついて行けない。というか、そもそもそんな京都の話し知らないし。

なんか名前の響きで優劣をつけようとしてた自分が恥ずかしくなってきたので、俺でも話せる内容に変えた。

「じゃあ、京都のが良かった？」

「……いえ、そんなことありませんよ？ 奈良には奈良の良さがありますから。例えば……」

「あ、うん。その辺はもういいから……」  
授業が始められそうで怖い。旅行中くらい勉強のこと忘れたいです……。

そうこうしてるうちに、奈良公園に到着した。奈良公園に関しては、俺でも語れる知識はある。この公園の鹿は「御神鹿」として全員が天然記念物らしい。

……ふう、これしか分かんねーや。しかし、それでも構わないようだ。何故なら、文香は語ろうとせず目目を輝かせて、ただ黙って鹿を眺めているからだ。

「っ……………っ……………」

……め、目が爛々としてやがる……………！ こんな文香は初めてだ。もしかして、動物好きなのか？

「……………ふ、文香？ 大丈夫？」

「っ、は、はい……！ すみません、没頭してしまいました……」

「ぼ、没頭……？」

没頭って……。

「動物好きなの？」

「……いえ、その……恥ずかしながら、楽しみで奈良公園の鹿の写真を何枚も見ているうちに、その……萌えてしまいました……」

「……」

動物に萌えるってなんですかね……けものフレンズ？ でもけもフレは俺と文香の4時間の談義によって萌えアニメではないと判断されたし。

いや、そんなことどうでも良くて。まあ、文香にとって鹿は萌えキャラなんだろう。それならちようど良い。

「じゃ、鹿せんべいでも……」

「買ってきました！」

「え、は、早くない……？」

さつきまで目の前にいたよね……？ いや、アグレッシブふみふみの素早さと行動力は通常の三倍だ。考えても無駄なのは分かりきったことだ。

で、早速といった感じで文香が鹿の方に向かって行っただので、慌てて追いかけた。なんとなくだが、嫌な予感がした。なんだろう、俺の方に鹿が来てしまうとか？ いや、それは無いな、俺は鹿せんべいすら持つていない。

じゃあ、この嫌な緊張感は一体……そう、冷たい汗を頬から流した時だ。

一匹の鹿の半径1メートル以内に入った直後だ。辺りにいた鹿七匹が文香の方を向いた。

「えっ」

二人して声を漏らした時には遅かった。一斉に鹿が走って来た。

「ぎゃあああっ……？」

悲鳴を上げる文香に群がる鹿。右手の鹿せんべいに二匹、左手の鹿せんべいに一匹囓り付き、残りの四匹は席が埋まったと見ると否や、

ストールに三匹、スカートに一匹噛り付いた。

「ひゃっ……い！ あっ、あのっ……！ とりあえず順番につ……引つ張るのは、どうか……！」

全員が全員、ハムハムしてる中、文香は鹿を説得しようとしていたが、そんなもん成功するはずもない。だって相手は鹿だし。

俺はといえばどうしたら良いのかわからず……というより、なんか鹿に襲われてる文香はこれはこれで可愛かったので、スマホを構えてパシャパシャと写真に収めていた。

が、写真の枚数が増える度に、徐々に文香が涙目でこつちを見ていることに気付いた。最初は被写体になったつもりのカメラ目線かと思っただが、明らかに目尻に涙が浮かんでいて「ち、ちあきくうん……」と名前を呼んできたので、これはSOSだと悟った。

「とりあえず、鹿せんべい投げ捨てろ」

「っ、い、嫌です……！ 鹿さんが、離れてしまいます……！」

おい、さっきの助けを求める視線はなんだったんだ。

しかし、そうなるともう手は一つしかない。無理矢理、鹿を退かそうとすれば俺は返り討ちに遭うだろう。

だからと言って、新たに鹿せんべいを買に行ったり武器を調達しに行ってる暇はない。

……つまり、俺の取るべき選択肢は鹿に混ざってあの鹿せんべいを全て食べれば良いわけだ。

そんなわけで、俺も文香の方に突撃して鹿せんべいに特攻した。

「ヒヒーン！」

「ち、千秋くん!? 何してるんですか!?」

「俺にも鹿せんべいを下さああああい！」

「一体どんな結論を出したのですか!?」

鹿に混ざって鹿せんべいに食いつこうとした直後だ。鹿の中の一匹が後ろ足で俺の鳩尾に蹴りを1発入れた。

「ふおぐっ……！」

き、効いた……！ 見事に俺のレバーを押さえやがったな……！  
「何してるんですか……！」

呆れながら文香は鹿せんべいをその辺に捨てて俺の元に歩み寄ってきた。俺のピンチのためにアレだけ執着していたせんべいを手放してくれるなんて……。

「……今度は私も慎重になりますから、私を守りながら鹿せんべいを渡させて下さい」

……懲りろよお前……。心の中でボヤキながらも、鹿せんべいを買  
い直して、今度は俺が盾になり、脇の下から鹿せんべいを渡した。何  
れにしてもおかしいだろこの構図……。

× × 奈良公園を終えて、俺と文香は東大寺に来た。

東大寺ってデツケーなあ。まあ、中に大仏がいるんだから当然とい  
えば当然だが、それでもかなりデカイ。思わず圧倒されてしまうほど  
だ。

……まあ、俺は東大寺がどんなところか知らないから、そこまでなん  
だけどな。逆に東大寺について詳しい文香は、鹿の時の騒がしさとは  
一転して、静かに東大寺を眺めていた。

何か感じるものがあるのだろうか、こういう時に知識があると本質  
を楽しめて少し羨ましい。

まあ、俺は勉強が嫌いだから調べりやしないけど。しかし、ここは  
俺が話を振るべきだろう。

「文香、東大寺ってどんなところなん？」

「……東大寺は、鎮護国家の思いを込めて創建されたもので、二度の戦  
乱や罹災などで衰退の危機に陥りながらも、王朝や幕府の力や勧進に  
よって大伽藍を保ってきたものです」

「え、ち、ちん……」

「……ちんちんではありません、鎮護です。政府が仏教を利用して内  
政の安定を図ろうとした政策、または仏教には国家を守護・安定させ  
る力があるとする思想のことです」

「え、今ちんちんって言った？」

「……ここは隣接する興福寺とともに大きな大衆の力を持ち、彼らの  
上洛は時の権力者の頭を悩ませ続け、それが戦争の火種となったこと

もあるんですよ」

「そ、そう……」

この人、相変わらず集中モードになると感情が切り離されるな……。普段言わないようなことも平気で言い出すし……。

「あ、だから大仏置いてあるのか……」

「……そうですね。大仏を作った意味に災いを避けるため、というのがありますから」

それは俺も知ってた。まあ、修学旅行に行く前に散々習わされるからな。

「じゃ、中に入るか」

「……そうですね」

「鎌倉の大仏は中に入れるけど、ここは入れんのかな」

「……いえ、確か入らなかつたはずですよ」

「マジかー」

まあ、入りたいわけでも無いけどね。

そんなわけで、大仏を見に行こうとした時だ。文香が「あっ！」と大声を出した。

「え、どした？」

「自撮りしましょう！」

「はっ？」

「……いえ、カップルらしく東大寺の前で写真撮りませんか？」

「その発言がカップルらしくからぬものなんだが……まあ良いけど」

そう言つて、わざわざ入りかけたのに外に出て写真を撮り始めた。

二人で並び、スマホを構えた文香の方に顔を近づける。文香が腕の位置と顔を調節し、見事に二人の顔が画面に収まった。

「あれ、上手くなった？」

「……はい、ありすちゃんに付き合ってもらつて練習しました」

何の練習に付き合せてんだよ……。

呆れながらもスマホの画面に目を合わせた。が、文香は写真を撮ろうとしない。指が動かない。

「……東大寺が入らないです」



「まあ、自撮りだからな……」

入る方が奇跡だわ。や、止めなかつた俺の言えるセリフじゃないか。ラスボスの副隊長が新旧隊長格ほぼ全員にフルボッコにされる中、トドメ刺されてから指摘したどっかの主人公と同じだ。

すると、通りすがった人が声を掛けてくれた。

「よろしければお撮りしましょうか？」

「あ、すみません」

そんなわけをお願いした。写真を撮ってもらい、いざ東大寺へ。

大仏を眺め、再び文香がトランス状態に入ってしまったため、しばらく一緒になつて大仏を眺めた。

大仏の見学を終えて、最後におみくじ。100円払って購入し「せーのっ」で中身を開いた。

「……どうですか？」

「ん？ 凶」

「そんな当然のように……」

「文香は？」

「凶です」

「同じじゃねーか……」

え、どういうこと？ これから事故でも起こると？

二人して不安そうに内容を読んだ。まあ、凶というように内容はボロクソに叩かれていた。むしろ狂だろ、と錯覚するレベルで。

そんな中、ふと恋愛の項目が目に入った。

『新たな出会いアリ』

「……ふうん？」

ぞくつとするような冷たい声が聞こえた。ふと振り返ると、文香がジト目で俺を睨んでいた。

「……新しい女の子、ですか」

「いや違うから！俺は文香一筋で……！」

「ふんっ」

頬を膨らませ、ぷいっと俺から目を逸らすと共に、手元からおみくじを奪われた。

で、サクサクと端の方のおみくじ結び所で結んでしまった。

「……これでチャラです」

「ああそう……」

まあ、チャラになると良いな。

×××そう思いながら、二人で観光を続けた。

×××その日の帰り道、FGOの呼符単発で乳上という新たな女の子と出会った。

## 旅行（2）

今日の観光は終わり、俺達は文香の予約した旅館に到着した。

文香がチエツクインを済ませ、部屋に案内された。結局、最後まで教えてもらえなかったな。そんなにサプライズが好きだったんだなこの子……。

まあ良いさ。それはつまり、かなり良い部屋を期待できるってことだ。例えばー、なんだろ。FGOとコラボしてるとか？

そんな事を考えながら部屋に入ると、至って普通の雅な和室だった、ただし、表に露天風呂が付いていなければ。

「お風呂<sup>!?</sup>?!」

「ではごゆつくり」

俺のリアクションを面白いほどスルーした女将さんは、そう言っただけで引っ込んでしまった。

シンツと静かになる部屋の中、前に立つてる文香の肩に俺は手を置いた。

「文香ちゃん文香ちゃん、どういう事?」

「……ふふ、どうですか? お風呂がついてる部屋なんて素敵じゃないですか?」

あ、すごいやこの子、何も考えてない。一緒に入ればお互いに裸見ることになるし、別々に入ってもお互いの入浴シーンを見る事になる。

本当ならここでそれを教えてやるべきだろう。しかし、俺はこう思った。

黙ってた方が面白そうだな。

……と。

そんなわけで、荷物を部屋の隅に置いて、スマホの充電器とSWITCHをカバンから出して座布団の上に座った。

「……それで、どうですか? 千秋くん。このお部屋」

ああ、まだまともな感想言ってなかったな。

「驚いたよ。こんな部屋あるんだな。でも高いんじゃないの?」

「……大丈夫ですよ。私が払いますから」

「……あれ？　なんか俺すごいヒモっぽい気が……。大学行ったらバイトも頑張らないと。」

少し不安になりながら、床に寝転がった。

「あー、疲れた」

「私もです……。でも、楽しかったですね」

「ああ。たまにはゲームしないで表出るのも良いかもな」

「……ゲーム機を持ってきておきながら何を言ってるんですか？」

悪かったな。やっぱり必要になると思って。

しかし、文香はカバンを何やらゴソゴソと漁っている。何してるのかと思ったら、出したのはトランプとかウノなどのカードゲームだった。

「……やりませんか？」

「良いけど……。それで良いんですか？」

「……はい、実はこういうの憧れてたんです」

えー……。何その憧れ。

「……学生同士で修学旅行だと、そういうのあるじゃないですか」

「あー、まあ最近はプレ4持って行く人とかいるらしいけどね」

「……あなたの言えたセリフですか」

そうっすね、俺も家庭用ゲーム機持ってきてましたね……。まあ、やらないならしまっておこうかな。いや、やるかもしれないけど今は文香の持ってきたカードゲームやろう。

「何やる？」

「そうですね……。ポーカーとか？」

「じゃあ、負けたら罰ゲームな。一つなんでも言うこと聞くんという」

「……良いですよ？　将棋で負けた千秋くん」

「あれはお前わざとだから。たまには文香に花持たせてやった方が良  
いかなって」

「……実は、ここの旅館は将棋盤の貸し出しもあるみたいなんですよ」

「いや、今は将棋は勘弁してやる」

「……将棋がしたいです」

「勘弁して下さい……」

意地を張つてみると、思いの外正面から見るタコ殴りにされた。うん、今のは俺が悪い。

「……よし、じゃあポーカーな」

「……はい」

そんなわけで、文香が親でトランプを配る。手札を見ると、フラツシュが揃っていた。おい、これちゃんとシャツフルしたのかよ。

「えっ」

「……あれっ？ あっ、ま、間違えっ……!」

「イカサマかよ、さつきまでの自信の正体は」

「ち、違います!」

「いや、まあノゲラとか見ると気持ちは分かるよ。イカサマしてみたくなるよな」

「ち、違いますっせば! わ、私はドローしますからね!」

うん、まあ好きにしたら良いけどさ……。案の定、ドべったようだ。

当然、俺は勝負するのでお互いに手札を公開。ノーペアとフラツシュが正面からインファイトした。まあ、勝つよね。

文香は小さく肩を落としてしまった。自業自得だけど、同情は出来る。だってほら、イカサマを利用して勝とうとしたら間違えて負けるって馬鹿すぎだし情けない。

でも、負けは負けだよな。罰ゲームしよっか。

「はい、じゃあ罰ゲームな」

「うう……こ、こんなはずでは……」

しかし、罰ゲームか……。一つだけ、とのことだし、まずはジャブ程度にこんな感じでいこうか。

「じゃあ、今日俺がいろいろ言うまでの間は『ふみ』以外、言っちゃダメ」

「っ!? な、なんですかその大学生みたいなノリの罰ゲー……」

「ふみ、だろ」

「ふっ、ふみい……?」

ほぐっ……! な、なんという破壊力……! 20超えた女子大生

が艦これロリロリ組代表の文月ごっこをしてるような痛可愛さが俺の心臓をハートキャッチプリキュア……………!

もうこれ文香じゃないじゃん、ふみふみっていう、そういう生き物じゃん。

「はぐっ……………」

「ち、千秋くん!? ……じゃなくて、え、えつと……………ふみい!? ……うう、これ恥ずかしいです……………」

頬を赤らめて俯くふみふみを見て、尚更俺のダメージは広がった。つーかこれ、ジャブを受けて良いダメージじゃない。

何とか身体を起こし、小さく深呼吸しながらトランプを拾った。

「も、もう一戦やるか?」

「……………ふ、ふみ……………」

「ぐっ……………」

恥ずかしそうにしながらも、反撃の狼煙を上げたいふみふみは力強く頷いた。割と負けず嫌いふみふみホントかわいい。

今度は俺がディーラーを務める。トランプをシャッフルし、イカサマ無しにカードを配布した。

手札に揃ってるのは、4の1ペアの他はJ、8、10で特に揃っていない。本当は勝つためにはここで勝負した方が良いんだろうけど、それじゃふみふみが楽しめないだろう。

そう思ったのでドロウすることにした。しかも、4の1ペアを捨てて。

戻って来たカードは7と9だった、

「えっ」

「……………ふみ?」

「ああ、いやなんでもない。所であとで録音させてくれる?」

「ふ、ふみ……………」

怒った様子で俺の肩をポカポカと叩いて来たので、それを聖母の如く受け止めながら「勝負」と言った。

慌ててふみふみがカードを交換し、勝負をした。

「あい」

「…………ふみい…………」

うん、2ペアvsストレート。負ける要素がなかった。2ペアがあ  
と2人いても負けないわ。

でも、なんだろ。少し気まずいな……。勝つつもりがなかったわけ  
ではないが、楽しむつもりが変なラッキーを引き当ててしまった。

……あれ？ もしかして俺って今日、運が良い……？ 乳上も出て  
きたし……。

「なあ、文香。ちよつと10連引いてみるわ」

「ふみー！」

「え？ や、違うって、イカサマじゃないから本当に」

「ふみ、ふみー！」

「嘘なんか言ってないよ。いや本当に。今日の俺はマジで豪運だか  
ら」

「ふ、ふみい…………」

「わーったよ、じゃあディーラーは文香で良いから」

「ふみっ？」

「本当。で、今から10連行くから」

「ふみっ」

何故、言葉が分かるかって？ そんなの俺と文香なら当たり前だ  
よ。それより、ふみふみはふみふみで「ふみっ」という鳴き声を言う  
たびに照れてるのほんとクリティカルなんだけど。

ふみふみにトランプを手渡してから宝石石3, 000個を放出し  
た。ゴミだった。

「…………」

「ふふっ…………」

あ、今笑われた。よろしい、ならば戦争だ。

「ディーラー、早く配れよ」

「ふ、ふみっ」

少し上機嫌になったふみふみは、カードを配り始めた。

手札はあまり良くない。どうやら、本当に俺の運が良いわけでは無  
かったようだ。

しかし、俺だつてノゲラを見てからイカサマは勉強したさ。見せてやるよ、俺の腕をな！

ドローを終えてようやく勝負開始。フルハウスだ。ふみふみはスリーカード。

「はい、俺の勝ちな」

「ーっ……！ ふ、ふみ！」

「はいはい、負けは負けだから。次はー……さつき買った鹿の耳と角カチューシャつけて」

「ふ、ふみ!?」

「だから鹿公園で。いや奈良公園か。ほら、早く」

「ふ、ふみ……」

顔を赤くしながらもカチューシャを装備するふみふみ。あ、だめだこれ。クソ可愛い。顔を真っ赤にして俯いちやつてるあたりがもう本当にやばい。

「ね、ふみって言うって?」

「……ふ、ふみ?」

「ふおぐっ……!」

ぐふうっ……! な、なんという破壊力……! ショットガンでの建築目指せ最高潮頭取り合戦の最中にSRで狙撃された時くらあの破壊力……!

「……鹿せんべい食べる?」

「ふみー!」

「ごめん、謝るからロングホーントレインはやめて!」

……まあ、なんだ。次は尻尾も用意してただけどやめておこうかな。なんだか申し訳ないし。

それよりも、そろそろやめるかな? 向こうも懲りるだろ。普通にイカサマなしでやろうよ。

「ふみふみ、イカサマ無しでやらん?」

「……ふみ」

涙目で小さく頷いた。うん、やっぱ平和にやろうか。

しかし、イカサマ無しでやれば多少の戦略はあっても、やはり運勝



負であることは否めないわけで。

五分後には、目の前でふみふみは完全に拗ねてしまっていた。

「……ふみい」

「あつれー？　つかしいな、完全に運勝負のはずなんだけど……！」

「ふみい……！」

「いや煽ってない！　煽ってないって！　本当に！」

今の口調ではそう聞こえても不思議ではないが、そんなつもりは本当に毛頭ない。

ただ、どんな口調でどう声をかければ良いのか分からなかったただけだ。

しかし、文香はそうは思ってくれなかった。恥ずかしそうに且つ恨みがましそうな可愛い顔で俺を睨んだ後、何か思いついたようで少し意地悪く微笑んだ。

「……ここまで恥ずかしい思いをすれば一緒ですよね」

「なんか言った？」

小さく頬を赤らめたまま「コホン」と咳払いすると、文香は唐突に若干、頬を赤らめた真顔になった。いや、正確には少しだけ目を大きく開いている。

で、俺の方に正面から寄ってきて、純粋な目で小首を傾げながら小さく口を開いた。

「……ふみい？」

「はぐあつ！？」

やれえ、ピツコロ！　魔貫光殺砲オオオオオオ！！？　と同じ衝撃が俺を貫いた。ま、まさか文香が尊死させようとしてくるとは……！

「よ、よせ文香、いややめて下さい文香さん！」

「ふみ？　ふみ、ふみふみ？　ふみい♪」

「うおお！　ほんとにやめてごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

俺の謝罪などまるで無視して、文香は前足ののように両手を俺の両肩に置き、懐いてる小動物の如く、頭を胸に擦りつけてきた。

「ふみ、ふみい……！」

……あ、若干、やり過ぎて羞恥が入ったな。

そこが、俺の唯一にして最後の突け入る隙だった。しかし、文香の猛攻は止まらない。俺の事を押し倒すと、真冬の布団の中の如く、俺の体と腕の間を押し空けてポジション取りをして、小さく丸まった。で、俺の方を見上げてファイナルインパクト。

「……………ふみっ…」

そこで俺の意識は途絶えた。

### 旅行（3）

お風呂、というのは基本的には一人で入るものだ。理由は単純明快、裸になるから。

通常、異性でなくとも裸を見られるのはあまり好きじゃないし、見る方も嫌がるはずだ。

それでも大浴場なるものが存在するのは、やはり大きな風呂というのは豪華な感じがするからだろう。つまり、湯船だけでなく、豪華な気分にも浸りたいのだ。人間というのは。あ、温泉は別。温泉は効能とか色々あるらしいから。

逆説的に、大浴場が好き、という人間は他人に裸を見せるのが好き、と言ってるようなものだ。広いお風呂に入る豪華感を得るメリットと、他人に全裸を見られるデメリット、どう足掻いても俺ならデメリットを切る。

もし、広いお風呂に入りたいのなら、人のいなさそうなタイミングを見計らって銭湯にでも行けば良い。

そう、ましてや部屋に温泉をつけるなんて以ての外だ。

俺はボンヤリと部屋のベランダについている温泉を窓から眺めた。文香は現在、お手洗い。

ご飯も食べて遊ぶことも遊んで、今日の旅行の感想の言い合いもした。残りは歯磨きと風呂だけだ。

「……さて、どうしたものか」

……一緒に入る他ないのか？ いや、入りたくないわけじゃない。というか入りたい。あの巨乳を眼前で拝めると思うと今から興奮するし。

でも、その……なんだ？ 一抹の不安ってものはやっぱりあるじゃない？ 特に、その……性的なことに関しては。

俺と文香はもう前に性行為をしまっているし、再びお互いに全裸で相見えたら、またそういう流れになっても決しておかしくない。

……しかし、だからといってなあ、この機会を逃すのは惜しい気がする。そもそも、文香はちゃんと俺と一緒に入るってこと自覚できて

んのかな。

「……はあ」

何だろう、この感じ。このラブホで女の子がシャワーを浴び終わるのを待ってるようなこの感じ。

もしかして……俺って割とすげべなのか？ だとしたら、割とシヨックなんだけど……。

「ダメだ……。とりあえず、やっぱり一緒に風呂は回避しないと……」  
はつきり言って我慢できる気がしない。だってあの子、身体どすけべなんだもん。最近では中身もどすけべになって来たが、前までは思春期も来てない純粋な女の子って感じだったから、あのワガママボディを押し付けられた時はマジで死ぬかと思った。主に理性が。

……はあ、そういえば文香は腐ったんだっけなあ……。俺とキリトのBL小説を書かれてることを知った時はマジで死のうかと思った。いや、ほんと凹むよ？ 自分の彼女が自分と別の男とのBL小説とか書かれると。

第一、俺がキリトを愛するって事が絶対にあり得ない。リア充だから、とかじゃなくて、何でも出来るイケメンって辺りがムカつく。

まあ、そんな事はどうでも良い。とりあえず、これからどうするか考えないと……。

「……千秋くん？ 難しい顔をしてどうしました？」

「はうわっ!?？」

「……どうしました？」

唐突に背後から声をかけられ、背筋が面白いほどピンツと伸び切った。

慌てて声のした方に顔を向けると、文香が不思議そうな顔をして俺を眺めていた。

「……どうしました？」

そう聞かれるのは3回目だ。しかも連続三回だった。

未だに心臓がフルドライブしているのを何とか深呼吸して抑えて、平静を保った。

「い、いやっ……なんでもない……」

「……嘘です。何か、悩んでましたよね？」

ああ、相変わらず人のことになる我真剣になる奴だな。良いことだけど、なんでもなんでも首を突っ込んで良いわけじゃない。

「俺も早くトイレに行きたくてムズムズしてただけ」

「……あ、そ、そうでしたか……。す、すみません……。その、長くて」  
あ、いやそんなつもりじゃなかったんだけど……。実際、トイレ行き  
たかったわけじゃないし。

ただ、お風呂のことで悩んでたなんて言えないので、そっちに持つて行かれないようにからかつてやることにした。

「じゃ、文香がおしっこした後のトイレに入って来るから」

「っ、な、なんでそう宣言するんですか!?? 大体、おしっこじゃないです！」

「えっ?」

「あっ……」

おしっこじゃないってことは……。

徐々に、徐々に文香の顔が赤くなっていた。それと共に、眉間にシワが寄っていった。

ゆつくりとその場でしゃがんだ文香は、机の下に敷いてある座布団を手にとって、ゆつくりと振りかぶる。

「あ、あの、文香さん？ 今のは俺の所為じゃなくね？ てか、勝手に自爆しただけじゃね？ なのにそれはちよっと理不尽というか……」

「……」

「え、な、何？ なんか呟いて……」

「裁きの時だ。世界を裂くは我が乖離剣……！」

「おい待てそれは死んじゃう！ 俺、トレースオンできないから……！」

「受けよ！ 『天地乖離す開闢の星』!!?」

「あ」

座布団が思いっきり振り下ろされた。

とても座布団とは思えない威力の宝具が俺の脳天に突き刺さり、その場で突っ伏してる俺を気にも止めずに、文香は鞆の中から下着だけ

取り出した。

「お先にお風呂いただきます」

「……へっ?」

「失礼します」

待て待て。「お先にお風呂失礼します」だと? それはつまり……最初から文香は一人で風呂に入る予定だったってのか……?

なのに俺だけなんか一人でムズムズしてバカみたいじゃねえか……! 大体、それじゃあ風呂付きの部屋に入った意味がない。まさか、ほんとにインパクトを求めるためだけに……?

この野郎、期待させやがって……! 頭に来たぞ。

「……覗いてやる」

文香は部屋のカーテンを閉めていった。しかし、カーテンの開閉は部屋の内側にいるこっちの主導権だ。だからこそ、こちらから……というのはもちろん愚かな選択だ。

俺がするべきはカーテンからではなく、堂々と入口からだ。脱衣所からの覗きというのも斬新だろう。普通は脱衣所にも入らないし。

抜き足差し足忍び足で脱衣所に入った。籠の中には文香が脱いだ服や下着が綺麗に畳まれて置いてある。

「……」

……そういえば、文香の下着ってこうしてまじまじ見るの初めてだな。普段、洗濯する時はなるべく意識しないようにパパッと済ませてるし。

しかし、今の俺は文香に復讐すべく現界したアベンジャー。ここは一つ、匂いの一つでも嗅いでやろうか。

そう決めて、パンツを手を取った。薄いピンクの紐パンである。本当に文香は中身もムツツリになったものだ。

「……んっ?」

……あ、女の子も陰毛って抜けるんだ……。どうしよう、パンツよりこっちの方がよっぽど興奮するな……。

うん、流石に匂いを嗅ぐのは我慢しよう。なんか陰毛を見てしまっ  
てから言うのも遅いけど、これで匂い嗅いだら終わりの気がする。

何より、今の目標は文香の裸体だ。

温泉へ繋がる一枚の扉、女性の身体を護るには取るに足らない、薄い壁だ。

しかし、その薄き盾にも仕掛けがあれば話は別だ。壁の向こうに行くのは簡単だが、向こうに行かずに中の様子を眺めるとなれば話は変わってくる。

物体に力が加わるだけで発生する「音」を殺し、中にいる文香に一切、気付かれる事なく、扉を若干、開いて中の様子を観察する。

……顔を出すのは無理だな。それだけで気付かれる。女性は自分の胸や脚への視線には敏感らしい。

なら、こちらは文明の利器を使うまでだ。そう、スマートフォンだ。スマホと言う奴は便利なもので、先端にカメラが付いている。つまり、扉からはみ出る部位は限りなく少ないのだ。

しかも、形状はかなり薄いため、扉を開ける幅も狭く済む。

「……………ふっ」

完璧過ぎて自分が怖い。

早速、扉の音を殺して、なるべく低い位置から隙間からスマホの先端部位のみをはみ出させ、俺も画面が見やすいように脱衣所で寝転がった。もちろん、流石に撮影は自重する。ただ、裸体を拝みに来ただけだ。

カメラを起動したスマホの画面を眺める。どうやら、まだ温泉には浸かっていないようで、その姿はない。若干、カメラを動かしたが、シャワーの前にも文香の姿はない。

……あれ？　じゃあ文香は何処に……………。

ぽかんとした時だ。俺の手元のスマホに別の箇所から衝撃が走り、お風呂場の中にカラカラカラつと転がった。

直後、嫌な予感が俺の脳天から浸透し、ガラツと勢い良く扉が開いた。

「……………」

「……………」

しつかりと身体にタオルを巻いた文香が、目の前でオケを担いで

立っていた。

下から見上げる角度にはもちろん気を付けているようで、タオルの下から陰部が見える、なんてこともない。代わりに、長い前髪の下からガッツリと冷たい視線が俺に突き刺さっていた。

「……なんで分かったの？」

「勘です。なんか千秋くんの様子がおかしかったので、何となく仕返しに来るか」と

「……」

恐ろしい彼女だ。

「……覚悟は良いですね？」

「……あまり痛くしな」

『約束された勝利の剣』

×オケが振り下ろされた。

×

「~~つて~~……つたく、本気で殴るか普通……？」

温泉で顔を抑えながら、俺は星空を眺めていた。まあ、確かに俺でも怒ると思うけどよ……。

でも、いくらなんでもやり過ぎだろ。良い歳して泣きそうになったわ。というか泣けば少しは向こうの怒りも収まって……いや、収まらないだろうな、あれは。

現在、部屋で文香は一人、プリプリと怒りながら俺のSwitchでファ○トナイトをやっている。ポケットWi-Fiだから通信感度はかなり悪いだろうにな……。

しかし、これは流石に俺も謝らないとなあ……。今にして思えば、俺のテンションかなり壊れてたんだろうな。たまにこういうことがあるから俺って人間は怖い。

……まあ、でもすぐに仲直りできるだろう。お互いの性癖はお互いすでに理解しているし、心から謝れば、成績以外のことなら文香はちゃんと許してくれる。もうそういう仲だ、俺達は。

反省すべき点はしなきゃいけないんだけどな。特に、今、経験して思ったが、外での風呂も悪くない。温泉が好きではない俺だったが、



どうにも考えを改めそうだ。文香には感謝しなければならない。

東京以外の星空を温泉に入りながら眺めるなんてそう出来る経験ではない。悪くない、うん。実に悪くない……。ユクモ村の温泉はこんな感じなのかもしれない……。

そんなことを考えながらのんびりと目を閉じ、小さく伸びをした。

「ふう……」

……そろそろ上がるか。文香に謝らなきゃいけないし、それにそろそろ堪能しただろうし。

湯船から出てタオルを絞り、自分の身体を拭いて再び絞り、最後に絞ったタオルを腰に巻いて脱衣所の扉を開けた。

「あっ」

俺のパンツを手にとってる文香と遭遇した。これから履こうとしてた方ではなく、今日1日履いていた方を持っている。

お風呂上がりだからか、髪をアップにしてお淑やかに見えるのに、顔を真っ赤にしてパンツを握ってどうしようもない文香に、俺は呆れ気味にぶちまけた。

「勘で相手の行動が読めるのは自分だけだと思ったか？」

「……す、すみませんでした」

「嗅いでて良いよ。ただし、脱衣所から出て」

「オーバークルやめて下さい！」

パンツを捨てて脱衣所から出て行ったので、俺も体を拭いてさっさと着替えて脱衣所を出た。

うん、これでお互い様だし、仲直りはもっとしやすくなった。

「あ、あの……千秋くん」

「お互い様だから。それより、髪乾かして」

「……もう、私がないと何も出来ないんですから」

髪を乾かしてもらうのは日課になりつつある。

文香も苦笑して、ドライヤーを使って俺の頭に暖かい風をあてがってくれた。

「速水さんに言われてようやく髪を乾かすことを覚えた奴に言われてもな」

「……づるさいです」

基本的に髪に触れるのは好きではないが、文香の場合は別だ。さつさと髪の上に指を通されるのはくすぐったくて心地良い。

あまりに心地良すぎて、後ろにそのまま倒れ込み、文香の膝の上に頭を置いた。

「んー……」

「あつ、も、もう……まだ半乾きなのに……」

そう言いながらも、下から見上げる文香の顔は満更でもなさそう  
だ。

まるで手のかかる子供に接するような笑みを浮かべて、俺の頭を優しく撫でてくれた。

「……甘えん坊ですね」

「たまには良いでしょ」

「はい……。たまには、甘えて下さい」

いつも甘やかしてるからなあ。文香の部屋の炊事洗濯掃除ほとんど俺がやってる。

と、いうのも、文香が休日の時は思いっきり二人でイチャイチャ出来るように、だ。家事で休日がつぶれるのはもったいない。

他にも、文香に楽をして欲しいとか色々あるが、まあ一番は頑張ってる文香にしてやれることなんて家事くらいだからかな。

だから、今日はうんと甘えてやろうと思い、とりあえず膝枕してもらいながら、ふと気になったことを聞いた。

「そういえばさ、文香。なんで風呂付きの部屋にしたん？」

もうお互いに温泉に入り終えた後だ。これから一緒に風呂に入ることはないと踏んで聞いてみた。

「サプライズのためだけ、ってことはないでしょ？」

「……はい。もちろん、一緒にお風呂に入ろうと思ってましたよ？」

……おいおい、マジかよ。相変わらず気を許した相手にはオープンな奴だ。

「……たまには、そういうのも良いと思いましたから」

「ったく……この野郎」

「……ですが、流石にエヌマってから一緒にお風呂に入る気にはなれなかつたので」

「あそう……」

ていうか、エヌマるって何？ そんな造語ねえだろ。

しかし、元からそのつもりだったのなら、俺は俺で堂々としてりや良かつたな。そうすれば、文香と一緒に風呂に……クツ！

「……ふふ、もしかして、様子がおかしかったのはお風呂のことですつとテンパってたからですか？」

「……るせーよ」

「……相変わらず、なんだかんだ言っ私よりも照れ屋さんですよね？」

「ほんとにうるせーよ……」

この野郎……。誰だ、文香に人のからかい方を教えた奴は。……俺だな、間違いなく。

あー……。結局、文香の掌の上だったわけか。なんだか癩だな、色々。正直、悔しい。よし、こつちも一つ仕返ししてやろう。

立ち上がりながら、撫でてくれる文香の手を握った。

「そうだ、文香。それなら一緒に風呂入る？」

「へっ……？ い、今から、ですか……？」

「そう」

「で、でもっ……もう、髪を乾かしてしまいましたし……！」

「また乾かせば良くね？」

「ち、千秋くんはそうかもしれないませんが、私の髪は長いから……！」

「大丈夫、あんま濡らさないから。ほら、行こう」

「ええっ!?？ で、ですが……！」

「ぐちやぐちや言うな」

徐々に顔が真っ赤になっていく文香。髪はアップになってるから髪を整える必要はない。

無理矢理、脱衣所の中に連れて行った。普段ならもっと抵抗するのにその力が小さい辺り、ほんととは嫌じゃないんだろう。

「ま、待ってください！ そんな急に……！」

「いいから、女なら覚悟決めろって。まあ、覚悟決めるようなことじゃないけど」

「ど、どういう……!」

浴衣を脱ぐこともなく、温泉に入った。そろそろ文香は俺の意図を察したはずだ。

「……ま、まさか……このまま温泉に入って、濡れ浴衣で透かすつもりですかっ……?」

「違えよ」

「そ、そんなのっ……宿の方に迷惑です!」

「自宅だったらやるのかよ」

「っ……ち、千秋くんが、お願いするなら……」

「……」

誰だよ、文香をこんなにした奴。いや、これはこれで可愛いが。

「そういうんじゃないくて、足だけ浸かれば良いだろ」

「……へっ?」

「湯煙で多少、髪は濡れるかもしれないけど、まあ基本は脚だけだし、温泉には浸かれてるし、良いでしょ」

「……な、なるほど……」

というか、普通はこっちが先に出ると思うんだけどね。文香の思考をここまで汚くした人物を、俺は断じて許さない。

「……では、入りましょうか」

「んっ」

二人で足をお湯に浸けて、岩の上に腰を下ろした。夜空には相変わらず、星空が広がっていて、まさしく「星が降るようで」という表現に適していると言えるほどだった。

すつと文香は俺の右手に手を絡めて来て、肩の上に頭を置く。その頭を後ろから撫でてやった。

「ふふっ……千秋くん」

「……文香」

「んっ……」

撫でやすいように俺の肩に頭を擦り付ける文香。その仕草が、足に

頭を擦りつける猫みたいだった。

「やっぱ可愛いなお前」

「千秋くんに言われたくないです」

「……………どういう意味だよ」

「……………千秋くんも、可愛いってことです」

そのままの意味かよ……………。

「……………千秋くん」

「何？」

「……………今年度も、よろしくお願いします」

「……………んっ」

「受験、頑張りましょうね」

「……………んっ」

「間がありましたね」

そんな話をしながら、そのまま二人でのんびりと足を湯に浸けた。

ふみふみ5位おめでとう！（1）

五月。今年の五月は異様に暑く、もうすでに夏じゃね？と錯覚するレベルで暖かった。

流星に表でセミが鳴いてる事はないが、それでも何匹か気の早い蚊が人の生き血を求めてプウーンとウンコの効果音のような音を立てて飛び交っている。これ今年の夏は地球が燃えるんじゃないの？と錯覚するレベルで暑い季節だ。

そんな中、今回は俺が一人でゲームをいじってる時の話だ。いつものように種火周回しつつパソコンでグラブルをやってプレ4ではフォ○トナイトをしてると、文香から電話が来た。

「もしもし？」

『……あつ、ち、千秋くんですか!?!?』

「他に誰だと思ったの？」

『確認です！そ、それよりご報告があるんです。聞いていただけますか?』

「いいけど……待って。今手え離せないからスピーカーにする」

『あ、は、はい』

一度耳からスマホを離してスピーカーのボタンを押した。TPSは何処から狙撃されるか分からんからな。

「で、何?」

『はい！私、5位でした!』

「5位って何が。フォ○トナイト?」

『ち、違いますよ！それなら5位で喜びません!』

「ならP○BGとか?」

『一緒です！ていうかゲーム関係ではありません!』

ゲームじゃないのか……じゃあ仕事関係か大学関係。といつてもアイドルの仕事なんてここ最近してないから分からねーんだよなあ……。

かといつて、大学の方に触れると「もう直ぐ中間試験ですよね?」と  
なってしまうそうで怖い。お、やったね。スカー出た。

「じゃあ何が？」

『総選挙です。その……私の所属してる346事務所で、その……5位になりました!』

「なん、だと……?」

俺の手元からコントローラが落ちた。それはつまり、文香の事務所で5番目に男から人気があるってことか？

「マジ?」

『はい!』

「……」

なんだろう、嬉しいのに何か複雑だ。て、バカ俺。とりあえず文香は喜んでるんだし、祝ってやらないと。

「おめでとう。じゃあ、1位く4位の人を消せば1位になれるんじゃない?」

『な、何を言ってるんですか!』

「冗談だよ。じゃ、今日は文香の家で祝勝会やるから、早めに帰っておいで」

『あつ……す、すみません……。今日は、事務所の方々とパーティーですので……』

「……」

あーまあ、そりやそうか。文香以上の人が少なくとも四人いるし、事務所としてはそういうの早く祝ってやりたいだろうからな。

「分かった。じゃあ、俺とはまた今度で良いよ」

『は、はい……』

「空いてる日とかあったら教えてな」

『分かりました。あの、それで……パーティーなんですけど……』

「あん?……あー、もしかしてスタッフとかもみんな参加するから男も多いとかそういう事か?」

『そ、そうです……』

「俺の事は気にしなくて良いよ。仕事上の人間関係とかあるだろうし。……でも絶対に酒は飲むなよ」

『は、はい……』

「じゃ、また今度な」

それだけ言って通話を切った後、スマホを取り出した。「ふみふみ防衛隊」のグループを開き、文字を入力した。

エイリアンって映画知ってる？『文香に酒を飲ませようというスタツフ、或いはアイドルがいたら片っ端から黙らせ、確実に酒を飲ませないようにはしてください。成功報酬はグラブルの4ジョブ獲得』

直後、全員から「了解」の返事が来た。

一仕事終えた気分で再びゲームを再開した。幸いにも、いや本当に幸いなことに誰からも攻撃されていなかったようだ。

資材を獲得しながらボンヤリと考え事を始めた。文香が5番目に人気があるアイドルであることは嬉しい。だが、それ以上に俺は嫉妬してしまっているようだった。

さつきだって事務所のパーティで祝うのを断られた時に一瞬だけ固まっちゃったし……。

「……はあ」

なんだか情けない気がすんなあ……。俺ってどういう人なんだろう。基本的には祝ってあげるべきなんだし、やっぱ文香を褒め称えてやらなきゃいけないのに。

「……」

×……お祝いの内容でも考えるか。

×

×一週間後、ようやく文香の夜に空気が出来た。と、いうのも、なん

かトップ5はCDデビューだなんだとかで収録とかが重なり、忙しかったらしい。

今日でようやく一旦落ち着くらしく、明日も休みなわけだが、その次の日からはまた忙しくなるそうさ。

明日休みなので、今日の夜はのんびり出来ると踏んで今日の夜に祝勝会の約束が結べた。今日明日で文香を癒す事が出来れば良いかもしれない。

文香が帰って来る前に合鍵で部屋に入って調理を始めた。

文香の帰宅は一時間後。それまでに飯を作らなければならない。



まあ余裕だな。

手を高速で動かし、作る予定の調理を終えた。食卓に並んでるのは餃子、チャーハン、小籠包、青椒肉絲、麻婆豆腐を全部一人前ずつ。中華料理を並べてみました。

あとは文香を待つだけ。すると、文香からLONEが来た。

次に映画の話をしたら地球に送り返すからな『ごめんなさい、少し遅くなります』

……今日も、か。まあ、仕方ないよな。友達付き合いとかもあるだろうし。

とりあえず「了解」と短く返信しておいた。

「……はあ」

それまで何してようかな……。料理は……とりあえず後で温め直せば良いかな。

〜30分後〜

ソファアで思わずうとうとしてると、玄関の開く音がしたので慌てて出迎えた。

「ふう、ただいま……」

「あ、おかえり」

「……疲れました……。CDデビューはやはり大変ですね……」

「みたいだな。お祝い、一週間後になっちゃったし。悪かったな、なんか」

「……いえ、千秋くんの所為ではありませんから」

「手洗いうがい済ませちゃいな。ご飯出来てるよ」

「あつ……は、はい。分かりました……」

手洗いうがいをしに洗面所に行く文香。その間に俺は料理を温めておいた。

戻ってきた文香が食卓を見て「わあつ」と小さく歓声をあげた。

「……美味しそうですね……。中華ですか?」

「正解。さ、食べようか」

「……はい」

二人で席に着くと、とりあえずカルピスを二人分注いだ。

「じゃあ、総選挙5位ということぞ」

「乾杯」

カチンとガラスを軽くぶつけて飲み物を飲み、食事を始めた。疲れているのか、文香は口数が少ない。俺も無理に文香に声をかけようとは思わなかった。

疲れてるから気を使つてるとかではなく、むしろこんな気分になるのは初めてだった。自分で自分の感情が分からないが、何だか今日はローテンション。

「……あの、千秋くん」

「? 何?」

「何か、あつたのですか……?」

「はっ?」

「……いえ、なんだか元気がないみたいなので……」

……あー、なんだろうな。別に何かあつたわけではない。今日だつてノリノリで準備を進めたし、文香にプレゼントだつて用意した。

ただ、確かに元気100倍アンポンタンというわけでもないのも事実だった。

しかし、まさか顔色だけでそれを見抜かれるとは思わなかった。もう少し気をつけないと、気を使わせてしまうな。

「……別に、何でもないよ」

「……そう、ですか?」

「それより、どうなの? 仕事は」

「……やっぱり変です。いつもは仕事の話なんて聞いて来ないのに」

「……しまったな。なんだろう、なんでこんな変な気分になんだろうな。」

「あ、そ、そうだ。文香、今日実は文香にプレゼント用意して……」

「今は結構です」

「えっ……?」

「本当に、何かあつたんですか?」

「……」

いつのまにか文香の目はマジになっている。これは逃げられないが、特に何かあったわけでもない。

「……別に、何も無いよ。本当に」  
「……」

すると、文香はしばらく俺の顔を見た後、カチャンと箸を食器の上に置いた。

「? 文香?」

「……千秋くん、こちらへ」

「何」

手を広げて「おいで」と言われた気がしたので俺も箸を置いて席を立てて文香の横に移動した。

文香は俺の方に座り直すと、俺の胸倉を掴んで自分の方に引き寄せると、首の後ろに手を回して俺を抱きしめた。

「っ、ふ、文香……!?」

「……千秋くんって、素直ではない子ですもんね」

「え、な、何!?? 何を察したの!?」

「……寂しかったんでしよう、千秋くん」

「は、はい!?」

な、何言ってるのこいついきなり……?

「……奏さんに聞きました。千秋くん、もしかしたら私が人気になって嫉妬してるかも、仕事で仕方ないと頭で理解してても自分よりパーティーや仕事を優先して寂しがってるかも、と」

「えっ、俺あいつも別に連絡とってないけど……」

「……私の次に千秋くんについて詳しいのは奏さんですよ?」

……ある意味厄介だなそれ。

「……ですから、うんと構ってあげる事にしました。千秋くん、主夫っぽく見えて実はカマチよなのを知っていますから」

「……別にカマチよじゃないし」

「……大丈夫ですよ、千秋くん。私はあなたのものですし、あなたは私のものです。どんなに人気になっても、それは変わりません」

「……今の、SAOの受け売りだろ」

「はいはい……。寂しい思いさせてごめんなさいね……」

「……るっさい。子供扱いすんな」

「まだまだ大きな子供です……」

なんかすごいあやされてしまった。恥ずかしいという思いはあったものの、嫌な気分ではなかった。

……自分で子供扱いするな、とは言ったがガキだよなこれ。寂しくて機嫌悪くしてたとか……。俺が文香を癒すつもりが癒されてしまったな……。

ほとほと自分に呆れてると、文香が声をかけて来た。

「……さ、続きを食べてしまいましょう」

「……文香」

「? なんですか?」

「……後で、その……なに。やっぱ何でもない」

「なんですか?」

「……膝の上座っても良い?」

「……良いですよ」

そう言って離れて、文香の顔を見るとなんか鼻血垂らしてた。文香も気まずそうに目を逸らしながら言い訳を言うように呟いた。

「……千秋くんが、可愛過ぎて」

「台無しだよ」

×

×

飯が終わって風呂を済ませ、今日は泊まりになった。

ソファアーの上で俺は文香の膝の上に座った。普段は文香の方からくっついてくるから、俺が文香にくっつくのは新鮮なようで、俺の後ろから手を回してすごい抱きしめて来る。

「ふふ、さっきまでの千秋くんはレアですね」

「……やめてほんと死んじゃう」

「千秋ちゃんは甘えん坊でちゅもんねー?」

「……勘弁して下さい」

クツ……さっきまでの俺は本当にトラウマものだ。しばらくいいじられるだろうな……。

「……悪かったな、変な空気にして」

「……いえ。実際、私も寂しかったですし」

「? そうなの?」

「……はい」

「でも、文香には速水さんとかいるじゃん」

「……私の中で千秋くんと他の方は比べられませんよ? 友達や恋人とカテゴリーが違いますし、千秋くん以外では癒せないこともありますから」

「……」

「あ、今照れたでしょ」

「うるさい」

「……本当にこんなに可愛い彼氏他にいるんでしょうか」

「……ダメだ。今日はずっと文香のペースだ。観念していじられまくるしかないなこれ。」

「あ、そういえば文香。俺明後日、デーズニーだわ」

「……はい?」

「学校の校外学習で。三村さんとまた同じクラスになったから、多分一緒に回るし、一応言っておこうと……」

「……」

「……あつ、なんか寂しそう。」

「……千秋くん」

「何?」

「……今度、私と制服デーズニーですからねっ」

「え、なんで」

「……他の女の子と経験してて私と経験してないことは許しません」

「良いけど……文香も学生服着るんだけどその辺は大丈夫?」

「……いい、良いでしょう。これも千秋くんと私のためです!」

俄然楽しみになって来た。

「じゃ、そろそろ寝るか」

「……はい」

二人して立ち上がり、布団の中に入った。

「……あ、文香。プレゼントなんだけど」

「……あ、そうですね」

「明日で良いか」

「……わかりました」

ふみふみ5位おめでとう！（2）

翌日は文香とのんびり過ごすことになった。本当は出かけたりしたかったが、今日は夜までお仕事、明日後の朝からお仕事なので疲れが溜まっているのは目に見えて分かってる。

だから、まあ……何？外ではしゃぐよりいつも通りのんびり仲良くのんのんびよりのキャッチフレーズの如く過ごせたら良いなと思っただ次第だ。

そういえば、のんのんびよりってアレ原作読んだら萌え系とか日常系じゃなくて完全にギャグ系だよな。読んだ時とか一人で超笑ってたわ。

で、今は文香とベッドの中。寝よう、と言った手前、なんだか寝るのが名残惜しくて眠れない。

一方、隣の文香は普通に寝息を立てていた。まあ、疲れてるだろうしそりやそうだろう。

「……」

……構ってほしいな。いや寝かせてあげるのがベストなのは分かっているんだけど……。

そうだ、疲れてるんだし寝かせてあげよう。そう決めたのに、俺の身体は自動的に文香の身体に近付いた。

そういえば、こうして一緒に寝るのも慣れたもんだ。前は眠れなくて朝まで起きてたことだっただけであっただのに。しかも二人揃って。

朝までお楽しみしてたわけじゃないのに朝まで起きてるのも中々無い事だと思う。それに比べて今はもうお楽しみも何回か経験しちゃったしね。

いや、そんな事いいから早く寝ろよ俺。あんまり思い出すとムラムラしてくるから。文香は明日に備えて寝てるというのに……。

……でも、構って欲しい。起きない程度にちよっかい出してみようかな……（意志の弱さ）。

そーつと人差し指を立てて、鼻の穴に入れてみた。当然、鼻くそほじってる奴以外の鼻の穴はそんなに広くないので、奥には入らない。

俺も文香の鼻の穴を広げたいわけじゃないし。

なので、入り口のあたりを、こう……小まめに指を動かして搔いてみた。

「っ、ふえっ……へくちっ！」

結果、くしゃみをした。くしゃみも可愛いとかなんだよこの大学生。身体の成分の80%は可愛さで出来てるのかな？ちなみに残りの20%は美しさ。

うーん……普段、文香の鼻なんて甘噛みする事はあっても触ることないから、もつと触ってたいんだけど……くしゃみするようなら起きちゃうよね。

じゃあ、次は耳かな。耳の中に指を入れてほじほじしてみた。耳は鼻よりもカスが出やすいので、当然わずかながら耳カスが指についた。しかし、なんでだろう。文香の耳カスなら汚く感じないどころか美味しそうに見えて来た。

「……」

……いや、流石に食べないけど。食べたら一線を越える気がする。食べるなら文香の許可を得るわ。

しかし、なんか耳垢見ても、こう……なんだ？なんかアレ、変に昂ぶって来るからやめよう。というか、そもそも顔をいじるのはやめておこう。可愛い寝顔を台無しにするわけにはいかない。

「……」

写メだけ撮って待ち受けにして再び文香で遊び始めた。

うーん……顔以外、か。となると身体かな。もちろん、R—18に触れるようなことはしない。

つまり、オツパイとま☆ことお尻はダメ。しかし、くすぐると起きてしまう。

なら、ここはおへそだろう。

幸いと言うべきか、いや言うべきじゃないんだろうけど、文香は寝相は良いのに何故か服ははだけやすい。

だから、布団の中に潜ればおへそくらい……ほら出てる。いつもお腹出さないで寝なさいって俺に言ってくるのに。



このおへそをー……………どうしよう、舐めてみようかな？（深夜のハイテンション）。

そう思っ、顔を文香のお腹に近づけた直後、太ももが俺の首を挟んだ。

「っ!?？」

「……………人の身体に先程からイタズラしてる悪い子の顔はこれですか？」

「っ……………！」

ぐほっ……………し、締められ……………ふ、太もも柔らかい良い匂い！

「……………多少のイタズラなら許してあげようと思いましたが……………身体に触るのはダメです。構って欲しいにしても限度があります」

しかも考えが読まれてる!??ふ、太もも柔らかい良い香り！

「……………お仕置きとして……………」

「ひゃわっ!?? っひゃわははははごめんなさい!やめっ、文香ごめっ……………！」

「10分間このままです」

10分も俺の足の裏舐めるつもりかこいつ!??俺より高度な変態プレイじゃねえか!

「ふ、文香ごめっ……………!ごめんって文香!」

「いあえす（訳：嫌です）」

「だ、大体10分間も舐めるほうがキツくない!??」

「……………いあきふんのあひあら、なんひかんえもなえてられあす（訳しき：千秋くんの足なら、何時間でも舐めてられます）」

こいつ、もしかして俺より変態なんじゃ……………!

今更理解した所で遅かった。文香の高度な変態プレイは10分少し過ぎて12分で終わり、途中からいろんな意味で気持ち良く感じて来た俺は、文香の足の間に頭を置いたまま倒れていた。

もう無理……………呼吸困難で死ぬ……………こんな間抜けな変態プレイで……………。

涙目になつてる俺に、さらに文香は無慈悲に言った。

「……………では、次のお仕置きです」

「……へっ?」

「誰も一つなんて言っていないせん」

「……」

「さ、こちらに頭を向けてください」

鬼ですか。

言われるがまま、文香の横に寝転んだ。すると、何を思ったのは文香は俺に思いつきり抱きついた。

「なっ……!? 一体、何を……!」

「……今更ハグくらいで何を驚いでるんですか?」

そりゃ驚くдар。お前寝るとこだからブラつけてないからね? いやそうじゃなくてもなんでこの流れで? っつてのもあるし……。

「……このまま、抱き枕の刑です」

「ご褒美?」

「……その代わり、一ミリでも動いちやダメですからね」

「は?」

「……ナニとは言いませんが……つた、勃たせるのもダメです」

……それは、かなり厳しいのでは。

冷や汗をかいてる中、文香の口が俺の額に軽く当てられた。それと共に、文香の両足が絡みつくように俺の身体に巻きついた。

「……おやすみなさい、千秋くん」

「~~~~っ!」

だ、誰に習ったあああああ! そのお仕置き、誰に習ったああああ! んなことされたら、体が反応しちゃうに決まってるだろうがああああ!!?

全力でムラムラしながらも身体は動かせない。多分だけど、これで身体を反応させたらもつとすごいお仕置きがくる。それは死んじやう。チンチン爆発しちゃう。

× 顔が真っ赤になりながらも、超我慢しながら目を閉じた。

×

× 翌朝、目を覚ました。どうやら、眠れたようだ。いや、多分眠れたっつーか気絶したんだと思うけど。

薄目を開けると「あっ」という声は何処かから漏れた。何かと思つて身体を起こすと、文香が俺の髪の毛を結っていた。

「……何してんの？」

「……ごめんなさい」

テメエ、昨日と逆じゃねえか。まあ、別に良いけどもう。

小さく欠伸をして髪止めを外すと、ベッドから降りた。

「今朝飯作るから待つてて」

「……え、あの……」

「？ 何？」

「……た、たまにの休日くらい……一緒に作りません、か……？」

「ああ、良いね」

そんなわけで、一緒に料理をした。朝飯は軽めにパンと味噌汁、それとサラダ。これで十分だろう。

朝食はさつきと食べ終えて、歯磨きも済ませて二人でソファアームに座った。

「で、どうする？このあと」

「……そうですね。のんびりゲームでもしませんか？」

「でもあんま白熱し過ぎると文香疲れるでしょ。明日からまた忙しいんだし、なるべくリラックス出来ることを……」

「……千秋くん」

「？ な、何？」

「……なるべく、私の疲れを取ることでよりも楽しむ事を考えて欲しいです。これから、またしばらく仕事で忙しくなるんですから」

ふむ……まあ、文香がそう言うならそれでも良いけど……。

楽しむ事、ねえ……。しかし、それならむしろゲームとかより外に出た方が良い気もするな。

ゲームも十分楽しいけど、休日じゃなきゃ出来ないことしたいし。

「……あ、じゃあこんなのどう？」

「……なんですか？」

「今度、制服デ○ズニー用の文香の制服を買いに行く」

「……やっぱり、無理に出掛けることは避けましょう。私、疲れて動け

ません」

いや、文香の方から制服デ○ズニー言い出したんだからね？

そんな思考が俺の表情に出ていたのか、文香は気まずそうな顔をして俺から目を逸らした。

「……そ、それより、昨日仰っていたプレゼントとは？」

「文香の制服選びに行くなら渡してあげる」

「……」

すると文香は小さくため息をついて、俺から目を逸らしながらボソリボソリと言った。

「……実は、その……学生服、私の部屋にあるんです。私の、高校生時代の……」

「へっ？」

「だけど……今、着れるか分からない、ですし……もう少し痩せてからーなんて……」

なるほど、文香にも色々事情があるのか。まあ、女子はその辺色々デリケートだからな。男から見たら大して変わらないところもかなり拘る。もはやガンプラビルダー並みの拘りだ。

それらを踏まえ、今日何をするかの結論を出した。

「じゃ、その制服着て」

「鬼ですか!?？」

「鬼で結構！そう思われても俺は文香の学生服姿が見たい！」

「せ、せめてあと一週間お願いしますー！」

「今着てくれたら受験勉強本気で頑張りますー！」

「っ、わ、分かりましたよう……」

よっしゃー！というかまずは進学先決めなきゃ！

文香は頬を赤くしながらトボトボと寝室に向かった。

「着替えの様子も見て良いですか!?？」

「……調子に乗らないでください」

怒られちゃった。

文香が着替える間、文香のプレ4でフォ○トナイトをやった。しばらくゲームが進行し、なんか「UENON—station」と

かいう奴と残って最終戦にもつれ込み、お互いに建築合戦しながら撃ち合っていると、ようやく文香の着替えが終わったようで扉が少し開く音がした。

「あ、着替え終わった？」

プレイ中でも文香の学生服の方が重要なため、コントローラを置いて後ろを向いた。文香が顔だけ扉から出していた。

「何してんの？早よ見せてよ」

「……あの、それよりゲームは良かったのですか……？残り1対1だったのに……」

「？ そりゃ文香の制服のが大事だし」

「っ……」

頬を赤らめて俯く文香。なんか小声で「嬉しいのがムカつく……でも、やっぱ見せるの恥ずかしいような……」とか呟いてて隙だらけだったので、前に移動してドアを開けた。

直後、ハツとして頬を赤らめたまま目を見開いてるセーラー服姿の文香が立っていた。

……あ、ダメだ。かわいい尊い鼻血出そう。なんでセーラー服であんな胸が強調されるんだ……？

「っ、も、もう！いきなり開けないで下さいっ……！」

文香が俺の胸をポカポカと叩いて来てようやく正気に戻り、気がつけばスマホのカメラを起動してシャッター音を鳴らしていた。

「っ、なっ、なんで勝手に撮ってるんですか!?？」

「永久保存する」

「何を良い顔で言ってるんですか！か、勝手に撮るのやめて下さい！」  
やめて、という割に文香は抵抗しなかった。少しカメラから視線を逸らして逃げようとはしていたが、ドアを閉めたりトイレに籠ったりなどはしなかった。

早い話が、恥ずかしいけど可愛いと言われているような態度をとられて嬉しいんだろう。

なら、こちらは全力でカメラに収めるまでだ！まずは正面、続いて側面、若干上から、後ろ姿も収めるべきだろう。さらにローアングル

からも……………!

「…………ローアングルはダメです」

メツチャ冷たい声でそう言われたのでやめておいた。今のはマジでやめてほしい時の声だった。

「うう…………もう着替えて良いですか…………?」

「お願いします!俺に勉強を教えてくださいる時もその格好でお願いしますー!」

「ええっ!??そ、それは絶対に嫌です!」

「したら絶対に第一志望合格します!!?」

「え、ええ…………?…………う……………」

頬を赤らめたままその場で俯いた。いや、実際あんな姿で勉強教えてもらったらやる気も学力もうなぎ登り滝登りだろう。そんなレベルで可愛かった。

「…………うう、分かりましたよう……………」

「ツシャオラ!今の俺ならハー○ードも怖くねえ!」

「…………ハー○ードでもなんでも良いですけど、絶対合格して下さいよ……………」

任せておきたまへ!今からやる気出て来やがったぜ……………!

「…………とりあえず、私着替えますね……………」

「え?今日一日その格好じゃないの?」

「…………その、実は腰の辺りが割とギリギリでして…………。制服デ○ズニー前にびりっつと行くんじゃないかと……………」

との事で、文香は寝室で着替え始めた。

## ダイエット（1）

ある日の朝のことだった。いつものように俺は仕事中の文香の部屋の洗濯物を干していた。

平日の朝は、まず俺が起きて洗濯機を回し、二人分の朝食と弁当を作ってる最中に文香が目を覚まし、支度をしてる間に飯が完成、二人で食って歯磨きして、先に文香が出掛け、残った俺が食器を洗って洗濯物を干して学校に出掛けている。

いや、いつもの日常がこうなってるのは学生としてはおかしいが、まあ忙しいアイドルと半同棲状態の、暇を持て余した学生が時間を好きな人のために使うのは当然といえる。

一方、文香は早朝から仕事である。本当にご苦労様です。や、本当に。

で、上がった洗濯物を干していれば、当然、文香の下着にも触れるわけで。しかし、それはまあ良い。文香だって同意の上だ。

問題は、その下着だ。

「……黒ってお前なあ……」

……最近、文香の下着の色が派手になってきている気がする。ピンクやら赤やら薄い紫やら……ま、もしかしたら大学生にもなるとそういった下着をつけることは少なくないのかもしれない。

俺としては前まで着けていた青や紺も悪くないんだが……。

しかし、黒というのは如何なものか。それに、なんか大人っぽくなってきたる気がするし……。

「……」

……見なかったことにしよう。というか、今ここで俺が何か思っても仕方ないし、後で言えばそれはそれで怒られる。

それよりも洗濯を……あつ、文香のパンツのゴムが緩んでる。また成長したのか、あの体系が。

まあ、その辺は文香が一番、よく分かっているだろうし、俺がわざわざ「パンツのサイズあげたら？」なんて言うべきことじゃないな。多分、割と本気で殺される。具体的には勉強10倍の刑かな。

さて、それよりもさっさと終わらせて学校に行かないと。文香と同じ大学に行くために、キッチンと勉強しなければならぬ。

洗濯を終えると、歯磨きをして部屋を出た。マンションから出てしばらく歩いてると、後ろから肩を叩かれた。

「おはよう。鷹宮くん」

「あ、三村さん」

同じクラスの巨乳、三村さんだ。多分、文香と付き合ってから一番迷惑かけてるアイドルだ。ちなみに、付き合う前に迷惑かけてるのは速水さん。

「また今日も文香さん家から?」

「まあ、うん」

「……高校生が同棲してて平気なの?」

「長期お泊まり会だから」

「物は言いようだよね……」

間違っていないからな。たまにうちに帰ってるし、お手伝いさんとかだつて家にいる時間よりもお手伝い先の家にいる方が長いでしょ? 要はそういうこと。

それに、ちゃんと家事だつてして……あつ、家事で思い出した。家に弁当忘れた。

「……どうしたの?」

顔に出たのか、隣の三村さんがきよとんと首を傾げた。

「……や、台所に弁当置いてきた」

「あー……」

「悪い、コンビニに寄って行くから先に行つて良いよ」

「あ、私も付き合うよ。食戟のソーマの最新巻買いたいし」

「……」

これも俺の所為か? 違うよね?

少し気まづくなりながらもコンビニに入った。陳列されている商品を眺めながら、適当に昼飯を選ぶ。

ちなみに、学食に行くという選択肢はない。学校に友達いないのに学食にいけるメンタルは持ち合わせていない。



鮭と明太子のおにぎりを2個ずつとジンジャーエールを購入し、レジに並ぼうとすると、単行本を持った三村さんと被ったので、一步引いて譲った。

「あ、ごめんね」

「いやいや。つーか、三村さんもなんか買わんの？ 飲み物とか」

「あ、う、うーん……」

気まずげに目を逸らしながら頬を掻いた。どうしたんだろ、なんか悩みでもあんのかな。

「……何かあんの？」

「う、うーん……まあ、鷹宮くんなら良いか」

「？」

「その……少し、太っちゃって……」

……察した。要するに、甘いものがダメだと。いや、甘いもの以外にもダメなんだろうな。

「知ってるか？ イノシシの肉って太りにくいんだぜ」

「……太りにくい？」

「えっ？」

何故か脳天から冷えるレベルの冷たい声が飛んで来た。驚くほど切れ味のある声で。

「何言ってるの……？」

「や、だから太りにくい肉を……」

「太りにくいじゃダメなの。太りにくいものを食べるということとはつまり我慢してるようではないの。そんなんじゃ意志が弱い、結局食べちゃってるの。それじゃリバウンド待たなしの。ダイエットするには動くとか以前にまず『食べない』という鋼の決意が必須なの。じゃないと好きなものを我慢するということにならないから。痩せるためには脂肪分がどうのとか関係なく、とにかく食べ過ぎないことを意識しないとイケないの。これだからダイエットしたくない人間は困るんだよね。お願いだから安易に口を挟まないで」

「あ、は、はい……。す、すみません……」

み、三村さんとは思えないくらい怖かった……。もしかして、何度

かりバウンドしてるのか……？

うーむ、それはいかんな……。せつかく学校で唯一話せる人と奇的に同じクラスになったのに、怒らせてしまつては元も子もない。

なんとかご機嫌を取らないと。

「ま、三村さんは腹だけでなくおっぱいもでかいから、あまり気に」

眉間に漫画の背表紙がクリティカルヒットし、そのままダウンし

た。

×

× 時早くして夕方。学校が終わり、一人で家で勉強中、ふと時計を見

上げた。

あと2〜30分ほどで文香が帰宅するので、それに合わせて飯を作り始めた。

土曜日になんて仕事なんて、本当に大変だな。アイドルって生き物は。文香の家の家事をする度にそんな風に思う。

だからだろうか、毎日、晩飯は気合入れちまうんだよな。そんなわけで、今日の飯は豪快にステーキにしてみました。もちろん、焼き立てが美味いから下準備だけでまだ焼かない。

しばらく待機していると、スマホが震えた。

『今から帰ります』

文香からだ。

『了解。迎えに行こうか？』

『いえ、勉強しててください』

そう言うなら大人しくするか。

再び勉強を再開。ちゃんと勉強すれば文香からご褒美もらえるから頑張る気になれる。え、ご褒美？ そりゃほら、匂いとかイロイロだよ。

えーつと、 $H_2O + CO_2 \dots$ 水と二酸化炭素足して……てか化学の足し算全然分かんない。

分かんないところは辞書で引いたり教科書を読んできると、玄関が開いた。

「……ただいま帰りました」

「あ、おかえり。今、飯作る」

勉強を切り上げ、調理を始めようとした俺の手を文香が掴んだ。

「? どうした? 今日はステーキだよ」

「……ま、待つてください。ステーキなら尚更」

「え、なんで?」

「……一度、体じゅ……じゃない、洗面所に行きます」

「ああ、手洗いうがいな、了解」

「は、はい……」

洗面所に引っ込んだ。なんだろ、手洗いうがいじゃないな、飯を作らせるの待たす理由がない。

明らかに様子おかしいし、あとで事情を聞くとしよう。

そんな風に思った直後だった。ボタン! と勢いよく洗面所扉が開かれた。

勢いの割にうなだれた様子で、何故かジャージを着た文香が顔を出した。

前髪で隠れてどんな顔をしてるのか分からないが、おそらく浮かない顔をしているのだろう。

「……ふ、文香さん……? どうしました?」

思わず敬語で聞くと、前髪の隙間からカケラの光もない眼光を覗かせた。ヤベエ、死んだ目の文香とか初めて見た。

「……千秋くん」

「な、何……?」

「……私、今日晩御飯いりません……」

「はあ!?? ちよつ、ステーキ焼く準備しちゃったのに!??」

「……すみません、少しこれから出掛けてきます」

「待て待て待て! せめて理由を言えつて!」

玄関に向かおうとする文香の腕を慌てて掴んだ。

いきなりそんな言われて納得できるかよ。気合い入れて少し高いステーキ肉買って来たのに。

しかし、文香はこっちに顔を向けようとしな。無理矢理にでも玄関に向かおうとしていた。

クツ……仕方ない、こんな手段は嫌だったが、奥の手を使うしかないのーよ！

「なあ、文香。ゲームやろうぜ。文香と一緒にやろうと思って旧式のゲームを実家から送ってもらったんだよ」

「そんなのやりません！」

「なっ……！」

ズギユンっ、と。ビームライフルに撃ち抜かれたように俺は膝から崩れ落ちた。

お、俺とのゲームよりも優先するなんて……いや、それ以上に俺と遊ぶことを「そんなの」と呼ばれるなんて……。

俺がサーヴァントならあまりのショックに消滅していたかもしれない。というか、既に黄色く体が発光してる気が……。

するっと俺の手から力が抜けたのを不審に思ったのか、文香が振り返った。

「ち、千秋くん!? どうしたんですか!?」

「……そんなの……俺とゲームするのが、そんなの……」

「わ、分かりました！ ちゃんと事情を話すから座に還らないで下さい！」

そんなわけで、一度、食卓に座った。もちろん、飯は出てないしステーキはまだ焼いていない。

しかし、さっきのはショックがでかかったぜ……。相当、文香にとってデカイショックがあつたに違いない。

「で、どうした？」

なんとか気を強く持つて聞いてみたが、文香はなかなか言わない。頬を青く染めたまま、斜め下を見ていた。一応、用意した飲み物にさえ手をつけようとしなない。

……あの、顔色悪過ぎるし、やっぱ飯くらい食った方が……。あ、もしかしてそういうことか？

「……太ったのか？」

ピシッ、と文香の顔が石膏像のように真っ白になった。

あ、これヤバイ。

「ふえっ……ふええっ……！」

「ま、待て待て待て落ち着け！ ストレートに聞きすぎた俺が悪かった！」

「ち、ちあきくんにもっ……ぐすっ、そう見えるんだ……！」

「ちよーっ！ お、俺には分からないって！ ただ、帰ってから洗面所に入った割に手が濡れてなくて、代わりにジャーズに着替えてたからもしかしてっていう推理の元で聞いただけで……！」

本当はパンツのゴムが緩んでるの思い出したからとは言えない。

「ううっ……ひぐっ、ほ、ほんとう、ですか……？」

「本当だって！ ほらもー、鼻水拭いて」

ティッシュを差し出すと「ありがとうございます……」と涙目で鼻をかんだ。そういう仕草は可愛らしいんだけどな……。

まあ、太ったとは思わないが、実際、少し丸くなったことに気付いてたのは内緒だ。一緒に寝てる時、抱き枕にされてる腕のふにふに感が徐々に増してたし。

「……ま、それならステーキはやめとくか。今日は何が食いたい？ それともネットで調べるか？」

そんな風に言った時だ。文香の眼光が鋭くなった。長い前髪の間から見えるから尚更だ。

唐突に八つ当たりされた気分でひよってると、文香が怒りを表しながら聞いてきた。

「……何を他人事のようなことを言ってるのですか？ 行っておきますが、これは千秋くんの所為でもあるのですよ？」

「え、なんで俺」

反射的に漏れたその疑問に心底いらつとしたようで、力強く両手で机を叩きながら立ち上がった。

凹んだり泣いたり怒ったり忙しい奴だ。

「誰が毎日、私の料理作ってるんですか？！？」 毎日毎日、高カロリーで高クオリティなもの作って！ 美味しいから手が止まらないし、千秋くんも私もインドア派だからデートもほとんど画面の中だし、全部千秋くんの所為です！」

「ぜ、全部!?!?」

責任転嫁も良いところだろそれ!

「……っーか、誰に言われたのそれ」

「……プロデューサーさんと奏さんとありすちゃんです」

「うわあ、フルメンバーじゃん」

それで、これからマラソンに行こうとしたのか……。まあ、そういうことなら仕方ないけど……。

でも、今の時間からマラソンは危ないだろ。それも女の子一人で。俺は俺で勉強しなきゃいけないし……。

そういえば、今朝は三村さんが同じことで悩んでたなあ……。あの時は安易に口を挟むな、って言われたし、今もなるべくなら口を挟むべきではないんだろう。

ここは、俺はあまり気にしないって事をそれとなく伝えてやれば良いだろう。

「ま、どんな体型でも文香は文香だから。俺は気にしないよ」

「……ち、千秋くん……!」

「飯とかはしばらく文香のリクエストを受け入れるけど、それで体調崩すなよ」

そんな言葉しかかけてやらないが、多分、今の文香には十分だろう。ダイエツトするにしても、食事を減らすのも結構だが、それでまともな栄養取らない方が困る。

幸いというかなんというか、今のだけで文香は感動しちやってるし、後はジョークでも混ぜてやれば良いだろう。

「所でさ、お腹の子はいつ生まれんの?」

直後、フツと、突然停電でも起こったかの如く辺りが真っ暗になったような静けさと冷たさが襲った。

思わず肌寒さに自分の両腕を抱くと共に、立ち上がっている文香が貞子の如き眼光で俺を真っ直ぐと見下ろす。もし、霊圧が存在するのなら、間違いないこんな圧力だろう。

「……ああ、これは多分、ジョークを間違えたな。」

「……千秋くん」

「っ、な、何……?」

「……私は妊娠していると錯覚させるほどに太りましたか?」

「あ、いえ、そんなつもりは……ただいだっ!?!?」

言い訳しようとした直後、正面から机を挟んで腕が伸びてきて、胸と腕の間に頭を絞められた。正確に言えば、こめかみを締められている。

「いだだだだっ!?!?」

「……でしたら、どういうつもりで仰ったのかご教授願えませんか?」

「痛いってホントごめんなさいいいいだだだだだだ!」

「……まさか、自分にも少なからず責任があるにも関わらず、その手のブラックジョークを挟んだわけではありませんよね?」

「わ、分かった! 分かったから! 俺もダイエツト手伝うからこれ以上、腕を捻るのやめろおおおお!!?!?」

その日は明日になるまで走らされた。

## ダイエット（2）

ダイエット、それは古今東西、女性達を悩ませて来たものだ。いや、男性もだ。

何故なら、痩せる、と確実な方法があるわけではない。人によつて痩せ方も個人差があるし、従つてwikiなどが出来るわけでもない。

動いても食事制限しても痩せるかどうか、それは本人の体質と努力次第なのだ。なんてクソゲーなのか。

仮に痩せているとしても、1日やそこらで結果なんて出ないし、ゲームじゃないから経験値ゲージのようなものも出ない。せめて一週間くらいは動かないと数値化もされないのだ。

まあ、クソゲーオブクソゲーなダイエットだが、それに挑まんとする俺の彼女とクラスメートの手伝いをする事になってしまった。

そんなわけで、三人で公園に来ている。

「かな子さんも、ですか……？」

「は、はい……その、スイーツを、つい……」

これからダイエットをするっていうのに、二人とも嬉しそうに頬を赤らめた。大方、仲間が見つかつて嬉しいんだろう。

俺も文香も三村さんも、ダイエットについてコツを知っているわけではない。食事制限は調べるとして、運動の方は、とりあえず「がむしやらに体を動かす」くらいしか分からないのだ。なんかテレビで大学の先生が紹介してるような奴は胡散臭くて信用できないし、何より特定の機器なんかうちにない。や、うちつつーか、うちもだけど、文香の部屋の方の。

二人揃つてジャージを着て、その下には汗をかいても良い服を着て、スポブラを装備して、準備だけは万端である。

「やて、どうするっ？」

「……っていうか、鷹宮くんはやらないの？」

「やるよ。二人ほどガッツリはやらないけど」

俺は普通の私服なので、三村さんが当然の質問をしてきた。俺は主



にサポートだろ。飲み物買ってきてあげたりとか。

「で、まあ運動するために公園に来たわけだけど、何するよ?」

「……そうですね。やはり、付き合ってくれている千秋くんも楽しめるように、スポーツにしませんか?」

なるほど、それはありがたいけど、そんな気を使うことはない。俺が参加する羽目になったのは俺のジョークが原因だし、何より文香と一緒にならつまらなくなることもない。

まあ、その心遣いはありがたいから、ここは黙っておくけど。

「良いね。で、何する?」

「……はい。それで、今日はこれです」

文香が鞆から取り出したのは、ラケットの入った袋だった。テニスではなく、バドミントンのラケットが四本セット。ガチの奴ではなくエンジョイ勢用、といったものだ。

それを見て、三村さんがキョトンと小首を傾げた。

「……ミントン?」

「……はい。点を取り合うのではなく『100回連続で打てるまで帰れまテン!』です!」

文香が「テン!」というのはとても可愛らしかったが、それを気にしている場合ではない。

「それ、かなり難易度高くね?」

「……かな子さんと千秋くんならやれます」

「なんでしれっと自分を外してんの」

「そ、そうですね。文香さんにも頑張ってもらわないと……」

「……かかった時間の分だけ、この後の勉強時間を増やしますよ?」

「よし、やろうか!」

そんな脅迫にも近い説得と共に、競技を開始した。

さて、二人でラケットを構え、シャトルを文香が手に持った。まあ、一人50回返せば良いだけ、そう思えば心も折れないさ。

「……では、いきます」

文香は静かにそう言うと、シャトルを目の前で控えめに放ると、アンダーサーブを放つ……とうとしたところで、ラケットは空を切り、

シャトルは地面にポテツと落ちる。

「……」

「……」

「……」

最初の記録0回。ある意味、一発目で100回行くより難しい結果だった。

頬を真つ赤にして固まる文香だった。まあ、気合い十分で空振りも恥ずかしいよな。しかも序盤のサーブでミスるのはいただけない。

「……文香、バドミンソンのサーブはそうじゃなくて、胸前で打つんだよ」

「うっ……は、はい……」

相変わらず真つ赤になつたまま、シャトルをつまみ上げた。

で、再トライ。これ再トライって言って良いのか分らんけど。

文香が再びサーブを打とうとしたが、また空振りする。いや、普通は一度ミスったら学習すると思うんだけど。

「……なあ、これダイエツトか？俺も三村さんも一步も動いてないんだけど」

「う、うるさいです！……ここからです！」

プンスカと腹を立てながらも、文香は慌ててゲームを再開した。

3回目は流石に失敗することはなかった。が、それはあくまで「ラケットをシャトルに当てられるか」という括りで見ただでの失敗だ。つまり、先端に当たったシャトルはトウキツクの如き勢いとコントロールによつて、俺の目に直撃した。

「ふっ……!?？」

「っ、ち、千秋くん!?、ごめんなさい……!」

「だ、大丈夫……?」

「ぐっ……あ、危なかつた……!」

俺の睨みあと0.5秒遅かつたら眼球に直撃、減り込んだ。ダメだ、この子の運動神経は悪いなんてものじゃない。

「……文香、普通に走らない?」

「いえ、このままでは終われません……!」

……いや、別に痩せるのにバドミントンでなければならぬってことはないだろ……。

まあ、文香はこう見えて頑固だし、俺の言うことなんか聞かないだらうけど。別に良いけどね。

「とりあえず、落ち着いてやってみるよ。面積はそれだけ広いんだから、当てるくらいできるでしょ」

「は、はい……」

のんびりと文香のプレイングを眺める。こっちは汗かかなくて済むが、向こうはむしろ汗かきに来てるんだから、このままでは困る。

それからサーブを7回ほど繰り返し、ようやくまともな一発目が飛んできた。それに対し、俺もラケットで返す。動局的に棒を当てるなんて、剣道3段の俺にとってはお茶の子さいさいだ。

返すと、文香は空振りした。まあ、知ってたわ。サーブにも時間が掛かったのに、返すのが出来るわけがない。

「……三村さん、のんびりやろうか」

「そ、そうだね……」

「ううっ……」

俺と三村さんの会話を聞いて、申し訳なさそうに俯く文香だった。

×

それから、徐々に……いや本当にカタツムリレベルののろさだが、

ラリーは回数を増やした。

三村さんも見た感じ運動は得意ではなさそうな動きだが、文香よりもマシだ。

今はその休憩中。ここはサポーターたる俺の役目である。二人の飲み物を買に行った。えーっと……ダイエット中だし、下手なものを選ばない方が良いよな。

「うーん……でも、最近は温かくなってきたしなあ」

……スポドリは甘いつてことは、やっぱり糖質入ってるんでしょ？

ダイエットのうんちくとか分からないけど、甘いものは控えた方が良いのは分かる。

うーん……分かんねーや。とりあえず、水とかお茶にしておこう。

あ、それと摘めるようにおやつ買っておくか。おやつはー……うん、新潟のぬれせんべいがあるし、これにしよう。ダイエツト中なのにおやつは意味ない？ 大丈夫、これ内容量6枚だから、2枚しか食べない。

やはり、袋の外に内容量が書いてあるのは助かるな。

それらを購入して、二人がバドミントンをやってるであろう敷地に入った。

遠目から見ても、巨乳の大学生と巨乳の高校生が一心不乱にラケットとシャトルで遊んでるので、あそこが俺の行くべき場所だと一発でわかった。周りで遊んでるのは小学生ばかりだが、それでも注目を集めている。

……うーん、混ざりたくない。俺に男友達がいれば今すぐに呼び出して「アイドルとお知り合いになれるよ？」って言ったのに……。

まあ、ここでうだうだしても仕方ない。合流しよう。

しかし、本当に上手くならねえな、あの二人。続いても三回が限界。帰れま10なんてやると、冗談抜きで夏休みに突入しそうだ。まだ五月なのに。

「えいつ」

「……はうつ」

「ほいつ」

「……ひゃいつ」

「ああく……」

「……うう、すみません……」

「い、いえそんな……さっきは私が足を引つ張つちやいましたし……」

4回目で、文香の頭上に飛んできたシャトルがラケットをすり抜けて、頭にコテンと落ちた。聞いている分には可愛いんだが、あの人達、多分、100回やるってこと分かってない。

……これは今日の勉強時間が24時間超えるのも覚悟せねばならんな……。

「ハエ叩きでもしてんのかよ」

「む、ハエ叩きは酷いつ」

「……そ、そうです。どう見てもバドミントンです」

まあ、ラケットとシャトルを持ってりゃバドミントンに見えるからな。例え、そのアイテムで野球をしていたとしても。

「あい、飲み物。お茶」

「わ、ありがとうございます」

「それと、おやつ」

「……はっ?」

唐突に二人ともどすの利いた声を出し、身体中になんか武器が突き刺さったような感覚に陥った。

何事かと二人を見ると、二人はラケットを手放してゆらりとこちらに歩みを進めてきた。

「お、や、っ?」

「……どうやら、千秋くんは誰の所為で私達がこうなってるのか、まったく分かっていらっしやらないようですね」

「……あの、だから……6枚入りで、数の少ないものを……」

「……」

「……」

説明すると、二人は動きを止めた。文系でも出来る単純な算数だ。

――6÷3＝2

つまり、一人2枚。せんべい2枚で体重が変わらない事は二人とも分かっているはずだ。

「ま、まあ……そういう事なら……」

「そ、そうだね……」

あ、甘んじて受け入れた。しかし、マジでベストチョイスしたなあ。これが値段に負けてポテチ買ってたら間違いないくらくラケットで串刺しにされてた。

「で、何回できた?」

俺の分のお茶を飲みながら聞くと、二人とも恥ずかしそうに頬を赤く染めた。どうやら、進歩はないようだ。

「……その」

「最多で、6回……」

「へー、頑張ったじゃん」

予想以上だ。どうせ、全く進んでないと思ってたから。

「……しかし100回は無理です、このままでは」

「いやそれは俺が決めたことじゃないし」

「ふ、文香さん……少しハードル下げませんか？」

「……そうですね」

言いながら、二人ともモグモグとせんべいを摘む。俺よりも先に。

……なんつーか、この人達は無意識的な行動がとても痩せようとしてる人とは思えないんだよな。まあ、だからここまで育ったんだろうけど。

「でも、何回に下げんの？」

「そうですね……50で」

いきなり半分……と、呆れることはできなかった。むしろもつと減らして欲しい。今、1時間かけて6回だからね？

「や、もう少し減らした方が……」

「……いえ、それではダイエツトになりません！」

「そう、そうだよ鷹宮くん！ 目標は高くしないと！」

わあ、三村さんまで賛同しちゃった。ダイエツトするのは俺じゃないし、好きにしたら良いけど。

「よし、じゃあやりましょう、文香さん！」

「そうですね、かな子さん！」

二人とも元気よく立ち上がり、ラケットを握った。

俺はまだせんべいを食べてないので、参加は食べてからで良いかな、と思つて袋の中を見ると、一枚も残っていなかった。

あいつら、キレてた割に枚数をセーブすることできないのかよ

……。

「……デブ」

ラケットが鼻と口の間と、額に直撃した。

## ダイエット (3)

さらに別の日。俺と文香と三村さんは二人で公園に集合することになってる。前と同じ公園である。まあ、現状で来てるのは俺一人だが。

さて、今日はどんなスポーツをやるのかな？ ウキウキドキドキシンキングタイムと言わんばかりに両手を胸前で回したりして暇潰ししてた。そうじゃないとやってられないし。

この前の時なんかラケット顔面に二発叩きつけられたからなあ……。あれは完全に命取りに来てた。

まあ、どんなスポーツでもそれなりにこなせる自信はある、剣道やってたからね。何事も身体を動かす競技は基礎体力と少しの運動神経。逆に基礎体力があるのにスポーツを多少なりともこなせない奴は運動神経が悪い。

さて、とりあえず今のうちに身体動かしておくか。

アキレス腱を伸ばし、肩や肘、膝などの関節を曲げて準備体操を始めてると、文香と三村さんがやってきた。サッカーボールとカラーコーンを持って。

「……今日はサッカー？」

「……お待たせしました……」

「一番痩せそうだからね」

……まあ、それで良いなら良いが。とにかく、そんなわけでサッカーをすることになったわけだが……。

「……なんで橘さんもいるの？」

「文香さんのダイエットと聞いたので」

「……あそう。でも大丈夫？ 二人とも今、ウェイトにバフかかっているから体当たりとかの威力が……」

横からサッカーボールが顔面にめり込み、大きくぶっ飛ばされた。相変わらず容赦がない。

「……大玉螺旋丸」

「あ、今投げたんじゃなくて叩きつけたんだ……」

「そこまでする？ そんなにイラつとした？」

「……そ、そんなに太った私を怒らせて、楽しいですか？ 千秋くん」

「え、いや……」

「……そんな風に言うなら、もう私が痩せるまでしばらく私の部屋を出禁にしますよ」

「や、違うから！ その……怒ったり拗ねたりする文香が……あまりにも、可愛くて……」

「っ、ち、千秋くん……」

「ほら、文香って滅多に拗ねたりしないだろ？ ……だから、その……」

「……もういいですよ、千秋くん」

「文香……？」

「……私も、たまに千秋くんに意地悪しますから。おあいこです」

「文香……」

「千秋くん……」

「はいそこまで。二人だけの世界に入らない」

三村さんが俺と文香の肩に手を置き、橘さんが文香の前に立ちはだかった。両手を広げ、俺をギロリと睨み付け、まるで子猫を守る親猫のように睨んできた。普通、逆な気もするけど……。

「……なんで怒ってんの？」

「……文香さんとの交際をするのは結構ですが、文香さんに変なことしないでください」

「え、今の変な事なの？」

「変です。私の目が黒いうちは、文香さんに簡単に手出しはさせませんから」

「ん、お、おう……」

……こんな子だったっけ、橘さん。なんか、文香との交流が妨げられるような……。

すると、三村さんがまとまるように手を軽く叩いた。

「さ、サッカーやるよ。とりあえず、文香さんと私、鷹宮くんとありますちゃんチームでやりましょうか」



「え、俺と文香がチームじゃないの？」

「憎むべき対象が相手の方がたくさん動けるから。ね、文香さん？」

「……はい♪」

あれ、文香はまだ怒ってるの？ 楽しそうに答えなかった？

しかも、こっちはこっちで気まずい。なんか橘さん怒ってるし。一応、仲良くしようと思つて片手を差し出した。

「……あの、橘さん。頑張」

「文香さんを敵にして……この人と組むことになるなんて……」

「……」

……気まずい。俺、橘さんに嫌われるようなことしただろうか。そうこうしてるうちに、カラーコーンを一定の位置に設置した。

「じゃ、キックオフね」

三村さんがそう言うのと、チョンと文香にパスをした。文香はトラップしようと足を出すのが、見事に股の間を抜け、ボールは後ろに転がった。慌てて追いかけて、足の裏で踏んで自分の方に寄せようとしたが、爪先で蹴り飛ばしてしまい、さらに遠くへ。慌てて追いかけて、それから足をもつれさせて転んだ。

……一人ですいぶん、遠くへ出掛けたなオイ。信じられるか？ アレ、大学生なんだぜ。

「……ふえっ」

あ、泣きそう。慌てて文香の元に駆け寄った。

「大丈夫？」

「……はい」

「パスパスからやる？」

「……いえ、それではダイエットになりませんから……！」

「そういうのは起き上がって涙を拭いてから言おうな。……ほれ」

「……ありがとうございます」

手を差し出すと、素直に受け取って立ち上がった。パンパンと自分の身体を叩く文香の顔を、ハンカチで拭いた。顎のあたりに土ついてるんだもん。

「土とか食べてない？」

「……大丈夫です」

「服の中に土入ってない？ 一応叩いとけよ」

「……すみません、お気遣いありがとうございます」

「ボールは俺が取りに行くから、文香は先に戻ってて」

「は、はい……」

なんてやってると、後方から呆れ声が聞こえた。

「……あの二人、どっちが歳上だっけ？」

「ぐぬぬっ、ふ、文香さんよりも私よりも、いざという時のお姉さん力が上だなんて……！」

「あ、ありすちゃん何言ってるの……？」

本当に何言ってるんですかね……。俺も呆れながらボールを取った。

サッカー、それは手を使わず足のみで敵のゴールにボールを叩き込み、点を競い合う世界的にも有名な球技だ。

俺はさほど詳しいわけではないが、あの手の球技はボールコントロールが鍵となるのだろう。それを練習する基礎練習として、リフティングなるものがある。

昔から友達のいなかった俺は、剣道による基礎体力と運動神経を持ち合わせていた上に、一人で練習出来るリフティングは、体育の授業中、いつでもやれたわけだ。

つまり、ボールコントロールも可能だ。センタリングもかなり綺麗に上げられる。

ボールに追い付くと、文香や三村さん、橘さんが集まっている場所にインフロントで蹴り飛ばした。鮮やかな曲線を描き、三人の元にボールが降ってきた。

完璧なパスで惚れ惚れするぜ……。と、自分に酔っていたが、女子達は何を思ったのか、そのボールを避けた。お陰でバウンド、奥に虚しく転がっていく。

「……え、なんで誰も取らないの？」

戻ってから聞くと、三人とも顔を見合わせた。

「……服汚れるし」

「……胸トラップなんて出来ませんし……」

「……というか、胸トラップなんて女性にさせないでください」

「最後の小さいの。お前は胸トラ嫌がるほど胸は無」

「顔面に靴が飛んできた。最近、色んな女の子から暴力振るわれてツライ。」

顔に手を当てながらボールを取りに行き、今度こそ再開。まずは俺と橘さんボールから。

「橘さん、好きに攻めて良いよ。俺は後ろにいるから」

「言われなくてもそうします」

そう吐き捨て、橘さんはドリブルし始めた。お、さすがはまだ身体が柔らかい小学生。ドリブルもまあまあ上手い。

目の前に立ちはだかる是三村さん。

「行かせないよ！」

「いえ、通りますよ！」

サッカー漫画のようなやり取りに、つい気がなつてしまったのだろうか。橘さんの脚に無意識に力が入ったのがわかった。

それによつて、爪先に強くボールが当たってしまった。トゥーキックは例え女子小学生でもそれなりに飛ばせる蹴り方だ。あの至近距離でそんなものをすれば、目の前の三村さんに直撃するのは必須なわけだ。

「はぐっはぐっ」

ボディを的確にとらえた。蹲る三村さん、立ち尽くす橘さん。目を逸らす文香。

うん、理解したわ。この人達とのサッカーは命懸けだ。偶然、こういう自体が起こるからなおさら、タチが悪い。

俺は意を決して全員に聞いた。

「ねえ、とりかごにしない？」

これならシュートはしないし、変な事故は起こらない。みんな領いてくれ、とりかごを始めた。

その日の夜。文香の部屋に橘さんが来ていた。夕食を食べるため

だ。三村さんもお誘いしたけど「あなた達の夫婦空間に居たくない」と、三村さんには珍しく辛辣なことを言われ、断られてしまった。

まあ、それ以上に誰かの部屋に遊びに行く体力が無かったんだろうが。サツカーは例えどんなに手を抜いてきても、かなりキツイ競技だ。特に足にくる。走って蹴つての繰り返しだから。

それは、三村さんだけが例外ではない。文香の両足が疲労という悲鳴をあげている真っ最中だった。とりあえずソファーに寝転がり、その背中に橘さんが乗って両足をマッサージしていた。

「文香さん、気持ち良いですか？」

「……はい。とても」

……良いなあ、俺も文香の足をサワサワしたい。じゃないや、モミモミしたい。

なんだか橘さんがとても羨ましかったので、負け惜しみのように呟いてやった。

「……母親と娘みたいだな」

「……それは私が歳だと言いたいんですか？」

「いや、構図が」

「鷹宮さん、黙っていて下さい。私と文香さんはどちらかと言えば姉妹です」

「……あれ、ありすちゃん？ それも違う気が……」

……うーん、なんだろ。なんか橘さん怒ってる？ なんか怒らせるようなことしたかな……。

「……ま、今から飯作るわ。何食べたい？」

「……お肉以外が良」

「唐揚げが食べたいです！」

橘さん、君は文香の体重を気にしてるのか否なのか、どっちなのかね？

俺も文香も思わず沈黙してしまい、顔を見合わせた。うん、流石に唐揚げはね。

「……橘さん、今、文香はダイエット中だから……」

「あ、そ、そうですね……すみません」

「……唐揚げで良いですよ」

「えっ!?!」

文香が信じられないことを言った。本気で言ってるの? あなたの体のことですよ?

「……でも……そしたら、文香さん……」

「……大丈夫ですよ。それよりも、ありすちゃんはお客さんですから。ありすちゃんの食べたいものをご用意させて下さい」

「ふ、文香さん……」

イイ話ダナー、なんてテキトーに感動してる場合ではない。飯作るの俺だからな? どうせ、どんな風に作っても戦犯は俺だ。

……まあ、ダイエット意識してるなら、真ん中に唐揚げを盛り付けた皿とサラダを盛り付けた皿を用意すれば、唐揚げは避けてサラダを取るだろう。

あとは、ク○クパッドで低カロリーな唐揚げの作り方探して……あと、唐揚げの量はサラダよりやや少なめにしておくか。白米も文香の分は少なめで……橘さんには牛乳を用意して……うん、オーケー。

料理を完成させ、机の上に運び始めた。居間に戻ると、橘さんが文香の胸の中に頭から埋めて甘えていた。

「……」

「……」

「……ふふ、ありすちゃん。よしよし」

……羨ましい。なんだあの子は。いつもあんな感じだったっけ?

普段は大人ぶってあんなオープンに甘えないと思うんだけど……。

思った通り、俺の目が合った直後、無言で立ち上がって食卓の席に着いた。

「鷹宮さん、食事です」

「満足するまで文香ママのおっぱいに甘えてても良いんだぞ」

「おっ……!?!」

「甘えてません。誰が文香さんに甘えてたんですか?」

あ、そこから無かったことにするんだ……。まあ、良いけど。

「文香も。一応、低カロリーの唐揚げにしてみ……あっ」

「……」

なんか俺を微笑ましい笑みで眺めてた。

「え、なに」

「……なんでもないです」

……何その息子を見る目。俺はあなたの夫ポジじゃないの？

× 釈然としないながらも、夕食を食べ始めた。

×

今日は橘さんはお泊り。俺が目を離してる間だけ文香にここぞとばかりに甘えやがるから、夜遅くなってしまうたから。

今は文香が橘さんを寝かしつけている。今日は俺の寝床はソファーフツぽいな……。

……こういう時、女の花園というのは男の夢だ。そーつと寝室に近付き、聞き耳を立てた。

「……文香さん」

「……ありすちゃん、どうしたんですか？ 今日、とても甘えてくれますね」

「……だって、文香さん。最近……というか、成人式の日以来、鷹宮さんとばかり遊んで……私に、構ってくれないから」

え、そうなの？

「……そう、ですか？」

「はい……。他のアイドルの方とも仲良くなって……それは、仕方ないと思いますけど……でも、もっと……」

ああ、まあゲームやアニメとかいう自然な蔓延病によってみんなと仲良くなったからな。恐らくだけど、前は橘さんや速水さんと仲良かったのが、今は色んな人と仲良くなってきたから、二人にばかり構うことが出来なくなっただろう。

「……では、今日は思う存分、構ってあげます。ですから、千秋くんに当たるのはやめてください」

「……はい」

あ、やっぱり文香もそこは気付いてたんだ。……なんか、バツイチの娘が新しいお父さんと馴染めない、みたいな関係になっただけ

……。いや、文香はバツイチじゃないけど。……文香がバツイチなら、その元夫を東京湾に沈めよう。

「……じゃあ、今日は一緒に寝ましようか」

「……はい」

と、言つてモゾモゾと布団の中に入る音がしたので、とりあえずもう離れた。

いや、これ以上は野暮とか思つたんじゃない、羨ましくなっちゃうから。フォ○トナイトやろう。皆殺ししよう。

文香の垢だけど、今更そんなの気なるような仲じゃないし。

しばらくショットガンとハンティングライフルとアサルトライフルで暴れてると、後ろの扉が開いた。

「……うるさくてありすちゃんか眠れません。ヘッドホンしなさい」  
「……」

黙つてヘッドホンをつけた。なんか文香まで俺に冷たい気がする。とりあえず無双。スクワッドにソロで挑んで、見つけたチームに片っ端から喧嘩を売つて暴れる、当然、ビクロイなんか取れないが、他のチームを最低でも二人は殺すので、相手にとっては迷惑極まりない。

眠くなるまで暴れ回った。

## ダイエット（4）

翌日、文香のマンションの屋上。ダイエット一行は剣道をする事になった。まあ、素振りだけだが。

俺としてはうちに竹刀あるし別に良いんだけど、これダイエットになるの？っていう不安はある。

まあ、それもこれもうちにある竹刀を文香に見られたのが原因なんだけどな。キリト大好き文香さんが「キリトさんのような強さは剣道から学ぶべきだと思います」とか抜かしてた。あいつ、かじった程度しかやってねえからな。

で、まあ剣道の素振りもちゃんと振方があるため、今は俺が説明しているのを、三人が体育座りして聞いてきた。

「まず、竹刀は左手で持つように。柄は横からではなく上から握る。肘は変に張らずにあくまでリラックスさせるように軽く曲げる。振る時は、この腕の形を保ったまま振り上げ、相手の頭部に向かって手首の返しを効かせて振り下ろす」

まずは基本的な振り方に、文香と三村さんは頷く。橘さんだけ、不服そうな顔をしていた。まあ、文香を取られた上に太らせた張本人だから、俺に物を教わるのは癪なのだろう。

でも、ちゃんと聞いてくださいいね。一応、武器を振るわけだし。

「足は、右足の踵のあたりに左足の爪先が合うようにして、左足の踵は下敷きが一枚、入るくらい分だけ浮かせる。振る時は左足で地面を蹴って右足を大きく前方に摺り足で一歩出る。その時に竹刀を振り上げ、左足が追いついた時に竹刀を振り下ろす」

実演しながら説明すると、文香と三村さんから「おおく……」と声が上がった。橘さんも口にはしないものの、目を輝かせている。前まではこういうので照れることもあったが、今は割とそうでもない。だってもう剣道やめたし。

「……すごいです、千秋くん」

「剣道やってたってホントだったんだ……。なんかそれっぽい」

「初めて鷹宮さんをカッコ良いと思いました」



……こいつら全員、頭叩き割ってやろうか、と思う程度にはイラつとした。まあ、それで実行に移したり、本気で怒ったりするほど馬鹿ではないが。

「二発目は左脚を退げると同時に振りかぶり、右脚がさがると同時に振り下ろす……というのを繰り返す。質問は？」

「はいっ」

橘さんが元気よく手を挙げた。

「何？」

「とてもカッコ良いですが……ダイエツトになるんですかこれ？ あまり激しく動いていないように見えたのですが」

「一振りはそうでもないかもな。でも、これが何本も続くとキツイんだよ」

「そうですか？」

「マラソンだって一歩走るのは楽だけど、それが何歩も重なるからきついんだろ。そういうことだ」

「なるほど！」

あ、今ので納得しちゃうんだ。相変わらず、橘さんはアホの子かわいいい。

「まあ、とにかくやってみ」

その一言で、三人とも竹刀を振った。まあ、形だけならそれなりになってる。

「あ、振りかぶった時に剣先が落ちないように。あくまで立てておいて」

「は、はい……！」

じゃないとキツさが足りないと思うし、実際、剣道でも剣先は下げない。

「……結構、難しいですね……！」

「でも、慣れればそうでもないよ」

「はい。鷹宮さん、何回振れば良いですか？」

「いや、橘さんはやらなくて良いけど」

「いえ、私は文香さんのダイエツトのお付き合いですから」

「……あの、ありすちゃん？　あまり大きな声で言わないで……」  
外だから……」

俺よりもデリカシーないのね、橘さん。

しかし、何回、か……。まあ、ダイエットとはいえ何回もやってると両腕と脹脛パンパンになるからな。

「……そうだな……。300回にしようか」

「……はっ？」

「……えっ？」

「……んっ？」

うお、なんだ三人揃って間抜けな声出して。

動きを止めた三人がキョトンとした顔のまま聞いてきた。

「え、何？　てか、剣先を地面に着けるな」

「……今、何回と？」

「300」

「ほ、本気じゃないよね？　鷹宮くん……」

「え、やっぱ少ない？」

「……逆です。そんなに、ですか？」

「割と減らしたと思うんだけど……俺は全盛期はこれ500本と早素振り500本振ってたし」

「待って下さい、鷹宮さん」

さっきまでとは違って、ジト目で俺を睨む橘さん。

「それは剣道をやっていた鷹宮さんの話であって、私達には厳しいと思います」

「んー……じゃあ、150本にして20本ずつとか分割して良いから」

「あ、それなら……」

「うん、やれそう」

「……フォームを崩すなよ。少しでも崩せば楽になる。ダイエットにならんから」

その一言に、二人はビクツとする。唯一、反応がなかった橘さんは、無言で俺の隣に歩いてきて、竹刀を手渡して来た。

「……あ、ありすちゃんはやらないんですか？」

「私はダイエットの必要ありませんので」  
「……」

無言で二人は素振りを始めた。それをぼんやり眺めてると、隣の橘さんがくいつくいつと袖を引いてきた。

「何？」

「あの、剣道にはこれしかないんですか？」

「どゆこと？」

「例えば、横切りとか……」

「ああ、相手の胴を打つ技もあるけど」

「知りたいです！ カッコ良いです！」

「……カッコ良いの好きなの？」

「はい！ クールなアイドルが私の目指す理想形ですから！」

……うーん、剣道はクールさからかけ離れてるんだけどな……。イヤーって奇声上げるんだぜ。

まあ、でも橘さんが学びたいと思うのなら別に悪いことではないんだろう。教えてあげようかな。

「……相手の横腹を、面と同じように振りかぶって、斜めから当て、隣を通り過ぎながら振り抜くんだけど……俺も正直、胴はあんま使わんからなあ……」

「じゃあ、何が得意だったんですか？」

「小手」

「こて？」

「そう」

「……なんか、鷹宮さんらしくて地味ですね」

「バツカお前、むしろロマンだぞ。小手は胴や面と違って相手は死なない、つまり不殺の魂の上に敵の動きを先読みし、武器を持つ手を切り落とすんだから」

「……た、たしかに……！」

「カッコ良いだろ」

「カッコ良いです！」

うお、尊敬の眼差しが……。や、まあこれはカッコ良いからね。尊

敬されても仕方ないね。

「教えて下さい！」

「ダメ」

「なんでですか!?!」

「剣道はまず面からだから。面打たなかったら他の技も打てないよ」

「ううう……さ、流石に一から剣道を習うつもりは……」

「それに、クールかどうかは結局、個人個人の性格次第だから」

「……な、なるほど」

「今、竹刀振ってる大学生の方見ろよ。大人しそうでクールな雰囲気、出してはいるけどアニメオタクに成り代わり、歪んだ性癖をぶごっ」

「……すみません、手が滑りました」

竹刀が眉間に飛んできた。

「……今のは鷹宮さんが悪いです」

「知ってる……」

素振りを再開する文香と三村さんをみながら、眉間を抑えて立ち上がった。

「じゃ、俺ちよつと買い物行ってくる……」

「え、私達素振りしたまま?」

「や、湿布買いに」

三村さんの問いに切り返すと、橘さんが俺の隣で顔を見上げて来た。

「私も行きます」

「は?」

「この前の鷹宮さんのように、お二人に飲み物を買ってあげたいです」

「ああ、なら一緒に行こうか」

「はい」

そう言つて、二人で屋上を後にした。

……あ、文香は怒ってないかな。あの人、俺が女の子と仲良くすると直ぐに機嫌を悪くするから……。

恐る恐る後ろを見ると、意外にもニコニコしていた。あれは……自分が仲良くしてる子同士が仲良くしてくれて嬉しい、ってところか?

まあ、怒ってないなら何よりだ。そのまま二人で出掛けた。マンションを出て、のんびり歩く俺の横をひよこひよこついてくる橘さん。そういえば、橘さんと二人で出掛けるのは初めてだな……。

「橘さん、近くのドラッグストアで良いか？」

「はい。元々は鷹宮さんの湿布を買いに行くんですから」

自らクールを自称してるだけあって、その辺はしつかりしていた。ドラッグストアはジューズとか安いしな。

まあ、流石に買ってもお茶だと思うけど。ジューズは太るだろうし。

目的地に到着し、まずは入店。

「湿布探してくるから、ジューズとか持ってきて良いぞ」

「いえ、あくまで鷹宮さんのお買い物のお手伝いです。勝手な行動はしません」

うーん……そんなに堅くならなくても良いんだけどな……。まあ、学生のうちから集団行動は学んでおいた方が良く、ここはあえて黙ってるが。

湿布を探してキョロキョロ辺りを見回していると、冷蔵食品の場所に来てしまった。これなら、先に飲み物から確保した方が良さそうだな。

「橘さん、先にジュー……あれ？」

隣を見たが、橘さんの姿は無い。少し離れた場所で、プリンをじっと見ていた。

……勝手な行動をしないと何なんだったのか。まあ、まだ子供ってことだな。仕方なくそつちを優先した。

「なんか食べたいのか？」

「っ、い、いりませんっ」

「プリンくらい良いよ。……その代わり、文香と三村さんの前で食べるのはやめてやれよ」

「うっ……で、ですから……！」

「食べたいものは食べたいって言え。子供……いや、未成年のうちから我慢しても良いことないよ」

「バカにしないでください。子供と未成年がほとんど同じであることくらいわかります」

チツ、半端に賢いやつはこれだから……。

「……ですが、お心遣いを頂いた時、断るのも失礼だと聞きました。では、お言葉に甘えさせていただきます」

お、おう……じゃあ、なんでさつき断ったのん？ あ、今思い出したのか。じゃなきやただの情緒不安定。

「で、どのプリン？」

「キャラメルです」

「ミルクとか抹茶もあるけど」

「あ、ほんとだ。むむむ……悩みます」

「もしアレなら、全部でも良いよ」

マジで!?？ みたいに目を輝かせてこつちを見たが、すぐにハツとしていつものクール(笑)な表情に戻し、わざとらしい咳払いをした。「い、いえ、そんな……私までダイエットの必要が出てきてしまうので……」

「あ、それもそうか……。じゃあやめとく？」

「うう……で、ですが……」

……まあ、そこは自分で決めるところだ。と、言いたい所だが、橘さんはまだ子供だし、自分で決められないだろう。

なので、ここはひとつ助言をしてあげることにした。

「二つまで選べよ。両方食べてみて、気に入らなかった方を俺が食べるから」

「ええっ!?？ い、良いのですか？ そんな贅沢な……!」

「文香が可愛がってる子なら、俺も可愛がってあげたいし、好きなだけ贅沢しろよ」

「……うう、さ、流石文香さんが選び、太らされた人……。甘やかすのが上手い……」

人間きの悪いこと言うな。

むむむつ、と悩み、唸った橘さんは、抹茶と普通のを選んだ。そこで抹茶を選ぶのがまた子供っぽい。最近抹茶味の食品が増えて、デ

ザートみたいなお扱いを受けるようになったからなあ。俺はミルクプリンのが好きだ。

続いて、飲み物も購入しなければならぬ。まあ、それは余り考えずにお茶を二本と、橘さんの分のミルクティー、俺のサイダーをカゴに入れ、最後に湿布を見に行つた。

打撲とか打ち身よりも、筋肉痛とかに効く方だ。

「鷹宮さん、打撲とかはこつちですよ?」

「や、別に俺のはいらんし」

「へ?」

「文香と三村さんの分」

「なんでですか?」

「や、橘さんが言つてた通り、素人が竹刀を百本単位で振ると腕が死ぬから」

「な、なるほど……」

俺も素振りしまくつてた時の最初の頃は腕死んだなあ。サイタマよろしく根性で頑張つた。

でも、あの二人は俺と違って剣道が強くなりたわけではないし、そこまでやる気力は無いだろう。

湿布もカゴに入れると、レジに並んだ。すると、隣の橘さんが言つた。

「……鷹宮さん、すごいです」

「? 何が?」

「優しくて、気が利いて、それでいてクールで……大人の男性つて感じがします」

「え、そうでもないよ。速水さんからガキっぽいとか言われるし、ゲームとかだと負けず嫌いで、フットナイトは一度始めたらビクロイ取るまでやめないし」

「いえ、私にとっては素晴らしい方だと思います。甘やかし過ぎる面がないとは言えませんが、私は見直しました」

「いや、そんな見直したとか言われても……」

な、なんか評価がうなぎ登りなんだけど……。この子、チヨロすぎ

ない？ 大丈夫？

「千秋さん、とお呼びしてもよろしいですか？」

「え？ いや、まあ良いけど……」

「では、改めて文香さんをよろしくお願いします、千秋さん」

「ん、お、おう……」

……なんか、改まってんな……。しかし、小学生くらいの女の子に慕われるのは悪い気はしない。

なので、調子に乗ってみることにした。

「肩車してあげようか？」

「本当ですか？」

あ、思いの外、乗ってきた。冗談のつもりだったんだけど……。

「え、良いの？」

「はい」

「じ、じゃあ、失礼して……」

抱え上げて肩車した。

うーむ……自分で言っておいてあれだけど、非常に恥ずかしい。幼女を肩車しているような犯罪感が……。

「……千秋さん、身長は何センチですか？」

「へ？ えーつと……この前少し伸びて170ちよいくらい」

「なるほど……お兄さんっぽいですね」

文香という彼女が出来てからは三食作るようになったから健康や発育に良いんだよな。高三にもなって発育かよ感はあるけど。

「橘さんも焦ることなんかないぞ。身長なんて普段、食べてるものと睡眠と遺伝だから。それさえキチンとしてれば、20歳までの間にか伸ばせるから」

「……そ、そうですか？」

「そう。だから、今のうちによく食べてよく運動してよく眠りなさい。あ、ただし過度の筋トレは控えるように。成長止まるから」

「は、はい！ 分かりました！」

うん、素直で可愛い。俺にもこんな妹が欲しいぜ……。

……にしても、あれだな。小学生でも太ももは柔らかいんだな



……。なんか、こう……短パンを履いてきてるからか、顔の両サイドが異様にフニフニしてて……。

って、いかんいかんいかん！俺はロリコンか！文香の太ももを思い出せ。あの真つ白でお淑やかなのに、何処かエロさと色っぽさを兼ね備えている太ももを……ふう、うん。落ち着いた。

マンションに到着し、屋上へ。扉を開けると、二人はこっちに背中を向けて、のんびり座って温かいお茶を飲んでいた。

「……そうですか、学校では真面目に勉強してますか」

「はい。文香さんのために頑張ってますよ。意外と、ノートとか綺麗にとつてましたし」

「……良かったです、それを聞いて安心しました。千秋くん、成績はあまり良くなかったから。かな子さんはどうですか？」

「私は、まあボチボチです。指定校推薦狙っているので」

「……なるほど。成績、良いんですね？」

「普通ですよ。まあ、鷹宮くんがはじめに授業を受けていてくれるから、見張る必要も無くて気が散ることは……」

まるで親と先生の二者面談みたくなっていた。多分、インターバルで話し込んだんだろうなあ。

何はともあれ、ダイエットしてないと、竹刀を壁に立てかけてあるというのはいただけじゃない。竹刀は床なり地面に置くものだ。この湿布は必要なかったわけだ。

「オイ」

声を掛けると、二人揃ってビクツと肩を震え上がらせる。ギギギツと壊れたロボットみたく振り返ると、橘さんを肩車した俺が立っている、文香は一瞬だけ眉間にしわを寄せたが、俺の冷たい視線に負けて目を逸らした。

「た、鷹宮、くん……？ち、違うからね？……その、まだ30本しか振ってないのは……！」

「あ、か、かな子さん……！」

「あつ……」

……なるほど、半分も振ってないのね。まあ、俺のダイエットじゃ

ないし、やるやらないは本人次第だもんな。俺が怒るのはお門違いだ。

「橘さん、やっぱりプリン目の前で食べちゃって良いよ」

「プリン!??!?」

「分かりました」

橘さんは少しイラっとしてるようで、容赦なくプリンを開け、店員さんにもらったプラスチックのスプーンで掬った。

その様子を羨ましそうに眺める二人。目を輝かせて、三村さんはヨダレを垂らしそうにしていて、文香は「千秋くんの上でプリン……」とか呟いていた。

そんな餌を前にしてお預け食らってる犬状態の二人に、とりあえず言ってやった。

「先に500本振り終えた方に一つ買ってきてやるよ」

大慌てで竹刀を振り始めた。

「橘さん」

「なんですか?」

「部屋に戻ろうか」

「はい」

部屋でのんびりプリンを食べた。

## ダイエット (5)

アレから、数日が経過した。文香も三村さんも、それはもう一生懸命、運動に取り組んだ。

剣道の後は、両腕が二人とも死んでるため、普通にマラソンした。というか、そこから先は「マラソンが一番効くんじゃね?」となり、しばらくマラソンを続けるハメになった。

その間、俺は自転車。楽出来ると思っただけど、橘さんが「疲れました」と言うので、橘さんが自転車で乗り、俺は自転車を押して走った。多分、文香達よりも疲れたと思う。

で、その次の日のマラソンは橘さんをおんぶしながら走り、次の日は橘さんを肩車しながら走った。だってすごいお願いされるんだもん。

当然、それによって文香の嫉妬のボルテージもうなぎ登り。

や、でもさ……橘さんみたいに大人ぶってて実は素直な可愛い子にお願いされたら断れないでしょ……。

そんな一緒に暮らしてて気まずい空気の中、いよいよ体重を計る日となった。文香のマンションで、体重計が用意されていた。

「……いい、いよいよですね、文香さん……!」

「……はい」

と、言う会話をおそらくしてるんだろうが、俺はマンションの部屋の外に追い出された。「女の子の体重を見る気ですか?」「デリカシーとプライバシーって言葉知ってます?」との事です。

「千秋さん、ここから先はどうしたら良いですか?」

「え? あー、えつと……」

しかも、橘さんがSwotchを持って俺についてきたもんだから、尚更嫉妬していることだろう。

ドアの向こうから感じる殺気を耐えながら、教えてあげた。建築の練習をしたい、とのことだ。

「敵を見つけたのね。なら、階段と壁を交互に作って接近して、頭取ってショットガン。相手も気付いて階段と壁作ってくるようなら、こつ

ちは櫓作りながらさらに上とって」

「わかりました」

……しかし、飲み込み早いなこの子。割とサクサク動かしてる。こんな子が妹ならなあ……。……。

「おおおお！ や、やったー！」

突然、部屋の中から声が聞こえた。何事かと二人で玄関を見る。や、まあ体重が少し減ってたとかそんなんだろうけど。

と、思ったのもつかの間、ドタドタと足音を立てて、玄関が開いた。

「や……やりました、千秋くん！ グラム単位でしたが落ちてました！」

叫びながら、俺の方にガバツと飛び付く文香。相変わらず、柔らかいオツパイしてる。サツカーとか絶対、胸トラで足元に落とせない。

「お、おう……おめでどう？」

「ありがとうございます！ まだまだ元の体重には戻っていませんが、今日はお祝いして欲しいです！ よろしくお願いします！」

「わあい、リバウンド宣言おめでとう」

痩せた直後にたくさん食べたっておかしいよね。また同じ苦しみを味わいたいってことかな？

……いや、それよりも、だ。俺にすごい怒ってたのにグイグイくっついて来るな。情緒不安定か？

「……あ、あの、文香？」

「なんですか？」

「……怒ってないの？」

「へ？」

間拔けな声を出してしばらく固まった後、ハツとした文香はご飯と咳払いした。

「っ、べ、別に……ち、千秋くんのが嫌いになったわけでは、ありませんから……。ありすちゃんど、千秋くんが仲良くするのは……嫌なわけではありませんし」

ただ、と続けて言った時だった。

「……も、もう少し……私に構ってくれても、良かったのではないかと……」

「千秋さん！ やっつけました！」

「ん、ああ、おめでとう。でも、敵の武器拾ってる時も油断するなよ。狙われやすいから」

「は、はい！」

「銃弾と資材だけは取った方がよいよ。まあ、自動で拾ってくれるから、通るだけで良いと思うけど」

「分かりました！ 千秋さん、教えてくれるの上手ですから頼りになります！」

「いやいや、そんな事無いってー。謙遜しちゃう橘さん大人だなー」  
「えへへく……」

橘さんの頭を撫でてあげたときだ。ぞくつと背筋が伸びた。

……あ、ヤバい。なんか今、すごい殺気が、目の前で……。

「……千秋くん……！」

文香が、俺をすごく睨んでいた。睨んでる、と言っても眉間にシワは寄っていない。ただただ暗く、虚ろな目で俺を眺めていた。

「……あ、ふ、文香……」

「……千秋くんは、私との仲直りでありすちやんのゲーム……どちらが大切なんですか……？ そりやありすちやんでしようね……何故って、たった今、立証されてたんだから答えるまでもないですよ……。そうですか……千秋くんにとって、私ってその程度の存在だったんですね……よく分かりましたよ……」

「文香、落ち着」

「もう知りません。反省するまで私の部屋は出禁にします」

「えっ……」

「さよなら」

玄関を閉められた。

え、ちよつ……嘘でしょ……？ 俺、ここ最近は……というか半年くらい前から着替えとかほとんどこっちにあつて自分のアパートにはジャージくらいしか……。

「ちよつ、文香！ ごめんなさい！ 今日、美味しいの……頬つぺた落ちるほど美味しいもん作るから！」

「知りません」

「げ、ゲーム！ モンハンでもフォオトナイトでも朝まで付き合うから！」

「知りません」

「な、なんでも……睡眠も風呂もトイレもずっと一緒にいるから！」  
「死にます？」

あれ？ 最後、なんか別の言葉が聞こえたような……。ど、どうしよう……文香のいない生活なんか……絹旗最愛のいないアイテムみたいなものだ!!？（二次元ではロリコン）

「話は聞かせてもらいました、千秋さん……！」

「！ た、橘さん？」

「私にお任せください。こう見えて、私は文香さんには唯一、下の名前呼びを許しているほど仲良しですから！」

ん？ それ文香↓橘さん、じゃなくて、橘さん↓文香じゃない？

てか、割とみんな下の名前で呼んでたような気もするし……。

俺の疑問など知る由もなく、橘さんは文香の部屋の中に入っていた。5秒後、プリンを持って出て来た。

「あ、どうだった？」

「スイーツをいただいたので帰ります」

「……」

……懐柔されたか……。やはり、所詮お子様だな……。

いや、遠い目をしてる場合ではない。何とか許してもらわないと、死んでしまう……！ 間に合わなくなっても知らんぞー！

頭の中をいろんなことが駆け巡っていると、かちやつ……と控えめに玄関が開いた。三村さんがひよこつと顔を出していた。

「……み、三村さん？」

「しーっ」

人差し指を口の前で立てると、ちよいちよいつと、手招きした。それだけで「音を立てるな」ということを理解したので、とりあえず慎重に足を運んで中に入った。

で、三村さんに案内されて洗面所へ入った。

「もう……何してるの？ せっかく、仲直りできそうだったのに」  
「……すみません。つい、お兄ちゃんスキルがオート発動して……」  
「何がお兄ちゃんスキルよ。どちらかと言うと弟気質の癖に」  
「……」

本当すみません……。

「とにかく、私がなんとかしてあげるから、ちゃんとお話しして。ね？」

「……プリンで吊られないだろうな？」

「私とも喧嘩したいの？」

「あ、いえ冗談です。怒らないで」

三村さんは一度、文香のいるリビングに戻った。

しばらく何か話した後、カチャツと控えめに扉が開いた。

「三村さん。どうだっ……」

「……私です」

「……」

……あ、今のご機嫌度が10下がった。

「……す、すみません……」

「いえ、上がりなさい」

言われて、部屋の中に案内された。

……うー、やっぱり緊張するなあ。文香怒ると怖いからなあ……。

三人で席に座ると、三村さんが立ち上がった。

「じゃ、私も帰るね。鷹宮くん、ダイエツト付き合ってくれてありがとう」

「え？ 飯食って行かないの？」

「今度またご馳走してね」

そう言って帰宅されてしまった。あ、俺と文香一対一で話すんだ……。

「……それで、反省してるんですか？」

「あ、はい。とても。や、橘さんとはこれからも仲良くするけど……これからは、もう少し、こう……節度を持って、文香が嫉妬しない程度に、自重します……」

「……はい」

「……あれ？ 思ったよりあつさり……。三村さん、何を言ってくれたのか知らんけど、ありがたいなあ。」

「ま、解決したのなら、今日はとびきり美味しいもんでも作ってやるか。三村さんにもまた今度美味しいもん作ってやろう。」

「……では、許してあげる代わりに、言うことを一つ聞いてください」「えっ？」

「……こ、今夜は……。その、うんと構ってもらいます、から……」

「えっ？ あ、そう」

いつもの事じゃん……。と、思ったこの時の俺は、甘かった。文香と出会ってあと一ヶ月で一年、文香がどう変わったのか。それを、いつも一緒に暮らしていた俺には分かっていなかった。

×

×  
とりあえず、ゲーム。いつもの流れだ。今日は二人でフォートナイト。

SwiOchの購入により、二人でプレイできるようになった。

もちろん、文香がプレ4だが。やりやすい方でやらせてあげた方が良いでしょうってことで。

……問題は、文香が俺の膝の上に座っている、ということだ。重いわけではない、むしろ軽い。しかし、この……。何？ ゲームしにくいんですけど……。

「ふ、文香さん……。？ どうしたの？」

「……なにが、ですか？」

「いや、膝の上に……」

「……ダメですか？」

「いえ、ダメではないんですが……」

……なんか、こう……。ゲーム以外も色々やりづらい。なんだろうな……。この、彼氏というより奴隷感……。

「……ふふ、千秋くん。どこに降りますか？」

「えっ？ あ、あー……。えっと、じゃあ農場」

文香が農場好きなんだよね。風景が牧歌的とかなんかで。その牧歌的な風景の中、アサルトライフルとかSMGとか乱射しながら殺



し合いするんだけどな……。

「家で良いの？」

「はい」

「じゃあ、俺屋根降りるから」

「……では、私は二階の屋根裏の屋根で」

「はいよ」

金箱を取りに行った。丸い印がついてる所をツルハシで殴り、屋根を壊すと中に侵入した。武器を確保……青バーストアサルトか、あんま得意じゃないなあ。まあ、青だから何とかなるか。

「あら、ポンプショットガン」

……文香の口から銃器の名前が出てくるのは俺の所為ではない、俺の所為ではない……！

そう頭の中で言い聞かせつつ、武器を持って家の中を走り、文香と合流した。

「次どうする？」

「……赤い建物行きましょう」

「はいはい」

他に、家の中の個室を漁りながら他の種類の武器と資材を確保し、赤い倉庫みたいな建物に走る。

その途中、射撃がきた。赤い倉庫からだ。慌てて壁を貼り、階段を作りながらさらに壁を作り、頭を取りに行つて上からバーストアサルトを乱射した。

その隙に文香も同じように建築で突撃し、ショットガンで頭を一発で撃ち抜いた。連射性はない代わりに威力が尖ってるポンプなので、頭吹っ飛ばせば一撃だった。

「サンキュ」

「……いえ、こちらのセリフです」

「残り一人な」

「……はい」

そう返事をした文香は、楽しそうに微笑んだ。……でも、なんだろうな。なんか、今日はやけに文香が揺れるな……。まるで、俺にお尻

を押し付けてるような……いや、文香に限ってそんな……ここ最近「宏×樺……いえ、やはり逆な気も……」とか言ってる文香だけど、そんな自分の体を使ってまで……。

なんか、一々俺の性欲が掻き立てられたりしたが、そのままゲームは進み、何とかビクロイは取れた。俺の体感だけど、デユオつてソロやスクワッドに比べて上手い人少ないんだよな……。

「……ふう、勝てましたね。千秋くん」

「ん、お、おお……」

それよりも、なんか膝の上の文香の所為で集中できなかつた方がキツかつたな……。なんか背中を預けてきて、文香の身体の前でゲームやったり、その俺の腕に文香の胸が当たったりしてたし。わざとなんじやないか、と思うほどには。

「……今日はもう寝ましようか」

「え、もう良いのか？」

「……はい。夜は、まだ長いですから……」

……え、何そのセリフ。なんか、まるでまだこれから寝かせてもらえない、みたいなの……。

「……我慢してたんですからね。太った体を、千秋くんに見せるわけにはいかないのよ」

「……えっ？」

「……お先に、シャワーを浴びて待っています」

そう言っつて、文香は洗面所に入っていった。

……え、もしかしてこれ……誘われてたのか……？ な、なんて慣れてないような誘い方……いや、俺も慣れてるわけではなかつたんだが……。

……まあ、実際、ここ最近、俺も文香が殺伐としてそんな雰囲気じゃなかつたのもあつて我慢してたし……。その、誘い……乗らせてもらおう。

そう決めて、俺も洗面所に行こうとした時だ。ポケットのスマホが震えた。

R i k a ★ 『おめでとー!』

「…………あ、俺今日誕生日だ」

…………誕生日だった。

## 誕生日（1）

事務所のラウンジ。そこで、私は一人、頼杖をついていた。普段ならこの時間は本なりラノベなり漫画なりエロ同人なり読んでるわけだけど、今日はどうにもそんな気分になれなかった。

何故なら、最近、千秋くんの様子がおかしい。機嫌が悪いとかではなく、カレンダーを見ると私の方をチラチラと目配せし、かと思っただらソワソワしたりしてる。

模試の予定だろうか？　しかし、千秋くんにそんな自主性があるとは思えないし、何より模試を受けるのは七月からと決めていた。

ゴールデンウィークが終わったことに絶望してるのかな？　たしかに連休中は私のダイエツトに付き合わせてしまったし、何処にも旅行みたいなのはできなかつたけど……そもそも引きこもり感のある子だし、そのくらい気にするタイプでもない。

「……何か悩みでしようか」

……それならば、私に相談してくれば良いのに……。

考えれば考えるほど、私の気は沈んでいった。まあ、彼は人の為、あるいは自分のためになら平気で嘘をつく子だし、従って自分の感情も隠すから、相談されないのは何となく想像はできるけど……。

……もう少し、私に依存させた方が良いでしょうか……いえ、変な意味ではなく。

「あれ、文香ちゃん。何してるの？」

「……あ、美嘉さん」

ちようど良いところにいらしてくれました。確か、美嘉さんは千秋くんの従姉妹のはず……。こういう時のことを知ってるかも……。と、聞こうとしたら先にあちらから仰っていただけだ。

「所でさ、この前は千秋の誕生日だったけど、何あげたの？」  
なるほど……全てが腑に落ちた。

「……美嘉さん」

「何？」

「……今から、行きましょう」

「え、まさか……プレゼント……」

「……ダイエツトで、忙しくて……」

「あーなるほど……じゃ、頑張っ」

「一緒に」

「アツハイ」

××進んで協力を提言してくれた美嘉さんと外出した。

××事務所を出て、二人でショッピングモールに来た。こうして同年代くらいのお友達と一緒に出掛けるのは何度来ても慣れない。特に、普段はオシャレ音痴な私をみんな着せ替え人形にするから尚更だ。

しかし、今日の予定は千秋くんへの誕生日プレゼントと誕生日パーティーの準備なので、比較的、安心はしている。

「で、何を買ってあげたいの?」

「……婚姻届か指輪でしょうか……」

「真面目に」

真面目ではあるのですが……それを言ったら怒られそうなのでやめておきましょう。

「……そうですね。やはり、ゲームやアニメ、漫画関係ではないものでしょうか」

「自覚があつてて言ってるのか分からないけど、それ全然絞れてないからね」

……む、確かに。世の中はアニメや漫画だけじゃない。

でも、それ以外だと何が良いのか難しい。どうしましょう、本当に……。

「アクセサリーとかあげたら? あいつ、オシャレに無頓着だからなるほど……あくせさりー」

「……ジョーカーのマスクとか……?」

「なんでゲームに戻るのよ。てか、そんなん使えないでしょ」

「……では、モナちゃんのパチンコとか……」

「ペルソナから離れて。最近、ハマってるのはよく分かったから」

以前から面白いとは聞いていましたが、まさかアレほどとは。ちな

みに、私はモナちゃんが好きです。

「まあ、昔はオタクじゃなかったんだけどねー。……誰の所為であんなったんだろうね?」

「……むしろ、私は感染させられた側なのですが……」

「分かってるって。ま、男への誕プレなら任せてよ」

「……はい。処女ビッチの卒業を目指して色々、勉強なさってる美嘉さんなら、安心して任せられます」

「……帰っても良い?」

「なんでですか?!?」

何故、そんな急に機嫌を損ねて……。……いや、私でも怒ること言ってしまったかもしれない。あとで謝らないと。

「……あの、それより何をあげれば……」

「そこは自分で考えなきゃ。多少、アドバイスはするけど、何をあげたいかまで口は出さないよ」

「……なるほど」

やはりか。しかし、千秋くんの喜ぶもの……。うーん。これから夏ですし、海パンとか……。いや、今年は受験生ですし、海に行く暇なんてないですよ。

「……参考書?」

「やめてあげて!」

何故か美嘉さんから悲痛な声が上がった。まあ、受験は大変ですからね。確かにやめた方が良くもありません。

「……では、英単語帳とか」

「やめてって言ってる意味分かってる?!? 勉強関連はノーで!」

ダメですか……。む、待ってください。勉強がダメなら、勉強の息抜きになるものを用意すれば良いのでは?」

「……やはりゲームでしょうか」

「なんで戻ってくるの……」

「……いえ、勉強の息抜きになりそうな物だと思います……」

「あーなるほどね。……でも、ゲームはねえ」

「……はい。ですが、ゲーム以外で息抜きというのも……」

「何でもあるでしょ。例えば……そうだな、騎空士とかは？」

「え、それゲームでは……？」

「え？ 騎空士って職業でしょ？」

「……」

……いつのまにか私を超える逸材に……いや、口を挟むのはよしておきましょう。

「……すみません、電子機器関係は除いて欲しいです」

「あー、なるほどね。じゃあ、それこそ文香ちゃんの得意分野なんじゃない？」

「？」

「本、とか」

本？ そんなもので良いのでしょうか。私なら喜びますが、彼は別に本を読むわけでは……。

「それは……」

「別に、本じゃなくても良いんだよ。ブックカバーとかでも。本関連の何かなら息抜きになるし、何なら知識にもなるし、合間に読めば良いから息抜きにもなるでしょ？」

そう言われれば、確かに受験生にとってこれ以上ないものに聞こえるかもしれませんが……。

でも、何となく小さい気もする。プレゼントは値段ではなく気持ちとはいえ、彼が私の誕生日にくれたものはストール、手作りケーキ。その上、パーティー会場も揃えてくれた。

なのに、私は本、或いはブックカバーで良いものなのだろうか？

「……うーん、本……」

「まあ、アタシが決める事じゃないからね」

……少し、シミュレートしてみましようか。

題く千秋くんが、書にハマったら

千秋『……』

文香『……』

千秋『ねえ、文香、ここんどこどう言う意味？』

文香『ん？ どれですか？』

千秋『この表現なんだけど……今夜は月が綺麗ですねって』

文香『ふふ、そこですか。お姉さん……いえ、お嫁さんが教えて差し上げましょう。それは、プロポーズです』

千秋『へー、読書って面白いね。お姉ちゃんが教えてくれるから尚更』

文香『ふふ、そうでしょう?』

千秋『ところで……文香』

文香『?』

千秋『今夜は、月が機雷ですね』

文香『……/ /』きゅんっ

く完く

「……悪くないですね。いやむしろかなり良い」

「いや悪いでしょ。何、月が機雷って」

「し、思考を読まないでください!」

「口から漏れてたけど」

……これから妄想するときは気をつけないといけませんね。

それはともかく、本は良いかもしれません。本とブックカバーと手作りの葉と……あと、パーティーやケーキの準備も全てお返し出来るものはお返しした方が良いでしょう。

さて、どんな本にするか……官能小説は論外として、やはり私のオススメ……難し過ぎず、初心者にも手を出しやすいものといえば、やはりミステリーでしょう。FGOもやってみましたし、ホームズとか良いかもしれません。

「……初歩的なことだ、友よ」

「そりゃそうだよ、口から漏れてたの聞こえてただけだし」

「……」

別のことを考えてて思わず漏れた言葉に反応されてしまった。恥ずかしいのでやめて下さい。

「……本にしましょう」

「じゃ、本屋行こうか」

「……いえ、本はうちで買うので、ブックカバーと誕生日ケーキと、誕



生日パーティーセットを」

「リョーカイ」

……よし、方針は決まった。あとは買うだけですな。

「……とりあえず、ドレスを買いに行きましょう」

「は？　なんで？　着させるの？　アタシの彼氏にも参考にして良い？」

「いえ、千秋くんの誕生日会ですから。……今から高級ホテルの予約は間に合うでしょうか」

「何処まで盛大にやるつもり!?　やめてあげて！」

ダメですか……。まあ、私の部屋でやりましょう。そのための飾り付けも買わないと。

「では、まずは……」

「でも、誕生日に祝う側もお色直しってのは悪くないよねー？」  
「え？」

あれ、なんか悪寒が……と、狼狽えたのもつかの間、美嘉さんの左腕が私の両腕をガツチリとホールドした。そして右手の親指が指す先には、如何にも美嘉さんが好きそうな洋服屋さん。

あ、この流れは……。

「じゃ、行くっか」

「……お、お手柔らかに……」

×着せ替え人形にさせられた。

×誕生日パーティーは、もう何度も参加している。しかし、それらは全て去年に参加したものだ。と、いうのも、アイドルになってからだから。

私が率先して会を開催したことはなかったし、私が祝われた事もあったけれど、誕生日パーティーの準備というのは大変だ。私の部屋で一人でせっせと手を動かしてるけど、中々、体力を使う。

その上、美嘉さんに選んでいただいた服はヒラヒラして、少し気になる。誰も家の中にはいないのに、スカートが少しまくれる、なんて経験はライブ以外ではないことだから。

さて、そんな話ともかく、千秋くんを呼んだ時刻はあと僅か。幸い、今日は千秋くんは図書館で勉強していたようで私の部屋にはいなかったから良かった。

さて、それはともかく誕生日会の準備をしなければ。

「ゲーキ良し、飾り付け良し、プレゼント良し……後はー……」

……あ、晩御飯はどうしましょう。作らないとマズイですよ。私も食べてませんし……。

でも、今作り始めると千秋くんが帰って来るまでに間に合わない気も……いえ、迷ってる時間が無駄ですね。やるなら最高のパーティーを。

そう決めて、台所に向かおうとした時だ。スマホが震えた。千秋くんから電話だ。

「……もしもし?」

『あ、文香?』

「……はい。あの、何時頃にご帰宅の予定で……」

『何々、誰とコソコソ電話ー?』

……莉嘉さんの声? 図書館で勉強してたのでは?

『ちよ、バカお前発声するなって言ったよな。人の話聞けないの? バカなの? 死ぬの?』

「千秋くん」

『っ』

ビクツと肩を震わせたのが目に見えるように分かりましたね。

「……どういことですか? 浮気ではないのは分かりますが、何故莉嘉さんといるのでですか?」

『あ、いやそれは……』

「……まさか、遊んでいたのですか? 私に黙って?」

『そ、そういうわけでは……』

『それで、どうだったの? アタシからの誕プレ』

……ほう?..

『おい、お前本当黙っててお願いだから。300円あげるから』

『お姉ちゃんから、まだ祝ってもらってないって聞いたからね。アタ

シも祝ってあげたくなっちゃってね!』

『うん、実際のところ悪く無かったよ。現状は最悪だけど』

『でも、文香ちゃん意外だよねー。ダイエツト中とはいえ彼氏の誕生日忘れるなんて』

『うん、お願いだから』

『ま、でもアタシ達が祝ってあげたんだから泣かないで!』

『むしろお前を泣かすよマジで』

「……千秋くん」

『っ、は、はいっ』

「早く帰って来なさい。良いですね?」

『……はい』

『で、電話の相手はだ……』

そこで通話は切れた。

……言われっぱなしではいられません。千秋くんのことに関しては、たとえ従姉妹相手でも負けるわけにはいかない。私の本気のおもてなしを見せて差し上げましょう。

## 誕生日（2）

文香に強引な呼び出しをくらい、速攻でマンションまで来た。しかし、なんかまた不機嫌そうにしていたなあ、あの子。何か怒らせるような事……したな。正確に言えば、俺がじゃなくて莉嘉が、だが。

まあ、気持ちは嬉しかったし、別に良いんだけどね。それに、文香に怒られるのも決して悪くないし。や、マゾじゃないけど。

とにかく、遅くなればなるほど怖くなるし、さつさと部屋番号を押さないで。

ピンポンと音がした直後、自動ドアが開いた。無言の圧力を感じて怖いんだけど。

エレベーターに乗り、文香の部屋の階へ。インターホンを押すと、鍵の開く音がした。恐る恐る部屋を開けると、中は真っ暗だった。

あれ？ 文香の部屋ってここだよな？ てか、鍵の開いた後がしたはずなのに……。

一応、表札を確認したが、やはり「鷺沢」と書かれている。

「えーっと、文香？ 来たけど……」

入って良い、のかな？ 恐る恐る部屋の中を進むと、パツと電気がついた。なんだ？ 地雷でも踏んで死んだのか？ と思ったが、違った。まあ違うわな。

部屋の中は「誕生日おめでとう」と書かれている垂れ幕が下がっていて、テレビの前にはケーキが置かれていた。

その中央では、何故か鼻眼鏡をかけて三角帽子を被った文香がクラッカーを鳴らした。

「誕生日おめでとうございませう！」

「……え？」

「……」

「……」

……な、何だ急に？

「えーっと……」

「もう過ぎてるのは分かっています。……ですが、祝わせて下さい。」

私も祝ってもらいましたし……」

「……あ、うん」

まあ、気持ちは嬉しいし……良いか。

「じゃあ、来年からは遅れたら罰金な」

「ええっ!?? そ、そんな……!」

「冗談だよ」

そんな話をしながら、とりあえずソファアームに座った。

「ケーキは手作り?」

「……誰もかれもが、あんなクオリティの高いケーキをお手頃に見えると思わないでください」

「あ、うん。まあ、文香が作ってくれるんなら、味とか関係ないけど」

「……馬鹿」

あれ、なんか怒られた。そっちだって同じ立場なら同じこと言ったくせに。

「……と、とにかく、良いから早くお祝いしましょう」

「はいはい」

「はい、は一回です」

「はいはい」

「……」

あー、頬を膨らませて肩をポカポカ叩くふみふみ可愛いんじやく。これで二十歳なのが尚更可愛い。

「……では、ケーキを切り分けますね」

「今更だけど、二人なのに丸々一個買ってきたのか」

「はい。千秋くんも丸々一個作って下さりましたから」

「や、そんな気負わなくても良いのに……」

今まで、友達にも彼女にも祝ってもらったことなんか無いからなあ。たとえ日にちが遅れてようが嬉しいものは嬉しい。

「……ちなみに、全部千秋くんのですから」

「え? 拷問? それとも新手の糖尿計画?」

「……違います。言っただけです、今日は私がもてなすって」

「あ、うん。あれ? 言われたっけ……」

なんか、いつになく強引だな。やっぱり、なんかあったのかな。まあ、彼氏の誕生日パーティー忘れてたわけだし、気負うのはわかるが。

「……では、まずはケーキを切り分けてあげます」

「や、一緒に食べようよ」

「……ダメです。その……リバウンドが……」

「……」

俺が一人で食うしかないのかよ……。かなりキツイんですけど……。このケーキ結構大きいよ？

「任されよ……！」

「あ、食べる時は私の膝の上にどうぞ」

「え？」

「おもてなしですから」

「どういう店？」

「……お金はいりませんよ？」

そういう意味じゃないんだが……というか、なんとという贅沢なシチュエーション。ファンが見たら埋められそう。

まあ、でも文香が良いと言うのならお言葉に甘えよう。ありがたく膝の上を頂戴し、座らせてもらった。

……ああ、お尻の下が柔らかい……。

「文香の太もも柔らかい……」

「……それはまだ、私が太っていると聞いたのですか？」

「あ、いや違います。程よい柔らかさとむっちり加減ということで……」

「……」

……あ、ダメなパターンだこれ。多分、何を言っても泥沼になり、俺のお腹の前に回してる両腕で締め付けられるパターン……かと思っただが、いつまで経っても圧迫感が来なかった。

どうしたのかと思ったら、文香は俺の背中に胸を当てて、頭を撫でてくれた。

「……そ、そうですか……。千秋くんが、心地良いのでしたら、それで

……」

「……？」

あれ？ この子、ほんとにどうしたんだ？ 声に照れが混ざってるが……まあ、許してくれたというのなら、それはそれで……。

それより、ケーキを食べよう。文香がせっかく買ってきてくれたものだ。

「えーつと……ほんとに丸ごと俺に？」

「……はい。どうぞ」

「……」

まあ、仕方ないな。文香だって太りたくはないだろうし。

切り分けた8分の1をいただいた。チョコレートケーキの先端をフォークで割いて、口に運ぶ。

「んっ……美味あ！ 甘過ぎなくて良い！ これ高かったんじゃねーの？」

「……はい。とにかく高いのを」

「ふ、文香……」

俺なんかのために……。なんか本当、申し訳ないくらい幸せだ。それと共に、本当に専業主夫になりそうな気がして怖いというのも少し。

「っ、あ、そ、そうだ。千秋くん」

「？ な、何？」

「……お姉さんが、食べさせて差し上げましょうか？」

「ボフッ！」

な……本当どうした!?？ そういうのは……いや、割といつも通リな感じするが、俺の方から言わないとしてくれないじゃん。

……いや、落ち着け俺。理由なんか考えても分からないし、後ろを向いても分かるくらい、文香は顔を真っ赤にしている。

そんな女の子に「どうしたの？ デレ期か？」なんて聞けない。むしろ、この状況を堪能する事が礼儀であり、男としての使命だツ!!？

「お、お願いします……でも、どうやって？」

「……ふふっ♪ 千秋くんのためなら、お姉さんに不可能はありません

ん」

……そのお姉さんキャラは何？　ここなんてお店？

呆気にとられてる間に、文香は俺のお腹の前に回してる右手でフォークを取り、ケーキを刺し、口元に運んできた。両手を伸ばす度に胸が背中に押し付けられる。鼻血出そう。

咀嚼してみたものの、味なんか感じない。照れだけだ。

「……美味しいですか？」

「ほっぺたがマントルまで減り込む」

「……わかりにくいです」

……すみませんね。学が足りないもので。

「……もう一口どうですか？」

「全部食べるよ」

「……そうですか……」

「……一口いる？」

「……いえ、これは……」

「一人じゃ食べきれないなあ」

「………いただきます」

うん、そんな物欲しそうな顔と声で言われてもな……。まあ、どんなに気合い入れてもケーキ丸ごと一つは無理。

フォークを受け取り、今度は俺が文香の口に差し出した。

「はい」

「んっ……おいひいれふ……。もう一口」

「はいはい……」

意思が弱くて可愛い子だ。意地悪のし甲斐があるというものだ。

しばらく二人で交互に食べさせ合い。本当は文香の体系のためにも途中でやめさせてあげたかったが、こんだけ幸せそうに食べられたら、俺に止める術などない。

「はい、あーん……」

「あ、あーん……」

こういう甘やかしが良くないんだろうな……。なんて、ちよūdと思つてた時、俺が差し出してるフォークを目の前に、文香の顔が止まった。



「……どした？」

「……だ、ダメです！ ですから、これは千秋くんのケーキで……！」  
「や、だから」

「はい、100歩譲って千秋くんのもだから千秋くんの好きにする、  
というのも分かりますが、太ってしまいます！」

「俺は文香がデブになってもずっと好きでいられるから」

「……ち、千秋く……いい、いえ！ 騙されません！ 騙されませんから  
！」

もー！ と、俺の背中をぽこぽこ叩く文香はそれは可愛かった。今  
日だけで「文香百面相」が作れそうなくらいだ。全部可愛いが。

ま、もうケーキも残り半分切ってるし、体重なんて今更感あるけど  
ね。

「……千秋くん、もしかしてわざとやっていますか？」

「そんな事ないから」

「……ほんとのほんとに？」

「ほんとのほんとに」

文香の文句を聞きながら、とりあえずケーキを食べ終えた。

皿を片付けようと、文香の上から退こうとすると、文香は両腕に力  
を入れた。

「ふふ、ダメです」

「えっ？」

「……後片付けは、後ほど私がやっておきますから。それより、もう少  
し私に甘えてください」

「あ、そ、そう。でも、どうやって？ ずっと膝の上？」

「そうですね……例えば、膝枕なんてどうでしょうか？」

「……え、良いの？」

「……はい。千秋くんが、望まれるのであれば」

「……」

マジか。何そのふみふみらしからぬ提案。どうやら、本気で俺を  
労ってくれるつもりのようなのだ。

……なら、ならば！ 俺も自分の要望を言わないと申し訳ないだろ

う！

「顔をおっぱいと太ももで挟んで下さい！」

「……怒りますよ？」

ダメだった。うん、流石に今のはないな。

「じ、冗談だから。まあ、くつろぐのは良いけど、とりあえず片付けと歯磨きだけしちやおうよ」

「……そ、そうですね。で、では、私が片付けをしますので、千秋くんは歯ブラシを持ってソファで待っていて下さい」

「え、ま、待ってるの？」

「は、はい……！」

あ、そ、そう……。歯ブラシは流石に特に何も無いと思うんだけど……。しかし、待ってると言われたら待ってるべきだよな。

洗面所で俺のと、ついでに文香ので二人分の歯ブラシを用意すると、ソファに座ってのんびりした。

机の上のものを流しに戻した文香が戻ってきて、隣に座った。

「……お待ちしました」

「はい、文香の歯ブラシ」

「え？ ……あ、ありがとう、ごさいます……いえ、ではなく！ 私が千秋くんに歯磨きして差し上げるんです！ 私の分の歯ブラシは結構です！」

「ええ……また偽物語みたいな……てか、いいよそれは」

「……いえ、おもてなしですから」

それはおもてなしというのか……。しかし、今は歯ブラシしてもらいたくない。チョコケーキ食って口の中は真っ茶色だし。

「や、今はいつもより口の中汚いし……」

「……大丈夫です。私は千秋くんのどんな汚いところでも舐められるくらい千秋くんが好きですから」

「お、おう……」

嬉しいけど重たいな……。なんか表現が少しエロいし。というか、そういう問題じゃないから。

「俺が恥ずかしいって言ってんの。そっちが良くて、こっちがね

「……」

「……でしたら、千秋くんも私の口の中を磨いてくれませんか？」

「……はえ？」

何言ってるのこの子。そんな考えが顔に出てたのか、文香は少し顔を赤らめながら、俯きつつ言った。

「……いい、いえ……ですから、その……ふ、二人で……お互いの、口内を磨くというのは……」

「……何それ？　どんなプレイ？」

「ち、違います！　やらしい気持ちなんてなくて……！　ただ、私は……お、おもてなし、したくて……」

「……」

うーむ、どうしよう。お互いに歯を磨き合うってすごいよな……。なんかもう、側から見てもすごい絵になりそうだし。口を開けて向かい合って歯ブラシを持った右手をクロスさせて口に突っ込んでる絵になるわけだろ？

……でも、文香のもてなしたいとかいう気持ちは嬉しいし……女性に恥をかかせるわけにも……。

「……わかったよ」

「！　で、では……！」

そう言って左手でお互いの頬に手を添え、右手で歯ブラシを口の中に入れた。

そのまま、お互いに顔を見合わせて右手をシャカシャカと動かす。

……あ、ああああ！　これ思ってた以上に恥ずかしい！　なんだこれ!?　何このなんかしちやいけないことしてる感じ！　新世界の扉のドアノブに手をかけるってこんな感じなのか？

しかも、歯磨きしてもらっているから、言葉を発せないのがまたツライ。

「……いい、ひあひぶん……」

「……っ？」

今、名前を呼ばれた？

「ふあ……」

「……や、やふえふあへんは……？」

やめませんか、かな？ うん、そうだね。やめよう。

頷いて返すと、お互いに歯ブラシを持ち替え、各々で歯磨きした。口をゆすぎ終え、ソファアに戻ってきたときには気まずい空気が流れていた。

正直、噛んだり匂いを嗅いだり、かなりレベル高いことをしてきたつもりだった。しかし、やはり新世界というのは過去にどんな経験をしていても恥ずかしいものだ。

すると、文香の方が声をかけてきた。

「……ち、千秋くん」

「何？」

「……その、一緒にお風呂に……」

「待って。待て待て待て待って。や、入るけど待って」

流石に。流石に待ってっつてば。何度か一緒に入ってるが、今日はちよつと待ってほしい。多分、襲っちゃう。毎日毎日エツチしてる猿カップルみたいになりたくないから。まあ、そんな奴らが本当にいるとは思えないが。

とにかく、今日はやばい。しかし、文香に恥をかかせるわけにもいかないのはマジだ。だって、文香だって俺のことを考えてこういった行動をしてくれてるわけだから。その努力の方向がぶつ飛んでるだけで。

ならば、俺の取るべき行動は一つだ。文香の頭に手を置き、微笑みながら言った。

「……別に、遅れたとか、忘れてたとか、そんなの気にしなくて良いよ。文香に祝ってもらえるっただけで、俺は嬉しいから」

「……千秋くん……」

「だから、別に頑張らなくても良いよ。一緒にいてくれれば、それで」  
そう言いながら、頭を撫でてあげる。すると、文香は俺の方に体重を預け、肩に頭を置いた。

「……もう、千秋くんはずるいです。結局、私の方が満たされてしまいました」

「はいはい」

……ふう、良かった。これで何とかなった、よな？ まあ、こういう  
た明後日の方向への暴走も、文香の可愛いとこの一つなんだけどな。

「……あ、そうだ。千秋くん」

「何？」

「……プレゼントがあります」

「ああ、別にいいのに」

「……そうはいきません」

そう言いつつ、プレゼントを用意しに行く文香。まあ、どうせ何も  
らったって、受験生だし活用する機会はあまりなさそうな気もする  
が。

戻ってきた文香が、綺麗な包みを渡してくれた。

「……あの、あまり高いものでもないですし、もしかしたら喜んでいた  
だけないかもしれませんが……」

「いやいや、そんなことないよ」

「……こちらです」

手渡しされた袋の中に入っていたのは、本とブックカバーと葉だつ  
た。難しそうな本、おそらくミステリーだろうか？ ブックカバーは  
革製で、濃い緑色だった。葉には、綺麗な柄の葉っぱがあつて「鷺沢  
文香」とサインが書いてあつた。

「……い、一応……その、葉は、私の手作りです……」

「へえ……そういや、俺って文香をアニメ好きにさせたけど、文香の好  
きな読書には付き合ってたやれてなかったな……」

せつかくだ。今のシーズンにはもってこいのものだし、ありがたく  
受け取ろう。

「ありがと、文香」

「！ は、はい……！ あ、表現でわからないところがあれば、いつで  
もご相談してください！」

「うん。早速、読んでも良いか？」

「は、はい……！ あ、わ、私も一緒に良いですか？」

「勿論」

そう言って、朝まで二人で本を読んだ。

## ワンピース。

ある日、夏の暑い日、私は洋服屋さんに来ていました。今日は何となく女子大学生っぽいものを見に来たわけではなく、キチンと目的があります。

購入する予定の洋服は花柄のワンピースです。この前、撮影で着てみたのですが、これがなかなか着心地が良かったのです。それに、花柄は気持ち華やかにしてくれるような気がして、着ているだけでも気が晴れてしまいます。

なので、あの日に着たワンピースを買いに来たのですけど……中々、見つかりません。確か池袋にあるという話だったはずなのですが……。

というか……そもそも、池袋の空気が合いません。今まではメイトや奈緒さんに連行されてコスプレショップに行ったりしていました。サン○ヤインのような、リアルが充実している方達が来るような場所ではどうにもひよってしまいます。せめて、奏さんがいらつしやれば良かったのに……。

「……はあ」

息苦しいですし、帰りましょうか……。小さくため息をついて引き返そうとした時でした。「あれー？」と聞き覚えのある声が耳に届きました。

「文香さん？」

「……あ、美波さんとアーニヤさん」

「フミカ？　こんにちはー！」

「……はい、こんにちは」

美波さんとアーニヤさんと遭遇しました。お二方もオフのようで、今日も仲良く買い物ようです。

クールな顔立ちなのに無邪気な満面の笑みで手を大きく振るアーニヤさんと、同い年とは思えないくらい落ち着いた笑みで、胸前で小さく手を振る美波さん。

考えてみれば、高校生と大学生で歳も離れているのに、こうして仲

良く出来るのはアイドルならではなのかもしれません。

「……お二人でお買い物ですか？」

「うん。文香ちゃんも？」

「……はい。千秋くんは今日もお勉強しているの」

「私とアーニヤちゃんもだよ。アーニヤちゃんの彼氏が私の彼氏を監禁してくれてるから、暇になっちゃって」

「か、監禁……？」

「……うろたえてしまったけど、私にも覚えがあります。勉強嫌いの受験生は、椅子に縛り付けてでも勉強させなければならぬんですよ……。まあ、私の千秋くんはその部分は治りつつありますが。」

「フミカは何を買いに来ましたか？」

「……あ、はい。この前、撮影で着させていただいた花柄のワンピースを買いに来たのですが、恥ずかしながら、どのお店であったかを忘れてしまいました……」

「花柄、ですか？ 珍しいですね？」

「……はい。私には、分不相応かもしれませんが……」

「そ、そんな事ないよ。文香ちゃんなら似合うって！」

いえ、良いんですよ、美波さん……。私のような本ばかり読んで来て、アニメや漫画の話になったら急に明るくなるような女に花柄なんて似合わないのは分かっていますから……。

目に見えてシヨボくれているのが分かったのか、アーニヤさんも一緒に胸前で両手の握り拳を作って熱弁してくれました。

「そ、そうです！ それに、フミカはとても綺麗でお花似合います！」

「そうそう！ スタイル良いからワンピースも似合うし！」

「それに、アニメの……特に最近ではトウケンランプのお話をしている時のフミカの笑顔は、とても素敵ですよ！」

「グハッ……！」

……あ、相変わらず的確に地雷だけを狙撃して来ますね……アーニヤさんは……。

APEXで味方が狙撃している間にショットガンを持って裏を取りに行っていたら、敵も裏取りに来ていて遭遇戦になって殺されたよ



うな感覚に陥っていると、美波さんが微笑みながらこんな提案してくれました。

「じ、じゃあ、私達と一緒にそのワンピース探してみよっか！」

「……え？ 良いのですか？」

「勿論。だって、そのワンピースも彼氏くんに見せたいんでしょ？」

「っ……は、はい……」

流石、美波さん。キチンと私の事情を理解している。千秋くんは「いずれTwitterとかで出回るモデルの文香より、普段着の文香の方がレアだ」とか言って私の載っている雑誌は買いませんし……。

「アーニヤちゃんも、それで良い？」

「ハイ♪」

「アーニヤさん……ありがとうございます。私なんかのために……」

「ううん。じゃ、探そっか。最近、文香ちゃんが載った雑誌だよ……ググれば出るかな？」

早速、スマホを取り出す美波さん。なんだか二人のお邪魔をして申し訳ない……と思う反面、このまま諦めてメイトに逃げ込むハメにならなくて安心もしていた。

「……いえ、まだその雑誌は出ていないんです。来週、発売ですので」  
「なるほど。つまり、気に入ったから一番に千秋くんに見せたいのね？」

「ーっ……！ も、もうっ、美波さん！」

「あはは、ごめんごめん」

ぶくーつと頬を膨らませる私の頭を撫でてあげながら謝る美波さん。この方のお姉さん力は異常な威力で、これだけで許してあげる気になってしまふのがずるい。

しかし、グーグル先生でもダメとなるとノーヒントになつてしまふ。私も美波さんもアーニヤさんも、手当たり次第で洋服屋さんにお邪魔した。

「……あ、これも似合うのではないですか？」

私が差し出したチョコレートアーニヤさんが受け取り、試着してみる。濃い青一色で、正面に金色の雫がついたもの。共通認識だと思いますが、やはりアーニヤさんには青がお似合いです。

想像通り、とてもお似合いました。鏡を見るアーニヤさんはとても嬉しそうにここにこにこ微笑んでいます。

「わあ……！ どうですか？ ミナミ！」

「うん、とても似合ってるよ」

「ふふ……♪」

美波さんにも褒められて、さらにご満悦な様子のアーニヤさんは、やはりとても可愛らしかった。外見が大人びていても歳相応でいられるのは、少し羨ましいです。私はとても子供っぽいとよく言われるので。正確には、千秋くん曰く子供っぽくなつたそうですが。

「でも、文香さんもオシヤレに興味出てきたんだね。昔はあまり、こういうのに興味無かつたみたいだったから」

「……そう、ですか？」

「うん。奏さんも言つてたよ。最近は事務所に来る時も少しお化粧してるでしょ？」

……言われてみればそうかもしれません。まずお化粧道具の種類すら覚えていませんでした。今だつて詳しいわけではないけれど、少なくとも最低限のものは覚えられました。

でも、そういうのを覚えようと思えたのは、私一人の力ではありません。

「……私一人では、興味は持てませんでした。オシヤレも、お化粧も、そういう女性としての嗜みに触れてみようと思えたのは、そう言うきっかけをくれた方達がいたからです」

例えば、プロデューサー。アイドルの世界に誘つてくれた方。そしてその事務所で出会えた、奏さん、ありすちゃん、美波さん、アーニヤさんのような方々……そして、何より一番大きな影響を与えてくれたのは……。

「……ふーん？ なんか、幸せそうだね。文香ちゃんは」

「っ、な、何がですか……？」

「何でもないよ。さ、その鷹宮くんに見せるワンピースを探しに行かないとね」

「はい……って、『その』ってなんですかっ!?」

「文香ちゃんは鷹宮くんのことを考えてる時の顔が分かりやすすぎるんだよー」

「うー……自分だつて一緒の癖に……」

「なんだか、今日は美波さんにいいようにいじられている気がします……」

それに、オシャレやお化粧のことまで千秋くんのお陰だと思うのは少し癪です。元々、あの子から直接、影響されたものはゲームや漫画、アニメだけです。まあ、確かにあの子に少しでも綺麗に見られるためにお化粧の勉強をした節はありますが……。

……あれ？ それって結局、千秋くんに影響されてるんじゃないか……  
「……ハア、認めるしかないですね」

私をこんな風にした責任は取ってもらいますからね、千秋くん。

そんな事を考えながらお店を出ると、次のお店で目に入ったのはトイ〇ラスだった。

「み、美波さん！ 行きましょう！」

「ん？ 何か気になるお店が……え、そこ？」

「私、新発売のシルヴァ・バレット・サプレッサーのプラモが欲しいんです！ ビームマグナムを撃つ度に腕を付け替えるのがカッコ良くて……！ それに何より、パイロットがあ……！ あ、これは言わない方が良いでしょうね。見たときの感動が減ってしまいます。とにかく行きましょう！」

「……」

「どうしたんですか美波さん？ みな……あつ」

……私をこんな風にした責任は取ってもらいますからね、千秋くん……。

すっごい呆れられた目で見られ、すこし傷ついていると、さつきまでいたお店から遅れてアーニヤさんが出てきた。

「お待たせしました」

「あ、アーニヤちゃん。何か買ったの？」

「ハイ♪ チョーカーを」

あ、アレ買ったんですか……。そんなに気に入ったんでしょうか？  
確かにグラブルの346事務所コラボのアーニヤさんは水属性で  
すが……。

「それと、ついでに花柄のワンピースのお店の場所を聞いてきました」  
「本当に？」

「ハイ♪ 行きましょう」

まさか、そのために買い物をして下さったのでしょうか？ だとし  
たら、少し申し訳ない気もしますが……。

「フミカ？ 行かないですか？」

ニコリと微笑んで私の手を取るアーニヤさんを見て、考え過ぎだつ  
たと打ち消し、三人でそのお店に向かった。

しばらく歩いてから到着し、新発売だからか、すぐにワンピース自  
体は発見出来ました。発見出来たのですが……。

「……あ、あれ？ こんなに露出多かった、でしたっけ……？」

ノースリーブ、その上、色も明るめで且つ花の部分以外は薄め。何  
より、胸が強調されやすい作りになっている。これを仕事はともかく  
普段着として着用するのはちよつと……何というか、常日頃の至福と  
はかけ離れ過ぎてて恥ずかしいと言いますか……。

「わあ、これを着るんですか？ 絶対に綺麗です、フミカ！」

「え？」

「見てみたいですー！」

目を輝かせるアーニヤさん。うっ……断れない、この笑顔……光属  
性の方はこれだから……。

でも、こんなの着て大丈夫でしょうか……。特に、千秋くんの場合  
は「え？ どうしたの？ 年甲斐もなく？」なんて失礼極まりないこ  
とを言ってきたそうで……。

「大丈夫だよ、文香さん」

怖気ついていると、隣的美波さんが優しく微笑んでくれた。

「プロの方が『これを着るのは鷺沢文香がベスト』って思ってお仕事を

くれて、雑誌に載るんだもん。鷹宮くんだって、絶対に褒めてくれると思うよ?」

「……そ、そうでしょうか……」

「そうだよ。だから自信持つて」

につこりとお姉さんの笑みを浮かべる美波さん。不思議です、この方に「大丈夫」と言われると、何故だかとても勇気が湧いてきます。

……そうです、大丈夫です。それに、千秋くんが失礼な感想を言う時は、大抵が照れ隠しなんですから、カワイイもんです。それでも癩に触ることを言われたらビンタすれば良いんです。

「……試着してきます!」

「うん。頑張れ!」

「頑張つて下さい、ファミカ!」

×二人の後押しを受けながら、私は試着室に入った。

×無事に購入を終えた私は、早速ワンピースを着て帰宅した。改めて着てみると、やはり胸は強調されるし色はそれなりに派手だしで、やはり少し恥ずかしかった。

でも、千秋くんに見ていただくためです。この程度で恥ずかしがってはられません。

マンションに無事に到着し、深呼吸して部屋のドアノブに手をかけました。

「……ただいま」

「あ、おかえり」

中に入ると、千秋くんがエプロンを装備していました。かわいい。いやそうではなく。今日は私が「かわいい」と言ってもらわないといけないのに。

「アレ、どうしたのそれ」

「……は、はい。その……この前、撮影で使ったお洋服なのですが……気に入ってしまったので、買ってしまったのですが……」

「ふーん……」

……あまり、興味無いのでしょうか。少し素っ気ないような……。

「悪い、ちょっと揚げ物やってるから。手を洗ってきな」

「あ……は、はい……」

……千秋くん的には、あまり良くなかったのでしょうか。それとも、あまり似合っていないのでしょうか……。

もしかしたら、よく見えていないのかも……と、希望を持って洗面所ではなく流しで手を洗う事にした。

なんだか初デートのような気分で胸をドキドキさせながら、千秋くんの隣に立って手を洗ってみました。

……やっぱり、反応ないですね。明日からこれは倉庫番でしょうか……。

ちらっと隣の千秋くんを見ると、私の方をチラ見していました。主にワンピースによって強調された胸の辺りを。

その度に頬を赤らめて「……核兵器かよ……」などと呟いています。「……」

……もしかして、照れているのでしょうか？ 割と照れ屋さんなどこあるのは知っていましたが……わざわざ冷たい態度を取るのには珍しいですね……いえ、もしかしたら冷たくなってしまったのでしょうか？

ふふ、だとしたら可愛らしいです。もう付き合って半年以上経つのに、未だにこういうのには慣れないみたいです。冷たくされた分、少し意地悪してみたくなくなってしまっただけ……。

「……ふう、それにしても、少し暑くなって来ましたね……」

隣で胸の辺りの襟をパタパタとさせてみました。六月にもなって暑くなってきましたし、嘘ではありません。

その直後でした。鍋の中の天ぷらに赤い液体がぼたっと垂れたのは。

「え？」

「……このどすけべめ……」

「ち、千秋くん!?? 鼻血の量が普通じゃ……ち、千秋くん!??」  
大ダメージを与え過ぎてしまいました。

幸いにも天ぷらは完成しつつあったので、火を止めてソファの上

で寝かせてあげて鼻にティッシュを詰めてあげた。本当に手のかかる子ですね。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……悪い」

「……いえ、その……すみません……らしくない真似を、しました……」

正直、後悔しています……。さっきのは明らかにビッチと呼ばれる方の行為ですから……。それに、そもそも料理中に刺激するようなことをすべきではありませんでしたね……。

肩を落としてため息をついていると、下から伸びてきた手が、私の頭の上にポンつと乗っかり、ふにふにと撫でてくれました。

「あー……悪い、本当はもっと早く言うべきだと思ったんだけど……」

「……？」

「悪魔的にまで似合ってる、そのワンピース」

「ふえ……？」

……あ、ダメですね。思いのほか、嬉し過ぎます……。ニヤニヤしてしまうのを全力で抑えながら、誤魔化すように膝の上の千秋くんに唇を重ねた。

「んっ……」

「っ……はあ、ど、どしたの急に」

「……なんでもないです。さ、ご飯にしましょうか」

「俺が作ったんだけどね」

いつのまにか褒めてくれたことに少し舞い上がっていた私は、千秋くんと一緒に夕食を食べた。

表情。

文香と付き合って、もう随分経つがまだ一年経っていない。そんな複雑な時期だが、付き合い始めて三ヶ月、半年、一年というのは恋人が別れる周期らしい。

三ヶ月と半年はもう知らない間に超えたし、もうすぐ一年という新たな山場がある。原因はマンネリ化らしいし、俺も特に何か変化を生じさせられているわけでもないのに、文香は毎日楽しそうに俺と暮らしてくれている。

向こうはアイドル、こっちは受験生とお互いにマンネリ化が加速しそうな時期であるのに別れる気配すらないのは、恐らく文香の感受性が豊かであるお陰なのだろう。何せ読書マニア過ぎてラノベの世界すら受け入れた子だから。

さて、一方、俺はと言うと。

『芸能人、運動音痴選手権。続いてのランナーは、鷺沢文香さんです』  
『……鷺沢文香です。運動は苦手なのですが、こう見えて力には自信があるので……青組の皆さんの脚を引っ張らないように、精一杯頑張ります……！』

『へえ、力持ちなんだ？』

『……いえ、力持ちという程ではありませんが……以前まで、叔父の本屋のお手伝いをしていましたから……。大量の本を運んで本棚にしまったりしている間に、いつの間にか力がついてしまっ……』

『え、じゃあ力入れたら体操服がパツツンパツツンになってマツチョコになったりするの？』

『……いえ、ビスケではないので……』

『え、ハンターハンター読んでんの？』

『あ、いえ……そ、その……キルアが、好きです……』

『読んでんだ！』

……なんか墓穴を掘ってんだけど、とにかくいつものバンダナを青い鉢巻きに変えて、ブルマの体操服姿でインタビューを受けている文香が表情豊かにテレビに映っていた。



具体的に言えば、気合の入った表情の後、素敵な笑顔で本屋の事を語ったと思えば、苦笑いでビスケを否定し、最後は恥ずかしそうに興味を漏らした。

俺と出会ったばかりの時にテレビで見た時は、まだ表情は硬くて緊張しているのが俺でも分かったのに、今では大分慣れたようだ。いや、趣味を吐露している時点で完全に慣れたわけでは無いようだが。そんな文香を、文香の服をアイロン掛けながら眺めていた俺は、思わず悔しげに下唇を噛み締めた。

「ッ……」

……羨ましい。うちにいる時は、俺の作った飯を食べてくれて、ゲームの相手をしてくれて、勉強を見てくれて、一緒に寝てくれる間、ずーっとニコニコしているのに。

昔は悪戯のつもりで、わざと文香が見える位置でぐらんぶる読んだりして怒られたりしていたが（梓さんの「エッチしよっか？」の時は本気で怒られた）、今ではむしろ文香がBLモノのエロ同人誌を読んでいるくらいだ。今年はコミケ行けました。

「……いや、そんな事どうでも良くて」

昔は俺が洗濯してる時に文香の下着を畳んだり干したりと触れる機会があっても、今では平気な顔をしている。

とにかく、あの初々しさが今でも欲しい。や、マジで。喜怒哀楽二十面相している文香が見たい。勉強をサボったら烈火の如くキレられるが、あれは怖いので却下。

「……よし、オペレーション・かまちよ、決行だ」

×やるぞ……俺！

×

「た~~だ~~いま〜」

文香が帰って来て、早速出迎えに行った。

「おかえり」

スリッパを出してあげて文香の前に揃えて置いた。中に小さいクモのおもちやを入れて。

「……ありがとう~~ござ~~いま……きやわっ!?」

足を入れた直後、謎の感触が足の裏に触れたのだろう。可愛らしい悲鳴が漏れた。思わず後ろに飛び退き、玄関に尻餅をついてしまうのを、慌てて俺は手を差し伸べて支えた。ヤバい、やり過ぎたか？

「ちよつ、危なっ！」

「あ、す……すみません……何か、スリッパの中に何か……！」

……あれ、予想以上に怯えちゃってんな。虫苦手だったっけ？ いや、正体不明なのが怖いんだよな。そういうものだ。お化けもいきなり出て来られるよりジワジワと怪奇現象が起こった方が怖いし。

とりあえず、スリッパをひっくり返してクモのおもちやを落としました。ポテツとクモが姿を現した時は「ひっ」と声が漏れたが、それがおもちやだと分かった時、ジトーつとした目つきが俺に向けられるのが分かった。

「……………千秋くん？」

「あ、いや……………や、安かったから……………」

どんな言い訳だよ、と自分でも思ったわ。安けりやなんでも買うのかよ俺は。

意味のない悪戯、と理解したのか、文香はポカポカと虎の背中を叩いた。

「どうしてこんな事急にするんですかー！」

「ご、ごめんごめん。魔がさした」

ガチで怒られる、かとも思ったが、普通に可愛く怒られた。気持ち良い。

クモのおもちやをポケットにしまうと、改めてスリッパを揃えて置いた。

「飯できてるよ。今日は青椒肉絲だよ」

「……………美味しくないと許しませんからね」

「大丈夫、バカ美味いから。あ、先シャワー浴びる？」

「……………いえ、ご飯が冷めてしまいますから。手を洗って来ますね」

文香が手洗いうがいをしている間に、青椒肉絲と白米と味噌汁を机の上に並べた。

牛乳を注いでると文香が出てきて席についたので、俺も向かいの席

に座った。

「……ほ、本格的ですね」

「やるからには本気だから」

「……その調子で勉強も頑張つて欲しいのですが」

「最近は何張つてるから言わないでくれると嬉しいですが……」

くっ……意地の悪い奴め……。まあ良いさ、本番はここからだ。今後の信頼に関わるため、食事に何かを加えるとかそういうのは無しにしたけど。

「そういや、今日見たよ。芸能人運動音痴選手権」

「あうう……見てしまいましたか……黙ってたのに」

「リレー超遅かったな。一位だったのに3人に抜かれてたでしょ」

「こ、転ばなければ抜かれてたのは一人だったはずなんです……!」

「しかも器用な転び方してたよね。バトン落として拾おうとしたら踏んづけて後ろにひっくり返ってたでしょ」

「せ、説明していただかなくて結構です!」

恥ずかしそうに赤く染まった頬を隠すように、お味噌汁を飲んで顔を背ける文香はとても可愛かった。久々に見たな、この表情。

「あ、勿論だけど録画してパソコンに保存して編集してあのシーンだけスマホに入れておいたから。いつでも見れるよ」

「そこまでしたんですか!?!」

「特に転んだシーン、カメラマンの位置が良くてブルマがパンツに見えてとてもエロかったよ」

「け、消してください!」

「メモリーだから」

「トラウマです!」

顔を真っ赤にして机の上に置いてある俺のスマホに手を伸ばしてきたが、それを躲す。

「大丈夫だよ。誰かに見せたりしないから。……てか、全年齢版パンチラ文香とか誰にも見せたくないし」

「そのワードの最後に私の名前を付けるのやめて下さい! ……というか、全年齢版パンチラってなんですか!?!」

「パンツが見えていないのにパンチラにしか見えない光景」

「で、ですから説明していただかなくて結構です！」

ああ……恥ずかしさのあまりめちやくちやな事言ってる文香可愛い……。

ニマニマと緩みそうになる表情筋を必死で抑えつつ、とりあえず諦めるように落ち着けてあげることにした。

「そもそも、もう全国放送されちゃってるから」

「うう……そ、そうでした……」

渋々、諦めたように座り直す文香。いい加減、食事が進まなくなるし、これ以上、この話題でいじるのはやめておくか。

いじけたように食事を進める文香が、今にもぐすんとしゃくり上げそうな表情でボソリと呟いた。

「もう……なんだか今日の千秋くんは意地悪です……」

「泣くなよ。デザート用意してあるよ、ミルクプリン」

「し、仕方ないから許してあげます……！」

チヨロい……少し前にダイエットで苦労したばかりなのに……。

食事を終えて、俺が洗い物をしている間に文香にはデザートを出しておいた。

夏にやる洗い物は割と心地良いんだよな。水が冷たくても地獄じゃない。逆に冬は地獄だ。お湯を出せば良いって？ ガス代が勿体無い。

さつさと洗い物を終えてリビングに戻ると、文香はミルクプリンに手をつけずにソファアの上で待っていた。

「食べないの？ 明日にする？」

「……いえ、千秋くんと一緒に食べようと思って、待っていました」

「……」

くっ……やっぱ良い子だ……！ とても20歳を超えているとは思えない程の純粋さ……！ BLのエロ同人は持っているけど……！

……なんか、もうあんなガキっぽい悪戯やめておこうかな。なんかバカバカしくなって来た。本当はあと一つ考えてあったんだけど

……うん、やめよう。いつでも喜怒哀楽した文香が見れる事は分かったし。

デザートミルクプリンには文香の分しか買えなかったから一つしかないのに、わざわざ待つてくれた文香の隣に座る。

「……せっかくですし、ゲームでもやりながら食べませんか？」

「良いね」

そんなわけで、プレ4のコントローラを取り、真ん中のボタンを押した。スイッチが入り、ゲームが起動する。

「何やる？」

「……ボンバ○マンで。対戦しましょう」

「罰ゲームはどうする？」

「……もちろん、有りです」

と、いうわけで、ディスクを入れ替えた。ゲームを起動すると、文香が隣でプリンの蓋を開け、スプーンで掬った。

「……千秋くん、あーん……」

「ん、良いの先？」

「……良いですよ？」

うん、もう絶対にバカな真似はしない。こんな良い彼女がいて、俺は何をしているんだ……でも、あの動画は永久保存だけど。それとこれとは話が別だから。

お言葉に甘えて一口いただいた時だ。するつ、とポケットから何かを抜かれる感触があった。

その時には遅かった。文香はポケットから俺のスマホを抜き出していた。

「ちよっ、おまつ……！」

「……動画は削除します。パスワードは……1027、ですか？」

「当たり前！」

こ、この野郎……てかどこでそんな真似覚えたコラ!!? ていうか、いくらなんでもそんなスるような事はないんじゃないんですか！

結局、動画は消されてしまった。あんまりだよね、いくらなんでも。

まさか、デザートを食べるの待ってたのも、ミルクプリンをくれると言い出したのもそのためか？ 何それ泣きそう。

「……さて、では始めましょうか。千秋くん？」

「罰ゲーム、有りだったな？」

「……はい」

「やろうか」

さて、ボンバ○マン開始だ。このゲームと桃鉄ほど、プレイヤーの性格が出るゲームはない。性格が悪い奴ほど、ねちっこいプレイをするものだ。

「くくっ！」

結果、文香は涙目で俺の頬を抓っていた。

「もうっ、もうっ、もうっ……！ なんですか今の!?? もうずるいです！」

「ずるくない。ルールに則ってまーす」

「うっ……！ なんですか今日は!?? 子供みたいな意地悪ばっかして……！」

「……」

理由を問われ、思わず俺は目を逸らした。だって究極的に言えば「かまって欲しくてちよっかい出した」って理由なんだもん。言えませんが。

しかし、その態度は良くなかったようだ。

「……ふうーん、そうですね。そういう態度を取りますか」

「な、なんだよ……？」

「……そう言う態度をとるのであれば、お姉さんにも考えがあります」  
……あれ？ なんか嫌な予感が……てかなんかキヤラ違くない？

と、背筋を冷たくしたのも束の間、文香が指を俺の脇の下に突き刺さり、指先をこまめに動かし始めた。

「わっひゃっひゃっひゃっ！ ちよっ、文香……待っ……！」

「……言いますか？」

「言う言う言う言う！ 言うからやめっ……ひゃっひゃっひゃっ！」

自白に拷問も人情も飴も鞭も必要ないと悟った。ようやく手を離

された時には虫の息、ヒーヒーと声を漏らしている俺に、文香は微笑みながら聞いてきた。

「……それで、どうしたんですか？」

「いや、その……何。テレビだと色んな表情してたのに俺と一緒にの時はいつもニコニコしてたから……ちよつと、困らせてみようかな……なんて」

「……そうですか？」

「そうだよ」

すると、文香は少しも照れた様子を見せる事なく、むしろ大人の笑みを浮かべながら答えた。

「……仮にそうだとしたら、それは千秋くんと一緒だと幸せ過ぎて、つい笑顔になってしまうのかもしれないね……」

「ーっ……」

クリティカルヒットした、今の。前まで「ポンコツ年上妹」みたいな感覚だったのに、今では5〜6個年上のお姉さんみたいだ。

「……すみませんでした」

「……ふふ、良いんです」

思わず赤くなつた顔を右手で隠して顔を背けながら謝ってしまった。いつのまにか、俺はこの人に勝てなくなってしまうていた。

短パン。

とある真夏の日、相変わらず太陽が地上を蒸し焼きにする季節。表ではセミの音楽隊が不協和音を大合唱。この世にクーラーが存在しなければ人間は生き延びることも出来そうにない、そんな天気の中、俺と文香は節電の中、生きていた。つまり、クーラー縛りである。

「ふみふみ……暑い……」

「……がまんです。地球温暖化の手助けは出来ません……」

このバカ、昨日の温暖化対策番組にゲスト出演してあっさりと影響されて、突然の節電キャンペーンである。お前すぐにニュースやバラエティに騙されるなって……や、勿論、嘘を言ってるとは思わんけど、決して事実とも限らんぞ。

「……勉強の手が止まっていますよ?」

「そりや止まるだろ……こんな暑い中、どう集中しろっての?」

「……気持ちが悪く犬にならなければ何でもできます」

「松〇修造かよ」

「……昨日、共演させていただきました。ふふ、あの方は素敵なお人ですね」

「……」

まあ、さすがに恋愛的な意味で言ってるとは思えないので嫉妬とかはしないけど……でも嫉妬させようとして言っているのはよく分かる。

こうなると、何か仕返しのことをしてやりたくなるんだけど……今は暑くてそれどころじゃない。

「……せめて扇風機つけない?」

「……節電です」

「冷蔵庫開けっぱなしとか」

「オゾン層の破壊なんでもっての外です!」

……こいつめ。でか、文香だって暑そうにしているくせになあ……顔真っ赤だけど大丈夫なのそれ?

仕方ない。ここは俺の話術でなんとかするしかない。



「……なあ、文香。確かに地球温暖化は危惧すべき問題だ。人類全員が意識して正面から向き合わなければならぬ事だろう」

「……はい」

「しかし、だからと言って無理して暑い思いをするのは、ただ単に俺達の体調を崩すだけだと思うんだ」

「……それは、そうですね……」

「だから、無理することなんかないんだ。気合で何とかなるのは松〇さんやら日野茜さんみたいな平熱40度の人たちだけ」

「分かりました、分かりましたから……」

仕方なさそうにため息をついた文香は、一度、席を外した。クーラーを付けてくれるのかな？ と思ったのも束の間、突然、首筋にヒヤリと冷たい何かが当てられた。

「ふあひよっ!!?」

「ふふ、可愛い声が出ましたね」

俺の首を掴んでいるのは、文香だった。え、なんでこの子そんな手冷たいの？ 心が暖かいから？

「ど、どうしたん？」

「……冷凍庫の保冷剤を驚掴みにしていました。これでしばらく涼しいでしょう?」

……そこまでするのか……いや、ていうか逆にそこまでされたらもう何も言いづらいな……。

それに、これはこれで悪くない。具体的には、文香に身体の一部を触られながらって辺りが少し興奮する。いや変な意味じゃ無くて。

「ふふ、これでお勉強できますね?」

「はいはい……」

うん、別の意味で集中出来ないんだけど……まあ良いか。

しばらくカリカリと手を動かしていると、徐々に首元が暖かくなつていく。うん、やっぱ暑いわ。まあ、文香に触られてると思うと悪い気はしないんだけどね。

そんな俺の気を知ってか、文香はすぐに手を離した。

「……また冷やしてきますね」

「あ、次脇腹とか冷やしてくれない？」

「……良いですよ」

そう言いつつ、冷蔵庫に向かう文香をふと眺めた。……そういや、あいつつて下半身はあんまり短い履かないよな。長いスカートかたまーにズボン履くくらいで。

俺の記憶に残ってるのは、この前のテレビ番組でブルマ履いていた時だけだ。あ、いやあと水着とかバスケのユニフォームとかあったか。

でも、私服ではあんまりない。

「ふーむ……」

しかし、俺に女性の服の良し悪しは分からない。「履いて？」とお願いしても、多分、文香も困ってしまうだろう。あいつも女性のフアツシヨンとか分かってないし。

……でも、ダメ元で聞いてみようかな。

「……おまたせしました、千秋くん」

「あ、ねえ文香」

「……なんですか？」

「文香さ、そんな長いスカート履いて暑くないの？」

「………えっ？」

「たまには短いスカートとか短パンとか履いたりしないの？」

スカートは衣装とかで履くけど、短パンはマジでない。レア過ぎる。

「……え、えつと……私、あまり足を出すのは……」

「見たい」

「え？」

「短パンのふみふみ見たい」

「……」

カアツと頬を赤く染める文香。あ、久々に見た、そういう顔。

「てか暑くない？ この季節に長い……裾？」

「……あ、えつと……スカートなら、あまり気になりませんが……」

「そりゃほら、スースーするからでしょ？ でも座ってる時はスカ―

トと皮膚がくつつくじゃない。やっぱ暑くない?」

「……そ、そう仰られても……」

いや、別に薄着が見たいとか、そういう変態的な意味ではない。それなら風呂の時に覗けばパンツもその下も見えるし。

そういうんじゃないやなくて、こう……何? たまには違う服装している文香、みたいな。

「……わかりましたよ。考えておきますね」

「いや、考えておくんじゃないやなくて確定して」

「……では、こうしましょう。一週間、クーラーを入れずに生活出来たら、考えて差し上げます」

「言ったな?」

「はい」

×よっしゃ、上等だコラ。

×

「う、うそ……」

「たえたよ」

驚愕の表情を見せる文香。甘いね。俺は元々は剣道部だぜ? 暑さには弱くはないんだよ、好んで暑い場所にいたがるわけではないっただけ。

「よし、じゃあ早速行こうか」

「……え、ど、何処へ、ですか……?」

「文香に似合う短パンを探す旅に」

「か、勘弁して下さい……! 私にショートパンツなんて、絶対に似合わないです……!」

「似合うよ、絶対」

「……え?」

「そんな良い太ももしてるんだから間違いない」

「っ……そ、そんな風に誤魔化したって……!」

「良いから、行こう」

約束したじゃん。ここでごねるのは大人じゃないぞ、文香。近くに用意しておいた鞆と、文香の手を引いて部屋を出た。

そんなわけで、早速アウトレットに顔を出した。二人で手を繋いで店内を歩く。

最近はまだ周りの目なんて一切、気にしていない。文香も今ではむしろ他人に見せつけるようにしている。

しかし、今日の文香は以前までの初々しさを取り戻したように恥ずかしそうにしていた。

「……今更ですけど、千秋くんは女性のファッションが理解できるのですか？」

「安心して良いよ。女性モノのファッション誌買い漁ったから」

持ってきた鞆の中には、雑誌が十八冊入っている。重い、それは可愛い文香への思いと同量である。やべ、今のは何言ってるかわかんねえ。

「……め、珍しく手ぶらじゃないと思ったら……」

「あと俺の部屋にあったもうやらなさそうなゲームと読まなさそうな漫画、全部売っ払ったから、金もあるよ」

「買うんですか!?!?」

「買うよ。この日のために速水さんとかからファッションのことも勉強させてもらった」

「なぜ、その情熱を少しでも勉強に移せないんですか……?」

「文香のためか否か」

それだけだよな、実際。自分の事よりも文香の事の方がやる気が出るってもんよ。

すると、文香は何か気付いたような顔を浮かべた後、頬を赤く染めながらポツリポツリと呟くように言った。

「……べ、勉強も……将来、私との家庭を築くためと思えば……」

が、頑張れま、せんか……?」

「……」

……さ、先のこと考えすぎよあなた……。やだ、ちよつともう……。なんで俺の彼女こんな可愛い……。……」

「……が、がんばれる……」

「……」

……あれ、こんな感じの空気になると思わなかったな……。どうしよ、なんかすごく気恥ずかしいというか……。

「……では、今から帰って勉強を」

「だが断るー」

「意地悪……」

それはそれ、これはこれだから。そんな涙目になるほどかよ。

とりあえず、ファッション誌をパラパラとめくり、近くの店にありそうな服を選ぶ。この季節だからな。短パンに、ノースリーブのシャツ、その上にカーディガンを羽織らせて活発な子を作ってみようや。文香に似合うかは置いといて。

「……あの、ちなみに千秋くんの中では……どんな服を考案されるおつもりなんですか？」

「モーさん」

「ふあっ!?? む、むむ無理です！ いくら革ジャン着てても、あんな下着姿みたいな服は……!」

「じゃあアストルフオ」

「お、おへそも出せません！ ていうか、あの子は短パンではなくスカートですー」

「じゃあジャンヌ」

「っ、あ、あれくらいでしたら……まあ。もう少しズボンが長めの方が……」

「あれの、ネクタイ外して、第二ボタンまで開ける感じで」

「そ、そんなのは無理です！ だ、第二ボタンまで開けたら……む、胸元が……」

……今日は一段とからかい甲斐があるな。本当にこんな可愛い子が彼女とかマジで最高だな……。俺ももう少し良い彼氏にならんと……。

「……あの、本当に嫌だったらやめとくけど……どうする？」

「……え？」

「や、ほら。どうしても嫌だつて言うならアレだし……そんな無理しなくてもお願いするようなことじゃないから」

「……」

まあ、うん。なんかここまで文香がごねるのも珍しいし。てか、文香ってそもそもあんまり、俺の言うことに「嫌だ」とは言わないからなあ。

「……………す」

「え？」

今なんか言った？

「……………その……………千秋くんに見られる分には……………気持ち良いので、良いです……………」

「……………」

気持ち良いって何？ 誰だよ、うちの彼女こんなにした奴。

「じゃ、遠慮無くモーさん並みに短い短パン探してやるよ」

「え、いやあの限度は持ち合わせてもらえると嬉しいのですが……………」

「よっしゃ。パンツが見えるくらいまで短いのにしような」

「……………殴つてでも止めた方が良いのかしら」

なんか怖いこと聞こえた気がしたが、とりあえず試着室ファッショ  
ンショーを始めた。

×

結局、購入したのは5着の短パンである。マジでお尻の下の辺りは見えるんじゃないの？ ってほど短い。

でも、その……………なんだろう。それ文香が選んだんだよな……………。大丈夫かな、あいつ。俺にしか見えなくて話で落ち着いた途端、異様に色んな服を選び始めたんだけど……………。

そんな俺の不安を他所に、今、文香の部屋では早速、着替えを始めている。

「……………千秋くん」

「っ」

出て来たのは、もうなんて言うか……………別人のようなふみふみだった。着ているのは胸元を第二どころか半分くらいまで開けた青いブラウス。その時点で胸の谷間がガッツリ見えてる。

その下に履いているジーンズ生地の黒いズボンが、ムッチムチの太

ももを強調していた。

「うお、ふ、ふみふみ……？」

「……や、やっぱり少し……恥ずかしい、ですね……」  
「……」

……うーん、これは予想以上の破壊力。しかし、これなら是非とも  
お願いしたい事をお願い出来る。うん、結婚したい。

文香の前に跪くと、太ももを撫でながら懇願してみた。

「文香……このおみ足の匂いを嗅いでも良いで」

「死んで下さい」

顔面に蹴りが飛んできた。

ホラー。

夏が過ぎ去り、秋。結局、まともに夏祭りとかに行けなかったわけだが、受験生だし仕方ないね。

で、秋になったということは当然、学校も始まるわけで。三村さんと「久しぶりー」「いや、あんま久しぶりじゃないね」「そうだね。一緒に勉強してたりナベリウスに行ったりしてたもんね」「あ、あとキングスキャニオンに行った」「それね」なんて話して、放課後になった。いつものように文香の家に帰宅すると、珍しく文香は俺より先に帰って来ていた。

「ただいま」

「おかえりなさい。……ふふ、お互いにこういう挨拶をするのは新鮮ですね？」

「……専業主婦みたいでホントスミマセン……」

「あ、いえ……そういう意図があつての発言では、ありませんので……！」

ま、まあ大学出てからの辛抱だ。……てか、高校生でこんな同棲みたいになってるのって平気なのかな？ 文香側も高校生を養っているなんて、中々すごい事してるんだらうな……。

「……俺が文香を養える日は来るんだらうか……」

「……キッチンと大学を出て、卒業もして、キッチンと就職すれば、その日は来ますよ」

「念のため、今のうちに貯金しておいてくれる？」

「……そこは自信持って下さいよ」

「いや今でも就職難の世の中だし……」

まあ、なんとかなるかとも思ってるけど。

部屋の中に入り、のんびりと中を見回す。ふと、良い香りが漂って来るのを感じた。

「……なんか作ってるの？」

「……というより、買って来ました。珍しい日でしたので、その……たまには、一緒にケーキでも、と……」



「……何手伝って欲しいの？ 紅玉？ 逆鱗？ 天鱗？」

「……いえ、仕事に関する事です」

別にケーキなんか買って来なくても相談に乗るのになあ……。まあ、仕事に関する事で相談されるのは初めてのことだし、分からないくもないが。

とりあえず、二人で席に座って、ケーキを食べながら話を聞いた。

「あ……美味しい」

「……でしよう？ 千秋くんはチョコレートケーキが好きかと思いついて……」

「そうね。超好き。文香のそれは？」

「……食べてみます？」

「うん」

言われて、フォークでサクツと裂いて差し出されたのは、チーズケーキだった。ホント、チーズは好きじゃないけどチーズケーキは異様に好きだわ。

もう流れるような自然さで「あーん」を終えると、次は俺の番だ。

「んっ」

「……よろしいのですか？」

「よろしいのです」

差し出したケーキを口にすると、文香はニコリと微笑んだ。

さて、改めて本題に戻るか。

「で、仕事って……なんでまた？ 俺に相談して答えられる事なんてある？」

「……その、実は……心霊スポットを体験するオフアアが来まして……」

「は？ 秋なのに？」

「……は、はい……。『残暑！ はみ出した夏のはみ出し物体験ツアー！』とか言って……」

上手いこと言ったつもりかよ、そのツアー……。いや、まあ確かに面白そうではあるが。ホラー映画は本当にお化けが出て来るから苦手だけど、心霊スポットとかなら「出るんじゃないか？ 出ないけど」っ

て意味だから苦手ではない。

「それで、俺と一緒に心霊スポットに行きたいって事？」

「……あ、いえ……それも考えたのですが……その、こういう話はイヤらしいお話かもしれないませんが……テレビ会社の皆様や視聴者の方々が『見たい』私の姿は……純粹に、怖がっている場面だと、思うのです……」

……確かに、捉えようによってはやらしい話だが、的を得ている。ああいう番組で芸人がやたらオーバリアクションしてくるのは、逆に冷めるし、かと言ってアイドルが可愛こぶつて「きゃ〜！ こわ〜い！」なんてやられてもイラつくだけだ。

要するに、なんだかんだ素のリアクションが見たいわけで。

「……それなのに、私が予め心霊スポットに行ったことがあっては、意味ないと思うのです……」

「なるほど……え、じゃあどうして欲しいの？」

「……実際に、お化けが現れても、心停止しない精神力を、身に付けたいのです……！」

「俺じゃなくてカマータージに言ってくれる？」

どんな依頼の仕方？ 一緒に心霊スポットに行くとかなら分かるけど、精神力を鍛えろってどんな内容？

「あつ……いえ、ちゃんと精神力の鍛え方は学んであるのです……！」

「へえ、それは？」

「これです！」

文香が出してきたのは、機動戦士ZガンダムのDVDだった。それも、劇場版ではなくアニメ版。

「……なんで？」

「……カミーユさんの仲間がたくさん亡くなり、それでも前を向く17歳の少年……そんな彼も、最後は精神が壊れてしまう……」

「そういうメンタルを鍛えるの？ ならVガンのが良くね？」

「……いえ、Zならたくさん霊が出て来るので……」

あの霊はそういうんじゃないと思うんだが……。文香も追い詰められると迷走するようになったなあ。しかも、迷走の方向まで迷走し

てるし。

「……俺の身体を、みんなに貸すぞー……!」

なんか元気になってる。多分、相当受けたくなかったんだな、その仕事。

「ちなみに……それって文香一人で行くの?」

「……いえ、奏さんとご一緒です」

なるほどね。要するに年下の速水さんのために頼りになろうって話か。けど、怖いものは怖いと。だから、何とかしたかった、と……立派な理由だけど、それでなんとかなるかは微妙だ。少なくともカミーユじゃ何にもならない。

「普通にバイオとかホラゲやるんじゃないやダメなの?」

「……それはあくまでもゲームです。……それに、お化けというのは倒せません。アクションゲームのバイオでは、何も学べませんし、鍛えられません」

……それを言ったらカミーユもアニメなんだが……まあ、良いや。

「じゃあ……よし、こうするか」

「? こう、とは……?」

「今日一日、俺はこれからありとあらゆる手を使って、文香を驚かせるね」

「……どういう事です?」

「ほら、要するに驚き過ぎて心停止するのを防ぎたいわけでしょ? なら、驚かされても少しびびくりする程度にまで脅かせば良いんだよ」

「な……なるほど……?」

「ホラー映画を見る、という手も考えたんだけど、それだとお化けに慣れちゃって、ロケ先で怖がる文香を見せられないでしょ?」

「……話は分かりました。では、今からスタートです」

「はいっ!」

×スカートをめくった。蹴られた。

×

×さて、一度いたずらを考える為に、俺は表に出て、帰って来た。色々

と買ってきたし、これは可愛く驚く文香見放題だぜ！

とりあえず帰宅すると、文香が玄関まで迎えにきた。

「……お帰りなご」

「ただいまー」

言葉を失う文香。そりやそうだろう。俺が今、マスクをかぶっている。リア○鬼ごっここのマスクを被っているからだ。

「……」

「……」

……あれ、なんだろうこの空気。まるでつまんないこと言って滑ったーみたいなの……。少なくとも、怖がられてはいない。全然。

「……なんですか？ それ」

「……全国の、鷺沢を殺せ……！」

「……鷺沢という苗字、そんなに多くないと思われませんが……」

……そうね、全然多くないね……。もうやめよう。なんか恥ずかしくなってきた。

「……早く上がって下さい」

「うん……」

肩を落としながら、マスクを取って部屋に戻った。このマスクもういらね。

八つ当たり気味にマスクをトイレの中に叩きつけた。

ま、他にも手はある。ポケットからダンゴムシのガチャポンのオモチャを文香の肩に乗せた。

「文香。肩、肩」

「え？ ……あ、これ知っています。みりあさんと莉嘉さんが、仮眠を取っている美波さんのお腹に乗せて気絶させてました」

「……」

ひでえことするアイドルもいたもんだなあ……。とりあえず、黙ってダンゴムシを片付けた。これ500円したんだけど……。

ふっ……。だがしかし、悪戯を二つ回避したと思ったこの時こそ隙有りだ……。

「わあっ！」

「……」

……急に背中を叩いたんだけど、ピクリとも驚いてくれませんかね……。

「ぷっ……ぷっ……ぷっ……」

「？」

あれ、なんか急に笑い出したぞ。どうしたのこの子？

そんなこと思ったのが顔に出ていたのか、文香は俺を見ると笑ったまま言った。

「ごめんなさい……！ な、なんか……千秋くん……好きな子にちよっかい出してる小学生みたいで……可愛くて……ぷっ……ぷっ……」

「んっ……っ？」

い、言うことにかいてなんだとこの野郎……！

「う、うるせーな！ こういうの慣れてないんだよ！」

「ぷっ……でも、もう少し工夫した方が……ぷっ……ぷっ……」

「笑いすぎだっつーの！」

こ、この野郎……あつたま来たぞコラ……！ 俺の悪戯が振るわなかったときのために保険を買っておいてよかったぜ……！

「もう良いよ。ホラゲやろう」

「あ、怒ってしまいましたか？ ごめんなさい……」

「怒ってないし」

「ふふ、千秋くん坊や？」

「怒ってねーからホラゲやんぞコラアツ!!？」

「よしよし」

調べておいて良かったよ。世の中には「ゾンビや霊を倒すホラゲ」以外にもスニーキングのみに徹するホラゲがある事を文香は知らない。

そうだ、元々ホラゲを必要以上に怖がる奴ってのは「実際にこんなことが起こったら」を想像し、ビビる。つまり、アホほど怖いホラゲなら、耐性がつくどころか今後のウィークポイントになり得るのだ！

×××

「……ち、千秋くん……いますか？」

「……ふ、文香こそいるよね……？　振り返ったら見た目そっくりのゾンビとかじゃないよね？」

……二人揃ってトラウマを植え付けられ、一緒の布団で背中をくっつけて手を繋いでいた。何故、背中を向けているか？　左右から来た時対策に決まってるんだろ。大体、窓からか部屋の扉の隙間から来るんだよ、こういうのは。

「……ち、千秋くんの所為ですからね……！」

「ふ、文香が煽ったからだろ……俺だってこれは出すつもりなかったわ……！」

「ううう……！　明日、一限なのに……！」

「……」

……待てよ？　今の状況……まさに、文香を驚かせるに適してるんじゃないの？　だとしたら……だとしたら……！

……そういや、トイレにリア○鬼ごっここの仮面捨てたなよな……。

「……ふ、文香？」

「……な、なんですか？」

「トイレ行きたくない？」

「……行きたいんですか？」

「……」

「し、しかたないですねえ。お姉さんが怖がりな千秋くんの面倒を見て差し上げましょう……！」

今の文香は微妙に俺への恨みが深いのか、一々、言葉にとげがある。少しいらつとした事もあったが、文香の言葉遣いがこうなるのは俺へだけらしいので、そう思うと悪い気はしない。

そのまま二人でトイレに向かう。俺がトイレに入ろうとすると、何故か文香までトイレに入ろうとする。

「……何してんの？」

「……私も入ります」

「なんで？」

「……外にいて襲われたらどうするんですか……！　坂本辰馬さん

だって、銀さんがトイレに入っている間に襲われたんですよ……？」

「……いや、小便してるとこ見られるの嫌なだけだ」

「……そんな事言って、もし用を足している間に襲われたらどうするんです？」

「……」

「……その可能性も無いな……。というか……。もし、あのマスクが呪いのマスクで、被ったら離れなくなる系のアイテムだとしたら……。」

「……やっぱ、トイレいや」

「……ダメです。我慢して尿結石になったらどうするんですか？」

「……」

余計な嘘つかなきゃ良かった——！！

結局、おしっこする所を文香に見られるハメになった。ホラーとは別のトラウマを植え付けられた。

## ドライブ（1）

「あく……もうやだ……疲れた……」

模試の結果は一応、上々……ではあるのだが、まあ夏過ぎまではみんなそんなもんらしい。賢い浪人生達が本気出し始めるのが秋頃らしく、偏差値が下がり始めるこの頃、俺はどうとうペンを放り投げた。だってもう疲れたもん……。マジで勉強とか大嫌いだし。大体、何だよ大学受験って……。日本の大学って勉強して入ったらバカになつて社会に出るゴミカス製造機のくせに……。

「……お疲れみたいですわね？」

机の上でダレてる俺に、文香が横から声を掛けてくる。

「そりゃ疲れるよ……どれくらい疲れてるかって言うと、去年の夏休みでしてたバイトくらい疲れる……」

「……ふふ、懐かしいですね。私の勘違いを良いように利用して、存在しない双子の弟を作って……」

「掘り返すなよ……」

あれは本当に悪かったって……。俺の嘘って不思議なことにバレやすいんだよな……。なんでだろうね？

「……不思議そうな表情をなさらないでください……どうせ『俺の嘘って不思議なことにバレやすい』のようなことを考えていらしているのでしょうか？」

「何でわかるんだよ……」

「……分かりやすいからです」

そんなに分かりやすいか……。ここは一つ、試してみるか……。  
「文香、この前さ、英語の小テスト満点だったんだよね。すごくない？」

「それは……おめでとうございます。流石ですね……成果が出ているようで、何よりです……」

「あと数学の小テストも満点だった」

「嘘は結構です……」

「何で分かるの……？」



「……千秋くんが数学で、満点を取れるはずがないでしょう……」  
「……確かに分かりやすいみたいですね、俺は……。英語の話は本当なことも分かっているのだろう。流石だなあ……」

でも、数学も悪かったわけではない。20点満点中8点だし。前までなら0点か1点とかだからね。

そう思うと、もう少し勉強頑張るか、とも思えるんだ。何事も数値化するって大事よ。

「よし……もう少しやろう」

「ふふ……頑張って下さいね」

そう言いながら、文香は俺の向かいの席で本を読む。今日はラノベではなく普通の本。小難しい書籍を読んでいる。俺も有名な作家の奴は読むようになったっけ。夏目漱石とか、アガサ・クリステイとか。そんな事はともかく、もう少し勉強を進めよう。泣き言を言う暇があったら、ゲームをしたい、漫画を読みたい、文香と遊びたい。でも、ゲームをするよりも漫画を読むよりも文香と遊ぶよりも、今は勉強しない。

「……いや、やっぱり文香と遊ぶってのは勉強より上かな。」

翌日、なんかクソ体が痛いと思って目を覚まし、身体を起こすと、パサッと背中から毛布が落ちた。どうやら、俺は机に伏せていたまま、勉強の途中で眠ってしまったようだ。

しかし……マジ腰が痛えな……。あと背中も……。何っーか、身体が硬くなった感じ……。

てか、毛布は文香がかけてくれたのか？ てか、文香は何処だ？ てか、今何時だ？

「……」

時計を見ると、時刻は9:47。遅くまで勉強してた割には早起きだな……。とりあえず、今日が休みで良かった。

なんて思っていると、パシャあああつという流水音の後、トイレから文香が出てきた。

「……ふふ、おはようございます。昨晩は頑張りましたね」

「あ……おはよ。って、準備早いな。仕事だっけ？」

既にパジャマから私服に着替え終えていて、いつでも外出できるように準備万端である。……化粧はしてないけど。ま、俺は化粧してない文香も好きだけどね。

「いえ……仕事ではありません。実は、たまには千秋くんの気分転換にお誘いしたくて……」

「え？」

「……ドライブなど、如何でしょうか？」

「え……ど、ドライブ？」

「……はい……」

「免許持ってるの？」

「……この夏休みの間に、何度か通って……何とかこの前、獲得致しました……」

マジかよ……全然、気付かなかった。勉強してたからか？

「でも、勉強が……」

「……たまには休んだって良いでしょう。根を詰めすぎても、良い結果は出ませんよ……？」

確かにそうだけど……ま、良いか。彼女がこんな風に誘ってくれているのなら、行かない方が失礼ってもんだ。

「じゃあ……頼む。俺も運転して良いの？」

「ビンタですか？」

「冗談だから……」

叩かなくても良いじゃない……。

そんなわけで、とりあえず着替えて朝飯だけ済ませて部屋を出た。エレベーターに乗り、文香が地下一階のボタンを押す。

「このマンション、地下とかあったんだ」

「……元々、叔父のお店が置いてある、という理由で私はここに住んでいますから。これから使う車も、叔父からお借りするものです……」

「じゃ、汚しちやまずい奴ね」

「……それは私が、仮にマイカーを購入したとしてもやめて欲しいのですが……」

苦笑いを浮かべながら言われてしまった。や、別に汚す気満々とか  
そういうんじゃないから。

「今日はどこ行くん？」

「そうですね……とりあえず、神奈川方面に向かおうかと考えており  
ますが……」

「神奈川？」

「……聞いた話になりますが、ここから近場で運転するだけで楽しく  
回れるのは、神奈川なのだそうです……」

「ふーん……」

もしかして、わざわざ調べてくれたのか？ 多分だけど、事務所の  
人に聞いて回ったんだろう。

「文香」

「……なんですか？」

「ありがとう」

「……はい」

地下に到着し、二人で駐車場内を歩く。朝……というより午前中な  
のに、当たり前だけど地下は薄暗い。こういう所で、刑事ドラマだと  
遺体が転がってたりするんだよな。

「どうする？ スタンガン持った男が待ち構えてたら」

「……その時は……そうですね。手首から糸を出し、スタンガンを奪  
いつつ、犯人の後方にも反対側の手から糸を出し、引き込みながら地  
面を蹴って接近、顔面に拳を叩き込みます」

「スパイデイかな？」

「……千秋くんでしたら、どのような対処を？」

「胸のアーリアクターを2回押して変身する」

「そっちこそ社長ではないですか……」

俺と文香って好きなアニメやゲームは被るんだけど、推しキャラは  
全く被らないのよ。アメコミだと、俺はトニーが好きだけど、文香は  
スパイデイ好きだし……ん？ そういや文香ってSAOだとキリト、  
銀魂だと総悟、FGOだと小太郎(或いは一ちゃん)が大好きだし……  
もしかして。

「文香の性癖ってさ、男子高校生くらいの年齢の男の子？」

「……」

「一ちゃんは違うけど。」

言うのと、文香は黙り込む。微妙に頬が赤い。この子、割とムツツリだからなあ……。ついこの前も俺には内緒でBL同人誌買ってたし。

「……そういう千秋くんだって、本当はロリコンの癖に」

「ちがうから！ 年端もいかない少女が刀を振り回している姿を見るのが好きだから！」

「尚更、危ない感じがします……」

「どういう意味だよ!?」 別に性の対象として見てるんじゃないやなくて、そういうシーンがあったら何となく興奮するっただけだからね!?」

何とか言い返そうと思っていると、相変わらず頬を赤く染めたままの文香が、長い前髪の間隙から俺の顔をチラリと覗き込むようにして、聞いて来た。

「ち……ちなみに、ですが……私が、帯刀をしていたら……如何でしょうか？」

「はっ？」

「……」

……文香が帯刀、か……。まあ、こう見えて腕力はあるし、持つだけなら問題ないが……。いや、そもそも太刀つてのは正しい振り方ってもんがあるし、文香の運動神経じゃ、腕力はあっても結局、刀に振り回され、バランスを崩しておととと……と、転び掛け、地面に刀を突き刺しながら自分はヘッドスライディングをかますように転がる未来しか見えない……。

それはそれで可愛いけど、やっぱり文香に武器は似合わないよね。

「……時代を合わせるなら、文香は街を守護する陰陽師タイプだよ。ね。烏帽子とか似合いそう」

「……わ、私に刀は似合いませんか……？」

「着物は似合いそうなんだけど……持つだけなら、どちらかと言うと薙刀の方がまだ似合いそう」

「……な、なるほど……」

まあ、薙刀も結局、刀と一緒に振られる未来しか見えないけど。

そんな話をしながら、車の前に到着した。意外や意外、文香自身の車ではないとはいえ、ミニクーパーだった。

車に詳しくないアレだけど、この車くらいは知っている。

「ミニじゃん。良いなあ」

「……確かに、あまり大きな車ではありませんけど、その分、運転しやすいですよ?」

「あ、いや車の名前な。ミニクーパーを略してミニ」

「あつ……そ、そうでしたか……これが、ミニクーパー……」

あ、名前は知ってるんだ。本に出て来たのかな?

「……では、参りましょう。助手席に乗ってください……」

「運転しようか?」

「……免許とってから言ってください。P5Sでも、あなたやたらと運転したがる選択肢を選んでいましたね」

「だって免許欲しいもん」

「……あと半年、待ちなさい」

普通にお断りされたので、大人しく助手席に座る。……ホント、こういうところは男が年下だと辛いわ。今の所、養われてるのも俺、家事をするのも俺、助手席に座るのも俺と、男がやるべきことは全部、文香がやってる。

キチンと初心者マークをフロントに貼ると、文香も運転席に座り、シートベルトを締め、出発した。

キーを差し込み、エンジンを掛けると、ギアレバーをDに流して控えめにアクセルを踏みながら、ハンドルを切って出口に向かった。

「……」

「……? ……あの、如何されました……?」

「いや、ちゃんと運転してるなって」

「……バカにしています?」

「違って。だって文香がまさか運転って……」

「……やっぱりバカにしていますよね? 仮免で一回、落ちてるだけで実務は問題ありません」

「大丈夫か本当に？」

俺も免許センターについては詳しくないけど……確か、仮免って教習所の敷地内を運転する奴だよな？ 思いつきり実務で落ちてるけど、どうなの？

俺の不安など無視して、文香は車を走らせる。駐車場内をゆっくりと徐行しながら、地下から出た。

「免許試験ってどんなことやんの？」

「……そうですね。やはり、運転です。踏切手前のルールや、坂道ではどう動くのか、救急車等の緊急車両が通る場合はどうするのかを学び、実際に車を動かして練習します……」

なるほどね。事故でも起こしたら大変だもんな。

「でもアレだよな。煽り運転とかそういうのあったよね。そういうのはやっぱり習ってないんだ？」

「……習うわけがないでしょう……。あの手の輩は、私も免許を取る前は、正直、人としてどうなのか、と思っただけですが……免許センターの教員の方から聞いたお話では『事故を起こさないうえ、法定速度よりも遥かに遅い速度で走行している人が増えた所為』というお話をお聞きして……」

「ああ……」

確かに、うちの両親も運転しながら「何ノロノロ走ってんだボケが！」ってたまに車の中でキレてたっけ。ルールを守るのは当たり前だが、必要以上にビビりになる奴が多いって事ね。

「……もちろん、だからと言って煽り運転をして良いわけではありませんけどね」

そう言いながら、文香は実に安定した運転を続ける。40キロ道路を、40〜45キロ程度を保っている。

「……音楽、流しましょうね」

「お、あるんだ」

「……実は、昨晚、CDを作成しました。是非、イントロから何の曲か当ててみて下さい……」

「良いね」

そんな話をしながら、二人でドライブを続けた。

## ドライブ（2）

ドライブでの目的地は神奈川。見晴らしも良くてフラツと通り掛かったから寄ろうと思える場所も多く、二人で車の中でのんびりする。

高速道路に乗っても、文香の運転が乱れることはなかった。80キロくらい平然と出しても、変に緊張することも力が入り過ぎることもなく、むしろ二人で雑談しながら車を転がす。

「……つまり、Fateや終末のワルキューレ、銀魂以外にも史実を元にして作られているアニメはあります。ペルソナだって、各パレスのボスの中には、本当にあった事件を元に行っているものがありますから、そういうのを調べて初めて『アニメや漫画は勉強になる！』と言えるのです。ただアニメに出て来た内容をかじった程度では、にわか知識がつくだけで、勉強になったわけではありません」

「なるほどねー」

相槌を返しながら、文香の長文を耳にする。ほとんど喋り倒しているのは文香だけど、俺はそれで構わない。結構、文香の話は面白いのよ。共感できる事が多い。

「……読むだけで勉強になる漫画なんて……そうですね。はたらく細胞くらいでしょうか？」

「あー確かに。あれ完全に教科書だもんね」

「……ダンベルもそうと言えますが、あれは筋トレの話ですから。実践しないと勉強してるとは言えないでしょう……」

ちなみに、あのアニメが流行った頃に、文香の家では毎日筋トレが行われていたの言うまでもない。ホント影響されやすいのよこの子……。

すると、ふと視界に入ったのはSAの文字。海老名のサービスエリアのようだ。

「海老名SAだって」

「……ああ、聞いたことあります。グルメが多いサービスエリア、でしたっけ？」



「少し休んで行く?」

「そうですね……ドライブはまだ始まったばかりですし、少し見てくださいましう」

グルメ、と言う言葉に惹かれない人間はいない。あまり外出しない人間なら尚更だ。かく言う、俺も少し覗いてみたいし。

「昔から、俺、サービスエリア大好きでさ。なんか知らんけど」

「私は……昔はあまり好きではありませんでしたね……。その……寄ると、絶対にお手洗いを薦められ、車の中での読書を中断せざるを得ませんでしたから……」

「ああ、なるほど」

つまり、子供の頃から本の虫だったわけですね……。でもまあ、今は車が運転できる程度には読書も我慢できるようになっていたんだし、問題ないと言えば問題ないけど。

そのままサービスエリアに突入し、車を止めた。休日とはいえ、土日の二連休でわざわざ高速を使うような遊びに出掛ける人は少ないからか、あまり混んでいなかった。

その点では願ったりである。

「……本当に大きいですね。サービスエリア……」

「それな。ここが目的で高速乗る人もいそうな程」

「……結構、そういう方もいらつしやるそうですよ? 私の事務所にも、車の運転が好きな方が、大きいサービスエリアのために、高速を走ること多いみたいで」

「それ、もつと言うと運転したいだけじゃね?」

「かもしれないね……」

そんな話をしながら、サービスエリア内を見て回った。毎度、思うのが、何故こういう所の飯はうまそうに見えるのか、と言うことだ。不思議と食欲を唆られる。

「なんか、食べて行きます?」

「え、神奈川で食わなくて良いの?」

「……いえ、軽くという意味です。お腹いっぱいにならない程度に、一つくらい間食を挟みませんか?」

「なるほど。そうしようか」

うん。決定。

そんなわけで、二人でサービスエリアの中を適当に回りながら、軽く食べ歩いた。

×  
× サービスエリアの後は、そのまま神奈川に直行した。やって来たのは、箱根湯本。温泉で有名な場所だが、流石に予約なしで温泉は無理だと思うので、色々と見て回ることにした。

「箱根かあ……俺初めて来たわ」

「……私もです」

「温泉しか知らないんだけど、何があるの?」

「……箱根は、そうですね。まず美術館が多いです。彫刻の森、ガラスの森、岡田美術館などと、美術館によって展示品は様々ですが、どの美術館も展示品のジャンルが異なっているんですよ?」

「美術館……なんか、俺のイメージだと絵ばかりのイメージがあるんだけど」

「……それは偏り過ぎです」

まああんま詳しくないからこそ、見てみたいという気持ちもある。特にほら、なんかカッコ良いオブジェクトとかあったらテンション上がるじゃん。ペルソナ5 で俺が一番好きなのは祐介だし、芸術方面を理解したいというのもある。

「よし、行こうか!」

「……はい!」

二人で美術館巡りを始めた。

色んな美術館を見て回ったが、俺の中で一番、ツボだったのは彫刻の森。やたらとカラフルな造形が多く設置されていて、これが夜中に出現したらそれだけでホラーだ。……美術館巡りのホラゲとかあんのかな……。

「やってみたくない? 美術館巡りのホラゲ」

「嫌です!」

断られた。

× × ×  
続いてやって来たのは、星の王子さまミュージアム。俺はこの本をあまり知らない。ボイジャーが実装されて少し知ったくらいだ。なんかよう知らんけど、Twitterで得た知識くらいで。

さて、そんな俺はともかくとして、だ。問題は、俺の隣の彼女である。めっちゃ目をキラキラさせている。

「はわわ……………、……………ここが……………星の王子さまの……………！」

「……………好きなの？」

「そ、それはもう……………！ 子供の頃に、何度も読んでいて……………ここがあると知った時から、一度で良いから来てみたくて……………！」

「……………そっか」

こんなに子供みたいにはしゃぐ文香はかなり珍しい。いや、普段から割とレアドロしたりガチャでレア引いた時ははしゃいでいるが、そういうのとは種類が違う。

目をキラキラさせ、興奮気味に頬を赤らめ、普段のスローペースとは思えない程、あたりをキョロキョロと見回す。うん、可愛い。

「さあ、参りましょう。千秋くん……………！ 砂漠に不時着しに……………！」

「え、やだそれは」

そんな絶望的な話なのこれ……………。砂漠に不時着とか、死んでも嫌なんだが……………。

……………と、思っていたが、中を見て回っていると、それはもう中々、面白かった。俺は星の王子さまという話を読んだことないから、正直「へびに飲みこまれたゾウ」とかその辺は何を言っているのかわからない。

じゃあ何が面白かったか？ 決まっている、文香の表情だ。作者の心情的なムービーが流れている所から、まるで靴を釘で止めているかのように動かなくなったり、世界各国の言語で書かれている「星の王子さま」が置いてある場所で、分からない言語はスマホで調べながら読み耽ったり、中に設置されているカフェで感想を語り合うという名目で自身の感想を延々と語ったりと、それはもう可愛かった。

俺としては、そんなふみふみが見れた時点で満足である。

で、二人で車に乗り込む。発進する直前、文香が俺に本を差し出して来た。

「? 何?」

「……先ほど、購入して来ました。プレゼントです」

「俺に? てか、英語?」

「勿論です。勉強と同時に、本を読ませてあげます。……今晚は、寝かせませんからね?」

……えっちなセリフがえっちに聞こえなかったのは、俺が悪いのだろうか?

さて、そろそろ夕方である。最後は夕焼けを見ながらどうしようか? と、なったところで、文香アイがまた目敏く面白いものを見つけたのである。

そう、足湯である。やっぱり、箱根に来たら温泉は外せない、かと言って温泉には入れない。ならば、足だけでも味わおうということだ。

飲み物と、俺は焼きモンブラン、文香は九頭龍餅だけ購入し、二人でタオルを持って足湯の前に来た。

「ふふ……美味しそうです……」

「それな」

二人で席に座る。文香はロングスカートなので、少し裾を持ち上げながら入浴する。脚だけなのに色っぽく見えるあたり、本当に文香は美人さんだ。もう俺、人生の運を使い果たしたんじゃないか、と思う程。

すると、太ももの上に借りたタオルがファサツと被せられる。顔を上げると、文香が微妙に恥ずかしそうに赤らめた頬を膨らませていた。

「……脚、見過ぎです。えっち……」

「たまに先に寝たふりして、寝てる彼氏のズボンの隙間からパンツを盗撮する女に言われてもな……」

「っ、な、何故それを……!?」

分かるわ。何度も繰り返されれば。とはいえ、確かに見過ぎは良くないので、それ以上は何も言わずに隣に腰を下ろした。

二人揃って、お茶を一口、口に含む。ほっ、という息が口から漏れた。なんか、ホツとしてしまった。

「気持ち良いですね……足だけなのに……」

「ほんとにな……足だけなのに……」

身体ごと浸かったら、俺達はどうなってしまうのだろうか。蕩けてしまうのでは？ さらに悪い事に、俺達の目の前にはお饅頭があるわけ。

ゴクリ、と喉を鳴らすと、これまたほぼ二人同時に各々の和菓子を口に運ぶ。飾った直後、程よい甘味と渋味が口内に広がる。

「ほわわぁ……お、おいひい……」

「俺達、死ぬのかな……」

「何を言っているんですか……ここは、既に天国です……」

「そうだったな……」

お互いに何を言っているのか分からないまま、とにかくホツとした時間が過ぎていった。

すると、ふと文香が俺の手元の和菓子に目を向けている。

「……食べる？」

「良いんですか？」

「何が『良いんですか？』だよ。いつもと違って即烈で返して来やがって。食べる気満々でしょ」

「むっ……いい、良いじゃないですか。女の子だってお腹空くんです……」

「別に良いけど。ほら」

「ん、あ、あーん……」

ナチュラルに食べさせてあげる事になったが、もうこれくらいじゃ俺も文香も特に何も思わない。慣れてしまった。

次は俺の番かな？ と思ったら、文香の手元には何もなかった。やっぱり食いしん坊じゃないか。

「……はふう……」

……でも、文香が気持ち良さそうだから別に良いや。

しかし、だ……。突発的に「行こうか」ってなった割には、あまりグダグダせず良いペースで楽しめたなあ……。なんだか、たまにはこうして旅行するのも悪くない。日帰りだから良いのかも、なんてことも思ってみたり。

それもこれも、全部文香のおかげなんだよなあ……。わざわざ受験生の俺のために気を利かせてくれて……。

「文香、今日はありがとう」

「いえいえ……」

……声がふにやふにやしてんな……。まあ、それくらいの心地でいてくれた方が、俺としても色々言いやすい。

「俺、ちゃんと明日から勉強して、大学行くから。そしたら、免許取って、今度は俺が文香を色んなところに連れて行くよ」

……少し、というかだいたいぶ恥ずかしいこと言ったな……。まあ、今の文香なら聞こえてないと思うけど……。と、思っただけを見ると、慈愛に満ちた表情を浮かべている文香が、こちらを見ていた。

足湯から立ちのめる湯気と、そこから伝わって来ている熱が頬を好調させ、例え足湯であっても、色っぽさをこれでもかと言うほど前面に出された文香が、微笑みながらこちらを見ている。

「はい……。楽しみに、していますね……」

「……」

そうして小首を傾げる文香から、思わず目を逸らしてしまう。ダメだ……。今では、もう完全に俺の方がいじられる側だ。前までは、何を言ってもすぐ照れてしまう可愛い年上だったのに……。

そんな俺に追い討ちをかけるように、文香は俺の肩に頭を乗せる。そして、目を閉じながら、色っぽい声で告げるように言った。

「私は……。千秋くんのお話は、いつでも聞いていますよ……。っ」

「……」

聞こえてないと思って言っただけでもバレてるよ！ こいつ、ほんとに……！

「……ふふ、もう少しのんびりしたら、行きましょうか」

言いながら、俺の肩から頭を離さない文香。温泉の熱もあつてから、俺の体温は過去に無いほど、上がっていった気がした。

××  
はてさて、このまま円満に帰宅……と思つたが最後、そうは問屋がおろさない。旅行慣れしていない人が必ず陥る罠、それこそ予測出来るはずなのに、旅行の楽しさでつい頭から抜けられる日常のトラップ……そう、渋滞である。

帰宅ラツシユに巻き込まれ、高速を低速で帰らなければならぬこの時間は、楽しかった時間を虚無にする。

「あー、全然進まねーなー」

「……」

こういう時、イライラするのは運転手側。文香に限つてそれは無さそうだが、まあ全くストレスがたまらない聖人はいないと思ひ、文香の愚痴を聞くため、そんな事を言つてみたのだが、反応はない。このままじゃ愚痴つたみたいじゃん……。

「にしてもあれだよな、やつぱ足湯が一番、よかつたよな。今度は混浴じゃなくても良いから、全身浸かつてみたいまだあるよな」

「……」

「あ、てかあれ気にならん？ ドクターフィッシュ。体の汚れを食つてくれるサカナ」

「……」

「ああ、魚と言えばさ、そろそろ秋刀魚のシーズンだよな。俺、実は焼き秋刀魚より刺身派なのよ」

「……」

「……え、なんでずっと無言なの？ こうなると、どれくらいシカトされるか試したくなるな。」

「そういえば、この前文香が出てるバラエティ見たよ。あのバスケの奴。文香にしてはシュート入つてたじゃん」

「……」

「でも、気付いてなかったかもだけど、シュート打つたびにおへそ見えてたから。そこは気をつけたほうが良いよ。俺含めて男をムラムラ

させるから」

「……」

「キリトってウザーよな、かなり」

「……」

「……あと10秒無言だったらおっぱい揉むから」

「……」

10、9、8、7……く割愛く……2、1……。

「はい揉むよ。覚悟し……」

「……ねえ、千秋くん……?」

「? 何?」

急にどうしたんだ……?」

「……凄いこと、お願いしても良いですか……?」

「何? 今から噛んでくれとか? 流石に運転中は危ないでしょ」

「……私が、合図をしたら……そ、その……スカートとパンツを、下ろ

して……ペットボトルを、セットしてくれますか……?」

「いやいや、流石に運転中にその手のプレイはダメでしょ。おっぱい

とか冗談だから、事故を起こさないように落ち着いて運転を……

えっ、本気で言ってるの?」

「……」

直後、少し前の車が進み、続いて文香もブレーキを踏む足を微妙に緩める。高速道路のライトが、文香の横顔を微妙に照らし、暗く見えなかった表情をようやく照らしてくれた。

その表情は、まるで沈没寸前の船の舵を握る船長のように大量の汗を浮かべ、目尻に涙を浮かべていた。

心なしか、小刻みに身体を震わせ、手に握られているハンドルにそれが伝っていた。

「……マジで?」

「……」

遠足は家に帰るまで、という懐かしい格言が、嫌というほど脳裏に焼きついた。



### ドライブ (3)

人類史上、最も古くからあるトイレとは、大地である。それは、当たり前のことだ。穴を掘ってそこにするなり、森の中で木にかけるなり、川の中で流しながら用を足したりとこなされてきた。

それが、徐々にトイレは進化を遂げていく。便が肥料になることを覚えた人類は、やがて人の身体から出る最も汚いものを溜め込むようになった。それを使う事で、食べ物成長に関わりがある以上、無駄に捨てることはしなくなったのだ。

しかし、人類の科学力が進化した事により、わざわざ臭いものを確保しておくようなことは、再びなくなった。

植物に肥料として使う場合は、わざわざ便を用いなくとも、さらに育つ上にそこまで臭くもない化学肥料を開発し、それらを使い、さらにトイレにも匂いが残らないよう、水洗トイレと消臭アイテムが開発された。

それと同時に、便を排出する行為そのものを、他人に見られなくなるよう、配慮までされるようになった。

よって、羞恥心も生まれ、品性というものを確立し、それらが文化を組み上げたことに大きな役割を買ったといっても否めないだろう。

だが、その新型トイレも唯一、初代トイレに負ける面があった。「トイレをする所」を確立し、羞恥心を生み出し、大便や小便に「下品」の烙印を押したことになる最後の弊害……そう、どこでも出来る、という利便性である(便だけに)。

「文香、落ち着け、大丈夫。お前にそんなハイレベルなプレイはさせない。とりあえず、膀胱をキュツと閉めておけ。良い?」

「……ペットボトルの準備はできましたか?」

「だから落ち着けええええ!」

ダメだ、この子パニックだ! いや、そもそも運転しながら小便つて、どうやるつもりだよ!? ペットボトルあっても厳しいだろ!

男なら、ペットボトルの飲み口に入れて出せば何とかなるが……いや、女の場合も口を穴に挿じ込んでやれば……いやいやいや、そんな

状態で運転できるわけがねえ！ 最悪、このまま渋滞車6台玉付きエアバッグ事件のマブっちゃんだ！

正直、俺は例え隣で文香がおしっこを漏らすハメになっても何とも思わんし、いやある種では興奮するが、今後それに関していじるつもりもない。

だが、本人はやはり気にするものだろう。こちらが何も言わなくても気を遣われてると思うだろし、逆にこつちが言えば多分、自殺したくなる。

よつて、ここは俺が何とかするしかない……！

「文香、長く見積もってどれくらい保ちそう？」

「……黒部ダム……」

文香は、基本的にメンタルが弱い。特に、咄嗟の時とかはいつもやる気遣いとか一才、できなくなってしまう。

現在の文香は、ピンチのあまり、頭の中を銀河の彼方に置いてきてしまった。故に、豊富な語彙力から適当な言葉を漏らしてしまう。

が、これでも会話ができないわけではない。その言葉には、必ず文香が言いたいことが隠れているはず……。

黒部ダム……史実では、多くの方々が犠牲になりながらも完成した大きなダムだが、その人数を意味するような言葉にはしないはず……つまり、意図は別の所にある。

一番に浮かんだのは、ナツクル星人。帰ってきたウルトラマンに登場した宇宙人で、パンチ一発で黒部ダムに穴を開けられるというが、あの宇宙人はメインで登場したわけではない。あの話で手強かったのは、どちらかというとブラックキングだ。

であれば、他の作品……コナンとか？ 若い童顔なイケメンで誠実な人が大好物の文香は勿論、コナンも好きだ。

だが、大好きと言っても単行本読破しているほどではない。精々、映画を全部見たくらいだ。そんな中、黒部ダムが出てきたコナンの映画は一つだけだ。

「15分……！」

15分以内にこの渋滞がどのくらい動くか……？ いや、でもさっ

き確か……振り返って窓の外から通り過ぎた看板を見る。やはり、近くにP Aがある！

「文香、近くにP Aがある、踏ん張れ！ ……あ、いや踏ん張ったら出ちゃうか」

「……生存フラグ……」

は？ ……ああ、お前を殺す、か……。そう怒らないで……。真面目にやってないわけじゃないんだから……。

さて、これからどうするか、だが……。なるべく、文香の負担にならないようにしないといけない。思い浮かぶのは、やはり会話だ。

俺も電車の中の腹痛は経験ある。そういう時に限って快速なり急行なりに乗っているわけだが、そういう時は手を動かさず、なるべくお腹の痛みについて考えないことがベストだった。腹の痛みに堪えるのではなく、体感時間を早まらせるのだ。

これは、おしっこにも有効なはずだ……！

「文香、面白い事教えてあげよう」

「……que？」

それ何語？ と聞きたいところだが、言わんとすることはわかる。「なんですか？」だろう。

あとは、俺のトーク術次第だ……！

「恐竜いるじゃん、恐竜。恐竜の名前の意味するところは実は色々あって、例えばトリケラトプスは3本角がある顔、って意味なんだ」

「Fort Oiteにハマった雷の神」

「それで面白いのは、ティラノサウルス。暴君トカゲって意味で、アンキロサウルスは連結したトカゲの意味。つまり、サウルスってのはトカゲって意味なんだ」

「……ホワイトテイル……」

よし、この調子で気を逸らす……！

「つまり、外見的にせよ中身にせよ、特徴が名前になってんだよ。パスカルだのニュートンだのとは違うよね。何であいつら自分の名前つけてんだかっての。だから、勉強する側も覚えにくいんだよね」

「……天津飯R？」

「言い訳くらいさせてよ。勉強苦手なんだから」

やりづらかった会話も慣れてきた。頭を働かせれば、文香が何を言いたいのかも分かる。

×そのまま、しばらく会話を続け、渋滞と尿意のストレスを緩和した。

×

残り10分……そろそろPAか……？ 看板も見えてきたし、文香

の表情も柔らかくなってきた。ホント、免許持ってなくてごめんね……。大学決まったら、まず免許取るわ。

さて、もうすぐPAに入る道が……という所で再度、絶望が見えた。

「っ、え……？」

「こ、これは……！」

何と、行列が出来ていた。車の。PAにも車が多く止まっている理由なんて一つしかない。トイレの列だ。

幸い、俺達の車はPAに差し掛かる列の方へは向かっていない。ただ方向は変えられるが……変えたからといって何になるかと言われると……。

「ち、千秋くん……ペットボトルを……！」

「ま、待て文香！ ヤケになるのはまだ……！」

「もう……無理です……おしっこを我慢している、という現状だけでも恥ずかしいのに……その上、こんな醜態……」

「恥ずかしくなんかないから！ 俺しか知らないし、俺も逆の立場なら股間にペットボトル当ててるから！」

「そうだ……！ 千秋くんに飲んでもらえれば、プレイの一環であつてお漏らしでは……！」

「落ち着けえええええッ！」

クッ、な、何か……！ 何か手は……！

慌ててスマホを手元で走らせていると、良い情報が目に入った。

「文香、ここから数メートル先で高速降りられる！ 降りてからなら、コンビニでも何でも借りられる！」

「！」

「変えられそうな時、車線変えて！ 煽り運転と間違えられたら、俺が

何とかするから！」

「は、はい……！」

言われて、文香は涙目になりながら頷く。この涙、これ以上は流させない……！」

「文香、実は俺、この前橘さんと会ったよ」

とりあえず、さっきの作戦続行だ！

「相変わらず、あの子背伸びしてるな。大人になりたいとか言っただけで、公園で体力作りしてたよ。子供のうちに筋トレすると、むしろ身長は伸びなくなるんだけどな」

「……無限に広がる大宇宙……」

あ、だめだ。その答えは全く俺のセリフにリンクしない……つまり、会話も難しくなってきたということだ。

本当に限界だ。何せ、高速を降りた頃には15分なんて、とうに過ぎていそうなものなのだから。

「頑張れ、文香……！」

「アバダケダブラ」

……意味無いんだよね……？ そのセリフ……。

その後は、涙目の文香の横で、俺はできる限りのことをした。車中の音楽は俺のスマホでBluetoothを繋げてクラシックを流したりだとか、空調を寒すぎないように調節したりだとか、思いつく限りのことはやった。まあ、どれも効果があるのかは知らないが。

そして、ようやく俺達は高速の降り口にまで来れた。

「すいてる！ 行けるぞー！」

「は、はひ……！」

「が、がんばれ！」

「ふあい……！」

ようやく車は人より速いスピードで動き出し、高速を降りる。料金は霞むが、ダム決壊を前にしては、背に腹はかえられない……と、思ったのだが……ちよつと、スピード出し過ぎじゃない？ てか、車傾いてない？

「ふ、文香ー！ ブレーキ！ 焦りは分かるけど、ブレーキ！」

「ぶれーき……う？」

「ブレーキって単語を初めて聞いたみたいな反応はやめて！ あなた免許持ってる人だよね!? ……って落とし過ぎ落とし過ぎ！ 後ろに車来てなくてよかったな！」

「あ、あわわわっ……！」

っ、や、ヤバイ……！ 文香を何とか落ち着けないと……！

「文香、安全運転してくれたら、後で文香が言っただけいいセリフなんでも言っただけいい！」

「！……そ、それって……」

「実は文香が密かに書いてるキリト×俺の夢小説のセリフを読んでやるって言っただけだあああああ！」

「……！」

そこから先は早かった。驚く程……それこそハイブリッドカーのように静かな運転で、文香は高速を出て行った。

そのまましばらく街の中を運転するが……近くに用を足せそうな場所はない。

「ち、千秋くん……！」

「今探してる！」

慌ててマップを見ているが、ダメだ。どこもかしこも駐車場付きのコンビニなんて……あるのは、ラブホ。ダメだ、リスクがでかい。デパート。駐車場からトイレまで距離がありすぎる。駅。埋まってる可能性が高い。あとは……！

「……あ」

「っ、な、なんですか……？」

「行く？」

「い、行きます！ 何処へでも……！」

「じゃあ、うん。そこ左曲がって」

「は、はい……！」

まあ……ここに入ったら一泊するしかないわけなんだが……仕方ないよね。

そのまま俺の案内の下、トイレのありそうな場所に向かった。その

場所とは……大型銭湯である。

「着いたよ」

「は、はい……!」

気にしている余裕がない文香は、車を止めてシートベルトを外し、走って出入り口に向かう。

が、慌てている時というのは碌な結果にならないものだ。自分のつま先で自分の踵を打って、文香は前に転んでしまう。

「きゃっ……!」

「ふみっ……!」

「あっ、ああ……」

……あれ? その反応……!

「ちよつと、出……!」

「一瞬、一瞬堪えろ! 尿道をキュツと閉めろ!」

「は、はひい……」

涙目で答える文香の腕を引き上げ、背中に乗せ、ポケットからスマホを取り出した。よく見ると、この自動ドアは押さないと開かない手動式自動ドア。

そこに向かって、スマホをぶん投げた。見事に扉が開き、滑り込んで店内に入る。

「いらっしやいま……お客様!? 靴をお脱ぎくださいま!」

「温泉入って行くからトイレ貸して!」

「ふあっ!? は、はい! 右手の奥です!」

ジャンプしている間に踵とつま先を使って靴を脱ぎ捨て、着地をしながらスライディングしつつ、立ち上がって右手の奥に走った。

トイレの扉を開ける。男子トイレか女子トイレか? 否、多目的トイレが適切だ。

「文香ああああ! パンツ……!」

「もう脱いでます!」

「よし、思い切って……やっちなえええええツツ!!?」

そのままの勢いでトイレの上に置いた。スカートをたくし上げ、そのまま便器にまたがり、用を出す。その時の文香の顔は……それはも

う、一面にチューリップ畑が咲き誇りそうな程、満面な笑みを浮かべていた。彼氏の前で、おしっこをしているにも関わらず。

「は、はふうく……ま、間に合ったあ……」

……ふう、良かった……と、トイレの鍵閉めない。あと、なるべく見ないようにしないと。

外からは鍵を閉めらんないから、俺も中にいるしかないし。

しばらく待機すると、用を出し終えたのか、バシヤアアアツと流す音が聞こえた。

「ふう……ようやく、ホツとしました……」

「良かったよ、間に合って。……パンツは平気？ さつき少し出たとか何とか……」

「……帰り、買って帰ってもよろしいですか……?」

おんぶされている間に脱いでいたパンツは、割と湿っているようだ。

「良いよ。……あ、それとき、ついさつきここで風呂入っていくって言っちゃったんだけど……」

「ふふ、勿論、大丈夫ですよ？ ……というか、このままではドライブの思い出が我慢だけで終わってしまいそうでしたし、助かります……」

「……それもそうだな」

とりあえず、何とか事なきを得た。



そろそろふみふみ一位で。

AM6:30。俺は起床する。普通、女性の朝は男性よりも早く起きる。それは、化粧や髪を整える時間が必要だからだが、文香が俺よりゆっくり起きるのは、髪を整える事はできるが、化粧が出来ないからだ。

つまり、すつぴんで事務所に向かい、仕事がある時はスタイリストやらメイクの人やらに顔をやってもらう。

朝早くから、俺の日課は始まる。

「……」

とりあえず、眠っている文香の頭を撫でてあげる。いや、撫でてあげると言うより撫でたくて撫でているのだろう。寝ているときの方が、抵抗がなくて撫でやすい。あとヘアバンドが無い文香を撫でられるタイミングは、基本的にここだけだ。

このとても身嗜みに興味が無いとは思えないほどサラサラな黒い髪、普段は大人びているが、寝顔にはどこか童顔さが残っていて、俺の三つ上とはとても思えない。特に、口元を若干、尖らせて「すう、すう……」と寝息を漏らしているのが異常に幼くて可愛い。

すると「んむっ……」と、女子大生から吐息が漏れる。目を覚ましたようだ。

「……悪い、起こしたか？」

確信犯である。あ、いやペルソナで学んだ限りだと、確信犯って「正しいと確信しての行動」だったかな？ まあ良いや。

とにかく、起きるのがわかって撫でた。何故なら……。

「……う？ あ……ちあき、くん……」

「ああ、俺だよ」

「んー……」

「わっ、とと……」

頭を撫でて起こすと、彼女の甘えん坊な面が垣間見えるからだ。寝ぼけた様子でこつちに身を預けてくる。正面から、胸が当たるのも気にせず、肩に顎を置いて抱き締めてくるのだ。

「文香ー？ どしたー？」

「……んにゆ、おかあさん……」

「はいはい、お母さんですよー？」

適当に返しながら、寝惚けが解消されるまで待機。背中を軽くさする。少しでも長くこの状況を堪能するためだ。

そんな中、つつ……と、肩に何か触れる感覚。寝ぼけてる文香の口元から、涎が垂れたようだ。これはかなりレアである。

そのまま、10分が経過し、ようやく文香は目を覚ます。ボーツとした様子で目が少しずつ開いていく様子を、手鏡を使って観察した。ベッドの後ろに設置されている小さな鏡とスマホの自撮り機能を利用して確認する。可愛い。てか、よだれが少しえっち。

「つ……い」

やがて、自身の今の状況を把握した文香が頬を赤くして目を見開く。鏡があるのだから、そりやそうだろう。

ガバツと俺から離れ、パジャマの裾でよだれを拭う。

「ち、千秋くん!? す、すみません……！ 私、つい寝ぼけて……パジャマの肩の所、シミに……」

「大丈夫、安いもんだ」

「うう……は、恥ずかしい……」

ちなみに、こうなる事が分かっていて俺がやっている事に、文香はまだ気付いていない。今日ので76回目だが、まだまだ使えそうだ。

そんな中、文香は恥ずかしそうに頬を赤らめて、顔を隠す両手の指の隙間から青い瞳を覗かせながら、俺の顔を覗き込んだ。

「……私、他に何か……してしまいました、か……？」

「俺のことお母さんって呼んでた」

「っ、うう……羞恥心が、くすぐられるようです……」

今度は指を閉じて瞳をシャットアウトしつつ、俯く。ふっ、信じられるか？ これが俺より三つ年上の女性なんだぜ……？

ほっこりしつつ、時刻を見た。もう6:50。だいぶ時間を使った。

「文香、それより髪整えて来な。もう時間ないよ。今日仕事でしょ？」

「あっ……は、はい……い」

「それともお母さんがやってあげようか？」

「~~~~っ！」

あ、怒った。俺の胸を両手でポカポカと叩く。可愛い。でも力はそれなりにあるから痛い。

「も、もう……意地悪……！ 知りませんっ」

「ごめんごめん、朝飯何が良い？」

「……ホットケーキ」

「はいはい」

……割と時間食うな。速攻で終わらせなければ。

さて、文香が準備を済ませる間に、俺はホットケーキの準備と並行し、コーヒーを淹れる準備もする。

もう料理も慣れたもので、スイスイと手際良く進めていく。それでも余裕があるので、台所から文香の様子を観察する。

まず、寝室で着替えを済ませた文香は、いつもの肩が露出する服に、ロングスカート、ストールを装備する。綺麗だが、まだ髪は整えていないからボサボサで、ヘアバンドはつけずに手に持っている。

続いて、洗面所に入った。髪を整えにいったのだろう。その間に、俺は先にコーヒーをセットし終え、コーヒーメーカーの電源を入れる。

しばらくして、文香が洗面所から出てきた。寝癖は消え、ヘアバンドを巻き終え、もう完全にいつもの文香である。

その様子を眺めながら、ホットケーキのタネをフライパンに流し込んだ。

文香はそのままの足でトイレに……と、そこで足を止め、こつちを見た。

「ジロジロ見ないで下さい……！」

「っ、わ、悪い？」

やべっ、バレてた。慌てて顔を背けて料理に集中する。

じゅわわわわっ……と、ホットケーキの様子を眺めながら、皿を用意し、冷蔵庫からバターを出し、棚からハチミツを用意しておく。

そろそろ良いかな？ と思った時、ばしゃあああつと流す音がす

る。文香がトイレから出てきた。

「飯、もう少しできるから、フォークとナイフ用意してくれる?」

「あ、は、はい……。良い香りですね?」

「そりやまあ俺だからな」

数回、ホットケーキを宙返りさせて……。よし、完成。皿に乗せて、ハチミツとバターも一緒に運ぶ。

食材と食器を並べ、テレビをつけ、ニュースをチラ見しながら席に着いた。

「よし、食べようか」

「……ふふ、彼氏に女子力で負ける私……」

「大丈夫、俺は男子力で負けてるから」

「……なんですか、男子力って?」

「稼ぎとか運転とか?」

「……それならば、時がくれば私は追い抜かれてしまうと思いますが」  
「なら、女子力も同じじゃね?」

まあ、文香がやれば、の話だけど。

しかし、今の一言で文香は気合が入ったようで「確かに……」とだけ呟き、反論してくることは無かった。

で、一緒に「いただきます」と挨拶して食事にした。

「んっ……。おいひい……」

「良かった」

なんだかんだ言って、甘いものを食べている文香は、それはもう幸せそうだ。瞳を閉じて、モキュモキュと音がしそうな程、美味しそうに食べてくれる。こういう表情を見ると、こつちとしても作った甲斐があるというものだ。

キコキコとフォークとナイフを器用に使いこなし、切れたかけらをフォークで刺し、口に運ぶ。

やはり、甘いものが嫌いな女の人はいないもんなのよ。前も俺がよくスイーツ作ってあげたら喜んでたし。その後、ダイエットに付き合わされたわけだが。

「……お、お代わり、良いですか……?」

女の子が朝からガツツリ甘いものを食べるのは恥ずかしい、と思つてなのだろうか？ 頬を赤らめて、恥ずかしそうに言う。可愛い。

「……別に良いけど、太つても知らんぞ」

「うう……そ、そうですね……やっぱりやめておきます……」

……そんな顔されると、なんか罪悪感が……一応、文香のためを思つてことなんだが……。

うん、まあ……仕方ないか。たくさん食べてる文香を見るのが嫌なわけではないし……うん。

「……ランニングで良いなら、俺も付き合つてやれるけど」

「え……？」

「ダイエット」

「ほ、ほんとうですか……？」

「いつも勉強見てもらつてるし」

「……」

すると、文香はさらに顔を赤くし、俯きながらぽつりと呟いた。

「で、では……お、お願い……しま、す……」

「はいはい」

お代わりを焼いた。手早く焼き上げると、お皿を持って文香の前に置く。

「はい、お待たせしました」

「……美味しくそうです……あと五皿はいけます」

「時間的には行けないよ。早く食べな」

「え？ ……あつ、そ、そうでした！」

大急ぎで食べ始める文香を眺めながら、一皿しか平らげなかった俺は、とりあえず食器を洗いと着替えを済ませた。

さつさと終わらせると、文香は食べ終えたお皿を流しに戻してくれていた。

「コーヒー飲む？」

「あ……は、はい。お願いします……」

コーヒーを注ぎ、机の上に置く。これで、お互いにあとは歯磨きだけして家を出るだけだ。

二人でズズツ……と熱々のコーヒーを啜りつつ、ホッと一息つく。  
「ふう……朝ごはん食べ終えてすぐにコーヒーが飲めるなんて……」  
家に一台、千秋くんですね……」

「じゃあ、他の人の家とか行っても良いの？」

「……ダメです……」

「冗談だよ。……三村さんの家とか行ったら、ここで作る倍の料理作らされそうだし……」

「た、たしかに……？」

今の、三村さんには絶対、バレちゃいけない会話だ。

とりあえず、墓穴を掘らないためにも話を換えよう。

「今日はどんな仕事？」

「……レッスンのみです」

「ふーん……ぶっちゃけさ、レッスンってどうなの？ キツイ？」

「……そうですね。私もこれでも体力がついてきた方のはずですが……やはり、レッスンが終わった後は、5〜10分は動けなくなってしまう……」

「やつぱそうなんだ。真夏とか死ぬんじゃないの」

「は、はい……正直、未だに脱水症状に陥っていない自分に、驚いています……」

それは俺も思うわ。夏コミでダウンした文香を見たことあるから尚更。あの時はマジで危なかったんだと思う。参加前に病院へ向かって正解だった。

「ちゃんと、塩分と水分は補給するようになる？」

「は、はい……」

「休憩中、読書に熱中し過ぎて、必要なもの取り損ねた、という風になるなよ？」

「……な、なりませんよ……？」

「何で疑問系？」

……そういうとこだぞマジで。少し心配になってきたな……つと、そろそろ歯磨きしないと。

コーヒーを口の中に流し込むと、立ち上がって洗面所に向かった。

文香もほぼ同時にコーヒを飲み干して向かう。

二人で歯磨きをするのは決して日課ではないが、俺が必然的に家事をすることになっていく現状、歯磨きの時間だけ被るようになっていた。

にゅーつと歯磨き粉を歯ブラシの上に垂らし、口の中に突っ込み、二人でほぼ同時に磨き続け、ほぼ同時にうがいをし、口元を拭う。

洗面所を出て時計を見ると、文香は家を出る時間だった。

「……では、私はそろそろ……」

「おお」

寝室に鞆を取りに行く文香を横目で見つつ、俺は棚から水筒を取り出した。中に氷を入れて、上からポカリを注ぎ、蓋を閉める。

部屋から出てきた文香に、俺は水筒を手渡した。

「はい、文香」

「え？」

「なんか心配だから、水筒」

「……あ、ありがとうございます……」

文香は良い子だから、基本的にこっちの気配りを無碍にはしない。とりあえず水筒を渡しておけば、多少は飲んでくれるだろう。

「じゃ、頑張つてな」

「は、はい……」

水筒を受け取り、笑顔を浮かべた文香は、小さく手を振りながら部屋を出て行った。

アイドル、と言う職業を大学生と兼任しているだけあって、忙しさは人の倍以上だろう。けど、それでもちゃんと両立し、大学の単位も落とさずにこなしているという。

そんな文香を見ると、他の男に彼女がチャホヤされていると言ふのに、俺はその活動をむしろ応援したくなってしまっている。

だから、俺も全力でサポートする。彼女がいつか、トップアイドルになれるように。

はい、勢いでやっちゃいましたー。  
やるなら今しかないと思っただ。

朝、目を覚ますと、まず目に入ったのは隣で寝息を立てている文香だった。相変わらず、俺より年上とは思えない程、幼い寝顔をしている。20超えてこんな純粹無垢な寝息を立てられる人も、そうそういないだろう。

さて、とはいえいつまでも眠ってはいられない。そろそろ仕事だし、朝飯や朝のうちにやっておきたい事もある。

身体を起こそうとすると、ふとモゾモゾと俺と文香の間で何か揺れるのを感じた。何事？と見下ろすと、そこで寝息を立てているのは、香奈美だった。今年で4歳の娘。俺の腕にしがみつき、口元から小さく涎を垂らしている。このパジャマ、もう二度と洗わない。

「……」

ふう、熟睡してやがんなあ……。どうしよう、これ。もうそろそろ起きないと、時間的にもヤバイ。保育園に送る時間があるから、文香も早く起こさないと……。

「んんっ……。パパ、しゅき……」

現在、時刻は6:45。普段の起床予定時刻だが、余裕を持つての設定時刻だ。朝飯は7時からじゃないと間に合わない。それも、作り始めではなく食べ始めるのが7時だ。

が、朝飯はパンとサラダを味噌汁。パンはトースターに放り込み、味噌汁は昨日の奴を火に通せば良いし、サラダは刻むだけ。5分かからない。

女の子だから、文香が香奈美の身嗜みを整えるのだが、整えてから飯にすると、たまに髪や服に溢した食べ物がついてしまう。従って、飯の後に身嗜みを整えるようにしている。

つまり、朝飯の前に香奈美がやる事は何もない。つまり、もう少し堪能してても平気だよな。

全力で頭の中で計算を終えると、文香と香奈美が同じ顔して寝息を



立っている所を見下ろす。

「……」

結婚して、早5年。シンデレラガールと俺の間には、お子さんが出来ていた。

俺と文香は、側から見ればすでに結婚しているように見えていたらしい。そりゃそうだよ。だってほら、高二的頃からほぼ同棲していた、大学でも同じ。

何なら、大学卒業したら結婚の約束をして、それに備えてバイトや仕事でお金を貯めることさえしていた。

お互いの両親に挨拶も終えていたし、式場も押さえていた。で、速攻結婚し、子供が出来た。

俺の就職先は346事務所の事務員。高二以来、色々とバイトしているうちに、なんか信頼と実績を得て、就活するまでもなく就職が決まっていた。

「千秋さん、この後の予定はなんですか？」

で、事務員なのに俺は一人の女の子の担当のように仕事をさせられていた。その子は、橘ありす(22)。いやー、この子成長したよ。前まで文香のこと大好きで、大人になろうと必死な女の子だったのに、今では本当に大人っぽくなってしまっている。

自分のスケジュール管理くらい余裕でこなし、他の子供アイドルの面倒を見ていて、大学生活をしていたときは、見事に両立させていた。ただし、いまだにブラックコーヒーは飲めない。俺と一緒にだ。

「この後？ 帰るだけだよ。てか、18時から仕事は無いでしょ」  
「そっちではありません。千秋さんが帰ってからの予定です」

「え、普通に飯だけど……あ、もしかして文香にまた会いたい？」  
「いえ、どちらかと言うと香奈美ちゃんに……」

そういえば、この子は香奈美を溺愛してたっけ。文香と本当の姉妹のように仲良かったから、まるで姪っ子でも出来たような感覚なのだろう。

「ちよつと待って。文香に聞いてみるから」

電話を掛けた。1コールした辺りで早くも応答がある。

『もしもし！ ママですー！』

ああ、香奈美の声だ……可愛いなあ、相変わらず。全然、似てないのに真似しちゃうあたりがもう可愛い。

「ああ、ママか。ありすがうちに遊びに来たいそうなんだけど、どうする？」

『え、ありすお姉ちゃんくりゆの？？』

ふっ、全く文香に擬態する気がなくて可愛いぜ。もはやほっこりしてしまふ。

そんな中、ありすが俺の袖をくいつくいつと引く。その目は爛々としたい。何故なら、電話の向こうにいるのが香奈美である事に気付いたからだろう。

「代わって下さい」

何処まで可愛がってんだよお前は。まあ、俺はいつでも香奈美と話せるが、ありすはそうもいかないからな。話せる時は話したいと考えているのだろう。

「だが断る！」

「っ！ かーわーっーてー！」

「ダーメーでーすー！」

娘と電話越しで話すことなんて滅多にないんだ。こんなチャンス、逃してたまるか！

背伸びをして俺からスマホを奪おうとするありすを無視して、とりあえず文香が出ている体で香奈美に声を掛けた。

「ママ、良いかな？ ありすを連れて行っても」

『え？ あ……え、ええっ。いいわよっ……』

お前は毎日、文香の何を見てるんだ。大人っぽい口調だけど、文香はそんな口調じゃない。

「10秒！ 10秒で良いのでー！」

「10年早いわー！」

「10年経っても10秒しか電話しちやいけないと？？」

「こっちはこっちでうるせーな。今から会いに行くんだろうが、まっ

たく。

とりあえず、さつさと話を進めよう。香奈美に結論を出すように言った。

「そっか。じゃあ連れて行……」

『コラ、カナちゃん。勝手にママの電話に出てはいけませんっ』

『あつ、やべっ……』

『あと、パパの口調も真似してはダメです』

あ、やべっ……文香だ。

『もしもし?』

「あ、文香?」

『まさか、今カナちゃんに許可を取ってお客さんを連れて来ようとしたわけではありませんよね?』

……あ、やべっ。おこだ。

「そ、そんなわけではないでしょ? 改めて確認するつもりだったって」

『……なら良いけど。それで、ありすちゃんも来たいと?』

「うん。香奈美に会いたいって」

『どうぞ。では、晩御飯は四人分という事で。三人分の仕込みを終えたタイミングで』

あ……す、すまんね。でも、俺が主夫やってた時も、唐突に文香が連れてきたお客さんのために調理の分増やしたこともあったよね?

イーブンだよね?」

「わ、悪かったよ……急で。何せ俺も急に今、言われたもんだから……」

「なんですか、その言い方? 私が悪いんですか? ていうか、早く香奈美ちゃんと話させてください」

「ただだけ執着してんだよ!」

「代わってくれないと、今から抱きつきますよ!」

「やめろ! それやって夜、殺されるのはお前じゃなくて俺の方……」

『ふふ、担当の子と浮気でもするおつもりですか? 良い度胸ですね』  
「違うから!」

だーもう、めんどくせえな! なんか幸せな生活の一部分一部分に

地雷が埋まつてるの何なの!?!?

「文香、ありすが香奈美と話したいって言うんだけど」

『はいはい。今、代わるね』

「悪いな」

『私達も帰ったら、お話ししましょうね?』

……怒ってるよ。ホント、色々あったから……。高校の時、色んな嘘について自分の首を絞めているから、色んな意味で信用が無いのだ。

とりあえず、俺はスマホをありすに手渡した。スマホは、家に帰るまで俺の手元に返って来なかった。

×× 自宅はまだマンション。けど、もうそろそろ一軒家を買えそうなくらい貯まる為、引越しも視野に入れている。

「たでーまー」

言いながら玄関を開けると、トタトタと辿々しい足音と共に出迎えてくれる、可愛い影があった。

「おかえいー!」

「おお。来たな」

屈んで抱き上げる。完全に母親似で、瞳の色は青く、前髪も長めで趣味も読書。髪も首の後ろくらいまで伸びていて、ヘアバンドをつけたらそのまま小型文香に見えるくらいだ。

「ほら、ありすおばちゃん来てるぞ」

「誰がおばちゃんですか、誰が」

「あいすおばたん!」

「はい、おばたんですよー」

頭を撫でてやりながら、後ろにいるありすにも香奈美を抱っこさせてあげる。うちの娘に言われれば一発でおばたんを認めてしまうが、後ろから俺の脹脛を蹴っているの、全然認めてなかった。

そんな中、ふと耳に届いたのは新たな足音。香奈美と比べて大人っぽく重たい足音がするが、それは大人なのだから当然だ。

地味なロングスカートに、地味なノースリーブのニット、その上に

薄い生地 of シャツを羽織っている。全体的に地味だが、数年前とは違って「自分には地味なものしか似合わない」と言うより「年相応に合わせた服装」という主旨で選ばれた服は、自身が持つ綺麗さを際立たせている。

そこに立っていたのは、鷺沢文香。俺の三つ上の奥さんで、現在はモデル業を中心に活動しているシンデレラガールだ。

その物腰柔らかな表情は優しくにこりと微笑み、綺麗な唇からいつもの挨拶を告げた。

「おかえりなさい」

「ただいま」

俺もいつも通りに挨拶をした。

靴を脱ぎ、玄関を上がると文香は俺に声を掛ける。

「まずは、手洗いとうがいです。その後、ご飯にしましょう？　ありませんも、良いですね？」

「あ、はい。お久しぶりです、文香さん！」

「そうですね。一週間ぶりですね？」

全然、久しぶりじゃねえな。高頻度で来たがるもんだから、この子……。まあ全然、良いんだけどね？

さて、手洗いうがいを済ませて早速、食卓につく。四人で机を囲んで、文香が作った料理を前にする。

「では、いただきますでしょうか」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます！」

早速、唐揚げを摘んだ。今では、文香も普通に料理を作るようになった。前みたいに男女の立ち位置逆転問題は、もう起こっていない。

「あー、美味っ」

「ふふ。美味しいね、香奈美ちゃん？」

「うん！　おいひい……！　サクサクのころもを噛みしめると、中からあふえてくるアファアの肉汁が……あちちっ」

「ちよつ、気を付けて食べようね？ 千秋さん、氷お願いします」  
「はいはい」

「香奈美ちゃん、ぺっして、ぺって」  
「ぶえっ……」

しかし、保育園生とは思えない語彙力である。流石、文香の娘だ。感心しながら、冷凍庫から氷を取り出し、コップに入れて持つて来る。

「香奈美、あーん……」

「あー……ひやつ、ふふえはい……！」

「我慢。火傷したら唐揚げ食いにくくなるぞ」

「ふあーい……」

口の中で、ハフハフと氷を舐め回す香奈美。

「ありがとうございます、ありすちゃん」

「いえいえ、こんなに可愛い子のためなら、私は泥でも何でも被ります！」

「いやそんな決意されても困るんだけどな……」

「でも、やっぱり香奈美ちゃんも唐揚げ好きなんですな」

まあ、俺と文香の娘だからな。好みは基本、遺伝されるのだろう。多分、アニメとか漫画好きになるぞ。

「昔はよく俺も唐揚げ作ってたよな。文香も喜んでくれてたし」

「私は、別に唐揚げ自体が好きなのでは……」

「え、そうなん？」

「ただ、千秋くんが作ってくれた唐揚げだから、好きだったの」

「昔は色々ありましたね……。千秋さんの料理が美味し過ぎて、文香さんの体重が増えてしまったり……」

「少しはカロリーを考えて料理を作って欲しかったな……」

「うるせ。俺は太った事ないから、よく分かんなかったんだよ」

そんな話をしていると、氷を噛み砕いた香奈美が顔を上げる。

「えっ、パパもおりよりりできるの!?？」

「あん？ ああ、そりゃあね。昔は俺の方がよく作ってたんだよ？」

「すごい！ ほいくえんのセンサーたちは、たまに『うちの旦那、料

理全然出来ないのよ』って、たまにおはなししてるのに……!」

なんて事を子供の前で愚痴るんだ。……いや、多分昼寝の時間に愚痴ってたのか? だとしたら、まあ寝が浅いうちの子ならではなのかもしれない。

「千秋さん、本当にお料理上手なんだよ? 昔は、文香さんよりも千秋さんの方がおうちの色々、やっていたんです」

「ありすちゃん……あまり余計なことは……」

「そうだぞ、ありす。良い調子だ。本当はパパの方がすごいことを教えてやれ」

「あ、あなたまで……」

あの頃の文香は、女子力俺より低かったからなあ。まあ、そんな恥ずかしがる事ではないさ。良い香奈美の反面教師だ。

談笑している中、香奈美が笑顔で俺と文香に尋ねた。

「じゃあ、パパの唐揚げとママの唐揚げ、どっちがおいひい?」

「……」

「あつ……」

俺と文香の間にスイッチが入ったのを察し、額に手を当てるあります。でももう遅い。聞かれた以上は白黒つける。

「俺の唐揚げのが美味しいよ。料理歴が全然、ちがうから」

「いえいえ、私の方が美味しいと思うよ? もうずっと私が料理しているからね。ブランク空いてる人は勘を取り戻すだけでも時間が掛かるんじゃないかな?」

「料理は長期記憶だから。勘も何も無いから。その辺、分かってない人とは比べ物にならないよ」

「ふふ、どうかな? 試してみても良いんだよ?」

「……言ったな?」

「恥をかきたくなければやめておいた方が賢明じゃない?」

「上等」

久しぶりだ。俺は立ち上がり、冷凍庫に向かう。

もっさもっさと唐揚げを食べている香奈美を抱き上げたありますが、俺と文香に言った。

「では、勝った方が香奈美ちゃんと一緒にお風呂に入れる、ということ  
で」

「OK!」

×この後、唐揚げの処理が大変だった。

×

×お腹いっぱいになったありすを、俺が車で家まで送っている間、勝  
利した文香が香奈美をお風呂に入れている。空腹後に作ったほうが  
美味いと感じるのは当たり前でしょ……。

とにかく、次にやるときは公平な勝負にする、と強く思いながら、再  
び家に戻ってきた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

「香奈美は？」

「眠てる。今日は香奈美用の布団で」

「あそう」

結婚してから、文香は俺に対してはタメ口を話すようになった。そ  
んな事が、昔は馬鹿みたいに嬉しかったっけ。何処かにあった壁が、  
完全に消え失せたような感じがして。

「俺達も、さっさと寝よう。俺、風呂入ってくる」

「明日は、お仕事？」

「いや？」

「……そう。では、今夜……どう？」

言いながら文香は、慈愛に近い笑みを浮かべて寝室を指す。結婚し  
たからと言って、特に大きな変化があったわけではない俺と文香だ  
が、子供が出来てある程度の変化は起きた。

が、その中でも絶対不変、本当なら毎日やりたい所であった営みが  
もう一つあった。こればかりは外せない、と決めていた大事なルー  
ル。これをしなければ、一週間は終わらない、とまで言えることだ。

俺はシャワーを浴びにいき、文香は寝室に戻る。これからは夫婦な  
の~~だ~~。遠慮する事はない。

×

×



「……クツ、そう来たか……」

「推しが亡くなるのは、いつ見てもなれませんね……」  
完徹して、撮り溜めしていた深夜アニメを一気見した。

嫁には勝てない。

文香が一般男性と結婚する、というニュースが出た時は、それなりに騒がれたものだ。

何せ、シンデレラガールだった346事務所の看板娘で、ドラマやバラエティでも普通に顔を出している美女が、芸人やらプロのアスリートではなく、自分の事務所の事務員と結婚を発表したのだから。でも、文香はそれらのインタビューを全て顔色ひとつ変えず切り抜けて来ていた。付き合いたての頃ならヤバかっただろうなあ。

プロポーズは俺からだった。でも公式のプロポーズは文香から。分かりにくい？ ごめんね。

結婚の約束をしたのは大学生の時だったのよ。その時がほとんどプロポーズだったからね。文香の海外ロケに行ってしまった時、外国人のノリが良さそうな歌手と共演し、肩組んだ写真を送ってきた時、独占欲が爆発した。

当時の事を、回想シーンにてお届けしましょう。はい、ほわんほわんほわわくん……。

「……良かったあ、向こうでも一応、楽しそうにやってんだな」

そう何かに言い訳するように出た独り言は、明らかに嘘が含まれている。付き合ってからもう4年。何度もデートに行ったり、旅行にも行って、お互いの両親にも会いに行ったり、恋人特有の事もして、噛んで匂いを嗅いで、あらゆる事をしてるのに、こういう写真を見ると今でも胸を締め付けられる。

取られる、なんて思っちゃいけない。文香が浮気する、なんてことも思っちゃいけない。この写真自体が浮気だ、なんでも思っちゃいけない。

でも、面白くない。気が付けば、電話を掛けていた。もうこのモヤモヤを払拭するには、方法は一つしかない。プロポーズだ……！

「もしもし、文香？」

『……あ、千秋くんですかっ?』

……っ、う、嬉しそうな声出したってダメだぞ。俺の不機嫌さともう治らないんだからなっ。

「あの、大事な話があんだけど……今、平気?」

『……はい。ちようど、今お手洗い休憩ですの……』

直後、バシヤアアツツと音がする。

「もしかして、大きいのしてた? タイミング悪かった?」

『……いえ、小さい方ですの。それに、もう終わりましたし。……それで、どうしました? ま、まさか……浮気の報告ではありませんよね……?』

やべ、今殺してやろうかと思っちゃったよ。でも抑えろ、俺。とりあえず、プロポーズしないと。他の男にされる前に……!

「あ、あのさ……」

『は、はい……?』

「……」

あれ? プロポーズって電話でして良いものなの? 絶対ダメじゃね? なんか……先走って一生後悔しそうになってない?

「……」

『……あの、千秋くん?』

「ごめん、やっぱ帰ってからで」

『なんで!?』

「や、大事なことだから。うん、じゃね」

『ちよっ、千秋くん……!』

身勝手に電話を切ってしまった。

〜三週間後〜

空港にて、俺は車を走らせて来た。と言っても、スタッフと一緒だろうさ、あんまり開けっ広げに会うわけにはいかない。文香自身が、あんまり「彼氏とどんな感じなの?」みたいな話をするのは好きではないらしい。俺の自慢話はよくしてるらしいが。

そんな話はさておき、空港のとある喫茶店で待機している。しばらくお茶を飲んでると、見覚えのあるヘアバンドが目に入った。

同じタイミングで向こうも俺に気付いたようで、ガッツリと目が合う。

「あっ……ち、千秋くん……!」

「おう。久しぶり」

「ふふ……そんな感じしませんね。毎日、電話していましたし」

「ああ、そうね……」

あれ以来、文香から毎日電話がかかってきた。「この前の話はなんだったんですか?」的な電話が。

ちようど、お茶を飲み終えた俺は、席をたつ。別にここで文香と何かしたいとか、そういうんじゃないからね。

「行こうか」

「あ……は、はい……」

「荷物持つよ」

「ありがとうございます」

文香から荷物を預かり、そのまま空港内を歩き、駐車場に向かう。

「それで……この前の大事な話とは?」

「もう少し待ってて」

「むう……そろそろ話して下さいよ……気になって仕方ないんですから」

「他に好きな子出来たとか……」

「そうなんですか?!?」

「そういうんじゃないからって言おうとしたんだけどやめてやめてその涙目ほんとやめて」

早とちりで泣かないでもらいたい。……まあ逆の立場なら俺も泣いていたかもしれないけどさ。

「どうだった? イギリス」

「あ……は、はい。とても良い刺激をたくさんもらいましたよ。特に……美術館巡りや博物館は、本で見た以上の知識を吸収出来て、とても心地良かったです」

「心地良かったのか……」

「……今度は、千秋くんも一緒に行きましようね? ……あ、そういえ

「ばト〇イクの点数はどうでした？」

「ん、700……いくつだっけ。忘れた」

「すごいですね。……では、現地ではよろしくお願いしますね？」

「良いよ」

英語だけは得意なのよ。なんかすんなり頭に入ってくる。

そのまま二人で話しながら、駐車場に到着する。年齢を重ねるごとに、俺も男として出来るが増えて行ったから、ようやく男女の役割逆転劇は訪れなくなって来ていた。

車を発進させながら、文香に聞いた。

「文香、疲れてるとこ悪いんだけど……ちよつと寄り道して良い？」

「良いですよ？」

「……さんきゅ」

……あんま緊張してないな、俺。少しは度胸がついたってことか。大学生でプロポーズなんて気取り過ぎかもだけど……でも、まあ冷静に考えた結果「結婚の約束をしよう」だから。おかしいことはない。

指輪も高いの買えないから、練習用にウルトラリングにしたし。

到着した場所は、空港付近の海沿い。薄暗い夜道と街灯が光り輝き、抜群の景色を生み出している。

「わあ……！ き、綺麗ですね……千秋くん……！」

「ああ。想像以上だ。ここなら、良いかもな」

「？ 何がですか……？」

「手、出して」

「は、はい……」

そう言っ手て手を差し出した文香の指に、俺はウルトラリングを嵌めた。一応、ウルトラマンエースの主人公は序盤、男女二人だから、そういう意味合いもあるのよ。レオリングにしなかったのはそういう狙いがあったの事。

「まだ……大学生で、本当に婚姻届とか用意は出来ないけど……でも、俺は将来、必ず君を幸せにする」

「へ……？」

「結婚、してえ下さい……」

「っ……」

「……」

……噛んだ。変なイントネーションになった……。もう何度も練習してきたのに……。なんで、俺は大事な時にいつもこう……。こんなんじゃ、文香に笑われ……。と、思つて、チラリと文香の顔を見上げると、つうつ……。と、水滴が頬を伝つて流れ落ちるのが見えた。

「っ、ふ、文香!?? どうした? 玉ねぎ切っちゃった?」

「っ、ち、違います……。この状況で、どう切ったんですか、玉ねぎを……」

「じゃあ……。欠伸? もしかして、俺今ウケ狙いでクソつままないことしたと思われ」

「黙つてて下さい」

……。あ、はい。黙ります……。涙を流し続ける文香に、とりあえず黙つてハンカチを差し出した。

それを受け取った文香は、涙を拭きながら、自身の指を手で覆う。そして、指輪を強調するように摘んだ。

夜景が綺麗でも、薄暗く文香の表情は見えづらい。そんな中、まるでタイミングを見計らつたのように、雲に隠れていた月が顔を出し、スポットライトとなって文香を照らし出した。

「……はい。喜んでお受けいたします……」

「……」

月光を浴びた文香の、涙を流したまま浮かべた笑みは、俺の決断が間違つていなかったことを指し示していた……。

1

――

――

なんて事があつた。噛んだのはほんとに死にたくなつたし、自分の迂闊さを後悔した。それに、あのプロポーズに意味があつたのかはわからない。だってほら、結局本番が控えていたわけだし。

でも、やって良かったと思う。あの後の文香は、死ぬほど嬉しそうに号泣して、そのまま俺にキスをした。

しばらく夜景をバックに新婚さんみたいなことをした俺達だが、途中で文香の奴、フヒツと思いきや笑い出した。何かと思ったら、俺が噛んだの今更になっていじってきたのだ。

まあその後は笑いながら帰宅した。その日、シャワーを浴びる時以外、文香はずつとウルトラリングを指に嵌めていた。

で、俺が大学卒業してすぐくらいだ。

「え、俺事務員なんですけど?」

「仕事の経験だけで言えば事務員じゃないでしょ。知らない仲でも無いし、ありすの事頼むよ」

……マジか。いや、まあ確かにそうだけでも。文香とココソ付き合った、という意味では信用が無いが、逆に他のアイドルには手を出さないだろうし、何より仕事に対する真剣さと経験だけはある、という微妙な買われ方をし、ありすの担当になった。

まあ、別に嫌ではない。他の知らない子ならちよつとそれはつてなるけど、なんだかんだ長い付き合いの橘さんなら、全然オツケーよ。

「よろしくお願いします。千秋さん」

「あ、うん。よろしく」  
そんなわけで、とりあえず今日は結成記念だ。飯でも食いに行くか。

「何食いたい? 奢るよ」

「良いんですか?」

「ああ。……あ、その前に文香に連絡取らないと」

「そうですね」

それだけ話して、文香に電話を掛けた。ノーコールで応答した。今日は文香、オフだからね。

『……もしもし?』

「あ、文香? 今日悪いんだけど、飯いらない」

『あら、そうですね。飲みですか?』

「いや、なんか事務じやなくてプロデューズする人、みたいになっちゃってさ」

『……それって、アイドルの?』  
「そう」

あ、少し驚いてる。だろうね。俺も驚いてるし。

『……誰の、ですか?』

「ん? 橘さ……」

「あります」

「え?」

『え?』

なんだ急に? てか、下の名前で呼ばれるの嫌なんじゃないの?

「千秋さんには、非常にお世話になってますし、もう長い付き合いですから。私も、いつまでも子供ではいられませんし」

「あそう。じゃあ、あります。で、せっかくだから飯食に行こうぜってなったの」

『……そうですか。分かりました。遅くならないうちに帰ってきて下さいね?』

「はいよ」

それだけ話して電話を切り、二人で飯に行った。

〜一週間後〜

俺と文香は、銀座に来ていた。それも、高層ビルにあるイタリアン料理の店だ。夜景が綺麗で料理も美味しい。問題は、クソ高いという事。

店に合わせて、俺も文香もオシャレしてきた。普段、文香の私服は地味なものを選ぶ傾向があったのだが、こういう時はちゃんとしていた。

具体的に言うと、ブルーグレーのバックプリーツドレスでのクロスベルト付きのもの。胸の下でリボンを結んであるようなデザインのは、ボディラインをしっかりと表立て、文香の胸元をしっかりと強調している。綺麗だ。

「ふう、美味かったけど……良いの? 今更、就職祝いなんて……」



「……勿論です。正直、出会って間もない高校生の方に成績を見た時は『この子、生きていけるのかな?』と不安になりましたから」  
すみませんね……。めっちゃくちや高そうなお店、奢りだなんて。

「それに、別に就職祝いではありませんから」

「え?」

違うの……? と、顔を顰めた直後、俺の両手を包み込むように文香は両手を重ねる。

「……二年前にいただいたプロポーズの返事……本日、正式にお答えしますね?」

「え?」

「……私も、あなたを幸せにします。ですから、今後ともよろしく願いします」

言いながら手を離されると、俺の左手薬指には、いつの間にか銀色の指輪が嵌められていた。

今更になって「あ、これ逆プロポーズか」と頭が理解する。プロポーズは確かに二年前に、受けてもらった。

でも改めて、こうして正面からプロポーズをされる側になると、胸にハートがついた矢でも刺さったように、心臓が高鳴る。

それと同時に、爆発的な嬉しさが込み上げられてくる。それを頭で理解した時だ。目頭が熱くなり、目尻から熱湯のような温度の水滴が流れ落ちた。

その後、文香が俺にハンカチを差し出す。

「ふふ……どうしました? 玉ねぎでも切りました?」

「……うっせ。お前も出てんぞ」

「私のは涙です」

「俺もだよ……」

二人して、そのまましばらく涙を流し続けた。

1

……なんて事があったっけ。文香はプロポーズの言葉を一切、囁ま

ずに言い切っていたっけ。そういうところ、やっぱり俺じゃ敵わないよな、こいつには……。

眩きながら、俺の膝の上で目を閉じている文香の頭を撫でる。

ちなみにあの後、文香は家に着くなり俺の目の前でドレスを脱ぎ、うつすいネグリジエを解放した。

その結果、さらに俺のもう片方の膝の上で寝息を立てている香奈美が生まれた。

「ふう……」

現在、三人で映画を見ていたのだが、二人とも眠りこけて膝の上に着て来た。

俺が親父をちゃんとやれてんのか、たまに分からなくなる事もある。

でも、まあこの二人がここまで幸せそうに眠れてんなら、少なくとも幸せにはしてやれてる。そう思いながら、とりあえず尿意を我慢し続けた。

## 蛙の子は蛙。

家庭を持つ、ということとは、子供の頃に思っていた以上に大変で複雑なことが多い。

家の事。俺がやる必要があったし、まあそれは全然、問題ないんだけど、残業とかはしばらくダメだ。肩書きは事務員な事もあったり、ありますが文香と仲良いのもあって定時では帰れたけど、それでも容赦ないくらい忙しかったのよ。

それは、生まれてからも同じだ。職場にいる時間は短いのに疲労度は溜まる一方で、それはもう大変……ではあるのだが、やはりそれでも幸福を感じるのは、大人になったから、とかではなく、家族だからなのだろう。

子供のためなら、文香のためなら、多少きつくても……いや、多少でなくても頑張れる。多分、それは文香も同じ事だろう。

それは、今後変わる事はないと断言出来る。

「香奈美、ゲームやろうか！」

「やだ」

「……」

例え、本に夢中で冷たくあしらわれたとしても。

文香の本好きは娘にも遺伝し、家でガッツリ読み耽っていた。……まあ、その本もラノベなわけだが。

しかし、保育園生がラノベってどうなのだろうか。

最初は絵本だったんだよ。俺も文香も買ってあげたり、或いは自分達のお古をあげたりして、俺と文香のどちらかが読み聞かせていた。が、それがいつの間にか一人で読むようになり、絵本から漫画に手を伸ばすまで一年、そして漫画からラノベに行くまで半年だった。

「ママ、これ3巻は？」

「……どうぞ？」

「ありがとう」

「……」

良くない、これは非常に良くない。別に本好きが悪いとか、ラノベ

が悪いとかそんなんじゃない。……いや、ラノベも保育園生が読むには教育に悪いが、それ以上に全く外へ出ないのが良くない。

ここは一つ、文香と相談して、休日の過ごし方を変えた方が良さ。

「……」

ちよいちよい、と文香に手招きする……が、あのバカ娘と一緒に本に夢中で気づかない。お前も少しは大人になりなさいよ。

「文香、文香」

「……」

「文香さーん、文香お母さーん？」

「……」

「ママー？」

「……」

「ママ、この漢字なんてよむの？」

「ん？ 爆殺」

「ばくさつ……どういう意味？」

「爆発で殺すという意味よ……。お外では使わないようにね？」

「うん！」

「ふふ……良い子ですね？」

「……」

テメエも半分くらい悪影響になってんのかよ……。少しイラつとしました。

慎重にソファアの後ろから接近し、両手を程よい幅に広げ、完璧に背後を取ると、一気にグワシつと強襲した。

「文香ー！」

「きゃあああああああッツ!?？」

揉んずつとおっぱいを両手で覆い、悲鳴を上げながらビンタを受けた。後ろにひっくり返る俺に、立ち上がった文香は真っ赤にしたまま両手で自分の胸を庇いつつ怒鳴る。

「なっ、なっ……いい、いきなり何するの!?？」 子供の前でそう言うのは

やめてくださいー！」

「子供の前じゃなきゃ良いの?？」

「そ、そういう意味ではないよ！ ……いい、良いですけど……」

相変わらずのどすけべだなあ。性欲のレベル的には俺より文香の方が高いし、俺が大学生になってからはそれを隠さなくなった。

一方で、今の騒ぎがあつても香奈美は顔を上げない。ただただ本に夢中だ。尚更、俺の中で危機感が高まる。

「それより文香」

「そ、それよりとは何！ それよりとは……！」

「少し相談。来てこつち」

「……は、はあ……」

そのまま二人で寝室に入る。こういう時、香奈美の読書好きは助かる。

「それで、何の話なの？ 人の胸を子供の前で揉んでまでする話って……」

「香奈美の事だよ。あの読書好き、少し行き過ぎじゃないかなって」

「……そうですか？ 私も子供の時はあれくらい……」

「文香は小学生や中学生……いや、なんなら高校生の時に友達いたか？」

「えっ？」

どきつとしたのか、文香は冷や汗を流しながら少し頬を赤らめる。

「……いい、いませんでしたが……」

「それに、香奈美を保育園に迎えに行った時、いつも『どうだった？』って聞いて『楽しかった』しか答えないだろ？ あれ、多分本ばかり読んで友達出来てなかったんだよ。……文香と一緒にで」

「……あー」

別に読書が悪いとは言わない。むしろ子供の頃からある程度読んでおけば、タメになることは多いだろう。頭も良くなるし、周りが知らないことも学べるし、文才も身につくかもしれない。

でも、それ以上に必要なのは、やはりコミュニケーション能力だろう。それが無いと、俺や文香みたいに友達がいないう学生生活を送ることになる。

そして、コミュニケーションから学べることも、読書と同じくらい

多い。それが人間社会で生きていく上で、一番大切なスキルになるのだから。

「それに、友達が出来出来る出来ない以前に、身体をずっと動かさないと身体にも悪い。子供のうちの生活が一番大切なのに……」

「そ、そうね……」

「少し出掛けよう。本以外にも世界を広げてやらないと。『楽しい』『これが好き』だけじゃダメだから」

そうと決まれば、早速外出だ。俺と文香は向かい合って頷くと、寝室から改めて出て行った。

「香奈美ー！ 今日外出だ！ 外行かない？」

「ママとパパが好きな所、連れて行ってあげるよー？」

「ママ、これなんてよむの？」

「え？ 塵殺だよ」

「ありがとう」

「……」

「……」

今更になって、文香は問題の大きさが分かってきたようだ。顔が少しずつ青ざめる。つーかお前、それなんの本読んでんの？

あれだけ両親がハイテンションで声をかけたのに、むしろ知的好奇心を求めてくる辺り、この子普通じゃない。

……というか、基本的に普段から「歩く時には本は読むな」と教えているが、もしそれを破るような事があった場合、事故や事件に巻き込まれかねないんじゃないか……。

「か、カナちゃん？ 本ばかり読んでいないで、たまにはお出かけしましょう？ ね？」

「ママ、この漢字はなんてよむの？」

「え？ 血流操作……じゃなくて。漢字は良いからお外に出掛けましょう？」

「え……いえに本があるのに？」

「……」

スゲエ価値観になっちゃってるな……。いや、まだ間に合う。まだ

保育園生なんだから。外にも楽しいことがたくさんあると教えなければ。

そう決めると、今度は俺が提案してみた。

「香奈美、そろそろ新しい本欲しくないか？」

「ほしいー！」

「っ、ち、ちよつとあなた……！」

あなたって言われるのいまだに嬉しいふおおうつ。いや、文香の言わんとすることは分かる。結局、本買っちゃ意味ないってんだろ？でもな？

「……まずは出掛けさせる所だろ。安心しろ、人を騙すことに関しては、俺は文香より上だ」

「後でバレてるでしょあなたの場合。特に、カナちゃんを騙すつもりですか？」

「本を買う（今すぐ買うとは言っていない）だ。出掛けて連れ回して、帰りに本屋に寄って買ってやれば、騙したとは言えないだろ」

「……な、なるほど……性格悪い……」

うるせえ。それと結婚してるのは誰だ。

「よし、行こうか」

「……でも、具体的には何処へ？」

「本に載ってるもんを見るのと、それを実際に見るのじゃ天と地ほどの差があることを教えてやれば、外出したくもなる。文香、好みの本を把握してるのは俺よりお前だ」

「あつ……分かった。任せて」

×そう言つて、家を出た。

×

家を午前中の中に出られたのは幸いだった。休みの日でも朝7時に起きるようにしているのが活きたな。

車を運転している俺に、香奈美が可愛い声で尋ねる。

「パパ。本屋さん、もう三つとおりすぎたよ？」

「良いか？ 香奈美。人生は通り過ぎた道の中で、出会ったものをどのように感じるかが大切だ。その上で、経験として学習・記憶しても

未練がましく振り返らない。そのメリハリが……」

「パパのおはなし、ながい」

「……」

「千秋くんが誤魔化す時は話が長くなるの、もうバレてるよ」

娘にまでバレるとか俺ってそんなにわかりやすいですかね……」

「香奈美、さっき読んでた本には何が出てきた？」

「なについて……ひと？」

「カナちゃん、例えばね……物とか、動物とか、場所とかそういうの」

「えーつと、おつきなこーえん！ 自動販売機からね、ければジュースがでるのー！」

「どんな感じの公園？」

「えーつと……ひろくて、街灯があつて、見通しがよくて、ベンチと自動販売機があつて……」

「うんうん。滑り台とか、ジャングルジムはなかった？」

「……わからない？」

「だろうな。最低限の描写が伝われば、他の設定まで言う必要ないからな、ラノベは。」

そうこうしている間に、目的地に到着した。香奈美は気付かないまま文香と会話を続けている為、しれつと駐車場に止める。

「降りるよ、香奈美。文香」

「はーい」

「？ ー(ー)ど(ー)？」

「カナちゃん、それで続きは？」

「あ、うん。あとければジュースが出てくる自動販売機があつて……」

などと話している間に、俺はトランクから携帯用の椅子を二つ取り出し、それと子供ができた時用に買っておいた遊び道具バッグも背負う。

歩き始めると、二人はお話しながらついてきた。

「あと、あとは……ううー……」

「ふふ、ひよつとして……こんな感じの景色？」

「え？」



到着した先は、昭和記○公園。そしてここは……御坂美琴の廻し蹴りポイントだ。自販機の中には、コラボ商品であるヤシの実サイダーとブラックコーヒーもしっかり入っている。

ただの聖地巡礼じゃん、と言えはそれまでだが、本以外の世界に興味を抱くには持つてこいだ。

「ここが……あのばしょ？」

文字だけでは絶対に把握しきれない景色。草原が風に揺られて波のようにうねり、奥には木々が生い茂る。

香奈美は頬を赤く染め、辺りを見回した。

「わっ……綺麗……」

「走り回ってたかったら走っておいで」

「う、うん……！」

素直に返事をした香奈美はその場から走り出し、後ろから文香がついていく。その背中を眺めながら、俺は椅子の準備をした。

文香がついていけばとりあえず平気だろう。一応、昔から小学生のありすを面倒見ていたしね。

椅子の領域展開を終えたあと、自販機でヤシの実サイダーを2本とブラックコーヒーを1本、購入し、椅子の上で待機。もう見えなくなるまで言っちゃったけど、俺は匂いで二人の跡を追えるから問題ない。

しばらくすると、ようやく戻って来た。……文香が虫の息になって。

「ただいま、パパ！」

「おう、おかえり。……ほれ、ジュース」

「わっ……これ、ヤシのみサイダー!?？」

「そう。ほれ、隣座れ」

「うん！」

「文香も。お疲れさん」

「あ……ありがと……」

子供の無限体力を思い知った文香が、ヨタヨタと歩きながら椅子に座ったので、コーヒーを渡した。

「たまには外も良いでしょ」

「う、うん……！　あるいてただけなのに、たのしかった！　ちようちよとか、いっぱいいて……！」

「へえ、どんな蝶？」

「アゲハちょう！　本でよんだ……えっと、ツツジのお花でミツすつてて……せんたんの口がちゆるって伸びてて、本でよんだとおりだったの！」

歩いているだけで楽しめる、というのは、やはり文香の血を引いているんだろうなあ。のんびりした空気を心地良く感じれるのだろう。なんであれ、虫であろうと花であろうと何にでも興味を示し、本を読んだ知識を活かせるのが嬉しいのだろう。

ふう……これで、少しは本以外にも興味を示せたかな？　さて、午後も色んなところに連れ回してやるか……。

「ここで本をよんだら、はかどるだろうなあ……。本、車からもつてくれればよかった……」

「……」

……中々、手強いな……。まだまだ気は抜けなさそうだ。